

移民四十年史



序

入移民国であつた北米と、出移民国の日本との間に戦争が始まり、入移民国の伯国は対北米好誼外交策から、対日外交を断絶したが、在伯日本移民三十万大衆は敵性国人となりながら、平素の社会生活をゆるされ、農業生産面には自由に躍進していた。それは伯国の社会は日本移民の生産物を必需したからであつた。

然しこの戦時中約四年間の空白時期に、日本移民過去三十餘年の移民文献なるものは、伯国當局の弾圧下で、又移民の恐怖心からして散逸させ、或は烟にしてしまつていた。それで今にして何んとかしておかなければ、あと十年も経つたら現在以上に史料はうせ、第一回移民も大抵亡くなつてしまひ、その前後のことは遠い謎の時代とされるだろう。在伯日本移民の歴史を書き残そう、所謂ブラジル日本移民通の書いている傳記的なものでなく、移民の書いた移民史を、今残しておこうではないかと「時代」誌の同人に協つた處賛助をえたので、同人の専門的分擔もきめて書くことにしたのは、昨年六月第一回移民船笠戸丸移民がサントス港に着いた四十年目の記念祭頃であつた。それで本史を「移民四十年史」と名づけた。勿論記録等の點に於ては先人の文献に負う處も少ないし、書き終つて甚だ疎漏な處も多々あると憾じている。文も垢ぬけせぬ移民臭いものであるが：終戦後母国の歴史が科学的に書きかえられた様に、この移民史も、史のコースを觀失なわなない様客觀性にそつて書いたため、興味を失する處も多々あらう。然し是迄の日本移民の傳記を書いて獨りよがりし、対外的に怖わがられ敬遠されたり、或は不同化人種呼ばわりされて排斥されたりしていたものと違って、日本移民も結局独逸移民の如く、伊太利移民の如く、伯国の大自然を開拓する拓人としては、伯人社会に融けこんでしまう史實である。いずれブラジル語に翻訳して出版するつもりであ

る。

十年後の日本移民五十年史には、この四十年史の疎漏を補足して誰れか書いて呉れるだろう。

千九百四十九年十一月十五日 伯国共和記念祭の日

編著者

編纂に協力して

移民の草分けでもあり、且つはコロニア新聞界の草分けの一人でもある香山さんが、四十年史の編著に着手し「時代」同人でこの事業を後援することになったとき、同人間のすすめで浅学の私が直接その整理編集に協力することになった。私は歴史物などの編集には経験も浅いので、果して有益な協力者であり得たか否か、大体の整理を終ったいま、自分で疑わしいと思っている。

とくに諸先輩の原稿を無遠慮に、或は加筆、或は削除した点も少からず、心とがめのする次第だが、全体の統一と幾らかでも客観性を活かしたい微衷に外ならぬことを汲んで戴ければ幸いである。

この種の出版物はわがコロニアでは初めての試みで、従つて編著者香山さんの献身的な努力にも拘らず、なお幾多の不備を残しているとは思うが、この次、誰か移民五十年史を編むときの最高の文献となるであろうことを私は疑わない。

斉藤広志

一九四九年十一月十五日

Ⅱ 移民四十年史目次Ⅱ

前篇 移民発展史

第一章 笠戸丸前史

一、帆船若宮丸の生残者・・・・・・・・・・15
英国軍艦練習生の二青年來伯すージャセグアイ少将の渡日と
日伯修好條約の瀕踏み

二、日本移民は何故海外へ移住したか・・・・・・・・20
伯国へ始めて渡った日本視察官ーアジア人入国禁止と許可

三、日伯修好通商航海条約調印さる・・・・・・・・23
パラ州へ日本移民三千名の空契約ー土佐丸出航の二千名日本
移民中止ー初代駐伯珍田公使の赴任ー

四、三代杉村（解読付加）措公使の来任・・・・・・・・30
本官「サン・パウロ」州旅行中伯国官民歓迎の模様に関する
報ーサン・パウロ州に関する報告ー

五、日本内地に伯国への関心昂る・・・・・・・・38
資本は進出したが移民は拒まれたー

六、日露役前後日本移民の流れ・・・・・・・・42
水野龍のブラジル国サン・パウロの視察ー政府と皇国植民会
社との間に締結された家族移民契約條件

七、日本移民史に画期的な家族農業移民の創始・・・・50
笠戸丸の出航ー家族移民の初航海ー

第二章 笠戸丸後史

- 一、笠戸丸サントスに着く．．．．．59
伯字紙の日本移民詳――移民と移民会社と最初の紛擾―珈琲耕地へ移民出発――聖市に就職した人々
- 二、第一回移民の耕地配耕表．．．．．67
第一カーン耕地―第二フローレス耕地―第三サン・マルチニヨ耕地―第四グアタパラ耕地―第五ズウモント耕地―第六ソブラード耕地―
- 三、移民の争議各耕地に起る．．．．．94
ゾウモント耕地紛争起る―ズウモント耕地の紛擾原因―耕地引上げ後の行衛―カーン耕地沖繩移民の逃亡―フローレス耕地移民逃亡―耕地逃亡事件相つゞく―サン・マルチニオ耕地の争議―グアタパラ耕地の紛擾首謀者追放―第二回鉄道工夫団―
- 四、サン・パウロ市と日本移民．．．．．103
日本と珈琲の宣伝契約成る―五人通訳の通辯振り―移民会社代理人の月給―皇国植民会社の行詰り―竹村植民商館肩かわり
- 五、第二回移民船旅順丸来る．．．．．109
旅順丸移民配耕―第一ビアド耕地―第二ソブラード耕地―第三ジャタイ耕地―第四サン・マルチニヨ耕地―第五グアリローバ耕地―第六サン・フランシスコ耕地―第七グアタパラ耕地―第八コツケイラ耕地―第九サン・ジョアキン耕地―第十ボア・ビスタ耕地―第十一サンタ・マリナ耕地―第十二サン・ジョアキン・リベイロ耕地―第十三サンタ・カレンダ耕地―第十四セルラ耕地―第十五サンタ・マリナ耕地、アラクアミリン耕地、サン・ペドロ耕地

六、ジャタイ耕地紛争事件・・・・・・・・・・144

七、第一回と第二回移民・・・・・・・・・・148
耕地在留比較―第三回鉄道工夫マツト・グロツソ州へ―
宣伝用珈琲を日本へ、アマゾン天然ゴムも

八、東洋移民会社の進出・・・・・・・・・・151
イグアツペ植民地開設の契約成る―竹村第二回、東洋第一回移民の来伯―上塚周平の帰国―日本移民の不評判と州政府の補助金中止―一九一四年日本移民差別待遇阻止―森岡移民会社の進出と暗躍

九、第一次大戦の勃発と移民の中絶・・・・・・・・163
移民会社集つて移民組合を組織―移民会社統一され海外興業株式会社創立―

第三章 初期移民と伯国事情

一、コロノ生活から半独立農へ・・・・・・・・168
移民する人々―耕地の状況―耕地脱出の流行―新しい耕地の開墾―聖州植民地の一般状況―
二、都会生活へ、同化への道程・・・・・・・・176

三、自由殖民への先駆・・・・・・・・181
珈琲栽培請負の創め―ビーラ・ジュケリ植民地開拓―
第一モンソン植民地―コチア植民地の創始―三角ミナス米作地の開拓

四、ノロエステ線に植民地創設・・・・・・・・188
ブリグイ植民地―平野植民地―ブレジョン植民地創

設　ー　リオ州マカエ植民地サント・アントニオ耕地ーリオ
州マカエの山縣農場　ー　リオ州イグアス米作地の失敗ー
ミナス州金鉱坑夫移民の渡伯ージュキア線アンナ・デアス植
民地の開拓

五、地歩を築いて独立の植民生活へ・・・198
タイパスの開墾地ーサント・アンナ集団地ータボン開墾地
ーエメボーイ開墾地　ー　第二モンソン植民地ーイザラ
パーバ集団地ー　パウリスタ線モッーカ米作地ー　ジュキア
線イタリリ開拓地　ーセドロ開拓地　ー　アララクアラ線リ
オ・プレット開拓地　ー　カニンデ米作地ーソロカバナ線サ
ント・アナスタシオのバイベン植民地ーエイトル・レグルー
駅ーペンナポリス植民地ーパラナ州クリチバと日本移民ー
アントニーナ町及カカツ村の開拓ーサン・パウロ市に総領
事館の開設

第四章　　各鉄道沿線の邦人植民地發展

緒土地帯のモヂアナ線と日本移民・・・208
　　グアタパラ耕地日本移民の流れー
　　パウリスタ本線地帯の日本植民・・・216
　　ノロエステ沿線地帯の植民地發展・・・219
　　汎リンス青年会の創立ーバウル市及近郊の開拓地ー
　　日本移民最大の集団植民地微塵蚊（ビリグイ）・232
　　アラサツーバ駅植民地に於ける日本国旗掲揚紛擾ーアレ
　　グレ植民地の開拓　ー　奥へ奥へ第二期移植民、日本移民
　　尖端を行くー
　　マツト・グロッソ州へ日本移民流る・・・236
　　ノロエステ沿線日本植民發展調査表・・・
　　雜穀大量生産のプランタ・マキナー

パウリスタ延長線の日本移民発展・・・・・・・・・・ 240
パウリスタ延長線の一九二九―一九三二年度植民統計
表・・・・・・・・

ソロカバナ線地帯邦人発展の跡・・・・・・・・・・ 244
ガファニオット、日本移民最初の体験―バイベン植民地―
アバレ棉花地帯―パラグアス―駅―レイトニア人の養老
協同植民地―ブラタクの開拓したバストス移住地―ジ
ヨゼ・テオドロ駅(マルチノポリス)―インデアナ
駅―ソロカバナ線の首都プ・プルデンテ市―プ・ヴェ
ンセスラウ駅―ピケロビー駅―ソロカバナ線プ・エピタシ
オ―

ソロカバナ線地帯植民統計表・・・・・・・・・・ 257
ジュキア沿線の邦人のバナナ栽培・・・・・・・・
ペードロ・バ―ロス駅―ビグア駅―セードロ駅―ジュキ
ア駅

イグアツペ植民地・・・・・・・・・・ 262
栄枯は移るセントラル線へ・・・・・・・・ 266

ピンダ駅の東山米作農場―ジュタ栽培のトレメンベ―偏
平桃(フリハタ)のなるモチ・ダス・クル―ゼス―茶の
花 白きスザノ―養鶏のイタケイラー―日本式木炭
竈のロマノポリス―山紫健康の地力ンポス・ジヨルドン―
杉村公使の夢のタウバテ―武陵桃源の瑞穂村―漆器の出
来るオルト・フロレスタ―陶土人形のサン・カエタノ
町―養殖金魚のサン・ベルナルド郊外―日本鯉は伯国に未
だ移り来ぬ―聖市郊外の日本荘

日本移民の流れ北パラナへ・・・・・・・・ 277
カンバラの丘へ日本移民の前進―ピリアニット植民地―
小麥の野村農場―後宮耕地―ブラジル拓植組合の
トレス・バラス移住地―ロンドリーナの国際的発展
―南方への移住踏石として―

第五章 リオ市、サン・パウロ市及 他 州

リオ・デ・ジャネイロ市と日本移民（附―日伯両国関係の公的事項）・・・・・・・・・・ 283

リオ首府へ徒歩で鉄道線路を辿った移民―日本孤児移民の来伯―

日伯国交関係公的事項・・・・・・・・・・ 287

在伯歴代帝国外交官―スイミツ桃の苗をリオ首府に移植―柿の移植

隣州ミナス及ゴヤスへ・・・・・・・・・・ 294

ミナス州へ―ゴヤス州へ―

パラ―及び アマゾナス州・・・・・・・・・・ 297

大使館の壁のブラジル大地図―自由の天地パラ―南米企業株式会社の進出 ― 英人はアマゾンのゴムを馬來半島に移し培った。日本人はガンヂスの黄麻をアマゾナス江畔に移し培った―アマゾナス州ジュータ「尾山種」祖人の述懐―戦後インスチチュート・アマゾニアの状態 ―

サン・パウロ市の邦人発展・・・・・・・・・・ 312

聖市邦人街の始まり―邦字新聞現はる―

聖州に於ける邦人植民三つの流れ・・・・・・・・ 350

海興植民地とブラ拓植民地―ブラジル柘植組合経営のチエテ移住地―

後篇 産業文化

第一章 日本移民の産業

一、カフェー栽培史・・・・・・・・・・ 361
ブラジルのカフェー―ノロエステ線―ソロカバナ線―パウリスタ本線―パウリスタ延長線―サン・パウロ市近郊―サントス・ジュキア線―ドラデンセ線―アララクア

ラ線―セントラル線―モヂアナ線―ブロッカの天敵ウガ
ンダ蜂―

二、邦人と聖州棉・・・・・・・・・・ 371

日本移民の棉作史―

三、蔬菜業の沿革・・・・・・・・・・ 382

四、日本人と米作・・・・・・・・・・ 387

五、バタタ（馬鈴薯）の栽培・・・・・・・・・・ 390

六、バナナ栽培の沿革・・・・・・・・・・ 393

七、雑穀類と邦人・・・・・・・・・・ 396

八、日本人の果樹栽培（イチゴ―桃―葡萄―枇杷―西瓜と
メロン―） 397

九、特殊農業薄荷と養蚕 薄荷栽培―養蚕―茶 401

十、邦人と畜産業・・・・（豚―馬―牛）・・・・ 409

十一、邦人と肥料生産・・・・・・・・中尾熊喜・・・・ 412

邦人農家の肥料使用量―邦人の肥料配給―邦人の肥料
生産―伯国の肥料の沿革―

十二、邦人と養鶏界・・・・・・・・古田土光・・・・ 417

エメボイ實習場―研究たけなわ―産業組合が―勸業
部と養鶏普及会―鶏をニッポンから―十年間に―
産青連と養鶏―戦後の養鶏界―数字的に、現在―

十三、日系農業者の蔑産物生産量・・・・・・・・ 429

十四、日伯貿易・・・・・・・・・・ 431

十五、産業組合の沿革・・・・・・・・・・ 433

十六、工業界への進出・・・・・・・・・・ 437

十七、日系人の漁業・・・・・・・・・・ 439

十八、商業・・・・・・・・・・ 443

第二章 伯国移民史の前夜（齊藤廣志）

―日本移民入国に至るまでの伯国の社会・経済―
一、奴隷廃止から資本主義へ・・・・・・・・ 452

奴隸制慶と対英関係―黒人売買禁止の協定（一八二六年）「奴隸廃止をめぐる暗闘」― 進歩派と保守派の対立―奴隸輸入禁止の反響―

二、カフェーと移民のたどった跡・・・・・・ 461
触媒としての鉄道―珈琲の文化―白人移民の端緒―自由移民とコロノ移民―一九〇八年まで―

第三章 邦人社会の言論・思潮史論（安藤 潔）

前記時代・・・・・・ 472
国家主義、帝国主義―国粹主義の勃興―日本人文教普及会―エメボイ農事實習場―再移住論―ガット運動―同化論―二世の反日本主義―互生会の文化運動―言論圧迫―龍土会―日本人文化の紹介―言論空自時代―戦後の言論界―土曜会と「時代」

第四章 コロニア文学・美術

一、初期文学史概略・半田知雄・507
二、後期女学史概略・古野菊生・518
三、移住者の美術運動（絵画史）・半田知雄・542
四、音楽と舞踊・・・・・・ 558
五、コロニアの母国映画・・・・・・ 559

第五章 コロニア・スポーツ史（園田 新）

概況・・・・・・ 561
一、コロニアの野球史・・・・・・ 563

最初の野球試合―ミカド倶楽部とアリアンサー―全伯野
球大会―空白時代と復活―球連の発足―
再び全盛期へ―少年野球に就て―

二、コロニア陸上競技史・・・・・・・・・・ 570
最初の陸競大会―全伯大会の起源―全伯大会の経緯―
陸競界発展の跡―バジリヤ杯争奪戦―

三、コロニア庭球史・・・・・・・・・・ 575
藤倉の渡伯―全伯大会の開催―テニス界の
将来―

四、コロニア水泳史・・・・・・・・・・ 578
五、コロニアの剣道・・・・・・・・・・ 579
六、伯国柔道史・・・・・・・・・・ 581
七、相撲について・・・・・・・・・・ 587

第六章 在伯邦人の宗教史

一、邦人カトリック教会史・・・・武内重雄神父・589
布教のはじまり―イエズス会―神言会―フラ
ンシスコ会―教育事業イエズス会―神言会―フラン
シスコ会―慈善事業

二、聖公会沿革略史・・・・伊藤八十二牧師・597

一、英国聖公会派
二、米国聖公会派
三、日本聖会派

三、ブラジル・ホーリネス教会史・田名網七五三吉牧師・
・ 601
四、自由メソジスト教会史・・・・ 603

五、救世軍日本人部	田中婦美以	604、
六、佛教の部		605
七、天理教会布教		607
八、サン・パウロ教会の創立		608

第七章 日本移民の衛生

一、航海中及上陸迄の衛生		609
二、初期移民の保険と衛生		612
三、日本人同仁会略史	山崎芳藏	616
四、同仁会の創立	初期の役員―同仁会の財源	
同仁会の施設事業	山崎芳藏	624
パンフレット類―痘病及びチフス、赤痢予防―毒蛇と蛇毒血清―巡回慰問―薬品の實費取次―トラホーム撲滅―十二指觴虫病撲滅	―十二指觴虫病検査一覽表―地方医局	
―夜間診療所―肺結核療養所		

五、日本病院の建設と経営	山崎芳藏	635
期成同盟会準備委員会定礎式―趣旨書と御下賜金―建設委員会の設置	―地方委員会―外務省無計画の暴露	
―病院開院式	―風紀問題	
―戦争の飛沫	―政府の管理より脱却	

第八章 コロニア出版史

一、新聞及び雑誌		647
二、邦人関係出版物		651
ブラジルに関する日本語の著書	―在伯日本人の著書―日伯語関係著書	
Lista de Livros referentes a Japoneses, Publicados por Autores Brasileiros.		

補 遺

661

日本移民の国際結婚・・・・・

ブラジルの国家主義と日本移民制限・・・・・

日本移民入伯数・・・・・

終戦後の邦人内証・・・・・

コロニアの料亭物語・・・・・

移民の挿話・・・・・

前篇 移民発展史

第一章 笠戸丸前史

一、帆船若宮丸 の生残者

日伯両国の関係は今より約百五十年前、一日本帆船の漂着民が伯国の土を踏んだ時からその幕が開く。まだチヨン髭の時代で、ブラジルは帝政であつた……。

廿四反帆の若宮丸の乗組員十六名は、御用材木四百本と御用米二千三百余俵を積んで、陸奥石巻港を江戸に向つた。寛政五年十一月であつた（一七九三年、伯国ではチラデンテスが絞首台に上げられた翌年）。

岩城領塩屋崎で暴風に襲われ、北方に漂よつたので、糧米のみのこして積荷は海に棄てた。北方氷海で夜のない海に漂つたが寛政八年イルクーツク着、八年間滞在した。此地に通訳ニコライ伊勢新蔵が住んでいて、何かと便宜を興えた。此地に日本人の墓二、三あつた。

王命によりモスコウを経てピータ・スプログに行く。犬ゾリ馬ゾリ等で送られた。チヨン髭の十餘人は露国首府で殆んど国賓の待遇を受け、王の家族のみにて極めて親しく打解けた謁見であつた。

「故国に帰りたいか」との皇帝の問に、「残りたい」と答えたのが六名、「帰して貰いたい」と答えたのが四名、首府に留まること四十余日、日本へ派遣の露国使節レザノット（四一才）と共に帰国希望の四名は東洋へ航するNADESHDAとNEVAの二露艦、ナデシユダに乗つた。一八〇三年六月十六日クロンスタット港を発し、カナリヤ島より赤道を越え、西南航し、ブラジルのエカテリナ（サンタ・カタリナ州）に入港、

【湊は大なれど入海にて浅く、大船は岸に寄れず（今のフロリヤノポリス）英船二隻、異国船二隻碇泊中、此地の舟は細長く笹の葉の如し（カノア？）。此地極熱、冬季なし。土人膚色漆黒、女は脊に風呂敷模様つきたる如き物をかけ、腰より下は木綿、又は麻の織物にて袴の裾廣なるを着る。男女とも入墨せず、男女とも齒黒し。不断松脂如きものを噛む（噛煙草？）。此湊より奥へ千軒計りの家（サン・ジュゼ町）のあり、教会もあり、米を産す】土人の常食はトウキビであった。奥の方に頂上を極め付ぬ程の高山あり。「大西洋で帆柱破損せし故、材木を買入れ修繕す。材木はカラスナ、セリトと云ひ、赤き堅き木なり。野菜、白砂糖、コック（椰子果）も多く買入れた。動物には尾長猿、河豚（カピバラ）鰐（クロコジル）あり。一八〇四年二月八日エカテリナ出帆（滞在七十一日）……（中略）カムチャツカより日本の東南を経て種子島附近を過ぎ、長崎に着いたのが文化元年、幕府に引渡されたのは翌年（一八〇五年）石巻港を出て十三年目。

長崎に帰着したのは左の四名であった。

仙台の者	（寒澤村）	津太夫	六一才
同	（室の濱）	儀平	四三才
同	（同）	左平	四一才
同	（寒風澤）	太十郎	三四才

太十郎は帰国の喜びと何時上陸し得るやの心配で精神錯乱、刃物を嚙下し自殺を図り、一時危篤、後癒ゆ（環海異聞より）

津太夫等四人が伯国に来た一八〇四年は、奈翁一世に追われたポルトガル王が政府をつれてブラジルに移る三年前であった。

日本人として伯国の土を踏んだものは、これより前には今の処記録の発見されたものはない。

次にはそれより六十四年後、英国軍艦練習生の二青年来伯

す。

明治二年（一八六九年）日本は兵部省に海軍操練所を設け、各藩から貢進生を募った。其翌年、英国は世界週行の遊撃艦隊三隻を日本へ寄港させていた。海軍操練所は、同艦隊に練習生として三年間英国留学の乗組員二名を同艦隊へ托した。薩摩藩の青年前田十郎左衛門と、伊予藩の青年伊月一郎とであった。

同艦隊は太平洋を越え、バンクーバに到り、南下してホルン海峡を廻航し大西洋に出で、ブラジル国・バイア港に停泊した。

常時伯国への奴隷密輸入は己に厳禁されていたが、英国軍艦は奴隷密輸入船を伯国領海内に尚監視していた時代であった。

当時・バイア港の新聞 *Diario de Bahia* は左の如く報じている。

「Hombly 提督の旗艦とせる英国艦隊は、バルパライゾ港より出航して一八七〇年十月六日当港に入った。この艦に二名の日本青年士官が練習生として乗組んでいる。その一人、年齢二十三才の前田は七日の暁三時と四時の間に、震慄すべき方法で旗艦リヴァールに於て自殺を遂げた。短刀を以て腹部を十文字に切りたる後、喉を数回突刺した。この事實は同艦隊の将校及乗組員一同を始め、バイア市民を深く感動せしめた。その死の唯一の原因とも認むべきは、同士官が永らく其故国及家人と離れて望郷の愁に堪えなかったためで、以前より憂鬱症にかゝつていた結果であらう。この不幸なる日本士官の葬式は所要の手續を了えて、バルウ坂の英国墓地で執行されたが、本人が佛教徒である為め希伯来人（ヘブライ）埋葬区域に葬られた」

（生駒艦が一九一〇年来伯、前田の墓前に花輪を捧げる筈であったが、墓は掘られてモウなかった）

前田十郎左衛門が、バイア港の波と散った四年目の一八七四年十月三日、佛国より天文学術団の一行が日本に来了。

ジャセグワイ少将の渡日と

目伯修好條約の瀬踏み

伯国帝国政府の囑託 Dr・Francisco Antonio de Almeida がいた。この天文学者の著書が一八七九年リオ・デ・ジャネイロ首府で出版された「佛国より日本へ」で、伯国で日本に関する著書の始めと言われている（明治十二年）。

一八七九年、伯国は支那と修好条約締結をやったが、その序でに日伯通商條約交渉の前提が協議された。英国の産業革命は欧州及南米の奴隷解放を促がした。北米の奴隷解放が一八六四年で、ブラジルではその頃奴隷輸入禁止、奴隷売買禁止令を発した頃で、當然自由労働者の不足時代に入った。

歐洲移民輸入（伊太利移民はその年僅か九七人しか入伯していない）不足を支那人によって補うことを伯国の珈琲耕主連は強望していたが、ドン・ペドロ二世の反対で企は進捗せなかった。その折、ニューヨーク駐在伯国領事サルバドル・デ・メンドンサの支那移民賛成意見がとゞいたのに動かされ、伯国宰相シニンブは清国と通商條約締結の全権委員を支那に派遣した。エドワルド・カラドを正使、ジャセグアキ少将を副使とし、書記官にエンリツケ・リスボアを任命した（エンリツケは後年の駐日公使）。一行は天津で李鴻章と会見、伯支通商條約を締結した。カラド全権は支那に留まり、ジャセグアキ少将は上海より玄海丸で長崎、神戸を経て、東京に着いたのが一八八〇年（明治十三年）十一月十六日、三週間滞在中、日本の外務當局と協議した。ジャセグアキ少将はその時の模様を、彼の自叙傳中の一節に、

「當時日本政府は吾人に修好条約を締結したいと切望した。予は伯国政府がこの時、日本と外交関係を開始しなかった事に痛嘆した。日本の外務卿は、予を仲介者として交渉の序幕を開きかゝっていた。當時外務卿井上馨の代理外務大輔上野景範が予に宛てたノートに次の如く記している。

「日本が諸国と締結した條約とは全く独立して、且つ別物たる一の修好通商條約を日伯間に、東京に於て締結せんことを切望する。蓋し貴国の如き大国とこの種の條約を締結することは、欧州諸国をして其例に倣はしむる上に甚大なる影響を興へ、以て吾人が期待する結果を吾にもたらしむることを得るが故である。仍て該條約が閣下の御盡力により出来る丈け速かに締結せらるゝ様、閣下より貴国政府に上申せられむことを熱望する。尚この條約の締結に當らしむる為、貴国政府が閣下を選任せられむことを翼望する云々 ―」

以上の文面によれば、日本政府は伯国と対等條約を結び、是迄の屈辱的條約を破棄し、改締対等條約を望んでいたことが現はれていた。

その後二年、カラド遺清公使が日本に來た際、再交渉が行はれたが、日伯條約締結は見合せたと、カラド公使はジャセグア・少將に語つた。これが日伯通商保的締結の前提であつた（野田良治のブラジル人国記より）。

それから約十年後、伯国軍艦アルミランテ・バローゾが世界週航の途、横浜に入港した。艦長外八名は天皇陛下に謁見仰せつけられた。その中に伯国王子アウダスト・レオポルド親王（ドン・ペドロ二世の孫）がいた。乗組將校等は海軍大臣西郷従道の午餐会へ招かれた。

横浜港の船問屋関係の倅十八才が、長崎まで同艦を追って行き、同親王のボーイ格で伯国に渡つた。比の少年は一時、サン・パウロ州リベロン・プレト市近くのシユンプ珈琲耕地で精撰珈琲機の釜焚もやった。

一八九四年日清戦争勃発と聞き、若き血汐の矢も盾もたまたらず英国貨物船のボーイとなり濠洲へ廻り日本へ歸つた。其後彼は駐日伯国公使、大使館に囑託として歷任すること二十

幾年、和葡萄和辞典を完成した人大武和三郎であった。一九四七年日本で歿す。享年七十九才であった。



(写真―大武和三郎)

二、日本移民は何故海外へ移住したか

日本は何故海外へ移植民し始めたか。

封建制度が破壊された。農家も武士階級から刀剣で脅やかさるゝこともなくなった。徴兵令が敷かれた。台湾征伐があり征韓論が激化した。岩倉内閣諸公が欧米視察へ行つて、帰朝したら明治十年の西南戦争が勃発した。それが終わつて、日本は愈々近代産業国家化へと邁進し始めたのである。

その労働需用に農村人を招いた。封建的農業組織が潰壊し始めた。日清戦争前より産業は益々繁栄し出した。都会人口集中で、「米」が一升十銭し出した。唐米が輸入されたが、一升九銭した。

都会労働者が産業資本家に搾られ出した。

都会生活の辛酷さが始まった。が、都会生活の文化面も始まっていた。

都会産業界の進展当初は、産業需用の労力限度からあふれたものは、農村へ帰農したが農村には都会の如き文化がなかった。最初は喰ひようがあつた農村だが、人口が段々と増へ、耕作面積が一人當り少なくなると、喰い様がなくなる。産業界にも好景氣、不景氣の波があつた。

不景気の波で、労働者が労働需用からあふれると、手から口への労働者は、喰いようがなくなる。

帰農も不能とすれば、出稼へ、労力需用の他県へ、海外へ。明治元年より、明治廿八年の日清戦争迄の日本海外移民数は日本移民概史の示す處によると、一二五、七五一人であった。

明治二十九年より明治四十年即ち、日露役直後迄の海外移民数は一八九、四四五人となっていた。

伯国へ始めて渡った日本視察官

榎本武揚の植民協会中堅であつた根本正代議士は、一八九三年（明治廿六年）メキシコ、ペルーの日本移民地を視察した。翌年、日本の外務省は同代議士を、伯国視察へと海を渡らせた。

根本は一八九四年九月十五日（日清役當時） リオ・デ・ジャネイロ首府に着いていた。

同年十月二十六日迄四拾二日間に、ペルナンブコ、バイア、ミナス・ジエラエス及サン・パウロの各州を視察した。帰朝後伯国が日本人の移民地として有望な報告書を、外務省に提出した。これは公刊された。又、彼の属する殖民協会（ママ）の方へ送った手紙に、左の如きものがあつた。

『日本移民に適すべき地は、ベルナンブコの南部に有之、特に サン・パウロ、ミナスは最も宜しくと存候。土地肥沃にして到る處樹木高く生ひ茂り、小生が曾て墨国ソコヌスコ地方にて目撃したると同様に御座候。又サン・パウロ市とサン・トス港の間には、交通の便利充分に具はり居候。ナツシメント氏の紹介に依り、サン・パウロ州知事に面会仕候處知事は懇切に待遇せられ、小生サントス港に出港の節は、特に別仕立の馬車用意被致呉候サン・パウロ市よりサントス港に到る道路は仲々立派なるものにて、高度は大抵二千百呎に有之

随つて氣候も温和に御座候。寒温器は途中馬車の内華氏八十度、サントス港にて八十五度を示し候。着後移民取扱所一覽仕候。

来住の移民上陸の節は、先づ此處に着し候手順にて、百般の便宜備はらざるなく、移民に対する取扱方法完全致居候には一驚を喫し候。目今欧州特に伊太利より来航するものは陸續踵を接し、毎週数百人に及び候。小生もサン・パウロ取扱所にて一度目撃仕候。(中畧)

ブラジルは米国と同じく大平原を有し、土地は概して肥沃に御座候就中ミナス、サン・パウロ、リオ・グランデ・ド・スール、サンタ・カタリナの諸州最も豊饒の地方に御座候。ミナス、サン・パウロ州最も温和に有之、午前七時小生書翰認め居候室内にて寒温器正に七十五度を示し候。天候も桑港又はメキシコ府の如く、至つて長閑に御座候。日本移民事業に取り最も望みあるは、サン・パウロ州に有之、縦横に瀰漫せる幾多の大平原は以て無数の市街を建設し、永住の地となすに足るべく、生計の程度を高め、財富を増殖し、子女に充分の教養を施し、何不足なく愉快に生活するを得べく、彼我両国の利益不過之と存候。唯必要なるは勤勉不倦の職工及忍耐力に富みたる労働者に御座候。何卒日本移民移殖の儀御盡力有之度希望致し候。ただに日本の為め而已ならず、實に人類を救ふの美事に有之と存候。』

同年伯国サン・パウロ州のブラドー・ジオルダン会社代表チャールス・アレキサンダー・カーライルが日本に渡つて吉佐移民会社と日本移民輸送契約を結んだが、當時は日伯通商條約締結前として、實行に到らなかつた。日清役の社会状況と、日本移民の潮流は北米へと奔流して居た時代とて、根本のこの報告は朝野の注目を惹かなかつた。

これは一八七四年伯国の天文学者フランシスコが日本に、伯人として始めて来てから、二十年後のことであつた。根本の渡伯したのは、伯国ではプルデンテ・モラエス大統領就任の年であつた。

日清役の最中、根本が伯国を視察し、サン・パウロ州に移民を送ることは、日本の為めのみでなく、實に人類を救ふの美事と、讃した地に、シナ移民は、その前年既に輸入されていた。

単獨移民四五七名最初ミナス州のモーロ・ベーリオ金坑（後に日本単獨移民も招かれて遁亡した處）に就働していたものであったが、成績上らず後に二百余名は中央線の鉄道工事に廻され能率上らず遁亡してしまった。

彼等支那人は廣東方面の漢民族であつた。現在サン・パウロ州及リオ首府各市に散在生活せるシナ人は、その當時の人でもあり、その二世、三世、四世であらう。サン・パウロ共同墓地に「中国廣東寶安縣人氏、杜燦培君之墓」がある。葡字で“TU PEI”と音記してある。終干一千九百四年十一月一日とあるも、その生年月日を墓石に記してない。これは支那第一回移民の墓であらう。別の小墓石には、中国廣東新会人民鐘莊美之墓とあつた。一九〇一年生となっているから彼女は第一回支那移民の女性ではない。

アジア人入国禁止と許可

伯国議會は共和国となつた翌年一八九〇年六月二十八日、伯国移民規則で、亜細亜人を入国禁止した。その後自国と亜細亜の情勢變化に法の不便と不合理を感じ、合理化する為め、一八九二年十月五日附法令第九七号を以て、支那及日本移民の自由入国を許可した。日伯修好通商條約締結の下準備でもあつた。

三、日伯修好通商航海條約調印さる

伯国は支那国と（當時清国）の間に修好通商條約を締結し

た一八八〇年、日伯両国間にも修好条約締結の前提協議があったが立消えとなった。その後二年、駐支伯国公使カラドが訪日の際、修好条約締結の再交渉を日本外務省は提案したが、伯国側の気乗薄で見合せとなっていた。それから十三年後の、日清戦役も済んだ一八九五年（明治廿八年）十一月五日、日伯両国間の修好通商航海条約は、佛国巴里に於て調印された。

日本全権委員は駐佛曾根荒助公使であり、伯国全権委員は駐佛 GABRIEL de TOLEDO PIZA e ALMEIDA 公使であった。同条約の批准書交換されたのは、一八九七年二月十二日、巴里に於てであった。批准交換後直ちに實施された。

駐伯初代日本辦理公使に珍田捨己（ちんだすてみ）が、総領事を兼ね、赴任出發したのは一八九七年（明治卅年）八月二十三日のことであった。ペトロポリスに公館を設けた。

駐日初代伯国特命全権公使に任命されたは HENRIQUE CARLOS RIBEIRO LISBOA だ、先年ジャセグア牛少将副全権の支部派遣に、書記官として渡日した人であった。

日本帝国伯刺西爾合衆国修好通商航海条約は拾五條より成れるもので有った。有効期限十二年と明記されてあった。伯国大統領は三代目のプルデンテ・デ・モラエス時代であった。

パラ州へ日本移民三千名の空契約

右條約締結前の一八九五年（明治廿八年）八月二十一日、パラ州土地局と東洋移民貿易会社代参者 JULIO VENAVIDES との間に、日本移民三千名誘入契約締結されたと、其翌年の同州知事 PAULO SODRE の教書中にあるも、契約は實行されなかった。

修好条約締結前ばかりでなく、珍田公使着任後、公使の意見として「アマゾン方面も、所詮本邦人の移住地にあらず」といふ卓上意見の具申があったので、パラ州日本移民三千名契約の實施催促も、外務省より許されなかったので、空契約

に終わった。

土佐丸出航の二千名

日本移民中止

吉佐移民会社と東洋移民会社の両代表青木忠橘は、一八九七年（明治卅年）一月伯国首府港に上陸した。移民会社員の伯国渡来は彼が最初であつた。

彼はサン・パウロ州のプラド・ジヨルドン商会の確實信用を再認した上、單獨農業労働移民二千名輸送を契約する事にし、東京本社に向つて、五月「交渉纏る」と打電した。

本社は吉佐移民会社を母体とする東洋移民会社を設立した。日本郵船会社の近藤廉卒、加藤正義等の有力者が参加した会社であつた。

青木の電報を受けとるや、会社は大いに活気づき、在横濱プラド・ジヨルドン商会代理人ミツドルリと本契約を締結した。その年布哇行移民は上陸禁止をされ、送還されたものが神戸に尚集合していた。各移民会社は、これが前後措置に苦悩中であつた處とて、渡に船と、直ちに該千五百名の移民を伯国行へと容易に向けえた。

契約は重に珈琲耕地労働で、五カ年期限、賃銀は一カ月三十志（當時は凡そ十五円）労働時間は正味十時間、衣食住は雇主持ち、日本式風呂場も設備すると云ふのであつた。

船は郵船会社の土佐丸を庸船した。八月十五日、愈々神戸港出航と期した。その出発四日前、聖州プラド・ジヨルドン商会より「珈琲暴落のため約束の移民引受難し、出船中止されよ」の電報に接した。

出航は中止するより外なかつた。神戸埠頭に乗船待機中の移民は、又々悲惨の状に陥つてしまつた。

損害高二十九万九百七十余円と計上された。移民会社の業務擔當員佐久間貞一は損害要償の手續を珍田公使へ要請したが、珍田公使は「望みなし」と回答し泣寝入となつてしまつた。當時の日本経済状態として二十九万円は、大損害額で

あつた。

然し常時、吉佐移民会社が編輯した「日英佛伯四力国語対照の会話書」（長方型）は日伯会話書の創めをなした。それより拾年、笠戸丸移民中斯の会話書を持参渡伯した人々があつた。

二千の移民輸送契約を、電報一本で破棄した聖州の當時の珈琲暴落は事實であつた。其年の珈琲値は前年の市価の半値にならぬ暴落振りであつた。

其年迄、伊太利移民は毎年五万人近く誘入されたが、翌年の伊太利移民入伯数は二万人漸くの減少振りを示していた。尚、斯年は、プルデンテ・デ・モラエス大統領任期満つ、退位の一年前で、バイア州にジャグンソン族土人の反乱事件があつた。鎮圧のため出動人員の死傷六千と記され、其費、相當額に上り、伯国政府の財政困難、従つてサン・パウロ州政府の財政負担額も大きく影響あつた年であつた。

日伯移民関係は茲に又一頓挫を來たした。

（珍田公使―写真―）

初代駐伯珍田公使の赴任



土佐丸移民輸送の差留電報を、東洋移民会社がうけて一週間目、即ち同年八月廿二日駐伯初代日本公使兼総領事珍田拾巳は、外務省移民課長田中都吉と同伴で伯国向け出發した。珍田公使は赴任の翌年六月二日、病弱の故を以て帰朝してた。彼が在任中、対伯移民事情報告は、日本移民伯国誘導に有利なものでなく、悲觀的なものであつた。彼は健康がこの地に適せぬ如く「所詮本邦人の移住地にあらず」と書いた。

後任は外交官補三浦彌五郎が公使事務取扱を命ぜられて、ペトロポリスに駐在した。

彼は翌年十月臨時代理公使となり、その月の末、北條書記生を従へて、サン・パウロ州サン・パウロ市に来て、アントニオ・ダ・シルヴァ・プラドー（聖州上院議長）と会見していた。

二代目公使駐伯日本大越成徳が任命されたのは、一八九九年七月であつた。彼はアルゼンチナ国兼任を命ぜられて着任した。

大越公使はサン・パウロ州の珈琲耕地の觀察は、日本移民に不當としての報告書を本省に送っていた。それで「移民会社のブラジル宣伝は極力之を警戒すべし」であつた。

因て外務省は、當時リオ首府の移民勧誘員マルシャル・サントなるものが日本に於ける、伯国移民宣伝に対し、左の如き警戒書を、各府縣知事宛に発し、移民旅券不許可を命令していた。

「近頃伯国移民募集のため同国より渡来し、各地移民会社に募集方申入居り候もの有之候由に聞及候處、當省に於ては目下の處同国移民は渡航許可せざる方針につき貴縣へ認可出願候者有之候はゞ認可相成らざるよう致したし」

サンツは岡山の帝国殖民会社や和歌山の厚生移民会社と移民輸送の契約書は作ったものゝ、皆お流れとなつてしまつた。

大越公使の下に、外山義文通訳官、堀口九萬一書記官がいた。外山のサン・パウロ州珈琲耕地悲觀論に対し、堀口は樂觀者であつた。外山が明治卅二年十二月十五日附にて本省宛珈琲耕地の實況に関する報告書を送り、歐洲各国政府が自国民のブラジル渡航を警戒していると述べた中に

伯国政府が移民誘導に熱中するに方り、其目的を達せんと欲

するの熱心より、移住希望者の果して国力の發達に資するに足る種類なるや否、詳細之を検するに遑あらざるのみならずこれを募集するに於ても、独り當国に於ける事情の陽面のみを掲げ来りて盛んに之を提唱し、其の陰面に至りては努めて之を掩抑して、只管外国人の移住心を誘起せんことを試みたり。政府既に然り、況んや私立移民会社の如きに至りては、もと純然たる営利事業に他ならず、筭も定数の人員を誘致するを得ば、其利爰に収まり、其責爰に盡くるものなるを以て会釋なく事實を矯飾し、氣候の快適、地味の豊饒、遺利の潤澤等あらゆる甘言を放ちて愚民を誘ひ云々（中略）伯国は恰かも一種の樂園なるが如き想像を描き、一たび移住すれば、数年を出ですして容易に一家の恒産を立つるを得べしなど妄想を懷き、続々募集に應じたれども、一旦實境に臨み、其狀況に接するに及んで、氣候にまれ、地味にまれ、將た食住にまれ、毎事彼等の案外に出るもの多く、最も痛切の失望を感じたり。是に於て不平苦情となり、悶着百出、殆んど拾収す可からざる有様を惹起せり。其中には就雇の途なく、落魄糊口に窮し、結局本国領事館の手を煩はす者続々之あるに至り云々（中略）佛国に於ては一八七四年に發布せる伯国移住の禁令依然効を存する云々（中略）独国に於ては一八五九年、普魯士国商務大臣の發布したる法令により新たに伯国移民会社を起す事を禁ずると同時に其既設に属する移民会社の許可を取消し云々（中略）嚴に移民の伯国行を制止し云々（中略）奧太利匈牙利政府も亦伯国移民を禁制する目的を以て嚴重の取締法を設けたるを以て云々（中略）英国は伯国移民の實際の狀況を調査せしめ、可否の意見を徴したるに、異口同音に其不可なる旨を具申せる云々。

右の事情報告は敦れも伯国輸入移民としては緑の薄い国々たる北欧諸国移民の来伯實例を報告しており、彼の報告は彼の所謂陰面の報告を掩抑してと同心理を以て、伯国の陽面に至りては努めて之を掩抑したものになっていたもので

あつたが、大越公使は又、長文の電報を本省に送つた。

サン・パウロ州に於ける伊太利移民の如きは、非常の困難に陥り、其救済を求むる者日一日より頻りなりければ、當地駐劄伊太利公使は其本国政府の命に依り、着任後未だ一週間ならざりしに直ちにサン・パウロ州に出張して、其事實を取調べ、二週間以前に帰着致し候間、就て其實況を聞き候處同公使はいわく、移民の惨状の實際は當地にありて聞きし所よりも尚一層の惨状にて、實に困厄の極に陥るとも許す可き有様にして、彼等数ヶ月前より其労働賃銀を請取らざるのみならず、中には一年も賃銀不渡のもの少からずとの事に候（中略）而も其賃銀不渡の移民の数は、伊国労働者の過半、即ち卅萬人に達せり候云々

右の報告は伊太利移民の惨状を書いた。日本の外務省が伯国行移民に「出願候もの有之候はゞ認下相成らざる様致し度くと各府縣知事に命令したのは、斯うした駐伯日本公使館よりの伯国移民報告が、なされていたからであつた。

大越公使は一九〇三年五月廿六日帰朝した。

後任は堀口九萬一書記官が臨時代理公使に就任した。この頃駐日伯国公使も二代目の代理公使 MANOEL CARLOS GONCALVES が就任した。彼は二年後に辦理公使となつた。このマノエル辦理公使の前に代理公使を勤めた OLIVEIRA LIMA は、日本移民伯国誘入に不賛成者であつた。彼は一九〇二年帰国後出版した著書の中に、

日本へは支那部人と同人種なるも、支那人ほど柔和でなく、殊の外自負心強く、それが少しでも傷つけられると、決起して 反抗する。若し耕地主が之に欧州移民と均等の待遇を與へざるときは、日本人は甚だしく憤慨するであらう。日本人は幾多の美点を有するとはいへ、伯国の移民としては歓迎したくない。また日本人も環境の著しく異つたるブラジル

に於ては 幸福を感じぬであらう。と書いていた。

日本人側でブラジルを日本人発展地として賛成している人もあり、不賛成と書いてる人もある如く、伯人側にも、そうした傾向が二ツに分れていた。

オリベイラ・リマの対日本人観察は日清役後の日本人が反省なき神経質の自負心を指摘して嫌がっていた。

堀口九萬一代理公使は、ブラジルの移民会社員サンツが日本へ行く前、彼と会見していたが、日伯間の移民問題は、不適の問題でなく、要するに距離の遠い丈け、旅費がかかる点にありとしていた。堀口はサンツの請により、日本関係者宛添書を認めてやった。

彼堀口は一九〇五年末（杉村公使着任の年末）帰朝した。翌年即ち明治卅九年一月八日、東京銀行集会所に於て、東京在住の貿易商、銀行家、船舶業者、海外事業関係者を前に、ブラジル事情一般を紹介して、杉村公使の報告書を裏書した。

四、三代杉村濬公使の来任

伯国は日本移民に不適の地と報告した大越成徳公使帰朝の後一九〇五年「明治卅八年」四月十九日杉村濬公使が来任した。

彼は着任早々佛語に堪能な堀口九萬一書記官を伴ふて、発づミナス・ジエラエス州を、次で珈琲生産地の本場サン・パウロ州を視察した。杉村公使は堀口書記官の考案に基き、左の問題にサン・パウロ州農務長官の確答を求めた。

第一、家族連の制限を励行するもいゝが、當州にして現行法の家族連でなければ旅費を償給せないと固守すれば、日本移民は難かしいかも知れぬ。臨機な考案ないか。

第二、サン・パウロ政府は移民旅費を幾許まで償給しうる見込か。政府償給の外に、雇主より償給の道ないか。

第三、右旅費は、後日返済せないでもいゝか。右に対しサン・パウロ州農務長官は即答した。

第一、日本移民に限り、最初は特別法を設け、独身者でも旅費を償給することにしよう。だが、独身者は移動が容易だ。雇主を困らせることが多いので、三、五人一組となし、一家屋に寝泊させ、耕地から容易に出られない様にしたい。日本移民の着伯期は、珈琲採収始めの、四、五月頃が最もいい。

第二、欧洲移民には距離の差で、旅費も多少がある。大抵六ポンドだ。日本は遠い。だが、一人七ポンド位は政府として給與する見込。愈々となつたら、改めて書面で協議しよう。

第三、旅費は後日返済の要はない。

斯くて杉村公使は、同年五月卅目附にて、外務大臣小村寿太郎宛、左の報告書を送った。

本官「サン・パウロ」州旅行中

伯国官民歓迎の模様に関する報

本官が「サン・パウロ」州に旅行するに先ち、其噂の傳はるや「リオ・デ・ジャネイロ市」の諸新聞紙を始め、サン・パウロ州に於ける各地の新聞共に、皆之れが記事を掲げて其歓迎の意を前表し、次で去る十二日、御国書捧呈の為め大統領謁見の際、暢談に入りし所、大統領は本官が不日サン・パウロ州に旅行の事、新聞に依りて知了せり、就ては其際には及ぶ可き丈け便宜を與ふ可き旨話有之しが、果せる哉本官出發の當日には、サン・パウロ行列車に特別車室を用意して本官の乗用に供し、さて、サン・パウロ停車場に至れば、同州大統領侍従武官一名護衛騎兵三名を連れて大統領の馬車を以て迎へられ、旅館に案内せられたり、當日直ちに大統領始め

内務農務大蔵諸長官並に警視総長及び市長の訪問をなすや、其好遇優待眞に予期せざる所にして、共翌日より内務長官は親ら案内して本官をして政府の諸事業を視察せしめ、其後鉄道港湾及珈琲其他各種耕作の状況等視察の際にも必ず相當の人を派して本官に随伴せしめ以て視察の便宜を興へられたり。

其他諸般の取扱ひ極めて鄭重親切にして他の伯国駐在外交官等すら、尚之れを異とする迄に有之候。

官邊の好遇既に如斯なるに、人士の歡迎優待は尚一層これよりも甚しく、旅行中通過する何れの停車場に於ても多数の群集は皆本官等の来着を待ち受けて之を歡迎し、日本萬歳を呼ばざるはなく、特にサン・パウロ市を距る三百六十基米突余の内地にある「リベロン・プレト」市の歡迎の如きは、誠に意想の外に出づる所にして、本官等の同地に着するや市長より歡迎の爲め派遣せし馬車四輦は、予め停車場に待受け、次で一行の同市に入るや市民は両側に整列して之を迎へ、其中頃に至るや兵装せる小学生徒は棒銃の敬礼を爲し、次で日本萬歳を三呼し続て女学生徒整列せる前に至るや一少女は恭しく菊花々束を本官に贈り、沿道日本の萬歳聲裡に送られて旅館に着するや其中庭には樂隊既之列伍を爲し本官が階に上らんとするを相図に、「君が代」の譜を奏し、次で盛餐の饗宴あり、其間熱心なる同情を日本に表する演説は引も切らず、然るに門外には多数の群集又々日本萬歳を連呼し、旅館の内外相呼應して日本に同情を表するの盛況、山河幾萬里を隔つ南米に於て特に本官の感を動せし處、右旅行の帰路に於ても亦同じく、本官通過の各停車場に於て夫々歡迎有之、特に「トーバテ」停車場に於ける同情表示会員等は、夜間十時半なるに拘はらず行届きたる準備を爲して以て本官等を歡迎せしが如きは、尤も意外の優遇と存じ候 要するに日露開戦以来帝国海陸軍の連戦連勝は深く伯国人の敬慕を招きしは勿論と相認め候得共此外にも伯人は久しく歐洲人に未開人視せられ、憤慨に堪へざりし折柄、我が国が立つて露国に打撃を

加へたるは、彼等の最も痛快とする所にして、其同情の特に深きも故ある儀と推察せられ候。さて右の如き同情は極めて得難き儀に候得ば徒らに拱手して之を冷却せしむるは我得策にあらざるのみならず、又彼等が厚情に酬ゆる所以にも有之間敷と存じ候に付此機を利用して當国と通商移民關係を開くは當国官民の希望に相副ひ且つは我利益と相認め候間御一考相成様致度、尚通商移民關係開始の方法に付ては別に愚見を具して上申可及候。

右及報告候敬具（通商彙纂より）



（写真―三浦荒次郎通訳官）

右報告文中日本戦勝に因り平素未開入視された欧州人に対する伯人の鬱憤をはらした痛快感が対日好感となつて現はれてると報告しているが、當時に於ける伯国人の対日好感情は、單に弱小国と信じていた日本が、世界強大陸海軍国の露国を叩いた處に、弱者に対する驚讚であつて、歐洲人に久しく未開視された伯国人の感情云々と言ふ迄、當時伯国々民主義は教養されておらず、又日伯両国が過去の歴史の繋がりがないので、味方日本によつて露国に対して晴らす鬱憤なども伯国人士にはなかった。當時の伯国人の感情発表型式として、複雑多岐な形容詞に讃辞、式辞を盛った處に、満足があつた。宴会中熱心なる同情を日本に表はす演説は引も切らずは、一言居士多い社会の秩序維持上、演説を欲する者にやらせる事が止むを得ない時代相であつた。

報告書は堀口書記官の筆であつた。

右の報告書と同日附にて、次に報告書を外務省に送つていた。

サンパウロ州に

関する報告

一、サン・パウロ州及サンパウロ市の發達（前文数行省略）
（當国は聯邦制にて各州とも其憲法に依つて大統領を選舉し政府を組織し居るに付其發達均一ならず、而し、てサン・パウロ州最も發達して居るものと聞けり）同州は伯国南部四洲の一にして南緯凡二十度より二十五度の間に渉り、氣候温和、面積二十六万方キロメートル（本邦の本州と四国を併せたるものと略同じ）を有せり。本官は汽車に十二時間余も内部に入り或は線路を替へ或は支線を追つて見渡したる限りに據れば、斯かる廣漠たる州内に於て、高山なく峻谷なく、又平坦なる廣野もなく州内の一般は大凡雜木林にて蔽われたる百尺乃至三四百尺の山丘に依つて寛やかなる波状となし、水流其間を縦横せり。故に州内山となく谷となく殆んど耕作すべく、居住すべき土地と認められ又州の重要産物として第一に数ふ可きは珈琲にして、其他甘蔗、棉米（陸、水とも）種々の農作物あり、加之各租の果樹に富めり。
両三年前の調査によれば、世界の珈琲産出国が輸出する珈琲高は大凡千九百五十八万包余にして、其内千六百二十四万包余は伯国に属し、尚千二三百包は、サン・パウロ州の産出に係ると云ふ。
州内鉄道縦横に通じ、此處彼處新市邑勃興し、中には人口二三万に及ぶものあり、州内電燈を要ゆる市邑は二十余に及ぶと開く。各耕地に使用する数十万の耕作者（半小作人）は伊国人最も多く、其他独、西、葡、澳及瑞西等の移民にして、多くは相當の貯蓄をなし、其業を楽しみ居るものゝ如く見受けられる。

又、州の首府なるサン・パウロ市は巴里府を模倣して建設せし市府にして、現今の人口三十二万と称するも、市街の美麗商業の繁昌は蓋し當国第一に居る可く、是より汽車にて二時間半を経て海岸に下れば（サン・パウロ市は六百メートルの高地にして州内各地よりは高地に位せり）サントス港にして、天然の便利を待たる外に設備も殆んど完了し、當国第一の良港と認む。

税関の収入は「リオ・デ・ジャネイロ」港に次で第二位に居るも、輸出は第一を占め全国三億五千余万弗の輸出中サントス港は一億千五百万の輸出を占めたり。以って其商業の盛大なるを証すべし。

二 サンパウロ州に対する

我移民兼貿易開始に関する見込

同州に対する我移民は、土地及氣候の關係重なる州民の歡迎並に歐洲移民の成績に徴すれば、移民等の働き次第にて必ず成功すべき見込にして、特に同州は先年来移民に関し伊国と葛藤を生じ、伊国政府は契約移民の輸入を禁止し、又同州の官民も伊国移民を嫌惡して、永く之を排斥せんとする傾向なれば旁々以って日本移民を歡迎せんとする有様明かなり。但し移民の方法は従前我移民会社等が経験した契約移民と異なれば、此点に關して我従来の方法を変更せざる可からず。

當州は永住的家族連れ移民を希望して、出稼的労働者を好まず、聞く處によれば、亜留然丁国も同様なるが如し（大越前任公使の報告に徴しても明なり）故に南米の大西洋岸に向つて契約移民の国を求むるの到底不可能の事を覺悟せざる可からず。若し有之とせば、護膜採取、若しくは鉱山採掘等極めて不利なる場合に不過べきに依り、我国は將發當方面に移民せんとせば、其地方の希望に應じ其慣例に従はざる可からざるは勿論なり。尤も當初試験の際には別段の約束も成立するならん。又随意移民は歐洲人にして始めて成功すべきも、日

本人にては不可能なりとの考を懷くものあるも、是は誤解にして、初て渡航したる歐洲移民を見るに其無智貧困なる有様は、蓋し日本移民已下にあるが如く、當州政府は歐洲移民に向つて、相當條件下に旅費を辨償し、官費として之を耕地に導き就業せしむるものなれば、移民は一の資本なく又他の智識なく、本来の農民にして唯働らきさえすれば、自己等の家族を養ひ若干年の後は立派なる家産を作り得る仕組と聞及べり。その方法は幾種でもあれば追々委しく報告せん。又商業の如きも當州の金融裕かにして生活程度高く（人口二百五十余万にして一億千五百万弗の輸出を為すは州民の富裕なることを以つて知るべし）州民は我絹物類を始めとして其他の特産品を渴望する有様なり。又輸出品に於て、棉花、牛皮、羊毛、又は肉類等に裁て之を求めば必ず有利のものある可く、之又當業者の勉強次第にて必ず成立すべき見込みなり。商品の調査に關しても夫々依頼しおきたれば追つて詳報せん。尚商業は同州にとゞまらず、サン・パウロ市を中心として當国の各地に其取引を拡張すべきは勿論、各国の商社も本店を當市に置くやに聞知せり。右移民及商業の成立に關しては第一の急務として日伯兩國間に航路を開くことを必要と認む。航路開通せざれば右の二業とも完全に成立すべき見込みなく、若し本邦より南米の大西洋岸に向つて俄かに航路を開き難きに於ては、せめては南米の太平洋岸智利の「ヴァルパライズ」港まで航路を開くも宜敷からん。然る時二週一回英國の太平洋汽船航海会社に連絡して太西洋岸に達するを得るなり。此航海一度開けば南米の両岸孰れの地に向つても、移民を送り、通商を開き得べしと 存候。

尚茲に特記すべきは、サン・パウロは當国中最も進歩したる州にして、將來發達すべき余地充分なれば、資本家又は地主は熱心に移民を歡迎し、移民に対し政府より旅費の全部又は幾部を辨償する慣例なるは本州の特色とす。（通商彙纂）

右の報告書によつて外務省の対伯移民に反対した頑固連が感じたことは、日本移民は欧州移民に比すれば劣つていて、外国では所謂成功せないと自卑していたことが、誤解かな、と反省したことであり、伯国の如く地球の反対側の遠い距離に行く移民に旅費を支給して呉れることは、全く稀有のこと、これは日本移民輸出の上に一道の光明を認めたことであつた。又働らきさえすれば、自己の家族を養ひ、その中に財産も出来ようということは、當時の日本労働階級にとつては意外の仕組の世界だ。唯問題は外務省としては、日本移民にこれ迄独身移民の輸出許可であつて、家族移民は未だ嘗つて輸出を取扱つたことがない。それが永住的家族伴れ移民の輸出なんて、可能性があるであらうかと、封建的生活より解放されて間もない外務省の頭脳では相當不安がられたが――報告書にある通り、伯国は伊太利から移民輸出禁止されてゐる。伯国は伊太利移民を嫌悪し永続的に排斥するとあれば、日本移民を伯国へ入れる、今がチャンスだ、とした。前駐伯大越公使の「伊国移民三十万の伯国に於ける慘状報告」は忘れられてしまった。

そこへ杉村公使は矢継早やにその六月三十日附を以つて、本省宛「南米伯刺西爾サン・パウロ州移民状況視察復命書」を送つた。サン・パウロ州に於ける移民生活の具体的報告で、珈琲耕地労働契約終了後の移民は自由に植民地に入れると、當時露国植民のため開設したといはれた、ノーパ・オデッサ植民地に関する州政府の法令と入植條件を報じた。それによると、莊園主はカマラーダと呼ぶ日傭労働の仕事も、生活費稼ぎに興へる家屋建築の木材も提供すると言ふのであつた。

珈琲耕地の移民の賃銀、雨期には自作栽培地を提供し、衛生状態の良好、気候の温和、衣食住の簡易さ等々が詳細に述べられ、その結論に於て 今や伊国移民禁止のためサン・パウロ州は移民不足を感ずること切にして、官民一般労働者を

歓迎する時機なるを以つて 本邦移民の排斥さるゝ米国等に行くよりは寧ろ當州に来ること我移民一般のために大いに便利とする所なるべし（中畧） サン・パウロ政府は其渡航費の全部又は一部を償給するか故に、是亦甚だしく苦慮するに足らず、況んや其償給に預りし 移民とても、之に対して何ら辨償等の義務を将来に負ふにあらずして、且つ當州に着する上は、全く自由なる労働者として取扱はれるに於ておや（中畧） サン・パウロの如きは實に天興の樂郷福土にあらざるなき歟。ただに移民のためのみならず、我資本家なるもの又一考を要する膏（こうそう）の地にして両も鉄道附近に位して運輸交通の便あるに拘はらず、地價極めて廉價なるが故に、資本家若しくは企業家たる者は此等の地所を買受け、此に自ら日本村を確設し、其移民をして耕作及其他の作業を為さしめば、其事業の大なる丈け、それだけ利益の多かるべきは明知せらるゝものあり。若し又地所を買入れることを欲せざれば、前述せる露国人植民地の例に倣い多少の資本を投じて日本植民地を創設することゝなせば、是亦將來に於て有望なる事業といふべし。

右等に関し在本邦の海外企業家有志家若しくは深慮ある移民会社等が多少の経費を惜しまず、自ら出張し若しくは同志又は社員を派遣して當州を實地視察せしむることは亦喫緊事たる可しと思ふ所なり。（通商彙纂）

五、一日本内地に伯国への関心昂る

この報告書が外務省より印刷されて、一般に報ぜられた。日本大衆は何う動き出したか。

この報告書を大阪朝日紙上でよみ、感激し第一番に伯国向け単独旅券可附願を、外務省に「恐れながら」と提出した人は、京都大黒町の大黒風呂屋の若檀那三宅栄次郎であった。

明治三十九年二月九日旅券を得、四月四日横浜発の備後丸に便乗した。（備後丸は日露役後日本郵船の欧州航路再開第

一船であつた。徳富蘆花が十字架の本場詣に便乗していた。マルセユ港で便船を待ち、六月二十四日サントス港へ着いていた。



(隅部三郎―写真)

駐伯堀口書記官が帰朝後東京銀行会館でやったブラジル講演会に感動した仙台の貿易商藤崎三郎助が、その支配人野間貞次郎と後藤武夫、佐久間重吉、田中正雄の四店員を、サン・パウロ市向け商店開設に出発させたのは明治卅九年五月五日神戸出航の阿波丸であつた。彼等もマルセユ経由、七月十六日サントス港に上陸した。当時リオ・デ・ジャネイロ首府には黄熱病流行後で、不安がられ、サン・パウロ市に開店した。市の上流婦人達が日本の日傘をさし、扇や絹布扇を、シナリシナリとキンゼ・デノベンブロ街を歩き出したのもこれからであつた。

鹿児島地方裁判所の判事をしていた熊本縣人隈部三郎が、舊藩主や同国政治家佐々友房等の激励後援を受け全家族を伴ひ伯国向け出発した。同じく鹿児島から本田武治が三青年を伴れて出発した。本田家族はロンドンに留つたが、三青年は、マルセユで明穂、長井の伯国行組と落合った。明穂梅吉は出雲の国より動き出したのであつた。三青年とは安田良一であり九玉、永井であつた。

隅部一家と前後して、鹿児島から松下正彦、有川新吉、伊勢仙助等が伯国向け出発してた。

日本當局の伯国宣傳に對して、日本國民の関心は、第一先達として斯くの如きものが動き出したに過ぎなかった。

資本は進出したが移民は拒まれた……

當時は日露終戦直後であつた。國民は戦勝の興奮に酔うていた。政治野党の宣伝に乗り、比日谷原頭には焼打事件を起していた情勢もあつた。戦地引挙げの凱旋部隊が國民の万才聲裡に所属師団地で除隊されていた。

平和の生活就職難は、社会的には末だ表面化してはいなかつたが、産業日本の初期であつた。日清役の後には「米が十銭すりや」の流行唄であつたが「東雲のストライキ」節はそれより十年後、遊女に唐米をのみ喰わせた辛酷さからだとなつた。社会生活の苦味が流行唄となつて街頭に流れていた。

日露終戦直後の社会思想を反映する流行歌は「赤い夕日の満州に」であつた。この唄は戦勝國民の感情性に何をうえつけたか。

「赤い夕日の満州」――茫漠たる海外の大陸へ、海外への憧憬であつた。一般日本人の感覚は海外の天地に触覚をうごかし始めていた。

台湾へ、樺太へ、朝鮮へ、遼東へ、南満へ日本人の移殖民天地は開けていた。

台湾へ、樺太へ、朝鮮へ、南満へと日本の勃興資本は、勃興企業の初期技術は、自由に進出したが――日本人の間は、労働階級は、農民階級は大陸への進出移動は、官制的恐怖症にかけられて拒まれた。

台湾は瘴癘蠻雨の地だ。人を喰う蠻族が棲む處だ。マラリヤと呼ぶ熱帯病の流行する處だ。台湾土人に比べると、日本労働者は生活程度が高い、土人と競争しても劣敗するのは確かだ。

お上の厄介者になつて内地へ送戻されるのがおちだ。寧ろ辛くとも現状がましだ――と宣傳された。

朝鮮は労働者不足はしてゐない。鮮人の生活程度は日本人より低い。朝鮮に渡つて農業をやつても、氣候風土に慣れぬ。生産物收穫糧は、氣候風土に即した鮮人の生産收穫糧より減収だ。

それでは生活出来ない上に、第一言葉が通ぜぬ――と恐怖させられてゐた。

山東省、南満州は日本より寒いぞ。満州農民の生活はコリアン一式だ。労働賃銀は日本より餘程安い。それに馬賊がいるぞ。そこに移つた日本農民は、結局クリーの生活に轉落するより外なからう。陛下の赤子をクリーの生活へ轉落させることは忍びない。と、赤い夕日の満州移動を拒まれた。

然し是等の地へと躍進した日本の前期勃興資本は、日本の政治権力に、軍閥権力に保護されて、台湾民衆を土人扱いにして搾つた。朝鮮民族を賊民扱いして搾つた。満人、漢人、大衆を南満鉄大資本で搾取していた。

大資本を統治権、軍政統治権の威力が保護し、保護されつゝ日本の前期資本はメキメキと肥つた。

欧米の帝国主義領土侵略主義が、一應侵略済みになつていた時代相に鑑み、日本の満州進出は、領土権を主張し得なかつた。それで、日本は、特種権益の名で、満州大衆を搾つた。

日本の施政振は、英国政権の下に英国資本が、印度に馬來に南洋に南米に、その土人大衆を搾取した政策も模倣したまでであつた。

日本の封建的な農業の潰壊しつゝあつた際の過剰農民や労働者は、工業發達の初期の都市へと流れ込みはしたものの、餘剰農民はさて何處へ行く。都会へ流れ込み得ねば帰農した。帰農しても喰えないとあつては、日本社会にもやがて労働争議として現われ始めた。

欧州各国の帝国主義農民なみに、移殖民し得なかつたのが

日本農民であつた。

日本の移殖民指導者等は、彼等農民労働者の剰余を、僅かに白人のおこぼれをいたゞきに、うけ入れて呉れる国へと、小出していった。

五、日露役前後日本移民の流れ

明治卅八年（一九〇五年）北米桑港に、亜細亜人排斥同盟会が設立され、日本人の移住反対が組織化された。

翌年四月桑港大震災が起きた。日本学童の通学する校舎が焼失した。校舎不足を理由として、同年十月学務局は遂に日本児童隔離教育学令を出した。茲に排日問題に関し、日米両国政府間に始めて公式の交渉が開始された。

隔離教育令撤回と交換条件として、日本政府自己の任意を以て、米国行日本移民を制限することにし、お上品振った日米紳士協約が成立した。この頃カナダも北米排日派と氣脈を通じたので、日本移民は北米大陸から、締出を喰った。

明治卅六年、熊本移民会社はメキシコ国の北部コアキラ州のエスペランサ炭坑に四十八名の移民を送った。日露終戦後、北米の排日運動の頂点頃、メキシコ国は日本移民を需用し招いた労働は炭坑、砂糖耕地、鉄道工夫であつた。明治三十九年（一九〇六年）には五千人、翌年に又三千八百の日本移民が渡航した。

ペルー国への日本移民は明治三十六年（一九〇三年）森岡商会第二回の輸送九八一名、明治三十九年（一九〇六年）に第三回の七七四名、第四回目には笠戸丸が二〇三名を輸送していた。この航海より笠戸丸が帰航し、改めてペルーに明治移民のゴム山行日本移民二百数十名を輸送協議が、東洋汽船会社との間に変更されて、笠戸丸は伯国行第一回家族移民輸送へと向けられたのであつた。

斯うした太平洋岸の日本移民停頓時代に、杉村駐伯日本公

使の、サン・パウロ州珈琲地事情報告が発表された。

これを観て躍起したのは、前述の通りであったが、移民指導者側では、皇国殖民会社社長水野龍唯一人であった。

森岡殖民会社、明治移民会社はペルーのゴム山地方へ僅か二三百単独移民輸送に専念していたし、吉佐移民会社の後身たる東洋移民会社は、伯国行移民に対しては、土佐丸移民輸送中止の痛手があるので、所謂贈を吹いていたので、伯国行日本移民は水野に先達されたのであった。

當時の水野龍の心事を、彼の著「南米案内」より参照する。日露役凱旋軍人の中一時多数の失業あるべきを想ひ、これを南米（杉村公使の報告により伯国サン・パウロ州へ）移民の先鋒として本邦移民の端緒を開くは時機を得たものならん信じ、一篇の意見書を草して朝野諸先輩の意見を問ひたるに何れもその可なるを稱せざるはなかりき。然れども責任ある計画としては、公使の報告其他の材量のみを根據として事を断するの不可なるを思ひ、身一度彼の地を踏査して、然る後實行の可否を断ぜんと欲し、南米行を企つるに至れるものなり。斯くて水野は駐日ブラジル国辦理公使マノエル・カルロス・ゴンザルベス・ペレイラを公使館に訪ひ、移民契約の為め渡伯の希望を述べた。公使は充分の便宜を計る事を約した。

水野は去つて外務省に、時の通商局長石井菊次郎を訪うて相談した。石井は水野の實地視察を賛成した。

水野龍のブラジル国

サン・パウロの視察

一九〇五年（明治三十八年）十二月、東洋汽船会社の南米航路第一回船、グレンファード号に搭じた皇国殖民会社社長水野龍は、ペルーよりチリー国へ、アンデス山脈をミューラで越えてアルゼンチン国へ、それより大西洋を北航して伯国リ

オ・デ・ジャネイロ港に上陸したのは翌年の四月であつた。横浜を経て間もなく水野はチリー国へと志す失恋の青年山形縣人鈴木貞次郎と同航の甲板に相知り、伯国の移民地を語りて肝丹相照した。

斯くて鈴木は智利を素通りし、水野と伯国の人となつた。鈴木は伯国日本移民の先駆見本となつて、カフェ耕地に就働し、所謂辛酸をなめた。後年、彼は「移民の草分」を著してその一節に、

横浜を出帆してペルーのカリヤオに直航するグレーンファード号は、色々の意味に於て戦勝日本が海外に送り出すザム・シングであつた。同乗者の中にブラジル移民契約の使命を帯びて行く水野龍氏の居つた事が、私の運命をして今日あらしむる機縁となつたのであつた。(中略) 水野さんは私を其傍近く呼んで、「まあ読んでごらん。気に入ったらブラジルに行かうじゃないか」例の杉村公使の「ブラジル移民に関する報告書」を私に渡して呉れた。

「そうですネ、私は必しも智利と限つた訳でもありませんから。一つそれを読んで考へさせてもらいませう」「それがよい君、智利も悪いとは云はぬが、伯国に行つて移民の先駆となるのも面白いぢやないか」移民の先駆……それは私にとつて一種の魅惑であつた。

私は船室に戻つてから一気にこれを読破した。コーヒ樹と云ふものはどんなものであらう！ 絵にも写真にも見たことのない私はしきりに空想した。翌日――私は水野さんの前に立つた。

「茲に書いてある半分の事實があつたとしても、珈琲園労働は愉快ですなあ。私は貴方と一所にブラジルへ参りませう」「それは君 公使の報告書だからネ、ウソはないヨ」私の顔は火の様に燃えた。

「どうぞ連れて行つて下さい」(以下略)

水野、鈴木両人はリオ港よりペトロポリスの日本公使館へ行った。

水野は日本移民契約の件につき、杉村公使と三浦荒次郎通訳官とで万事協議した。

水野と三浦通訳官と鈴木 of 三人は、サン・パウロ州に行き、州當局と移民契約につき交渉した。先づ珈琲耕地の視察へと州移民局より案内された。

モヂアナ線チビリツサ駅にヒルミヤノ耕地を訪ひ、リベロン・プレト駅にてゾーモント英人経営の耕地から、サン・マルチニオ・ビスコンデ・ピニアル駅にサンタ・ヴヰルヂニア耕地を視察した。

三浦と水野とはサン・パウロ州當局と協議したが、當時、州政府は布哇、秘露方面へ移民情況視察員を派遣していた。その報告をまつて、日本移民の契約をとまった。

鈴木はチビリツサ耕地に移民の先駆となつて働らき始めた。

三浦、水野は一應ペトロポリス公使館へと引上げた。水野は公使館に滞在し、サン・パウロ州當局の移民契約の應諾回答を待機中、一九〇六年（明治三十九年）五月十九日暁、杉村公使は脳溢血にたおれた。

水野は来年再渡伯を期し、七月伯国を去つて帰国した。

杉村公使の後任に内田定槌公使が来任した。公使は北米以外に日本移民發展地を求むる持論の人であつた。それで伯国へ日本移民誘人は公使の賛成する處であつた。

着任後内田公使はサン・パウロの州珈琲耕地を視察した。移民の草分、鈴木貞次郎をチビリツサ耕地より呼出して、公使はその耕地生活模様を詳細にきゝ入った。

皇国殖民会社と、伯国サン・パウロ州政府との間に日本家族農業移民誘入契約締結の爲め、水野は翌年四月、再渡伯した。

水野はサン・パウロ州移民及殖民局長ベント・ブエノ（前州内務長官）と協議した。

欧州移民同様の待遇を日本移民にも與へ、且、旅費は日本家族農業移民及単独移民にも欧州移民旅費より多額給するの特別法案を州議會に提出し、予算を請求する事となつた。本契約の署名者は、サン・パウロ州農務長官ドットル・カルロス・ボッテリーオ (Dr. CARLOS BOTELHO) であつた。一九〇七年十一月六日であつた。此間公使館三浦荒次郎通訳官の斡旋大なるものがあつた。



内田定槌公使



杉村公使



サンパウロ州農務長官
カルロス・ボッテリーオ



水野龍

(写真―内田公使) (写真―杉村公使) (写真―カルロス・ボテリョ)

政府と皇国殖民会社との間に締結された家族移民契約條件

一、会社は農業者にして、農事労働に適する者三人乃至十人より成る家族構成者日本移民三千人を、サントス港まで輸送する義務を有す。但し十二才以上四十五才までの男女を労働に適する者と見做す。

二、石工、大工、鍛冶の如き農業者に非ざる者も、移民全数の五分の一まで輸入することを得る。

三、一九〇八年以降毎年一千人宛送り、四、五月頃迄サントス港に到着する様。

四、毎年移民輸入毎に政府並に会社は其都合により契約を解除することを得る（日本政府も、サンパウロ州政府も、試験的移民として不安がつていた為めの條項であつた）

五、州政府は左の如く移民にサントス港迄の船賃を補助する。

十二歳以上

十ポンド

七才―十二才

五ポンド

三才―七才

二ポンド十志

三才以下

ナシ

六、前記船賃補助額中、政府は左記の額を雇人耕主をして償還せしむ。

十二才以上

四ポンド

七才―十二才

二ポンド

三才―七才

一ポンド

七、新主は政府に償還したる金額を其雇人たる各移民の給料中より引去ること。又殖民地に入りたる移民に対しては、右金額を政府に於て其地区の代價と共に徴収す。

八、移民は珈琲耕地の労働に従事するか、又は殖民地に入る。珈琲耕地に就働するものには通常欧州移民に供給するものと同一なる家屋を貸興し、珈琲採取の賃銀は五十リットル入袋に付伯貨四百五十レース乃至五百レースとする。臨時傭労働に対しては一日二ミル乃至二ミル五百レースの割合を以

て支拂ふ。

九、日本移民のためブラジル中央線に沿ひ数ヶ所の殖民地を設置し、各殖民地の配當地区は、家族の人数に従ひ十エクタール乃至十五エクタールとして、其拂下代償は一エクタールに付四十ミルレース以下とす。地区代金第一期拂込は、移民が農事着手の際之を為し、その拂込は一年又は二年を隔てゝ為し、五ヶ年又は十ヶ年以内に全額を支拂ふ。殖民には家屋を年賦拂にて支給する。

十、会社は葡萄牙語又は西班牙語に適する日本人通辯六人を募集し、契約調印後四ヶ月以内にサン・パウロ市に到着させる事。其給料は一ヶ月二百ミルレイス、政府又は耕主に於て之を支拂ふ。

右六名の渡航費は政府に於て之を支辨する（通辯の渡航費は一人五十ポンド支拂った）

斯くて日本移民史に企画的な農業家族移民の輸送が、地球の東半球から西半球のブラジルへ開始される事となった。希望に輝いた水野は北米經由直ちに帰国を急いだ。翌年一月横浜に上陸した。水野龍五十歳の正月であつた。

明治四十一年二月二十五日（一九〇八年）外務省認可を得てブラジル行家族農業移民一千人を募集した。

水野東京着後、直ちに東京外国語学校西班牙語料卒業、又是在学中の五名をブラジル国行き移民通訳として募集した。彼等がシベリヤ經由、伯国サントスに着いたは一九〇八年五月中旬であつた。大野基尚、仁平高、平野運平、嶺昌、加藤順之助の五名であつた。

水野の背景となり政府當局を動かしたものに、政友会派の代議士連がいた。

珈琲の栽培される伯国サン・パウロ州の位置は亜熱帯地である。

斯の亜熱帯地方に就動するには、日本人中では沖縄縣人が

最も適する体質者と認められた。それは布哇方面への移民として沖縄縣人が相當出稼していた経験上、速急移民募集（五月末頃までにサントス港へ着く様取はからう上からの）仕易さもあらうと、ブラジル行移民に沖縄県人を重に募集した。その結果移民七百七十九名中、沖縄移民が三百二十三名を占めていた。

各縣大別移民家族及人員数を詳記すると、

（縣名）	（家族数）	（男）	（女）	（人員）	單獨者数
沖縄	五〇	二七四	五〇	三二四	〇
鹿児島	四六	二二六	四六	一七二	一九
福島	二一	五三	二三	七六	一
熊本	一九	四九	二九	七八	一
広島	九	三二	一〇	四二	一二
山口	九	一八	一二	三〇	一
愛媛	六	一四	七	二一	一
新潟	三	六	三	九	〇
高知	二	一二	二	一四	〇
宮城	二	七	三	一〇	四
東京	一		二	一	三
合計	一六八	五九三	一八六	七七九	

この外自由移民、殖民及便乗者として左の人々が居た。

兵庫 殖民 鞍谷伴三郎 妻イノ 父誠一 家族飯田某

高知 殖民 片岡治義 妻あきお 長男光章

東京 旅行者 三原万次郎（水野の息）

玉屋花火職工 松田、柏木（右三人は水野の同伴者）

秋田 仁平ツナ子（先発移民通訳の妻）

大分 大野松子（先発移民通訳の妻）

山形 殖民单独 高桑治平（鈴木移民の草分血縁者）

長野 同 矢崎節夫（亜留然丁行旅券）

熊本 同 香山六郎（ペルー行旅券）

右の外、亜留然丁国及ウルグア共和国の便乗者に、

亜留然丁行 安田商店主及傭人青年二名

ウルグア共和国 瀧渡文平商店主

この二商店主は再渡航者で、該諸国に既に日本雜貨店開設せる貿易商人であつた。

以上合計七九八名であつた。移民総取締水野、上塚二人を加算して笠戸丸乗客は八百名であつた。

七、日本移民史に畫期的な家族農業移民の創始

笠戸丸の出航

日本民族史は雑多の移民より創まっていた。雑多の入移民がもたらした原始林開拓技術と精神とが日本の天地に凝つて、日本文化を産んだ。その雑多入移民が混淆して日本民族をなすには相當な年代がかゝつた。入移民が国民となり、出移民として海外發展を盛んにやり出したのは、鎌倉時代末期以後と言はれている。即ち元寇拾萬を弘安四年（一二八一年）撃破し、国民的意義はあげたが、相當な消耗戦であつた。

茲にその消耗された物を満たす為めの出稼が創まつた。然しこの時代以後、日本出稼民は呂宋に、比律賓に、爪哇、安南、シヤム等に活躍はしたが、孰れの時代にも、孰れの地方にも男子は比女（ママ）同伴の出稼民ではなかつた。彼等は倭寇と稱されたが世界出稼民の歴史が示す如く、半商半海賊の出稼であつて、農業開拓の域までに達していたものは絶無であつた。

一六〇〇年代、比律賓マニラの太守は本国エスパニア政府に書を送つて「マニラには目下日本人は千人近くゐるが、彼等は土着を好まぬし、土民と結婚もしない。船毎に来て船毎に彼等は帰国する。我々にとつては、彼等日本人は危険な連中ではない」と報じていた。

それから三百年が経った。

日本男児は比女家族同伴でブラジル国へと輸出され始めた。茲に日本出移民史は劃期的な発展を創めた。

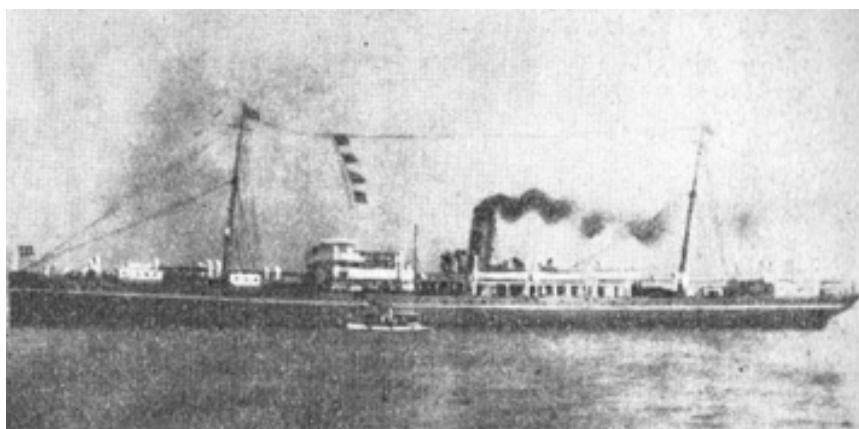
サン・パウロ州珈琲耕地行の農業家族移民は、四月十八日神戸港出航とあったが、殖民会社が外務省へ積立てる移民輸出許可保証金拾万円が調達遅滞で、出航は延々になった。急場の対策として殖民会社は、移民の携帯金を一時会社へ預金させた。

預金はサン・パウロ移民収容所に放て拂戻すとの一札を移民に渡した。

斯くてこの保護金の一部は漸つとととのつた。会社は拾万を八万円に泣きを外務省に入れた。この泣きを入れたのが政友会代議士であった。

移民が神戸港沖に浮ぶ笠戸丸へ乗込んだのは四月廿七日であった。移民家族百七十、人員七九四、船中総取締に社長水野龍と、伯国に於ける会社代理人帝大法学士上塚周平が乗船同航した。

四月二十八日午後五時五十五分、船は動き出した。摩耶山の彼方に夕陽は落ちて、映光は淡く神戸港に流れ、ポンポンと打ち上げる舳からの壮行花火、日傘さした下町女の紙人形が空にフワリフワリとたゞよう。紀淡海峡を通つて土佐沖にかゝつた頃は、船は初夜の春雨にぬれていた。



(写真―笠戸丸)

【写真説明】 第一回ブラジル行日本農業家族移民輸送船笠戸丸は、日露役のバルチック艦隊所属病院船カザリン号であつた。六千噸級の鋼船、帝国海軍省が東洋汽船会社へ拂下げた。明治四十年末ペルー移民二百三十名輸送し、帰航直ちにブラジル国サントス港へ……船長は英人であつた。當時は世界の海道界は尚英人船長が幅をきかしてた末期で、日本の海運界は勃興一步前であつた（同船長は後年日本に帰化した）。

船は陸の交通機関より半世紀位も階級制が墮性的に残存したものだが、笠戸丸は移民の制限された荷物、僅か八百名の移民を六千噸級の船にのせたのだから、船室は蚕棚式でも移民船としてはユツクリだった。移民は奴隷擬品の待遇で輸送

されたが、笠戸丸移民は階級的虐待性は感じなかった。食物は海に慣れた移民には量に於ても不足していた。



(写真―上塚周平)

家族移民の初航海

笠戸丸が神戸港出航の約三時間前、前甲板に総移民を集合させ、所謂「別辞」を述べたは移民会社側代表土井権太（政友会兵庫縣代議士）で、その辞の一節に、

「外国に行つては、諸君の一人一人が日本国を負っていると思へ。諸君の一人一人が日本人の態面をよごすべからず。成功せずんば死すとも帰らずの覚悟で行く可し」との訓示をした。

その翌晩から各船室は、大聲小聲に唄ふもの、三味を弾くもの、ゲツキン尺八、沖繩諸島附近を船が通る日夜は、船室にも甲板にも沖繩移民のジャミセンと唄の哀調が、船客一行の郷愁をそゝつた。

「この柳行李一杯、円紙幣ば詰めて帰る積りで出かけましたばい」と熊本の大工の希望であった。

「彼地では二三町分も畑を耕やしてバナナでも栽培し、気楽に暮らすづら」とは福島の高齢者の理想であった。

「三年間みっちり働いて、生活費を切詰めたら一万円を、それで故郷に帰っておふくろを京の本願寺へつれて詣りた

い」とは或る若夫婦の願望であつた。

「帰りには、コーヒとかを二三俵お土産にもつて帰りまひようで」は広島若婦人の望みであつた。

「日本人の体面々と云はすばってん、金もうけにや、どぎやんしゆかい」とはニューカレドニアのニツケル坑山より帰り再渡航する熊本移民の二三人の話であつた。

甲板の帆柱の蔭に凭れて、黄色夜叉によみ耽けてた福島移民の独身青年があつた。甲板を蝶々の如くとび過つてた鹿見島移民の朗らか娘もあつた。

故国日本で苛税誅求をうけて、やむなく海外に流浪する移民の群ではなかつた。異宗教の圧迫に悩んだ人々の移住でもなかつた。政治的な陰謀を企てる人々の群でもなかつた。故郷で百姓しても喰ふ丈けだ。都市に出て巡査していても喰ふ丈けだ。

村で教員して暮らしていても京見物が生涯一度出来そうもなし……そうした不平の人々の群であつた。「小金を貯めて」四五年したら帰国したい。或婦人の望みは「帰ったら村一番のいゝ帯の一本も買いたい」と語つた。

家族農業移民 ― 日本移民史に創めての家族同伴移民、劃期的な色彩移民の群の乗れる笠戸丸も、「小金をため」四五年したら帰りたい出稼移民の群に過ぎなかつた。

五十一日の長航海中、寄港したのはシンガポール港とケープタウン港の二港であつたが、移民の群は両港とも上陸を禁じられた。

不案内の港街に下船した移民が帰路を間違え、言葉も解せず迷子になったら、船としてはお客さんだ。ほつたらかしても出航出来ない。勢い船の出航時間の変更だ。それもならぬ、奴隷移民でないから外出させても遁げはすまいが―と布施事務長は説明していた。奴隷擬品としての輸送の憾はあつた。

當時の熊本移民橋口重雄の日記に、
五月九日 午後二時シンガポール港着、本日は沖合に碇

泊、小蒸汽船数隻笠戸丸の舷側に来る。人員調査等ありたり。清人或は黒奴等の品物売に来るもの数十隻、皆本船員より追拂はる。

五月十日 本朝四時頃雨降り暫時にして止む、六時頃棧橋に着け石炭及水積込み、午後三時半終りて出航。碇泊中黒奴等長二間幅二尺位のエグリ舟にのり本船の下に来る。錢を海中に投げ興ふれば直ちに海に飛込み、錢を海中より取り来る事百投百取なり。眞に驚くに堪へたり。

ケープタウンでは同人の日記に、

六月二日 午後十一時三十分喜望峯の西麓ケープタウン港に着碇泊、起出みれば海岸数哩の間電燈の輝数千とも知れず、其夜景の美麗何も言語に絶せり、アフリカ島にかゝる處のあるとも思はれず。眞にシンガポールの比に非ず。

六月三日 朝六時頃起出見れば夜は未だ明け渡らず、暁の美尚昨夜の如し。八時頃より乗客船員一同健康診断あり、午後船より釣魚を試むるものありしに、アジ、サバ、ボラ等釣るゝ数百尾、人皆争ひ釣出し、船べりには人を以てみたし、魚の多き事も亦驚ろくに絶へたり。船のフチにつきたる小アジ、サバ、まことに船にコケツキたるが如く見ゆ。船は水、蔬菜類積込む。

六月四日 午前九時半頃棧橋をはなれ沖合に碇泊、午後一時出航。昨夜より本朝迄魚釣者絶へ間なし。ケープタウンの市街の美なるまことは、シンガポール等のはるかに及ぶ處にあらず、亜弗利加にも此の如き處あるかと驚ろくばかりなり。

宏大なる家の立並べる市街の長さ四哩以上もあらんかと思はる。後ろには奇形の山々ありて、まことに早何んとも云ひ難し。其山の後ろには金坑山ありと聞く（彼は天草の小学准教員崩れであつた）。

當時日本の流行唄はラツパ節であつた。笠戸丸甲板上で斯んなラツパ節が唄はれた。

- 一、チエテ河畔秋更けて今宵も出できし絃月に
影と二人たたずみつ故郷を偲べば唯 虫の聲
- 一、涼風通ふ珈琲蔭晝の疲労をやすらへば
遠の笛の音ゆかしくも月さえ出て来る夕哉

(高桑秋の人)

航海中の日本移民は未だ見ぬブラジルの自然を船の中で詩化していた。作者は肺を病んで渡伯十年後、聖市サンタ・カーザで死んだ。

左のラツパ節も移民青年の作であつた。

- 一、流れ千里のアマゾンの岸の大木を伐り拂ひ筏つくりて
日の丸たてゝ隅田川まで流したい (公孫樹)

この桃太郎式の奪略思想が當時は偉らいのであつた。一般移民の群の思想もこれであつた。

左に笠戸丸航走距離日程の跡をかゝげる。(笠戸丸熊本移民故橋口重政の日誌帖より)

明治四十一年四月廿八日午後五時五十五分神戸港拔錨
神戸港発

(哩数)	(月)	(日)	(時)
一八〇	四	廿九	正午
二四五	四	卅	同
二四三	五	一	同
(哩数)	(月)	(日)	(時)
一二二	五	二	正午
一二五八	五	三	同
一二七二	五	四	同
一二七四	五	五	同
一二五二	五	六	同

二五五	二七〇	二七二	二三〇	二四三	二七一	二七八	二五七	二四八	二六五	二五六	二六五	(湮数)	二六一	二五三	二五四	二三三	二二二	二〇四	一八四	二〇三	二〇〇	二五二	二〇六	(湮数)	シンガポール港発	五月九日午後二時	神戸港	二〇〇	二六〇	二五四	
六	六	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	(月)	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	(月)	(五月十日午後三時半)	シンガポール港間二、七二二湮(十一晝夜)	五月九日午後二時	シンガポール港着	五	五	五
二	一	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	(日)	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	二三	一二	一一	(日)	五月十日午後三時半	午後二時	シンガポール港	九	八	七	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	(時)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	正午	(時)				同	同	同	

一一五 六月二日正午よりケープタウン港着二日午後十一時

シンガポール港ーケープタウン港間五・六七七哩廿四晝夜
六月四日午後一時十五分同港出航

(哩数)	(月)	(日)	(時)
二四八	六	五	正午
二六四	六	六	同
二五二	六	七	同
二二二	六	八	同
二四八	六	九	同
二六二	六	一〇	同
二六七	六	一一	同

(哩数)	(月)	(日)	(時)
二六六	六	一二	同
二六六	六	一三	正午
二六四	六	一四	同
二六〇	六	一五	同
二五五	六	一六	同
二四九	六	一七	同
二〇〇	六	一八	同
ケープタウン港ーサントス港間航走三・五二四哩十四晝夜午 前九時半伯国サン・パウロ州サントス港着神戸港ーサン トス港間二、九二二哩 五十一晝夜間			
航海中船員乗客疾病、出生、死亡なし。不平不安のグレー ベ(争議)も起きなかった。			
航海全線異状なしーであったが、船がサントス港着三日 前夜、船員同士の喧嘩があつた。船の機関部員に酒癖悪い一 火夫、一杯吞んで、短刀もて其火夫長の脾肚に刃傷した。負 傷者は船がサントス入港直ちに同市サンタ・カーザに入院さ せた。船が出航一日後死亡した。遺骸はサントス港共同墓地 に葬むつた。			

航海中の珍事件と云へばそれ丈けであつた。
赤道祭も沖縄「空手踊」、鹿児島踊りに賑はつた。



(沖縄代表城間眞次郎―写真)

第二章 笠戸丸後史

一、笠戸丸サントスに着く

「夜明には南米大陸の山々が見えるぞ」と船員の話で、移民は俄かにザワツキ出し活気立つた。船はサントス港外に假泊した。星が甲板に降るような晩であつた。明日は愈々サントス入港だ。笠戸丸ともお別れだ。

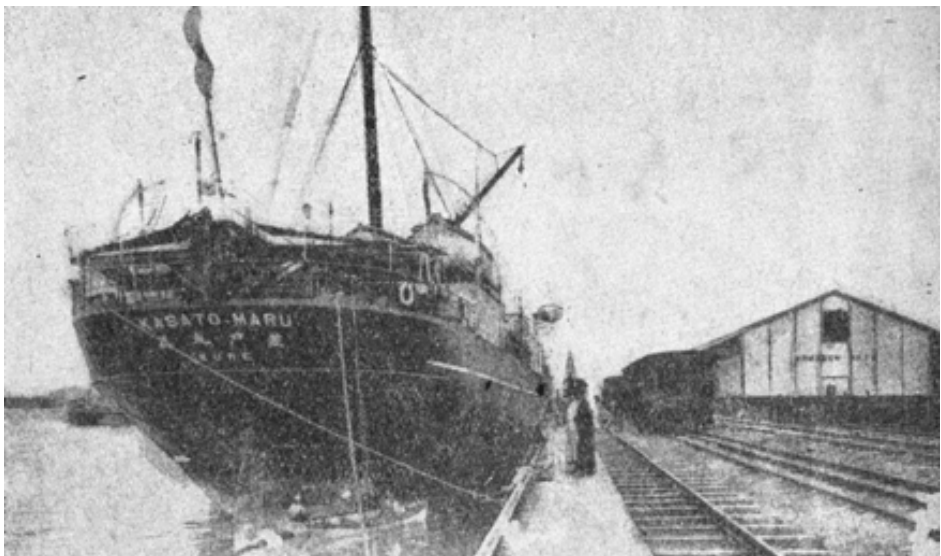
移民の心は雄々しい裡にも故国の船に別るる哀愁があつた。移民の子を抱き上げて、お別れに頼ぐりする船員もあつた。沖縄移民の弾く蛇味線の音は夜の海に流れた。

明治四十一年六月十八日午前九時半船はサントス港内へ又假泊した。

乗客一同型の如く検疫をうけた。皆、無事通過した。トラホーム患者のあるや否やも見ない寛太さであつた。

其夜、サン・パウロ市より汽車で、日本公使館の三浦荒次郎通訳官と、聖州移民收容所日本人書記鈴木貞次郎と、皇国

殖民会社サントス代理人モンテイロ及藤崎商店員後藤武夫の四名が移民出迎へに上船した。



同日午後五時半、船はサントス埠頭に着いた。翌六月十九日午前七時笠戸丸棧階から降りて、日本家族農民は初めて伯国の土を踏んだが。そこに待機せる列車に直ちに乗込まされてしまった。日本移民の手には日の丸の紙小旗と、伯国の紙小旗とが汽車の窓から振られて、見物の伯人群集を嬉こぼせた。

天気は至極晴朗であつた。

一行を乗せた列車はやがてサン・パウロ市へと発車した。列車の窓より現はるゝ途中急坂の眺望、左窓、観る彼方高峯の連続、遠に大瀧もみえた。列車の下は一瞬一瞬と深谷、濃緑林の絶景となつた。彼方此方黄白紫斑の花の点々、エストラ

ンデエロは旅愁を忘れた。

列車はサン・パウロ州立移民收容所の特別引込線のプラタ・フォルマに停った。午後一時過ぎていた。そこに出迎の收容所長、殖民局長以下大勢の背後に、日本通訳五人もいた。



（サンパウロ移民收容所）

收容所の大食堂で二回に亘って昼飯を供された。バカリヤオとバタチニア（干し鰯とジャガイモ）の煮粥であった。日本移民への特別馳走だったと、鈴木移民の草分の話であった。珈琲の苦き洗禮をうけ、移民一同苦笑し合った。

收容所の階段下のセメントの上に寝伏して、獣の如く汚れ、疲労し切ってる四五人づゝ幾組かの外人家族の群がいた。黒髪の容貌美しい女小娘もいた。何んと気の毒なほど汚

れ疲れた人々であらうと、日本移民はさゝやき合つた。
「これが南欧移民だ」と通訳の一人はさゝやいていた。

ポンポンと花火が夜となく晝となく、絶間なく收容所の周囲の空に上っていた。灯風船も夥しく空に流れていた。斯様な騒ぎセマナ・サンタにカトリック市民の習慣だそうだ。

收容所の廊下には大入道の如き黒人掃除夫が通る毎に、日本婦人は、この異様な異性をよけて歩いていった。

早暁、收容所附近の人家から鶏の鳴音が朗らかに流れた。コツケ、コツコーと、日本移民はブラジルの鶏は日本語で鳴くと珍らしがつた。犬の吠聲もワンワンと聞えた。あの犬も日本語で吠えてると移民は嬉こんだ。

洗濯便所といふ異国文化生活様式に、感嘆の知覚を日本移民は働らかしたのも、收容所からであつた。

六月二十二日、移民の荷物がサントス港より、收容所税関倉庫に入つた。荷物の検査が税関吏等の出張で始まつた。燃える様な緋絹の長襦袢も柳行李の垣から現はれた。税関吏の血はエストランジエラのエロにそゝられた。芸妓の肖像色づけ絹ハンカチが税関吏の手からそのポケットに、ニコニコと仕舞い込れた。

「外国人ッて盗むの平氣ネ」と知つたのも收容所からであつた。検査は仕極寛大であつた。

南欧移民の荷物など、汚れた衣類の小包と炊事道具のガラクタばかりで、税関吏の立合ふことも稀れだそうな。

唯一ツ税関吏を不思議がらせたものがあつた。法華坊主崩れの東京移民の茨木家族が持参した十二個からの蚕繭棚であつた棚の柵ばかりでなく、藁まで添えて持つて来ていた。その頃、伯国では養蚕産業など殆んど発達していなかつたので、説明しても判断つかめ税関吏の頭であつた。

二十四日午前、細雨霽降る午後一時より沖縄移民收容所より市街へ外出、耕地行の買物に出かけた。東洋人を見なれぬ伯人社会には沖縄移民の姿は驚異であつた。彼等を引率して出た嶺通訳は、街で何事か不祥事が起りはせぬかと卑屈に

も杞憂したと後に語っていた。市民の悪戯者は、日本人の前に立ちふさがって低い鼻をみつゝ、自分の偉大な鼻を指さきでおさえてみせた―が、東洋の君子国移民は、体面を重んじて喧嘩もされずニヤニヤ笑ってた。

上街の中央街ラルゴ・ダ・セに於て市民の群は、日本婦人とその子供の一行を珍らしがり取囲んだ。二時間ばかりも前進出来なかった。嘘のような事實だ。

農務長官 Dr. Candido Rodrigues は、前農務長官 Carlos Botelho と移民収容所に日本移民を訪問した。當時の、サンパウロ州知事は Dr. George Tibirica であつた。

伯字紙の日本移民評

六月廿五日、サン・パウロ市の Correio Paulistano 紙は、最初の日本移民を斯く評していた。

「日本移民は十九日船より上陸し、同日サン・パウロ市に到着した。其船室及其他の設備をみると皆相當清潔だ。日本人が文化人たるを窺知される。日本船の三等室は欧州航路の一等室よりも清潔だ、と評した者もいた。ほんとでないと想ふものは、左の事實で首肯出来よう。

移民収容所に入る時、彼等は列車より少しも混雑せず整然として降りた。移民の出た後の車中を検したが、痰吐いた痕一ツなく、果物の皮一ツおちていなかったし、見る者を不潔だなど思はする一物もなかった。

サントスからサンパウロ迄の列車四時間かゝつたが、余等新聞記者を何故か同車させなかつたのか知ら……秩序正しく収各所の食堂に這入った移民は晝餉したが、一度に入られぬものは廊下にまっていた。

移民は男女とも洋装してた。男子は鳥打その他の帽子、女子は上衣と袴を連絡したベスチードで洋装してたが、腰の處で胴締めしてた。至極単純な婦人帽を被り、裝飾ある帽子は留針で髪にとめてた。

其梳けする毛髪は嘗て日本画で見た日本婦人を想起こさせたが、絵画のと異つて大きな櫛はさしていなかった。

男女とも高價な靴を穿いて靴下もはいてた。或男は勲章を三ツもさげていた。その一ツは金にて、日露役の勲功で得たものであつたと（高知移民代表長野鹿次予備伍長が、従軍章と赤十字社章を加へて三ツさげていた）竹の小棒の先に金ピカ小球をつけた小旗を持った移民が多かつた。旗は一對、日の丸と青黄の伯国旗だ。日本移民は吾々に厚意を表する為、日本で作つた絹の伯国旗をもつて来たんだ。優美な心事さ、移民の着てる洋服は皆日本製品だ。日本の大工場で大量製産したものだといふ。移民は各自が一張羅を買つて着て来たもので、新鮮な感じをうけた。婦人は木綿だが手袋もはめていた。一時間位で食堂を出て、彼等は自分の寢室をみに二階へと去つたが、食堂には煙草の吸殻一ツ、啖吐いた痕一ツなかつた。これは他国移民が、煙草の吸殻や啖唾を踏蹂つて居た後の不潔さと比較にならぬ清潔さだ　――」

日本移民はその頃、煙草も「キセル」でのだし啖唾も吐かなかつた迄だ。ハナかんでぬれた紙は大切に折つて又ポケットにしまった。次のハナかみに利用する経済を知つていた。それで紙屑も散らさなかつた。バナナや蜜柑も収容所内では売らなかつたので、果物の皮も棄てようがなかつた。

収容所に入つた三日目、長航海の日本移民優待のため特に入浴をさせたが、その際、西洋人には見られぬ女の素裸や、男の素裸が平気で浴場外に飛出した。番人共をしたゝか面喰はしていた。通訳の番附で裸かで飛出しを警戒入浴となつた。

移民と移民会社と最初の紛擾

移民が耕地へと出発に際して、移民会社側と移民との間に、始めての紛擾が起きた。神戸で移民会社へ預けた金を渡

せと、移民が請求した。会社側は、その金は未だ日本から送金到着せないで支拂へぬと、つばねた。

茲に移民会社への苦情と不満の移民の第一聲が上った。殊に沖縄移民には一層不安がたゞよった。沖縄移民代表城間眞次郎は、或朝、収容所に出張した水野社長の胸に突きかゝつて行つた。水野は城間を突飛ばして傍の事務室へ避難した。上塚代理人は城間の前に「俺の頸を切れ」と差伸べた。城間は俯向いて静かに其處を去った。

日本から金がとゞく迄待つより外ない、と移民と会社代理人とは妥協した。

珈琲耕地へ移民出資

六月廿七日午前四時、沖縄移民の約半数は通訳嶺に伴はれてカナン耕地へと汽車で出発した。同朝残半分は大野通訳に伴はれてフローレス耕地へと出発した。

同日午前九時、熊本、福島、広島、宮城、東京移民とゾーモント英人経営珈琲耕主との間に労働契約署名された。

二十八日午前五時発で鹿児島、高知、新潟移民は鈴木、平野両通訳に伴はれてサン・マルチニオ耕地、及グワタパラ耕地へと発った。

二十九日、ゾーモント耕地へ、移民は加藤通訳に伴はれて発った。リベロン・プレート駅頭でこの移民は耕地の音楽隊に迎えられた。

七月六日、仁平通訳は山口、愛媛移民を伴ふてソブラード耕地へと去った。

六月十九日、笠戸丸より移民収容所に入つて十六日目、移民は皆配耕地へと去つてしまった。配耕出発朝の移民の元氣は、さながらピクニックにでも行く如き朗らかさで澁刺と発った。

―収容所食堂の皿が消えた。

耕地へと移民が出発したある朝、食堂ではメタルの食皿や匙が相當紛失していた。その翌朝からは移民の手荷物を収容所の門で検査し始めた。一枚の皿も一本の匙も手荷物からは、収容所のものは現はれなかったが、夜明けてから門の壁ぎわに移民収容所食堂の皿と匙とがフキーラ（行列）していた。日本国家の体面を擔った移民の行為であった。

聖市に就職した人々

移民は配耕されてしまったが、翌市に止まって就職した左の人々があつた。

鹿見島	鍛治工	池上二次郎
同	右妻	同 美禰
同	大 工	鮫島 直哉
同	洋裁縫師	原口貞蔵
山口	大 工	沖川 藤吉
熊 本	家庭労働	島村タジュ
同	同	同 七蔵
兵 庫	殖民 蔬菜栽培	鞍谷 誠一
長 野	同	矢崎 節夫
熊 本	移民会社代理店傭	香山 六郎

皇国植民会社「伯国代理人事務所が、聖市の Rua RODRIGO SILVA N 50 の一室に開始された。當時移民到着前に聖市に居た人々は、

福島	藤崎商店主任	佐藤 徳治
岡山	同 店員	後藤 武夫
鹿児島	玩具行商人	松下 正彦
京都	ホテルロチセリ料理人下働	三宅栄次郎
鳥取	同	小谷初太郎

同 山形 鳥取

同 同 伊国人経督帽子職人

赤山長次郎
遠藤 某
明穂 梅吉

移民サン・パウロ市到着前に居て、到着當時には己に居なかつた人々に秋葉老人がいた。この人は帆船に乗って布哇、濠洲を流れ、サントス港に着いたのが、笠戸丸前二十餘年頃と言っていた。サントス港の、自然のまゝのサントス港を知っていた人であつた。後サン・パウロ市に又移り来てたが数年後、サントス港サンタ・カーザで死んだ。

大平三吉、九玉某、有川新吉、安田良一、隈部三郎一家（妻娘二、息一）五人。

隈部一家はサン・パウロ市に於て煙草卷の労働賃銀を貯え水野移民契約成立後直ちにリオ・デ・ジャネイロ州マカエ郡の殖民地に有川、安田の両独身青年を伴ふて入植していた。

笠戸丸の船大工八木伊勢吉は、サントス港より脱船してサン・パウロ市の人となつた。シंगाポール港から笠戸丸に潜り込んで沖繩移民の中に居た天野と呼ぶ密航者もサン・パウロ市の人となっていた。

二、第一回移民の耕地配耕表

第一、カーン耕地

FAZENDA CIA. CHANAN
ESTACAO CHANAN L MOGYANA



（嶺昌一写真）

通訳 嶺

昌（群馬・独身者）死

同 同

○

○

○

○

○

佐	新	末	山	名	池	富	比	大	島	同	宮	崎	松	渡	澤	金	同	宮	島	同	吳	同	同	島	宮	同	金	伊	城	金	嘉
久	城	吉	人	喜	原	里	嘉	城	袋	カ	里	間	本	久	崎	城		里	袋		屋					カ	城	波	間	城	手
間	尚	徳	立	五	次	伊		朝	利	マ				政	太	睦	ウ	盛	五	ウ	仁		ナ	袋	平		マ	太	亀	米	亀
亀	助	平			郎	八	蒲	義	光		亀	亀	松		郎	仁	ト	秀	郎	ト	和	徳	べ	松	松	ト	二		蔵		那

同 死 同 死 同 同 伯 同 同 同 同 ア 帰 伯 同 伯 伯 死 伯 ア 同 死 同 伯 死 同 同 伯 ア ア ア ア

同 同 伯

伯 同 伯 帰 伯

伯 帰 伯

同 同

O

O

O

吉同同同同同比同新同比同新比同同同同新大玉同比同新玉古古古城安同
元嘉垣嘉垣嘉カメジカメジ蒲加徳光カ蔵蔵眞鍋宗カ
三蒲宗蒲カ蒲蒲カメジ蒲加徳光カ蔵蔵眞鍋宗カ
良戸正盛蒲メ山戸山松ヤ松牛蒲松亀ヤ戸亀那松氷マ樽亀亀巖喜志メ

帰 同 同 ア 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 ア 伯 帰 同 同 同 ア 同 伯 同 同 伯

伯 伯

伯

伯死死伯歸

同 同 同 同 同 同 同 同 国 同 一 同 沖繩

○

池 同 同 高 新 石 金 同 島 山 宮 城 同
原 江 垣 原 城 袋 内 城 間

文 義 義 義 善 昌 カ 次 宇 カ
鳳 好 廷 勝 良 三 徳 マ 蒲 樽 郎 志 マ

不
ア 伯 伯 明 同 死 帰 伯 同 同 同 同 ア

伯

不
明

伯

同 同 周 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

○

○

○

○

新 新 同 同 同 同 比 知 奥 同 同 知 同 仲 同 同 仲 同

垣 垣 嘉 念 間 曾 曾
三 加 カ 政 武 念 カ 根 カ 根 ツ
郵
亀 山 亀 艮 一 マ 山 蒲 庭 太 松 蒲 メ 牛 牛 マ 蒲 ル

同 同 同 同 同 同 同 同 ア 死 伯 伯 同 同 同 同 ア 帰 同

伯 伯

同

伯

伯アア 伯伯死死同
不明 伯 死 伯

婦 伯 伯 伯 不 死 伯 伯 不 伯 不 不
 明 朋 明 明 伯

同同同 沖 同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 沖 同同同同同

縄 縄

O

○



山城保次郎
玉城登松
比嘉嘉助
山城武太
比嘉善太郎
同力メ
宮平牛助
島袋善五郎
比嘉嘉秀吉
松田貞七
宮城仁助
同徳次
比嘉梅助
津波新次郎
同宗源
同マス
嘉陽宗貞
古謝国禎
平良松六郎
同カマダ
興那嶺仁五郎
上間静吉
比嘉久一
山里要四郎
玉城幸七
玉里源次郎
大城孫四郎
同ナベ
宮城幸四郎
上原直松
仲村善篤
松田太郎

伯伯同ア死同伯伯伯ア同アア死死同死同伯伯同同同同アア伯死死伯伯

死 婦 同 伯 婦 伯 死 婦 婦 同 伯 伯 伯 死

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 ○ ○ ○
 宜 同 有 同 知 同 喜 比 喜 同 比 吉 前 榮 同 平 宮
 名 同 銘 同 念 同 屋 嘉 屋 同 嘉 浜 川 門 安 城
 眞 兼 兼 ナ 三 龜 武 加 那 志 武 マ 松 加 郎 利
 邑 一 順 徳 ベ 良 三 蒲 蒲 ツ 助 那 益 松 メ 三
 郎 郎
 ア 伯 伯 伯 帰 伯 ア 同 ア 同 ア ア ア 伯 伯 伯 伯
 伯 伯 伯 帰 同 同 伯 死

合計	二六家族	人員一八三
男一五六		女二七

第三、サン・マルチニヨ耕地

FAZENDA SAO MARTINHO
EST. MARTINHO PRADO—L PAULISTA



（写真―通訳 鈴木貞次郎（山形縣・独身））

鹿見島 王子田政吉 帰

同

同 伯

同			同	鹿 児 島	同		同	同	同	同		同		同	同	鹿 児 島														
同	草	竹	上	同	林	同	竹	竹	同	同	折	今	同	森	池	同	木	同	同	茶	原	伊	同	石	篠	同	桑	同	同	浜
同	野	内	村		栄		内	内			田	給		友	上		多			屋	源	瀬	同	井	原		原			田
同	甚	善	泰	同	次	末	宗	留	ハ	喜	今	給	キ	恒	ツ	誠	政	エ	政		源	知	同	愛	清	サ	伊	計	ナ	長
同	助	兵	造	同	郎	吉	次	吉	ル	右	給	セ	衛	則	ヨ	二	雄	ダ	吉	八		麟	同	之	成	ワ	左	佐	次	郎
同	サ	衛		同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

同 伯 伯 伯 同 帰 ア 伯 伯 帰 ア 伯 伯 伯 伯 伯 同 同 同 伯 伯 帰 伯 伯 ア 同 ア 死 伯 ア 死

同 伯 同 伯 伯 死 伯 伯 伯 伯 伯 伯 伯 伯 伯 死 同 伯 死

[illegible]

宇都愛助
富田勝衛
松本熊武
野村盛二
永田一
藤原藤次郎
柳原矢吉
南興右佛門

帰伯伯伯伯伯
了伯伯伯伯
伯伯死死伯

合計	二七家族	人員一〇四
男	七七	
女	二七	

(写真―平野運平)



FAZENDA GUATAPARA
ESTACAO GUATAPARA L PAULISTA

広見島

西	上	同	森	西	同	上	同	同	松	同	同	川端徳之助
吉塘			敏仁			井			山新之助		カネギク	
太才ト				ヒ		彌シ			権四郎			
郎吉エ			哉志	口		忠吉メ						
伯	伯	同	不明	帰	同	死	伯	死	死	不明	死	死
伯	不明					同	伯					

同	同	同											鹿見鳥		同								同								
同	牧之段愛熊	同	同	同	同	同	川	同	同	松	加	貴	貴	同	貴	永山	同	田中定之助	同	同	浜崎當五郎	同	同	同	小	中	同	同	有	監	同
ツ		太吉				イセマツ	床			山	藤	島	島		島	吉左エ門	キ				豊	興	カ	斎	小路	一権四郎	梅鶴	水藤太郎	原典次郎	キ	
タ			エダ	栄吉	広		末次郎	ソメ	盛吉	圭助	明次	カル	フデ	郎				岩次郎	トセ		吉	一ル	造	健						ノ	
	不明	不明	同	同	同	伯	伯	不明	死	死	ア	死	ア	ア	ア	死	ア	ア	帰	同	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	死	不明	
伯	死		同	同	同	同	伯														同						死	死			

	高知	同	同					新潟						同					鹿児島					
古味久吉	窪田国衛	横井新次	同	西村市平	同	同	神田栄太郎	同	菅原雄次郎	橋口七兵衛	同	有村栄	同	出原清蔵	同	清水直吉	同	柿木栄江	本坊清吉	大原藤右エ門	同	同	末永傳次郎	同
伯不明	伯	死	同	伯	同	同	伯	同	伯	帰ア	ア	伯	伯	伯	死	死	ア	ア	ア	死	伯不明	伯不明	伯死	伯不

門田一美	中村芳治	井上馬太郎	同 亀 濤	山本喜市	岡村繁吉	長野鹿次	鍋島喜代重	同 寅義	谷岡庄太郎	森勝利
伯	伯	死	伯	ア	ア	ア	伯	ア	死	死
不明	不明	不明					伯			

合計 二三家族 人員 八七
男 六一 女 二六

(写真―加藤順之助)

第五、ズウモント耕地

FAZENDA DUMONT

ESTACAO DUMONT L MOGIANA



安田俊平	同 コノ	松本源八	武田茂吉	同 タツ	伊藤茂左工門	野内寅治	根本清五郎	安斎彌惣右工門	同 トラ
伯	同	ア	不明	不明	ア	ア	帰	帰	伯
伯	同								伯

福島

[illegible]

福島

同

同

同

同

同

同

同

山	山	同	同	渡	同	同	畠	鎌	同	同	星	佐	菅	同	高	宇	釘	同	佐	穴	同	三	橋	同	渡	同	同	本	同	三	平
本	本			邊	同	同	喜	田			清	藤	野		橋	佐	本		伯	戸		浦	本	同	邊		田		浦	儀	
キ	五	吉	ト	長	ハ	セ		一	喜	ノ		全	忠	ス	正	見		ト	郎	源	ケ	朝	美	ト	又	留	キ	丈	チ	和	
イ	郎	之	メ	川	ツ	キ	十	郎	六	イ	蔵	明	七	エ	治	基	賢	キ		助	サ		男	ミ	吉	蔵	ク	工	エ	馬	
		助		郎																										祐	

不	死	帰	帰	死	同	同	伯	死	同	ア	ア	伯	同	ア	帰	殺	同	同	同	不	同	伯	不	伯	伯	不	伯	伯	不	殺	帰

帰 同 帰

伯

同 伯 伯 伯 死 死

同 同 同 熊本

中 出 同 藤 西 同 同 大 同 只
川 口 本 島 村 千 野
仁 伊 末 仁 貞 サ 郎 儀 江
三 次 エ 人 作 男 力 助 助
蔵 ラ

死死歸死同同同伯伯伯

伯同同伯同伯

同

伯同同

同	目	同	同	遠藤	山本	楠本	植木	笹谷	児玉	同	池町	今田	畠田	畠田	同	同	小下	田尾	同	同	山田	間崎	山田	若林	山根	中村	中村	中村	車地	梶山	同
よそじ	黒静	ゆき	きよす	豊之助	栄次郎	本登一	木玉市	松太郎	玉良一	アサノ	彌市	軍司	ナヲヨ	傳之助	序三郎	ナ力	仁蔵	亀太郎	實蔵	オリエ	勘一	三三一	甚太郎	五郎市	栄次郎	四郎	直松	増一	朝一	島圖	マサヨ
不明	死	同	同	伯	ア	ア	不明	ア	伯	同	伯	ア	ア	ア	ア	帰	帰	ア	死	伯	伯	伯	ア	ア	伯	伯	死	死	北米	ア	同
	同	同	伯						伯	同	伯								死	伯	伯			死	伯					同	

同 同 同 同 同 同 山口 山口 同 同

福山同河藤同實同藤同伊久同久同同林同松同藤石同同芳同同宮井同近同
原城同野本同来虎同井同藤儀保保愛同田同井川好同我徳同田儀上同藤
甚キヨ三郎秀フシ助ア仁シ郎庄右衛門タ吉岩ト之ミ宇ハ佐郎松トミエ稔ハナヨ常タ林音
一サシ男ノサ助カ門ヨ松松モ助チ一ナ平衛ハナヨ吉チ次市

不
帰同同明同同ア帰帰伯伯伯伯帰帰伯伯 帰帰伯伯帰帰死帰伯伯死伯伯帰同死帰死帰
伯伯死伯伯 伯伯 伯伯 伯伯 伯伯 伯伯 伯伯

同	同	同	同	同	同	同
山	同	片	森	同	石	同
本		岡	弘		村	
勘	キ	嘉	清	モ	大	小
治	ク	一	太	ミ	郎	助
帰	帰	帰	伯	伯	伯	帰
			不	伯	伯	帰
			明			

三、移民の争議各耕地に起る

それから四日目、ズウモント耕地から、四名の独身青少年がサン・パウロ市のプラス駅に下車して路頭生活していると藤崎商店に注進があつた、日本人の耕地逃亡第一組で、関崎三三、大藤栄太郎、須山勘一、山野政一であつた。

ゾーモント耕地紛争起る

リベロン・プレト駅頭、耕地の音楽隊で歓迎され、英人經常のゾーモント耕地に着いた日本移民は、サン・パウロ市の移民収容所と、耕地の移民小舎との変化の差が餘り甚しいので第一印象を悪くした。

日本移民のはいる長屋には、土間に枯草が薄く敷いてあった。

「俺達は馬じゃない」といふ不平が移民の頭にムラムラとわいた、それでも皆は汽車の長旅に疲れたままにその夜はそこに寝た。翌朝加藤通訳が耕地の監督に同伴されて仕事の協議にコロニヤを巡った折、熊本移民の若者の一人は、その空屋の枯草の上に四匍して、ヒヒヒーンヒヒヒーンと嘶き、跳ね廻つて馬の真似をした。皆はドツと笑つた、加藤通訳は人間の斯うした感情のユウモアを解し得ぬ人であつた、皆を叱りつけ、激昂させてしまった。

六月二十九日入耕後、七月五日迄、各家族は家屋の振分、寝台作り、仕事の準備に費した、六日より愈々カフェー採取を始めた一家族三人で僅かに四五キロの採取高であつた、その三日目に、三浦通訳官と上塚会社代理人とが加藤通訳の案内で皆の働けるカフェーザールに現はれた。

移民の不平が彼等に爆発した。

三浦通訳官の計らいで、耕主は其翌日より日本移民に、今迄より結實の多い畑へと移したが、一家族一俵半位の採取高に過ぎなかった。

マアマア辛棒となだめて三浦、上塚は十日、サン・マルチニオ耕地へと去つた。

こゝは一家族三俵位の成績であつた、ゾーモント耕地の不平不安と不穩を、移民の草分鈴木通訳に話し、至急該地へ出張慰撫方を依頼し、三浦、上塚はグアタパラ耕地へと行つた、移民の草分鈴木がゾーモント耕地へ着いたは十二日で

あつた、そこには移民に対する加藤通訳の不信と傲慢との不平が爆発した。

其年はゾーモント耕地のカフェー結實は全く凶作であつた、

鈴木の慰撫も効なかつた、八月一日、耕主と移民収容所からの移民不穩通知により、上塚代理人は宮崎信造通訳（公使邸にありし東京外語生）を伴ふてゾーモント耕地へ出張した、居る事七日不平は昂ぢる一方であつた、二人は兎に角サン・パウロ市へ引上げた。

八月十五日、宮崎通訳は上塚の代理人として又同耕地へ出張した、移民会社が神戸にて預金させた移民の一部預金拂戻しのためであつた。

翌日宮崎は耕地を去つた、其夜移民は各縣代表協議会を開いた。決議は

一、他の結實多き耕地へ轉耕する事

二、移民の要求を耕主側に通辯せず、移民に傲慢不埒の加藤通訳罷免の貫徹

であつた、三浦通訳官はサン・パウロ市にて水野社長、上塚代理人、宮崎通訳と協議の上、ゾウモント耕地に出張した。

上塚代理人の温情主義、地に平身低頭移民へ涙の哀願も水の泡、会社と移民の妥協成らず、三浦通訳官は移民と耕主側と労資争議の協停に入つたが、妥協成らず、結局五十二家族移民はサン・パウロ移民収容所へと引上げた、八月廿五日のことであつた。

移民不平組の主謀者は各縣移民代表連であつた、就中、宮城移民代表の元巡查部長目黒静、山口移民代表元警部寶来虎助は最強硬者であつた。

この争議中東京代表茨木友次郎は法華宗の僧坊で、闘争魂を発揮、畑の仕事用三本脚の梯子を立て上り、移民大衆に不平の獅子吼中、足場を失ひ、地上におっこちた、それ以来、茨木は「俗事を脱落した」と語っていた、四十年太鼓題目。今もノロエステ線リンス市奥に精進し、在伯邦人法華の本山

となった。

ゾーモント耕地の紛擾原因

一、珈琲結實少なかった、採取労働不慣で、収入高が予想の四分ノ一に達せぬ、生活費の不安、一日一日と負債の嵩む不安、斯のままでは日本に於ける渡航仕度金の高利不拂の苦悩、二、労働過労と、料理方無知から食滋の缺調氣候不慣、輕症患者続出、家長の焦燥感は家族の神経衰弱へ（朝と晝は伯米を日本飯に炊いてバカリヤオ一片を炙つて湯漬で済ましてた、夕餉は麥粉団子の塩汁に豚脂肪を一匙溶かし入れた副食物、蔬菜類不足、肉類不足、炎天全身発汗珈琲採取労働で体の衰弱するばかりであつた）

三、生活環境不慣の上、言語不通、それに通訳自身も言語不自由の役立すであつた。

ゾーモント耕地の物價

精米（アグリヤ）一俵十九ミルレース、麥粉一袋十三ミル九百レース、フェジョン一俵十六ミルレースであつた。

耕地引上げ後の行衛

移民收容所へ引上げたゾーモント耕地日本移民は、改めて労働局に於て就働契約と出直した、五十二家族中、独身二十八名は、サン・パウロ、パラナ線のフアシナ方面へ鉄道工夫へと契約した。有川新吉通訳（リオ州のマカニ殖民地より飛出て来た）が卒ゐて行つた。福島、宮城の拾五家族移民は、目黒静に卒ゐられてソロカバナ線アグードス駅より四十キロ奥ビアード耕地へ行つた、九家族（熊本七、広島二）移民は、ノロエステ線サン・ジョアキン駅耕地へ香山六郎が卒いて入つた。この九家族移民がノロエステ日本人大殖民地の草分となつた。他の二十八家族中、四家族、三家族と分れてソブラード耕地や、その他イタチバ耕地等へ契約したものもあつ

たが、サン・パウロ市にとゞまつて家庭奉公に、大工に、ピントールの職を求めた家族もあった。

前途へ前途へ、何かいい事と、いゝ處があると感じ、二三家族移民は、荷物を男が擔ない、婦は子供を背負つて収容所の門を出、近くの鉄道線路を辿つた、リオ・デ・ジャネイロ州のメスキータ駅まで徒歩移動したものもあった。

隣国アルゼンチンへと、サントス港より轉航したものも六七家族あつた。

サントス港より、ブエノス・アイレス港まで當時の三等船賃は一人當二十五ミルレースであつた。
左の九家族がノロエステ線の草分であつた。

山	弟	神	妻	須	大	妻	子	宮	妻	娘	中	妻	長男	子	上	妻	本	妻
田		田		山	村			部		川					田		島	
勘	實	寅	シ	勘	太	さ	貞	彌	ト	シ	仁	ト	五	坤	豊	ジ	ミ	
一	蔵	三	ヅ	一	郎	が	男	平	エ	ツ	蔵	子	樹	一	記	ユ	ト	

同	同				
井	妻	櫛	橋	妻	村
手		本	口		長男
喜	ツ	源	重	タ	敏
平	ギ	蔵	政	二	信
					重
					崎
					豊

カナーン耕地
沖繩移民の逃亡

モヂアナ線カナーン耕地入耕の沖繩二十四家族移民は、その耕地の珈琲結實が非常に尠なく、珈琲採取甚だ予想と違つた、彼等は暑い氣候に堪へ、粗食にも充分耐えたが、日本出發の際渡航仕度費の負債を一日も早く郷里へ送金したい焦燥感が昂進した。

笠戸丸の入港したサントス港の海の色は、故郷を偲ぶ憧憬がまつわつた。港町は、カフェ耕地より労働賃銀も高からう、と案じては、耕地を逃亡した、懷中のさびしさから、鉄道線路に沿つて歩き出した、夫婦して荷物を擔ひながら、サン・パウロ市からサントス港へと移動した。

嶺通訳の通電によつて、十月二日、三浦通訳官と上塚代理人とは、カナーン耕地へ出張した、その時、六家族は既に逃亡していた。残部の十八家族は一先耕地に落つき、就働した、が、逃亡者はその後もポツリポツリとつゞいた。

逃亡の六家族はサントス港のシリヤ人の宿屋に泊りこんで、支拂不能をやつた、ホテル主人はサン・パウロの移民会社に彼等の喰賃を請求した、会社は一コント五百餘ミルを支拂つて一應清算し、彼等にサントス港の築港土掘労働を周旋した。彼等がサントス港に於ける沖繩系市民の始まりであつ

た。

フローレス耕地 移民逃亡

六月廿七日收容所を出てフローレス耕地に就働の廿六家族移民代表は、沖縄移民総代城間眞次郎であつた。

彼等移民は真剣に働らいた、結實は夥しかった、が、彼等の渡航費負債を年内に送金決済する望みは、尚ほつかなくつた、彼等の就働契約期間は六ヶ月であつた、六ヶ月以内に何とか甘いモウケをしないと、焦燥した「甘いモウケ」を志して彼等は耕地を逃亡した。

城間移民総代は移民の逃亡原因を次の如く発表してた。

渡航費の借金返済を急ぐため、もうからぬ珈琲耕地より、もうかる處へと移轉したい。その移轉の遠因は、吾等が那覇出発前、小禄村宮里某が北米、カナダ方面より日本金三千元もうけて帰国し、その土産話によるものと想ふ、「私はカナダで一ヶ處に定住せず、何時も金もうけのある場所を探し廻つたため、斯く平手に金を集めたんだ、諸君も伯国に行つたら、何時も耳を立て何處に如何なる仕事があるか、何處に此位の金もうけがある、此種の話ばかりを聞いて歩きなさい」と聞かされて来た連中ですから、金のモウカラヌ珈琲地を飛出し、サントス方面へ早くも走つたもの云々 フローレス耕地では翌年一月廿五日、五十二名の沖縄移民も上塚代理人と、該耕主との協議途中にして耕主の嫌忌にふれ退散させられてしまった。

同期間、五十一一名が耕地に間作していたミールオ、豆七百俵、請負焼上げの木炭等悉く没収されてしまった。

耕地逃亡事件相つゞく

ゾーモント耕地の四青少年がサン・パウロ市より耕地へ

戻った次の週には藤崎商店より又一人の青年が移民会社の事務所へ送られた、ソブラード耕地の山口移民藤本秀男（一九才）であつた、一週間職を市で採したが見當らず、又耕地へ舞戻った、それより三日ゾーモント耕地より熊本移民代表中村半次郎が其實妹をつれ、サン・パウロ市へ逃亡して来た、彼は實妹を妻替に構成家族し来たものであつた。それから頻々として耕地逃亡者等がサン・パウロ市に現はれていた。

サンマルチニオ耕地の争議

九月三日、ゾーモント耕地引上げ移民の一部がノロエステ線へと出発した日、移民の先駆鈴木貞次郎通訳の居たサン・マルチニオ耕地の、鹿児島移民も紛擾を始めた――と耕主より移民収容所長に入電があつた、州農務長官より在リオ帝国公使館へ電報した。

水野社長は三浦通訳官を煩はして、サン・マルチニオ耕地へ出張した、移民側の申出は 従来賃銀支拂は三ヶ月となつてゐたが、毎月拂にしてほしい、我々は日本出発の際、船賃其他仕度金も皆高利して来てる、一日も早く是等の借金を返済せねばならぬ焦燥氣から三ヶ月賃銀支拂には堪えられぬ、尚ほ出来れば、一家族に四五百ミルの前借金を要求する、大工の賃銀を五ミルに増加してほしい、と云ふのであつた。

耕主側は、毎月拂は出来ぬが八月迄の清算書は出来ているのでみせていゝ、食料品を供給する外、一家族に対し二十乃至三十ミル位までの前貸はしてもいいが、四五百ミル前貸金は 断然出来ぬ。

三浦、水野の両人は労資調停に努めたが、争議は首謀者等の主張貫徹で、妥協餘地なく、主謀強硬者二十七人を耕地より追放した、巡查上りの原源人が強硬者中の首謀者であつた、追放者の多数は、サン・パウロ市へ、それから亜国へ、亜国へと渡つた。

グアタパラ耕地の紛擾首謀者追放

サン・マルチニオ耕地の争議一段落して間もなく、グアタパラ耕地の紛擾が起きた。この争議原因は流行性と見做された。

首謀者二三が、サンマルチニオ首謀者の追放自由の身となったを羨やみ、策動し始めた、平野通訳は彼等の機先を制し、無通告、即時退耕追放處分に出た、上井忠、西仁志の構成一家族者で、西は鹿児島移民総代表者であった、彼等もサン・パウロ市より快々としてアルゼンチン国へと移航した。ア国は第一回移民珈琲耕地生活落伍者の轉向更生地の觀があつた。

第二回 鉄道工夫団

フロレーヌ耕地追放された沖縄移民と、ゾーモント耕地落伍移民の合計五十二名は、大野基尚と沖縄移民総代城間眞次郎の企画するノロエステ線アラサツバ駅奥地、チエテ河畔に沿うた・バクリ駅よりイタプーラ駅方面の鉄道工夫へ應募した、明治四十二年七月より其年末に到る約六ヶ月間の事で、ノロエステ線中の瘴癘蠻雨の地帯、一行中マレッタに冒されたもの続出、これがため就働しうるもの毎日六七名に過ぎなかった、然し死亡したものは青年一名、他の一名は患者となつてバウルへ帰途中行衛不明となつた。

死者は熊本移民の出口伊三次であつた、行衛不明者は沖縄移民の比嘉善太郎であつた。

彼等患者は第一回移民中マラリヤの洗禮をうけた最初の人々であつた。

四、サン・パウロ市と日本移民

(以後サン・パウロ州を聖州と書きサン・パウロ市を聖市と書く)

一八二二年独立當時の聖市人口は二万五千餘、日本家族移民の來た頃聖市の人口は卅五万代であつた。リオ首府に次ぐ伯国第二の大都會でゝもあつた。

聖市の上街と下街との中間は一帶のブレジヨンで、それを埋めて、ドン・ペドロ二世公園が出来、タマンデユアテ流水が開掘された。それは一九一四年頃であつた。

聖市の街燈は電燈でなく瓦斯燈で、民家は多くランプ時代であつた。市街の建物は四階建が最高楼、自動車は全市で百台にたらぬ、馬車時代であつた。一頭馬車と二頭馬車があった。馬車賃は一台五ミルレースであつた。馬の体格偉大さに、日本移民は目をそばだてた。ブラサ・ダ・セは今の四分ノ一にも足らぬ広場で、中央にあつたお寺も土壁白壁の小寺であつた。通貨はビンテン (二十レース) の銅貨が流通して、バナナが二つ買えた。ロテリア屋は相変わらず繁昌していた。ビシヨかけも拾レースから受けつけていた。あの狭いサンベント街に電車が通っていた。乗客は譲り合つて婦女子を先に乗せた。

婦人のサイヤは長かつた。カルサードを曳きづりつゝ歩いた。

聖市に於ける日本移民の最初の家、それは笠戸丸來航前に隈部家族が室借りして居た。ルア・アズルバル・ナツシメントの家であつた。次で鈴木後藤等の借りたジュゼ・テオドロ街近きアメリカ街の部屋も古い、笠戸丸が着いて皇国殖民会社伯国代理人事務所の、ロドリゴ・シルバ街五〇番もあるが、その前に同街四六番地には、ロテツセリ・ホテルに働らく三宅栄次郎や松下正彦等六七人の合宿所があつた。移民収容所を出た自由移民の鞍谷誠一は舊競馬場入口前イポド

ローモ街に二三反の野菜畑を借地して（月二十ミルの）蔬菜畑を耕やした。矢崎節夫は鞍谷の協力者として當分共同生活したが後、家庭奉公に轉じた。聖市に於ける借家蔬菜業の始めだ。

次で起ったのが、サン・パウロ街二〇番地であつた。藤崎商店員の佐藤後藤等が、池上鍛冶工の妻に日本飯炊かせての住家を一軒借りた。半歳ならずして佐藤後藤等はアグアブランカ方面へ移りこゝは池上により日本移民の耕地引上げ者の合宿所となつた。次で同街十二番に鯨島直哉棟領が一軒借りた。同街の十五番に一軒出来た。孰れも鹿兒島移民の合宿所の觀があつた。



（写真―第一回移民當時の聖市梁山泊 Rua Sao Paulo N. o 20）

其街の裏通りエスツダンテ街四十一番を借りて福島移民の鍋谷末次郎が合宿所を創めた。一泊板敷に寝て二百レース、一日食費五百レースであった。その後鍋谷はコンセレイロ・フルタード街五十七番の三階に移ったが、家賃不拂、九十ミル、パン代不拂九十ミルをのこしてアルゼンチン国へ逐電してしまった。コンデ・サルゼーダス街に日本移民の住み始めたのは一九一二年、第一回広島移民の山田勘一、神田寅三、須山勘一等と二家族がサンパウロ街、二〇番より轉居してからであった。その頃、坂上からみて右側には末だ、二軒の家しか建っていない風景であった。コンデ通りの下は小流があつて、藪まじりのブレジヨ（湿地）が、モーカの街の入口までつゞいた。

聖市の移民職業は、収容所よれ職についたは、鹿児島移民の鍛冶工池上仁次郎で日給五ミルレースであった。次に大工の鮫島直哉山口の沖川祐吉であった。日給五ミルレースであった。

洋服裁縫師に鹿児島島の原口貞蔵がいた。日給用ミル五百レースであつた。

家庭労働に収容所から出たのが熊本移民の島村タジユと弟の七歳少年であつた姉は月給十五ミル、弟は十ミル、七鉄は移民収容所長ドットル・フラガ宅に傭はれた。

ゾーモント耕地移民引上げ後、聖市の邦人界は賑はい出した。日本人ペンキ屋の始めは広島単独移民の間崎三三二で、日給五ミルレースであつた。サン・マルチニオ耕地鹿児島移民の単独者等が聖市に出て鮫島棟領の世話で誰れも彼もと素人大工職に就いた。此頃から玄人大工の鮫島直哉は鹿児島大工の元締棟領となつた。

耕地より聖市へ、聖市へと、日本移民の姿が増えるにつれ

て藤崎商店の後藤武夫の仕事は繁くなつた。日本への送金依頼、借家の保証人、家庭労働の周旋、迷子の移民の世話等々の外に移出会社代理人上塚の通訳として州當局と、移民収容所へよく出かけた。彼は移民初期の在聖邦人界の歴史的な一人であつた。



（写真―後藤武夫氏）

日本と珈琲の宣伝契約成る

第一回移民収容所到着と共に、三浦通訳官に伴はれた水野皇国殖民会社長は州農務局へ挨拶に行った。共際、移民契約條項の末項珈琲を日本へ宣伝の話が出で、農務局は愈實施する事となった。

農務局は毎年日本へ珈琲宣傳の爲め、三百俵を無料水野に提供する、水野は日本に於て、パウリスタ式の珈琲店を、東京、大阪、神戸、京都の四カ所に一軒づゝ開業することゝなつた。

水野は東京に於て、二年後カフェーパウリスタを實現した。政友会の内田信也が後援した。

五人通訳の通辯振り

笠戸丸移民着伯當時の、所謂五人通訳の葡語通辯振りとして 仁平高通訳は或日斯う語った「君僕等が始めて鈴木先輩の紹介で収容所に出勤した頃の事さ」ブラスの安ペンソンに五人通訳が襟を正して緊張し、日本紳士気分で、アルモサに食卓の椅子についた。

長方形の食卓の一侧に五人ズラリと並んだ。向側には白髪の老人その他伯人が坐った。コツペーロが捧げて来た湯気の立つフエジョンの深皿、平野がうけて自分の皿に一匙盛ろうとするその刹那、白髪の老人が「タ・ケンテ、タ・ケンテと頻りに叫ぶんだが―五人とも何の事やら解らぬ、皆が額を見合せてると、平野が次に坐ってる俺に、（タ・ケンテ何んだ）」と小聲でさゝやく「が俺もマゴマゴさ、東京外国語学校の西班牙語科では君「カリエンテ」とおそわって居たんだろ。エスタ・カリエンテがタ・ケンテなんだ。それさえノー・コンプレndeの通訳だったんだヨ。」

其の通訳連に縋って居た最初の日本移民の苦勞―通訳の煩悩も辛らかった。

移民会社代理人の月給

聖市に於ける第一回移民當時、皇国殖民会社伯国代理人上塚周平法学士の月給は五百ミルレースであった。水野社長帰国後は、送金絶えてしまった（明治四十二年二月頃より）愈々労働自活に出たのは明治四十二年四月からであった。當時彼の学友法学士井上新平が北米より轉向して来伯し、上塚の貧乏生活に仲間入したが、井上は船中スリに会って懷中皆無であった。そこに有川、松永、香山などの独身青年が寄合つて、玩具製造を始めた。（CARLOS GOMES No 50）の三階一室で、竹トンボ、紙風船、板返し等々を造った。販売係は松下正彦が行商した。松下はこの玩具を擔いで、聖州各市及ペルナムブコ市よりアマゾナ州マナオス市まで進出した。

松下は在伯邦人行商人の元祖であった。

皇国殖民会社の行詰り

竹村殖民商館肩かわり

第一回移民の珈琲耕地に於ける、成績は當時の日伯両官憲筋から、不良とされた。

第二回移民輸送に関し、聖州農務局は次の如き契約條件を皇国殖民会社へ押しつけた。

一、輸送人員は一年間一回六百五十人を最高限度とする。
二、十二歳以上の移民船賃は、是迄英貸十ポンド支給したが 今後は一人八ポンドとすると云うのであった。水野皇国殖民社長はこの押つけ條件に抗辯する力もなく、諾々として帰国した。一九〇八年末であつた 日本に於ける皇国殖民会社の内幕は、経済的に行詰の状態であつた。帰国後水野は東奔西走、会社の建直しを策したが、移民の耕地労働成績不良が祟つた。移民携帯金を預金（外務省へ保證金として立替分）さえ拂戻し不能も祟つた。伯国移民輸送独占の皇国殖民会社に対する他移民会社の羨望策動もあつて外務省は、第二回移民募集を皇国殖民会社へ許さなかつた。

水野は最後の策として、同郷土佐の素封家竹村興右衛門を口説くに移民事業は国土的事業として讃え上げ、聖州政府との契約権利義務一切を、竹村商館へ譲り渡した（後年竹村興右衛門は勅選貴族院議員となつた）竹村の資本に対して、外務省も承諾し、聖州政府の承認許可を得て、第二回農業家族移民は、伯国向け神戸港から出航した。

「来年は屹度、君等の後続移民を伴れて来るヨ」と莞爾して歸つた水野も、四十二年度は上塚伯国代理人宛二三度文通があつたのみであつた。「移民輸送の為辛苦奔走中」と、それを伝へきいた各耕地残留者も、在聖市日本人等も、異境の空に 民族的孤独感の憂鬱生活を續けていた。

翌年五月六日（一九一〇年）聖市サン・ベント街藤崎商店宛上塚代理人へ入電があつた。

「九百九名の移民を乗せ旅順丸五月四日神戸発つ、其地にて準備せよ」「移民船はモウ神戸を発つてゐるぞ」「移民船旅順丸が来るぞ」このニュースは、その日の内に、聖市日本人の口から耳へ放送された。各耕地の邦人へも上塚代理より直ちに通報された耕地からの返信は、孰れも、「蘇生の想ひ」で一致していた。

五、第二回移民船旅順丸来る

在聖邦人の待ちに待った。移民船旅順丸がサントス港に入つたのは六月二十八日であつた。

移民家族二四七、人員九百〇九名（男五一八、女三九二）上塚代理人は仁平高通訳を伴ふてサントス港へ出迎えた。

旅順丸には水野前皇国殖民会社長と竹村殖民商館代表山地主佐太郎が移民統率して乗っていた。

航海五十五晝夜、笠戸丸と同じコースで来航した。航海中死者なく、病患者なく、男子一名出生した。熊本移民原田林太郎妻クマヨの産んだもの、印度の南で生れたから「印南男」と命名した。

第一回移民到着後満二年経っていたその頃は、移民の誰彼も片言交りに伯語を覚え、話も出来た。生活環境にも慣れていた第一回移民より新通訳も選ばれた。新舊拾七耕地に新移民は配耕された。

旅順丸移民配耕

一、ビアード耕地

FAZENDA VEADO

ESTACAO AGUDOS L SOROCABANA

(姓 名)

新
七

二五年調査
伯

四十年調査

国
武

ツル

伯

原口

岩 吉

歸

笛田長太郎

郎

同

死

藤吉

同

同

江
藤

利
八

伯

不明

清水鶴

鶴
松

同

死

村上

フ
ジ

伯

歸

吉野勝次

郎

伯

伯

田村

富
蔵

死

同

庄次郎

同

伯

同

中
村
市
六

伯
不
明

同

柳木悦太郎

同死

同
ヒ
サ

同

同

矢野洋次郎

同
伯

同孫六

同

合計

一二家族
四四人

男 三〇 女 一四

第二、ソブレード耕地

FAZENDA SOBRADO

ESTACAO 13 de Maio L Sorocabana

福島

安齋作藏

伯
伯

同

渡邊 仁一

歸

同

長谷川栄八

死

同
栄三郎

同
不明

福島

羽
田
ウ
メ

伯
不明

同

伊藤新八

同
不明

[illegible]

Fazenda Jatahy

通訳兼監督 大野 基 尚

平江喜一

伯
伯

同
フ
ジ

伯
伯

木村清八

伯
伯

實

伯
伯

モ
ト

同
同

同 又 喜

同

同

橋本勇次郎

死

勇

伯
伯

段
村
卯
七

死

政七

伯
不
明

村上喜

伯
死

同順喜

日 死

同
ツ
モ

死

寺本源作

死

同

中

死 不
明 死 伯 同 同 同 伯 伯 伯 伯 明 明 明 明 同 同 伯 伯 明

		同										同										同										福岡									
合計		熊本一三家族		同		杉本		杉野		同		椎崎		同		同		馬見塚		同		境		境		同		池永		倉富											
男一八	九家族	男二六	達男	吉太郎	チエ	谷五郎	政喜	シカノ	敬次郎	チヨ	静夫	キセマ	ハ透	喜一	フミ	竹蔵	アキタ	音磨	タツミ	ス	吉蔵	長吉	宗三郎	イソノ	又三郎	藤大	ハル	近吉													
女一七	三五人	女二三	伯	伯	伯	死	伯	伯	伯	死	伯	伯	死	伯	不明	伯	伯	伯	死	同	伯	伯	伯	伯	死	伯	帰死														
			伯	伯	伯	伯	伯	伯	伯	不明	伯	伯	伯	同	伯	伯	伯	同	伯	死						伯															

同										同										同										同										同																				
中	同	同	同	上	同	上	同	同	上	上	同	中	同	本	田	同	小	同	同	西	上	竹	竹	同	同	上	同	同	隆	英	ヒ	末	ト	清	ヨ	伝	休	チ	袈	善	ス	田	豊	フ	秀	マ	ユ	繁	吉	ミ	才	栄	ハ	袈	善	シ	常	市	ハ	
村				村		村			村	桐	原			田	畑		湊			野	村	内	内			村			盛	治	サ	吉	シ	利	ン	次	次	カ	助	都	カ	助	志	ミ	義	ツ	リ	郎	郎	ノ	蔵	助	ル	次	衛	ナ	次	郎	郎	エ
不												不																	伯	明	帰	死	死	死	伯	死	明	同	明	伯	死	伯	明	明	伯	明	ア	死	伯	帰	帰	伯	伯	死	同	同	同	同	伯	
不												不																	不											不			死			伯			不	明	死	死	死	死	不	明	死	伯	帰	

同	下	鮫	同	田	同	同	園	同	同	下	同	奥	同	同	野	同	長	長	同	同	森	同	同	森	同	同	前	木	同	中	
	園			實			田			村		村			首		野	野			音			長			田	戸	村	村	
ス	小	島	テ	精	實	ス	盛	傳	エ	松	末	チ	栄	愛	フ	長	清	イ	市	ク	キ	次	彦	サ	之	龜	ユ	袈	ス	ユ	フ
マ	助	清	イ	助	二	へ	衛	助	ダ	志	磨	ク	助	助	ネ	助	内	ト	二	メ	ノ	郎	衛	エ	助	郎	リ	助	ヤ	キ	サ

帰	帰	死	ア	ア	伯	伯	伯	伯	伯	伯	伯	死	伯	伯	死	伯	伯	帰	伯	同	同	伯	伯	伯	死	同	同	伯	伯	伯	死
					死	死		伯	帰	伯	伯		伯	伯	帰				不	不	不		不			同	伯	不	不		
																			伯	明	明	明	伯	明			同	伯	明	明	

長崎		同		長崎
同	下	同	同	淵
田	田	平	同	清
ミ	兵	謙	ケ	ト
ツ	一	治	サ	キ
	不	同	死	伯
同	伯	明	死	死
	不			
同	明			

第六、サン・フランシスコ耕地
 Fazenda Sao Francisco
 Estacao Campos Sales L Paulista

	合計	同	同	同	熊本	富山	富山
熊本	富山	中	同	同	吉	同	同
一	三	村			田		内
家	家	末	ハ	ツ	太	勘	ノ
族	族	熊	マ	ル	吉	祐	助
4	一		エ				エ
男	〇						
人	人						
5							
		伯	伯	伯	伯	伯	伯
						死	伯
		伯	伯	伯	伯		死
							伯

同	同	同	同	同
同	扇	同	同	同
浦	浦	ア	ミ	ヨ
謙	祐	三	ツ	ヨ
三	三			ミ
伯	伯	同	同	同
		不	不	不
伯	伯	明	明	明

同

同 同

庄衛
テイ
良三郎、

伯 同 同
不 同 同

同 同

本石

治三郎 ジエ

死 同

同

同

□

仁四郎

伯死

同

岡

金太郎

伯
不
明

合計

長崎

六家族

三
人

男
一
二
女
一
一

第七、グアタハラ耕地

Fazenda Guatapara
Estacao Guatapara L Paulista

総監督

平野

運
平

岡山

安
部

鐵治

死

同

林

静
太

死

同

散次

同

同

同 同 同 岡山 同

谷同石同同井同同同保同同同同同林火同同同同河同同同同藤山同同同同藤荒同美
口井上崎口崎本下原木澤

薬セ五兼コ廷八俊由文ま秋新志傳義鉄ア太順栄秋ヒ佐利久武モ嘉静ス無
順キ郎エ二興治幾治み野一逸吉男郎ノ汁郎子ナ郎治子郎ミ郎夫ナ逸

殺 不
伯伯死同同伯伯明同同帰同同同同同同伯伯帰同同死死同同伯伯帰伯伯同伯伯帰伯伯帰

不
伯伯明同同伯伯同同同同同死同伯伯同同同伯伯死伯伯同帰伯

同

同

同

同

同

同

實榮湯

岡 天

中

難

難 高 中 中

盛山本

崎 澤

村

波

波原 務村

欠

健一代 無羅女 登喜 為犬 サクヨ 千年 彌吉 伊予野 寛治 新野 左喜野 一郎 岸太郎 豊子

才次郎 竹太郎 未乃 半三部 梅太郎 もよ 元造 定女 順次郎 もみよ 實三 寿三郎 春野 弾操

伯伯

死伯伯伯伯伯伯伯伯死死死死歸伯伯

伯伯伯伯伯伯歸死歸伯伯伯伯明歸死伯

不

不

伯伯死死伯伯死明

不

伯伯死死明

伯死伯

	同									同	高知			同	同	同												
加	倉久	吉弘								伊渡	阿			山	山	田												
納	田保	本田								藤邊	部			本	田	村												
千賀恵	一三郎	乙猪	玉正	助時	秀吾	玉尾	喜意	寅美	熊八	豊稔	満政	幸衛	利太	金治	伊佐美	尾喜野	長次郎	五郎	封美恵	玉實	美喜代	佐太郎	孝士	彌登	善十郎	ともと	さ	熊太郎

不

同	伯	伯	死	同	同	帰	帰	帰	ア	伯	伯	死	伯	伯	伯	死	明	伯	伯	伯	死	同	伯	伯	伯	伯	死	伯	同	伯	伯
同	伯									伯	伯	死	死	死			伯	死	死		死	伯	帰	死	伯		死	同	伯	死	

同	同	高知	同		同		同	
筒	岡	織	岡	三	森	松	柿	片
井	本	田	本	谷	田	岡	内	岡
鶴伴寛千頼龍春	安高系佐駒久正省小蔵二景津彌盛	直寿千元	興二照					
江次寿類江郎義藤馬義寿郎恵尾幸憲時吉男国留作政久吉栄花代溜茂三意								
同死同伯死伯伯同死伯明帰同同伯同死伯死死死死了同伯伯帰同同死同同								
	伯						伯伯	同同

[illegible]

[illegible]

菊シ
松カ

同同
死同

岡山 三〇家族 一一五人

男 六二 女 五二

高知 二〇家族 七七人

男 四 女 三

二家族
四一人

右之中六人は他耕地に送られしも人名不明。

第八、コツケイラ耕地

Fazenda Coqueira

Estacao Pantaleao — L Paulista

長野 柄澤 幸之助 伯 伯

ト
ミ
同
同

初之助 死

登治伯伯

勝之助 同 同

ミツ
同
同

同 鈴木長治 同 不明

マ
キ
伯
同

幸雄 同 同

テイ死

彌市死

ミジュ 伯

正
同
死

マ
ル
死
死

源　イリ
三　競　チ　キ
同　同　伯　死
死　伯　帰

女四

熊本	千葉
一家族	一家族
六	五
男二	男三
女四	女二

Fazenda Sao Joaquim
Estacao . Sao Joaquim L Noroeste

伯
不明

伯 歸
伯

伯同
伯死

伯伯
死伯伯

伯
伯

死

不明伯

同

藤

永

同同同 同 死 死 伯伯 不明 伯伯死伯伯伯伯

同 同

児 芹
島 川

寅 雄 伯
チ エ 伯
貞 雄 伯
松 太 郎 伯
ト ジ ュ 伯
勝 同 伯
鶴 彦 同
古 庄 同
小 田 伯
喜 太 郎 伯

同 同

上 野

順 吉 伯
ヨ シ ネ 伯
チ ヨ 伯
ト ジ ュ 伯
喜 太 郎 伯
鶴 彦 伯
同 伯
同 伯
同 伯
同 伯
同 伯

同

中 牟 田

ト キ 伯
ワ イ 伯
ミ ツ エ 伯
死 伯
不 明 伯
不 明 伯
不 明 伯
不 明 伯
不 明 伯
不 明 伯

同

合 計

熊 本 一 八 家 族 六 五

男 四 〇 女 二 五

第十、ボア・ビスタ耕地

Fazenda Boa Vista
Estacao Cordeiro Linha Paulista

通 訊 鎌 田 信 一 郎 死

熊 本

芹 口

チ ト 勝

伯 伯
伯 伯

同	同	同	同							同	同					同	同	同													
江	後	古	原							佐	原					光	今	原													
藤	藤	澤								藤	田					永	村	用													
輝	チ	ッ	永	吉	シ	国	勇	ヒ	一	四	ノ	貞	ツ	貞	イ	貞	印	ク	タ	林	袈	幸	フ		カ	半	清	ト	直	胤	貞
	ヨ	ワ	月	継	ヲ	彦		サ	義	郎	チ	則	ユ	次	ネ	清	南	ニ	マ	太	裳	人	イ		チ	次	伯	ヨ	彦	継	光
				不																											
伯	伯	伯	伯	明	伯	死	死	伯	伯	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	死	同	伯	伯	伯	伯	伯		死	死	伯	死	死	死	伯
不	不																														
明	明	帰	死	帰				伯	死	伯								伯	伯	伯	死	死	死			伯					伯

[illegible]

合計	同	同	同	同	同	同	同	同	同																		
熊本	中	中	中	山	山	矢	西	内	大	木																	
一三	村	野	野	田	田	野	元	田	加	下																	
男二五	源	ヒ	豊	衛	六	ナ	武	義	シ	マ	龜	ア	タ	午	芳	チ	芳	カ	ユ	ツ	友	義	ム	宇	荒	キ	新
四	次	サ	馬		郎	ツ	十	正	ジ	サ	太	キ	マ	郎	清	ヨ	熊	ミ	エ	ミ	吉	信	メ	一	熊	ミ	次
五																											郎
女二〇	伯	伯	伯	死	伯	伯	伯	伯	伯	伯	伯	死	伯	伯	死	伯	歸	歸	歸	歸	ア	ア	ア	伯	伯	伯	
	伯	不	不		伯	伯	伯	死	死	伯	死	死		死	死		伯						不	伯	伯		
		明	明																				明				

Fazenda Sao Joaquim Ribeiro
Estacao Santa Candida

Fazenda Sao Joaquim Ribeiro

伯

不明

伯

伯

伯

伯

伯

不明

不明

不明

六 不明

不明

八

男
一六

第十三、サンタ・カンヂダ耕地

Fazenda Santa Candida

Estacao Visconde Pinhal L Paulista

通訳 鞍谷伴三郎

佐賀 藤家 幸一 不明

同 池田 喜作 死

同 池田 吉太郎 死

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

同 貝原 儀一 保太郎 伯 帰

ア

[illegible]

Fazenda CELULA
Est Nova Europa L Douradense

[illegible]

第十五、サンタ・マリーナ 耕地
アラクアミリン耕地
サン・ペドロ耕地

右三耕地に配耕されたは広島移民廿二家族、

サンタ・マリーナ耕地に二二人、

アラクアミリン耕地に四五人、

サン・ペドロ耕地に一〇人とは判明せるも、何の家族が何の
耕地へ配耕されたか、海興の移民部にも領事館方面にも史實
の確かなるものなし。

広島 藤坂 常平 不明

桐島 信一 不明

福田 亭 不明

亮 不明

栄吉 不明

マツ 死

イマヨ 不明

吾三郎 不明

太郎 不明

太力 不明

薫 不明

シナヨ 不明

太郎 不明

徳之進 不明

川本 不明

川崎 不明

同 不明

同 不明

同 不明

同 不明

同 不明

同 不明

同 不明

同 不明

同 不明

死

[illegible]

[illegible]

第二回移民の配耕の際、通訳として新たに選ばれた第一回移民は鞍谷伴三郎、鎌田信一郎であった。鹽川伊四郎はアルゼンチン国より渡伯せるスペイン語喋るインテリ青年であつた。

その頃聖市の日本人生活費は、サン・パウロ街十五番の鮫島直哉宅で鈴木季造青年（鈴木南樹の弟抱春）は、月ぎめ食料宿賃十八ミル拂つて居た。洗濯までして呉れた。

一日二食五百レース、トマ・カフェ二回で百レースが普通値であつた。中央市街の労働者食堂で一皿盛がポンつき五百レースで喰はせた。

六、ジャタイ耕地紛争事件

モヂアナ線ジャタイ耕地主フレデリツコは馬車曳から身を起し、中年後には當方面相當の珈琲主となつた人物であつた。彼に一人娘があつた。彼女の夫となつたのが、當時農務長官の次男坊ドトルであつた。

その情實から、耕地としては小石の磊々たる地帯でコロノ泣かせの珈琲耕地であつたが、其歳の珈琲結實も豊穰なので、移民を試験台にさるゝとは知りながら傭はるゝまゝに甘一家族配耕した。耕地は凸然と孤立する山の麓から山頂にかけて展開していた。黒いマサツペ地質帯も多かつたので米もよく出来た。

日本移民入耕當時の総監督はイタリ人であつた。イタリ・コロノと、日本コロノとのカフェ採取畑は毎度別々であつた。イタリ・コロノの採取畑は、日本コロノの採取畑よりカフェーが毎度よくなつていた。総監督が依估最負すると、コロノも通訳も常に不平を抱いていた。此総監督の縁者がお隣耕地の雜貨穀店経営者であつた。ジャタイ耕地のアルマゼン経営者は耕主の縁者であつた。コロノの買ふ必需品の値は、お隣耕地のアルマゼンのが何んでも安値であつた。日本コロノはお隣耕地より何んでも買うようになった。耕主もアルマゼン主も日本移民に面白くなかつた。

総監督がカフェ採取畑で日本コロノ、イタリ・コロノと區別する依估の不平を漏らすと知つたジャタイ耕地のアルマゼン主等は、日本移民の單純性を利用して、総監督の排斥をやる様煽動した。大野通訳が総監督対日本移民対アルマゼンと

の仲間に挟って苦勞し始めた。

日本移民の間作畑へ耕地牛群が柵を破って侵入し、尺餘にのびていた稲を刈った様に一夜の中に喰ひ荒した。十月末のことであつた。総監督と天野通訳とは實地検証した。茲に收穫予想の計算の上に差があり、総監督と通訳の感情の隔りが甚しくなつた。

耕地、アルマゼン主へ総監督排斥のいい種を興へ、「総監督ノーン・プレスタ」となり、耕主は、耕地取締不行とゞきの故を以って総監督を誅にした。

牛群喰荒稲の損害は耕地より賠償することゝなつた。各家族は捨俵づゝも收穫高ありと予算していた稲畑であつたが、各コロノ家族に白米半俵づゝといふのであつた。泣き寝入りするより外なかつた。

熊本移民の田中喜一郎と、福岡移民の椎崎透の二家族は耕地への負債を所持金で支拂ひ、出耕罰金も拂つて退耕した。彼等はハワイ移民くずれの男であつた。それが残留移民に興へた印象は―嚴重な耕地契約規則も金さえあれば買えるのだ―であつた。

コロニア裏の共同水道の鉄管の故障で給水が中絶した。幾度か大野監督より耕地に修繕を請求哀願しても、アマニヤンで埒があかなかつた。折も雨期でコロノ家族は遠方よりの水汲み運搬に苦勞した。

大野通訳は央々として面白からず、辭職して退耕した。

除草期であつた。移民は受持珈琲畑に鋤をかついでは出かけるが、コロノ泣かせの石山畑は除草一向にはかどらぬ。言葉は通ぜぬ、環境には慣れぬ、仕事に能率はあがらぬ、耕主の請求により第二の通訳が来耕した。香山六郎であつた。以後日本移民は総監督配下でなく、通訳監督を経て新主に直属支配をうけるとなつたが、日本移民の間には、他耕地へ轉耕派と現状維持派とに分裂していた。香山通訳は、此二派を常にもましている煽動者を発見した。彼は耕主の許可を得て三家族の煽動者を無通告即時退耕を決行した。斯くて日本コロ

ニアの一時小康を得ていた。

二月も末の畑に、蒔いた豆の熟する頃であつた。新フェジョンの出ばな、一俵二十八ミル台で耕地のアルマゼンに入るゝと振れ廻った。その値で日本移民は商談きめたものもあつたがそれはアルマゼンに是迄の負債の支拂に入れたものであつた。

隣耕地のアルマゼンは、前監督を先頭に―俺の店では一俵三十二ミル支拂ふ、しかも現金支拂ひだ」と宣伝した。耕地のアルマゼンに新豆の売手がなく、隣のアルマゼンへと豆は運ばれた。耕地のアルマゼンでは恨み出した。「日本人は豆を売り、現金握つて屹度逃亡するんだ」と、ふれ廻った。

通訳香山は耕主に向つて「日本人は逃げはしない」と辨明してしたが、或日トロールで五十キロ餘の遠いガタパラ耕地からその総監督平野運平が香山に対する友情関係でジャタイ耕地に來訪した。耕主及アルマゼン側では「それみる、グアタパラ耕地から移民誘拐に來てるぞ」と猜疑してしまつた。

豆收穫の経る頃には、日本人コロニアの周圍に三三五五毎夜夜廻りの、逃亡見張番がついていた。

暑い二月末の夕暮、コロニアに熊本移民の松原市郎が半裸で吾家の前に涼んでいた折り、インシヤード、フォイシー、鉄砲マッシヤード擔いだ道修繕のカマラーダ一組二十名ばかりが通りかゝつた。半裸の日本人コロノをみて戯談にフォイシを振り上げ切る眞似をした。瞬間、松原は戯談と解せず「ギャツ」と真剣な悲鳴を上げた。次の瞬間、松原の短氣と小膽が怒氣心頭に達し「殺ろすなら殺せ」と家の軒にあつた棍棒を取上げて抗争し始めた。カマラーダの一行は笑ひが消え、全く青くなつて皆えものを身構えた。他の日本人も何事かと隣近邊から飛出して集つた。皆が大聲を上げて怒鳴合つた。

その騒然たる景を、百メートルばかり離れた耕主宅からな

がめた老耕主は、是又大聲を上げて附近の人々を呼び、二三十名一団となり、耕主は先頭に、両手に短銃を構えて現場へ押しよせた。香山通訳は耕主等の押寄せる大道に大手を拡げて呼んだ「コイザ アトア、シニオル レチーラ ジエン テス ツード」

激昂していた耕主は通訳に向つて短銃を凝したが―それなり、クルリと後に向い「コイザ・アトア」とカマラダ連中を彼方へ引上げた。

通訳の聲に、日本人も各々家の内へ引こんだ。

この幕はこれで経つたが、次の結末は喜劇でなかつた。日本移民は翌日から、もう此耕地で一日も働かぬと旋毛を曲げて団結してしまった。耕主側も「ジャボネース。デスグラ サード」と叫び出した。雨は降る。珈琲畑の草はのびる。大草にまけて珈琲の葉は黄なみ出した。耕主の感情は益々ユウウツから憤怒へ……。

香山は、上塚移民会社代理人を聖市から招電して善後策を講じたが、きゝめがない。香山はペトロローポリスの公使館宛「上塚来り解決盡力すれど移民紛擾やまず、解決に御来援を乞ふ」と打電した。一日後の返電に「聖市より上塚を呼び解決せよ」とあつた。香山通訳は短気であつた。又公使宛打電した。「上電の己に耕地にあるを報ぜるに尚上塚を呼べとは何事ぞ、御返電を待つ」公使館よりの返電は「電文読みあやまる。その地にて極力慰撫解決せよ」。

翌朝、耕主及アルマゼン主と協議の上、移民の耕地勘定は不支拂で、耕地より移民総引揚げ、移民のアルマゼン負債は移民会社が期限附きにて支拂を保証す：耕主もアルマゼン主も承諾した。其翌日、移民は各自の費用で耕地を退去し、サン・パウロ市へ―四十四年三月二日の事であつた。

熊本の移民大工段村卯七一家族四人は、耕主新家屋日本式長廊を建ていたので、耕主の請ひにより耕地に留まつた。日給五ミルレス、日本大工の腕の冴えに見惚れていた。小ながら日本文化の進出であつた。

斯時香山通訳が公使館宛打電した文句がヒドク祟つて、事件は公使館より外務省へ報告された。明治四十三年・竹村殖民商館並に東洋移民会社と、サン・パウロ州政府との間に毎年千五百名人国許可された移民契約も、四十四年度は外務省が許可せなかつた。殖民企業家青柳郁太郎から「殖民政策の上から移民輸出見合せられたし」の電報を外務省へ上申したも、外務省を移民輸出不許可にさした原因の一つであつた。

ジャタイ紛争は、日本初期移民と初期通訳と初期移民会社代理人とが、珈琲耕地の環境に不慣と言語不慣から起つた滑稽劇であり、耕主側は日本移民取扱不慣と搾取劇との二重奏であつた。

七、第一回と第二回移民（その耕地在留比較）

第二回移民の耕地契約成績を、其上陸配耕月より翌年三月末迄を調査すると、第一回移民のそれと較べて良成績を現はしていた。

茲に當時の記録を対照しておく。これは上塚移民会社代理人の粉飾なき常時の實相報告であつた。

▼一九〇八年七月第一回移民配耕後同年末迄に於ける耕地在留者数

（配 耕 地 名）		（入耕人員）	（在留人員）
グアタパラ	耕地	八七	四〇
ソローレス	耕地	一八三	五二
カナーン	耕地	一四〇	一二四
サン・マルチニヨ	耕地	一〇四	七一

ソブラード	耕地	五〇	四五
サン・ジョアキン	耕地	二七	二七
ビアード	耕地	四七	四七
合計	七八三名中、		

退耕者 三七七名 耕地在留者 四〇六名

▼一九一〇年七月第二回移民配耕後、翌年三月中旬迄の耕地在留者数

(耕地名)	(入耕人員)	(在留人員)
グアタパラ耕地	二三二	二二五
サン・マルチニオ耕地	一〇八	五五
ソブラード耕地	六八	五一
サン・ジョアキン耕地	六五	六一
ビアード耕地	四四	三七
ボア・ビスタ耕地	三九	三八
サンタ・マリナ耕地	四五	四七
グアリローバ耕地	一四	一四
サン・ジョアキン・リベロ耕地	二四	一九
セルラ耕地	一九	一七
サンタ・カンデーダ耕地	五二	三四
アラクアミリン耕地	三一	三一
サン・ペードロ耕地	一四	一四
ジャタイ耕地	八四	一三
コツケーロ耕地	二一	一一
サン・フランシスコ耕地	二三	一一
合計	九〇三名	
退耕者	二三五名	
耕地在留者	六六八名	

第三回鉄道工夫

マット・グロッソ州へ

日本からアルゼンチナ国の伊藤農学博士の農場へ渡航した二人の青年学徒が、同農場へ留まり得ず第二回移民船旅順丸がサントス港に着いた一兩日前、来伯した。塩川伊三郎、藤田克己であった。此青年と聖市の独身青年とがコンビで生活戦線開拓のノロエステ線鉄道工夫組を組織し旅立った。一九一〇年九月のことであった。當時工事はイタプーラ駅を突破し、已に聖州とマット・グロッソ州境のジュピア駅近くに軌道をすゝめていた。一行は七名であった。

組長小野寺謙助（一九一〇年彼は北米カリフォルニアより轉伯した四十男）、高桑治平、藤田克己、三宅栄次郎、岩本介三郎、佐藤市四郎及妻サンと幼児一人。日給五ミルレーズ、彼等先達の後から独身青年が二十餘名出発した。翌年三月ジャタイ耕地退去の独身青年十三名も出かけた。

日本人の工夫労働振り仕事に敏捷で、陰陽なく働らき、西、葡、伊、伯人工夫の四倍も五倍も能率を上げた。鉄道敷設請負部では大満足で信用した。

スノロエステ鉄道工事は、東西の起点より起工された。マット・グロッソ州のポルトエス・ペランサより東方に向つて大パンパを横断軌道を敷いて東漸する。この工夫団には亜国より流れて来た邦人やペルー、ボリビア方面から。パラグア共和国を経て伯国に流込んだ邦人一行もあった。東方の起点より西漸する聖州よりマ州に入った工夫団一行とが今のカンポ・グランデ市附近で二工事団が連絡した。その沖繩工夫連が鉄道工夫の足を洗い農業開拓に精進し出したのがカンポ・グランデ市であった。

聖州側よりマット・グロッソ州に入り、トレス・ラゴアスの工夫屯所で熱病に斃れた広島移民亀崎卯市の墓は、マット・グロッソ州に於ける邦人移民最初の墓であった。日本移民工夫一同は同僚の棺を擔ぎ、野の草花を折って土饅頭に投

げ、墓上を花でうすめた。

宣伝用珈琲を日本へ アマゾン天然ゴムも

一九一一年（明治四十四年）三月、東京にカフェー・パウリスタ開店につき、水野宛。パウリスタ・カフェ百三十俵を宣伝用として、當聖州農務局より発送した。

當時アマゾン天然ゴムを日本へ送り、加工企業化有望とされ竹村殖民代理店より聖州統領ロドリゲス・アルベスに乞ひ、宣伝用として僅かであつたが、原料ゴムを日本向け発送した。日本に於てブラジルゴム会社の設立は實現せなんだ。

八、東洋移民会社の進出

杉村公使の「サン・パウロ州移民状況視察復命書」に基づき、皇国殖民会社社長水野が、聖州政府と家族移民の耕地就働契約を結んだと聞き傳へた日本の各移民会社は、笠戸丸出航迄は、又「土佐丸移民の二ノ舞」を演ずる輸送中止を喰ふのではないかと、「伯国移民はネ」と糞扱ひしていた。ところが移民船笠戸丸が愈々神戸港を出帆となるや、俄然我が移民民界は狼狽緊張した。

一九〇八年七月、笠戸丸サントス港着直後東洋移民合資会社は神谷忠雄を、聖州に急派していた。

東洋移民会社の前身たる吉佐移民会社と土佐丸事件で物別れしていた聖州のプラドー・ジオルドン商会の縁故、アンツネス・ドス・サントス会社をたどり、又リオ首府のマルシャル・サンツ・デ・エロツ系の縁故を、豊島昌（東洋移民会社伯国代理人になった）が動かして聖州當局に泣を入れた結果、一九一〇年（明治四十三年）十一月、聖州政府と、東洋移民会社代理人豊島昌との間に、移民輸送の契約が署名され

た。この契約の内容は、竹村殖民商館のと同一であつた。一九一一年（明治四十四年）度、此来移殖民会社の移民取扱は、外務省が許可罷り成らぬとあつたは前述の如くであつた。

殖民企業の青柳と、駐伯日本公使館お留守居役との間には「移民ツて厄介なものさ」の一脈相通するものがあつたとは、後年浜口光雄バウル領事の告白する處であつた。

そこで日本移民の渡伯許可は、翌一九一二年明治四十五年に持ち越されてしまった。

耕地に居据らぬ沖繩、鹿児島両縣移民は、募集差控える條件つきにて、両移民会社に移民募集を許したのは一九一二年の一月であつた。団結しての契約無視出耕と、習慣の異いも理由に沖繩移民に対しては、外務省も一時送出禁止の態度に出たが、在聖沖繩移民先覚者が球陽協会を組織して工策し、後にこの禁止を撤廃させた。

イグアツペ殖民地

開設の契約成る

一九〇九年（明治期十二年）破産に直面した皇国殖民会社長水野が、郷里高知に、竹村興右衛門を訪ひ、移殖民事業は国家的事業だ、国土のやるべき仕事だとく説いていた頃、聖州には青柳郁太郎が頬冠りして現はれていた。

彼が如何なる目的で来聖したか、藤崎商会の後藤武夫へも、上塚皇国殖民会社の代理人にも漏らさなかつた。従つて一般移民間に協調援助も求めず、高踏的態度ではなく、コンソと仕事を進捗させていた。官僚式の男、青柳の出没は、在聖市邦人に一種の不快な印象を興えていた。

青柳のこの頬冠主義を、微かながら突きとめたのは、當時移民収容所の書記にやとわれていた移民の草分け鈴木貞次郎であつた。

青柳は殖民局に現はれて土地を探しているとさぐり出した。

その後青柳は鈴木に斯う漏らした、

「僕の仕事は日本に確かな筋の――それも尊い歴々のお方々の御後援があるんで君」

青柳がイグアツペ地方へ、又はノロエステ線トレド・ピサ駅奥地へ、土地視察へ出かけ、頼冠主義をし得なくなつたのは、来聖後約半歳、竹村第一回移民の到着した頃からであつた。

一九一一年（明治四十四）年十二月廿九日、東京シンヂケートと、聖州政府間に、南西海岸地帯イグアツペ郡内へ、日本殖民地設立の特許が署名された。青柳の代表する東京シンヂゲートには、常時日本の軍閥長老桂太郎がいた、官僚の巨頭政友派大浦兼武がいた、實業界の元老渋澤栄一がいた、企業界の雄中野武蔵、近藤廉平等々がいた。

同殖民地がサンパウロ州の海岸地帯に面している丈けでなく州政府の土地無償拂下げた當局の責任上、州政府は、毎年七月州議会の開院式に於て州統領は教書中に、レヂストロ日本殖民地の一項目を報告したものであつたが、一九三二年の伯国革命政府成立後は、それも過去の記録となつた。

東京シンヂゲートは代表者青柳がイグアツペ殖民地帯無償拂下の契約を土産にして帰国するや、伯刺西爾拓殖会社と組織換えをした。資本金百萬元であつた。



（青柳郁太郎―写真）

竹村第二回

移民の来伯

東洋第一回

一九一一年（明治四十四年）は外務省の日本移民渡伯許可なく越年したが、翌年早々に移民募集が許可された。第二回旅順丸移民の耕地就働成績が第一回のそれより相当良成績と報告されたからでもあった。

茲に東洋移民会社は多年の宿望成って、伯国に日本移民を送ることになった。珈琲採取期の初め迄に移民を送りたいと、両会社とも、内地では募集競争をやり両社の輸送した移民家族及輸送船は左の如くであった。

竹村殖民商館第二回取扱家族数

三六七家族 人員 一、四三二人 厳島丸

東洋移民合資会社第一回取扱家族数

三五七家族 人員 一、四一九人 神奈川丸

移民募集認可に際し、外務省は両移殖民会社に対し、募集條件として左の如き提案をした。

一、移民は農業に慣れたものに限る。

二、家族構成に注意し、着伯後家族の離散を防げ。

三、取扱上の厳正を期すること。即ち規定以外の金銭の收受又は宣伝の誇張をせぬ事。

四、移民到着前配耕上充分の準備をなし、移民の増進に遺憾なきよう、之が為めには在伯業務代理人は、日本移民を受け受する耕主と予め充分の協定を遂げ、その内容は大小、在伯官憲に報告してその了解を得る事。

在伯日本官憲はその内容を次の如く指定して来た

イ、耕地コロニアに便所なき處は新設させること。

ロ、移民の寢室卓椅子等に要する板は充分に供給させる

事。

ハ、コロニアに飲料水水道の設備をさせること

ニ、病患に対し医師の診察を容易ならしむること。
等々であつた。

五、沖縄鹿児島両縣移民の募集は成る可く避けるを可とする。

六、着伯の遅れは、珈琲採取に面白からざる結果を生ずるので、遅くとも採取の始まる五月までには移民サントス港へ到着せしめること。

以上の提示が公使館を通じて、在伯両移民会社の業務代理人に達した、竹村、東洋両社の業務代理人は通訳十餘名を舊移民中よりえらび、配耕すべき耕地を各自に予め視察させた、竹村殖民側の耕地名及通訳は左の如くであつた。

耕地名	通訳姓名
サンタ・テレザ	鞍谷伴三郎
サンタ・マリア	宮本久記
パウ・ダ・ア・リオ	鈴木木季造
サン・ル・キス	金子保三郎
サン・タル・ジ・ア	岸本次男
カナ・リ・ン	間崎三三一
サンタ・リツタ	村崎豊重
シ・ミ・ツ	小野寺謙助
サン・マル・チニヨ	鎌田信一郎
バイ・シ・ヤ・ド・ン	佐方傳八
サンタ・ア・メリヤ	中村其
レス・チ・ン・ガ	原山口崎藏
サンタ・オリ・ン・ピア	香山六郎

東洋移民会社は最初の移民配耕のことゝて、竹村会社にし何かに不便と不案内であつた。在留移民より通訳採用も竹

村側の人選後であつたために困難を感じた。當時の通訳名も耕地名も記録に留めているものが見當らぬ。通訳としては左の人々が撰ばれた。

東野音市、東定八、神俣為蔵、金子小三郎、河野某、宮田稔、林為次、今村広、加納一意、岡村重春、井上春吉。

この外二、三姓名漏れあるも判明しない。

當時、耕地で多少の紛擾が続出した。東洋移民会社の配耕々地は、

レオポルド耕地、パウ・ダ・アーリヨ耕地、ノツサ・セニオラ、デ・コンセツソン耕地、サンタ・マリナ耕地、ビラチニンガ耕地、イタオカ耕地、ククキー耕地、パルメイラス耕地、バレイラ耕地、ピメンタ耕地、サンタ・アンナ耕地、サンタ・デ・ウロセ耕地、グアラシャールバ耕地、サン・ペドロ・デ・パライズ耕地等であつた。尚グアタパラ耕地行移民は、是迄竹村移民であつたが、東洋移民に譲つた。

コロニアの便所新設問題

日本移民会社から日本移民を配排する耕地へは、コロノ用便所を新設して呉れと要求した時、耕主連は眼を丸くしていた、聖州何處の珈琲耕地に行つてもコロノ用便所はない時代であつた、當時文化の設備（レストラン、或はホテル、撞球場等）あるとされた大グアタパラ耕地もサン・マルチニヨ耕地にもコロノ便所はなかつた。

日本移民会社の請求により、二十五家族、百二十三人移民に対し二ヶ所の便所を新設した耕地や、十家族に一箇宛の新設便所が耕地に建てられた。

日本の外務省は移民に対し仲々文化的な思いやりはあつたがその年だけの請求で終つた。由来コロニアには便所は日本移民のいないにかゝわらず、未だに発達せない。移民配耕後両社とも幾多の耕地紛擾事件はあつた。

サンタ・ルジア耕地の移民は近隣耕地の採取好望耕地へと轉耕した、サン・ルイス耕地では、結實多い畑を、イタリー移民へ、少い畑を日本移民に採取させた総監督の不公平から、日伊移民の間に抗争を起し、通訳の誤訳からイタリー移民の短銃発射となり問題は益々紛擾し、耕主は遂に警察沙汰とまで発展させ、リベロン・プレート市より警兵の出動、日本移民五家族退耕で一段落した事件もあった。

東洋移民会社取扱の沖縄、鹿児島移民等は、縣人団結して、無理押しの出耕を企てるのも二三あった。これはサントス市、サン・パウロ市の市街生活先輩移民の誘惑が相當あつたにも因るが、要するに早く楽な仕事にありついて、多く「モウケ」たいのであった。

翌年より両移民会社とも鹿児島、沖縄両縣移民募集は手控えた。

上 塚 周 平 の 帰 国

第一回笠戸丸移民と同航し、移民と共に言語不通、環境不慣れの生活をしていた皇国殖民会社伯国業務代理人上塚周平は、皇国殖民の事業が竹村殖民商館に譲られた際、竹村殖民商館の業務代理人となっていた。

竹村殖民の第三回移民船雲海丸がサントス入港移民の配耕終るや殖民商社本部より招還された、一九一三年（大正二年）十一月八日聖市発、欧州シベリヤ経由で帰国した。在伯勤務六年であった、彼は帰国後竹村殖民商館をやめた。上塚は幾多移民会社の営業不統一は日本移民の海外発展上障害ありとし、是を国家的に統一組織化せんと劃策し、時の政界新人後藤新平へ献策したが不成、一時東都の浅草区に流浪生活していたが、在伯の有志と連絡を計って殖良事業へと轉向、知人資本家菊池恵次郎の援助を待て一九一七年（大正六年）八月再渡伯した。

竹村第二回巖丸移民、東洋第一回神奈川丸移民来航後三ヶ

月、明治時代は終わって、大正時代となった、是等移民は浪華節崩れの「ササヤ節」を先輩舊移民に土産として伝へた。笠戸丸のラッパ節、旅順丸のナツチヨラン節が衰へて珈琲耕地の流行唄はササヤ節時代となった。

一九一三（大正二）年三月、竹村殖民扱ひの第二雲海丸移民と、東洋移民扱ひの若狭丸移尺とが来たのは、同年五月であつた。

両船とも千五百名以上の移民を積んでいた。同年八月には又竹村移民の第四回船帝国丸が二千名近く移民を届けた。東洋移民も第三回船として又若狭で二千名近く移民をとどけた。

同年八月十八日には欧州航路で一〇七名がミナス州金山坑夫独身移民としてリオ首府港に入っていた。

翌年一九一四（大正三）年五月、竹村殖民扱ひ四〇八家族が帝国丸で、東洋移民扱ひ四一二家族若狭丸で、サントス港に到着した。

移民輸送振も多少板につき出した。移民の珈琲耕地就働振も順調と、日本人側には臆負目に見做された。そこえ、移民船賃の州政府補助中止問題が起きた。

日本移民の不評判と

州政府の補助金中止

一九一四（大正三年）三月の日本移民輸送終るや、聖州農務長官ドットル・パウロ・デ・モラエス・バーロスは、竹村、東洋両移民会社との契約第四條を摘要し、日本移民に下附した州補助金を中止する旨を通告した。

移民輸送契約第四條全文を左に参照する。

政府並に契約者は最近の誘入に係る移民がサントス港到着の日から二カ月以内に、其旨を通告して契約を破棄するの権利を有する事。

當時州政府の日本移民に下附した補助金なるものは、十二歳以上 九ポンドー七歳以上十二歳迄四ポンドー〇志ー七歳以下三歳迄二ポンド五志ー三歳以下補助金無し

右の補助金も日本移民は耕地を移動し易いに因り、九ポンド組は二ポンドー四ポンドー〇志組以下は半額宛、耕地を移動せぬ様保證金として一ケ年間移民会社へ支拂を、政府が保管するといふことになっていたのであった。政府のこの措置は日本移民の耕地轉々移動を矯めるには、何等効がなかった。

一面に於てはこれが既に政府の補助金全部下附中止の前程であつた。當時移民は斯んな意気でいた

「移民会社には氣の毒だが、悪い耕地におれるかい、渡航費補助金位は、いゝ耕地で働らけば、すぐモウカルんだヨ」

耕地環境の習熟から、移民は賢くなつていたのであった。

資金薄き企業の移民会社は、この補助金中止は全く痛手であつた、

聖州政府のこの措置は契約條文に基いているので、異議は申立てられない、移民が自費で渡伯した場合、欧州移民同様、後に船賃を還付するか、移民収容所の使用も移民内地輸送費の州支辨も、政府で考慮するかと、竹村東洋両移民会社業務代理人から書面で、州農務長官に問合せた處、回答は「自費渡伯する自由移民に、後日船賃を還付する州移民法中の規定は、欧州移民を目棟としたものから、日本移民に適用は出来ない、日本移民には特別法を設けたから」であつた。

これは日本移民に対する差別待遇だ、當時の駐伯日本公使畑良太郎は、州當局に斯かる誤れる見解を是正するため、直ちに非公式交渉を始めた。

（最初日本移民を入れる際の特別法には、日本官憲は頼被りしていた）

一九一四年―

日本移民差別待遇阻止

聖州政府農務局の日本移民への補助船賃下附中止に対し、両移民民会社代理人は、これが対策として渡航費自辨の移民誘人を劃策し、畑公使の意見を求めた。

畑公使は、口頭で耕主及當局の意向を、篤と確かむるは、いゝが、文書ではやるなど注意したが、両移民民会社代理人は文書を以て聖州農務長官ドットル・パウロ・ヂ・モラエス・バーロス宛左の質問書を提出した。

一、州政府は両移民民会社に対し、官命（第二章二項第一款）に基き、日本移民誘人の旅費補助として欧州移民同様額を支給せらるゝか

二、前項認可せらるゝとせば、日本自由移民は、同官命に基き、欧州移民と同様旅費の還附を受けうるか（欧州自由移民に対する旅費還附は其後間もなく全廃された）

三、前記移民を輸入したら、サントス港より聖州収容所滞在費、耕地への運輸費の恩典は日本移民も該当すると解釈していゝか

右三質問に対し、州農務次官は長官の名にて同月九日回答あつた。

第一間及第三間は、法律の規定として、確定的のものでない全移民に附與するではない、政府の手心だと思う、対日移民との契約は廃棄してあるし、現下補助移民に入るゝ状態でもないで上記二間は否定的である。

第三間、これは欧州移民への法律として制定されたもので、日本移民は該当せず

右により日本移民に差別待遇を興ふる意思が表示されていた（當時労働能力の不足してないから不必要からの差別待遇であつた）

この日本移民への差別待遇を、表面より州當局に反駁して

みた處で、感情を害するのみだ、日伯條約第四條に基き、公然抗議した處で社会を騒がし、排日家に乗ぜられるは不得策だから畑公使は州當局に非公式、間接に円満解決を謀った。

本件解決に、我方に援助を興へたのは、親日家、パラ州選出聯邦上院議員予備海軍申將アルツール・インデオ・ドラジル・イ・シルバであつた。

將軍は斯問題を、日本人に好感をもてる聖州出身の聯邦上院議員フランススコ・グリセリオ將軍に萬事を一任解決しようとして畑公使に協り一任した、當時州知事、ロドリゲス・アルベスは健康勝れず、リオ首府で休暇中、州は副知事ギマランエスが執政していた。

ダリセリオ將軍は、斯件円満解決に關しリオ首府のロドリゲス知事と会談した、副知事及農務長官モラエス・バーロスに書を送った、畑公使は州副知事ギマランエスと会談した、非公式に、又公使はリオ首府に於て静養中の州知事ロドリゲスを訪ふた、ダリセリオ將軍は聖州上院議員ドットル・ジュアン・アルバーレス・ルビオン・ジュニオールに諮つた、斯くて拾ヶ月目に「主義上日本移民を欧州移民と同様に待遇する」旨を口頭を以てルビオン上院議員は、グリセリオ將軍に傳へた、グ將軍は畑公債に口頭を以て傳へた、畑公使は後日のため文書を以て一札ほしかつたので交渉したが、休暇中のロドリゲス知事が復職して、己に口頭を以て済んだら文書を以て聲明までする要はないと拒絶した、聖州の日本移民差別待遇は、斯くて阻止され円満解決した、一九一四年九月の事であつた。

當時聖州珈琲耕地労働者には、伊、西、葡の南欧移民が多量に復活誘入されていた。當時の記録をみると、

	葡移民	西移民	伊移民	澳移民
1911年度	47.493	27.141	22.914	3.352
1912年度	76.530	35.492	31.785	3.045

そこえ、言語不通の異人種日本移民誘人は多少軌道に乗つて珈琲採取期に間に合ふにしても、葡、西、伊、移民が労働力需用に充分應じて呉れゝば、日本移民は、州の下附金の経済的にも排斥と言ふより一應倦怠期にも入つていたのであつた、その頃日本では末だ朝鮮人の日本内地労働進出を、日本資本家も政府も禁止していた。

森岡移民会社の

進出と暗躍

竹村東洋の両移民会社は、伯国への移民誘人の軌道を辿つてゐる森岡移民会社とも、そこえ割込み、伯国行移民を送り出し利益にあづかりたいと、チャンスをねらつてゐた、森岡移民会社が西坂萬吉を渡伯させたのは、聖州政府が日本移民渡航補助費中止の直前であつた。西坂は森岡移民会社の代表者としてリオ首府にあつて、當時そこに滞留中の元海軍中佐西偵蔵を介して、聖州政府筋へ暗躍した。

補助渡航金は下附勿論いらぬ。移民をつれて来るから、サントス港上陸後の無償輸送移民收容所宿泊は欧州補助移民同様に取り扱つて呉れと請願した。が、聖州政府は頭を横に振つた。

西坂は聖州日本人の有志家矢崎節夫とコンビし、日本移民をミナス州へ誘入せんと試みた。矢崎は當時ミナス州にあつた友人大野基尚と、ミナス政府に日本移民輸入を劃策した、これをきゝつけた東洋移民会社代理人田口道三は豊島昌をミナスに出張させ、森岡移民会社同様日本移民誘入に應づる旨をミナス州政府へ運動した。矢崎はミナス州にては事のならざるを予測し、聖市に帰り、知人の個人珈琲耕主ラビアノ・コスタ・マツシヤードを口説き、農務長官モラエス・バーロスに諮り、グアタパラ耕主、コンデ・ララ耕主、コルネリオ・

ビルヂリヨ耕主、ロドリゲス・アルベス耕主等連合、日本移民五百家族を移民輸入に経験深き森岡移民会社を経て移入したき請願書を、州農務局へ提出したが、請願は許されなかった。

當時サントス港に現はれた日本移民の群は珈琲耕地行でなく青柳都太郎の建設せるイグアツペ殖民地への僅かな団体移民のみであった。

この殖民はジュキア鉄道の開設前のこととて、サントスに上陸後又海路イグアツペ港へ、それから又リベイラ河を遡つて、レジストロ殖民地へ入殖していた。一九一四年八月、欧州大戦が勃発した。伯国へ多量順調に誘入されつゝあつた欧州移民は、バタリと絶えてしまった。聖州政府の欧州移民期待は夢と消えた。珈琲値の大暴落もあつたが、珈琲耕地にはペンペン草が茂り出した。

九、第一次大戦の勃発と移民の中絶

移民会社集つて

移民組合を組織

ブラジル日本移民中絶後、竹村殖民商館主は移民事業に倦怠し、その権利義務一切を水野龍前皇国殖民社長に譲渡した。水野はカフエー・パウリスタと共に、茲に南米植民株式会社を創設した。

大正五年三月南米植民株式会社と東洋移民合資会社と、森岡移民合名会社の三社が合流して「ブラジル移民組合」を組織した。外務省の勧誘によつたもので、直ちに公認された。この年同組合は組合代表として神谷忠雄をブラジルに派遣した。欧州大戦勃発で、ブラジル行歐洲移民杜絶、日本移民の進出チャンスであった。

神谷は舊知取引の聖州移民会社アンツィネス・ドス・サントス社と組んだ、同社はサン・パウロ州政府より「毎年移民

「一万人誘人の特権」を付與されており、その移民の国籍の如何を問はず、と云ふのであったので、協商の結果、一万人の移民中、五千人を日本移民で輸入するの契約を結んだ。必要の前には移民の成績不良とか、倦怠などと言っておれぬ耕地の労働力不足の時機であった。

聖州政府は一九一六年八月十四日附で、アンツーネス社の日本移民誘人を承認した。

契約期間一九一七年より一九二〇年迄の（大正六年より同九年迄）四年間に、人員数毎年五千人宛州政府補助金
十二歳以上九ポンドー 七歳ー十二歳四ポンド十志ー 七歳三歳二ポンド五志
資格 移民は必ず農業者にして家族を構成すること
組合は直接州政府より補助金を受取り、二日以内にア社へ左の割で支拂ふ事
十二歳以上一ポンド 七歳ー十二歳十志 三歳ー七歳五志



（写真―各移民会社合同―
在伯国業務代理人）

この契約實施は一九一七年四月の若狭丸移民から始まった。

欧州は帝國主義戦争の三年目で、當分南欧移民の渡伯復活は絶望的環境裡に、日本移民は伯国發展への嵐もないコースに乗っていた。

一九一七年より一九二〇年迄の三年間に左の如き船が移民をのせてサントス港に上陸させていた。

船名	家族数	人員	出發年月日
若狭丸	三五一	一、五三一	一九一七、四、二〇
河内丸	一五一	五六二	六、一二
しやとる丸	一九	六三	六、十六
たこ丸	二一	七〇	九、二一
若狭丸	五〇三	一、七四四	一一、三一
しやとる丸	二四	七八	一一、三〇
はわい丸	六九	二二五	一九一八、二、二六
若狭丸	五二二	一、八五一	四、二五
しやとる丸	二六	一〇七	五、三〇
博多丸	四三四	一、六九六	七、二一
讚岐丸	三三五	一、二七三	九、六
はわい丸	七〇	三五九	一〇、二〇
若狭丸	一〇一	三九二	一一、二八
博多丸	一五〇	六一二	一九一九、一、二一
讚岐丸	一七九	一九七	三、二七
鎌倉丸	一三六	六二三	五、二七
はわい丸	六一	二三九	七、二二
讚岐丸	六九	三一	一〇、一八
鎌倉丸	一九	九三	一一、二五
土佐丸	九一	四五〇	一九二〇、三、三
河内丸	二九	一九三	七、二
土佐丸	二七	一六三	一〇、一
ばな丸	三六	一六五	一二、二七

移民会社統一され

海外興業株式会社創立

ブラジル移民組合が組織された一九一六年の末、伯国移民が愈々順潮に進展し始めたので、茲に利を以て集まる移民組合が海外興行株式会社創立となり、森岡移民合名会社を買収した海外興行株式会社は、日本唯一の移民一手販売会社となった、一九二〇年十二月の伯国行ばなま丸移民より海外興業株式会社扱となった。

世界第一大戦終了後、世界経済界のインフレーの波に乗ったブラジル移民も一人宛九ポンドの州政府船賃補助では、赤字だ。アンツーネス社及州政府へ協議の結果、一人宛十二ポンドの補助金下附をえた。それでも赤字続きの船賃といふので、一人宛十七ポンドとなった。

必要の前には州政府も諾々と補助金を下附した。

一九二〇年を以てブラジル移民組合とアンツーネス・ドス・サントス移民会社との移民誘入契約は終了した。

移民組合は海外興業株式会社となり、会社は前年同様の移民渡航補助金下附を州政府に請求したが、僅かその年限三千人許されたなりであった。

この年聖州政府は補助移民一万人を限り、補助金を下附した。

その一万人補助金は、葡、西、伊等の南欧移民のみ割當られた。

南欧移民が世界大戦終息二年後にボツボツ渡伯し出したからであった。

南欧移民が来れば、伯国は日本移民の輸入は補助金下附してまで来て貰ふことは不必要であった。

その後海外興業伯国業務代理人の山田揚之助は便策を案出し日本移民を要望する珈琲耕地主等と協議し、耕主の耕地就働を条件として、耕主等より州當局に直接協議交渉し、二百

家族近くの日本移民を渡伯させたが、一九二六年（大正十五年）にはその便策も實施されなくなった。

日本政府が、関東大震災災者救済の意味にて一人二百円宛の船賃を補助し、移民百十名を送りつけたは大正十二年であった。

大阪毎日新聞社が皇太子殿下御成婚紀念に一名二百円宛船賃を補助し二百名の移民を渡伯させたは大正十三年であった。

日本政府が伯国行日本移民奨励を積極化し、内務省社会局に移民奨励事務をやらせ始めたのは大正十年度よりで、この年より海外興業株式会社に移民宜伝の補助金交附を始めた。

大正十二年度より日本政府は、移民奨励費を予算に計上し海興が移民より徴収した手数料を全廃せしめ、政府がその報償金を海興に交附した。

斯くて大正十三年度（一九二四年）より、日本政府は臨時議会の協賛を経て「ブラジル行移民船賃全額補助」予算を計上した。

海外興業会社は政府の命令航路の故を以て大阪商船会社と交渉、伯国行移民船賃一名二百五十円拂を、二百円と協定した。

又鉄道省と協議して伯国行移民の出発する郷里より乗船港迄の汽車賃の半減をした。

拓務省は次いで移民一人宛、支度金五十円を交附實施したのは、昭和七年九月からであった。

皇国殖民会社が第一回日本農業移民を募集伯国へ日本より輸出する際、日本の外務省は、募集輸出保證金拾方円を納入させ殖民会社を面喰らはせ、困らせた。

それから拾六年目、日本政府は伯国行日本移民に、全額船賃を支給した、支度金をも交附した。

往年伯国移民の祖人水野龍が、竹村興右工門を口説いた文句に「移民事業は国土的企業」とあった。

後年 Mario de Sampaio Ferraz をして、一日本人の殖民事業なるものは、個人的企業ではない。日本政府自ら会社の假面を被っている仕事である、日本移民に関する限り、問題は人種が劣等とか、優等とか言ふのではなくして、その不適當性にある」と言はしむるに到ったのは、海興の組織が帝国主義的官僚化したものであった處に鑑みられた。

第三章初期移民と伯国事情

一、コロノ生活から半独立農へ

移民する人々

第一回移民船中には、日本人は世界の偉らい国民になったんだと、自惚れている連中も相當あつた。日露戦後の三年目だが戦には勝つたが、さて日本では仲々に金はもうからぬ、金もうけするには外国に限る。外国といふ處は何處でも日本より金のたやすくもうかる處と、移民一般は信じ切つていた。

伯国の一ミルレースとか云ふ金は、日本金に替えたら六十錢になるそうなど、移民連中は知っていた。北米の弗は日本金二円になるそうだが、入国するのが英語喋べらなきや六かしいそうな。

カフェ一俵つめば五百レースにはなる。一日一人で四俵位はつめるで、二ミルレースになる。一日一円二十錢になると算盤とつた移民の群であつた。

その頃、日本で大工職は一日手飯で四十錢、百姓の日雇が

向飯で二十銭、小学女教員の月俸八円、巡查が十円そこそこであつた。（日雇賃月給等は移民の体験實話）

伯国はカフエー四俵つんで一日一円二十銭、月に二十五、六円になる。家族皆働らけば、屹度もうかるぞ。

移民中に外国への再渡航者が四人居た。熊本に三人、広島に一人、三人はニューカレドニアのニツケル坑労働者で、広島の一人は布哇帰りであつた。

彼等の再渡航四人によつて船中移民は、外国といふ生活の予備知識を眞剣に吸収した。

耕地の状況

その頃の珈琲耕地は奴隷解放後二十年目の状態で、何處の耕地に行つても奴隷であつた黒人の群がいた。彼等は全く自由人であつた。然し壮年の黒人は、自分等は奴隷であつたとはめつたに自稱せなかつた。自稱するのは大抵五十以上の黒人男女の老人共であつた。奴隷時代の懷古談や虐待振は、この人々によつてきかされた。

耕地によつては奴隷を押籠めた小屋を聊か改造して南欧移民を住ませていた。日本移民もそうした屋に入れられた。

日本の農村には何の家にも便所がきつとあるが、珈琲耕地では人糞肥料が使用されないので、コロノの家には否、コロニアには一棟だつて便所はなかつた。

日本移民は奇異の感を抱かせられた。男も女小供も娘も、皆裏の又は表の珈琲園か、豚小舎の蔭か、蔬菜園の蔭で用をたした。慣れる迄は仲々に神経をなやました。

夜明の起床鐘の音と、就寝の鐘の音とは、同じ鐘の音でも、色音が違つた。朝の仕事出の鐘の音は疲れ切つたる労働者へは苦しかつた。強制的に軒並に出働を監督臨検さるる耕地のコロノ生活は尚いやだつた。

珈琲結實の豊かな歳であれば、一人一日四俵は容易であつ

た。結實不作の耕地では、コロノの採取収入は全く惨めな労働であつた。稀には一日一人カフエ半俵も摘めぬ畑もあつた。

耕地には大抵耕地専属の経営アルマゼンがあつた。その店はコロノ生活必需品を供給した。併し物の値は、アルマゼン主の言値通りで、高いと抗議してもまけはせない。通帳をコロノに渡して支拂は珈琲採取貸銀差引で、耕地会計が直接アルマゼンに勘定する。アルマゼンは耕地がコロノ食料搾取機関であつた。

珈琲結實不作の年のコロノは月末に又は三カ月末、六カ月末に大抵赤字になる。この赤字埋めには除草期の珈琲株数に対する除草賃銀があつた。これを當にコロノは赤字埋めをたのしんだり除草期に入ると耕地はコロノ一家族に自作畑を二、三反づつ興える。茲に米も豆もキビも芋も、何んでも自分の好むものを播種栽培する。この収穫が相當なものになれば、コロノは翌年から、耕地のアルマゼンから高い食物を買はずに済む。その自作収穫のミールオで小豚を飼ひ、又は鶏を飼つて収入を増す。それがコロノ生活の向上費になつた。然しコロノが病気でもすれば惨めである。小、中の耕地には大抵医師は常任していなかつた。医師は附近のパトリモニオ或は遠い市街地から呼び迎える。距離によつて診察料は異なつても、一回の往診は近い處で百ミルは支拂される。耕地会計が保證してコロノの収穫拂の話もついたが、金のなさそうな耕地のコロノの病人の處へは、呼んでも呼んでも医師は来て呉れぬこともあつた。売薬で快癒するのはまだ幸い、一回の医師の診察もうけず、死んで行つたコロノも相當あつた。医師の死亡診断書なくとも耕主が署名すれば共同墓地へ埋葬出来たのだ。

耕地はコロニアへ給水設備をしてる處は稀で、コロノはコロニア近くの小流又は泉の水を汲んで生活した。流や泉に遠いコロノの家の人々は、水不足で惨めな生活をした。

雨が降れば水が濁る。コロノは濁つた水で生活した。

炊事用の薪は、新珈琲耕地では近くに森もありカポエラもあり、珈琲畑の伐株もあって不便はなかったが、古い珈琲耕地ではコロノ家族の多い程、薪には困った。珈琲採取の帰り路、カフエの枯枝、或はパストの中の枯木を倒し、割って擔き寄せねばならぬ處もあった。

コロノ生活は奴隷擬いに強制された生活だ。終生コロノ生活を楽しめば又別である。一層よき生活へ、自由人へと志望する人間にとつては、珈琲耕地生活は長居する處ではない。珈琲耕地の労働機構はちょうど莊園のように、資本家たる耕地主がコロノ労働を搾取するように出来ていたからだ。

欧州の農業契約家族移民はカフエ耕地に落ちつかず、耕地を逃走しては轉々と他の耕地へ、他の耕地へと移し流れた。

耕地脱出の流行

耕地逃亡―これはコロノにとつては、昔は命がけの仕事であつた。耕地主はその耕地内では、コロノの生命輿奪の權を握つていた。

耕地逃亡者は、他の耕地に昼でも夜でもにげ込む途中が一番危険性が多かった。

逃亡者が他の新被傭耕地内に這入ると、新耕主の權力が、そのコロノに及ぶので、生命の安全は保たれた。

各耕地にはカマラーダの無頼漢操縦と、反抗コロノの鎮撫係として総監督や監督の外に、耕地の仕事請負師が、きつと一人位はボス（親方）として住んでいた。持主が養つている耕地の治安維持の別働組だ。

四五十年前は耕地から隣耕地へとの道路は今日ほどなかった。コロノが逃亡して目的の耕地へ落行途中（逃亡コロノは逃亡前にその目的耕地を大抵きめていた。目的地なしに逃亡するコロノは稀であつた）途中の耕地に通行許可を得ねばならない。ポルテイラ開けて無断通過は許されなかった。乞

えば通過は大抵許されたものではあったが、悪い耕主又は総監督になると、その逃亡コロノを自分の耕地に強制的に就働させた話も仲々に多かった。

遠方の耕地に逃げのびることは、鉄道交通の、又州道の発達していなかった時代は、非常な難渋なことであった。

コロノが耕地をFujin (逃亡) する事は、耕主に対する労働争議の手段であった。無言の反抗でもあった。耕主側より観れば、逃亡コロノはデズグラサードのコロノである。だが逃亡コロノにとっては、圧制搾取に対する反抗の痛快味があった。

コロノ家族が逃亡した際、耕主支配人監督側の憤怒と憂鬱さは、その態度に忽ち露れる。がコロノの仲間では、此際的情感は、耕主側の人々のいない處では明瞭に Fujin 。

Foi ben 。

と、弱きもの同士の同情を以て迎えられた。逃げのびて呉れゝばいゝがと案ずるものゝ、支配者側の面前では、カモフラージュして、問題になるべくふれぬ様にするのであった。

持主側では武装した追手を、四方に馬で馳らせ、逃亡コロノを探させるのだが、迫手は大抵空しく帰耕するのである。

逃亡コロノでも、耕地に毎年々々赤字のみかけているものゝ追跡はせなんだ。曳戻して損害のとれそうなのは追跡した。逃亡コロノが、自分の耕地より政治的に権勢、優勢な耕地に逃げ込んだと知れた場合は、手のつけ様がないので、泣寝入だが、その反対の耕地であれば、コロノ取戻の掛合が始まった。

伊大利移民や、西班牙移民の逃亡は、一家族逃亡であったが日本人の逃亡は最初は二、三家族又は団体逃亡であったため、耕地主側を一層怖わがらせコロニアの耳目を聳動した。日本移民も後には、南欧移民にならつて一家族づゝ逃亡を企て出した。

コロノの耕地逃亡、それは日本移民が来てから始まったものではない。先輩は勿論葡、西、伊の移民であった。

珈琲耕主が警察権を握っていた時代、コロノは何處へ圧迫の不平不満を愁えようがなく、奴隷が逃げた如く、移民コロノも逃げた。

日本移民が渡伯した頃は、耕主にはモウ警察権はなかったが警察は耕主側の警察であつて、コロノの警察でなかった。コロノ等が永い間、耕地から契約終つて他の耕地へ、或は逃亡して他の耕地へと、轉々流浪し廻つても、何處にも搾取と強圧の制度がまっつていと、認識した時、賢明なコロノは、よりよく生きるために、一ツ耕地に数年間連続契約をした。耕主に認められて、耕地内の低地又は荒蕉地の一隅を借地して、半自作農を開始した。

カフェ採取期の多忙な時には耕地の命令に服してコロノをする。カマラーダの仕事にも出る。半自作農はコロノより広い畑を耕作してミリーオをまき、豚も多く飼ひ、鶏も飼ひ、牛も二三頭は耕地の牧場に放った。籠を編むとか、蔬菜も栽培し耕主には安く売り、コロノにも売った。河に漁しては魚の獲物を耕地の人々やパトリモニオの人々に売った。この半独立農は耕地のカンナ栽培を請負ったりした。やがて独立農生活へのピカードを開いて行つた。

半独立農は耕主のアルマゼンから、生活必需品で搾取されぬから小金をため出した。

土地は広く所有権あつても、耕作生産せなければ現金不足、貧乏な耕主は、後にはこの半独立農の小金を、一時借りあつめて窮状をしのぐなどの事も起つた。

新しい耕地の開墾

珈琲樹も年経つと、地味が衰えて結實が尠くなる。そこで勿論経営困難となる。その際享樂にのみ耽つている耕主は没落の外はない。

パライバ河沿岸から珈琲がセントラル線を伝つて、現在の

聖市近郊の地帯に、それが衰えて奥地へ奥地へと珈琲樹栽培は展開した。此世紀間幾多パウリスタ・ファゼンデーイロの浮沈があつた。

耕主は、自己所有の森林地帯、又は他に新開地を求めてカフェ栽培企劃する。その際耕主自身で珈琲栽培の新開拓戦線に就働するでなく、大抵は請負事業として、その耕地の支配人又は総監督、監督にまかせる。耕主自身は日本の殿様と同じく、労働能力のない人間となつていた。

支配人又は総監督が新珈琲樹栽培の開拓地の経験で、やがて支配人を、総監督を独立させ、次の新珈琲耕主へと生れさすのであつた。

支配人や総監督が新珈琲栽培を耕主より請負つた場合、彼等は、きつとその耕地のお氣入コロノの賢き働き者を、数家族請負栽培地へと連れれて行く。

その賢いコロノ連中は、やがて珈琲栽培の経験を得て、独立農へと土地を買ひ求めて進展して行つた。

新珈琲耕地は賢いコロノ達を、小農独立殖民へと育て、いく母胎でもあつた。

聖州内のコロノをいわば盪回しにしていた伝統的なカフェの莊園主等は、コロノ募集に苦惱し出した。コロノがいなくなる、カフェー耕地はカツピン、アマルゴーズの荒地と化してしまう。莊園主の没落が始まるわけである。

伯国カフェー栽培開始後二百年、耕地の除草機械は、近年發明されてに在るが、未だ實施されずに、人手の鋤で行われている。珈琲實採取は一向に機械化されず、入手を要している。

こゝに珈琲耕地とコロノ生活の将来性は尚つゞく。

一九三〇年の伯国革命は、聖州の譜代耕主等の我代の春を尠なからず揺さぶつた。

聖州カフェーの恒久調節策として前政府の買上政策は破綻を來した。珈琲局は調節策を放棄した。これは聖州耕主連に

とつて、今日迄の如く、政府に頼っていれば泰平樂なものはなくなった。自力繁栄を企てねばならぬ、茨の道であった。

革命政府は国内労働者の保護政策の計劃ある事を発表した。

斯くて耕主連は、耕地就働のコロノに対して、待遇改善を企てねばならぬ轉換期に直面した。

コロニアに電燈をつけた。コロノの住宅にも電燈をつけた。

コロニアに水道の施設をした。奴隸時代をそのまゝの古い家屋はとり壊されて、煉瓦建のコロニアを新築した。文化耕地のコロノの家には硝子窓もはめられた。

耕地には簡単ながら薬局軒設けた。トラホーム治療も、そこでやれる様にした。

耕地専属のアルマゼン経営も、表面的ながらも廃止された。

そうした新設備をやり、改善をやった珈琲耕地でないと、外国移民も国内労働者も就働することを嫌がり、契約せぬことが流行し出したからである。

聖州の莊園的な耕主連が、急激に段落し始めたのは彼等の擁護者であつた聖州出身の共和党権政治家が、中央執権から追放された一九三〇年の革命後であつた。

聖州殖民地の一般状況

州政府の殖民地開設で古いのは、一八二八年、リオ、ネグロ及サント・アマロ殖民地で、これは主に独逸人目標の殖民地であつた。

それから南聖地方の、パルケイラスとカナネアに殖民地が設けられた。これは一八六一年の頃であるから、日本にすれば文久一年の頃で、北米では奴隸解放戦（南北戦）の二年前

であつた。この殖民地は、独墺露伯人を目標としたものといはれている。

一八七七年には聖市北位のサンタ・アンナや、聖市東部のサン・カエタノが殖民地とされた。伊葡波国人や伯人の混合殖民地であつた。サン・ベルナルドも同年殖民地となつた。當所はサントス港への駅停地として要所である。それから十年後リベロン・ピーレスが殖民地として設定された。これは伯国奴隷解放一年前のことで、入植者は、伊伯人の目標とした。コンデ・ド・ピンニアル殖民地は一九〇六年伊太利人に提供された。

最初の日本家族移民に縁故の深いノーバ・パウリセアや、ガビオン・ペシオート及第一モンソン殖民地は、一九〇七年の開設で、独墺伊及西人に目標したものだ。

是等殖民地には、欧州より直接入植したものは尠かつた。欧州より渡伯し、珈琲耕地にコロノとして契約、幾年かコロノ生活の体験者が蓄財して入殖したものが多かつた。

斯の外ノーバ・オデッサ、ジオルジ・チビリツサ等の殖民地は聖州内に拾ヶ所以上もあるが、珈琲耕地の全盛時代には、奥地殖民地は一向に発展しなかつた。

珈琲耕地が没落期に近よる頃より、私設殖民地も各所に開拓されて、聖州奥地の原始林はすばらしい勢いで焼き拂われ出した。

それは日本移民が最初到着した翌々年ころからであつた。第一回移民はこの殖民流行の初波に乗らず、第二回移民が珈琲耕地コロノ契約一年終了後に乗り出して躍進した。

第一回移民の進出は、重に亜国への轉航であり、聖市都會への進出であつた。

二、都會生活へ、同化への道程

二、三の職業移民を聖市にのこして、他は皆農業移民とし

て珈琲耕地に、少なくとも六カ月間は労働契約した日本移民、聖市の移民收容所の門を耕地へと出る朝は、さながら、ピクニックにでも出発する様な心易さと、朗らかさで勇み立った目的地の珈琲耕地ではあったが。

「働らけど、働らけど、生活ならざり」と掌をみつゝ二、三ヶ月にして、收容所へ舞ひ戻った移民家族も多かった。

珈琲結實の多い他耕地へと、再契約して收容所の門を出た家族もあったが、珈琲耕地へは眞平御免と駄々をこねた移民家族には、その日から州移民收容所は冷めたく、門より街上へと自由人にはなつたが、さて其の日から宿と食に追はれた。異境万里の環境には慣れず、言葉は解らず、彼等是一時「乞食」の如き又「立ん坊」の如き流浪生活をした。

その中、男も女も大抵は個人の人情や、在市日本人の世話でそれからそれと家庭労働に住み込んだ。先等大工の世話で、日雇大工になった器用なものも多かった。

家庭奉公に入つたものは、生活様式が母国のそれと全く異なる家庭生活だ。主人の室の掃除に「ウリーノ」器を、洗面器と間違へて鏡台に飾つたり、エンセーラしたる食堂を厨房の草箒でサツサツと掃いたりした。

フランゴを一箱田舎から送つて来た耕主の宅の新クリヤード日本青年は、主人が「コールタ・アザ・トードと命じたが「アーザ」を「ペスコツソ」と勘違いして、フランゴの頸を庖丁で切つたりした。慣れぬ粗相から、皿を割つては、終日泣きぬれてた日本娘のコッペーラも居た。兎に角言葉解らぬながら彼等はよく働らいた。骨身おしまず主人大事に働らいた。陰陽（かげひなた）なく働らいた。そこで伯人家庭の掃除の仕事も見習つた。寝台のアルーマも慣れた。フエジョンの煮方も、味のつけ方も覚えた。豚の脂肪の料理具合も知つた。朝夕の挨拶言葉も、禮儀作法の物腰も、段々と板について来た。

家庭の子供の躰け振も、家庭の人々の温情味（あたたかみ）や冷めたさ加減も、敏感に感知し出した。

伯人家庭の経済振りも判り出した。夫婦の仲のよし、あしも眼につき出した。家の娘にナモがあり、家の息子にナマがあるのにも恐縮した。

日本人家庭労働者は、雇主家族側から一般に非常に信用され出した。「よく働らいて、清潔で、物を決して盗まない」との評判が、一年後には、聖市の町の定評となった。日本人家庭労働者の需用が増した。最初は月に拾ミルから、多い處で三十ミルの家庭労働貸銀であった。それが四十ミル、五十ミル台に、一年後には最高は七、八十ミルもうけていた。それでも伯人労働者よりは格安だった。そこに雇主側のつけ目もあった。

新聞の職業欄には、ジャボネーズ、ジャボネーズのコツペーラ、コツペーロ、クリヤード、クリヤードが、毎日々々募集された。

當時は家庭労働者の應募者数が、需用者数より尠なかつた。

外人家庭内に労働することは、在北米日本移民初期の人々が、吾々日本移民より先に体験済みであった。日本の官憲やブルヂオア階級からは、日本移民の海外発展は「生意地なしの家庭奉公発展じゃ」と蔑視されていた。「是だから朝鮮にも満州にも台湾にさえ、日本移民はやれぬ」と慨嘆された。

日本移民の都会進出者にとっては、初期の斯の家庭労働こそ食ふていきる為めの労働であり、異国都会文化体験の第一段階であり、伯人社会文化への同化第一歩であり、異国言葉の習練所であった。

異なれる文化の教養をもてる日本移民なればこそ、伯国文化の味のよきも、悪さもよく感じたのかも知れない。

若し日本移民が、文化の教養もたぬ民族であつたら、何うなつていたであらうか。

日本移民の外人家庭奉公は、無資本移民来伯初期に喰ふための現象で、移民が環境に一通り慣れた後は、独立自由労働者へと間もなく轉向し、伯人社会へ進出し始めた。

奥地日本移民には珈琲耕地コロノ生活の苦悩から、自由殖民森林開拓パイオニアの苦闘があり、都会には都会進出のパイオニアの苦悩努力があつた。半奴隷の如き耕地生活者の体験も、都会家庭内労働者の、同じく半奴隷的体験も、所詮は初期移民が環境に生き抜く術であつた。

日本外交官憲の夫人方が夫君に伴われ當国に家庭をもたれる夫人方は日本の女手最高の教養を誇りやかに光らせ、移民婦女子に対し「妾供は移民でないですヨ」と階級意識を發揮していたけれど、これ等の大人達が、一步伯人社交界に踏み出すとその席上にて雛壇の人形の如く、靜的に生ける骸の觀を呈した。

公館の宴会卓上の食器配列、料理の大皿の並べ方も、一つ一つ移民婦人の經驗に指導を乞ねばならぬ仕儀が、これ迄、到る處、移民でない日本人上流家庭に起つていた。

移民の婦女子が、何にかと伯人文化教養を發揮しうるは、要するに外人家庭内労働より得た生活歴史があるからであつた。

第一回移民が、第二回移民来伯迄の二力年間に、サン・パウロの都会進出の就職者を挙げると

▼鹿児島移民

鍛冶工―（本職） 池上仁次郎

大工―（本職） 鮫島直哉（本職） 原源之助、茶屋政吉、森友衛、上村泰造、林栄次郎、隈元維高、瀬戸上金四郎、丸野政義、湯口金之助（阿久取） 宮田勝衛、松本熊武、西吉太郎 小牧斎藏、小牧豊吉、貴嶋明治、牧之投愛熊、牧之段次太郎 清水佐吉、川原正藏、橋口七兵衛

家庭労働―牧之段ツタ、永江ナ工、永江太古、森キセ、今給黎矢市、森マツ、木多ツヨ、池上恒則、湯通堂タヤ、石井アキ、末永さえ

▼熊本移民

大工―藤本末人（本職） 出口伊三次、西村光次、元田

勘助 赤川宇八郎、東松太郎、井手喜平、上田豊記、本島儀男、坂田傳八、中島勘五郎、宮本久記

玩具製造―松永二三―自動車運轉士 村崎豊重―家庭労働 上田主、東秀雄、中島モセ

▼広島移民

大工―中村増一、中村四郎、池町彌市 家庭労働―児玉良一、池町アサノ、山田實蔵、西村ワイ

ピントール！間崎三三一、山田勘一、西村房吉、須山勘一
神田寅三

▼愛媛移民

大工―橋本重左衛門、東野綱吉、石川好三郎―クヂネイロ
芳我徳太郎―ピントール 東野音一

家庭労働―東野タカノ、近藤タチ、池田ミヤノ

▼山口移民

大工―林愛之助、伊藤儀三郎、藤井仁助
菓子工場！福原甚、妻イマ、林トモ

▼福島移民

大工―佐藤善明

家庭労働―鎌田信一郎、宇佐見基、岩本介三郎、岩本正之
進、神俣為蔵、山田留五郎（上田）山田留七（高野）香野賢良、神俣トメ、高橋スエ、武田タツ

薬種屋労働―楠作右衛門―ピントール今井久之丞、本田幸七、門田一美、古味久吉―ベンソン經常鍋谷末次郎

▼高知移民

家庭労働―森勝利、鍋島喜代重―ピントール谷岡庄太郎

▼東京移民

製紙工場労働―茨木友次郎、茨木信太郎
沖縄移民
齒科院労働―金城山戸

バクチバー宣保浦太通稱一八と日本人は彼を呼んだ。
家庭労働―比嘉秀吉、宮城利三郎、王城仙三郎、金城彦助

三、自由殖民への先駆

第一回移民がコロノ生活から、自由殖民生活への移行は、最初斯うした段階をたどった。

ゾーモト耕地を引挙げた福島移民の佐伯国次郎家族は、イタチベンセ線のイタチバ駅からジョアキン某の荒廃珈琲耕地に入った。その一区に拾数域のマンジオカ畑があり、製粉工場も設備してあった。耕主は経営をもてあましていた。佐伯は手眞似足眞似で、それを日本人丈けの請負事業に協議した。當時聖市に家庭労働していた同郷の青年数名を呼びよせて、マンジオカ採掘から洗滌、脱皮、製粉、タピオカ精製までの仕事を始めた。宇佐見、高野、岩本、釘本、鎌田の独身青年等はよく働らいたが、請負仕事は一年経たず、マンジオカを掘盡したのでやめた。

この仕事は、日本移民のコロノ生活から自由移民への前提であった。

彼等青年はその後、サン・マルチンニヨ耕地の通訳になり、耕主に乞ふて、耕地一荒蕪地バリンニアに半農、半通訳の生活をやり、ミーリヨを栽培し、豚を飼い、鶏を飼いの生活を始めていたが、独身青年のみの生活で、堪えきらずついに四散した

第一回移民ではこの佐伯家族と彼等福島青年のみが、半独立農をやったのであったが、成功しなかった。

ノーバ・ヨウロツパ殖民地はドラデンセ線のノーバ・ヨウロツパ駅に展開してる二・五〇〇域の聯邦政府直轄殖民地であった

第二回旅順丸移民の佐賀移民は、その殖民地に近き、サンタ・カンジダ耕地に配耕された。移民の草分け鈴木貞次郎の世話でコロノ契約半歳終了後、出口三之助とその弟源九郎両家族、セルラ耕地のコロノ島根移民武田良助家族は、同殖民

地へと轉向した。

山口三之助はそこで穀物仲買に手を出して失敗したが、弟源九郎は同殖民地の土木請負人夫の賄をし、後ち、殖民となり地主となり、武田と共に同殖民地の邦人殖民重鎮となり、後年朝日殖民地のパイオニアとなった。

ノーバ・ヨウロツパ邦人殖民の佐賀移民は、後にノロエステ線ビリグイ殖民地に大挙轉向した。

珈琲栽培請負の創め

グアタパラ耕地の総監督平野運平の上役、耕地支配人ジュゼ・サアルトリヨ（伊人）は、拾四年間のグアタパラ耕地被雇生活を清算して珈琲主へとの宿望が動いた。

アラ、クアラ線ビラ・アドルフオ駅の原始林地帯を購入し、茲に新珈琲耕地を計劃したが一九一二年のことであつた。

新珈琲樹四十万株の栽培を、請負にした。平野と同耕地同僚伊人口ツカとが協同してこの四十万株栽培四年請負をサルトリヨとの間に契約した。平野はグアタパラ耕地の其翌年度コロノ契約満了日本移民四十家族を、ビーラ・アドルフオの新開拓契約地に送った。

これが、日本人の新珈琲栽培四年請負事業の創めであつた。

その頃、ビラ・アドルフオ駅は、駅一軒、家二三軒の淋しい處であつた。珈琲請負の家族収容のため、先づ雨露を凌ぐ住家を建てねばならぬ、その大工や佐官をグアタパラ耕地より送った。

第一回高知移民の井上馬太郎が監督となり第二回高知移民の柿田直吉、岡山移民の隈間隆治、其他を新開拓地へと先駆させた。

一九一二年の末であつた。此處で日本移民は森林伐拂を覚え

た。その乾燥を待つて焼拂を實驗した。珈琲栽培は畑を碁盤目型に線劃し穴を掘り、種子から育てたり苗から移植育てる事を覚えた。

日本では鎌倉時代、朝鮮人を武蔵野に移民させ、森林を伐拂ひ、焼拂つて新開墾地を耕作した。これを火田と呼んだ歴史があつたが、日本移民はこの歴史を忘れたものであろう。

日本移民にこの新開拓地で、殖民生活の初期的な労働の体験者となつた。

四年請負契約終了後、同駅町が、後年繁栄してカツタンズーバ市となつた。同市のパイオニアとして隈田や柿田は同市に商店を経営して永住した。他の日本移民は、過半数が、ノロエステ線の平野殖民地へと轉任して、独立殖民となつた。

或る家族は第二モンソン戒民地へ殖民となつて流れ込んだ。

この珈琲栽培請負業を知つたその後の日本移民は耕地契約コロノ生活を嫌つてコロノに行かぬ一原因となつた。どうせ珈琲耕地で働くなら栽培請負して、監督のいらぬ毎日自由な時間で働らく、その上多くの土地に雑作収入を獲、尚四年目（請負が四年ならば）になるとその年の結實カフエはこちらのものの利益があると賢こくなつた。

独立農たる殖民生活への、中間的半独立農が珈琲請負年定め栽培業であつた。この珈琲栽培の経験と雑作播種の経験をえた後、土地の地質良否も判断しうる知識をやしなつた上、土地購入の資金を貯めるといふ詭え向きの労働であつた。今の奥ノロエステ、奥ソロカバナ方面で地主となつた人々の中、コロノ生活より直ぐ殖民生活へ進んだ人々よりも、コロノより珈琲栽培請負の道程業を経て、地主となつた人々の方が、伯国農業に幾多の幅も深さもある農業知識人となつた。

ビーラ・ジケリ殖民地開拓

東洋移民会社の第一回船神奈川丸で来た熊本移民の秋村長
濤は、グアタパラ耕地に配耕された。

コロノ契約一ヶ年の終る直前、一人聖市を視察したが其
際、當時ラッパの方にいた馬見塚（タイパス殖民地の先達
者）と会ひ、馬見塚の世話で、ジユケリー駅の奥、ビーラ・
ジユケリーの有志家フレシヤ・フアグンデス（葡人）の土
地を見に行った。一九一三年のことである。

フアグンデスは大の日本人好きであつた。

秋村は耕地グアタバラの契約満了後、同縣移民九家族と福
岡移民一家族合計十家族とで、前記視察したビーラ・ジユケ
リーの現在地に入植した。土地は十家族で五十域、秋村が代
表者として引うけた。五ヶ年拂、五コントス、無利子という
條件で、この売買契約に登記所で立会つて呉れたは、聖市藤
崎商会の後藤武夫であつた。

當時の入植者でいま在伯するものは、秋村、中島忠作、立
川エミ（未亡人）杉山利八、児島専太郎等と福岡移民の郷
原久喜である。

土地売買契約の際何等の内金も入れず、又入植移動費や、
開墾作物收穫迄の皆の食糧も地主の方で貸出して呉れた。

最初の開墾地にはセボーラを十家族で、一キロの様子を借
出し播種して、五百キロばかりのセボーラを收穫した。次で
バタチニアの種子薯一俵を貸して呉れた。小粒のバタチニア
で親指大のものであつた。十家族で分配して栽培した。二年
後に馬見塚の供給するパラナの種子薯を栽培し出してジユケ
リーのバタチニアの名を聖市市場に稱讃され出した。それか
ら両三年後又種子薯をオランダ種にかえた。ビーラ、ジユケ
リーは山の峽間に固まれた地形で、雨量が少くて、冬は降霜
がはげしい、それで三月頃から薯を栽培する。聖市方面で薯
の市場に品切時に、ジユケリーの薯が出たので珍重がられ
た。

その頃のビーラ、ジユケリーは聖市から、生産品はトロツ
パで二十キロの山徑を運び、カンタレイラ鉄道の終点駅に出

した。

地主フアグデスに弟が居た。スヰチ、フアダンデスと呼んだ。彼は大の日本人嫌ひであつたが、兄が雑穀店を営業せるに弟はパストにブーロが沢山飼つてあつた。薯が幾千俵とトロツパで送り出されるに及んで、その運搬の利益は相當なものとなつた。昨日の日本人嫌ひはフツ飛んでしまった。兄フレツシ・フアグデスは家族なく後年落莫たる無一文の生活を送つたが日本人は彼の最後まで篤く看護し葬つた。

入植五年、五十家族の日本移民が殖民していた。現在では三百五十餘家族、ビーラ・ジユケリーの山峡の谷々に点々している。

夏雨秋風三十五年、ビーラ・ジユケリーの市會議員に、第二回熊本移民原田林太郎の次男忠文が選出された。

在伯日本移民が開拓した最初の殖民地と呼ばれている。

第一モンソン殖民地

連邦政府直轄の、ノーバ・ヨーロツパ殖民地と、同年に開設された。ソロカバナ線セルケーラ・セーザル駅奥十六キロ、パルド河の両沿岸に展開せるモンソン第一殖民地に、日本移民が入植したのは、一九一一年であつた（明治四十四年）。

移民草分鈴木貞次郎の世話にて、パウリスタ線サン・フランシスコ耕地第二回長崎移民淵清次、山本治三郎、坂口仁四郎の三家族であつた。山本の妹は、第二回旅順丸の脱船員松原勢一と結婚入植した。次でセルラ耕地より岡山移民の岸本安平（次男の父）家族、サン・ジョアキン耕地より熊本移民百田末彦等十二家族も入植した。

當時植民地事務所に、安田良一が日本植民監督として雇われていた。一九一二年頃であつた。

それより数年後、欧州大戦の終熄直後、第一モンソン及、

第二モンソン植民地は、棉の名所のモンソン植民地となり、百数十家族の日本移民が入植していたが、珈琲その他多年生物の栽培なく、単作農業地帯であったため、今日では植民四散し殆んどカツポエラに化してしまっている。

コチア植民地の創始

鈴木貞次郎は、欧州大戦勃発前聖市ベレン区に於て同志と玩具製造販売の共同生活を脱けて田舎入りをした。

聖市郊外、イブトラナ山脈のタイパス山麓にある「カペラ・ヴェーリヤ」に独身青年七八名を率いて、セボーラ栽培を始めた。

彼等の最切の生活費を捻出したのは、鈴木貞次郎の弟鈴木季造（俳人抱春）で、彼は聖市のフランス女の経営する高等淫窟の下働をやり、収入全部を兄等に送っていた。後日鈴木季造もこの百姓生活に入った。カペラ・ヴェーリヤは生産物を駅へ出すに、非常な不便を感じた。その頃、山形移民聖市の歌人高桑治平夫妻も共同生活に参加し、この組はコチア川に近い、コチア寺院のレオナルド神父管理地、モイエヨ・ヴェリオの荒蕪地を借りて移轉耕作した。

開拓地の借地料は収穫歩合拂とした。第一回薯の収穫があった。生産物を聖市に売りに出た弟は兄鈴木貞次郎に代金を亨楽に消費してしまわれた。弟鈴木季造は兄の所在をさがして聖市に出た。レオナルド神父は鈴木員次郎を聖市警察署に訴え出た所が、拘留されたのは兄鈴木でなく、弟鈴木であった。月餘収監された。

斯くて鈴木弟と高桑家族とは薯作耕地を棄てた。

此の出耕組に、畑を異にした別の一組がいた。岡山移民の山田善十郎、難波梅太郎、柏野源蔵、神原木平等であった。現在の大コチア植民地のパイオニアとなつたは彼等であった。柏野、神原は今もコチア植民地の祖人である。

三角ミナス米作地の開拓

一九一四年（大正三年）グアタパラ耕地平野運平配下には、東京外語西班牙科出身の畑中仙次郎、福川薩然、富岡漸、瀧澤仁三郎其他数名独身のインテリ青年が群れていた。瀧澤は東洋移民会社の練習生であった。珈琲耕地の束縛されたコロニア生活の陰惨な明暮を、明朗化した殖民地生活に轉向さす可き自由の血が燃えていた。

平野運平がビラ・アドルフオの珈琲栽培を請負ひ、コロノを殖民生活の前提へと導びいた頃、彼の配下の瀧澤、富岡のインテリ青年一派は、グアタパラ耕地を去って、彼等独自の開拓進路をとり、モヂアナ線コンキスタ奥ラゼアード耕地の低地、所謂三角ミナスを借地し、同志と米作を始めていた。

瀧澤を米作へと目覚めさせたのは、ラゼアド耕地のコロノ池岡鶴松であった。池岡は珈琲畑除草期の間作として播種した一畝ばかりの稲に、想を打込んで美事な稔り映えをみせた。瀧澤はそれにスツカリ魅せられた。

瀧澤は富岡をカニンデス駅に訪ひ、同地で米作を試みさせた。

一九一五年の事である。翌年三月コンキスタに同志を糾合し、集団米作をメランシーヤ耕地に始めた。

切詰めた生活費で、収穫した米價は、一俵廿ミルレース（一俵粃六十キロ入）生産費差引き、利益は予想外に大きかった。

斯くてモヂアナ線珈琲耕地契約者コロノ等は契約終了後は再びコロノ生活を嫌って、米作へ、米作へと轉向した。資本金なきものは、米作請負業の小作に、利を見た伯人地主は、米作を日本人に請負わした。第一欧州大戦中、一時、此の地方には日本移民の米作者五百家族以上を算した。

然し欧戦後の不況で米價は暴落し、連作で地力は減退した。米作移民は四散した。ノロステ線へ、ソロカバナ線へ、

珈琲栽培へと流轉した。

四、北西線（ノロエステ）に殖民地創設

ノロエステ線日本殖民地の最初は、第二回熊本移民上野順吉から創まる。

彼は同線サン・ジョアキン珈琲耕地（今のトレド・ピザ駅同名耕地）へ配耕された（二九一〇年）が、一九一四年には、同駅より八十キロ軌道の前進せる、アルブケルケ、リンス駅直上の五域を、伯人のコロノ仲間の世話で購入し、美事な珈琲樹は日本移民の最初の栽培せるものであったが、一九一八年九月六日の大霜に枯死してしまった。

上野が入殖した翌年即ち一九一五年には、同航海者で、同耕地の仲間八家族が、同耕地監督ジョアキンに誘導され、上野耕地と丘一ツ越えたバルボーサと呼ぶ森林地帯を、五域づつ購入した。彼等八家族の移民が、耕地を去つて入殖したのは一九一六年その歳から珈琲栽培を始めた。熊本移民の人々で藤永力蔵を中心とし、第一回移民の大村千太郎、第三回移民の馬場益吉、師富卷蔵、甲斐喜次郎、桑田勝蔵、綱田重蔵、中川トキ女等であつた。當時、駅より一キロの地帯が一域百ミルレースの時價であつた。バルボーザ殖民地周囲の土地が、既に伯人に購入されていたので、この殖民地は日本人殖民地として、これ以上発展の餘地はなかつた。

同じくサン・ジョアキン耕地の同僚達で他の組は、バルボーザ殖民地より反対の鉄道線路を越えて廿餘キロの、ボア・ビスタの森林地帯を購入して殖民した（一九一六年）川野益躬、鳥井喜熊、成松敬蔵、柴尾新一等の十家族であつた。この殖民地は、マレッタの發生に一時、生産物の收穫不能におち入り、殖民地の發達を阻害されたが、リンス地帯日本殖民のマレッタに洗礼うけたは彼等が創めであつた。

ブリグ牛殖民地

ノロエステ線ブリグ牛殖民地は、一九一二年、英伯人共営のサン・パウロ土地材木会社で、土地を十域一区として売出したに創まる。民間殖民地としては、當地帯最初のものに属する大殖民地であった。

総面積四千二百二十二域、入殖家族には、その現地より殖民地までの汽車賃を興えた。平野殖民地より約三年前の創設であつたが、日本移民が地主となつて殖民し始めたのは一九一五年福岡移民の千原七郎、宇野順治、一ノ瀬勘助、日野千次郎が入殖し、次でビラ、ボン・フキンより堺徳次郎、阿蘇清、サントスより佐賀移民の鐘江藤太郎、東島初一、貝原儀一福島移民の高橋善之助佐藤清水等が最初の入殖者であつた。会社は日本人部を設け、佐賀移民の青年宮崎八郎を書記部長として雇入れ、殖民地土地売の宣伝をした（一九一六年七月）

その後会社は段々と売出土地を拡大した。ブリグ牛日本人大殖民地（六千域一千家族）をなすに至つた。宮崎は会社総支配人ジェームス・メラーの退職と共に勤続十八年の会社生活をやめた。



（写真―宮崎八郎）

當殖民地は他日本人殖民地より尖端をきつた文化があつた。

甘蔗栽培と砂糖製造を日本人でやった。工場生産品運搬用のカミニオンを一台購入した。日本殖民の尖端カミニオンであつたが當時馬車道の砂深き道で、カミニオンのタイヤは、砂道路に空廻りのみして遂に運轉不能に終り、カミニオンは牛に曳かれて駅から聖市へ送りがえされた。この一団は熊本移民の共同組合の組織化したもので、指導者は鳥取移民のインテリ、早稻田経済科出身の山根寛一であつた。彼の助役として木村淳蔵等が業に盡瘁したが、砂糖もメラードばかり出来て組織は流れてしまった。

平野殖民地

ビラ・アドルフオ新珈琲栽培請負業に、森林開拓の、所謂、「火田墾耕」を、其他殖民地的生活の体験を得た平野配下の日本移民等は、収益金も各家族三四コントスづゝ出来たので、舊珈琲耕地に再びコロノ生活の型にはもうはまらない。独立殖民へ自由の天地へと。

當時平野は、尚ほグワタパラ耕地の総監督を続けていたが、支配人サルトリオが、珈琲耕主となつたに対し、羨望もあり耕地支配階級生活の倦怠期にも入っていた。コロノの同志連中と協同して、殖民地企画創設の案を練り出した。

それより約半年目に、適當の地を物色したのが、ノロエステ線、プレシデンテ・ペンナ駅十三キロメートル奥の、トレスバールラス一千二百域の森林地帯であつた。地價、一域百ミルレースで売買契約した。

先発隊二十餘人を組織し、出発させたのが（大正四年）一九一五年八月、彼等先発隊は、後続入殖者の収容所を建てた。入殖次年度の食糧にと、米作を企てブレジョンを開拓した。その年末には八十二家族が入殖した。翌年一月上旬より、マレッタ患者が現はれ、何等体験なき人々の群は、予防をせなかつた。それからそれと猖獗して悲慘を極め、死者八十名

を出した。

この時、殖民地経営費は既に枯渇していた。聖市松村貞雄初代総領事が同情し、薬品購入その他の費用として、平野へ七コントスの私金を貸興した。

マレットタ患者の夥しい中に作物は稔ったが、ヤレ々と案じてる處に、蝗軍の大群が飛翔して来て、収穫物は数日にして喰盡され、惨状は益々辛酷化した。

一九一九年二月六日、平野運平は死んだが、殖民地は栄えた。

ブレジョン殖民地創設

ソロカバナ線邦人殖民地の創めは、ブレジョン殖民地よりであつた。

開拓者は一九一三年、ハワイより北米を経て轉向せる星名謙一郎であつた。彼は古き青山学院出身者で渡伯したのが五十であつた。

彼はリオ・デ・ジャネイロ州のデューリツヒ商会が三百町歩農場に米作指導員として聘されたが、議合わす、該社と關係を断つた。當時リオ州郊外の山縣農場にその経営振を観た、同場の獣医石橋恒四郎と同農場を去つて、聖市に移つた。サン・パウロ市で一九一六年在伯邦人最初の新聞南米週報謄写版のを発刊した。

彼は前年十二月、奥ソロカバナ線ブレジョン（アールバレスマツシャード駅となる）に一千五百域餘の森林地帯を購め渡伯直後の小笠原尚衛と協同し地区割して邦人に売出した。

その頃、ソロカバナ線鉄道はインディアナ駅まで開通していた。ブレジョン植民地は、それより尚、五十キロメートルの奥地で植民者は馬背を頼るか、健脚による外、交通の便はなかつた。

一域三十ミルレースで構ひ、六十ミルレースに売出した。
最初の入植者は、福島移民本田虎之助、菅野興一等の家族であつた。

星名がバイベン植民地を尙其奥三十キロの地点に売出したのは、一九一七年ブレジョン植民地開拓の二年後であつた。

リオ州マカエ植民地

サントアントニオ耕地

皇国植民会社長の水野龍は、聖州のみでなく、リオ・デ・ジャネイロ州に対しても、日本移民を入れ、植民地の計画をすゝめていた。

伯国連邦首府のある處という政治的思惑もあつて、リオ・デ・ジャネイロ州知事、バツケルギと水野及ラファエル、モンテイロとの間に植民地無償下附、日本植民誘入契約成立した。一九〇七年（明治四十年十月一日、候補地を、マカエ郡、サント・アントニオ・カフェー耕地及イタプライ他一部に提供と決定した。州知事はマカエ出身なるが故に、先づマカエに日本人植民地を開設する事にした。

こゝに入植したのが、聖市に於て家族全部で巻煙草の紙巻労働をやっていた舊判事熊本縣人隈部三郎一家六人であつた。尚独身青年有川新吉、安田良一、西澤為蔵等も入植した。翌（四十一年）年第一回移民船がサントス入港、高知自由移民の片岡治義の測量技師一家族三人は（水野龍の親籍）山形自由移民高桑治平青年、高知移民岡村繁吉青年を卒い入植した。

此處では重に米作をやつた。ミールリオ、豆等の食糧生産の収穫もやつたが、農業に何等経験なき彼等には、成績上らなかつたその上、待望の水野よりの植民地経営資金も送金なかつたので益々経営困難に陥つた。

リオ市にあつてこの状態を知つた大平三次は、水野のその

植民地経営権利を州政府より継承した（リオ首府にて最初の商店を経営した男）大平は水野の植民地契約の相棒伯人ラフアエル・モンテイロと提携したが、無資金のため、植民地は又掛聲だけに終わった。

斯くて二年ならずして隈部一家はマカニ植民地を退去してリオ市に出た。

マカエ植民地の青年安田が、現在セントラル線ピンダ・モンニアガーバ駅の重鎮安田良一である。片岡治義測量技師は一九一五年迄マカエ植民地に頑張ったが、後、聖州へと去り、日本植民とリオ州政府の植民の縁は絶たれた。

片岡技師一家は一九二七年南拓カスタニアールに移った。

リオ州マカエの山縣農場



（写真―山縣勇三郎）

日露終戦後、日本海運界のパニックで破産した山縣勇三郎は一九〇八年（明治四十一年）四月初旬、懷中に五万円を携えてシベリヤ經由入伯した。

入伯前、彼はペルー国へ派遣していた彼の子分岩永鞏固を伯国リオ府へ廻していた。岩永はリオ首府で山縣の後を追って来伯した出口峯一郎と共に煙火工場を最初始めた。後に漆器製造及販売店を開かせたが、採算とれず（漆器製法は日本と温度及湿度の急激に違う研究不足から完成せず）出口の死

と共に閉店した。岩永も山縣と別れて南大河州に去ってしまつた。

一九一一年リオ州マカエ郡にカシヨエイラ耕地を買い米作、甘蔗栽培、アルコール醸造等をやつた。當時山縣農場に就働した連中で、後聖州に流れたものに、星名謙一郎、石橋恒四郎、坂元靖、板東喜内、今村広、迫田巳代治等がある。

又山縣のリオ市商店を頼つたものに、金子保三郎、副島恵祐、青木某等があつた。青木は後年一ドイツ女性と恋におち、結婚生活を恐怖し、縊死した。(一九一二年)

これが在伯日本移民縊死者の初めであろう。

山縣は米作に甘蔗に失敗し、最後に同州カーボ・フリーオ郡サン・ペドロ・デ・アルディアに塩田を講ひ経営中一九二四年二月二十五日、六十五才で死んだ。伯国で和製セシルローズを夢見たものゝ一人であつた。

リオ州イグアス米作地の失敗

一九〇六年、聖市藤崎商会員の一人として渡伯した佐久間重吉が、藤崎商店を去つて、リオ首府に移り、商店を開き、失敗から、リオ州イグアス地帯に、伯人の資本で、一九一〇年米作地を開拓し始めた。

この米作地の指導者として聖州より第一回熊本移民の橋口重政が招かれた。開拓地は非常な沼澤の地で、開拓半途にして従業員大半マレッタにかゝり、橋口は死亡、そこで開拓は止めてしまつた。この米作地に就働したものに、矢崎節夫、白土寛治、宮田稔、河野某等がある。

當時イグアス町は五百戸にたらぬ小邑であつたが、その寺院本堂は、池に臨みて建て、佛教趣味豊かに塔影を水におとしていた。

その邑に五十近い伯女産婆がいた。「私の夫は日本人であつた」と語つていた。産婆の示す夫の遺留品は、金蒔檜松

竹梅の重箱で、家の宝物として保存していた。二女あり、長女は齡三十に近かった。ムラタに酷似した容貌であった。其處で生れた橋口の娘は、彼の産婆の手に洗われたものだ。第一回熊本移民浜田太作の墓もマツシヤンボンバの共同基地にあった。

ミナス州金鉱坑夫移民の渡伯

笠戸丸移民がサントス港に無事入港したのは六月十八日、その歳の七月、神谷忠雄は東洋移民会社の代表者として伯国に來たが、聖州政府當局と神谷との間には移民契約は成立せなかつた。

土佐丸移民中止當時の緣故プラド・ジヨルダン会社と計り、ミナス州の英国系資本のセント・ジョン・デルレー金鉱株式会社經營のモーロ・ヴェリオ金鉱に、採掘日本精煉坑夫百七名を輸送の假契約を結んだ。神谷は、それを土産に一応帰国した。

その際神谷が聖州のアンツネス・ドス・サントス船会社と商懇談を遂げ、他日日本郵船及大阪商船両社のサントス港代理店としての關係をこの際根ざして歸つたことは、日伯航運界に盡したものがあつた。

當時の臨時代理公使藤田敏郎は単独坑夫移民には反對であつたが、大正二年六月廿一日午後神戸港を出帆した欧州航路の郵船三島丸は、伯国ミナス・ジエラエス州モーロ・ヴェリオ金鉱行坑夫百〇七名の独身移民を續んでいた。坑夫は年齡十八才より三十才迄のものであつた。

坑夫の大多数は九州人で他は広島、福島を合せ二十餘名であつた。この中六割は金鉱夫としての体験者で、他は軍人上りや中途退学の学生達が多かつた。東洋移民会社のこの坑夫募集係が渡邊孝で（後年モチ産組の組織者）この坑夫募集には、金鉱会社の代表青年工學士ロバート・ロウレンス・カッ

プが東京に派遣され、神谷がやった假契約を移民会社と本契約結んだのであった。

坑夫一行の監督兼通訳は、水戸高校の教授をやめた岡野小太郎で、一行はマルセイユ港で、佛船フルンス号に乗換えてやってきた。

モーロ・ヴエリオの金鉱は、八十年の歴史をもち、當時労働者二万人を擁していた。労働者に対する文化設備も當時としては完備した方で、八時間労働制であった。日本人坑夫は五年契約、給料二割は帰国費として会社に強制貯金の条件であった。

到着後一週間の休養、愈就働した坑夫は勿々同盟罷業を起し、坑内労働を断然拒絶した。理由は、日本の銅山坑内は探長一千尺内外で労働に適する換気設備あるも、當坑内は地下六千尺乃至七千尺で、地下高熱に堪えられぬと云うのであった。

ペトロポリスの我公使館より野由良治通訳官と東洋移民会社伯国代理人が出張し、妥協策を講じたが、岡野通訳の慰留雄辯も効なく、百〇七名坑夫団は、腕力沙汰に及ばん氣勢を示し、厳しい守衛を嘲弄しつつ二三伍々、翌年三月迄には逃亡してしまった。

今、パラナ州クリチバ首府に、パラナ邦人の元締格たる安元青太、セントラル線タウバテー駅の福田万蔵、聖市の一ノ瀬等が、當時の逃亡坑夫の生存者である。

家族坑夫であつたら、落ついたらと生存者の二人は語っている。

ジユキア線

アンナ・デアス殖民地の開拓

第一回沖縄移民のカナーン耕地逃亡者七八家族がサントスのジャバグアラ石山切崩の人夫に就働以来、フロレーズ耕地の沖縄移民もサントスへ出、サントス港は、沖縄移民の集団

地とはなった。

彼等沖縄移民の労働戦線は、ドツカスの珈琲袋運搬夫へと進出した。婦人小供は、郊外のカンポ・グラндеに板の假小屋を建てゝ住み、蔬菜畑を開墾した。

蔬菜は竹籠に盛られ、沖縄婦人の頭にのせ、サントス市民へ補給されたが、常時市民は非常な蔬菜不足になやんでいた折とて、勤勉な日本人は決して市民から排斥はされなかった。

一九一二年サントス―ジユキア鉄道開設の起工が始まると、サントス市の沖縄移民は、四十餘名この鉄道工夫労働の方へと轉向した。サントス港より大西洋岸にそつて一直線に南下したジユキア線は、八十キロの處で、四十度右轉廻し、海岸山脈の峽間の平地へ軌道を敷き始めた。その轉廻基地にアナ・デアスの駅が設けられた。

大正二年三月（一九一三年）鉄道工夫より足を洗つて、この絶佳の平坦地に開拓の鋤を入れたのが、宮城利三郎、比嘉牛、新垣平太、仲程清太郎、仲村渠常昌、平良松六郎等であった。

彼等はフロレス耕地及カナーン耕地の第一回移民の若き逃亡者の群であつたのだ。

平良は亜国に去つて、マトグロツソ、ポルト・エスペランサ側より鉄道工夫に働らいたが、後亜国に戻り、サントス・ジユキア鉄道工事の起れるを聞き再渡伯したもので、同鉄道で一時枕木の請負切出し等もやった。そしてアンナ・デアスに根拠をさだめ、さゝやかな米作地の開墾をした。

稲の熟れる間にセードロ材で木臼を刳つて、粃を搗き、附近の浜土人（カイサアラ）に売った。カイサアラはそれまで米と呼ぶ喰物の夢をみていた時代であつたので驚喜して米を求め、白米一リットル四百レースで売れた。サントス・ジユキア線中此處が日本移民の最古の開拓殖民地である。

粃種は内地種子で、成熟して搗いたら、半赤米が多かつた。そこで翌年より成熟の稻穂の成長美事なのを田立のまゝ

すぎき特種子に収穫保存し、斯くて赤米への退化を防いだ。平良松六郎は其土地七十域（七十域というが百域以上あった）の地権登記料に窮し、星名謙一郎に相談した。星名は無利子、無保証人、無保証書で立替えて呉れた。その恩義に感じ、星名がブレヂヨン殖民地設立の際、協同者小笠原へも種子十俵を贈ったそれがソロカバナ線奥地帯の種子粃となったものである。

五、地歩を築いて独立の殖民生活へ

以上列記せる外一九一〇年より、一九一八年、即ち欧州大戦熄む年まで、日本移民は耕地を轉々しつゝも餘財を蓄貯し、僅かづゝではあつたがコロノ生活を脱して独自の植民生活へと邁進していた。

タイパスの開墾地

旅順丸で一九一〇年来伯したジャタイ耕地の引上げ福岡移民馬見塚竹蔵一家は、聖市より二十キロの西北タイパス山麓に、借地開墾し、馬鈴薯栽培と養鶏と蔬菜園を創め、その努力は報いられて数年後に地主となった。バナ、やマンデオカ畑を開墾した。やがてこゝも日本移民七八十家族の集団植民地となった。

彼の栽培したバタチンニヤ種子がビーラ・ジュケリーに播かれた。彼は日本移民バタチンエア栽培界の先人である。

サンタ・アンナ集団地

聖市より六キロの北方にある、サンタ・アンナ日本人植民地創始者は、第二回旅順丸山口移民上利山三郎であつた。グアタパラ耕地のコロノ生活を了えて、一九一一年八月彼は同士七家族と土地を購入移住した。當時地價は一メートル平方

一ミルレースで主に蔬菜を栽培した。

モルンビ 開拓地

笠戸丸の鹿児島移民瀬戸上金四郎、宮田勝衛等が、サン・マルチニオ耕地より聖市に、大工の仕事で、モルンビー方面まで進出していた。その頃は第三回鹿児島移民の迫盛吉、籠原藤助家族等も一に仕事してた。モルンビーもいゝ處だ。住みよい處だ。斯くて彼等が移り住み、鹿児島移民の聖市郊外根拠地の一ツとなった。一九一三年頃のことである。

タボン開墾地

聖市より西南十四キロの處、一九一五年、岡山移民清水熊太郎、守屋敬太郎、福島移民の古野勝次郎、青木幸太郎等が人に知られず土に親しんでいた開墾地である。

エメボイ開墾地

一九一五年頃より聖市南西のエメボイの森と谷に開墾してた人々があつた。吉村岩根、森長之助等がそれで、後に海外興業会社が農事實習場を開いた（昭和七年）が、彼等はその十七年も前からの開拓であつた。第一回山口移民の伊藤儀三郎も此處に移り住んだ。

第二モンソン殖民地

連邦政府が第一モンソン殖民地に手狭を感じ、広野二十キロを距てゝ、一九一三年第二モンソン殖民地を開設した。その年入殖したのが、第一回福島移民のビード耕地に居た山田末吉家族と、第三回福島移民の三瓶淳、第二回高知移民の加納一意及沖繩移民新垣蒲戸等であつた。一九一七年頃より棉花栽培を目指して、邦人七十餘が入殖した。医術を以つて殖民者を安心させていたモンソン聖人福岡移民の川原政右工

門もこゝに歴史をつくった。

イガラパーバ集団地

第一回広島移民の臼井介仁が通訳となって第三同巖島丸移民を伴ふてこの駅、サン・ゼラルド耕地に就働したのが、當地帯へ日本移民の草分けであった。一九一二年だ。

そのコロノの中に、福岡移民の八田一藤家族がいた。彼は後にカンナ・ブラーバ耕地に腰を据え、甘庶栽培請負業に、米作に邁進した。彼は又甘蔗の国産種を連作しては、退化の一路を辿るものとして、国産種をやめ、ジャヴア種を栽培し、當地甘庶界を躍進させた。

移り来て三十五年、最初の配耕駅より他に流れず、そこに根をおろした日本移民八田は三十万日本移民の四十年流轉史に稀な存在である。

彼の妹は伯人に嫁した。帰化の手續、同化を提唱せずとも、伯人は彼の行動に事業に、満腔の敬慕を表している。此處は彼を中心とした日本移民の集団地となった。

パウリスタ線

モツーカ米作地

グアタパラ耕地契約中より、耕地に近い處から、此處に開墾の熱情を燃していた一組の移民があつた。長崎移民の馬場直、熊本移民の前橋宗一、三次一平、志永新蔵、古庄日吉、坂本一徳、小畑末次、村上定八等の家族であつた。

一九一五年拾月より、移り来て米作に精進したがマレツタに悩んだ。殖民地の名をその後東京殖民地と洒落た。珈琲栽培へも、棉作へも発展した。後に集団百家族を越えた。パウリスタ線中、日本移民古参殖民地である。

ジユキア線

イタリリ開拓地

ジユキア線鉄道敷設の工夫、沖縄移民の大越源昌、大城孫吉、古我知平三郎の三家族がこゝに開拓始めた。一九一五年であつた。

アンナ・ディアスに次で開拓された處で、翌年より続々と同縣移民が移つて來た。米作を主とし、雜作をもやつた。

セードロ開拓地

ジユキア鉄道線が、サントス、ジユキア間開通した。それから二年の一九一七年、沖縄移民の赤峯新野栄、山城柳吉が、セードロ駅に移住した。ジユキア線に、最初より土地を購めて入殖したものは、斯の二家族が初めてである。

アララクアラ線

リオプレット開拓地

同駅の東北九キロの處に福島殖民地を開拓した。一九一六年の事で、開拓卒先者は福島移民の安斎直次であつた。

カニンデ米作地

モヂアナ線のカニンデ駅、ジュンケーラ・デ・アルメイダ耕地に、一九一四年入耕した福岡移民の丸林麟三郎が、一九一六年より耕主の出発で米作を開始した。日本移民の米作の腕は冴え伯人も充分信用し始めた。今迄荒蕪地とした處に米作の利益が潜んでいたと、伯人も認識した。

ソロカバナ線奥サント・アナスタシオ

バイベン殖民地

當時はソロカバナ鉄道線の最終駅はインデアナであつた。

それより七十二キロメートルの奥地、バイベン殖民地は、一九一七年、星名謙一郎が売出した森林地帯であった。売出の年、入植したのが、長崎移民の渋谷駒平、広島移民の目崎松右エ門、鹿児島移民の上園伝蔵、福島移民の本田朝生等であつた。

エトル レグルー駅

現在のプロミツソン駅の舊駅名を、エトルレグルーと稱した。日本人はこの発音困難で、エイトコエグル駅と呼んだ。一九一六年に駅より二十三キロ奥の原始林に唯一家族開拓生活していた福島移民の後藤七郎が居たが、その数年前に三浦某がこの奥に、土人の部落に入り、土人と共同生活をしていたことがあつた。後藤に次で移り住んだのが、サン・マルチニオ耕地より熊本移民続雪太郎姉兄弟家族と奥田重記、柴尾六津次及第一回鹿児島移民の草野甚助等であつた。彼等は入植後直ちに山伐山焼して珈琲を栽培した。駅より八キロの處であつた。

上塚周平等が植民したのはそれから二年後のことである。

ペンナーポリス殖民地

一九一六年サン・マルチニオ耕地のコロノ生活を清算して當駅より二キロの、アグア、リンパの森を求め珈琲耕地を開拓した熊本移民があつた。代田喜市、梅田伴蔵、岡本忠吉の三家族であつた。

ペンナポリス駅は町は早くから整つた町で健康地帯であつたが周圍十餘キロ米は平坦なカンポ地帯で、パスト地帯となつていた。その為め同駅附近は森林地帯に遠いので一九三〇年頃奥地森林地帯は貨物自動車の道路が開通してから開拓され始めた

パラナ州

クリチーバと日本移民

第一回移民でゾモント耕地を引き上げた熊本移民の独身連がサンパウロ・フアシナ鉄道工夫に就働していた。その中の松岡甚太郎と坂本栄八の二人は、鉄道工夫解散後、徒歩で、パラナ州のクリチーバ首府迄進出した（明治四十二年五月）當時サン・パウロ、クリチーバ鉄道線は未だ開通していなかった。

彼等は郷里では全くの農夫であつたが、日露役の兵隊上りで、クリチーバ市で當分労働して旅費を稼ぎつゝ亜国へと放浪した。

一九一一年、熊本移民の村崎豊重が、金子保三郎製造する處の玩具を擔いで、クリチーバ市まで、行商して廻つたのが、邦人行商の創めであらう。大正四年東京外語出身の杉山英雄及松田新吾が、聖市よりクリチーバ市に移り住んだ。彼が日本人としてクリチーバ首府に移り住んだものゝ始めであつた。

アントニーナ町

及カ、ツ村の開拓

パラナ州の大西洋岸に面するパラナグア湾の奥にアントニーナの小港がある。こゝよりカノアで四時間、北指して漕いだ處にカ、ツ川の入口にカ、ツ村がある。

一九一七年、松村総領事のすゝめにより、東京外語出身の長谷川武が福岡移民安元茂吉と愛知移民の原甚五郎の二家族を伴うて入植した。カ、ツとは「美しい葉」とのツピー土語である。この二家族よりやがて十二三家族の日本移民集団地となった。が、後には、アントニーナの小港町にも日本移民は移り住んだ。

以上挙げた開拓地や殖民地は、笠戸丸移民渡伯以来約十年間の、日本移民発展状態の梗概である。

大体、カフエー耕地のコロノ生活から、植民生活への轉向は日本移民の渡伯以前四五年までは仲々に困難であつた。

成程コロノの契約期限満了後、公然と移住し得る植民地は處々にあつた。そこは耕地コロノの自由人植する避難所の如き看板はよかつたが、實際は奥地植民地は環境未開で入植後、経済的に耕地コロノ生活より一層窮迫する處であつた。

歐洲より渡伯した植民が、直接植民地に這入つても、周圍に都會がなかつたために、生産物の売捌きに非常な困難を生じた。もし都會があつても、道路の平坦と完全なものが缺けていた。

當時の道路は、馬車の通る道が、駅から各珈琲耕地には一筋あつても、耕地から耕地へは連絡してゐる處もあり、連絡してない處もあり、而も耕地と耕地の境には、木柵の大戸があつて、交通人だからと云つて自由には黙つて通れなかつた。会辞して挨拶して許しを乞はなければ、旋毛を曲げて通さない耕地もあつた。

道路の修繕は年一回又は二回すればいゝ方でそれも修繕するのは耕地より駅に到る道路がおもで、耕地から、耕地に通ずる道路の如きは、開通して以来一回も修繕せず、雨水の荒らすにまかせ、草の茂るまゝにある道路が多かつた。

公設植民地から、鉄道駅までの道路の如きも、凸凹道が多く植民協同修理は殆んど行きとゞかなかつた。

そこで植民地は、自然に自給自足の生活に陥入らざるを得ない。農産物を大量生産しても、駅迄又は都會迄運搬するにも、カミニオンがないから、牛車でやるか、トロツパであつた。

それも道路が不完全な為め、運搬が困難な上に、途中動揺のため、生産物の破損が甚しかつた。

牛車やトロツパ、馬車では、全く運搬効率は上らない。そ

れだけ、當時は大量生産は少なかった。それで一般植民者は自給自足の生活者であった。砂糖が我が家になくなったら、カンナを搾って間に合せる、燐寸がなくなっても、焚火を切らさぬ植民生活状態であった。

自給自足の植民して苦勞するより、耕地コロノ生活の方が、寧ろ楽だと観て、植民地より珈琲耕地へ舞戻った植民者もあつた。植民地で病人が出来た場合、耕地の方が、医師や薬店に便利が多かつた。これは要するに珈琲大量生産の各耕地は、駅まで完全道路を維持し、交通便で医師も迎え易かつた。

一九〇五年頃から、聖州政府も州道、都道に就て相當目覺めて来た。聖市内も交通機関の馬車時代が衰えて、自動車の姿が多くなり出した。邦人の来た頃の聖市内の自動車番号は二百台に達してなかつた。その頃聖市内にカミニオンの姿もボツボツ現はれた。積載量の大きいのと、そのスピードに、市民の眼が白黒して振向いていた。

その頃まではトロツパ隊が、聖市のキンゼ・デ・ノベンブ口街をまだ悠々と鞭を上げ通っていた。聖市から奥地の大都市街へ自動車道路の發達したは、欧州大戰後拾年目頃からであつた。

ワシントン・ルイス州統領時代、州会は、特に、莫大な州道路建設費予算案を可決した。

一九一七年ビリグ牛植民地砂糖工場経営の山根寛一は、馬車運搬を清算せんと三浦鑿（前日伯新聞社長は山根と穀物仲買の協同者であつた）と協議、聖市よりカミニオンを一台仮購入して、生産物を駅まで運搬試験したが、砂道であり、馬車道であつた當時の植民地大本道路は、カミニオンのタイヤが空廻轉して、カミニオンは進行せず、貨物自動車運搬は尚時代のものでないと中止した。

日本移民の珈琲コロノ生活から、植民生活への轉向時期は、聖州の奥地が、道路縦横開通に恵まれ出した時期からであつた。葡、伊、西及北欧移民の、伯国に於ける道路未發達

植民時代は相當に長かった。彼等の植民第一世或は第二世の労苦に比べると、日本移民一世の道路に対する労苦は、彼等欧州人より植民時代が遅い丈け、物の数ではなかった。

日本移民は笠戸丸以来、始めて異国文化に接触した。欧州移民と伍して、耕地にコロノシ、外人コロノと隣合せて、彼等がもつ農業の様式や風俗を見慣れ、手慣れた。それは日本の伝統的な農業様式と、全く異がったものであつた。

鋤の柄のすげ方、鋤の刃の研ぎ方、その使ひ方、すべて違つていた。刈とる雑草も、最初は見知らぬものばかり、カツピンアマルゴーズの穂を、日本のス、キでないかと畑に残した。ルビン草をブラジル芝と信じていたりした。

小屋建の棟木にカプジンギを用ひたり、鋤の柄さえも輕くてやわらかでと、カプシンギ(ママ)を用ひた。ペローバ材で臼を刳つた。牝鶏が卵をかえすに二十一日かゝるものと、知らぬ日本人も多々あつた。

フオイセの振り方、マツシャードの打ち下し方、山伐りの伯人力マラードに、嘲笑されぬ様になるには、日本移植民も相當勉強した。

自然の環境も全く異つていた。春夏秋冬の三ヶ月毎に変わる暑さ寒さではなかった。年中大陸氣候の週三寒四温、最初日本移民の感覚では、感得されぬ四季であつた。

サン・ジョアン祭が過ぎたら、キビを播け、各が過ぎたのだとおしえられた。豆を蒔き稲をまいた月に、イペの花が咲いていた。

身に感じた春の触感からではなかった。
イペの花は八月に咲き、パイナの紅花は、三月頃から咲く。

マンガの實は十月頃より熟れ、柿紅葉は六月に散ると、日本移民が感覚し、のみ込んだのは速やかだった。異つた文化ではあるが、日本移民は農業文化の探きものをもつていた。南欧移民が聖州農業生活で、多年ジク・ザクしてる間に、日本移民は短期間に聖州の米の生産界に、特殊な飛躍生産者の存在

となっていた。特殊な蔬菜大量生産者となっていた。

日本移民はイタリー移民を真似るがいゝ、日本移民はスペイン移民や、ドイツ移民を学ぶがいゝと指導者の聲は消え去った。欧州移民には、とても叶はぬ日本移民と卑下した時代がかくて過ぎ去って行きつゝあった。

サンパウロ市に総領事館の開設

一八九七年八月、駐伯日本公使館が、ペトロポリスに開設され、初代珍田辨理公使は総領事を兼任していた。

二代大越辨理公使時代からは、アルゼンチン国のも兼任していた、三代杉村公債まで。内田定槌四代任期後半から、アルゼンチン国の兼任は止まった。その頃、野田良治は副領事を兼て二等通訳官であった。

五代畑良太郎公使時代には、聖州に於ける日本人も一万人を越えていた。ペトロポリスの山中から、聖州日本人の事務をとることは、益々不便であった。公使よりは度々日本政府へ、この不便を具申したが、日本政府には予算がないとほつたらかされた。

一九一四年大正三年サン・パウロ州政府で日本移民問題が、やゝこしくなると日本政府も予算がないとノオノオとしておられなくなった。當時、駐在リオ市の松村貞雄総領事に、聖市出張永続駐在を命じた。

一九一四年九月二日、松村総領事は、大谷彌一書記生を伴ふて来聖した。アウグスタ街

二九七番に総領事館事務取扱所を開始した。

欧州第一次大戦勃発の一ヶ月後であった。



（松村総領事―写真）

第四章 各鉄道沿線の邦人殖民地発展

サンパウロ州の地形と交通

聖州の地形を表象するに、右の掌形を以つてする。掌の真中に、聖市が展開する。その交通網の幹線は指型に発達しているのを見出す。

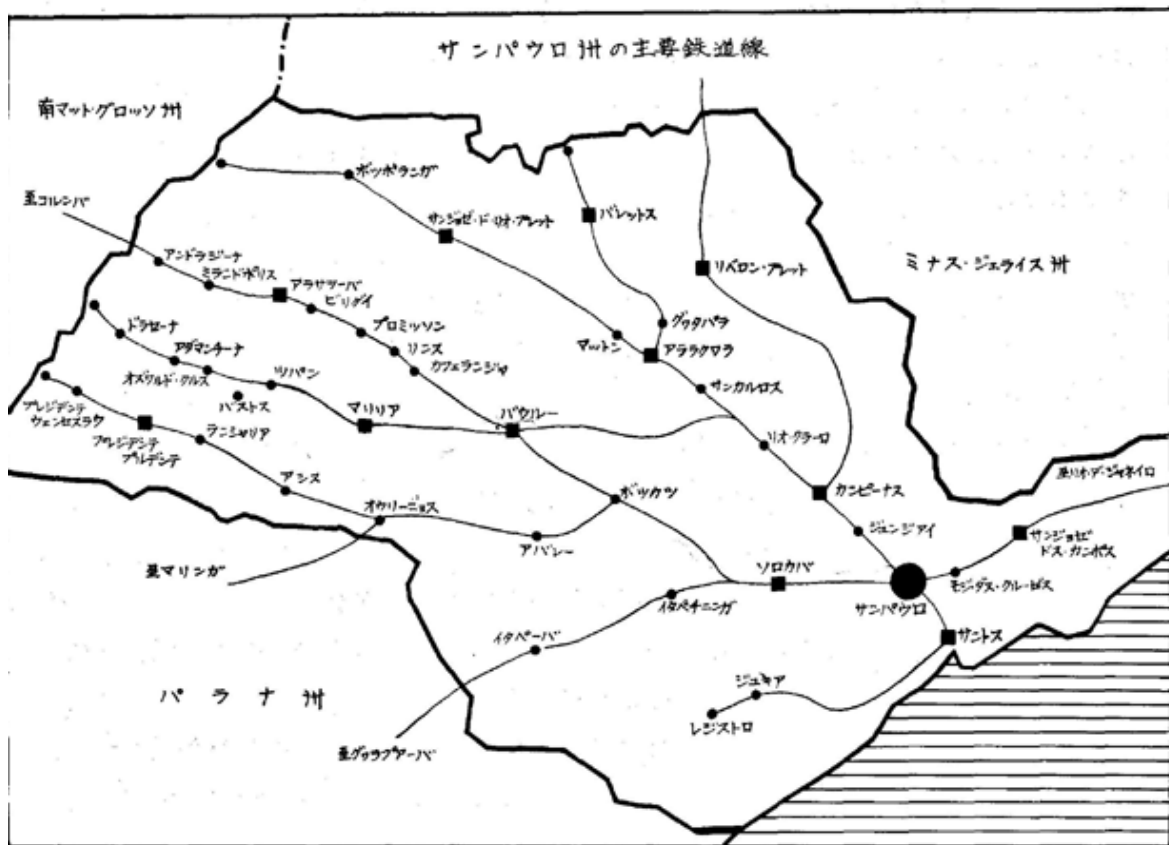
- 一、親指線が、隣州の伯国首府リオ・デ・ジヤネイロ都へ通ずるセントラル鉄道線である。
- 一、小指の交通線が、聖市よりサントス港を経てジユキア鉄道線で、大西洋海岸に沿って南進する。
- 一、紅指交通線がソロカバナ鉄道線である。
- 一、中指交通線がパウリスタ鉄道線にあたる。
- 一、人指がモヂアナ鉄道線を表している。

赭土地帯のモヂアナ線と日本移民

人指線のモヂアナ線は、葡人の殖民者らが開拓労力の不足を補給するため、隊を組んで、バンデランテの名をつけ、土人狩をし、奥へ奥へとすゝんだとき発見した赭土の豊沃地帯であつた。

こゝは聖州第一の肥沃地質を代表するテーラ・ロツシヤ即ち赭土地帯で、珈琲のモヂアナは世界一の良質珈琲とお自慢の珈琲栽培良地帯であつた（赭土は火山的成因で輝緑岩の崩壊風化より成る粉末の赤土）。

鉄道はドン・ペードロ二世時代の一八七五年に敷設された。



サン・パウロ市近郊へ、珈琲樹が栽培されたのは一八三〇年頃だとされている。それから奥地へ奥地へと珈琲樹が栽培され出した。一八六〇年頃、モデアナ線の赭土地帯がカフェー樹栽培の最適地と見做れていた。

他線の砂土地帯のカフェは、栽培後二年にして開花結實し、拾四五年が全盛で二十年頃より早くも樹相老衰の徴を示

すけれども、モヂアナ線のテーラ・ロッシヤ地帯は、栽培後五年にして開花結實し三十年後も尚若樹の相を呈していると誇られる。

標高度といふ地形が波状形といふ珈琲栽培に好條件で、肥沃地質、この地一帯珈琲栽培地帯と化してしまった。

モヂアナ線の珈琲の都、それが、リベロン・プレート市だ。四十餘年前、杉村公使の訪問をうけたとき、迎うるに「君か代」の楽隊を以てし、乙女のさゝぐる菊の花束に、公使の魂を羽化させた都であつた。

土人狩の一隊バンデランテスの、この方面に進出したものは莊園主の分系ジュンケイラ一族のものが多かつたが、珈琲栽培最好適地となるにつれ後に国際的な色彩が強くなつた。伊太利人も独逸人も英人も珈琲園を経営した。

聖州珈琲界の経済的實権が、この地方の珈琲耕主連に握られた。そして聖州の政治支配階級へと躍進した。こうした珈琲耕地帯に日本移民がコロノとして多数需要された、日本移民会社は諾々としてこの方面の需用に應じて移民を入れたのであつた。

當時リベロン・プレトを中心に周囲の珈琲各耕地を「日本移民のコロノ学校」と移民会社は宣伝化していた。

耕地の鐘の音に起きて働らき、鐘の音に眠むる邦人コロノの姿は、約三十年近くモヂアナ線に絶えなかつた。

一時、世界総産額珈琲の三分の二を占めていた伯国のカフェ生産樹は、二十億万株と数えられた。その四分の一の五億万株を有するモヂアナ線地帯であつた。

日本移民がこのテーラ・ロッシヤ地帯に現われたのは一九〇八年からで、モヂアナ線の珈琲全盛期であつた。耕地から耕地耕地、耕地と寸分の餘剰地も小農階級にのこさぬ半ば莊園的なモヂアナ線であつた。

日本移民としては、珈琲栽培の歴史も知らず、その環境にも慣れぬ處から、この地帯に土地を求めて独立小農に入るなどゝは、當時夢想だもせぬ地帯であつた。

その日本移民が、珈琲耕地のコロノ生活の環境に慣れるに従って、何う動き出したか。

珈琲耕地の周囲に展開する広野、自然林、特にその自然林と広野間に流るゝ河川の沿岸の沼湿地帯―そこは珈琲耕主達から、伯人農家からホツタラかされた利益なき地域であつたが、日本移民にとっては、郷里の米作歴史の血が湧く垂涎の地であつた。

あの低湿地を耕やし粃を播いたら、郷里の水田を偲ぼるゝ稲穂の波が、やがて黄色に穰るんであらうにも鬱々たる希望が燃えた。

日本移民は耕地の畑に珈琲摘む間も「ブラジル人は何故あんな處に稲をうえぬのか」と語り合つていた。

あんな低湿地に稲をうえて先づ食糧を穫る日本移民の斯の抱負は、遂にその低湿地を借地した、耕やした。そして……生活資料を生産することから日本移民の人間らしい最初の歴史が始まつた。

粃はまかれた。稲は美事にみのつたが、収穫の秋に日本農民の血は、マレッタ菌に冒されていた。寒感と高熱に悪戦苦闘した、附近の伯人社会からは嘲笑されたが、日本農民は遂に瘴癘の地帯を、米作豊穰地帯へと耕やしてしまつた。

別項に述べた半独立農の殖民初期、ミナス三角州の借地米作地帯、モッーカ米作植民地帯がそれであつた。

グアタパラ耕地

日本移民の流れ

第一回移民二十三家族を率いて入耕した平野運平通訳のグアタパラ耕地は、最初・パウリスタ線のみに所属駅があつた。一九二二年耕地内の一隅をモヂアナ線のサンシモン分岐線が開通してモンテイロ駅が新設されて以来、同耕地はパウリスタ線でもあり、モヂアナ線ともなつた。

その頃平野は通訳監督を経て全耕地の総監督となっていた。

同耕地内に邦人コロノは常に二三百家族を就働させていた。その中には人物も集まったり平野と同窓後輩の東京外語出身の畑中仙次郎も、福川薩然も富岡漸も同耕地に来て、平野の下に邦人コロノの監督を勤めた。瀧澤仁三郎や、馬場直等もそこに集まった、が、瀧澤や馬場は平野に重用されずテレイドのカマラーダとして働らいた。

一年が過ぎた。第四回の新移民が着いたので、畑中・福川、富岡等は同耕地を去って、新移民を率い通訳となつて、モヂアナ線その他耕地へと轉耕した。平野より不平組と見られた瀧澤は耕地をマンダ・インボーラされた。

モヂアナ線邦人の米作のパイオニアとなつたのは瀧澤であつた。

福川、畑中は通訳として耕地を轉々したが、後年平野植民地の小地主となつた。福川は同植民地に小学校を建て日本語児童教育に精進中、植民地がガファニョオツトに襲われ作物の被害をうけたので、植民地惨憺、去つてモヂアナ線に流轉し、後ち同線イガラ・パヴァ駅の邦人産業組合の難関整理に當り、後年聖市日本総領事館の移民部に囑託となつた。

畑中は十年の平野植民地生前を生かし、ブラジル柘植会社に入りバストス植民地創設支配人となつた。宮岡は後年海外興業会社がリオ・グランデ・ド・スール州に開拓した植民地サンタ・ローザの支配人となつた。



(写真―馬場直)

グアタハラ耕地の不平組の一人馬場直が耕地近くのもツーカ湿地を同志と開墾米作開始したのは一九一五年であつた。グアタハラ耕地に働らいた人々は、日本移民の植民地開拓先達となつて四方に流れた。

前記の人々の外に、聖市に近きビーラ・ジケリに植民地を同志拾家族と開拓した秋村長濤一派の人々もグアタハラ耕地出身者であつた。一九一四年の頃である。

モヂアナ線中に米作の盛んな一地に、パナマ耕地があつた。

耕主ジュンケイラ・デ・アルメイダのすゝめにより丸林麟三郎が大正六、七年頃百数十域米作地を墾えしていた。

第一回移民の臼井介仁が通訳振出地イガラパーバ駅に、カシナ・ブラーバの甘蔗栽培地があつた。同耕地で三十五年間一貫し甘蔗栽培をやり、同地帯の伯人をも開拓線へと曳きづつている八ツ田一藤家族は、同地帯ばかりでなく、モヂアナ線の日伯人社会へ名物男視されている。彼の妹は伯人と結婚した。彼の仁侠は伯人社会へもその資材を慈善事業に向けさせた。一世移民としては、彼八田家族は伯国社会への完全な同化者であり、イガラパーバ市と共に浮沈する人々である。

日本移民の渡伯最も盛んなる頃の（一九三〇年頃）モヂアナ線は大小二百餘の伯人珈琲耕地に二千数百家族の日本コロノが耕地から耕地へと、耕地監督の角笛に杞憂しつゝ労働能力を消耗していた。

一九二三年頃、モヂアナ線に、唯一人の日本人珈琲耕主が小耕地なりと難も始めて出来た、僅か十五域二万株餘の珈琲栽培者ではあつたが、大耕地の打ち続くその中にヴィラ・ボンフィン駅の一隅に福岡移民蓑原磯吉がそれであつた。大正二年の渡伯者であつた。

モヂアナ線の珈琲栽培本場地帯に、日本移民でも珈琲耕主になれるぞとの現實が、夢より先に生れた。

全くモヂアナ地帯は、大小お歴々の珈琲耕主所有地帯で、

そこに土地を購入独立農に入することは甚だ困難なことであつた。

小口の土地は耕主連売つて呉れない。その為め當地帯は長い間日本農家は借地農の生活を営むより外なかった。

その小口の借地農者等が、小錢をためてはノロエステ線へ、ソロカバナ線へ、流れて土地を広めて植民した。

肥沃をほこる赭土地帯も、百年に亘る掠奪農の果は、カフェー老樹の生産減退、霜害、枯死、老衰、最近では五億の珈琲樹株も二億萬株へと轉落した。

莊園時代より共和政の自由開拓時代へは入ったものの、モデアナ線耕地帯は、封建形態的殘骸に生きている珈琲耕主階級の子孫が、多かつた。経済的に没落した彼等は何處へ行つたか。

サン・パウロ都市の産業界へと進出したものもあるが、全くの労働階級へと轉落したものも多かつた。

珈琲生産減退、労働力不足、経済の困難に陥つた珈琲耕主連は、他へ耕地を売却するもあつた。一纏めに商談まとまらぬものは耕地を区切つて五萬株、十萬株と切売りした。一九三五年頃よりの現象であつた。

ヴアルガス政權に反抗して聖州共和党の殘党は革命を起して破れた。それが聖州莊園名殘の珈琲耕主等の凋落であつた。

サン・マルチニオ、プラーダ珈琲大耕地も区切して耕地を売却した。ゾーモント耕地も消えた。

昔のファゼンデイロ殿様階級も、その耕地の使傭人の昔のコロノ、或はカマラーダ階級の成上り者へ、珈琲耕地を切売した。

モデアナ線到る處へ、この現實の悲哀が押し寄せている。リベロントプレト市近きサント・アントニオ耕地の二百域をモノしたのは稱田安喜、金氷好男の義兄弟家族であつた。

サン・ペドロ耕地の持主となつたのは石坂幾太であつた。

伯人の伝統を誇るモヂアナ線珈琲地帯だ。他線の如く日本移民の小耕地の簇出は未だないが、日本移民も第一世が第二世へとバトンを渡しつゝ伯人資本階級へ肉迫している。福島敏秀、田中悟、中野益男、後平等、等等がそれである。

リベロン・プレト市は、第一回日本移民の来た頃は人口二万餘であつた。一九一八年（大正七年）サン・パウロ市日本総領事館の分館が設けられた。この前年、海外興業株式会社は聖市支店の出張所を同市に設けていた。分館初代は三隈葉藏副領事で、海興出張所には坂元靖が坐っていた。

世相は日本移民がお上や移民会社を聖市迄追かけまわした不便を、お上や移民会社が邦人移民をその地方へ追かけ廻わすが便宜と變つた。

リベロン・プレト市も珈琲耕地中心の商業市より商工業都市へと移りつゝある。

同地帯における日本移民は小地主より借地農が尚お多数である。

一九一九年イガラパウバ日伯産業組合を組織化したのは、石橋恒四郎一派であつた。日本移民間に産組として産聲を上げたのはこゝが第二回目であつた。

指導者の経験不足、組合員の困迷、経営滑らかならず、数年にして解散した。（資本金百コントス募集二千株、毎株五十ミルレースに対し、応募株一千株を超え、六二七株、三十一コントス餘拂込みあつた）本部をウベラーバ市へ、売店をコンキスタ町に設けていたが、後にイガラパウバ市へ本部を移した。

一時四五百家族集団したバタエス駅の日本移民集団は散じて、今ではイツベラーヴァ、グアラ、ミゲロポリス地帯が五百家族の集団地となっている。

ミゲローポリスに野見山秀雄の息女第二世姉弟、チズ子、賢二が内科、外科の伯国医学士となり（一九四二年及一九四六年卒業）Casa Saude Sao Miguel 医院を建設した。これは同地方邦人有志の永き計画の實現であつた。

パウリスタバ本線地帯の日本殖民

聖州の珈琲地帯本場は、モヂアナ線地帯に次で、パウリスタバ本線地帯であつた。

グアタパラ、サン・マルチニオ、シユミツの各珈琲耕地などいゝば日本移民の農業試練場であつた。

サン・マルチニオ耕地の一隅バリニヤ丘に借地農を始めた一組があつた（一九一四年）。同耕地の通訳連がお役の傍ら、独立農へ人らんとしてもがき開いた處であつた。宇佐見、高野、岩本等の福島第一回移民青年連で、彼等はイタチバ附近にて数年前マンジオカ製粉事業請負つた一派であつた。

独身青年の農業は遂にこゝでも芽ばえなかつた。高野留七は後年レヂストロ植民地に医者代診で活躍した邦人開拓生活の先人である。

一九一五年グアタパラ耕地の不平組が大沼を距てたパウリスタ線モツーカ駅附近のブレジョンを借地して米作を創めた。こゝは後年東京植民地と名を改め、五十家族七百域の植民地となつた。米作ばかりの単作でなく、珈琲も棉花も果樹園もやり、養蠶もやつた。

この借地農にならつてこの界限には借地農の棉作、米作集団が簇出した。

北村政吉（拓務省勸業部農事指導員）がマンブーカに米作開拓したも、東京植民地にならつたものであつた。

それより拾年この地帯にはモンテ・アレグレ植民地二十家族コリギンニオ植民地二十数家族、リンコルン植民地、ダスアルマス植民地等の外チンビラ駅にサンタ・マリア耕地それからビンチビ耕地、カボ・ダス・カサス耕地等々の借地農があつた。

それでも皆で二百数十家族に過ぎなかつた。

この地方の諸植民地の繁栄に、海外興業株式会社の企業慾

が俄然動いた。一九一九年、既成珈琲耕地を購めたのが、コレゴ・リコ駅のアーニーマス珈琲耕地であった。

全面積六百域、珈琲株数三十二萬株、この初代支配入江越信胤農学士は、後に聖市日本総領事館内拓務省勸業部主任となつて、在伯邦人の農業指導役を勤めた。耕地二代目支配人が矢崎節夫であつた。三代目が栗山篤であつた。

このアニーマス耕地の附近に、ジャボチカバル市がある。

この界限に於ける日本移植民の發展足溜地であつた。パウリスタ線の珈琲地帯はグアタパラ、サン・マルチンニオ其他二三耕地の赭土地帯を除けば重に砂土地帯である。掠奪農後の耕地は施肥時代に入つた處であつた。

聖州奥の未開森林地帯へくと掠奪農流行の世相からして、舊珈琲地帯の施肥耕地には邦人の希望はないのであつた。

パウリスタ線開拓の最後にカンピーナス市郊外にあるカーザ東山の東山農場がある。

ワシントン・ルイス大統領時代の、国際協調華やかなりし頃日本資本家達も伯国への好進出期であつた。

三菱系のカーザ東山が、農事部をカンピーナスに一、六〇〇域購入した。既成耕地であつたを改耕開墾した。資本金二千コントスを以つて有限責任持分会社を組織した。Fazenda Monte Oeste Limitada と名つけた。一九二七年である。



(写真—山本喜譽司)

支配人、農場長を兼ねて山本喜譽司が経営した。珈琲樹数は二十五万株であった。當時聖州珈琲界に悲鳴を上げさせた害虫ブロッカの駆除に東山耕地支配人山本はウガンダ蜂のコントラ・ブロッカを応用してブロッカと闘った。

この實際的應用は害虫ブロッカをして繁殖の餘地ならしめるむ功績を上げた。伯国官憲も満足、珈琲主連も東山耕地のウガンダ蜂対ブロッカ虫の自然現象には尠なからず目覚めた。

以後の害はウガンダ蜂を飼養する珈琲耕地にはブロッカ害の猛威が現はれなくなった。

東山牧畜部ではゼブー種（インド・ブラジル系種）を伯国の氣候風土に最適の肉用種として成育していた。

一九三八年、ミナス・ジエラエス州首府ベロ・オリゾンテに於て聯邦政府主催の第七回全伯国畜共進会に出頭させ、審査の結果は、ブラジル第一の最優秀牛としての折紙を興えられた。

カンピーナス農場は柑橘類の改良にも精進した。ユーカリ樹の植林育成にも計畫的進展をみせていた。

珈琲耕地経営の合理化、設備、整頓は「東山耕地をみよ」と伯人耕主達にも知れ亘った。

東山農場のカルロス・カンポス駅アチバイア川畔に日本酒醸造の工場がある。「あずまきりん」「あずまおゝとり」印の清酒を在伯日本人コロニアに販売している。「ピングはアルコールが多い頭を悪くしますヨ」日本酒「アズマキリン」をのみなさい「アルコール分が尠ないで頭を悪くしませぬ」と宣傳していた。その後「ピング」の一般市況よく利益莫大に、東山酒醸造部もピング製造に予算をたてたが、その折東京本社の東山理事阪本が来聖して居り「アルコール分の尠ない日本酒呑みなさい」と宣伝しておきながら、今更ピング製造とは何事だ、と現場當事者が叱られてやめになった。

パウリスタ線では又リオ・クラロ市郊外に中筋九万一が五十域の地主となり、果樹園生産界に日本人の果樹技術に氣を吐

いていた。

ノロエステ沿線地帯の殖民地発展

中指のパウリスタ鉄道支線と、紅指のソロカバナ鉄道支線とが、聖市より約三百キロメートルの奥地バウル市で終わっている。

そのバウル市を基点として、北西の森林地帯を一直線に州境へ進み州境のパラナ河を越えて、奥マツト・グロツソ州の広野に延びているのがノロエステ鉄道線である。

この線路は聖州の中央を北西に流れるチエテ河畔に沿って下っている。州境を流れるパラナ河に近づく途中にチエテ河のイタプーラ大瀑布がある。その附野に石畳せる廃墟が、森林に蔽れている。

ドン・ペードロ二世が、パラグアイ戦争の時、パラグアイ軍の侵入せるマトグロツソ州の広野に進軍したチエテ河畔の舊屯営地の跡である（一八六五年頃）。

北西鉄道線は一九〇四年から起工を始めた。伯国連邦政府の直営鉄道で、将来はボリビア国鉄及ペルー国鉄と連絡し、大西太平洋両洋をつなぐ南米大陸横断中央鉄道となるものである。

聖州内の鉄道沿線地帯は、全くの原始林として斧鉞の人らぬ未開地ばかりであった。地権もあのエスピゴン尾根から、この川迄は、俺の祖父のもので、それを半分俺が貰ったから、この川から拾キロ先までは俺のものだーという調子であった。

珈琲地帯はモヂアナ線だ、パウリスタ線だと信じられ、ノロエステ線は珈琲栽培地に不適當とされていた、それでノロエステの地主連中は容易に土地を安價に切売した。

封建的な莊園制度を頑守するモヂアナ、パウリスタの珈琲耕地を脱れたコロノたちが、搾取なき平和な自由開拓の独立生活に入ったのが、ノロエステ線の新開拓地であった。

この新開拓地帯に勃興した小地主階級は大部分が伯人系ではなく、大多数は日本移民、西班牙移民、伊太利移民等の国際コロノ上りの群衆であつた。

日本第一回移民九家族が、ノロ線のサン・ジョアキン珈琲耕地に入つた頃のノロエステ線には、ピラジュ牛郡管轄外に珈琲耕地の既成せるものはなかつた。バウル市に近いバル・デ・パルマの二百万株珈琲耕地も當時は斧鉞の入らぬ原始林であつた。

サン・ジョアキン耕地の駅も、森の中の鉄路の側に、傾けるサペ萇の掘立小屋が一軒あるだけで、それが汽車機関士の停車さす目様になつていた。

一九一〇年、第二回旅順丸熊本移民十八家族が同耕地に配耕された。

第一回と第二回の移民が、同耕地に三年辛棒して小金をためた。第三回移民もこれに慣らつた。同線奥のリンス駅に原始林の土地五域或は十域を各家族求めて、開拓珈琲栽培を始めたのがノロエステ線邦人殖民の元祖である。

第一回移民の九家族中、四十年の今日まで殖民生活をノロ線に続けているものは、熊本移民の大村千太郎、井手喜平の二家族だけで、他の七家族中五家族はコロノ契約終了後聖市へ去つた。一家族は家長が精神異状者となつて耕地より帰国した。

第二回移民十八家族中四家族がリンス殖民地へ独立殖民した。

上野順吉、藤永力蔵、川野益躬、烏井喜熊らがそれである。他の十二家族は第一モンソン殖民地へと轉向した。残りの二家族は聖市へと去つて都会人となつた。

リンス駅方面には日本人とイタリー人の小地主や珈琲栽培請負者、借地農者が多く移り来た。各自視察の上、土地を選定し地主と交渉し、購めて移り来た。縁故友人知人をたよりに、或は誘致されて「行けば何んとかならう」と、耕地より家族を伴い當もなく移り来たものも多い植民流行時代であつ

た。

土地を求める資金の工面つかぬものは一先便宜に借地農した、米、豆、ミリーオの収穫をした。

駅町郊外の借地農等は重に蔬菜栽培に邁進し、短期間に相當利益を上げた者もあった。或は一年二年、友人知人の土地に日雇生活して、生活環境に慣れてから追々と土地を求めた人々もあった。

米作の分合作農もあった。食糧なき家族は地主の米作をやり収穫分別けの外、借りた食料も収穫期支拂ひでやり出した人々の群もあった。

借地料を前拂しての棉作者、地主の地に棉を栽培し、借地料がはりに収穫物の分合を支拂ふ生活法もあった。地主の方で食料も貸してやり、収穫歩合から差引く遣り方もあった。五万、或は七万株と新珈琲栽培五年或は六年間契約請負をやるものもあった。

それ等は珈琲耕地の封建組織の固き殻を、叩き破る個人自由開拓の平和な、明朗な生活であった。朝の起し鐘もない、労働時間も制限なく勝手自由だ、夜の寝鐘もない、何時まで夜更かししようと個人の自由だ、翌日の労働に差し支えると思えば、自制して夜更しもやめた。

今日の食糧に困れば、お互に持てるものから融通しよう、誰れも威脅して働らかせるのではないのだ、自分で自分の生活のため開拓するのだ、一作収穫すれば、借金のかえせる、二作収穫すれば、小地主になれる希望が輝やく朗らか開拓生活戦線であった。

リンス駅町の創始は、一九〇八年此駅開通の當時前進する鉄道工夫の或る残部が、補線工夫その他の日雇仕事で、駅の附近に掘立小屋を勝手に建てゝ生活し初めた。これが町の起りだ。

日本移民で最初の移住者は、笠戸丸福島移民の三浦喜和馬であった。福岡移民の川原喜代太、熊本移民の中村一喜、園田喜八郎等であった、三浦は一九一七年、西班牙女性と恋愛

経緯の纏れから、女の父親に狙撃殺された。

バルボーザ植民地に次で入植したのはボア・ビスタ植民地であり、コルゴ・ダ・フキン植民地であった。香川植民地とも呼んだ。香川移民の畑野宗太郎が、松原米次、母倉音次郎、田甫松三郎、等と一九一八年に入植開拓を始めた。

コルゴ・ダ・フキン植民地が後年附近二三植民地が合併してウニオン植民地を形成した。吉住勝彦が先達して嶽村嘉一、南瀬泰三、吉田仙太郎、官本武次郎等の熊本移民と福岡移民の内山吉蔵、権藤一、権藤唯雄、重富猪六等が地主となった。

重富猪六は其後一時帰国し、福岡の舞鶴城堀の蓮の實を持ち、自己の地内の沼に移植した日本移民で伯国に蓮の花を咲かせ蓮根を喰せた祖人であった（一九二六年頃）。

福岡植民地が堀田巳之吉等三家族で百三十域開始されたのは一九一九年であった。

レゴ・リッコ植民地サンタ・アメリカ植民地、パルミッタール植民地 コレゴ・ド・スズキ等々大小廿数ヶ所の植民地が出来たのは一九二三年頃であった。

斯等植民地が開拓されるとリンスの町は急速な発展を遂げた。

平坦な大都会の出来る地形ではない。低き丘上に展開する町であったが、一九三〇年頃には、人口一萬餘ノロエステ線中第一の都会となった。

リンス町に於ける日本移民の発展振をみると、

一九二〇年 九家族

一九二四年 一五家族

一九二七年 五七家族

一九三〇年 八七家族

一九三三年 一六二家族

となっていた（聖州新報廿五週年鑑）

一九二八年郡制裁判所がリンス市に設けられた。陪審員の一人に當市日本移民の成金太田久次郎が選ばれた。彼は當時帰化人ではなかった。

一九三四年一月聖州代議士テオトニオ・モンテイロ・デ・バーロスは新憲法議會壇上にて、日本移民嫌忌議案を提出した時ノロエステ線リンス市は、日本移民化した中心市だと誹誘する。

周囲は奥深い原始林地帯で、前記の諸植民地の他に、昭和、開化、アリアンサ、ゴヤンベ、パナイ、有明、ジエツリーナ、大和、チビリサ、イデアル、サン・ジョアン、共和等の大小植民地と多羅間耕地などが開拓された。



多羅間鉄輔



山根寛一



豊田源行

多羅間耕地とはバウル日本領事館の初代領事多羅間鉄輔が二百域の原始林を購入、珈琲十三万株栽培した。一九二三年で當時は駐外日本官吏で任地地主となり企業する事は、外務官吏規定に反くとの論が反多羅間移民の間にも駐在日本官吏の間にも問題にされた。

それから二十年多羅間は残した。未亡人絹子は故人の遺志として同耕地を「公共事業中の青年農業實習場に提供します」と発表している。

上塚山根協同土地売の企業が一九二三年リンス駅奥四十軒のゴヤンベ千四百域原始林に始まった。その頃、植民地山根のカマラーダをしていた男に、石川達三が居た。帰国後「蒼氓」の伯国移民出発小説を著し後年日本文壇に名をなすに

至った。

山根は又単独でその奥に六六〇域の土地売り企業をやり農興園をおこした。パナイ植民地は佐藤一郎により売出された土地である。植民パイオニアが土地売企業へ轉向したが、ゴヤンベ上塚山根のこの土地売は、上塚鈴木コンビのイタコロミ植民地開拓の意義と異り、全く企業化したものである。ゴヤンベの附近に農田源行は個人で十六万五千林の珈琲耕地を育て上げる。

リンズ駅、プロミツソン駅仲間にガイサラ駅が出来て福久栄植民地、フロリダ、アウロオラ、アグア・ベレザ、アミザード等の植民地に二百家族の日本移民が移り住んだ。

モヂアナ線のコロノ生活清算者等である。二十年後ガイサラ駅も人口五千の町となる。熊本移民の相馬速、福島移民の本田授、佐藤由等がこの駅町のパイオニアである。

汎リンズ青年会の創立

リンズ駅周囲に植民地が開拓されて拾年経った一九二六年汎リンズ青年会が創立し、会の事業に是迄高橋善之助、上村富三郎両商店主が重に郵便物を扱っていたのを譲りうけ、駅がかり日本人の郵便物一切を取扱ふ（郡内日本人家族二千家族になっていた）様、當町の郵便局と連絡許される。バウル領事館指定の諸願書諸届一般を取扱う。農事講習会と品評会を聖市総領事館内勸業部後援で開く。

汎ノロエステ日本人聯合運動会を主唱する。全ノロエステ運動会果一回をプロミツソン駅で開いた。雄辯大会も開いた（田付大使初ノロ線巡視の際）機関誌「共鳴」を発行したも一九二六年であつた、図書館も設置し会員に貸本（無料）も開始した。

斯うしたことを植民地の青年団が組織的に始めたのはリンズ駅のこの青年会が創めてゐあつた。當時の会役員の中央顔振を挙げると、中央執行委員長城間善吉の下に中央執行委員が

六人居た。その財政部長小池亥太郎、図書、郵便庶務部長青山稔、運動部長木村俐及び川島昇、機関誌編集部長原篤、及び浅見哲之助が居た。青年会顧問に上塚周平、山根寛一がいた。

会賛助員に豊田源行、内山吉蔵、吉住勝彦、藤永力蔵、師富卷蔵、亀井満外各植民地代表十四名がいた。会支部青年会が十四あった会員数三百二十一名であった。

ペンナ駅には西班牙殖民が多い。平野植民地は、平野個人が地主より一纏めにして購入した一二三〇域の原始林地帯を入植同志二百餘家族で分配したもので。団体植民地であった。

平野植民地の始まった頃は、ペンナ駅町は極くまばらの人家があつた。その板葺の一軒に日本人として住んだ初めての人は鍛冶屋の古庄常喜家族、次いで広島移民の河尾利市家族、彼の妻みさよが床屋を開けた。鏡一ツを板壁にかけ、鋏一挺櫛一本剃刀一挺の商売道具であつた。女性の散髪屋は伯国日本移民始まって彼女が恐らくイの一番であらう。

熊本移民の古庄常喜が板小屋の鍛冶屋業もこれが植民地町における日本人鍛冶屋の始めである。一九一九年には坂本亀太郎が針灸術をやっている。マレッタ患者も、針灸での気込みであつた。林田伊十がブリキ屋をやリ、その頃広島移民の藤原久人（今のコロニアの資本家の一人）が板小舎の一屋に石油空箱一ツを腰掛にして、穀物仲買業へと出発していた。藤原を第一に福岡移民の今村権蔵、広島移民竹内豊次、愛知移民の服部新一、長崎移民の副島恵祐等、植民者一般が資本的にグングン延び出したのは一九三〇年以後である。

香川移民の藤澤豊次郎は醤油醸造工場をたてた。後年プロミツソン駅の同縣移民黒島醤油と共に奥地日本コロニア社会の需要をみたしている。

ウル植民地、周围西班牙殖民に囲まれて、今村権造が頑張り第一タバチ植民地は熊本移民の河村七太郎がリードした、

バクリー植民地は広島移民の福永司郎が黙々とリードした。第二タバチー植民地は福岡移民の福原信義がリードし後ち穀物仲買業に轉じる。

ハツカ植民地は服部新治兄弟がリードする。

プログレツソ植民地は、一九二七年よりの開拓で、明穂梅吉、福原信義、尾崎孫三郎の協同購入珈琲耕地である。

ノゲーラ植民地は熊本移民寄合の植民地で一九二〇年の開拓である、カフエランデヤ駅の隣接駅グアランタン駅にも日本移民の小植民地が展開広島移民の石川増太郎が苦心したイネマ植民地、僅か三百城の地域ではあるが、岡山、広島、愛媛、島根、香川、山口等の各縣移民の集団地であつた。

栽培の珈琲若木は幾度か霜害を被りつつも植民頑張り通し成樹した。

イネマ植民は広島移民の品川末市がリードしている。セラ・アズール植民地、ボア・エスペランサ植民地、白水植民地、バラグランデ植民地等も展開し、周囲には伯人の新珈琲大耕地が展開しているので、日本植民地は発展を拒まれている、それでも日本移民は合計一、〇〇〇城、珈琲栽培株数一百万を突破し、駅町には村上茂人がカフエ精撰工場を経営した。

ラウルミール駅奥に日之出植民地が展開したのは一九二八年頃で、三〇家族百六十城の小植民地であるが、附近にノロ線に古きピラジユ牛駅町があり、大珈琲耕地、大カンナ耕地等の中に拒まれて広大出来ぬ、リーダーは熊本移民の嘉悦千代喜である。

アヴァ牛駅に、チビリサ駅に、ノゲーラ駅に日本移民の小植民地が開拓されしも大をなさなかつた、周囲の土地が痩せていたからである。

バウル市及び近郊の開拓地

一八九〇年代のバウルは沼澤と森におうわれ、狩獵する人々の焚火する屯所に過ぎなかつた。

Bauru とはツピー語の RIO DE LAGOAS の意味である。

一九〇四年十二月當地がノロエステ鉄道線の起工地となった時は、そこはもうソロカバナ支線の終点駅となっていた。

日本人がバウル―駅に降りたのは一九〇八年十月一日、聖市移民收容所発の九家族移民が、ノロエステ線のサン・ジョアキン耕地（トレド・ビサ駅）へ行くに、一泊したに始まる。

當時、この駅迄出迎えの耕地総監督は、移民を或る飲食店の裏の馬具小舎に寝せた。

バウル町に移り住んだ最初の人は一九一二年で、桑野正樹家族であった。

日本人の宿屋が始まったのは一九一六年で、澤尾磯七、北山吾一のペルー国流れの移民が共営した。

ノロエステ線に日本人の植民地が発展し出す。聖市の総領事館の権限はこの野生日本植民地に及ばなくなった。一九二一年一月、バウル市に帝国領事館が設置され多羅間鉄輔領事代理が書記生古関富彌を伴うて赴任した。

一九二一年九月聖州新報社が香山六郎により創められた。

その頃在バウル日本人は澤尾、古賀政治、柳實太郎と多羅間、香山の五家族であった。

一九二四年には平田崎太郎の平田旅館が出来、柳悦太郎、大野鶴亀の二家族蔬菜園がはじまった、それから四年後、二十二家族となり、一九三三年には一一六家族の日本人が移り住んだ。

市郊外にバッタリヤ植民地が創まり、アグア・デ・パイヨール植民地が、バラコン植民地が開拓される。

グアビローバ植民地が、リベロン・ボニート植民地等が開ける棉作借地農として日本への移り住むもの一時五百家族に達した。

毎年連作の結果土地は痩せてしまつて四散した。

一九三八、九年の頃である。

一九二六年頃のバウル市はソロ線、パ線、ノロ線の三鉄道線の交叉地となっていた。

周囲が沼澤の瘦地でありカンポなる故に、バウルは日本移民の大植民地とはならなかった。
 ノロ線の奥へパウリスタ延長線の奥へと展開する日本移民の集散地バウルである。この地に一夜を汽車まつ人々の群れ、誰れも彼もが大抵澤尾ホテルの客であつた。
 後には冲山九州旅館、藤田、富田等の旅館も出来たが、移植民初期時代日本移民の喰逃げ、病患者、駆け落ちもの等々を世話したのは、この宿主の澤尾夫婦であつた。

(写真—澤尾磯七)
 (写真—同妻春子)



駅名	土地所有家族数	一年年契約借地家族	駅町商工業者家族	合計
バウル市	三	〇	八	一一
チビリサ	一七	五	〇	二二
アヴァイ	五	〇	〇	五
アルベス	二三	六二	一	八五
シンシナート	一四	一	一	一六
グアランタン	二四	一五	〇	四九
ブ・ペンナ	七四	一四二	二	二二七
モンレヴァーレ	三三	三五	〇	六八

リンス	一六九	二八九	一五	四七二
ガイサラ	一三六	五五	五	一九六
プロミツソン	一四七	一四六	一五	四二八
カピツバ	六	二	〇	八
ペンナポリス	三二	二一	〇	四三
プリグキー	二九六	一四	六	三三六
総計	一、〇八八	九四一	六四	二、〇九四

右は調査洩もあれば實数は恐らく二、三〇〇家族と見積られていた。

購入土地は二萬域以上、紬は二十萬俵、棉花は八萬アローバ、豆四萬俵、キビ五萬俵、飼養豚一萬五千頭、珈琲樹数三五、五五五、五五〇株と算し一、一三五、八一二俵を收穫した。

一九二七年二月（舊名ミゲール・カルモン）アバニヤンダーバ駅奥に、日伯拓植会社のバラマンサ耕地五百域が二五〇〇コントスで購入された。

既成耕地で三十二万株の珈琲樹があつた。関西の資本家川西清兵衛が社長であつた。専務取締役は安義喬で彼は聖市に於て日伯貿易の毛絲輸入をやり輸出に伯国産工業原料扱つた。

耕地支配人に野村隆輔、主任に谷口清政が経営した、かような日本資本の進出はワシントン・ルイス大統領の国際資本協調時代の一の現はれであつた。

エトール・レグルー駅のイタコロミ植民地は、上塚周平と鈴木貞次郎が協同して入植希望の同志に協り、個人として一纏めに一千四百域の處女林地帯を、地主より購入し同志と分配した一つの協同植民地であつた。コロニヤの日本人には上塚が主役をつとめ、対伯外交的には鈴木が主役をやつて上塚が女房役であつた。この植民地の計劃に蔭の参與をしたものに間崎三三一があり、香山六郎がある。植民地第三回の最後の支拂金に上塚の日本に於ける同窓先輩菊地恵次郎が渡伯し、

日本金三万円餘融資した。

當時、一域地價一二〇ミルレースで地主から購入した。一域一六〇、ミルレースで分配した。その差額の四〇ミルレース全額五十六コントスは同植民地開拓資金となった。一九一八年聖州全般大霜の年であった。



上塚周平の墓

イタコロミ植民地の開拓當初家族の一つ

イタコロミ植民地の隣接地にコレゴ・アズール植民地が開拓され、上塚の女房役鈴木貞次郎が単独で土地売を始めたものである。百家族を越えた植民地となり、面積は八百域餘である。

茲に移民の草分鈴木が詩的理想境一〇〇域に珈琲の花白く咲かせたが、多感の人は斯處も人手に渡して放浪の旅に上った。

パット植民地、パチニオ植民地、サンタ・イザベラ、カンペストレ、ビリグ牛ヂニオ等々の植民地も次から次と開拓さ

れた一九四五年代には、借地農を入れてプロミツソン駅（エ
ートル・レグルー駅改名）かゝり、一、五〇〇家旅の日本移
植民と呼ばれたイタコロミ植民地とはこの上塚鈴木の最初
の植民地名で、この地方を土人はイタコロミと呼ぶ（石の
児）。植民地内森の中に、處々先住人の墓がある。高さ三メ
ートル位、隋円型周囲卅餘メートル、深さ一メートル幅一メ
ートル溝渠を掘り造った墓である。墓上には何も植えも置きも
してなかった。七、八十年前のものである（栗原考古学研究
所員発掘発表）植民者等は此墓の傍に「御堂」を建て「ブグ
レ」神社とした。神殿の本体には、ブグレの製作せる「イガ
サヴァ」と牛の角型の粘泥素焼の警笛を安置した。

一九三六年七月六日、移民の父と仰がれる上塚周平歿す。亨
年六十一、植民葬とプロミツソン町葬と合併し、プロミツソ
ン共同基地に埋葬した。上塚は瓢骨と俳号した。

渡伯日本移民二十五周年祭に、国家は彼に移民功労者とし
て叙勲した。墓碑の銘は俳人暁雪市毛孝三総領事が記してい
る。

イタコロミ植民地のバラマンサ区、こゝの植民者一同が最
初擇らんだ土地はカポニラの大木の立木なきセラード（瘦
地）であった。セラードを瘦地とは知らず喜こんで擇らび、
こゝこそ開拓に安易な地、俺等の手におえる開墾地になると
開懇したが、ミリーリオも、フェジョンも、野菜も其年は出来
なかった。彼等植民は肥沃な地程森が探くて立樹が大きいも
のぞと始めて知った、同じ地主のバラマンサの地はベローバ
林立の地であった。

入植當時他の植民区とは飛距れ森が探かくオンサ（豹）も
出ればアンタ（獺）も家近く現はれた。オンサに人間の赤子
がさらはれたという説もあるがこれは伝説であらう。

日本移民最大の集団植民地微塵蚊（ビリグイ）

ビリグ牛植民地は前項述べし如く、英伯資本系経営の植民地で最初から各区に車道馬開設し売出した。各地区割も判明し植民衛生関係も会社側との連絡あり、何かと便利であった。

入植家族へは其家族の現地よりビリグ牛駅まで汽車賃も給したので、各耕地の貧しきコロノ生活者等はビリグ牛植民地へビリグ牛植民地へと各方面から轉向し、会社が材木を出す丈け土地も肥沃で直径二メートルのペローバも林立する土地である。

そこに栽培してた「マンジオカ」は長さ五メートル、太さ八十センチもあつたと第一モンソン植民地方面にも評判していた。植民地区も多くビリグ牛駅かゝりてコロニア区、コレゴ・フエジョン区、コレゴ・リコ区、ノバ・オリンピアス区、コロニア中央区、上流エリジヨ区、上流コロニア区、バレイロ区、アグアボーア区、バグスス区、サルト・コンチーニオ区、コレゴ・エリジオ区、コレゴ・ロベルト区、コレゴ・インベ区等拾四五区あつた、この方面の日本植民総数八四四家族、人員五、九、〇〇四、所有面積五、五三三城、地價三、一二五コントス、開拓面積三、二六〇城、栽培珈琲四百萬株を突破していた。（一九三三年聖州廿五周年鑑）

大正六年、鐘ヶ江、貝原、高橋善之助等の首唱で實業同志会生れ、ビリグ牛町に倉庫設立（不成立）入植せる佐賀移民野口薬剤師を衛生保健の擔任者とする（成立）道路修理の件等植民相互の福利増進を目的とした。野口は植民に盡し後年チブスに病歿した。山根寛一等の貨物自動車道路（植民地よりアラサツバ駅約五キロ）開設の發議も成立した。

バガス区に佐々木郭吉、中村忠吉、西川、安斎勝衛等入植した。一九一七年である。一九二三年ビリグ牛日本人会が組織され、宮崎八郎が会長となる。ビリグ牛植民地の歴史はア

ラサツーバ駅へと続く、同駅の奥地植民地は会社の売土地となった。

アラサツーバ駅

一九〇八年十二月アラサツーバ駅は開通とされたが、客車の正式通り始めたのは翌年末である。同駅町の開拓者は伊太利人、ミゲル・カプトであった。日本人がこの町に現はれたのは一九一四年聖市の大工池永又三郎が個人の家建に雇はれて行っている。

その後福島移民の今の安瀬盛次が一九一七年頃、同地で少量のアーリオやセポーラを買ってはマツト・グロツソの方へ輸出していた。鹿児島移民の大原栄蔵がカロツサ二台ブルーロ二頭で同駅町へ奥の植民地から進出したのは一九二一年彼は後年聖州米穀仲買商の大物となった。

アグア・リンパ区に最初の日本移民小学校を開いたと同時にアグア・リンパ日本移民青年会が組織され福島移民の高橋鱗太郎青年が会長となった。一九一八年であった。

公立小学校がエリジョ植民区に出来たのは一九一九年で、日本移民植民地内における最初の公立小学校であった。

一九二〇年アグア・リンパ邦人の小学校が出来、高橋鱗太郎が教師、月給八〇ミルレースで、生徒月謝一名二ミルレースであった。青年会も出来た。機関誌も発行した（ガリ版）永田稠力行会長が渡伯した際、こゝの青年会で「諸君は乃公に何を望むか」との問い対し「村に一番不足してるのは娘だ、永田会長日本へ帰られたら娘をドシドシ送って下さい」と或一人の青年がいつて永田を感激させた。その青年は後年力行会員の女性と結婚していた。

一九二一年、力行会より巡回国書を各地の在伯日本人青年会へ配布した。

一九二二年、コレゴ・エリジョ区のサルト・コンチーノ区にカトリコ寺院が建立さる。

アラサツーバ市現在（一九四六年）の人口三萬、邦人家族は市内三百有餘家族。

茲には市の中央にアラサツーバ学園を建て、七八十名の日系伯入学生收容している。日本政府は一九二六年在伯日本移民の篤志家へ産業援助金なるものを配興した。當駅で選に輿かつたものは大原栄蔵、安瀬盛次であつた。

植民地に於ける

日本国旗掲揚紛擾

一九二四年時の駐伯日本初代大使田付七太はノロエステ全線ソロカバナ線、モヂアナ各線各駅の日本移植地を巡視した。

ビリグ牛植民地で、日本移植民大衆は「吾等の大使」歓迎のため、竿頭に先づ日章旗を次で、伯国旗を掲揚した。一伯人労働者は之を見て憤激し旗竿をたおさんとした。これを見た邦人等は醉漢何するぞと口論の末殴打した事件は、紛糾して重大化せんとしたが、時の當駅官憲は事件を斯うさばいた「日本大使を日本移植民が迎うるに當り、日章旗を伯国旗の先に掲げるは差支ない」事件はそれで済んだ。

アレグレ植民地の開拓

ビリグ牛駅のチエテ側に、アレグレ植民地が開拓された、一九三〇年の頃で、瀧澤仁三郎と測量技師野村秀吉との共同土地売出しの森林と沼地帯であつた。

チエテ河に近く、標高も降霜の恐あり、珈琲地帯ではないが地味は砂土質でも至極肥沃の雑作地帯で黒土地帯もあつた。

各縣移民の植民地で、北海道移民が多かつた。一九三四年頃百家族に繁栄していた。珈琲樹も五十五万株成樹していた。

開拓中途にしてパイオニアとして入植していた瀧澤は肺患にかゝり中央線サン・ジヨゼ・ドス・カンポスの療養地に病歿した。享年四十三歳

後年ブラ拓が購入経営した、ペレイラ・バレット（チエテ）の大植民地は、一九二〇年頃この不運なる瀧澤が先達大和植地と名づけ売出企劃した處であつた。

奥へ奥へ第二期移殖民

日本移民尖端を行く

ノロエステ線は、アラサツバ駅より両線に岐れて州境ジュピラ駅で又軌道は合してゐる、チエテ河畔に沿った軌道線地帯は所謂瘴癘蠻烟の域で、低地湿地多く、鉄道敷設以来三十年経つてもマレッタ地帯として未だ開拓されてはいない。

他の一線はアラサツバ駅より森林地帯のエスピゴンを走つてジュピラ駅に敷かれた。これを世に変更線と呼んでゐる。一九二三年より起工し一八一キロの線で完通した。この沿線は全く森林地帯の肥沃な砂土地質健康地帯であつたため鉄道開通前に沿線の森林は殆んど開拓されてしまった。この開拓の先達者等が又殆んど日本移民であつた。

アラサツバ駅より廿八キロのグアラ、ペス駅、最初鉄道未開通時代はフルツタールと稱してゐた。

その頃山口移民の杉野四郎がコレゴ・フルタル植民地を開拓してゐた。高知移民の野村直喜が野村植民地後にグアラ、ペスを開拓してゐた。他国移民は瘴癘の地として恐怖してゐた地帯であつたが、愈開通して健康地帯と知れるや、各国移民も押しよせた変更線であつた。

それから二十五辛、グアラ、ペス駅町は人口一万の町となつた。その駅町のバザール店三十有餘は皆邦人の開いたものである。瀬ノ上保正が邦人界をリードして来た。

バルパライゾ駅町は一九三八年地方行政裁判区となつた程

急激な発展を遂げた。樋口實蔵が五百城の地主となり、有木戒三黒羽名則等が二百城の地主となった。

ルピアセア、アルト・ピメンタ、アグアツペ、ミランドポリス駅と駅毎に邦人の開拓地つゞきとなったのは、こゝ拾年経たなかった。精確な数字的史實は未だないが、変更線日本移植民数は三千家族を越えるとされている。

ミランドポリス駅は（舊名シンケンタ）信濃植民地、アリアンサ植民地の係り駅となった。アリアンサ植民地の植民者等も第二世へと開拓バトンを渡す歴史へと来た。アリアンサ丈けでは狭い。奥地へと開拓戦線は延び出した。當駅の奈良移民和田周一郎は、ラビアノ駅の三千城へと開拓の手をつけた。

ノロエステ線の日本植民者等は、興へ興へと州境目標に大移動した。プロミツソン駅地帯一千家族を算した借地棉作者、借地米作者等の群は、地主が土地を他に轉売し新地主との紛擾問題から同駅を退散した。この一千家族の群は州境近き此の開拓の探森地帯へと移動した。一九四七年のことである。

マツトグロツソ州へ日本移民流る

ノロエステ線の聖州終点駅は、ジュピア駅であるが、州境パラナ河の鉄橋を越えて、汽車はマツト・グロツソ州に入る。同州は聖州の奥地にある。南米中原の大広野の北部地方は、名の示す如く、鬱蒼林であるが、日本人の開拓発展しつつあるのはノロエステ鉄道沿線に坦々たる平原の中に、起伏する森林オアシス地域である。

日本移民の一部が此のマツト・グロツソ州に移住した経路は二途あった。

一は聖州境のパラナ河を越えてマ州に敷くノロエステ鉄道工事の工夫となった初期日本移民の移住したもの。

二は第一回移民珈琲耕地コロノの落伍者が（重に沖縄、

鹿児島移民）、隣国アルゼンチナに轉航した者が、亜国で仕事にあぶれ、或は一層いゝモウケ仕事はとあせった連中が、亜国で募集の鉄道工夫マツト・グロツソ州ポルト・エスペランサ地点に上陸、水草原を盛土しつゝ、鐵路を敷き、東南へ、東南へと進んだ一団。この鉄道工夫三百名ばかりの中に、沖縄鹿児島移民が七十餘名居たのであった。

彼等は伯国日本移民ばかりでなく、ペルーのゴム森林のゴム採集労働者も、流れてこの鉄道工夫に應じたのであった。ノロエステ鉄道工事が両方より進捗して全通した暁、この人々の中、マツト・グロツソ州のカンポ・グランデ町にとゞまり開拓生活に入つたものにペルー流れの山城興昌、中尾権四郎、聖州流れの太田亀、仲程仙五郎、新垣松、前川益、池原次郎、玉城禮三、照屋堅里喜等が居た、アギダヴァナ駅に止まつたものが聖州流れの伊瀬知麟逸、原源之助等である。トレス・ラゴアスに移住したものがペルー流れの上江洲朝昇、本田武雄等が居る。

聖州側よりノロエステ鉄道工夫としてマツト・グロツソ州に働らいたものは六十餘名であつた。

それから一七年後一九二八年頃、この町の日本移民の住家は廿五家族となつていた。

カンポ・グランデ市の起りは鉄道工夫の寄合世帯から創まつている。沖縄移民の別天地、一九二八年の「のろ江すて日本人年鑑」によれば、同市の日本人家族は一六四家族、所有土地二二五域、珈琲栽培数二〇三、五〇〇株、伯生三五五、伯死四二となつていた。

當時聖州からの汽車は、毎週二回通つていた、ノロエステ線の基駅バウルからカンポ・グランデ駅迄は八九四軒、カ市の人口は二万と呼ばれていた（一九三三年）。州首府クヤバ都市の人口が四方とあつたから、當時マツト・グロツソ州第二の都会である。市近郊にセローラ植民地を開いた、新垣稲牛、宮平市貞、新城盛五郎、源河要助等々地主が二〇家族、借地農三四家族居た。栽培珈琲樹一八六、八〇〇株、伯生八

四、伯死四、就学児二三。

バラコン植民地が開けた。地主が五家族借地農四十九家族居た、マツト・プローザ植民地には地主三人借地農二〇家族いたマツト・セグレド植民地には地主が一五家族、借地農が二十家族いた、インビルス借地農地には二三家族が菜園、バナナ、養豚をやっていた。リンコルン借地には三二家族いた。大城辰雄が五〇域の地主となっていた。

仲尾耕地は仲尾権四郎の開拓経営で當時二六〇域あった。カンポ・グランデ市の名物ピンガ醸造をやっている。同市の写真館としてのパイオニア片山日吉は熊本移民である。後に同市日本人会長と押されていた。同市お役所のお用写真も師団のお用写真も彼の原板に撮られていた。同市創設以来写真文化のパイオニアである。

市の郊外に展開する蔬菜園は殆んど沖縄移民の経営である、彼等の生産によつてカンポ・グランデ市民の蔬菜栄養は満たされている。

カンポ・グランデ市の奥一五〇軒の處にアギタヴァナ駅町がある。一九三三年の調査史料によると。日本移民の移り住むもの十六家族であった。

同地は海拔伴かに二十一メートル南米中原中の最低地帯である。井戸を掘れば塩辛い水が湧く處である。

第一回鹿児島移民の中学卒業青年伊瀬知麟逸が三十餘年、カボクロ生活の地、其第二世が、日本人の訪問者をみては、「マ、イー異人が来たー」と呼んでいた。日本移民がカボコ化して歴史しつゝある者此處ばかりではない。

雜穀大量生産の

プ ラ ン タ・マ キ ナ

珈琲栽培其採収とは何等関係ないが、ノロエステ線日本移民の雜穀大量生産に寄興したものは、現存各植民地耕地で盛

んに使用している手扱いの播種機であつた。

昔は鋤の端で懇地に小穴をあけて粃をまいた。後にはカバデイラがあつた。カバデイラのないものはフオイセの古いのを使つて間に合せた、一域の畑に豆を蒔くには、一人で一週間から十日もかゝつた。キビを播くには一人で四日乃至五日かゝつた手扱いの播種機が現われてからは、一人一日で一域の豆蒔易々たる仕事となつた。

斯うした便利な播種機が出現したので、移民の農産物の生産能率は五六倍から十倍化した。播種期に労働者が要らなくなつた。

この手扱い播種機を日本人植民間に使用発展させたのは、第二モンソン植民地の植民者米人マノエル・マルシーノであつた彼の故郷は北米ニューメキシコ州であつた、北米より移り来て彼は第二モンソン植民地の邦人集団地内の一ロツテに住んでゐた。彼の製造にかかるプランタ機により第二モンソン植民地日本移民は、第一モンソン植民地の畑より雑穀播種面積も倍加していたし、日雇人の手不足もなかつた。

この播種機をノロエステ線に広め流行させたのは、エトル・レグリ（現プロミツソン）駅イタコロミ植民地、ボン・スツセツソン区に移り仕んだ第二モンソン植民地の国成小市、鍋島喜代重、西村光次、清田万吉、香山六郎の五家族であつた。

當時、同植民地の地区の連中は「そんなもので播いた粃が芽生えますかな」と嘲笑してゐた。粃を播くには斎戒沐浴、祓いたまえ、潔めたまえ心もて、一一粃を拜んで播かなければ、いゝ苗にならなぬ、稲にはならぬ、稲になつても稔らぬとの敬神信念をもつてゐた農民が多かつた。

手扱い播種機で播いた粃の芽生え成績は、手播きした人々の粃の芽生えよりも揃つて穰り具合も良好であつた。

翌年迄はまだ一般に疑つてゐた。二年後には、「俺にも一台俺にも一台」と流行し出した。両三年後、ノロエステ線ばかりではなく、全サンパウロ日本人植民地の日本人も伯人も

外人も種子播く人々は使用し始めた、大工の仕事器用な日本移民は各駅で一人二人の製造人も販売人もあらわれて来た。ノロエステ線に於ける一九二〇年頃より雑穀播種の開拓面積が拡大し、収穫生産高が数倍加し、他鉄道沿線を圧した観を呈した。

今やこの小植民の手扱播種機も、ガゾリン動力播種機へと大農機械化しつつある。

北米人マノエル・マルシーノの次女メイは、同植民地熊本移民岩本九十九青年と結婚し、後年ソロカバナ線マルチノーポリス駅奥幸運植民地に移り住んでいたが、北パラナへ移り去り農から商に轉向した。

パウリスタ延長線の日本移民発展

パウリスタ延長線とは、バウル駅を基点としてノロエステ線とソロカバナ線の間走る分水嶺、チビリサ山脈を縦断している新パウリスタ鉄道線である。

この延長線の駅は拾キロ毎に駅を設けている。その駅名に^{その}順の頭文字をつけた。延長線沿道地帯は當時聖州内に残された第二のモヂアナ珈琲地帯と呼ばれ、因つて伯人は勿論のこと各国移植民で将来の珈琲耕主を夢みる者等が所謂押すな押すなの流れで、各自の開拓線へと突進した。

珈琲栽培争覇線戦地帯の観があつた。

資本に恵まれた外国植民は、道路を開けて自己のカミニオンを利用し出した。一日一回の汽車往復では移動の急テンポに間に合わぬ開拓線であつた。

その頃日本移民は未だ経済的に恵まれていなかった。邦人はカミニオン移動でなく、斧と鋤と食料を馬に積んで自分の土地へと徒歩で移った。鈍と根との開拓進展振りであつた。それでもこの延長線が開通する前、同線の二ヶ所に珈琲の花を咲かせていた。一はドアルチーナ駅に近い福寿植民地であ

り、二はガルサ駅となつたガルサ植民地であつた。両植民地とも一九一八年の開拓創始である。

福寿植民地は福岡移民の馬田興三郎家族がパイオニアであつた。古賀仁市、平田源蔵、池尻源八、藤田清、三坂嘉蔵、内山常次郎などそれに続いた。かくて福岡移民の大集団地となつたパイオエア馬田は開拓中途に故人となり、ドアルチナ町では村上達三が経済的に進出した。福寿植民地とは渡邊孝がつけた名であつた。ガルサ（白鷺）植民地はモヂアナ線の移民泣かせの石山耕地ビラ・コスナナ耕主ラピアナの所有地であつた。創始者は同耕主と盛岡移民問題で因縁ある矢崎節夫であつたが、彼は途中から植民地とは縁を断つた。ガルサ駅が開通する迄、約八年間、ガルサ植民者等はノロエステ線のプレシデンテ・アルベス駅へと用足しに出た。

この間七十軒は山溪と原始林と湿地のトロツパ径であつた。

その径を八年間、僅かな生産品をブーロの背に托して売りに出で、その錢で食料品を仕入れて帰つては開拓した。

この一団の人々ほど、寂寞たる太古民の如き生活を続けた植民は、ノロエステ及パウリスタ両線中にはなかつた。病んだら草根木皮で治療した。文明の味を知る移植民者等に斯うした原始人の如き生活がつけば全く気が狂るいそうな涙も涸れ焦燥感も燃え盡きた。一九二六年（昭和一年）汽車の汽笛がガルサ植民地の彼方の丘に響いた。

その頃、ガルサ植民地の珈琲の花は眞白に咲いた。紅の實は枝もたわゝになつていた。

一九二四年頃、ノロエステ日本移植民社会に「最も不便、最も遠い」と言う代りに「ガルサのような」との言葉が流行つていた。それも今は忘れられてしまった。

パイオエアは長谷川留次、青柳半吉、岡崎満開、宮川治太郎、梅原善兵衛、芳賀仁吉等であつた。

その後、大和、バンデランテ、ボア・ソルテ等の植民地が附近に展開した。現在のガルサ駅は日本商店三十軒を数え

る。

聖州日本移植民界で養蜂の先達者（パイオニア）は青柳半吉であつた。

ベラクルーズ駅町は現在邦商十餘店ある。附近に借地農、歩合作者の耕地が多い所であつた。曙植民地、フロリダ植民地等がある。駅町の山内亀喜が日本移植民社会を代表して伯人社会に和やかな気分をたゞよはしているが時代は第二世への進出へと轉移しつゝある。この附近は一九四〇年頃日本移民の棉作者が五百家族にも及んだ處であつたが、彼等は奥へ奥へと流れた。

パウリスタ延長線の中心都市はマリリア市である。一九二九年當所迄鉄道が開通前、アルト・カフェザールと言へば、未来のリベロン・プレト市と噂された。この町の膨張振はネゴかつた。現在人口五万餘、奥地帯の地方的首都として、一通りの文化施設も整つた。日本人街と稱さるゝサン・ルイス街が、市の大道街の直ぐ裏を並行して長い。

一九二二年、海興重役瀧江義信が来伯した。瀧澤仁三郎の案内で所謂アルト・カフェザール地帯をブーロに乗つて、ペンナ駅方面たら探索した。人煙稀れの茫漠たる原始林地帯であつた。

瀧澤「比の原始林地帯を購（かわ）んか」

瀧江「購（か）いたいな―一域何位の値だろ」

瀧澤「一域三十ミル位なら」

新うした会話が交されたなり、瀧江は日本へ、瀧澤は故人となつた。それから二十五年、聖州日本移植民第二期発展史中の最大躍進の地となつた。

マリリア在住の邦人は現在八百家族を算している。周囲は借地農の綿花地帯、珈琲栽培請負耕地等も多かつたが、日本人耕地として最も古いは、下江倅太郎の珈琲耕地であつた。鉄道も開通せぬ一九二五年の頃、最初八百域を購入した。日本移民中個人土地所有者の一番であつた。六十萬株珈琲を栽

培した。現在も邦人中最大の珈琲耕主である。



(写真―下江 倅太郎)

下江に次いで現在では長瀬耕地、内藤、松原耕地等が発展をとげている。

植民地も大小拾餘個所ある。カンガング峯下、パウリスタ興農園は山根寛一等が開拓戦線の夢の跡である。

當地の商界に躍進してるものに沖周一郎、山下唯一、岡本春一、中平一夫等がいる。マリリア産業組合に石川憲太郎が専務だ。一九二九年調査によればマリリア駅附近一帯日本移民二千家族とあつた。

日本移植民の中心地帯も、パウリスタ延長線が奥へ奥へと開通するにつれ移動する。ポンペア駅の出来たのは一九三三年であつた。マリリア駅よりポンペア駅まではカンガング山脈の断崖上の高台地方である。ツツパン駅に到つて地勢はソロカバナ平原地帯と同じニーベルの平原地帯となかこれより先は坦々たる広野森林地帯である。

ポンペア町が、マリリア日本移民集団地に次いでの大集団地一千家族を周囲に展開してる。地主も四盲家族餘、借地農も四百家族と算したは一九四〇年頃であつた。

次の邦人大集団地はツツパン町である。ツツパンはブラ拓移住地のバストスへ通ふ要地となつた。市街地の平坦な丈け将来性を有している。日本移民開拓の流れの先端はツツパンを通り過ぎて、オスワルド・クルーズ、ルッセリア町よりア

ダマンチーナ方面へと展開しつつある。この地帯に於ける日本移民の家族総数は四千から五千家族と呼ばれている。

こゝにはバウル地帯に居た棉作借地農も流れた。ベラ・クルーズ地帯借地農も流れた。ノロエステ線方面からはプロミツソン借地帯の移動の大部が流れ込んだ。

彼等借地農は轉々する。轉々しつつ地主となったり、又借地農へと逆転する。移民第一世の歴史である。一頃、幼稚な伯人間には、日本移民は皆、ブラジルの地主となってしまうのだと猜疑されていた。

珈琲耕地のコロノの中には、自由独立植民生活に不安から、耕地から珈琲耕地へと轉々生活し、生涯主人持農奴的生活を続けているコロノもある。

彼方のカッポエラ伐つては二、三年連作し、作が出来なくなれば又他の肥沃なカポニラへと轉耕し、そこにコツケーロ柱にサッペ茸の屋根住いの棉作地農も相當にある。

彼等は小金を蓄えているが、それを資本に何等かの企業生活へ轉向しようとの希望はない。

彼等是不衛生な生活を不潔な生活とも自覺せず、蓄えた小金を後生大事に固守し、第二世を文盲にしつつカボクロ化の一路を辿っている。欧州移民が多年カボクロ化し、カイサラ化しているもの夥しいように、四十年の日本移民の多くも同じ歴史のコースを辿っている。

ソロカバナ線地帯邦人発展の跡

聖市より紅指の交通線となつているソロカバナ鉄道線は、八九〇餘軒の奥聖州南境パラナ河畔に達している。

聖市より二九六軒の處にボツカツ（好い空氣の意味）駅がある。ここより支線が峻れ、北にはバウル駅まで延びる。此間一二〇軒には日本移民は殆んど耕作展開していない。

アグードス駅附近には第二モンソン植民地があつた。附近

は棉作借地地帯として百数十家族耕作展開していたが、一九四〇年頃より殆んど他へ移動してしまった。

アグードス町と郊外に若干の日本移民耕作している。モンソン聖人と呼ばれた川原政エ門が、尚ほ枯れ行く珈琲園に老を養っている。

ボツカツ駅より左廻した幹線五百軒沿道には、到る處、日本移民の開拓地が展開する。その入植の最も古い植民地が前項述べた聯邦政府直轄の第一モンソン植民地であるが今は第二モンソン植民地と同じく、耕作地は人影もないカポエラと還元している。

ガファニオツト

日本移民の最初の體驗

一九一五年十月、第一モンソン植民地で日本移民三十家族餘の豆の花が咲き終る頃であつた。ガファニオツトの大群が、南の空から當方面一帯に來襲し、一週間ならずして作物一切青葉は木々の葉迄喰ひ盡し、天日に干した毛布も處々穴をあけられた。草履の赤い鼻緒まで嚙り切られた。

或る日本移民は、神棚からお大神宮様のお守札を畑の作物の上に立てゝ祈つた。その近傍のガファニオツトは姿をかくしたと喜んでいた。翌日そのお守札を見に行ったら、散々に喰われていて、お守札は木の骨だけのこつていた。

飛來して十日目頃から、ガファニオツトは砂地に尾端をさし込み産卵し始めた。

産卵後は土の穴の上に抱ぶく様な粘膜を張った。それからガファニオツトはバラバラに飛去つた。飛來した反對の空へ……十七、八日して孵化した子供のガファニオツトは、穴からゾロゾロと這出した。

親の群も天日為めに暝したといふ程夥しかつたが、子のガファニオツトは一層金色燦爛として、その七、八十倍もい

る。

木の芽、草の芽、萌えかゝつていたもの毎く又齧られてしまった。十四、五日したら翅がはえて、皆親の去った方の空へと飛び去った。犬はこれを追ひ廻して喰った後は、青はなたらして病んだ。

植民者は飢え出す。栄養不良で疾病が流行し、死人が出た。葬式があつても香典が包めぬ其の日暮しの移民もいた。彼等が来年収穫拂香典二ミルと書いた紙片を佛前にそなえたのはこの時である。

親ガファニオットは日が落ちると畑から附近の立木に舞上つて皆とまり、夜は喰わなかつた。一域の豆六、七十俵予想されたものが三、四俵の収穫に減少した。

それは畑のガファニオットを親子三人で終日石油空缶いて迫廻した畑の収穫がそれであつた。虫が喰ふがまゝの畑の収穫は皆無であつた。

それから十年、棉の名所のモンソン植民地と栄えたが、今は人影もないカポエラと化してしまつた。ソロカバナ線中、日本移民の手で始めて開拓された植民地はブレジョン植民地であると前項述べた。

パイオニア星名謙一郎の植民地経営振は、當時彼が経営せる週刊南米の御手盛広告程順調には進まなかつた。彼が北米の流れ者であり、鬭争的面構は、日本移民の平凡な信頼感を掴むには容易でなかつたが、地價一域六十ミル、年賦拂ひは當時貧しき日本移民に「土地が安く購える」との希望を沸かせた。

星名は過去の経験から、植民地経営は温情主義の事業でない企業としてやらねば成立せぬと、その方針ですゝんだ。経営困難とみるや、一九一七年、北海道より全家族郎党七十二名引具し渡伯した小笠原尚衛と植民地を共同企業とした。

経営宜しからず、一九二二年、星名個人へ還元した。植民地中央市街地の建設を画策したが成らず、上塚周平とコンビし、ノロ、ソロ両線旱魃移植民の経済危機救済のため、日本

官憲に申請し、八十五萬円の低利長期資金を成就させた。

一九二六年十一月卅日朝ア・マツシャード駅頭に、バウル日本領事館向低利資金受取に出発の汽車持つ間、同駅伊系伯人の猟銃一弾耳下を貫通誤殺された。

星名は帝国萬歳主義的教養識見者であつた。日本に家族を置いて放浪二十餘年、豪放はよそほへど胸は淋しかった。ジヤカレー（鰐）の綽名はあつたが、それは「雨の日には屹度ジヤカレーがビシヨに出るぞ」と彼は、雨の日には聖市でジヤカレーに賭けていた處から、星名とジヤカレーの綽名になつたもので、彼の面貌がジヤカレーに酷似する處から後に綽名となつたものである。

同植民地の草分は一九一八年に本多丈右衛門、菅野興一、渡邊春治、市畑久五郎、高田傳次郎、毛利哲夫、平田甚市、青木藤太、徳田八十八等であつた。同駅町の發展に盡したものに井手幾太郎、阪東喜内、山下定八、横尾佐一、肥田善治、吉雄武、木村孝太郎等がある。市會議員に當地方古參熊本移民父山下定八、母ユキの息アルフレッドがいる。開拓以來三十年、同植民地の珈琲樹数は二百五十萬株、棉花も一時二十萬アローバを生産していた。邦人六百家族の集團地となる。經濟的に躍進したものは木村、横尾、肥田、吉雄等である。



（写真―星野謙一郎）
（写真―中村長六神父）

バイベン 植民地

ブレジョン植民地に次いでバイベン植民地が古い。當時ソロカバナ線最奥の開拓地であったブレジョン植民地より、尚二十軒の奥にあった。インデアナ最終駅から七十軒ある。植民の草分はこのピカード七十軒を、食料買入れに往復四日ばかりで歩いた。三十キロ或は四十キロの食料品を擔いで、家族の待つ森中の吾が家へと急ぐ。「無事で皆居てくれ」と祈りながら歩いたと、パイオニアは今も涙で語っている。

駅町までは七十軒の植民地、ノロ線のガルサと、ソロ線のバイベン、好一對の歴史をもつ。草分組は前項の外大内三男、渡邊七之助、安斎享、山田秀雄等がいる。

アバレー 棉花地帯

アバレー市附近の日本移民は、古くから棉花栽培で伯人社会に名高かった。主に歩合作の、又は借地農者で、伯人地主にも相當もうけさせた。(アバレーとは土人語の貴人又僧侶の意味)

同市はソロカバナ線中最古の町の一つと呼ばれる。住民は、新市街地のその如く殺伐神経が尖っていない。こゝの日本人も生産に恵まるゝまゝに、この町の感化をうけている。日本移民の住み始めたのは一九二八年頃で、第一モンソン植民地入植の日本移民と関連していた。

歩合作、借地農の地帯中心地だけに、年々歳々人同じからずの感はあるが、名越、古田、米須等去って、現在日本松三治、飯田政二、中川直行、西山福治など古参者である。

マンドリ駅は支線アタリーバ、レオネル駅、ピラジュー駅の小軌道線が走る。附近は日本移民の棉作借地農地帯であった。一頃七、八十家族の日本移民が、サंप小屋生活を点々と

賑わっていた。

ベルナルディーノ・カンポス線を北してサンタ・クルーズ、リオ・パルド支線がある。リオ・パルド沿岸に建つサンタ・クルーズ・リオ・パルド町附近は一時、日本移民棉花借地農百四、五十家族も居て、町も仲々賑わい、米田八蔵、清島佐吉等が商業方面で活躍した。當方面の借地帯は低湿地多く、初期開拓者のマレツタにかゝるもの夥しかつたが、最近健康地と化し、まだ多数の邦人が棉作雑作に従事している。

この方面日本移民の開拓史はボア・ビスタ植民地を除いて停頓してしまつた。この町の奥に棉作華やかな一九三七、八年ごろ、大洋植民地（福島縣人）、エスピリト・サント、サンペードロ・ド・ツルボ、サンセバスチヨン植民地等が栄えたが、今は寂れている。

アシス駅はソロカバナ線中の大市街の一つだが、同地帯には日本移民の集団するもの尠なかつた。周囲の土地に原始林ない虚から植民地に適せず、カポエラ地帯に棉花借地農の開拓し始めたのは一九四〇年頃からであつた。當時百家族近くいた。

パラグアス ー 駅

この駅から十五軒の地方に、北米日本移民が移り来て植民地を開いた。文化植民地と名づけた。二〇六〇域の棉作、珈琲栽培地帯である。一九一九年頃、北米カリホルニア州の排日の桎梏を脱れ、自由の天地を探していた日本クリスチャンの一派が一九二六年にこゝに自由の植民地を具体化させたのである。

開拓當初は伯国日本移民の草分鈴木員次郎が手引した。その後、所謂土地グリリオの策動あつて地権問題でしばしば強制退命令の執行的受難の歴史を経たが、植民者団結が役立ち頑張り通した。開拓創業の現地辛酸を嘗めたのは山田登幸、中森憲太郎である。三十万株の珈琲に花も實もついてい

る。

最近では創業者森淳吉老牧師がクリスト教宣伝の傍ら、植民地の経済文化向上を司っている。文化植民地の歴史としては二十有餘年に過ぎぬが、過去北米に於ける彼等の伝統的移民歴史は深く長い。

パラグワスー駅の日本移民草分は、ルテシヤ植民地の珈琲栽培者荒毛勝市、丸林久次郎、黒岩秀吉、永松健太等である。彼等は次で太陽植民地を開拓した。クリスタル植民地も斯の附近に開拓されてる。

パラグアスー町は、周囲に日本人の影のない間は伯人ばかりの至極のんびりした町であつた。ガラツパに喉をうるおし、カルネ・セツカ、フエジョン、マンジヨカの粉、それにキヤボの食事で事たりていた。町の周囲の肥沃な土地に日本移民が大勢這入り、棉を栽培し始めた。セボーラを作り始めた。茄子や胡瓜の蔬菜畑を開いた。珈琲樹を育て出した。人々が町に集り出した。自由学園が出来た。もう一つ学校が始まつた。

伯人の静かな町が、馬車や牛車ばかりでなく、カミニオンや自動車で、街路歩く人々もいそがしくなつた。

棉花が畑からカミニオンに山ほど積んで、駅の空貨車に何台も何台も運び入れられ、送り出された。散髪屋が何軒も出来た靴屋が出来た。日本人のソルベツテ屋が出来た。日本人のアルマゼンが何軒も増えた。日本人のボールが出来た。それからそれと飯屋や煉瓦の家が建った。薬屋が出来た。シネマが出来た。イグレージャが大きく建ち出した。警察署に巡查が何人も詰め始めた。銀行支店が開店され、怪我人が日に何人もあつた。病人が何軒にもあつた。医師の診察所が出来た。暗らいながらも電燈が街々につき出した。駅には何回も汽車が来たり行ったり多勢の旅人は乗ったり降りたりした。

日本移民の棉花、其他開拓生産物の集散駅町と化した。人口三万、郊外日本人植民は四百家族餘。

パラグワスー駅はワシントン・ルイス駅となり、アラグア

スーとなり、更にパラグアスー・パウリスタと改名された。

レイトニア人の養老協同植民地

サペザール駅奥十八軒にレイトニア国人の植民地がある。百家族ばかりの村だ。ウアルパと呼んでいる。レイトニア人のみの村だ。一頃、日本移民社会にレイトニア共産村など噂し合ったが、共産でなく産業組合の一種であった。村の若い健全分子は男女ともサン・パウロ市に進出して、専門的職業線に活躍し生活している。村は家庭の老人、小娘と小供と、かよわい男女や不具者等の安静所となっている。

各家庭に厨房（クジンエヤ）はない。村の共同食堂で皆たべる。時間も食料も経済的に費っている。長老がいて、宗教と村の制度を守らせている。ピアノ製造所もある。マンテীগ工場もある。その他手工業の製品を聖市へと発送している。鶏も卵も野菜も其日の売物は、時間々に各戸の戸口に番号をつけて揃へておく。組合のカミニオンが売る可き處に運んでくれる。

お風呂場は、村の中央の溪流に沿った自然を利用して男女別の蒸風呂が建てゝあった。冷水浴もその流れで出来るのだ。家庭なき孤独の人々の群は、大きな家に一部屋つゝ寝室をもらっていた。

植民地に共同食堂をもてる日本移民の部落は四十年間、弓場農場を除けば未だ一つもない。文化植民地でもやつておらぬ組織であった。

レイトニア養老児村の協同食堂生活は、日移民等には考へさせられなかったか、同村の家屋建築様式が、その頃まねて建設された。同村に近いブラ拓のバストス移住地の倶楽部建築に、移住地社員の住宅に北歐式の影響したものが相當に現われていた。

ブラタクの開拓したバストス移住地

ノロエステ線にチエテ移住地を建設したブラジル柘植組合はソロカバナ線ランシヤリヤ駅奥にバストス移住地を先に開設していた。一二・九三二域の土地で、ブラ拓経営最初の移住地で一九二八年土地売買契約成り入植したのは翌年からであった。

海外興業移民会社が政府に譲渡された様な土地ではない。土地の良否にかゝらず売買契約による土地であった。

斯の土地は土人が先住していた集団地で、毎年々々森に火が入り、原始林は尠なかつた―地質はテーラ・アレノーザ・ベルメーリヤに近似したもので肥沃でない。立木はカネロンの大樹が多かつた。雑作物には適していた。先住人が到る處開発した灰の跡ある丈け健康地帯とされた。

日本政府のお聲がかりの国策植民地の一つとして、一通りの文化施設を揃えた。

製材所、煉瓦工場、精米場、精棉、製糸、発電所、学校、病院、販売店等々、それに地権に不安なきブラ拓と呼ぶ地主からの分譲地なので、借地農地に、歩合作地に轉々として疲れていた移民の群に衝動を興えだ。現場支配人等も俺等の移民仲間の苦勞人だ、顔見知りだと感情の融和もたくまず湧いた、移民の群はワンサと入植した。

主作物は當時の需要、流行栽培の棉花であつた。それから五年目一九三三年度收穫量四十万アローバを超えていた。バストス音頭も唄われ娘は踊った。

養蚕熱も熾烈な植民地となつた、絹糸操作業に日本娘の双手の繊細敏捷さには、伯人労働者三分の一の比率工場法が悲鳴を挙げた。聖州バストスの絹工場は、一時他を圧して生産した。

バストス町には鯉の刺身の料理屋も出来た。饅頭、煎餅、羊羹、モナカ屋も出来た。ウドン、ソーメン、豆腐屋も出来た。撞球台の影に祖国情緒のレコードも鳴った。カンタ・ブ

ラーバに植民者の酔をそゝつた。硝子張窓の校舎庭にはパイネーラの花が散っていた。入植家族一千戸に及んだ。

最初はソロカバナ線クワタ駅がかりの交通路であつたが、自動車道路を開通させてランシヤ駅がかりとなつた。植民地生産物はソロカバナ鉄道とパウリスタ鉄道との輸送争奪戦が開始された。植民地迄支線を敷込には、両鉄道会社生産物白熱争奪戦に至らなかつたが、ソロカバナ鉄道局は、バストス植民地内へ鉄道荷物運輸出張所を設けて、生産物を鉄道局のカミニオンで搬んだ。

バストス植民地中央市街地よりパウリスタ線のツツパン駅まで大通路が開通した。三十軒である。中央市街地よりランシヤリヤ間の道程は三十八キロである。バストス生産物の輸送はパウリスタ鉄道に勝目があつた。棉花相場の大暴落、棉花連作の結果地力は減退した。バストス棉花栽培は生産絶望状態となつた。植民指導者間に「ガット運動」が始まつていた。砂漠の如くなりつゝある地に「地を愛せよ」との運動であつた。

世界大戦中の絹糸の盛況は、終戦と共に日本絹の世界進出の噂に恐怖して繭値は低落だ。植民養蚕家は金融窮迫し、借金して手形に蚕屋の棟瓦をはがした男もあつた。

バストス蚕業絹工場を背負つた人は上田佐平である。

移住地開拓当初よりの指導支配者は、グアクパラ耕地及平野植民地の苦勞人、兵庫移民の畑中仙次郎であり、その女房役を終始し貞淑に植民地を育てゝ来たのは松本高信である。

ブラ拓植民地バストスは、日本政府の仮面を被つた国策政治植民地の如く一部伯人思想家に評されたが、時相は移つた。第一世日本移民の時代が過ぎて、日系伯人の植民地と化しつゝある。バストス植民地の日系伯人から、市會議員も出し初めた。バストス倶楽部の北歐式建物も朽ちてこわれた。凡ては伯国にふさわしき文化へと育つ伯人の村となるのである。



(写真―畑中仙次郎)



(写真―松本高信)

ジョゼ・テオドロ駅（マルチノポリス）

ジョゼ・テオドロ駅に日本移民が土地を購めて集団した。この土地はジョン・ゴメス・マルチンの土地会社が売出し、会社の日本人部宣伝係が緒方留吉であった。一九二四年頃からの開拓である。

同植民地の日本移民集団地は幸運植民地と稱した。平坦な地形で一時二百家族近き日本移民が地主となつてうつり住んだ。

栽培珈琲樹数も一百万林を突破している。棉、米、豆等の雑作地でもある。

ジョゼ・テオドロの駅名がマルチノポリスと名を換える。

うつり住む植民者の名もかわつたが、幸運植民地のパイオニア格たる岩崎茂一、石本太郎、塚本秋吉、中野益蔵等は頑張り通して太った。

駅町には柳宇太郎未亡人の商店があり、杉義夫の仲買商が頑張つて太り、金物商の三田睦は手堅い商売振りだ。

一頃、日本資本のブラスコットの精棉工場もあつて、繁栄した町である。

インデアナ駅

ブレジョン植民地、バイベン植民地が一九二七、八年頃開拓された頃、鉄道はこの駅までしか敷設されてなかった。

その頃から日本移民に縁故の深い駅町であつたが、日本移民の大集団地とはならなかった。廿家族の平和植民地がある。昭和四年の開拓である。重に珈琲樹を栽培している。

レジェンテ・フエジオー駅にはアニウマス植民地がある。こゝも珈琲樹栽培植民地である。福島、長野、鳥取、福岡、沖縄移民の十一家族の仲良い植民地である。

ソロカバナ線の首都 プレシデンテ・プルデンテ市

聖市を距る七八七軒の奥地、ソロカバナ線の大都はプレシデンテ・プルデンテ市である。本線最大の商業都府で、一九二〇年頃、傾きかけた数軒の住家の人の世に過ぎなかった同地が、一九三三年頃には一万の人口となり、現在は二萬となり商工業の中心地となっている。一般の文化市の施設がある。

日本人同仁会支局医として内田利藤次が、この地方日本人のため盡していたが故人となった。

同市古参者は広島移民の片岡音市家族だ。同市の日本移民家族は五百、この地帯には四、五十家族の日本移民植民地が拾数个所から展開している。最も古い植民地はボア・ビスタと三共両植民地で、一九一九年頃の開拓である。ボア・ビスタは薯の生産地、三共は珈琲樹を育てた。

聖市郊外コチアの薯生産地に次ぐ所となった。
いまは日系市会議員として大石が活躍している。

プ・ヴエンセスラウ駅

プレシデンテ・ブルデンテ駅より拾料の次駅にアルバーレス・マツシヤード駅がある。昔のブレジョン駅であつたは既述の通りである。その駅の出来た頃プ・ベルナルデス駅は汽車の停留場に過ぎなかつた。草分は長崎移民馬場乙彦家族である。

一九一九年日本移民が五家族植民地を開いた。広島移民の山田国二郎がリンス市で當地一帯の土地売周旋を始め、宣伝宜しきを得、日本移民社会の植民熱をあほり、ノロエステ線の借地農歩合作農が相當うつり住む地となる。地質はペロ―バ、ジャンガーダ巨樹林立のマサツペ・プレツタの肥沃地帯で、農産物最好適地、異常な生産物の成績を上げている借地農も多い。

斯の界限日本移植民地は二十個所の盛況開拓振である。駅町に七十家族商工に発展している。

ピケロビー駅

一九二四年頃の開拓植民地ピケロビーがある。駅町には一九二八年頃百家族近く日本移民が移り住んだ。福岡移民の稲毛熊太郎がプランタ機を大量製造し、ソロカバナ線一帯に販売している。ピケロビー植民地は七十家族餘の開拓地であつた。珈琲栽培五十万株、附近に日本移民の借地農も多い。

ソロカバナ線最終駅 プ・エピタシオ

駅町の西南方を二料の水幅で悠々と流れているパラナ河、河中に長島と呼ぶ小長い島がある。この長島を根據地として第一回沖縄移民の山城梶山郎が二人の日本青年と漁業を始めた。一九二一年の頃であつた。一時は八家族も曳網漁業に従

事したが資本不足のためマレッツタ予防設備も叶わす四散した。

河魚はドラード・ピンタード、ジャウ、パクー等であつた。ジャウの大きいものになると一尾七、八十キロのものを漁つた。附近の駅町へ生のまゝ汽車で輸送して販売していた。一頃、今プ・ブルデンテ市に住む鹿児島移民の前園次郎等も二、三家族エピタシオ駅の船着場近くに屯して漁業をやつていたが、無資本にマレッツタがついて移り去つた。

エピタシオ港には汽船が着く。船腹に水車をつけた蒸汽船で原始的なものである。ノロエステ線聖州終駅のジユキア港まで上り（一五〇キロ）、下りはマツト・グロツソ州のアレグレ港（二一〇キロ）、グアス港（六〇〇キロ）、及パラナ州グアイラ港（三五〇キロ）に連絡している。

（サント・アナスタシオ駅のバイベン植民地は前述したので再録せぬ）

ジユキア沿線の邦人のバナナ栽培

前述の如く、この沿線に入植した最初の人々は沖縄移民で、アンナ・ヂアス駅であつた。最初米作一式であつた。連作で土地が衰え出した。この分だと地主になるより借地農が何時でも他に移動出来るのでいゝと、借地農がこゝも多かつた。

アンナ・ヂアス開拓地に次いで開墾されたのがイタリ、駅の植民地であつた。一九一五年六月、大城源昌、大城孫吉、古我知平三郎の三家族が草分けであつた。翌年より同縣移民の入植者が続々と開拓を始めた。米作地が年毎に増えると製米機がイタリ、駅に据えられた。一九一七年の初めである。この精米機はサントス市の資本家ジユゼ・ノビツタによつて据えられ経営されたが、この報伝はるやサントス方面より、又サン・パウロ奥地帯の沖縄移民は借地農の雑作生活を清算して、ジユキア線へジユキア線へと轉向した。地主と

ならず重に借地農である。この米作地帯の初期の全盛期は一九二三年頃で、それから漸次借地農の衰退期に入った一九二〇年、日本式窯で木炭焼を始めたのはアンナ・ヂアス駅の屋比久孟香もある。カボクロ式窯より能率も上り、良品を市場に出した。瀧澤仁三郎が此處で木炭焼を始めたのは一九二七年頃である。一九四〇年、地主は八八―土地面積三二四域バナナ、五二〇、〇〇〇株になっていた。

イタリ、駅に入植者が激増して百六十家族となったが、一九二三年頃は奥地珈琲栽培熟が珈琲値の高騰にあふられ、米作借地農の倦怠心は動揺し始め、珈琲地帯への反轉向が又流行し始める。轉向流行に反抗する土着の人々の聲も起った。その頃米単作でなくバナ、の栽培もソココ、に始つていた。バナ、栽培の草分はビッグア駅の翁長徳である。彼は同駅の先輩伯人ルイス・フランシスコが三万株のバナ、を栽培しているのに共鳴し五千株をうえた。これがジユキア線に於ける日本人移民のバナ、栽培の先達（パイオニア）である。その頃まではバナ、は移民者の家の周囲に四、五株自家用にうえられていたまでゝあつた。

このバナナ栽培が収入多い農業となつて以来、バナ、を尊稱して伯人は、オウロ・ベルデ（緑の黄金）と呼び出した。蚕が利益の上る虫となると「お」をつけ、「様」をつけて呼ばれると相似た東西、人の感情の表現である。

同線に於けるピング醸造の先達はアンナ・ヂアス開拓祖人宮城利三郎である。

ジユキア線が米作地帯よりバナ、栽培地帯へと轉向したのは一九二五年頃よりのことで、無肥料連作、收穫減少の米田がオウロ・ベルデの多年生栽培畑と化したのである。イクリ、駅に七十五万株のバナ、栽培する花城清安は五百域の土地の地主である。在伯日本移民のバナナ王的存在である。

一九三三年、聖州新報社の調査統計（在伯日本移植民廿五周年鑑）に左の如く現はれていた。

(駅名)	(家族)	地主	所有土地 面積(域)	(粃俵数)
アンナ・ヂアス	六三	一七	一七五	三、七五〇
ラポーゾ・タバレス	三一			九四四
イタリ、	一九一	一三	一七五	二、六二五
ベドロ・デ・トレド	二二八	三九	六四三	四五、二〇一
ペドロ・デ・バーロス	七六	一七	三六〇	一二、四五〇
ビダグア	三二	二〇	一二八	三、五五〇
セドロ	四三	一六	二二二	一、二四〇
ジュキア	三九	二四	八五五	五、一二〇
合計 (其他の小駅と合せ)		二、六七六域		
土地所有面積		一、三七〇戸		
家族数		四七〇人		
地主		九九、九七〇俵		
粃	約	五、〇〇〇俵		
豆	約	一五、〇〇〇俵		
バタチニア	約	二、五〇〇頭		
豚	約	八〇〇頭		
馬	約	四〇頭		
牛	約			

ペドロ・トレド駅は最初アレクリン駅と呼んだ。一九一五年頃は将来駅になりそうな附近に、伯人が三、四家族と土人の一群が喰う丈けの生活にあまんでいた。マンジョツカやキヤボ、及ミーリオ、アボーブラを栽培していた。周囲はウツ蒼たる原始林であつた。

開拓の熱に燃えた伯人ライムンド・バスコンセイロスがこ

の地開拓の好呂伴へと呼びかけたのが、名嘉文五郎、宜野座岩松、金城徳三郎、其他二、三家族である。端はしの稲穂が開拓地に翠々と孕み出した。或日、日伯開拓者は互に肩をたゝき合つて頬には感激の涙が流れ笑ひ合つていた。一九二〇年新停車場が設置された入植者は日に日に増した。駅の周圍に展開する古い建物は、開拓祖人バスコンセイロスが鉄道会社に寄附したもので、今も尚この建物には開拓祖人の面影がほゞえんでいる。

ジユキア線沖繩移民の理想郷の集団地となる。第一回移民の美少年比嘉秀吉、松田太郎も金城睦仁等も此處に好々爺となり白髪の人となり老いつゝある。一九三三年頃には二九家族が移り住んでいた。それから拾五年が流れる。松田太郎は死し金城睦仁は帰国した。此處も米田が衰えた。オウロ・ベルデ栽培の地となる。五百域の開拓面積へ初が四方俵近く収穫され、バナ、が十万八千株以上となっている。

ペードロ・デ・バロス駅

當駅の開拓創始者は宮平牛助、古謝將義等拾家族であつた。

一九二〇年のこと、駅より十五軒の西方一千四百域の面積に展開している植民地である。こゝも米作全盛期が過ぎて、今はバナ、栽培へと精進しつつある。次駅ジャラカチアに伸曾宗忠はバナナ五万株を栽培する。

ビグア駅

翁長徳父子が草分した。パラダ植民地がある。一九三三年頃には三、四十家族に移り住んだ地であつたが、一九四〇年には百六、七十家族となつていた。翁長徳のバナ、畑は六四

○、○○○株あり、借地農はバナ、のお蔭で地主となる。
ジユキア線中最もバナナ栽培の盛大なのは此駅である。

セードロ駅

セードロ駅中心に三キロ四方に展開せる三百域の築団地、これがセードロ植民地である。一九三三年頃は五十家族、それより十年後、百数十家族に増えている。地主七十家族、借地農も多い。

開墾創始は一九一七年十一月で、赤嶺新野栄、山城柳吉等が草分である。この人々の購える土地が、ジユキア線日本移民の地主の始めである。英国人経営の南聖土地材木植民会社より各自購入したものである。

新駅に一、元アルゼンチン駐割の日本公使たりし古谷重綱の経営するバナ、畑がある。二六〇域、バナ、廿万株が展開し、赤嶺新次、赤嶺新蔵、宮平牛助、出城柳吉等のバナナ栽培旺盛。

セードロは沖縄移民の夢の一部を實現した處であり、古谷重綱の希望の一部を充した處であつた。山城柳吉のバナ、畑は川の端底地にある。幾度か洪水に見舞れバナ、畑に藪ながらす損害を被るも、彼の闘魂は不屈で洪水と闘ひ、優良バナ、を収穫し続けている。

移民一世は米も作つた。バナ、も栽培した。それと共に二世も成育した。宮平清吉がセードロ市会の市会議員になつた。清吉の父は宮平牛助、母はカメ、第一回移民であつた。も一人セードロの市会議員が日本移民二世の日系伯人から選出された。

是も第一回移民の故宮城利三郎を父とし、故カマドを母とする宮城利松である。

イタニアエン市よりも日系伯人二名が市会議員に選出された故比嘉保栄、母カナの長男ジヨゼ比嘉である。他の一人は

父福地平吉、母マコの息福地平昌。一九四七年の選出であった。

ジユキア 駅

ジユキア駅は、サントスージユキア鉄道の最終駅である。ここはサント・アントニオ・ド・ジユキアと呼ぶ。

當駅はジユキア河畔に開けた町で河を航しレジストロ植民地港に下航する船着場ともなっているので繁栄すべき地点なるにかゝわらず、二十年周囲開拓遅々としている。マレッタ地帯であるからである。

この鉄道は、孰れ延長されてセツテ・バラスの日本人植民集団地を通り、尚延んでは南パラナ沿岸への将来線である。そうした将来もあるので、ジユキア終点現駅に永住性を出せる日本人は尠ない。でも日本人経営の宿屋もあるので、このマレッタ町にも拾家族位の日本移民の住むものは是迄絶えぬ歴史をもつ。この界限は独逸系植民のカイサアラ化せるものが、ゴヤバ林の中に住まっているもの点々とする。彼等は日本移民より移り住める歴史は尚二十年古いのである。それ丈け彼等は日本人より一層カイサアラ化している。日本人も彼等独逸移民の如くいづれはカイサアラ化して終うかも知れない。

この海岸地帯は、葡人が移民した頃にはツピー族が群居していた。葡人の勢力が増えるにつれ土人（ツピー）族は背後の山嶽地帯へと逃避した。

空白後、ジユキア全線の日本人栽培のバナ、は一千四百万株を超え、聖州輸出バナ、の半額を占めている。

イグアッペ 植民地

イグアッペ植民地、日本人のこの植民地は三ツに分離して

いた。レジストロ植民地、桂植民地、セツテ・バラス植民地とこれがイグアツペ郡内にあるので、イグアツペ植民地と呼ぶのであった。

在伯日本人植民地中、母国々策植民地として創めて建設した植民地で、州官有地を無償に譲渡された点に於てもこの植民地が始めてであった。リオ州マカニ郡に日本人植民地として無償譲渡された土地はあったが、二家族入植はしたが未建設に終った。それで無償譲渡のものはこれが創めだ。

一九一三年、同植民地がサン・パウロ州政府より開設の許可を得た頃は、ジュキア鉄道は未だ開通していなかった。

日本より直送されたイグアツペ行き植民は、サントス港で日本船を降り、沿岸航路の汽船に乗り換えイグアツペ港へ、それからリベイラ河を遡って桂植民地へ、レジストロ植民地へ着いたのであった。

最初はレジストロ桂両植民地で、セツテ・バラス植民地は一九一九年の開設である。一九一九年ブラジル柘植株式会社が海外興業株式会社に合理化し、セツテ・バラスの新開設地を設定した、総面積は三、〇二五域餘である。

奥地の日本移民の勝手自由に開拓する移植民地に此して、イグアツペ植民地の土地は肥沃であるとは言えぬが、四、五百噸の汽船が洋々と通うリベイラ河に添った環境は、奥地日本移植民共に羨やまれた。日本人の母国生活は、屹度水に恵まれ親しむ歴史であった。「何を苦世々々川端柳 水の流れを見て暮す」の桂植民地でありレジストロ植民地であるからである。水の流れを見ぬ植民地の人心はユウツが沈滞する。

開拓初期の指導者に、當時聖州にいた藤田克己を入れた。彼は盛岡高等農林出身者である。渡伯當時農商務省の海外派遣生であったが、ノロエステ線の鉄道工夫の体験者である。衛生方面には北島研三医師が日本から入植した。日本植民ばかりでなく、周囲の伯人カイサアラ衛生へも「同仁」した。

海興は植民地事務所をレジストロに設けて、植民と開拓との事務指導をした。

植民地創設者青柳郁太郎は、イグアツペ港とレヂストロ植民地の中間にある分譲地に、桂太郎陸軍大將の桂の字をとつて桂植民地と名づけた。桂太將が東京シンジケートの一員で、當植民地創設に陰陽功勞があつた處からの表彰名である。ミリタリズム華やかなりし時代の認識より一步も出てない名のつけ方であつた。「日本人の植民は政府自ら会社の假面を被つてやっている仕事」という一部伯国人の評をありのまゝに名を現わしていた。

植民自身は國家主義の伯人が嫌がる事もなくな、米作から茶の栽培へ、雜作へ、珈琲樹栽培へ、バナ、栽培へと、平和な生産植民生活をして環境になれ、その二世を日系伯人と成長させている。

米作植民には生産加工の精米機が緊要だ。海興がレヂストロ中央市街地に、南米一と稱する當時最優秀の精米機を据え附けたのは、開拓後八年目及一九二三年頃であつた。奥地米作植民には羨望された。イグアツペ植民地が國策植民地と誇る丈に羨望ばかりではなかつた。

植民地も連作の結果米が收穫されても採算とれなくなつた。植民者等は慣れぬ珈琲栽培へ乗出し、茶園を計画した。茶の採培は至極環境にも適した。植民者の多年生生産物栽培への轉向と共に時相も進展した。最優秀を誇つた精米機は錆つき出した。植民者等と指導者等との仲にそぐあないものがたゞよつた。國策的植民地も、奥地の自由植民地の澁刺たる經濟發展ぶりに眩惑され出したからである。

指導者達も奥地の自由移植民地を視察した。植民地の不平植民等も奥地の模様を視察した。その結果、レヂストロ植民地より植民がノロエステ線へ、パウリスタ線へ、ソロカバナ線へ、パラナ州へと轉向し始めた。植民指導者級も相當レヂストロを去つた。彼等の内、國策植民地の改善案を提げて、奥地に國策植民地を建設したものもある。信濃植民地、アリアンサ植民地等が、レヂストロ植民の不平組によつて企劃成就されたのであつた。

桂植民地は一九一九年、レヂストロ植民地より独立した植民地となつた。植民者中の中村甲作が古参植民であり、四百域の地主であり、植民指導者である。當植民地の地主其他家族数は三十餘家族である。

セツテ・バーラスの植民地は家族数三百に近い。パイオニアは測量技師野村秀吉、及菅谷威であつた。精神文化的指導者は松村俊明である。彼は同植民地「童夢バンド」の組織指導者でもある。

レヂストロ植民地は現在六百餘家族である。米の稔る植民地から、お茶の花咲く植民地として伯人社会に知れている。

初期の指導支配者藤田克己は任を辞し、後、自己の所有地にピンガ醸造をやつた。ジュキア駅近くに一二六域、七六・〇〇〇株のバナ、栽培をやっていたが、持病の動脈硬化症で聖市でサン・パウロ共同墓地の人となつた。植民地創設者青柳郁太郎も一九四八年日本で病没した。―牛迫の聲も素枯れし広野哉―の句をのこして。北島研三医師がレヂストロの共同墓地の人となつたは一九二三年であつた。彼の助手格の高野留七は尚レヂストロ植民地に健在であり、植民地建設當時よりの測量技師大野長一は任を辞して聖市住いである。

レヂストロ植民地も、植民第一世時代が去つた。そして日系伯人時代へと移る。レヂストロ中央街のホテル業前地七郎を父とし、「トヨ」を母とする前地デオゴは、一九四七年同市の市會議員となっている。



藤田克己



北島研三

栄枯は移るセントラル線へ

約七、八十年前栄えたセントラル線の珈琲耕地も、日本移民の来た頃は珈琲樹も枯れてしまつてカポエラ地帯になつていた。奥地の珈琲耕地に契約させられ配耕された日本移民は、契約済まして奥地の原始林地帯へと躍進開拓した。未開拓地の開拓誘惑に陶醉していた日本移民も、原始林の酷熱地、ともすれば自然の猛威にうちのめされて体力は衰え出した。原始林地帯開拓の興味は探いが、そこには人の生命とりのマレット菌が夥しかった。ウルセラ菌が多かった。

「未開拓の奥地もいゝが、セントラル線は気候温和な既耕地だから健康地帯だぞ。聖市百万の大都会を近く控えて、農産物の販路には困らぬぞ」斯うした聲が聖市の邦人社会から奥地へ流れた。奥地の原始林開拓に一応疲れていた人々の胸をうつた。

火田粗放農耕より、日本文化の集約農耕へ還らう……

「農業のブラジル」誌社主の揮旗深志、聖市日本人同仁会医高岡専太郎博士等々の聲であつた。セントラル線への廻れ右粗放農耕より集約農耕への反動期であつた。一九二七年頃であつた。

セントラル織道線は、伯国に於ける最古のバイア州鉄道に次いで古い線で、一八六〇年開通している。海岸山脈（セーラド マール）とマンチケイラ山脈（小雨山脈）との中間の平坦地帯を北から南へ貫通せる鉄道で、延長四九九軒、この沿道七十餘の大小駅、日本移民はそこに大なり小なり拓地を展開させている。

同線で日本人最初の開拓地とその人は、ピンダモンニヤガーバ（ツピー語で釣針工場の意味）駅であり、安田良一であつた一九一五年、サンタ・エウドシアの米作地を退去した安田は聖市に来了。當時初代の松村総領事はピンダ地方を視察した際、同地のサプカイヤ（叫喚）耕地主から、米作

指導者の周旋方を依頼され、聖市に帰館し安田良一を推薦した。



(写真―安田良一)

ピンダ駅の東山米作農場

聖市より一七三軒のピンダ駅サプカイヤ米作地が、一九一五年頃より邦人開拓の地となったに拘わらず、聖市に近いセントラル線の沿道地帯は、一九二〇年頃迄の五ヶ年間は日本移民の開拓移住の地でなかった。一九二四年、聖市の藤崎商會はサプカイヤ耕地五〇〇城を購入経営した。翌年藤崎商會の後藤武夫と熊坂、赤尾の三人とサプカイヤ米作耕地の支配人安田と共同で五〇〇城をサプカイヤ隣耕地を購め米作を経営したが、一九二八年同耕地は東山農事株式会社へ売却した。その支配人には安田良一が一時坐っていた。米作専門技師安田義重が日本から来て腕を振ひ、日本式水田、日本粳種子で日本式一等米を生産した。

東山資金は附近の小耕地を購入し、面積二、五〇〇城の農場となった。カンピーナス東山農場長山本喜譽司が農場長を兼任した。珈琲も十九万株、牧牛一千頭、伯国に稀れな整頓せる文化農場を出現した。東山米は市價をリードした。毎年粳種子は日本より輸入された。こゝ産の粳種子では翌年の米の品質が落ちていた。然しこの大農場も戦時中三菱系の東山を襲った「敵性財産」處分の政府命令に遭って、ついに手離すに至った。

安田はいまピンダ近郊に自適の生活を送っている。

ジユツタ栽培のトレメンベー

トレメンベー駅にジユツタ栽培のベリザル耕地があつた。監督は日本人佐藤初太郎であつた。一時は日本移民七十家族も就働していた。一九三一年頃のこと、彼等は重に借地農として生活した。ジユタ栽培事業は洋々たる前途ありとされたが、時価の変動に依じて浮沈した。

同駅の水月耕地は大正二年渡伯の鐘ヶ江久之助が、一九三〇年頃から三十域の米田をやり相當な生産成績を上げ、今では同農場は面積圀有余域、大規模の機械農をやっている。附近に借地米作者が増えていたがこれ等の借地農はやがて地主となりつゝある。その後各駅に小規模の米作耕地を處々展開した。これ等は東山の経営水田に誘導されたものである。

扁平（ふりはた）桃のなる

モヂ・ダス・クルーゼス

モヂ・ダス・クルーゼス（モヂは蛇川の意味）駅町は周圍ブレジョの三千人内外の小ぎたない町であつたが、附近地帯に日本移民の開拓生産が始まつて繁栄し出した。現在では四万近いと呼ばれている。

一九一九年秋田移民の鈴木重利が渡伯、直ちにこゝに借地した。次で福島移民の紺野一郎、一年後小野豊三、西江八郎等が入植した。駅より十六キロの奥コツケイラ植民地及カペラ植民地がそれである。最初の地主自作豊は仲本可興であつた。

小野豊三はパウリスタ線のガルサ植民地に於ける在伯日本人最初の養蚕業先達をした男で、ガルサを去つしミナス州立

養蚕試験場に指導員を二ヶ年勤めた後、モヂ駅に於て本格的養蚕を始めたのであった。

モヂ地方に於ける日本移民の生産品で特記すべき歴史は、市場を毎年賑はす偏平桃の産出であつた。片倉農場を開設した揮旗探志農学士が苦心研究、移し植え産出させたものであつた。茶の栽培もモヂはセントラル線に於ては、彼は手工を加へた相當な生産物となつた。彼は一九二七年ユーカリプトを半域試植した。彼揮旗は学究でもある。

日本移民の移り来ぬ前から聖州の桃の花は到る處に咲いてゐた。桃の實は未熟をちぎつて砂糖漬にする位のものであつた。揮旗は日本種及欧州種二十六種を試植して、遂に今日の平扁桃を市場に送つた元組である。

リオ街道筋モヂ駅より十一キロに本多慶三郎が日伯両植物の苗木栽培所を開始して二十年近い。この苗木が奥地日伯人の開拓地に移植されて日伯植林文化の一助となつた。

渡邊孝がモヂ産業組合を組織した。組合の庭に銅像の人となつた。

(一九三九年二月廿八日) 一九三九年、モヂ・ダス・クルーゼス地方に於ける生産果樹の種別、本数並に生産量をブラジル日本人發展史は左の如くあげていたが、それから八年、モヂの桃は開花期と生熟期を短縮させたため、早老衰弱の桃樹の容相を呈して結實不良の處もあつた。

(種別)		(幼樹数)		(産出量)	
		本	本	箱	
桃	四、一九三	一、七九七	二二、六〇〇		
ブドー	四二、一四〇	一八、〇六〇	一一四、〇〇〇		
無花果	一三、八四〇	七、八六〇	一六、〇〇〇		
李	一、四〇〇	六〇〇	三、〇〇〇		

モヂ地方の日本移民は最初薯の生産に力を入れたが、同地の武部は薯に成功し、一般は成績想しくないので蔬菜栽培へと轉向した。

次に進出したのが養鶏であった。酒井、田名邊、滋野、渡邊等養鶏の先達がモヂに出てモヂ養鶏界を日本移民で牛耳っている。揮旗に次で阿部の茶園は大成した。

聖市よりモヂ駅を終点とする郊外列車が約一時間毎に運轉し自動車路も完成したので、聖市より五十軒のモヂ市は聖市と隣化してしまった。

茶の花白き スザノ

スザノ駅地帯に日本移民の移り住んだは、一九二二年沖繩移民の宮里万栄、妻カコイ、高江州義好等の家族で、駅近く茶の花が野生の如く白く咲いていた。次に移り来た家族の静岡移民萩原喜作の妻はるは、茶の花をみて哀れを覚え、その實をとって栽培した。これがセントラル線に於ける日本移民の茶の栽培の創めとされる。誰か持って移り来し茶の實か、伊太利人か、西班牙人か、それとも矢張り葡萄牙人か、支那人か……。第一回移民の移り来た頃、ペニアの丘は茶の花白うさいていた。

杉々として繁茂するスザノ地帯のユーカリプト林、この植林を始めたはスザノ駅では一九三二年中野利夫とされている。

蔬菜栽培地としてのスザノ駅地帯、セントラル線に於ける日本移民の大集団第一地帯となった。周囲に展開する地主、借地農は一千八百家族に至っている。

養鶏のイタケイラ

海拔八百メートル近いイタケイラ高原地帯、日本移民の移り住んだのは一九二三年より始まった。酒井睦雄が草分けだ。一九二三年、イタケイラ土地会社（伯人系会社）の一雇

員石橋恒四郎獣医が日本人社会へ宣伝売出してから急に入植者が増した。聖市から僅か十七キロの鉄道沿線である。

富田實が此處に養鶏場を開いた。養鶏の先達者となった。植民者は主業養鶏、果樹、副業に蔬菜をやっている。

その頃聖市中央メルカードのトマト販売店は貧弱なものであった。市民のトマト需用も非常に少量なものであった。イタケイラの日本移民の蔬菜栽培者等はトマト栽培に力をそゝいだ。多量に生産し出した。イタケイラのトマトは聖市中央メルカードの名物となった。イタケイラとトマトは、日本移民栽蔬トマト歴史の一頁となった。三百家族の日本移植民集団地となった。

日本式木炭竈の

ロマノポリス

ロマノポリス植民地は、中央線に於ける日本式木炭竈の煙を上げた處であつた。

品質優良な多量木炭を聖市へ搬出した。

イタケイラに次でトマトの優良種を出したのも、ロマノポリス日本移民の蔬菜栽培者であつた。

此處はイタリヤ人の土地会社経営地なるも、開拓者は殆んど日本移民であつた。

山紫健康の地 カンポス・ド・ジヨルドン

(写真―カンポス療養所付近)



セントラル線のピンダ駅より奥地高原へのカンポス・ド・ジヨルドン（アベルネシア駅ともいふ）電鉄線がある。海拔一千米以上のオゾーン降る高原で、肺患療養地帯として有名である。在伯日本人同仁会に、伯国外交界の大物ジュゼ・マセド・ソアレス（後年聖州執政官となった）より贈られし五域の麗丘が茲にある。同仁会の肺患療養所が此處に建つた。一九三八年であつた。この療養所建設前、日本移民肺患者寄合世帯の療舎があつた。同地の移住者林田久七、小田切伝等が指導していた。

この高原に日本人として始めて地主となつた人は、東京移民の池邊音人（俳号春鷹）であつた。四十域の地主で、アベルネシア市郊外カピバリに持つていた。一九二四年頃のことである。彼はその土地を売つて聖市に降り写真屋を開業し、傍ら日本人社会の同好者長唄師匠の先達となつた。

カンポス高原の肺患者の顔貌血色は皆櫻桃の實の如く紅い。治療所の前庭に桜の苗木を植えた一九三九年であつた。カンポス高原の盆秋麗地、峰一ツ手前にレノーポリスの日本移民の開拓地である。吉開森吉と有馬鉄之助が先達であつた。一九二九年頃のことである。その後この地帯峻拔は「ニンデン栽培」に好適地たると知れ、日本人は段々畑式にニンデン専門の栽培をやる者夥しく集まつた。八百嘉吉、叶野弘道、實藤祐造等であつた。セントラル線の低地「ニンデン」栽培が冬枯の際、この地帯の高原ニンデンは葉は枯れても根は腐らぬので、首府リオ・デ・ジャネイロ蔬菜界を賑わした。一域のニンジン畑に産をなした盛況であつた。一時は二百家族から集団した。レノーポリスの谷に秋田移民の木村貞次家族が果樹園を開き桃を出した。櫻花も咲かせた。除虫菊栽培も始めていたが、終戦後中央臣道聯盟の最高幹部の一人となつて一切を放棄した。

カンポス高原の盆地入口に神屋信一が栗原自然科学研究所の天文観測所を建た歴史もある。

杉村公使の夢のタウバテ

日本移民を伯国に誘致した公使杉村が、サンパウロ珈琲耕地視察の帰途、夜間タウバテ駅に汽車がとまった。夜間にもかゝわらず市民は公使を駅に迎送した。セントラル線中の古い町だ。杉村公使の夢の跡タウバテに日本移民が移り住んだのは一九三〇年頃よりであった。一時服部武雄が果樹園を開き、副業に養鶏に進出したが、同地方人をリードするには至らず移り去った。その跡をミナス鉱山移民の福田万蔵が流れくて移り住み果樹園と養鶏にいそしんだ。地主は重にバナナ、養鶏に、借地農は蔬菜栽培に十四、五家族移り来た。

町には日本移民のソルベツテ屋も、パステス屋も雜貨商も軒を並べている。市の中央メルカードの蔬菜部バンコの幾つかは日本移民で占め始めた。

ジャカレー、カサツパーヴァ、日本移民はその町に商売し、その附近に借地農業する。グアラチンゲタ、サン・ジョゼ・ドス・カンポス町、セントツル線の到る處、日本移民の姿のない處はない程移り住んだ。サン・セバスチオン島には平田が漁業に進出している。

武陵桃源の瑞穂村

聖市奥方郊外の瑞穂村は四十家族餘の日本移民の開拓地となった。一九三五年松本龍一等の山口移民の縁者親類が集団し開設した。サン・ベルナルド町より六キロ奥の三百域の武陵桃源地丘には桃の花咲き、沼には緋鯉おどり、自給自足の瑞穂村であったが、村に産業組合が組織され、町よりカミニオンが這入り出す。朝夕薄霧かゝる村のトマテは紅さゝぬトマテが多いと知った時、養鶏に移りユーカーリ林の村となった。鋤先の耕しでは面倒臭くなってガソリン耕耘機が村の若

人に操縦され、閑寂な村の空気をふるわせ出した。武陵桃源の村も時相と共に實在的植民文化集団地へと脱進した。

新富直吉、管讓治等の閑別荘、日本座敷にリモンの花が散っていた。松本龍一は伯国で鱒の孵化養殖魚に先達たらんと努力している。

漆器の出来る

オルト・フロレスタ

日本の漆器をブラジルへ輸入するよりもブラジルで日本の税金が高いで漆器に似たものを製造するが儲り、移り来た異国人の文化をつたえるものであると、漆器職人をよんで製造に専念させたは第一にリオ市に山縣勇三郎がいた。成功せなかった。

その漆器製造を聖市郊外のオルト・フロレスタにウルシ樹を栽培成功したのが中山良一であった。

陶土人形のサン・カエタノ町

サン・カエタノ町は聖市郊外の一植民地と開設された開拓地であったが、イピランガ区、ファブリカ区等を距て、サン・カエタノ町と聖市と両方から將に合体せん發展振を示している。

この町の人形製工場は豊田千次郎である。陶土日伯人形製造へと乗出したのは一九三二年からであった。今では聖市の玩具製造界に陶工人形製造所として認められている。

養殖金魚の サン・ベルナルド郊外

サン・ベルナルド町郊外に伯人資本の養殖金魚場がある。養殖金魚の技術に一家をなした高瀬茂一が支配している。高瀬は日本鮎の産卵養殖に成功して州政府より賞金百コントスをうけた。第一回移民の来た頃までは、聖市の何處の公園の池にも金魚もおらず緋鯉もいなんだ。それから何年経ったか、各市の公園の地に金魚も緋鯉もゾロゾロ入り出した。一九二七年渡伯した長野移民の高見澤森四郎が、リオ州に養殖金魚したのが日本金魚の始まりとされていた。

日本鯉は
伯国に末だ移り来ぬ

日本鯉は未だ伯国に移り来てないし卵種も来てない。独乙鯉は一九〇四年、リオ首府の独逸人カルロス・ギーネが、独逸からブラカと呼ぶ男に持たせて伯国に移し、飼養し一般に広まった。其中の或ものが小型に変化し、日本鯉に似たものになったが、鱗の数が違う。日本鯉の鱗は三十六枚ときまっております、独逸鯉より澁刺としてゐる。味も美味しい。

高瀬は将来飛行便で日本鯉の卵を取寄せ、こゝで飼育すると語った。眞鯉は来てないが緋鯉は日本から来てる。一九二五年菅讓治が日本から取寄せ、聖市郊外瑞穂村の池に繁殖している

聖市郊外の日本荘

サント・アンドレ町近くに日本荘を育てたのは愛媛移民の三好綱一父子である。一九三五年頃からの日本庭園で、松の盆栽が重で、桜も梅も木爪も黒竹、紫竹、黄楊の盆栽も仕立て販売してる。同園に「雀のお宿」の庵も古りた。市毛暁雪

総領事の「とにかくにこやはたちたりかぼちやまく」句碑も
たてた。

終戦後平和地蔵の石地蔵も新らしく建てた。

坂根嵯峨総領事が、

盆栽の松のかたへに故郷偲ふ

人の来て立つうすらびの庭

の短歌をのこしている處、「雀のお宿」も古りた。移民にふ
さはしい日本荘である。



（写真―日本荘）

日本移民の流れ北パ ラ ナ へ

サンパウロ州のソロカバナ線オリンニオス駅を基点として南へと起工されたサン・パウロー北パラナ鉄道、この地方広袤百数十万域、フキゲーラ・ブランカ、パウ・ダーリオ、ジャンガーダの喬木が繁茂する原始林地帯、土人グアラニー族の桃源地、伯人には神秘境視されたが、一九一〇年伯人アントニオ・バルボーザがパラナ州政府と交渉、域當三十ミルレーズで土地拂下げをやって、名珈琲耕地を創設したのが當地方開拓の先達であつた。

一九一九年は第一回広島移民の臼井介仁が支配するフロレス耕地主のドットル・ジョアキン・プロコピオと計画して開拓企業に進出した北パラナであつた。プロコピオは北パラナ鉄道を先ず開設せんと、友人の一英人資本家と組んで實行に移したが、プロコピオは創業緒につかず突然病疫した。臼井の志は一頓挫してしまつた。

カンバラの丘へ

日本移民の前進

一九二一年、カンバラ駅町へ臼井も家族を移した。福岡移民の上野米蔵、森部隆兵衛、熊本移民の吉良米吉家族が移り来て 日本人村を開拓した。

それから附近に日本人村々が開拓され出した。

聖州ソロカバナ線地帯の借地棉作移民の流れが、北パラナへと移り動いた。

ピリアニット植民地

一九二二年は伯国独立記念祭であつた。日本の實業視察団が

山科禮藏を団長として片倉兼太郎等々が渡伯した。實業団一行は海岸の官撰のイグアツペ植民地を巡視した。奥地の移民の自由開拓の植民地を視察した。彼等資本階級も植民事業に覚醒し始めた。

南米企業組合の名にて、北パラナのピリアニツト（ピリキートの誤発音）に一万域を購入した。時の聖市総領事赤松裕之が肝煎りした。

小麥の野村農場

バンデランチ駅奥に野村農場（野村徳七の野村合名会社海外事業部）が一、三五〇域を購入し、野村の支配人大窪治と聖市の伊藤陽三とがこの土地を選定した。一九二六年末である。この農場は聯邦政府小麦栽培の種子採取指定地、北パラナに於ける小麦栽培の可能性が伯固農務省に諭ぜられた折り、野村農場では小麦栽培の先駆をやり好成績を上げた。幾度か播種苦心の結果、一九三七年印度原産プーザ四号種がこの北パラナ赤土質に最適種と判明する。斯くて伯国内に小麦自給の政策を提唱したフェルナンド・コスタ農相は首府より現地を視察して野村農場に一泊し、野村農場の一隅に手植の榊木を記念した。一九三八年以降三力年間、同農場は伯国小麦栽培の種子採取場と指定された。

その頃同農場には日本移民百家族近くに増えていた。附近には第一回福島移民の山田末吉家族が第二モンソン植民地より移り、百域の珈琲耕地を開拓する。臼井介仁も珈琲耕地をその附近に開拓していた。アグア・デ・カイシニオ植民地も開拓されている。

後宮耕地

コルネリオ・ブロコピオ奥に、京都資本家の後宮耕地が購

入開拓された。僅か三百域にしても、日本資本の流れの一つである。後宮武雄の所有で、支配人に林巳之助が耕地の傍に三十域もつて開拓した。一九三一年である。その頃コルネリオ駅の日本移民は十五家政であつた。後宮耕地は珈琲である。

ブラジル柘植組合の トレス・バラス移住地

一九二八年、ブラジル柘植組合は、移住地としてトレス・バラスに一二、五〇〇域のパルミット林多きの原始林を購入した。パルミット林のある處、土人は健康地帯と唱えている。

この移住地には最初第一回移民の臼井介仁が支配人となる。(臼井はバンデランテに自己の珈琲耕地をもっている)。次で故平野運平の弟バストス移住地の支配人榛葉彦平が支配人に坐つた。

アサイ植民地と稱した。アサイは日本語の旭にも通ずるが北伯の清涼飲料果アサイにも通じている名として伯人の心を和げる。一九三三年、トレス・バラス時代の入植民は僅かに十五家族を数えていたが、この頃から聖州の日本移民の流れは二つに別れた。一つは聖州奥地帯ゾナ・デ・マツトへの流轉であり、一つは北・パナへ北・パラナへの流轉である。一九三二年伯国革命政府が發布したサン・パウロ州内珈琲植付制限令は、サン・パウロ州奥地開拓の珈琲栽培植民を困迷させた。パラナ州には珈琲栽培制限令が寛大であつた。「パラナ州なら珈琲植えつけられるぞ」と、日本移民の珈琲樹栽培希望者は北・パラナへと夥しく流轉した。

ピリアニット植民地からウライ(水鳥)植民地となつて、旭植民地と共に日本移民の大集団地となつた。

一九四八年度ウライ植民地収穫物

家族	五〇〇	
土地所有面積	六、	〇〇〇域
珈琲樹敷	二、	〇〇〇、
珈琲果俵	一五〇、	〇〇〇〇
棉（アロバ）	一〇、	〇〇〇〇
フエジョン	八〇、	〇〇〇〇
ミーリオ（俵）	一二〇、	〇〇〇〇
一九四八年アサイ植民地収穫物		
家族	二、	〇〇〇
土地所有面積	一〇、	〇〇〇域
珈琲樹数	八、	〇〇〇、
珈琲果俵	四五〇、	〇〇〇〇
棉（アロバ）	一二〇、	〇〇〇〇
フエジョン	一二〇、	〇〇〇〇
ミーリオ	一〇〇、	〇〇〇〇

ロンドリーナの国際的發展

日本資本が北パラナへ進出する前に、北パラナの中央を北へと流れるチバヂ河以東五十五万域を握り、サン・パウロ―パラナ鉄道を掌中に収めている英国シンジゲートの北パラナ土地株式会社が出現していた。支配者は聖州ノロエステ線グアタンブ駅に棉作栽培の犬試作耕地を經營した英人であった。一九三〇年からの開拓であつたが、同土地会社の日本人部主任となつて日本移民へ土地売りの宣伝したのは、グアタパラ耕地の第二回高知移民氏原彦馬である。一九三二年四月ロンドリーナ方面の日本移民家族は四十六家族であつた。

其年カンバラ駅より鉄道はビキラー・ジャク牛駅まで開通しロンドリーナ町まではそれより八十五軒ある。鉄道は間もなく開通する。五十五万域の土地会社の本部事務所の所在地ロンドリーナは近代的植民地の都市計測によって一大飛躍する。

この地帯はテーフ・ロツシヤ地質である。日本移民の開拓大集団地となり、珈琲耕地、棉花栽培耕地、米作耕地、雑作耕地 ロンドリーナ市に大飛行場が完成した。汽車は貨物を生産物を運搬するもの、航空機は人が旅するものとの時代相を現わしている。やがては生産物も空輸の時代が来、汽車が時代の骨董品視される。ロンドリーナより聖市への空の旅客には日本移民の姿が多いは、経済的躍進の微を現わすものであろう。

インガ駅の日本移民集団地、コルネリオ・プロコピオ駅に日本移民の集団地、植民地の出来たのは一九三七年頃からであつた。

南方への移住踏石として

聖州集中の日本移民が他州政治家の羨望に因り、ともすれば聯邦議會に日本移民入国摩擦の憂慮となるに鑑みた海興は、一九三五年、リオ・グランデ・ド・スール州の州植民地内のウルグアイ河流域に日本植民地を開設した。分散植民への轉向的計画の第一階段として、南方への移住踏石的植民地であつた。

斯植民地家族を統率して入植したのは富岡漸であつた。彼はグアタパラ耕地通訳出身で、ミナス州コンキスタに米作を開始したパイオニアの一人であつた。

海興としては米作植民を仕立たかつたが、一九四〇年母国時局は海外に於ける移民の総の計画を犠牲にしてしまつ

た。この植民地より海興は手を引いた。富岡は空しく同地を去った。植民者は各自の行動をとった。こゝに始めて植民者の独自の生活が展開した。

該植民は州首府ポルト・アレグレ市を始め、カシアス市へペロツタ市へ、サン・レオポルド市へ、サンタ・ローザ市へ、ジャガロン市へ、リオ・グランデ市へ各自生活を求めた。

ポルト・アレグレ首府には渡邊長太郎、朝枝栄登、中村栄一等が發展してた。

第五章

リオ市、サン・パウロ市及び他州 首府リオ・デ・ジヤネイロ市と 日本移民

附、日伯両国関係の公的事項

首府リオ・デ・ジヤネイロ市の人口は、初回日本移民が来た頃百二十万といわれていた。ポルトガル国攝政ドン・ジョーンが政府大官を伴つてリオ・デ・ジヤネイロ港に落着いたのが一八〇八年で、それから首府が創まつた。

日本移民はそれから丁度百年後の一九〇八年に渡伯した。この首府に始めて住んだ日本人は、伯国が共和国となつた一八八九年（明治二十二年）伯国の練習艦で来た大武和三郎であつた。その以前に居たという日本人の痕跡は同州のイグアス郡にあるが、史實としては未だ詳かでない。

一八九七年（明治三十年）日本公使館が首府に創設された。當時首府には黄熱病の絶滅前とて、駐伯外国公館はペトロポリスの山荘地に集まつていた。日本家族移民が始めて上陸した頃の駐伯日本公使は内田定槌で、通訳官は三浦荒次郎であつた。公使館附武官に陸軍大尉伊丹松雄が居た。

首府の日本人に大平善太郎がいて、彼は農商務省海外實業練習生であつた。水嶼峻一郎、田中良作、佐久間重吉などが聖市の藤崎商会をやめて首府に移り住んだ。笠戸丸がサントス港に着く五ヶ月前に山縣勇三郎の甥岩永鞏固が居て、山縣の来伯を迎えた。山縣は子分出口峯一郎に先じて来伯した。その後山縣は漆器工場、花火細工の職人を日本から呼んだ。その頃大平善太郎は日伯商会を開店してた。笠戸丸の水野龍は江戸の花火玉屋の職人松田、柏木の二人と親戚の片岡治義家族及高桑治平、岡村繁吉、松田宇一、妹みちを聖市より伴つて首府へ移つた。山縣の花火屋も水野のそれも共にリオ

首府百年祭に営利あてこみの仕事であった。

笠戸丸船員（クオター・マスタ）笠島今吉は元、山縣の北海道時代の汽船会社の船の事務長であった。リオ港で下船し、後にガンボア区に山縣の後援で伯国日本移民の梁山泊を始めた。これは第一回移民の耕地流浪組がリオ市に来て、山縣の世話でラーヂ造船所に働き口をえた。その移民の宿で最初は「山縣人夫供給所」と呼んでいた。第二回旅順丸移民のコロノ崩れも集っていた。ラーヂ造船所では月給六十ミルから九十ミル拂っていた。宿泊料は月三十ミル位で済んだ。後に山縣の手を離れて笠島の経営となったが、五、六十人の宿泊家屋が月八十ミルの家賃であった。そこに居たのは笠戸丸組では宮田勝衛、有水藤太郎、松山末次郎、上原直松等其他数名であった。旅順丸組では佐藤次郎、高橋松衛、野中某等の外に白土貫一、山本、中山、中野、松市等が居た。

その後の梁山泊に居たのは、三浦鑿（當時宮古と稱していた）、石橋恒四郎、竹内禮蔵、星野勝蔵、根本勇之助等であった。當時は今村広が亜国より山縣寮に来て、笠島と共同梁山泊をやっていた。岩淵彪もこゝに居た。彼等は日給五ミルでカエス・ド・ポルトの倉庫アルコデイロをしていた。

内田公使の招きで船員福原庄五郎は公使館に入った。前任宮崎信造が聖市へ進出せねばならなかった。移民会社の通訳手不足からであった。福原は後に内田公使の世話でラーヂ船会社に雇われた。

水野の花火屋解散後、職人の松田と柏木は帰国した。片岡家族と高桑岡村二青年は、隈部家族の住むマカエ植民地へ入植した。松田宇一の妹は首府の「ガス」会社社長宅にコッペーラに雇われた。次で兄の宇一もガス会社へ雇われた。松田妹は三年後或る移民船の事務長と結婚して帰国した。松田宇一はガス会社に三十二年勤続した。後ニローポリスに借家十数軒の家主となった。聖市に留まった笠戸丸の洋裁師原口はその年リオ首府へ移っていた。



(写真―隅部三郎未亡人)

リオ首府へ徒歩で
鉄道線路を辿った移民

ゾーモント耕地を引上げた熊本移民中浜田太作、中島勘五郎、光長、清吉の三家族は耕地契約を嫌い、収容所を追放された。荷物を棒で擔い、女は子供を背負い、手には小包を提げて収容所附近の鉄道線路に沿って兎に角歩き出した。十日の後、辿りついたのはリオ首府郊外メスキータ小駅であった。彼等は意地も希望もなく疲労しきっていた。そこへ一人の日本人が現われた。ペルー流れの熊本移民中島ミゲールであった。彼等は彼のすゝむるまゝに彼の就働する同駅前の煉瓦工場に落ちついた。

ブラジル海軍練艦習ベンジャミン・コンスタント号が世界週航の途次、太平洋のウエーク島に於て日本人二十名を救助した。小型帆船賓久丸が難破した乗組員であった。艦が横浜に入港の際披等は上陸したが、その救助者の二人は同艦に乗って伯国に來た。伊勢仙助、柿原某であった。同艦は香港から又一人の日本人を便乗させてリオ港に帰った。その日本人は柔道家で、伯国海軍兵学校に柔道指南役として雇われた。これが後年の日伯新聞社長三浦鑿であった。

一九一〇年頃リオ首府には山縣の店と、聖市藤崎商会を出

て来た佐久間重吉の日本雜貨店の二つがあつた。マカエの植民地を退去した隈部三郎一家がリオ市に邦人相手のペンソンを開いたのもこの頃で、隈部の二女照子と三女暁子がリオ市の女子師範入学の予備科に就学していた。

初めての日本女性帰化人と女子正教員

日本移民の子で、伯国中等程度学校卒業した人の始めは隈郎照子であつた。次で暁子であつた。彼女等は伯国正規の正教員資格を得る為め一九一八年伯国人に帰化した。この姉妹が日本移民始めての帰化女性であり、始めての正教員であつた。

日本孤児移民の来伯

第二回移民船旅順丸に乗つて、岡山の孤児院及び東京養育院から四名づつの孤児八名が来伯した。リオ湾内のヴァンナ島の造船所ラーヂ商会の徒弟となり就働した。

これは當時の内田公使が、ラーヂ造船所商会主アントニオ・ラーヂと茶飲話の慈善心から成立つた試みで、孤児は十才から十三才迄の少年であつた。當時ラーヂ商会へ就働していた福原庄五郎が孤児の世話をした。彼等も其後サン・パウロ州に流れたもの数名あつた。春雨秋風三十七年、彼等も五十男となっている。

第一回移民の神股為蔵が聖市からリオ首府へ流れて、インデオ・ド・ブラジル將軍の家庭にコッペイロしていた。

農商務省實業練習生として古川大斧が来伯した。一九一九年（大正八年）八月、横浜元金銀行部リオ市に開店した。

蜂谷商店が陶磁器輸入を創め後に福原庄五郎が支配人となつた。藤崎商会支店、澤村幸次郎商店、白土寛一商店、東定八商店、西谷一男商店等が開店した。聖市のプラサから中村末熊運轉士がリオ市の自動車運轉士となつた。リオ市で初

めてのシヨフエイロで、その後貝釦製造工業へ、洗濯業へと進出した。中村と東定八商店主とは第二回移民青年であった。

日伯国交関係公的事項

移民の発展舞台は主にサン・パウロ州であったが、日伯国交関係の公的な事項は首府リオで行われ処理された。一九一〇年（明治四十三年）アルゼンチン国独立百年祭に特派された吾国巡洋艦生駒は帰途、六月サントス港（非公式）及びリオ・デ・ジャネイロ港を公式訪問した。同艦には後年再渡伯した志賀重昂、下斗米（田中館）秀三等がいた。便乗者の大庭柯公は帰国後「二匹の蚊一国の興亡に關す」の一文を、南北四萬哩中に草して、黄熱病菌（ステロミヤ・カロブス）を絶滅させたオズワルド・クルス博士を尊敬していた。外務書記官赤塚正助も便乗していた。彼は来聖し、當時到着した第二回移民船旅順丸移民をサン・パウロ移民收容所に巡視した。移民会社代理人上塚周平を移民耕地の労働不成績の責任者として、彼は官吏の威厳を振廻し上塚を泣かせ去った。

生駒艦長莊司養基、副艦長中佐秋澤芳馬、航海長中佐金丸清緯、大尉百武源吾、軍医中監百瀬一一、陸軍中佐佐藤祐武等。

便乗者は右の外貴族院議員子爵関博直、男爵眞田幸世、衆議院議員鈴木力、衆議院書記官津久井利行、新聞記者として時事新報の安岡秀夫、東京朝日宮部敬治、報知佐藤忍、海事雑誌記者仁禮景雄等であった。亜国に於て国際海軍ポート・レースあり、日本海軍は一等を占めた。伯国日本移民は肩身を広く感じた。

一九一三年（大正二年）　リオ港に我商船学校の練習船大成丸が寄港した。

四月十六日より五月四日まで碇泊し、リオ在留の日本人が

ン・ボア梁山泊組が大歓迎宴を開いた。

一九一四年八月末欧州大戦勃発と共に、リオ・デ・ジャネイロの日本領事館を閉鎖して聖市へ総領事館を開設した。リオ首府日本人は尠なかつたが、聖州の日本人は一万四千を越えていたからである。欧州大戦中の日伯関係は、リオ首府に於ては閑散時代である。

一九一七年三月、大阪商船会社は南米定期航路第一航笠戸丸を差向け、リオ港に入港させたが、これには移民は乗せていなかった。第一回移民船笠戸丸と同船であつたが、東洋汽船会社から大阪商船会社に身売し、荷物船となつていた。

一九二〇年（大正九年）十一月帝国海軍練習艦磐手、浅間の二艦は世界週航の途次グアナバラ湾に入つた。

一九二二年（大正十一年）は伯国独立百年祭であつた。日本は祝賀参列のため出雲、浅間、磐手の三練習艦を派遣した。又百年祭記念の爲め、リオ首都に於て万国博覧会が開催され、日本館を建て出品した。日本館は宇治の鳳凰堂模型館であつた。

三艦に便乗して東京商業会議所会頭山科禮蔵団長、内田嘉吉副園長となり、南米實業視察団が来伯した。団員には南米企業組合山本直吉、三菱合資会社八巻連三、三井合資会社野村広、日本郵船会社川口留吉、大阪商船会社松原季久郎、横浜正金銀行津山英吉、株式鈴木柏萬次郎、東洋拓植谷川浩三、日本貿易株式会社神谷忠雄、第十九銀行黒瀬利重、片倉製糸紡績片倉兼太郎、有賀文雄、土橋源蔵、大日本紡績聯合岩城重喜知、横浜商業会議所加藤平次郎、京都商業会議所奥村安太郎、三井物産会社根尾克己、東洋汽船会社太田長三、農商務省野間譽雄、間部彰、東京商業会議所書記古川大斧等であつた。この外第一回移民船笠戸丸の東洋汽船会社通訳であつた金澤一郎も東京外国語学校教授として再渡伯した。大阪朝日、毎日の記者も来伯した。

當時は堀口九万一公使時代で、日本からエピタシオ・ペソア大統領に菊花大綬章が贈られ、サンパウロ州知事ワシント

ン・ルイス、他四長官にも勲章を贈った。

右の實業視察団体中の企業家は、後年伯国へ投資して企業し経済的に進出した。

九月一日在横浜伯国総領事バルラダ、震災に夭した。

一九二三年五月一日、駐伯日本公使館及駐日伯国公使館は執れも大使館に昇格した。初代田付七太大使着任した。新潟医専出の笹田正数が、日本医師として初めて伯国医師開業試験に通過した年であつた。同年栗津金六は在伯日本人最初の日伯両語公認翻訳人の免許を得た。

一九二四年野口英世博士来伯した。高岡専太郎が伯国医師開業試験に通過した。岩崎彦彌太が一九二五年に来伯した。

一九二六年八月在東京伯国初代大使リナルド・シルバーへ勲一等旭日大綬章を贈る。一九二五年より持越された田付大使の幹旋せる八十五万円低資日本植民へ貸付なる、田付大使帰朝前パラ、アマゾナス両州視察す。一九二七年一月二十五日有吉明第二代大使着任し、同年三月十一山西、栗津、アマゾナス州政府と土地「コンセyson」に関し契約署名す。藤波、佐伯両博士が来伯した。

一九二八年（昭和二年）リオ首府に於て第十三回萬国議院商事會議開催され、日本からは貴族院議員文博澤柳政太郎、保科正昭子爵、斯波忠三郎男爵、法博士方寧、稱田昌植男爵、多額納税議員高広次平、貴族院書記官長世吉出席した。

第二回族商団が来伯した。駐日伯国大使フエトーザの後任としてアルヴェス・アラウジオ赴任した。パラ、アラニオン、バイア三州児童作品が日本へ返禮として遂られた。一九二九年神戸日伯協会は創立満二通年記念に、宮田溪仙画伯揮毫の日本八景名所画帖をワシントン・ルイス・デ・ソーザ大統領に贈ったその使者として松岡英介来伯した。

一九三〇年一月聯邦政府に対し、南大河、ミナス両州に革命勃発し、リオ首府不安、軍部はワシントン大統領退位を強要した。

一九三二年、日伯中央協会が東京に設立された。東京、大

阪、神戸、名古屋の官界實業、其他伯国関係者が日伯親善増進のため創立したものであった。

初代協会長蜂須賀侯、副会長徳川頼貞侯、蜂須賀歿後徳川會長に就任、総裁は高松宮殿下であった。

一九三五年（昭和十年）訪伯日本經濟使節団が来伯した。団長平生釵三郎（夫人同伴川崎造船所長）、関桂三（俳号圭草、東洋紡績）、渥美育郎（大阪商船）、伊藤竹之助（伊藤忠）、岩井尊人（三井物産、天理教使）、奥野勁（三菱商事）、事務長山崎壮重（元亜国領事）、山口寿医博、随員中井俊雄（東洋紡）、島棉花、杉本恭一（江商）、小林米三（阪急）、吉田卯三郎（伊藤忠）、東義雄（日本棉花）、佐藤健夫、神野亮二（大阪商船）、柴山一郎（三井物産機械部）。當時の澤田節蔵大使と平生団長とは姻籍関係があった。

水泳選手齋藤巍洋が、ブラジル海軍運動協会から水泳コーチとして招かれ、九ヶ月間滞在した。それより伯国水泳運動界大いに進展する。

一九三六年、リオ首府に伯国の日本文化協会（*Instituto Brasileiro de Cultura Japonesa*）が設置された。

伯国教育普及期成会会長ドットル・グスタヴォ・アルンブルストから、同会所属児童六千名の名で日本児童にブラジル国旗を寄贈したので、日伯中央協会はこれを日本少年赤十字団に傳達した。其返禮として日本側より日本国旗一旗と日本小学校児童の就学状況フィルム及児童手芸品を贈って来た。伯国から「ぶらじる木」（蘇方木）の苗を又送った。訪日經濟使節団が日本に持って行ったものが途中で枯れたからで、その他伯国の珍植物（蘭、原産植物）等も日本へ移植した。

日伯間に無線電話通信が伯国側から開始された。

一九三七年、リオ・デ・ジANEIRO工科大学訪問見学団十一名（日系二世山縣文男工学士も）が団長ルイ・マウリシオ・ペレイラ・デ・リマ・エ・シルヴァ教授（夫人同伴）と渡日した全年、伯国美術研究留学生ルイス・アントニオ・ピメン

テル、及發養学研究生モザト・ヴァレラ一名渡日した。

鳥居龍藏博士父子が来伯した。リオ首府博物館副長エロイザ・トーレス女史（アルベルト・トーレスの長女）等の斡旋にてリオ首府の考古学界に講演した。

藤原義江テノール歌手が来伯し演奏した。

日伯中央協会の伯国支部を設けた。

一九三九年、第二回日伯交歓児童美術作品（繪画及手芸品）の日本ものが、リオ首府の国立美術学校で、伯国文部省主催で十五日間公開された。各州都市にもこれが展覧会を開いた。

伯国側は一九四〇年日本で開いた。

日本カトリコ国民使節海軍少將山本信次郎が訪伯、聖州奥地日本移植民地を巡禮した。

八月二十六日、日本を出発した「ニッポン」号の飛行機が十一月一日リオ首府に着陸し、親善使節大原武夫が日伯中央協会会長徳川侯からヴアルガス大統領及伯国日本文化協会長宛たメッセージ、並に神戸日伯協会々長の依托せる日本一細字書家本間擁堂の米粒に葡語細書したものを「ニッポン機」の純銀製模様型（横六三耗、縦四二耗、高一・五耗）の胴に納めたものであった。

一九四〇年九月二十三日、日伯文化交流條約が調印された。

日本が米州諸国との間に締結した最初の文化協定であった。桑島主計大使時代である。

一九四一年四月、石射猪太郎大使が着任し、ゼツリオ・ヴアルガス大統領に大勲位菊花大綬章を、天皇陛下の御親書と共に伝達贈呈した。

同年十二月八日、日米の開戦となる。

一九四二年一月、リオ首府に於て北南両米攻守同盟條約締結の結果、一月廿八日ブラジル国は日本国に対し国交断絶を宜する。

日本大使館はリオ首府に於て外界との連絡を全く絶たれてしまった。

斯くて日伯日本大使館員及在留民の或者は外交団交換船により伯国を退去する事となった。七月二日グアナバラ湾にその交換船 *Ogrisholm* 号が着いて、北米方面より駐米日本大使野村吉三郎、特派栗栖大使等も乗っていた、駐伯日本大使石射猪太郎、総領草原聲以下官民引揚一行が乗船した。総勢一千六百餘名七月二日、阿弗利加の葡領ローレンス・マルケス（中立国港）港向け出航した。同港待機の日本船に乗換えたのが七月十四日の旨、リオ首府、東山代理人後藤武火より聖市東山支店長山本喜譽司に電話があった。この報は當時尚対日国交断絶しなかったアルゼンチン国日本公使館向け日本より打電され、亜国より伯国へ又報されたものであった。

戦争勃発當初は在伯日本人の權益は、中立国のスペイン政府に日本政府は委任したが、終戦後スペインが中立国的立場を失なったのでスエーデン王国政府に權益を委任した。其權益部に舊リオ市の日本領事たりし早尾季鷹が坐った。

外交家や政治家が日的両国間の国交を親密にしたり、国交を断絶させたりするけれども、歴史は遠慮なく流れて、政治家や外交家が敢行し得ないことを實現させる。歴史は日本移民の日系伯人を芽生え生長させている。

在伯歴代帝国外交官

(年)	(月)	(日)		
一八九七	八	二二	初代辦理公使	珍 問 捨 己
一八九八	六	一	公使専務代理	三浦彌五郎
一八九八	一〇	二	臨時代理公使	三浦彌五郎
一八九九	七	四	二代辦理公使	大 越 成 徳
一九〇三	五	二七	臨時代理公使	堀口九万一
一九〇五	四	一九	三代辦理公使	杉 村 濬

(一九〇六年五月一九日 任所に病歿す)

一九〇六	五	二一	臨時代理公使	三浦荒次郎
一九〇七	三	一五	四代辨埋公使	内田定植
一九〇七	一〇	九	特命全権公使	内田定植
一九〇九	一一	二六	臨時代理公使	野田良治
一九一〇	五	二六	特命全権公使	内田定植
一九一〇	六	一六	臨時代理公使	野田良治
一九一一	一	八	同	藤田敏郎
一九一三	七	一四	同	野田良治
一九一三	八	一八	五代特命全権公使	畑良太郎
一九一七	三	二四	事務取扱	加藤外松
一九一七	三	二五	臨時代理公使	野田良治
一九一八	六	二八	同	同
一九一八	一〇	三〇	六代特命全権公使	堀口九万
一九二二	五	一	臨時代理天使	同
一九二三	五	二八	臨時代理大使	野田良治
一九二三	八	一六	初代特命全権大使	田付七太
一九二六	八	三一	臨時代理大代	赤松祐之
一九二七	一	二五	二代特命全権大使	有吉明
一九三〇	四	一六	臨時代理大使	縫田栄四郎
一九三一	二	一五	同	黒澤二郎
一九三二	八	一四	三代特命全権大使	林久次郎
一九三四	九	一三	臨時代理大使	内山岩太郎
一九三五	一	一八	四代特命全権大使	澤田節蔵
一九三八	一一	一二	臨時代理大使	天城篤治
一九三九	一	一〇	五代特命全権大使	桑島主計
一九四〇	九	二七	臨時代理大使	工藤忠夫
一九四〇	一一	一三	六代特命全権大使	石射猪太郎

スイミツ桃の苗を

リオ首府に移植

野田良治は臨時代理大使時代、ニロ・ベサニア外務大臣と親交があつた。ニロは自己所有のイタイパーヴァ（ペトロポリス駅より奥の一駅）の農場に水蜜桃を試植してみたい希望を野田に話した。野田は日本から水蜜桃の苗を取寄せてやつた。ブラタク会社の農業技師久保日峯松が渡伯の幸便で持つて来たものがニロの農場に移植された。一九二七年頃のことであつた。

柿の移植

金魚が伯国に移殖された一九二七年頃、金魚と同航海で日本の柿の木が移植された。滋賀縣人春日亨が家族と共に移つて来てリオ州に上陸し、ノヴァ・フリブルゴの郊外に土地を購めて柿を栽培し始めた。彼は一時南米柘植会社に備われ、家族とパラ州に移つたが、数年後リオ市郊外の吾土地に戻つた。その頃移し植えた柿は眞赤にうれていた。彼は柿羊羹を製り、花卉栽培と共にリオ市場へ販路を求めた。

隣州 ミナス 及び ゴヤス へ

ミナス州 へ

聖州の北隣ミナス・ジエラス州は山嶽地帯である。日本移民の進出は、平坦なリオ・グランデ沿岸、所謂三角州地方には早くから進出開拓したが、交通の不便からして、又開拓の地勢上四十年間ミナス州中央にはかばかしき発展を阻害されてきた。

州首府ベロ・オリゾンテ方面へは、鉱山労働日本独身移民が一九一三年移住したが、直ちに四散し、同州にはとゞまらなかつた。これ等鉱山移民が家政移民であつたら或は同方面へ定住したかも知れない。然しその後、ベロ・オリゾンテより五十キロの奥地へ水晶掘の日本家族移民が六家族ばかり移り住んだ。

オウロ・プレット、マリカナ地方に於ける邦人の進出はあつた。同地帯には日本茶の栽培される相當なものあり、現に三百五十万林に及んでいる。レジストロの聖州本場の茶栽培株数が一九四〇年一千万株と呼ばれているに比し、三分一をミナス州に占めている。日米開戦前の一九四〇年頃のベロ・オリゾンテ地帯の日本人家族は約十五、六家族位で重に蔬菜業に進出していた。その後戦時中ミナス鉱山好景氣につれ、彼等の経済的地盤は大分改善されてきた。終戦後、知人は知人を呼んで、現在のはベロ・オリゾンテ地方の日本人家族は百餘家族に上っている。

聖州開拓に歴史を開いた第一世の若きものゝ流れは、南に西に北にと、移住開拓の餘映を尚のこしている。ミナス州への流れもその一端である。

ゴヤス州へ

日本移民がゴヤス州へ移り住んだのは、ミナス州三角洲附近の米作者崩れが、ミナス州とゴヤス州境のアラグアー市方面へ米作者として進出し、段々とミナス州外に、ゴヤス州へと移轉したもので、一九二二年頃からであつた。一九二五年石橋恒四郎がミナス州コンキスタ方面で米作等の産組を組織して失敗した後、聖市の家具商松尾を口説き、ゴヤス州アレンナポリス郡に日本人植民地を開設したが、地権譲渡手続の不備から入植日本人二十餘家族は同植民地を退去、附近に轉任した。

常時イパメリ駅附近に須貝治工門兄弟は百域餘の牧場に、牛百数十頭を入れて牧畜に精進していた。一九二七年頃である。

一九三〇年頃にはヴィアノーポリス駅ビラードに、日本人集園のセラード植民地が開拓されていた。手代木正勝、貞平斎吉平子喜三郎等五十家族近いもので、珈琲を栽培し、米作をやった。彼等は北海道より鹿児島に到る拾五縣人の寄合植民地で、所有総面積五百六〇域、地價一五二コントス、栽培珈琲二拾万四千株、地主二三家族であつたが、地主でないものもその後他轉し地主となっている。

一九四〇年頃ブラ拓系のブラジル鉱業会社（三菱資本）がアンナポリス奥三八〇料の独逸人所有のニツケル鉱山ブリツヂ耕地より、ニツケル及コバルト鉱石を貨物自動車にてアンナポリス駅まで運搬し、一方はトカンチンス河よりバイア港を経て、一方はサントス港より日本に輸出した。コバルト鉱石は當時百噸ばかり輸出した折、日米開戦してしまい、空白時代に入ってしまった。

空白時代には入つたが、ゴヤス方面邦人は何等異状な敵国性人扱いも社会的にうけず現在に到っている。この空白時代にゴヤス州に点々している日本人の総家族は二百家族より二百五十家族の間にあるものとされている。主なる日本移民集団地はゴヤンデーラ郡内には米作者として二十餘家族があり、收穫米高四万俵位とみられている。ピーレス・ド・リオ郡内には拾家族内外で主に牛の牧畜業に従っている。アンナポリス市郡内は現在ゴヤス州第一の日本人大集団で、それでも五拾家族たらずである。この日本移民は、土地が森林地帯であつたので伯人の珈琲栽培者多きにならつて珈琲栽培もやり、市民の需要に応じ蔬菜業者もある。イニウマス郡内か日本人は拾家族位で牧畜に牛をふやしている。

最近政府が未来の伯国首府移轉地として開拓に精進しているバランカ新植民地は、ゴヤス州内の珍しい肥沃の土地で、日本移民は未だ拾家族を数えるに過ぎないが、大農米作地帯

とされ最新式の大型トラクトールにより耕作され、粃の二万俵内外を收穫している。

この外三家族、五家族と広漠たるゴヤス高原に点々として水晶採掘に砂金探しにダイヤ掘りに生活している日本人がいる。

三百年前北米の西海岸に、東部のアメリカ植民が三三五々移住した歴史を、人々は今ゴヤス高原に展開し、その中に日本移民もまぢっている。

聖州集中の日本移民三十万の渦巻動揺は、州の南隣パラナ州へと大勢は流れ込まん傾勢であつて、州の西マツト・グロツソ州、北隣、ミナス州へ、ゴヤス州への移動は今の處渺ない。

パラ―及びアマゾナス州

大使館の壁のブラジル大地圖

一九二三年、聯邦下院に提出されたミナス州議員フイデス・レイスの黄色人入国制限法案、それに関連して首府に起つたミゲル・コート一派の同案讃成公開文発表、これは一人でも多く日本移民を伯国に入国させたい日本人側の希望に行詰りを興えた。駐伯日本外交官筋は、田付大使を始め其他一同、この日本移民制限法案の揉消運動に相當奔走した。

聖州の農生産界には相當利益を上げている日本移民であるのに何故に日本移民入国制限案が擡頭したか、その原因は那邊にあるか。日本人は聖州にのみ集中している。そこでのみ生産利益を挙げている。他州には日本移民のお利益がない。茲に他州の為政者のシユメがあるんだらう。日本移民は今後宜しく各州に分散計画でやる可しだぞ……。斯うした觀察に日本移民制限を認めた田付大使館員等は、大使館の広間の

壁に懸けてあるブラジルの大地圖を眺めては吐息し、「斯んなに広いブラジルだ。日本移民を、さて何處へ移したらよからう……あの邊は何うか、この邊は何うか」と物色していた。田付大使は伯国に來任勿々だ。彼方此方と視察し歩いたでないが、地圖を眺めては至極まじめであつた。

「ここにこんな広い處がある……」。それがアマゾナス州であつた。

當時日本から芦澤安平が伯棉の研究に來ていた。彼はペルナンブツコ州やリオ・グランデ・ド・ノルチ州を中心に視察することになり、恰度その頃來伯していた鐘紡研究生の中野英夫を案内役として北伯へ出かけた。

芦澤はペルナンブツコに行つた。そこから大使へ打電した。

「これからアマゾナスへ行きたい。お許しを乞う」と。大使は許した。芦澤はベレンに行つた。コンデ・コマの盡力でアマゾナス、パラの大地主サムエル某が、「土地なら俺のを見て欲しい」と、船を仕立て芦澤を案内した。

この一行の旅行の報をきいたパラ州統領デオジエニオ・ビンチ (Diogenio Viní) は、芦澤に「パラ州の土地も視察して呉れ」と、アカラ地方を案内した。芦澤一行は氣に入つた。

條件附の無償土地提供案をもつて芦澤はリオ首府に歸つた。大使館側はこの土地提供案に賛成した。

斯くて芦澤は日本へ歸つた。同報告を聞いた鐘紡専務取締役の福原八郎は自ら團長となり、各方面の専門家十一人の視察一団を組織した。出発に際してリオの日本大使館に打電した。

「パラの土地視察に行く宜しく御配慮を乞う」

この電報が田付大使に達したは、一九二六年四月の頃であつた。田付大使以下一同面喰つた。大使館付海軍武官関根郡平大佐は日本移民北伯進出に大乘氣であつた。

田付大使は大使館囑託栗津金六、在サン・パウロ日本総領事館農事部技師江越信胤を伴うてパラ州に出かけた。関根大佐も一行に加わった。一行はやがて日本より着く福原一行の土地視察団をパラ州統領に紹介するためであり日本移民をパラ州に入る、アマゾナス州に入る、果して適するや否や大使一行は實地視察の為めであった。

健康勝れぬ初代駐伯珍田拾己公使は、見もせぬアマゾナス州を「所詮本邦人の移住地にあらず」と外務省に具申した。その為、パラ州統領の日本移民三千人の誘人は、一八九五年に空契約に終らしていた。

それから卅年後、健康なる初代大使田付七太は「パラ州及びアマゾナス州は日本人の移植民すべき適地だ」としてノコノコ、パラ州、アマゾナス州迄出かけた。大使一行はベレン市に着いた（汽船で）が、日本からの福原土地視察団一行は、ニューヨークで出発が遅れるとの電報を、田付大使はパラで受取った。

日本の大使一行がパラ州を視察すると知ったアマゾナス州統領も黙ってはいなかった。マナオス市にある日本の名譽領事 (Ephigenio Salles) を通じて、田付大使一行のマナオス視察を慫慂して来た。福原視察団パラ到着の日が延びたので、大使一行はマナオスへと足を延ばした。州官民は日本大使一行の来府の為、市官民は休日を宣してお祭騒ぎの歓迎日を催した。

州統領は「アマゾナス州にも、パラ州同様の条件にて土地を提供するから是非植民をやれ」と大使にすゝめた。田付大使も

「ヨシやろう」と心から相槌を打った。

福原視察団一行が紐育市に着いたのは一九二六年四月十一日であった。そこに一月滞在して南米行きの仕度をした。一行中の石原喜久太医博は、その昔「衛生視察南米紀行」中に左の如く記している。

「アマゾン流域に黄熱病の潜伏せざるや」に就いて當方面

の又華府その他の専門に関する出来る丈けの調査をして出発した。野口英世博士の意見もきいた。

「萬一奥地に黄熱があつて、吾々がそれにかゝつた時には、如何にすればいいか」

野口博士はその為、研究中の助手を失っておられた。「発病したら絶対に安静で、運搬などしてはいけない。そして水を吞ませておけ。自分は其助手を治療の必要上運搬したが、いけなかった」と注意された」。

五月三十日の日曜日、一行はベレーン港に上陸した。田付大使より三週間おくれていた。田付大使は福原土地視察団をパラ州統領に紹介した。州統領から提供された地域二十万域。

六月十四日、一行十二名アンデイラ号（二五〇噸）に乗船しリオ・カピン河に遡行した。沿岸の密林は二メートルも水に浸つて、水から木が生えている様であつた。

六月十六日カピン河のペンナフィールに着き、そこを調査本部とした。ベレーンより二百九〇料の地点であつた。調査は二班に別れランチで出かけた。有望地帯らしい處でランチを淀泊させて日中踏査し、夜はランチに帰つてハンモックに寝るか、土人小屋にハンモック釣つて寝た。三週間の土地調査の結果はよくなかつた。地形は統一事業に不利だった。これは江越農技の意見であつた。

七月四日、福原、前田（コンデ・コマ）、江越はベレーンに帰つて、州統領と面会、調査報告、リオ・カピン沿岸は日本移民事業に不適當とし、今度はアカラ河流域を調査した。その結果パラ州とアカラ植民会社間に四十萬域の土地無償契約が署名された。一九二八年八月のことで、こゝに南米柘植株式会社が生れた。

一九二九年（昭和四年）九月二十三日に初植民が入植した。

即ちアカラ郡に二十五萬域、モンテ・アレグレ郡に十六萬域主に棉花栽培の開拓地であつた。モンテ・アレグレの方が

土地高燥、雨量も尠なく優良棉花を生産した。一九三二年頃は棉花の世界的生産過剰の状態にて、事業拡張は待機した。アカラ植民地は戦争初期に於て政府に接收せられ、政府管理者、デレガド等駐在、ベレン市及郊外の日本人、インスチチュト・アマゾニアの職員達と共に枢軸国側の著を全部アカラに押込んだ。現在居残れる植民者は約六十家族、植民者の最も成果を挙げつゝある栽培物はピメンタ・ド・レイノに、其他カ、オ、ウワシマ（麻）、米、マンチオーカ、レポーリオ、トマテ等執れも落ちつき、ピメンタ成金も二、三家族出ている。

この地方日本人を代表せるものは、元ベレン支店支配人たりし大株主の農業士平賀練吉である。

自由の天地パラ

南米企業株式会社が進出

北米西岸に於ける排日余波をうけた在ニューヨーク日本人間に、人種偏見なき自由の天地ブラジルへ轉向の植民熱が起きた。

南米柘植会社の創設者福原八郎が、南米パラ州の土地研究視察へとニューヨーク港を出帆の際、斯うした記録が残されている（衛生視察南米紀行―医学博士石原喜久太郎著より）―愈々紐育港出發だ。船のデッキで雑談して出帆を待っていると、あえぎながら一人の紳士が見送り旁々やって来た。福原君に「自分は在紐育南米協会有志の代表で来たのであるが、昨夜或る集会の席上、鐘紡の重役が態々南米未開地の調査に行かれると云うのに、単に南米研究のみに止まるべきでない。若し企業に適當な土地があったらば、全権をお委せるから購入して貰い度い」とその決議をもたしたのであった。その土地が彼のブラガンサ鉄道沿線カスタニアルの半開拓地二千五百町歩で、即ち南米企業株式会社の成立となつ

た處―

ベレン市より二十七軒、ブラガンサ鉄道沿線にある、伊太利人の既成耕地一千域を約二百コントスで買取った。南米柘植は事業開始の當初とて、将来南柘にて此耕地を購入する了解の元に借地し、一九二十年より米作試験をなし、続いて熱帯植物試作場となった。胡椒、カ、オ、キナ等を試作していたが、南拓事業縮少のため一九三四年中止した。

日本人二、三家族は自作農を続けていたが、戦争初期に於て政府に接収された。州政府農務局の管理となったが、地区割して農家に分配した。

南米企業の主なる出資者は紐青の村井固保、福原八郎であつた。當耕地は製材、精米、アルコール工場を有し、軌道六軒を設けていたが、これは戦争直前に売却した。

この方面の日本人代表者は、元南拓社員測量技師片岡治義であつた。第一回笠戸丸組で、マカニ植民地へ限部等と植民生活を共にした邦人最初の先達の一人であつた。

彼の第二世等はスクスクとして日系伯人と成育した。

パラ州のアカラ植民の成立前、田付大使とアマゾナス州統領との会談中、アマゾナス州にもパラ州同様に日本の植民地を「やれ」「やらう」の話があつた。パラ州政府と南米柘植会社との契約成立に労をとつたのは大使館囑託の栗津金六（帰化人）であつた。彼栗津の直話を茲に掲げる。

―田付さんは一九二六年に日本に歸られた。私もその翌年大使館をやめて、サンパウロ州ノロエステ線のリンス町に引込んでいた。そこへ日本から山西某と言う土木建築業をやる人が来て、アマゾンを観察したいと言うので、野田（大使館一等書記官時代）さんから私に案内を頼まれた。時の駐伯大使館付武官というのが関根郡平大佐で大のアマゾン發展論者だ。何んでもグアヤキール方まで突抜けるてんだから大がかりなんです。関根さんが「山西に是非ともコンセツソンを

取らせろ」というのです。そこで、まあ出かけて行つて百万エクタールを最低に四ツの候補地、合計四百万エクタールを選定し二年間の保留付で一九二七年三月廿一日にオプソンの契約に署名した。この候補地選定は、前に田付大使が視察された時一緒になったフォード会社の伯人技師からよく事情を聞いておいたので、また例の地図の上で大体の見當をつけておいて、それからその技師に選定してもらつたんです。パレンチン沿岸、リオネグロ沿岸、ソリモン河沿岸、マデイラ河沿岸の四ヶ所でした。山西が日本へ歸つて上塚司の所へ持ち込んだら、上塚はすぐ飛びついて来た。それから種々あつて、とに角も一度調査しろというので内務省から福原の方へ話があり、南拓と打合せて、その医務部長の松岡冬樹障士、今モチ・ダス・クルゼスに居る内藤克俊、外に若い人二人と私、それで調査をやつて、大体よからうてことになり、モウ一年のオプソンを請願し、それから準備して實現した。場所はフォード・コンセツソンの隣り、セラード・パレンチンスです。――（よみもの社移民四十年座談会）。

上塚司の発表せる「最近の海外移住地」拓務、文部両省編纂の中には左の如く出ている。

――最初セラード・パレンチンスを根拠地とせんとした。五百尺の高台地帯でパレンチンス市より拾八哩の下江であつた。四日間に亘つて探險したが、船着場がないので根拠地としてはやめた。大江北岸のカルヴァリオ地方を踏査し、東はマムール河より、西はマウエス「河」に到り、北はラモス河を境とする地帯にて一番良い場所の四十万町歩、ウラリヤ河、アラリヤ河と大江の本流筋との間、タポカール地方と稱する方面に於て二十万町歩、北岸のカルヴァリオ地方に十方町歩、併せて七十万町歩を劃定し、一九二八年（昭和三年）に劃定したマウエス河、ウラリヤ河、アバシ河の流域に於て三十万町歩を合せて、最も近接した場所に於て百万町歩、全部の地域と劃定した。パレンチンス市はベレーンよりマナウ

スにアマゾン大河を遡る七百五十哩の上流、マナオス港より下流二百五哩の處た。そのパリンチンス港の下流二哩の處にビーラ・バチスタ村があるアマゾナス州議員バチスタの所有地だ。こゝを交渉して買入れアマゾナス研究所の根拠地とし、柱建式と斧下式を兼ねて人植祭をやった。一九三〇年十月二十一日で、参列者は拓務省の山越事務官、鳥海属、稲垣技師の三人と、伯人側はパリンチンス郡長と裁判所長以下三十餘名であつた。拾月廿四日、上塚は栗津其伯幹事五名とマナオス市に到り、翌日州統領に報告、一切の手續を了す事となつていたが、其夜一九三〇年の伯国首府革命騒動がマナオス市にも突発した。アマゾナス産業研究所 (Instituto Amazonas) が、アマゾナス州執政官に正式認められたのは同年十一月二十一日であつた。

アマゾン産業研究所は、アマゾン開拓事業の特種な地位に鑑み、往々は指動員たる可き人物を養成すべく、東京に放て国士館高等柘植学校を設立した。東京で一年、アマゾンの産業研究實業練習所で一年、通計二年の学課と實習を終了させ、今後入植する植民のために備えた。一九三二年四月、その第一回練習生をアマゾナス現地に送った。

英人はアマゾンのゴムを

馬來半島に植し培った

日本人はガンヂスの黄麻を

アマゾナス江畔に移し培った

昭和五年（一九三〇年）アマゾン開拓に當つて愈々其具體的方針を樹立すべく、上塚司は栗津金六、亀井満、稱坦、穎策等と共にアマゾン河、殊にバイシヨ・アマゾーナス地方の大河及び大小流に向つて再調査の歩を進めたが、各種の植民要素の中、最も重要な問題は將來植民の基礎となる適當なる農業地域とその主要生産物の為す農作物の選擇であつた。

天恵豊饒の地アマゾンには、天然の産物極めて豊富であり栽培作物としての農法種々考究立案されたが、共選擇の主眼とする處は生産物が世界的重要を有し、且經濟的價值大にして、経営及び農法も又普遍的性質を有する事を條件としたので在ったが、殊に從來試みられ無かった新作物の発見に着眼した結果アマゾニアの氣候風土に適當せる作物として、黄麻栽培の發議となり、黄麻をして主要作物と為す事が撰擇決定されたのであった。

上塚の持参せる黄麻（日本種）及びサン・パウロ領事館勸業部幹旋に依る黄麻（サン・パウロ州）の試作が着手された。一九三一年（昭和六年）四月、第一回實業練習生の渡航に當り、再び日本種が齎らされ、六月黄麻試作の使命を帯びて荒木衛門渡航し、農學士木内謙一之に協力して、九月十二日を初期とし、本部所在地ビラ・アマゾン及びフォルモザ島の低湿地の適地を選定して季節的栽培試験を開始したが、同年十一月印度より取寄せた種子を更にフォルモザ島に播種した。然し其等の試験では束だ充分な結果を得るに至らなかったが採取纖維を日本内地で試験した結果、其實質に於ては印度産に遜色なき事が認められた。

一九三三年（昭和八年）財団法人アマゾニヤ産業研究所の組織成るに及び、アンデラ模範植民地の建設となり、印度ベンゴール州に於ける黄麻栽培の状態を視察した木野逸作技師を派遣し、第一回乃至第三回實業練習生並に家族入植者を以て實際栽培を開始し、高台地帯には護謨樹、カスターア樹（パラー栗）珈琲樹、グアラナー樹、陸稻、マンジヨカを栽培し、アンジラ植民地附近の低湿地帯に黄麻栽培を開始したが、之に用ひた種子は既に第三回目に印度より取寄せたる種子であった。

斯くして約百数十名の入植者に依って、非常な希望と努力とを傾倒して栽培に着手したが、其酬いられたものは極めて悲觀す可き結果だけであつた。黄麻栽培成功を目ざして大いなる希望と意欲に依って河岸地帯の沃土を耕起し、流汗と

土に塗れて祈りつゝ播き育くんだ種子は、自然と丹精に恵まれて芽を出し伸びては行つたが、既に草丈一米半位に達すると枝を派生し、花を開き結果して終るのであった。そうして伸びよ伸びよと希う総ての努力と期待に反して、人々に丈短かき繊維を手にして失意するのみであつたが、斯時より黄麻栽培の多難な途を踏出したのであった。

二度、三度と試作を繰り返したが、一方高台地帯に植え付けた作物も又、熱帯農業に不慣れな入植者に取つては技術的にも経済的にも所期の實績を挙げるに至らなかつた。斯くして試作の不成功と開拓生活の困難とは、漸く人々の心中に失意と混乱をさへ生じ、次第に黄麻試作を放棄する人々が多く、遂には黄麻適當せすと云う悲觀説さえ擡頭し、試作数葉の状態に立至り、入植者は高台地帯の恵まれざる農業に苦闘を継続するのみで、極言すればアマゾン開拓事業の非常なる危機を招来して居たと云う事が出来る。

然しアンデラ入植区に入植して當初より黄麻栽培に異常なる熱意と執着を持ち続けた尾山良太は、其伸びざる黄麻の種子を握つて場所を替え季節を選び栽培を継続して、黄麻栽培の死線に踏み止まつた最後の一人でもあつた。斯様な植民地の状態の中に経済的逼迫の上に立ち、敢然として試作を継続した事は寧ろ悲壯とも云う可きであつた。其絶えざる熱心の中に、彼が試作圃の中に一般とは異常なる生育を遂げつゝある二本の黄麻を発見し夫を育成する中に、従来の一メートル半と云う小草丈を抜いて旺盛なる生育を続けて行つた。夫は二本共遂に草丈三米六〇糎、樹周九糎に達する美事なる生育を遂げ、やがて花を開き結實をした。

其新種より得た種子は、當時ビラ・アマゾンヤ中央試験場試験圃係として熱心に各種作物の研究に従事して居た高島義雄の手に依つて増殖を図り、尾山は其種子を以て直ちにフォルモザ島に一家を挙げて移轉し、實際栽培を行つた結果、愈々新品種の前途に光明と確信を見出すに至つた。中内義正又ビラ・アマゾンヤの低湿地に栽培を行い、黄麻栽培は益々

確實性を加えた。

實に一九三六年（昭和十一年）に至り、初めて黄麻の確實性が實際栽培の上に証明された。昭和六年試作開始より五年目であった。然して黄麻栽培が四面楚歌、人々嘲笑の中に独り其苦難に直面し、フオルモーザ島に於ては其苦難の眞只中に愛児を野邊に送ったが、今や全植民者の上に無上の光明と希望とを齎すに至った事は、之を尾山のジユタとせねばならぬ。

然して昭和五年、アマゾン再調査に當つて、上塚司其他の人々の画いた大いなる夢が實現した。新種は尾山良太の功績を顕頌する意味に於て「尾山種」と命名された。

斯くして比の黄麻新種の発見を一大轉機として、アンヂラ植民地開拓に経営の辛酸を續けていた入植者は、漸次河岸に近き低湿地帯（ヴァルゼア）に移動し、黄麻栽培に着手し、従来の高台地帯（テーラ・フィルメ）農業は低湿地帯農業にと轉換し植民地農業経営形式の上に一大画期を為したのである。アマゾン開拓の上にも洋々たる前途を発見し得たということが出来る。之より先、上塚司を社長として設立されたアマゾニア産業株式会社は、黄麻産業の發達に盡力し當時の現地支配人辻小太郎をして、印度ベンゴール州ガンデス河流域に於ける黄麻産業状態を視察研究せしめ、直ちに現地に於て諸般の計画に着手し、黄栽培拡充の方策を講じた。

斯くして入植者の大部は黄麻栽培に進出し、パリンチンス、アマゾニア産業株式会社支社を中心として大江流域は黄麻栽培が行なわれ、加うるに舊アマゾン興業株式会社入植者、及アマゾナス州首府マナオス市附近に居住する邦人（主としてペルー入植者）又下流パラ州モンテ・アレグレの邦人も又栽培を開始するに至った。

栽培地帯はアマゾナス州マナオス市の上流地方、リオ・ソリモエスより下流、パラ州モンテ・アレグレ地方に至る迄、大アマゾン河河岸大小支流地帯に拡がり、黄麻栽培は燎原の火の如き勢を以て普及するに至った為、会社はマナオス

市（アマゾナス州首府）、イタコチアラ（アマゾナス州）、サントアレム（パラ州）、レシーフェ（ベルナンブコ州）、ベレム（パラ州首府）に出張所を設立して、黄麻産業に必要な諸般の施設方法を講じ、定期船を巡航して必需品の供給、生産物の運搬、衛生其他の指導連絡を期した。

更に一方、パラ州政府は黄麻栽培の有望なるに着目、パラ州の栽培試験をアマゾニヤ産業株式会社に依頼し、アマゾン河口マラジョー島の一角ブレベスに黄麻栽培試験場を設置し邦人家族をして栽培試験に着手、州内に於ける黄麻栽培可適地帯の調査を依頼した為、支社農事部長技師安藤美代次郎 ブレベス試験場長越智栄、其他は州内各地の農業諸條件に就て調査を行ったが、ブレベスに於ける年餘の栽培試験には諸種の地方的條件と、殊に風土病たるマラリヤの障害に遭い、未だ解決すべき幾多の問題を残して試験を中止し、他の方途を再考するの止むなきに至った。

黄麻栽培は逐日、日伯人の間に普及して其生産も急激に増加するに至り、今やアマゾン流域に於ける黄麻は国家的にも重要な生産物として認められ、其前途に対する希望は邦人のみならず伯国の新産業として官民共に大いなる期待をかけるに至っていたが、端なくも一九四一年（昭和十六年）十二月八日第二次世界大戦の勃発するに及び、突然日本との連絡を絶たれたアマゾニヤ産業株式会社は非常に困難な立場に遭遇したが、幸にもマナオス市ブラジル銀行支店の融資を得て、危機に直面した収穫期を處理することを得た。

会社は夫によって専心丹精した黄麻産業完成の半途にして、政治的経済的窮地を続け、遂に政府の手に依って清算されたが戦時中入植者は環境的にも経済的にも非常な困難を克服し、ブラジル銀行、或いサン・パウロ及びパラ州の資本家の融資に依って事業を相続するを得た。即ち従来パリンチンス入植者とマウエス、マナオス、モンテ・アレグレの邦人、其他伯人をも含み、アマゾニヤ産業会社を枢軸として動いていた機能が停止して、邦人入植者は其事業の推進力を他に求

めざるを得ざる状態と成ったが、相互の連絡を保ちつゝ各自が他に方途を見出して事業の継続に努力した。

之をアマゾン開拓史の上より見れば、第一期の黄麻試験時代第二期の会社統制時代より、第二次世界大戦を契機として第三期の独立経営の形態に移行した時代と成ったと云い得る。即ち入植者独自在資本を求め、栽培より販売に至る事業の経営に當るに至ったが、戦時中は有利な栽培物に加うるに地域的にも従来の植民地形式でなく広汎なる地域に散在して既に其基礎を作つて居たが為に連絡上の不便はあったが、各個独自の経営手腕を発揮して良く事業を継続発展せしめる事を得た。

現在にては、上はアマゾン河上流リオ・ソリモエス河地帯より、下流パラ州モンテ・アレグレに至る迄延長約一千四百キロメートルの間に、邦人入植者約百二十家族が散在し、サン・パウロ州に於ける農場主的な経営方式に依り土着人労働力を利用し、或は契約法融資等に依り黄麻栽培を行い、個人も亦逐年激増し、黄麻は今や普遍的栽培作物とは成ったが、其地域の広太さに比較して未だ其総産額は約一萬噸の内邦人の産額は約三千噸と云われている。

邦人に依るアマゾンの開拓は年を閲する事二十幾年である。

アメリカ其他の探検隊は幾度かアマゾンの奥地を尋ね、有名なるヘンリー・フォードの莫大なる資本と機械力に依るタパジョース河のフォードランジャ（主としてゴム栽培）は有名であるが、現在は譲渡して伯国北部農業研究所の経営と成つて居る。

現在世界産額の大部分を占むる南洋地方のゴム栽培の原種となつた一粒のゴム種子は、實に英国人がアマゾン奥地より持ち去つたものに他ならない。然してアマゾンに於て、南米大陸に未だ嘗つて無かつた黄麻種子を、印度より持ち来つて五年目に新種を発見して今日の黄麻産業を創造したのは日本人であつた 黄麻 (*Jute Corchorus Capsularis* L.) 田麻

料に属する一生草で、草丈は一・五―四米余（アマゾンに於ては四―四・五米）、茎の木質部は柔軟、靱皮は頗る強靱、茎の色は緑色乃至帯赤色、葉は披針状乃至長橢円形で、邊緣は鋸齒状、長さ一〇―二六糎、幅三六糎、花は黄色、果實は蒴である。茎の靱皮繊維は薄黄色、美麗なる光澤を有する。紡績は容易であるが水湿の為に腐り易い欠点がある。

栽培は容易で、纖維製造も亦簡易であるため纖維の生産費が低廉である。故に之より粗大で廉價な製品を造るに適し、即ち荷造用の粗布、棉花、羊毛、穀類、珈琲、智利硝石等の袋装材料として其用途は伯国に於ても広汎である、其他敷物類、卓子掛、窓掛等の織物、亜麻、羊毛等に混じて布類又は索繩、粗糸の類として用いられる。

栽培は氣候温暖で降雨多く、湿度高き處に好適、印度ベンゴール州、伯国アマゾナス、パラ―は最適な氣候を持つてゐる。

日本に於ては台湾を主とし、滋賀縣、熊本縣、其他に栽培されてゐた。強風のある處は不良、土壤は肥沃で窒素分に富み乾燥しないところが良く、繁殖は種子に依り直播が行われる。粗放な栽培でアマゾンでは主として撒播を用いてゐる。刈取期は播種後一二〇日頃が刈取適期である。刈取後一〇―一四日間位浸漬し、靱皮部と木質部が容易に分離するに至つて洗滌採織して乾燥する。乾燥後包装し直ちに商品として販売する。（安藤美代次郎記）

アマゾナス州ジュータ『尾山種』 祖人の述懐

過去欧米人に依つて幾度も試みられて失敗に終り、又アマゾニア産業研究所が大正五年より九年に到る五ヶ年間、農学士、技師等の専門家を以てして遂に成功せず断念したのであります。その後、私が個人として継続し、研究試作して二年

にして僅かに一本のジュータが今日の優良種を作り出したのでした。その種子から約十年前、最初五町歩を試作して、五千キロの「センイ」を収穫し、之をベレンの工場に當時一キロ一ミル五百レースで売りました。それでその頃は土人一日二ミル位でありましたから、一キロに対する経費が五百レース位でありました。七百レースの純利益があつた。そこで他の日本人にも勤めて植付けることになって、翌年は全体で三百トン、三年目に六百トン、四年目には一千トンを越しました。

その頃、私は植付反別を増加して百町位までは経営しましたが、その頃からブラジル人がジュータを植えるようになって労働賃も高くなり、労働者も不足する様になった。

アマゾン流域に於けるジュータ生産の方法は、サン・パウロ方面と異り、日本人自身が労働に従事するのではなく、大農小農も皆土人の労働者を使役するか、或は資金を出して共同にしてジュータを受取るか、又は資本を貸してジュータを受取る方法でありますから、ほんとうの利益はその二〇%位で、又その中から生活費を差引くと一〇%位の利益であります。

（尾山祖人が著者に宛てた手紙の一片）

戦後インスチチュート・アマゾニアの状態

上塚司を社長とするアマゾニア州パレンチンスのアマゾニヤ産業会社は、戦争初期政府に接収せられるや否や州政府は、ARAUJO 商會に全部の権利を売渡した。

植民者は各自立、アマゾン大江及支流の沿岸に散り、パレンチンスを基として上下一千哩の地域に亘り、黄麻栽培に突進した。栽培日本移民家族は約百五十家族（ペルー方面より流れ移りし人も入れて）、生産量は全六千噸（二九四八年）中、日本移民の生産量は三千噸と計された。一千コントス級

の資金者五人二百コントス級三十名に到っている。ジュータの跡地は牧場とし放牛し、三百頭の牛所有者も出ている。

サンパウロ市の邦人発展

聖市邦人街の始まり

一九〇八年、聖市上街方面に生活の根をおろした第一回移民の群と、下街ブラス区モウカ区方面に生活の根をおろした群とがあった。

モーカ街（當時）の果にあつたビスコイト・デユチエン工場に仕事口を後藤武夫にさがしてもらった一組の青年等はモウカに住んだ、香山、矢崎、鎌田、高野、上田等で、林タツエや福原甚一及妻イマ等もモウカ街の袋町に住んだ。

フアシナ線鉄道工夫に行つた一群が、ブレッセル街近くに一軒借りて、松永二三が梁山泊を始める。鉄道工夫くづれが聖市に就職するものと、亜留然丁国へと流るゝものと分れ、この梁山泊は約二カ月位で解散した。

その頃、移民の草分鈴木貞次郎はサン・マルチニオ耕地の通訳を辞して聖市に出でサン・ベント街の藤崎商店四軒右隣に幅一メートル半奥行三メートルの果物店を開いた。

聖市に於ける日本移民果物店の開祖である。三カ月餘にして閉店した。一九〇八年末から一九〇九年初頭であつた。一九〇九年度に第二回移民が愈来ないとなつた三月頃、上塚移民会社代理人は同志有川新吉、仁平高、松永、香山等と共にカルロス・ゴメス街の上町よりブラスの下シルバー・テールス町に引越し、本格的に玩具製造に乗出した。一時は相當苦しんで、玩具板返しの締釘は、モウカの町端の塵埃捨場からブリツキ屑を拾つて来て間に合せた。竹トンボの竹も、郊外の屋敷の藪から夕暮時に失敬し、バナナとフバ団子の生活

であつた。

内田公使は上塚移民会社代理人のこの窮状に対し二百ミル上塚宛送金して来た。公使が移民会社代理人の窮状に二百ミルの思い遣り上塚には泣くにも泣けぬ二百ミルの金であつた。

北米移民くづれの小野寺謙助が、上塚の梁山泊に流れ込んできたも一九一〇年の始めで、塩川伊四郎が亜国から斯の梁山泊に流れて来たもこの頃であつた。

ブラス区の奥に移民生活の一群がいた、熊本移民の藤本大工を頭梁に、大工見習の西村、宮本、元田等の家族である。頭梁の女房と松永との三角関係で、頭梁の鑿が飛んで刃傷沙汰になり、聖市日本人社会における刃傷沙汰の初めをなした。

第二回移民の到着前、アルゼンチン独立百年祭に日本代表参加日本で始めて建造した一等巡洋艦生駒が参列し、その帰途、生駒はリオ港に寄港した。此遣外母国艦に、在伯邦人で何か慰問品を送りたいと發起されたが、在留民は聖市では藤崎商会員三四名と、上塚移民会社代理人と第一回移民の貧しき人々の群である、でもサントス港の沖縄移民のドッカス就働者方面にも呼びかけ、六百四十餘ミルを集め、寄附金全部で二コントス五百餘を以て將校にカフエー粉小袋一つづゝ、水兵には伯国名所絵ハガキ二三枚づゝを贈った。

生駒艦將校の二三と便乗の或者とはサン・パウロ市に來訪したが、珈琲耕地の日本移民視察したものは一人もなかつた。

サントス港のドッカス労働に就いていた移民には上原直松、輿那嶺仁五郎、名嘉文五郎等卅名近くいた、彼等の家族はやがて市郊外カンポ・グランデの原に堀立小舎を建てゝ蔬菜畑開拓に入り、サントス町に蔬菜販売の前程生活を始める。

一九一〇年七月第二回移民船旅順丸がサントスに着き、各珈琲耕地に配耕された頃は聖市の第一回移民の生活は在伯満二

年を経たので、環境に余程なれており、耕地から逃亡して来る移民家族があつても路頭に彼等を迷わせる様なことはなかった。

鹿児島移民の逃亡者が頻りと出た一九一一年、在聖市の鹿児島移民間に縣入会を組織し縣移民の耕地逃亡防止策を講じた。

鹿児島縣入会は在伯日本移民の縣入会の始めである。

一九一一年、鈴木貞次郎アマゾン州視察の旅に上った。聖市の日本移民青年で都会生活に物たらぬものは、マツトグロツソ州のノロエステ鉄道工夫労働へと進出していった。家族もので農巢に丹能なものは、この頃より聖市郊外に借地半農生活に入り、サンタ・アンナの方面に、タボン、モロンビー方面に生活の安定を求めた。

一九一二年五月、第二回竹村移民の厳島丸と東洋移民会社の第一回移民船神奈川丸とが前後してサントス港に着いた。

安藤孝太郎農商務省技師が渡伯しイグアツペ植民地調査に従事し始めた。

厳島、神奈川両船移民がもたらした祖国情緒の流行唄は「笹屋節」であつた。

同年七月卅日、明治大帝崩御の報告各珈琲耕地に伝はるや、移民は耕地の草に伏して哭いた。一九一三年、ブラス区、ランジェル・ペスターナ街の入口に（中央街より下った右側）日本移民のバールが開店された。福岡移民の柳悦太郎と妻テイで、彼はハワイ帰りの移民であつた。その頃下街ブラス、区の奥の端町に日本移民の街の女が現われていた。移民代理人が説諭しやめさせる。又上街タマンダレー町に一軒七人組の日本女性が「もうかりますぜ」と闇の女を始めた勿論邦人相手でなく、異国人相手、上塚移民会社代理人は聖市を新嘉坡式の二の華街としては申訳ないと、當局に交渉して七人組女性の家族はリオ・デ・ジャネイロ州へと追放する。當時の警視總監は、ワシントン・ルイス（後年の伯国大統領）であつた。リオ州へ追放された家長は癩病にかゝつていた。

東洋移民会社の伯国代理人は、豊島昌であつたが、彼の帰国後明穂梅吉が代理した。

一九二二年、竹村第二回移民船第二雲海丸と東洋第二回移民船若狭丸とが三月に入港した。聖市の邦人界は一日々と賑やかになった。移民の父と仰がれている上塚周平が竹村植民本館の招電に接し愈帰国する事となり、後任は帝国丸にて其八月渡伯していた永島藤造であつた。一九一四年八月竹村植民の帝国丸が又四〇八家族、東洋移民会社の若狭丸が四一二家族をサントス港に送り込んだ。これで明治四十一年より移民船拾回の輸送人員一萬四千八百八十六人家族数にして三千七百三十四家族と計上される。日本移民の珈琲耕地労働能率も一応試験済みとした聖州當局は、竹村、東洋両移民会社に対して以後日本移民には渡航費州補助金は下附せないと通達した。

聖州珈琲耕地の労働力には南欧移民が大量順潮に渡来しておる。大額の補助金を下附して人種も違い、言葉も習慣も違ふ日本移民を入れるゝ迄もなからう、日本移民は珈琲耕地労働生活に長年継続する性質はない、此際一先づ州官費移民輸送を打切るとなつた。

日本の両移民会社は漸く移民輸送の仕事も板につきかけた處で面喰つた。

そこえ同年八月欧州戦争が勃発してしまつた。戦時下の聖州日本移民と聖市社会状態を大阪朝日に通信したのは同社の初代伯国通信員香山であつた「聖州子」と号していた。

順潮に大量渡伯していた南欧移民がバタリと停止してしまつた。

聖州農務局も又珈琲耕地労働者招致に困り出す。

欧州大戦が勃発の年、九月、聖市に日本総領事館が開設された松村貞雄総領事が来任した。

邦字新聞現わる

その頃から聖市コンデ街には、上地旅館が出来る、廣島屋の小川旅館が出来る、末広旅館が出来た。

一九一五年聖市北部サンタ・アンナ区に星名讓一郎が謄写版で南米週報を創刊した。後四カ月、金子、輪湖協同の石版刷新聞が始まり、工場はブラス区トラベツサ・デ・カストロ街一八、名を日伯新聞とつけた。

コンデ、デ・サルゼーダス街にㄗ・≡商會が出来た。雜貨店で、森口宇吉、安戸敏行の共同経営であつた。

宮崎信造が大正小学校の前身的日本語教授を、日本移民の二世を集めてコンデ街の人家の一室に創めていた。

コンデ街の中途右坂下の広場で、日本移民青年組はミカド俱樂部を組織し野球やテニスに進出していた。木戸磯右衛門がコンデを根城として行商に進展したのもこの頃である。

ㄗ、≡商會のポロンには豆腐屋が始められた。池戸甚太郎青年が働らいた、椎野豊、篠原小重の協同玩具商もコンデ街の一室にあつた。篠原小重は日本人女性行商者の創めである。

一九一六年組織なつたブラジル移民組合は、翌一九一七年、聖市に移民組合機関紙伯刺西爾時報が、その年の天長節号から創刊する。

この頃聖市に於ける所謂上町インテリによつて、日本俱樂部が組織され奥地日本人のインテリ級に入会を呼びかけてもいた

一九一九年、松村貞雄初代総領事が帰朝した。後任に野田良治がリオ公使館より来聖、総領事代理となつた。

次で一九二〇年九月藤田敏郎総領事が着任する。彼は日本移民の独立農への発展策として外務本省に建策したものが、拾ヶ條あつた。

一、農産物の委託販売に要する倉庫の設立と金融

二、農産物の加工場、精米、繰棉、珈琲精撰機の要

三、移植民衛生のため医学留学生派遣、葡語にて開業試験をうけさす

四、赤十字社と協同し、州内に四五カ所の病院設立
五、各植民地小学校に補助金、聖市に上級生の寄宿舎建設
六、移住民の小資本企業相談所を設立
七、共済組合を各地に設ける
八、新舊キリスト教の自給伝道師招致
九、伯語新聞の発行、日的文化の交換
拾、移民の船賃半減、商品運賃軽減、補助金下附の件
等々である、後年は等の孰れもが次々と實現した。藤田総領事は奥地日本移住民開拓地を巡視した。

一九二一年九月、出雲、磐手、浅間の三練習艦が来伯し、伯国百年祭に参列した。同三艦に便乗して山科禮蔵一行の南米實業視察団が渡伯し、副団長内田嘉吉等聖州奥地日本移民開拓地を視察した。

同年海興本社長龍江義信も来聖した。伊太利一座と三浦環も来聖し「お蝶夫人」を演じて去る。

一九二三年九月一日、関東大震災の報に接し、在伯日本人義損金を募集し、五百コントス近く據金があつた。

この據金使途に関し、聖市日本人支配中堅部に対する平素の不平が勃発し詰問対談会が開かれ、支配階級横暴に対する鬱憤爆発したが、殴打事件迄には至らなかつた。

上塚周平はこの対談会に、支配中堅派より出席招待状をうけて、ノロエステ線プロミツソンより出席したが、不平派から上塚は親分扱いされ、事件の対談会には妥協役を勤めた。

義損金では主に毛布を購入して送つたが、運輸遅滞の上横浜埠頭に滞貨し雨さらしに腐つた。今後、伯国より日本向けの救援物資輸送には慎重の考慮を要する問題となつた。

一九二三年には中村長六神父がローマ法王庁より布教使に任命され来聖し、在伯日本移民のカトリック宗教徒に大きな慰安を興え、一般日本人社会でも神父の信望は篤かつた。

笹田正数は伯国開業医の試験に合格し、ノロエステ日本人会に招聘されリンスに開業した。

日本政府は法律を以て在伯日系人の二重国籍発生を防止

し、伯国で生れたものは伯国の国籍に入れ、一定届出期日外は日本国籍を保留させぬ事とした。

ミナス州選出聯法下院議員フレデリス・レイスが日本人移民の制限案を議会に提出する。駐伯日本當局及移民会社の人々は神経を尖鋭化して対策を講じた。

南米に於ける黄熱病菌研究とその予防法講演のため、北米ロック・フエラー研究所は野口英世博士をウルグアイ国及伯国へ派し、野口博士は来聖して邦人社会と接した。

佐々木豊子が助産婦として開業した。

高岡専太郎が伯国開業医の試験に合格した。斯くて日本より送られた天野幸蔵、渡邊勲、齋藤等合、同妻和歌子の四名が、伯国開業医の試験に通過して、不安がられた日本移植民衛生方面に大きな安心感を興える。

ブルーノ・ローボ医学博士に日本政府は勲三等を贈る。

聖市にイヂドーロ・ロペス將軍一派の対中央政府革命戦が勃発し、革命軍は不利とみて奥地バウル市を経てソロカバナ線よりパラナ州へと退却したので、聖市はやがて鎮静した。

村田丹下画伯がこの年来聖する。

一九二四年度の北西年鑑を輪湖俊午部が編集しバウル市より出刊在伯日本移民年鑑の創始である。

皇太子殿下御成婚紀念に大阪毎日新聞社は渡伯移民二百名に船賃支給聖州耕地に送った。一九二五年、海外興業株式会社長井上雅二初来聖、奥地日本自由移植民地の開拓振を巡視し、帰聖後レヂストロ海興植民地が第一だと誇る。

岩崎彦彌太が資本家として来聖視察した。斯くて聖州へカーザ東山の進出企画が實現した。杉山英雄が聖市に於て日伯両語の公認翻訳人となる。以後日本人公認翻訳人受験には試験官になり、九人を彼が試験し、通過させた。最後の受験者は座喜味盛徳である。それを汐に杉山は試験官を辞任した。春日廓明総領事代理時代で年末に新任の赤松祐之総領事が着任。

同仁会へ下附せる補助金を以て、ビーラ・マリアナに、將來建設すべき日本病院敷地を購入した。日本クラブ組織を強化した。一九二六年、一昨年来の奥地旱魃に会い自由開拓珈琲栽培者の経済窮迫救済のため、ノロエステ線邦人代表上塚、ソロカバナ線邦人代表星名コンビ、田付大使に請願せる八十五万円低利資金貸出に聖市邦字紙は反対氣勢の言論を弄し奥地バウルー市の邦字紙は請願に同情していた。赤松総領事、田付大使ノロエステ線及ソロカバナ線の被害地巡視となり、低利資金は八年据置で支出される。

聖州義塾は小林美登利の努力せる日本移民二世の教養を指す寄宿であった。ガルボン・ブエノ街にあつて小林は「市民」と呼ぶ塾誌を出した。

八月十九日、在伯日本植民の草分隈部三郎は南三州沿岸航路汽船に乗り投身自殺した。働らけど働けど財的に恵まれぬ哀しき人であった。

一九二七年、有吉明大使は奥地邦人植民地を赤松総領事と公式巡視、旱魃の傷手も打続く降雨に珈琲耕地は蘇がえつていた。藤波、佐伯両博士移民の寄生虫菌及衛生状態視察の国際交換使として来伯、聖州奥地の邦人開拓マレッツタ地帯を巡視した。

福日記者原田春次も北米大学生生活を卒えて来聖、ノロエステ線リンス駅奥ゴヤンバー植民地に長滞在していた。

カーザ東山が愈進出し、サントス市に珈琲コミサリオを、カンピーナス市郊外に農場を、ピンダモニヤンガバに米作農場を企業し始める。

コチア産業組合は創立総会を年末に開催、移住組合専務理事梅谷光貞が来聖したのも年末であった。三月、山西、栗津アマゾナス州政府と土地コンセツソン契約成り、聖州日本移植民に北伯への聲も起きる。一九二八年には鎌倉丸輸送移民トラホーム患者三十八名サントス港上陸禁止で日本へ送還。貫休を利用し、慶應大学産業研究学生十七名来聖し、奥地日本人植民地を視察した。ペルーの日秘新報社長田中喜太郎が

来聖し奥地植民地を視察したは十月であつた。

神戸日伯協会創立二周年記念に日伯児童作成繪画交換展覽会をやり、日本児童のもの一萬二千枚寄贈、持参者は協会の松岡英介であつた。

第二回目の旅商団がサントス港に碇泊し、福原八郎が北伯投資団長として来聖した。

・海外移住組合は、六月にバストス移住地を、七月に新アリアンサ移住地を、八月にチエテ移住地を、十一月にトレス・ベーラス移住地を購入し終る。

日伯拓植会社がバラマンサ既耕地を購入したは十月下旬であつた。

日本資本進出の事務所が、それから、それと増えて、聖市日本人社会は華やかに賑わつていく。一九二九年、聖州に有限責任ブラジル拓植組合が設立された。海外移住組合の後身。

六月十日、日本の拓務局が拓務省となる。拓務初代相は首相兼任の田中義一で、政友会内閣である。

十月珈琲價大暴落経済恐慌突発し珈琲耕地の労働賃銀は三割から五割方引下げる耕地もあり、耕地によつては珈琲耕地放棄するより外なしと、或る耕主はコロノを耕地事務所前広場に集合させ、珈琲値暴落のため経営を放棄する。勝手に耕地の所有物を持ち去り、移轉生活して呉れと、聲涙宣言をやり未曾有の話題をのこす。

聖州に支拂延期令が一時發布された。聖市郊外サン・カエタノ町に日本移民の陶土人形製造所が創まつた。この先駆者は豊田千次郎であつた。一九三〇年四月、政府は二千万ポンドの借款を英米に得斯くて一時経済界の前途を見直す。

次期伯圍大統領の選挙戦が行われた。聖州出身ワシントン・ルイス大統領の共和党の候補はジュリオ・プレステス聖州知事、次期大統領に當選、南大河州の民主党立候補ゼツリオ・ヴァルガスは完敗したと自ら宣言したが十月三日、南大河及ミナス両州とは聯邦政府に対し武力革命戦を宣言した。中央

陸海軍部は革命軍に協力したので、十月廿四日ワシントン・ルイス大統領はコツパカバナ要塞に幽閉され革命成り、臨時政府組織され、南大河軍総司令のゼツリオ・ヴアルガス（前内閣の蔵相）選らばれて臨時政府執政官となる。

十二月国内失業問題に対処して、革命政府は三十一年度より外国移民制限令を発すと聲明した、臨時政府労働相（伯国労相の初代）リンドルフオ・コロールは、日本移民には三十一年度入移民数一萬二千名の許可を典えた。この為め聖市に於ける日本人社会は朗らかであった。一九三一年、中央メルカード蔬菜部に、始めて日本女性が出店に割込んだ。第一回沖椰移民の田場ウシである。これから次々と日本蔬菜業者の販売店が蔬菜市場に進展した。



（写真―田場ウシ）

三月、日伯新聞社長三浦鑿の国外追放問題があった。六月三浦は追放先大西洋の孤島より召還令をうけ帰聖した。

同年四月十三日、中島清一郎総領事は帰朝し、領事川西豊蔵が総領事代理に任命さる。

同年五月、聖市で全伯邦人陸上競技大会を開催する。一月入移民取締法實施され、二月には新珈琲植付制限令が發布され、パウリスタの伝統的珈琲大耕主連の経済的及政治的大没落が画期的に始まった。

サン・パウロ耕地通訳協会が海興社内設立されたは五月である。協会長に海興伯開支店長白鳥堯助が就き、会誌「郷友」を発行し、通訳協会幹事長は新富直吉であった。

七月内山岩太郎総領事が着任し、八月日本病院建設期成同盟が組織された。同時に、日本移民渡伯二十五年祭を聖市で明後三十三年六月十八日執行する事とした。この協議はコンデ街の青柳料理屋の二階で内山総領事と各新聞社長が飲みながら決定した。

九月十八日満州事変が勃発した。在伯日本移民の民族的海外膨脹の血は湧いた。

十月我政府は渡伯移民に対し船賃の他に、渡航支度金一人五十円補助を開始した。これは在伯日本移植民社会に朗らかな話題となった「俺達の渡伯時代は移民会社に一へ當拾円恐れながら差出して其外何んじゃ、かんじやと喰われたものだった」と過去の苦労が話題となっていた。一九三一年、藤田嗣治画伯一月に来伯し、その後来聖した。サントス漁業組合が邦人漁業者間に設立された。

衛藤六蔵がサントス港珈琲格附員の公認をえる。

八木勝郎医学士が伯国開業医試験を通過し、高岡専太郎医師京都医大へ提出せるマレッタ論文で医学博士の学位をうく。

大正小学校では時代に即し、勤労者のために日伯語授業夜間部を開設する。

コンデ・サンジョアキン街伊藤洋服店に始めての邦人の空巢ねらい侵入した。田中舘秀三博士再渡伯奥地を視察する。新執政政府は、「外国移民子弟に外国語教育は罷り成らぬ」という取締を嚴重にした。奥地日本移植民地の或る方面では、日本語小学校に閉鎖を命じたもの處々にあった。現政府が国家主義への轉向氣勢を現わしたものとし、聖市及近郊教育研究会が組織された。聖市放送局で「日本の夕」を催ほし、放送者は矢崎節夫、来聖中の田中舘秀三博士へ白羽の矢を立てた。

日本病院建設資金募集のため、聖市水曜会（婦人の会）主催の慈善演芸会を、サンタ・アンナ演技場で催ほした。海興社員の東後一美コンタドールの試験に通過し会計士と

なった。

聖市近郊一括の中央線聖市郊外農業組合が成立し、モヂ・ダス・クルーゼスに本部を設ける会員一五〇名、資金一五〇コントス、渡邊孝等の奔走努力に因る。

エメボーイ農業實習所が開場した。

同仁会にトラホーム撲滅部が常設さる。農業のブラジル誌社長揮旗探志は引退し、佐藤常蔵経営主となる。

七月九日、中央執政政府に対する聖州護憲革命軍起り、翌日マットグロツソ州是に應じ革命軍起つ、州外との交通通信一切杜絶し、在聖市日本人間に聖州護憲革命軍授助運動起つた、日本青年が四五名護憲軍の士官となり士官服を着けて活躍した。

在聖市一般日本人は赤十字後援団を組織して、日本婦人会活躍した。ピニエイロス区のエデン・クラブに音楽会を催ほして後援資金を集めた。



(写真―内山総領事)

八月二十五日封鎖中のサントスにラプラタ丸は日本移民を積んで港外に入港命令を待ったが、直ちに許され移民も無事上陸許された。八月廿五日ブエノス・アイレス丸も亦入港を許され移民は上陸した。

高岡専太郎医博士及安藤全八は互生会を組織し在伯日本移民の衛生のため「家庭と健康」と題すパンフレットを発行した。会費月十ミルであった。「吾等の母国訪問積立金」も預つた。各地に貨物自動車の徴発開始され、日本人のも殆んど徴

発された。

九月末中央軍と護憲軍との間に和戦成り、安寧秩序の聖市となった。

十二月、聖市中央街に中央政府に対する群衆の憤懣爆発し、ラルゴ・ダ・セにこの騒擾見物中の山田隆治は流弾に當り斃れた。州當局は厚く弔意を表し埋葬した。捏粉人形製造を河野清が創めたはこの年からであつた。一九三三年三月、聖市日本人会主催の時局批判講演会を開いた。

五月十一日林久治郎大使は聖市を公式に訪問し、アグア・ブランカ万国見本市場に「日本の夕」を催ほした。

聖市日伯商業協会創立総会を開いた。

帝国総領事館主催第一回医師協議会を開催し、衛生施設、殖民衛生地方医局等十七項を討議した。

六月十八日、渡伯日本移民廿五周年記念祭をビラ・マリアナの病院敷地に内山総領事主催の基に州當局代表等招待列席の上举行了。廿五周年移植民社会事業に功顯者日本人側二十六名（女四）、伯人側八名（女二）を表彰した。

日本人の部

移植民事業

水野龍、上塚周平、鈴木貞次郎、白鳥堯助、明穂梅吉、坂元靖、大野長一、輪湖俊午郎

移植民特種産業

八ツ田一藤、岡本寅蔵、小野豊蔵、矢野柊治

漁撈業

島谷岩吉

移植民の産業啓発

渡邊孝

教育事業

小林美登利、鮫島直哉、矢野市郎、大坪治助
移植民の指導啓発

馬場直

保健衛生事業

高岡専太郎、大河内豊子

耕地通訳

弘田千代太

日伯貿易事業

蜂谷吾輔

高齢者青木トヨ、馬場キク、小川タネ

外人の部

日本移植民の指導啓発

マルセイロ・ピザ、マルチンス・エヂデオ・ソーザ・アラ
エヤ

日本移植民の慈善医療

ジネシオ・ランジェル・ペスターナ博士

日本及日本人の紹介

オリヴェイラ・ボテーリョ博士、ブルーノ・ローボ博士、
アルフレッド・エリス・ジュニオル博士

教育事業

マリオ・ヴァレンチン・パレルモ、マルヴィナ・デ・カス
トロ女史

日伯人合計三十四名（女性五名）

廿五周年祭式終って、日本病院の礎石埋式を挙行了た、その夜テアトロ・パウリスタノで手踊芝居の観劇があり、移民組合よりの笠戸丸組招待宴会があり、笠戸丸組でも宴会をやり、総領事其他招待し華やかな慰安会を催はした。

中央政府は統合を以て、一九三三年六月卅日以前の全伯農家の一切の負債半減令を施行すると令した。

日本人側の八五低資も半減される。

神戸の日伯協会主事原梅三郎は人形使節花子さんにお伴して来伯した。

九月十五日聖市レプブリカ女子師範附属幼稚園にて市長、内山総領事及夫人令息、原主事等列席、花子さんの伝達式日伯

児童の交歓をやる。

九月四日、日本陸上競技六選手来伯しパウリスターノ競技場にて聖州陸上選手と競技した。

日本力行会支部は「力行の叫び」を発行していた。サン・パウロ父兄会は「青空」を発行し、波紋社は娯楽誌「波紋」を百頁で出していた。物産週報も出ていた。

一九三四年の紀元節に、聖市総領事官邸に於て伯国日本移民の功労者水野龍、上塚周平に対し勲六等単光旭日章の伝達授興式を挙げた。

第一回通訳講習会を聖市に開き、二重国籍問題を海本副領事が議題として話した。

十一月、聖州新報社はパウルー市より聖市に移轉し週に二回発行であつた。

サン・パウロ医科大学学生十三名、助教授七名を教授ソウザ・カンポス博士団長とし引率日本観光へと出発した。一九三五年一月より伯貨はミルレースを廃しクルゼイロ単貨流通する事となる。

帝国総領事館より「公民読本」を出版す（サン・パウロにて印刷せるもの）

共済会が聖市日本人の衛生公共事業として始まつた。

教育普及会が組織され、日本移植民の教育機関に補助金を下附普及会が命令権を握る。国際文化振興会より堀口九萬一は夫人嬢同伴文化使節として派遣来伯した。

桜の苗木を総領事館勸業部が日本より取寄せカンピーナスの東山農場に托植したのもこの年である。

日伯経済関係の緊密化に乗り出した日本は経済使節団を渡伯させる、澤田節蔵大使時代で公式に訪問したのはリオ首府だが聖州は日本移民の本拠、殊に棉花生産の本場だけに、経済使節団の目的地は聖州であつた。平生釵三郎団長夫人同伴一行十八名、聖州政府側及企業家側も充分歓待便宜をはかつた。斎藤巍洋がブラジル海軍運動協会から水泳師範として招聘さる。

一九三六年五月、聖市総領事官邸に於て市毛総領事会長となり同好の士により「ブラジル古代文化同好会」が設立さる。ブラスコットと小西商店の支店が設置さる日伯棉花会社の支社であった。

「椰子樹」の短歌集、「地平線」の文芸誌が発行され、ピニエイロス区に岸本昂一が少年少女の為め暁星学園を開設する。日伯間に無線電話の通信開始あり、日本からブラジルへモシモシは一九三八年からとなる。エメボイ農事實習場は海興経営であったが、拓務省関係の日伯農事協会に移管される。一九三七年五月イタチアヤ公園開園式に、澤田大使は先年東山農場に移植した櫻苗木四十五本を同園へ寄贈した（華府に移植した櫻木は美事な花を毎年咲かせているが、伯国に移植したものは未だ何處にも優麗に咲き出していない） 聖市イピランガ小児病院の拡張資金募集に各国玩具バザー催ほしあり、日本側よりも「やまと」人形一対と多量の玩具を贈る。十月十六日夜、聖市倶楽部ピラチニンガで日本の夜をやる主催者は聖州新聞協会詩人アルメイダ・ギマランセス、香山露子が在伯日本移民の短歌の葡訳をギマランセス朗読紹介した。

其夜誹諧の短詩も紹介説明した。聖市詩壇文人の集で市毛孝三総領事時代であった。

ブラ拓経営のバンカリヤ・ブラタクが開店し、海興のバンカリヤ・カイコウが開店し、本格的銀行への前程に入る。

鳥居龍蔵文学博士父子が来伯し、リオの文化協会で日本古代人種型を説明しマラジョ島発掘物焼物と日本加島発掘物の文化の心理的酷似等を講演した。聖市に於ても聖市法科大学講堂に於てリオと同題の講演をし木下正夫法学士が通訳の労をとった

鳥居博士は海興の桂植民地にある大貝塚の発掘をやる。聖市イピランガ博物館ランゲ博士の慇懃に因って海興社員溝口忠男が案内し、古代文化同好会の神屋信一、香山六郎が同行した。

世界ペン倶楽部がアルゼンチン国首府で開催され、日本代表島崎藤村、有島生馬が出席の帰途、聖市に立ち寄る。藤村は在伯日本移民への土産として、日本六歌仙の和歌を藤村筆でこのす。

聖市日本病院の庭に笠戸九三十年記念碑の裏面に刻したのがそれである。

「移り来て」の移民短歌集を聖州新報社は発行した。

在聖市日本人の数が増えるにつけリベルダーデ街にある日本倶楽部の建物が狭溢となり、同倶楽部がインテリ級、ブルジョア級官吏級だけのものとして存在するには、時代は餘りにデモクラシ化した、倶楽部員は増加し倶楽部はリアシユニイロ街へと移轉した。

一九三八年、日伯、時報、聖報三社の邦字新聞日刊となったバンカーリヤ東山が開店される。

山本信次郎（海軍少將）はカトリコ国民使節として来聖、奥地日本人植民地を巡禮した。

ピアノスト井上園子、舞踊の川上サダ子、崔承喜が来た。

神戸日伯協会幹旋の櫻苗木一千本聖州向け送出す。

第二回田伯交換児童美術品展覧会が催おされた。日伯無電通話が日本側よりおくれながらモシク始める。

岩崎守がマツサで日本人形の製造工場を興し、豊田工場と共に市の玩具界に進出した。

神戸港を移民が発つ毎に、手拭一筋づつ移民に配ってくれたと中村直吉が歿した。

日伯親善使として資本家根津嘉一郎とテナー藤原義江がアルゼンチナ丸の處女航海に乗ってきた。

南部忠平がスポーツ親善使として来田中耕太郎法学博士がカトリコ親善使として来た。丸山鶴吉が在伯日本移民に皇紀二千六百年母国観光勸誘使節として来伯した。

大阪毎日及東京日々の企画せる国産飛行機世界一周「ニッポン号」が八月二十六日東京羽田飛行場を発つて飛翔の途次伯国にも飛来した。在伯日本移民三万聖市のコンゴニア飛行

場に参集歓迎待機したが斯日雲深くして、ニッポン号はプロペラの音のみさせて姿はみえず、遂に降り得ず、サントスのサンビセンテ飛行場に日の丸機は降りた。

聯邦政府は外字発行新聞、雑誌に対し、新出版法令に従ひ発行すべしと命じた、それによると社説、記事に対して葡語翻訳附で出せというのであった。最初は新聞検閲官に其日の記事の翻訳文を大畧別に提出すればよかった。後には紙面に翻訳欄を要した。

児童の外国語教育に制限を加える。最初は十二歳以下の児童には学校にて外国語教授罷成らぬとあった。

聖市日本人教育普及会長佐藤清太郎博士は伯国教育新令（移民法の）草案起草中のオリヴェイラ・ヴィアンナをニテロイの私邸に訪問し会談の際、児童に外国語教授は十二歳未満を「十歳未満」としてはと希望提議したに、彼は研究考慮を約し、後に移民審議会は之を「十四才未満」と競り上げ七いた。

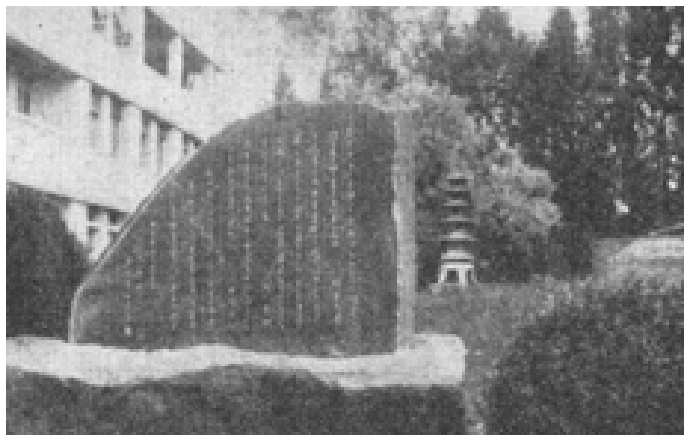
櫻苗木五百本東山カンピーナス農場へ移植する。

一九四〇年

貿易幹旋所が設置され、茂木清吾妻春子が北米より来聖する茂木春子来聖により在伯日本婦人インテリ界の沈滞を一掃する商業会議所が設立され蜂谷専一が会頭となり、中西周甫が書記となる。



（鳥居博士とスノバウマの貝塚）



(写真―大和五聖歌人のうた (島崎藤村筆))

昨年十月聖市医科大学教授パウラ・ソーザ博士、同法学部教授デ・メロ博士渡日して締伯、エスプラナーダ・ホテル広間で日本人に講演した。

藤田嗣治画伯、大橋良介画伯来伯する。

サン・パウロ日伯文化研究会長ブラジル柔剣道聯盟会長、サンパウロ貿易幹旋所顧問辯護士マリオ・ボッテリオ・ミランダが団長となりサン・パウロ法科及医科大学生二十名日本文化見学に渡日した。

二千六百年記念の明治神宮競技に、在伯日本陸上競技代表六名が監督井上清一に率いられ母国へ出発した。

櫻苗木五百本日本より聖市にとどく。

大阪商船会社のぶらじる丸初航海にて日本水上競技選手遊佐正憲、葉室鉄夫両名選手、斎藤巍洋再渡伯に率いられ来聖する

一九四一年パラナ州クリチーバ首府に日本領事館が三月に設置され小峰俊一が初代領事となる。

矢崎千代二画伯来聖画展を開く。

二月八日伯字紙に、「伯国内発行の外国文字新聞雑誌は今後六カ月後は、発行禁止する」と大統領令で決定した旨報道した。

五月六日に日佛印両国間に日佛人居住航海條約が調印された。内山岩太郎公使が同国へ駐任したと、ラヂオ及電報ニュース報ぜられ、在聖日本移民の開拓精神界に亜細亞に帰れの氣運大いに動く。

八月末聖州新報廃刊す。十月末日伯新聞、伯刺西爾時報、日本新聞廃刊閉鎖す。

十二月八日、日本空軍布哇眞珠灣軍港を爆撃するの東京ラヂオ放送に在伯日本人勇躍する、

一九四二年一月廿八日、伯圍首府リオ・デ・ジヤネイロに於て汎米外相會議の結果伯圍外務省は即時対日外交断絶を宣した。外相はオズワルド・アラニーヤであった。

聖市日本帝国総領事館は其日午後十時外界と遮断さる。一月廿九日以後枢軸国民は旅行の際交通安全證を要する事となる。

二月一日日本総領事館の電話線切断され、改めて架設さる。

在首府リオ日本帝国大使館が外界との交通遮断も行われる。

街上で枢軸人は自国語での会話を一際に禁じられてしまった。二人以上の集会は勿論であった日本語を喋べたものは現行犯として一件二十ミルの罰金を拂わせられた。

三月廿二日東京放送は伯国當局に対し「在留日本移民を無法に圧迫するに於ては日本は伯国に対し強硬なる態度に出る」旨を放送した。

三月廿八日在伯枢軸民の財産凍結令實施は四月卅日迄延期の旨、當市伯字紙報す。

北西線リンス駅耕地の自宅より拘引された多羅間鉄輔（前バウル領事）及農田源行（帰化耕主）はペンナポリス警察署内に収監後、聖市に移監、約三週間の後三月廿五日多羅間は

釈放された。次で農田も釈放された。

四月五日聖市のカーザ・アレマン商店屋号はガリレオ・パウリスタ・ヂ・モーダと改名広告を伯字紙に掲げる。四月六日夜コ・フルタード街の日本人洗濯屋ミデアンは刑事四人に家宅掃索さる、偽刑事であった。

四月廿九日、セントラル線レノールポリス駅果樹国主木村貞治収監聖市に移さる。自宅に於て高聲に東京放送のラヂオ聴集中の違法に因る、其週内に釈放された。同人は後日在伯臣道聯盟本部の総監査役となり、再収監された。五月廿二日、東洋、豊吉羽瀬、中矢の各日本書店の書籍全部押収され、翌日遠藤、南米堂両書店のも押収された。

五月初旬、聖市に日本人の「共済会」を組織す。戦時中在伯日本人の生活窮乏、孤独病患者応急救済の為め、日本総領事館側と聖市日本人支配階級側と協議、カトリコ教の力を背景にして設立さる。在聖市日本人各大商社から毎月五コントス平均出資（東山、海興、ブラ拓、東綿、ブラスコット）する相談成つて實行委員は渡邊トミ子即ちマルガリーダと石原桂造、会計は高橋勝（帰化人会計士）の三人であった。



（渡邊とみ子）



（高橋 勝）

母国向け帰還待機中の在聖日本人総領事館原馨総領事以下の一行は、六月十三日朝八時ノルテ駅発列車にてリオ首府向け聖市を退去した。

八月、ブラスコット社副支配人級岡崎孝一、日本病院にて病歿する。

聖市中央街の日本人宿屋常盤、岡山齒科医、西中菓子店のネオンサインは、伯人の反枢軸群衆に投石破壊された。日本人家庭のラジオ機は當局に没収される。

八月廿一日、宮腰千葉太海興支店長、海興銀行部員鷺塚時哉ブラジル柘植組合副支配人加藤好之、杉山英雄（帰化人）、武田俊男、法華等ブラ拓社員、翁長助成舊日本新聞社長、羽瀬作良商店主、小笠原キング食料品製造所主、岡山齒科医、斉藤政一日伯シネマ興行社主、長森信雄永生薬種堂主、松岡哲夫舊総領事館雇、阪井田南舟舊南米新聞社長（病臥、未収監）等は聖市社会治安維持課より召喚未調査のまゝ未決監房に収監された。

これより先、森口宇吉、鐘江和次郎、藤平正義、長澤、傳田寛一郎、阿部彌門、輪湖俊午郎等は既に収監されていた。

原因は三万五千餘コントスの騒擾費を母国よりうけ居り、現下在聖日本人農家に自給自足生産物以外の播種收穫反対運動策動中と云うことであつた。十月十一日、未決監房より舊移民収容所の枢軸人収監局へ移さる。未調査のまゝ同年十二月四日頃迄に皆釈放した。彼等保釈付解放と同時に、各奥地帯より日本人収監者約百五十餘名が、聖市の枢軸人収監所に移された。

九月四日及五日、コンデ・デ・サルゼーダス街住居日本人家族の強制立退きを命ぜられた。

九月十八日、在聖日本人權益部が西班牙総領事館内に開設され、安藤潔か事務を擔當さる。戦時国際法により西班牙政府は日本政府の依頼にて在伯日本人の權益庇護の外交権を伯国外務省に承認さる。

同月在伯枢軸人の持つ伯国辯護士権が停止された（帰化

人)

九月十七日、パラナ州南部パラナグア港市及アントニーナ市其附近一帯の在住枢軸人(重に日独人)三十家族は反枢軸民衆の略奪騒擾にかゝり、凌辱をうけた女子もあった。彼等被害者は家族散々となつて首府クリチーバ市に落ち延びた。州統領マノエル・リーバはクリチーバ住民の子分、日本人安元青太の急報により當事被害家族を郊外の農耕地に分住させた。當時クリチーバ首府の日本領事館も閉鎖していたので、安元は聖市日本人權益部に出頭して騒擾略奪被害を報告した。

聖市サン・フランシスコ派のザバル神父は、日本移民の聖市に於ける頻々たる無法被害事件に擁護の労を惜まなかつた。

九月二十二日、伯国初代労働相たりしリンドルフ・コロール、リオ首府にて病歿する。彼は伯国渡来初代外国移民への探き同情者であつた。

舊日本総領事館家屋に貸符がはられていた。九月中旬のことで、此家の貸符をみる在聖日本移民の胸には、淡き哀愁が沁んだ。聖市日本病院の表庭に建てた渡伯笠戸丸移民三十年記念碑が姿をかくした。

十二月三日、多羅間鉄輔ノロエステ線リンス駅奥の多羅間珈琲耕地自宅にて病歿する。

コチア産組理事長、専務理事、理事、監事、孰れも伯人となつた。

二月八日、デアリオ・サンパウロ新聞社女記者マリア、テレザが独系スパイ容疑として収監される。彼女はペルナンブコ生れの独身婦人、在聖日本インテリ婦女子との間に相當親交あつた女性であつた。

二月十一日夜より約二十日間収監された人々があつた。富岡静司、児玉岩雄、若杉、富永一方亭主、西川、鈴木、小田、小関、郷原等三十五名と外人一名が同房に居た。

三月一日、聖市郊外瑞穂植民地の日本人家族迫立事件が勃

発した。附近の北米大地主の土地買収の野望に起因したものと判明し、聖州當局の関する處ではなかった。植民者は頑張通した。

四月に入って海興移民会社が軍部監理に移り、海興支店長宮腰千葉太、社員長谷川武、他一名の最高幹部は「明日より出社に及ばず」と宣告された。

日本船が在伯邦人帰国希望者迎えに二隻来伯する。希望者は海興の長谷川を経て、リオ市の西班牙公使館内の日本人權益部に申請、帰国手続をすませば乗船出来るとの宣伝が飛んだ。當時内秘公布文の帰国條件はイロハニホと分類してあった。

イ、日本から召還指名の者

ロ、舊大公使館の館員

ハ、電気測量、医、農等の技術者。

ニ、東亞共栄圈内の土人と日本人との和解連絡に資しうる者。

ホ、救済を要する寡婦、孤独の家族者

六月六日、アルツール・ネーバ博士病歿する。彼は嘗て日本に行き勲三等を贈られたが、後に排日家となつた人である。

同六月に日本大使館囑託たりしアレキサンドレ・コンデルが日本のスパイとの容疑にて収監された。

七月六日、聖市デアリオ・ダ・ノイテ紙、三十万日本人は當州の軍事要所を占領して対伯反抗運動を起していると報じ、日本女性の活字文選工の労働姿や日本商店の写真をかゝげ、市民へ対日反感をそゝる。

七月八日、両三日前、サントス入港の米伯間航路貨物船八隻が出港後、五隻、独潜航艇に被害をうけた。この日、サントス港中心にプライヤ・グランデ方面の海岸に永住と構え居た日本移民家族（重に沖縄縣人）百餘家族、及独逸人家族の開拓者等日独枢軸人のみ（伊太利人は除かれた）無通告二十

四時間内に退去を命ぜられる。

彼等はサントス駅に集合、サンパウロ市舊移民収容所に貨物扱ひにて汽車で護送された。それより各自の希望目的地へ追放された。追放家族はプライヤ・グランデ方面丈けで撤退は中止された。

七月十四日初夜、元南米新報の創刊者坂井田南舟心臓麻痺で聖市自宅に於て歿した。五十四才、アラサ墓地に埋めた。

八月下旬、収容所に前田某、榛葉平四郎、青木（子爵の息）某、共他二十餘人収監される。

九月八日、在聖市日本人七十三名汽車にて首府リオ・デ・ジャネイロ向け出発した。彼等は第二の外交団交換船（第一交換船と同船）に乗船帰国する人々であつた。

九月廿三日、ノロエステ方面日本植民パイオニアの一人山根寛一聖市自宅に於て病歿した。

拾月九日、聖市デアリオ・サンパウロ紙にシャト・ブリアンは―欧州大陸戦で北米の日系第二世は相當戦功を現わしている。伯国に於ける日系第二世に対し、今少し同情ある觀方をすべきだ―。斯れは近着の「ライフ」誌に北米文化と日本文化の対照をし、北米文化に一段の努力を刺戟していたに鑑みた論説であつた。

十月廿四日、フオリヤ・ダ・マニアン紙上に新第二師団（聖市在）長が、東山の絹織物工場を訪ひ、同工場の織つている布地はパラケーダに適すると激稱していた。

拾月廿七日、大統領令により日系資本の諸工業会社、商社、銀行等凍結令にかゝり、直ちに清算されたものもあつた。

重なるものは、日伯經濟協會、日伯商業會議所、カーザ・ブラタク、ブラタク綿花会社、ブラタク銀行、ブラタク鉱山、ブラタク植民会社ブラタク建築会社、ブラタク絹織物、ブラスコット社、ブラスコット銀行、小西商会、カーザ東山、東山銀行、東山鉄工場、パウリセイラ絹製織物工場、東山耕地のカンピーナス工農会社カンピーナス商社、海外興業会社、

アルマゼン海興、アレクリン精米場、海興移民銀行、ブラジル・ラミー栽培日本社（パラナ）、茶ツピー桂株株式会社、ツピー代表社、茶リベイラ、蜂谷商会、破魔商会、大原兄弟商会。

斯くて在伯日系資本の経済根柢は揺らいだ。

聖州に於ける日本移民の経済的総退却かと觀ぜられた一面、聖市中央メルカードの蔬菜部には総出荷バンコが四百卓ばかりあるが、その中日本移民の蔬菜出荷者は二百八十卓を占め、全卓数の七割の躍進振を示す。移民はこゝ迄で進展して聖市百五十万のお厨房の蔬菜を司どっている。敵国人の蔬菜だからと閉鎖すれば聖市民は蔬菜飢饉に陥るので動かし得ないのであった。十一月七日、聖市に柔術指南所を開設せる小野安一（兄）は伯国ボックス軽選手の黒人と闘技、小野が脚の逆をとって七秒間で勝った。

日曜版の農業欄に（フォリヤ・ダ・マニアン）聖州で薄荷栽培は漸く成功の域に達した。外国品に優るものが生産される。この成功農業者は矢張り日本人である―と報じていた。

十二月一日、フォリヤ・ダ・マニアン紙論説に「日本移民」と題し、近々移民法文の改更あり、日本移民は輸入禁止するが現在の二十五万は聖州の人口に比し五分足らずだ。彼等は一世も二世もパウリスタに往々は同化してしまふんで、危惧する要はないと述べていた。

十二月三日の同紙には、伯国は今次の大戦後の移民に就て相當考慮を要する。戦後伊太利移民は来らず、西班牙移民も航せず、葡萄牙人は本国挙げて全部移つても数に於ては知れたものだ。伯国の移民問題は戦前聖州五十年間の経験を充分斟酌すべきだと、日本移民再禁止令に警告を發していた。

斯くて歳は移つて一九四五年に入つた。在伯日本人に対すると云うより、聖市枢軸系住民に対する當局の末稱神経は尚ほ尖鋭をつゞけ、街上日本語を話したといふ現行犯で罰金二十ミルに處せられたものは市街の各處にあった。二人の田舎出の日本青年は、所用あつてビアヅツトの橋を連れだつて

渡っていた。一人の査公に二人は呼びとめられ、警察署へ連行の途中、或るカフェー店前で査公は二人に「ヴァモ・トマ・カフェー」とさそはれたが、二人は「ノン・テン・ヂネイロ」を楯にカフェーを吞まなかった。査公は一人でカフェーをのみ、二人は表街上にまっていた。査公は出て来た。「お前等は牢圍（シヤドレス）に入って嗅い飯を喰いたいか」と訊ねた。一人は答へた「俺達は仕事がないで朝から喰ってないのだ。卒圍の飯でも喰った方がいいで、連れて行つて呉れ」と。査公は又訊ねた。「二人とも独身か家族持か」「独身だヨ」。査公は一寸反感的衝動を顔色に現わしたが「ヴァ・プロクレ・トラバリオ」と二人をつっぱなしてスタスタ行つてしまった。

二月十九日、ピニエイロス区菅山雜穀店に「砂糖を高價に売った」件で店主は収監された。

三月八日、福川ローザは尼になるとて、聖女院へと家族と別れた。

父薩然は娘の聖女院行きの見送りに来た人々へ廻禮の途次、舊日本総領事館会近き街上で脳貧血で卒倒し、市救護班のチンチン自動車に送られ厚き介抱をうけた。

聖市郊外スザノ駅奥の一植民地で、結婚約束の娘に裏切られた一青年が、恋の娘とその親爺を短刀で殺害し、自分は其場で柔道稽古衣に着更へ、従容として美事に切腹した。青年の遺書によれば「裏切られた結婚式の夜兇行をと想ったが、それでは他人に迷惑をかけるので今宵決行した」とあった。娘は蘇生した。聖市日本人社会愛慾悲劇史の一哀話。

聖市邦人社会一部は、奥地の日本人薄荷栽培者及養蚕者に對し「伯国生産の薄荷や絹糸は米国へ輸出されて、米軍の軍需品生産材量に供さるゝのだ。薄荷生産者、養蚕者は間接に国賊行為となる」との説が流布され論議される。奥地邦人右傾硬派青年連は、養蚕者及薄荷栽培者へ直接間接警告や威脅し廻った。

養蚕小屋焼失がマリリヤ方面に二、三あった。ピリアニット

植民地には平素の遺恨を含んで、「国のために」と殺人事件もあつた。

左の如きパンフレットが、聖市邦人社会に流布されていた。

戦時に於ける薄荷の用途

左記は戦時に於ける薄荷として、或独逸化学者の陳述せるものなり

第一、爆薬及放射を強大ならしむ

(イ)、ニトログリセリン (下瀬火薬) に配合するときは、ニトログリセリンの缺点を解消し、且つ爆発力を約三百倍に強加す。

(ロ)、大砲の放射薬に配合する時は、放射薬の火焰を数倍に延長す (火焰を延長するとは放射力を強大ならしむる事)

第二、毒ガス発生剤に配合するときは、毒ガスの浸透力を強烈ならしめ、現時使用せらるゝ防毒マスクは其効力を矢ふ。又従来毒ガスは空気より重き為め低地に流れ沈滞するを以て、風力を利用せざれば其効力を充分發揮し得ざりしも、薄荷を配合する時は著しく流散力を拡大す。

第三、高速度発動機の冷却装置には薄荷は缺くべからざるものなり。

独逸化学者の陳述とした處に、化学の知識なき日本移民には忍びよる魔術であつた。

三月二十三日、聖市アクリマソン区にある藤原久人 (日本移民のミリオナル) 宅にギャング行為の日本青年侵入した。五月三日、野村忠三郎 (元日本人教育普及会長) 収監された。日本クラブは日米開戦前閉鎖されたが、戦時中、中華民国人倶楽部は、聖市キンゼ・デ・ノベンプロ街三階屋上に「聖保羅埠中華会館」の大看板を掲げていた。

仲間美登利 (日本書籍店南米堂主)、其他二、三が収監されたも五月であつた。聖市郊外のピエダーデ駅在住日本人八十餘名無届集会をやり、日本語で話してた現行犯で皆聖市送

りとなっていた。

六月初旬、日本人權益部に日本政府から邦人の生活状態と死亡者を調査報告せよと通達が来ていた。

八月に入り毎日の如く、中央街上で日本語話した現行犯「二十ミル」の科料を拂はせられるもの続出する。

八月十四日、終戦の詔勅も虚偽だとする在伯日本移民が大多数であった。

「二兵と雖も皇軍の兵は降伏を恕されぬ。笑って斃れて行くのに、その大元帥陛下が降伏の詔書を下し賜うなんて什麼」というのである。

在伯日本移民皆「笑」を失なつた人間となつていた。東郷外相はメッセーヂを在外同胞に送り「八月十四日御詔勅に宣示せられたる天皇陛下の大御心を奉戴し、帝国政府及臣民は日本国民たるの誇を堅持し、以て難局に直面するの決心を固めたり。在外同胞諸君に於ても同様の決心を保持せられんことは、貴方と常に思を分つ母国政府及国民の特に期待するところなり」

聖市の赤間裁縫女学院も當局の風當り烈しく、當分休業する八月末のことであつた。

八月廿四日、ブラスコット社愈凍結令により清算されると発表あり。石原桂造（日本人救済会役員）、細江静男医学士（帰化人）、山田正忠（奥地邦人病患者出市の際個人の世話方）等収監される。

これと前後して西班牙総領事館内日本人權益都係安藤潔も同館を午飯退出の際館横町にて刑事に尾行監収された。その後任に就いたのが、聖市マツケンヂ工科学生の森田芳一である。

八月廿七日、聖市郊外ブルクリンの元カーザ東山空地野球カンポで野球競技中の一連「皆んな一寸来い」を刑事にやる。

九月七日、聖市で日本舊軍人仲間にて在郷軍人会が組織された。これは最初興道社が組織されこれが改名して臣道聯盟

となり、臣道聯盟の理事長山内が脱退して在郷軍人会を組織した。

舊常盤ホテル広間に於て、宮腰千葉太、宮城国人、蜂谷専一下元健吉、野村忠三郎等が主催の基に終戦認識坐談会を開催したのもこの頃であつた。

終戦後、西班牙国は連合国へ加擔に因り在伯日本人權益部は中立国のスエーデン王国に委任された。聖市スエーデン国領事館内に日本人權益部は設けられたが、事務室の都合上一時在聖市北米総領事館の一室を借入れ事務をとつた。その後適當なる屋を探し四月七日街二五二番五階に移轉した。

九月末、東京から終戦後の第一私信が、九月十八日附の北米經由飛行便でリオ首府のブルノ・ローボ博士へとゐいた。元在伯同盟通信員たりし椎野豊が発送したもので、その同封中に椎野の妻の父中村三吉（在モヂ・ダス・クルゼス駅）宛送つた一通であつた。日本の現状を述べ、鶏一羽百円、白米一升五十円の闇相場を報じていたが、勝戦派の人々は「北米の偽手紙」と一笑していた。

九月廿四日午後三時半サントス港に、十六隻の日本艦腹が入港するとの戦勝派宣伝ニュースが飛んだ。その日サントス港に汽車で下る日本人の数は夥しかった。サントス港でなく日本艦隊はリオ港へ廻航したと宣伝された。リオ港向け、セントラル線を汽車で騒いで行く日本人数も相當あつた。

十月十四日、「在伯同胞諸君」の見出にて、在伯邦人支配階級脇山、古谷、宮坂、山本、蜂谷、宮腰、山下等は帝国外務省公報を第一に、八月十四日の詔勅と在外同胞宛の東郷外相メッセーヂより成るパンフレットを聖市警察當局の了解を得て日本語で撒布した。

斯うした喧騒の社会裡に、日系伯人学徒は研学に邁進し、リオ首府医科大学より豊田チタが卒業して女医学士となり、木原暢が医学士となった。聖市法科哲学科を卒業した芳賀マリアはソロカバナ線プ・ブルデンテ市に辯護士事務所を開業し、聖市医科大学を卒へた野見山チズも女医となりモヂアナ

線ミゲローポリス町に医院を開いた。

十二月二日、ノロエステ線の日本植民パイオニアの一人佐藤次郎は突然発病リンス自宅で歿す。

日伯間の戦時状態解消され、戦時法による制限撤廃され、十二月二日次期大統領選挙戦に日系伯人も選挙投票権を行使した。

十二月廿七日、ライト電力会社の電車従業員総罷業あり、消防隊員一部電車を操縦した。デアリオ・サン・パウロ社の日系記者翁長秀雄は社の写真班を督促し罷業の巷に活躍していた。

一九四六年一月五日、在伯在郷日本軍入団の代表、山内清雄（元陸軍大尉）、薬師神眞一郎（元陸軍大尉）等二十七名は、聖市治安維持警察へ召喚訊問をうけ、二週間収監された後、会の解散を命ぜられて釈放される。

一月末、日本総領事官邸は凍結令の結果清算され、競売に附される事となった。同官邸は前総領事坂根準三の個人名義に所有されていたものである。

三月に入り河合武夫、今本浄、菊池英二、谷垣皓己等是一般日本人の時局不認識について檄を飛ばした。斯くて時局問題をめぐって益々感情の対立は尖鋭化した。

四月一日未明、聖市郊外ジャヴァクラ裏街道附近に住む野村忠三郎（舊文教普及会長）宅に過激青年五名押入り、野村の寝込を襲撃、短銃で射殺した。・その朝同時刻市内アクリマソン区に住む古谷重綱（元亜国公使）宅にも過激青年四名来襲、玄関及鎧窓より屋内に向つて短銃乱射し、屋内には踏みみ得ず遁走した。古谷宅には殺傷者なく、彼等襲撃者の一人は夜警に捕縛され警察に連行、身体検査の結果、日の丸の旗に番号を符し腹巻にしていた。特攻隊と呼ばれる者であつた。

四月三日、警察当局は聖市郊外ジャヴァクラ街道にある臣道聯盟本部の幹部二、三名を召喚訊問した。野村古谷宅襲撃犯人等と何等かの連絡ありと睨まれた帰化人岸本次男は、

ペニア区自宅より収監され、四月卅日首府リオへ護送された。



(写真―山田正忠) (写真―坂根総領事) (写真―岸本次男)

四日四日、在伯日本人権益代表スエーデン国公使館は、その公館用紙に日本字タイプライター刷の終戦時局推移の宣言詔勅 ポツダム宣言條項等並に日本人コロニアの争擾なき様告示を撤いた。

四月十日解散を命じられた在郷軍人会は、又前同様二十七名 當局より収監三週間後釈放された。

四月十一日、勝戦宣傳者と観られた渋谷慎吾（東大法学士）等、治安維持警察に収監、五月二日保釈の身となる。彼は當局の訊問に対し、「日本は百年戦争に入った」と、観念論を述べた。彼の通訳に當つたものは、彼が植民生活當時日本語の教子 ジョゼ・サンタアンナであった。

五月二十四日、臣道達盟本部の幹部理事長根来良太郎、総監査役木村貞治以下約五十餘名収監され、本部は家宅搜索をうけた。彼等の中には各地方で収監された特攻隊員も交つていた。（文庫注・四月二日に本部の手入れがあった）一應取調の結果、彼等は政治犯としてアンシエッタの島送りとなった。

六月二日夜、聖市郊外ボスケ区の住宅に於いて脇山甚作（元陸軍大佐）は来訪時局対談中の二青年に、日本軍人として敗戦を語る責任上自決を迫られ短刀をつきつけられたが、

脇山は応じなかつたので、青年は起立黙禮し終って、短銃二弾を大佐の胸に発射、倒るる遺骸に黙禮し、加害、二青年は悠々と闇に姿を消した。

その前後、日本権益部には日本終戦後発行の東朝、大毎等母国新聞が数束着いて人々に観覧させ、いわゆる勝戦組と稱する人々へも送りとゞけられた。敗戦者の胸は母国の悲惨記事に胸をつかれたが、戦勝者は是を見て、北米で印刷した穢ない偽新聞として一蹴した。或る戦勝宣伝者は、日本からボツボツ到着する家族よりの手紙に貼った郵便切手をはがし、切手の裏に勝戦と細字を書き入れて人々を魔酔させた。

六月廿七日、ビーラ・マリアナ電車終点で西住正義牧師は輪禍に歿した。

聖市市議会は闇雑穀取引の潰滅策として、市議会は聖市各広場に雑穀売店を直営した。その販売係に日本人等がサービス敏捷に活躍していた。聖市電車の車掌の新職業線に日系青年も進出していたはこの年からであった。

九月六日、イグアツペ日本植民地の創設現地総支配者たりし藤田克己パイオニアも、多年の動脈硬化症に歿した。

十月中旬、サンパウロ新聞創刊する。創刊経営者は水本光任で戦後始めての邦字新聞であった。

赤間裁縫女学院では十月廿七、八の二日間、全校総動員でバザールを開催し、校庭の大木枝に拡声器をつけ日本音楽と歌謡の母国情緒に来観者の心を朗らかにした。来観者二日間に老若男女子供六千を越えた。戦後始めてのことゝて聖市日本人の、こともすれば曇る心を和やかにし朗かにした。同学院は在聖邦人最初の女学院。



赤間みちへ

十二月廿六日、聖市三浦未亡人宅に於て、元日伯新聞社長三浦鑿の追悼会があつた。三滴は先年伯国追放され欧州に去つて欧州大戦に伊太利滞在中、日米開戦、日本人欧州線引挙により帰国、戦時の東京にあつたが、本年五月不敬罪と治安攪乱罪にて巢鴨に収監された。終戦後政治犯全部釈放令により三浦も釈放され、友人永田稠宅に静養中、栄養失調の身に急性肺炎を起し歿した。享年六十四歳であつた。

一九四七年三月中旬より聖市では年中行事の一つ、蘭花の展覧会が催ほされ、日本移民の蘭愛好家も五、六名入賞した。

母国戦災救援運動は、一九四五年末より始めらる可くして、在伯日本移民社会の終戦観渾沌から、四六年中も芽ばえなかつた。三月廿九日、聖市の宮腰宅に会合して母国戦災救援運動の段階に入っていた。会集者は宮腰、宮坂、山本、矢崎、下元、蜂谷、菅山、武田、翁長、石川、藤原、伊藤牧師、破魔、村上太田、竹内、香山、森田の十八名であつた。リオ市の母国救援会率先者大谷及白土や日本人權益部早尾にも呼かけた。

日本戦災同胞救援会を組織して在伯日本人より資金を集め、救援物資を北米より先づ送ろう。それには救援会を法的なものにせねばならぬ。会の正式認下を先づ伯国赤十字社に依頼し、承認されたら當分北米の *Licensed Agencies for Relief in Asia* 署稱して *LARA* と呼ぶ機関を通じて母国へ物資をとゞけよう。これが今の處、母国へ物資を送る唯一の道だ。日本は今金でない。物だ、物を送るが母国救援の唯一の仕事だ。

伯国知名の人を会長にして仕事をすゝめた方が滑らかに仕事が進捗しようとなつた。会計にも一名伯人を入れてとなつた。

救援会の役員に上げられたものは、矢崎、菅山、石川、香山、翁長、村上、破魔の七名であつた。パウロ・ヴェイラ辯護士を支部長とし、矢崎節夫を副支部長とし、菅山鷺造を幹

事長に、香山六郎、翁長助成、石川文夫を幹事に、村上眞一郎、破魔六郎、ペドロ・アレト医学士（元日本病院係医師）を第一、第二、第三会計として、伯国赤十字本社の承認を得、聖州社会治安維持警察の認可を申請したのは四月中旬であった。社会治安維持警察では、翁長助成、村上眞一郎は戦時状態中、政治的に故障あつたにより公人たるを許さずとあつた。

翁長の替りに阪元靖を入れ、村上の替りに太田龍二を入れて許可になったのは六月中旬であつた。公人団体として聖市各邦字新聞社へ通知宣伝し、邦人社会言論界に挨拶し、母国戦災同胞救援会サン・パウロ支部がお茶の会を舊常盤ホテルの広間で開いたのは七月二日であつた。事務所は聖市シルベイラ・マルチンス街二七六番地。

右救援会は伯国赤十字社内の一委員会に過ぎなかつた。それで、リオ首府の赤十字本社のある處が本部であつた。本部の役員に会長オルランド・ソアレス・デ・カルバリーオ（元日伯経済協会会長）、副会長大谷晃、幹事白土貫治、第一会計高橋綱三、第二会計フラビオ・デ・コスタ・ブリットがなつていた。

聖市新聞界に、毎日二百万市民の心を朗らかにしていたフォリヤ・ダ・マニアンとノイテ紙の時事漫画家ジュカ・パト事、本名ベネジツト・デ・バストス・バレット・ベルモンテは四月二十日病歿して聖市全市民の哀悼裡に埋葬した。彼の漫画中に今度の世界大戦を諷し夫五十三枚（一九四〇年度分）に日本をものしたものの十二枚あつた。彼の漫画には日本移民の思想と容貌の沁み出したものがあつた。

五月八日、古関徳彌の追悼会がサン・フランシスコ寺院で行はれた。日米開戦前、平和な亜細亜の開拓振を見に行つた彼は日米開戦の初幕にフィリッピンの海に歿してた。遺児は日系伯人で成長した。

五月十七日、聖市在住日本人で母国戦災救援会聖市地方委員協議会を開いた。

聖市に十九人絵画展覽会が催された。マリヤ・エレナ画伯、其他伯人画壇に日系伯人画家森、田中、鈴木等若人十九人の新進芸術美を發揮したものであった。

五月末、聖市日本人間に国民運動が潜行的にあると睨られ搜索の手が當局から入れられた。岸本次男、黒石清作等警察へ呼ばれたと、デアリオ・ダ・ノイテ紙は報じていた。

支那の蒋介石夫人宗美齡の妹、宗慶齡が六月四日聖市リベルダーデ街メソヂスト教会に来て、戦災の支那寺院再建の寄附金募集の講演会をやっていた。

六月三十日、救援会の資金募集広告を依頼された伯刺西爾時報社長黒石清作は、該広告掲載を拒絶した。拒絶の理由は、現下の日本移民社会の動揺を一層攪乱するといふのであった。母国戦災救援運動でなく、母国躍進運動の資金広告であれば掲載するとの事であったが、救援会では趣旨に反すといふ以後救援会広告は時報に依頼もせぬこととした。

七月廿七日、ウーゴ・ラザール神父は「戦後の日本」といふ題で、聖市コレチオ・サン・ルイス講堂で講演した。神父は広島へ原子弾爆破當時の被害者の一人であった。広島戦災孤児救援の資金募集へと日本から渡伯し、奥地を巡講した。サン・パウロ新聞、伯聖新聞、パウリスタ新聞、南米時事と聖市に於てオンパレードした邦字新聞中、伯聖新聞が第一に発行不能となった。八月中旬のことであった。

九月九、十両夜、聖市母国戦災救援会支部が、リベルダーデ街のセントロ・プロフェソラード会館で「音楽と舞踊の夕」を催ほした。

九月十五日、パウリスタ新聞社の経営者蛭田德彌は竹内秀一に経営を譲った。十二月六日、母国戦災救援会では聖市パカニンブー競技場に於て「バイレ」を催ほした。救援資金収入のためであった。

十二月廿九日、聖市中央街に大雹降り各商店の硝子窓、飾窓硝子の北向は大破し被害夥しかった。聖市商店街初めての天禍であった。

一九四八年正月、聖市々会議員中共産党議員の失脚事件があった。第一候補の日系伯人田村幸重が市会議員として初登場した。

昨年来將棋会が各地に復活していたが、一月廿五日パウリスタ新聞社主催の將棋大会が聖市に催ほされた。

戦前祖国に留学していた日系伯人学徒、中平兄弟が飛航一番乗りで帰伯した。二月津崎クララ未亡人が正子を伴ふて帰伯した。以後続々と日系第二世伯人学徒が日本より帰伯した。

在日廿年のカトリック神父ボンセレーが渡伯し、戦後の日本の窮状を愁えた。

昨年末、コチア産組主催で「第二世は第一世に何を求める」かの二世坐談会を催ほし、二月十日同問題で第二世女性の座談会を催おした。

在リオ首府横浜正金銀行支店副支配人三塚清三郎が、戦後初めての伯国よりの帰国日本人として横浜へ着いた。

母国戦災同胞救援会は、伯国産白砂糖一千俵を日本のララ宛送り出した。

二月二日夜、聖市伯人俳諧愛好作者仲間は、アルメイダ・ギレルメ及ジヨルヂ・フォンセツカを中心として、俳句の夕を催ほした。

二月の大降雨にリベイラ河氾濫、レヂストロ日本人植民地は母国を偲はす水害を蒙った。

戦前の日本人学生連盟関係の一団、塚本彰美、清原龍太郎、八幡興蔵、高橋誠敏、高島清、木村博、畠田酪春、井上忠志、芳賀貞一、松本日出男、竹中正、高橋勝の学士連中は田村幸重聖市会議員をジヨルダノに招いて晩餐会を催ほし、日系準伯人と日系伯人との意志の素通をはかった。

二月九日、聖州保安局特高課は帰化人岸本次男を収監した。政治警察の手によって岸本は州知事アデマールの秘書でない事判明し、當警察から全日本人へ警告状を、在聖日本語各新聞へ広告した。

三月十二日、救援会は聖市の赤間裁縫女学院の広間に、救援物資の古着集め相談会を、在聖市日本婦人と開いた。

聖州パウリスタ延長線ポンペイア市会では、戦災日本救援の演説をプロフェッソール・アルセウ・ゴンザレス市会議員がやり、決議した。

四月に入り、聖市サン・パウロ院に入っていた日系伯人山田千鶴（二十九才）は尼僧としてローマ・カトリコ本山へ遊学出発した。

二世聲楽家中川俊彦パウロ・モリは、毎週水曜日の夜ラヂオ・サン・パウロで放送した。日系二世音楽界への新進出、終戦後失なっていた日本移民にホホえみを取戻させる。

小野柔術道場に三十名の伯人（中に伯女性四名）邦人一人の柔術対抗仕合があった。

日本生活三十年のシリヤ人タクラ某来聖した。妻は日本女性であった。

パラナ州のロンドリーナ植民地帯の日本植民者等は、同市ロンドリーナ中学校に日系伯人子弟七十名を入学させた。

四月廿九日、コチア産組嘱託医奥村良夫博士胃癌手術後歿す。

五月廿二日聖市ピニエイロス区に於て、沖縄戦災救援会はバイレを催ほし救援資金をあつめた。

吉瀬富雄日系工学士は、その卒業論文に「鑄型の砂に木炭粉混入」の題で當学界に認められた。

内国蘭花展費の会がガレリア・プレステス・マイヤで開催された。日本人蘭愛好者の用品も夥しかった。柴田一明は一等賞盃を授興された。浅倉春一、山西千男、楠作右工門等は選外優秀賞を得た。

六月十九日、笠戸丸移民四十年記念ミサ祭をサン・フランシスコ寺院（カトリコ）に於て行なった。笠戸丸生存者の集まるもの卅二名、彼等は嫁孫つれて聖市郊外トレメンベーの隈元維高（第一回鹿児島移民）の耕地に祝賀会を開いた。四十年前サントス港に上陸、聖市の州立移民収容所に入った紀

念日であつた。同航海者七百九十五名中、在伯生存者は男一四〇名、女五五名、合計百九十五名となつていた。

第二回旅順丸移民九〇八名中、在伯生存者は二百九十七名となつていた。

日伯外交は、伯国側より対日外交を公式に断絶したが、日本国側よりは外交断絶を公式に宣言しなかつた。

然し、平常の社会生活が在伯日本人には許された。これは戦時非常生活の上からは許されない筈なのに、許された。在伯日本人にとっては意外とする處であつた。

末梢神経のよく働らく吾々日本人の或連中は、平常の生活をしながら戦時非常生活と錯覚し、末梢神経を尖鋭化して生活し所謂「競々」として生活したのも相當あつた。

一般邦人は戦時中にもかゝらず産業方面に異状な進展をした。聖市内に於ける日本移民の職業戦線は戦前と異状な色彩を呈した。日本人経営のエンポリオの増加したこと、果物店の夥しくなつたこと、洗濯業経営者の凄ましい迄に多くなつたことであつた。尚ほ日本人間のことではあるが、寄宿舎擬ひの食堂の繁昌も加へていた。

聖市人口の増加膨脹と共に斯うした小企業が夥しく盛んになつたことは、斯の企業に大資本が未だ投下されていない事と見做される。

学生大寄宿舎や女学院の新建設が出現しかけている。

聖州に於ける邦人殖民三ツの流れ

日本人コロニアの流れは、最初聖州ではニツの流れであつたが、拾年位には三ツの流れとなつた。

最初は海岸植民と、奥地植民とである。海岸植民とは移民会社直営のイグアツペ植民地を指し、奥地植民とはモヂアナ、ノロエステ、ソロカバナ、パウリスタ各珈琲耕地のコロノ上の自由植民を指した。

イグアツペ植民地の創設者青柳郁太郎が一九一〇年サン・パウロ市に現われて、在聖邦人側に頼被りしつゝ日本人植民地をコツコツと物色していた。耕地上りのコロノを植民地に誘ふ植民地でなく、日本から直輸入の植民者を入るゝ植民地物色であつた為め、コロノ上りの在聖邦人とは何等関係ないとして、頼被りしていたのであつた。

所謂軍部、官僚、資本家の後援組織する植民地であつた。當時移民会社や、聖市の日本総領事館のお歴々方は、ノロエステやソロカバナ線のコロノ上りの自由開拓者をさして、轉々股旅者の植民……又は野武士供の寄合植民者と呼んでいた。イグアツペ植民地こそ、ほんとうの植民と信じていた。コロノ上りの自由植民は、領事館や移民会社側から、自分等が股旅者の寄合開拓地、野武士共の開墾地と呼ばれている事を知った時「ヨシ股旅者、野武士結構、兎に角働らこうぜ」と対総領事館員と移民会社員に反感を芽ばえさせがちであつた。それと知つた館員や社員の一部連は「ノロ、ソロ線に視察に行くと喧嘩吹きかけられる危険あり」と一時怖わがつたものである。

イグアツペ植民地が開設された。奥地の珈琲耕地コロノ上りも入植したが、主な入植者は日本直来の植民家族が多かつた。

それで彼等は、珈琲耕地の生活味を知らず、従つて伯国式の生活様式に馴染む機会に乏しかったゝめ、今でも日本料理を好む傾向がつよく、カフェーの代りに茶をのむといった状態である、伯人家族の稀な日本人のみの集団の伝統的習慣と環境がそうさせたのである。

イグアツペ植民地では當初經濟的にも望が少なく、精神的にも日本農家生活の延長でそぐわぬ海外植民と觀じた植民の或者は、植民地を出て、奥地自由小農植民生活へとノロ線へ、ソロ線へと轉向した人々の群が、その後相當あつた。

輪湖俊午郎、北原地價造、浅野利實、大峽脩、野村秀吉、田中治男、坐光寺興市、野村隆輔、馬場留四郎、尾山某、吉

安幸平、羽高権造、等々、彼等はイグアツペ植民地の中堅インテリ級であつた。その中の輪湖と北原、田中、大峽等は一九二三年信濃海外協会の議決に基き、力行会長永田稠とコンビシ、バウルー多羅間領事の後援のもとに、奥ノロエステ線ルツサンビーラ駅西南卅三軒から四十三軒に亘る、二三〇〇域の植民地を開いた。信濃移住地と稱した。この移住地建設には長野縣民有志と當時同地知事たりし本間及梅谷等が熱心に助力した。

信濃人は海岸より山が適すると、海岸植民地のレヂストロより、信濃植民地へと轉向し来たもの其後続々とあつた。創立は一九二四年で、この縣民植民地に誘われ鳥取海外協会も信濃移住地の隣接地を二、二〇〇域購入し縣民植民地を創設した。これには當時鳥取縣知事たりし白上祐吉が協会組織に骨を折つた同協合理事植民地擔當者は橋浦昌雄が移住して来た。一九二六年の開設である。

次で富山海外協会の設立せる植民地一、三〇〇域が創まつた前鳥取縣知事白上祐吉が當時富山縣知事であつてこの海外協会組織に盡力した。協合理事として同植民地擔當者は松澤謙二であつた。一九二七年の開設で同植民地のかゝり駅は舊名コトベロ（肱）後にノーバ・ニポニア駅と改名された。

信濃移住地の隣接地に熊本海外協会が熊本移住地を開設した一九二六年であつた、同移住地の開設に地元より呼びかけたのは同縣人測量師林田鎮夫であつた。常時林田は當地方の舊地主アドルフオ・ミランダ聯邦上院議員の傭人測量師として、當地方の留守をやつていた。

信濃移住地購入に骨を折つた彼は、熊本縣人移住地も是非建設したいとの希望に燃え、郷土の熊本海外協会へ呼びかけ、地元より一層氣勢を挙げたのであつた。移り来た熊本海外協会植民地擔當者は金竹盛重であつた。

この四縣移住集団地を呼んでアリアンサ植民地と唱えた。力行会農園百域は、ルツサンビーラ駅から十二軒の處に開設された。

一九二六年のことで、園主に細川末男家族が開拓に従事した。力行会員の渡伯家族の開拓生活實習場とし、開設以来二十餘年細川園主の開拓歴史がつづいている。

鳥取移住地と富山移住地の中間に二五〇域の渡邊農場がある東京の渡邊昭男爵の購入せる農場で宮尾厚が農場主任として珈琲拾四五万株を培っている五十家族餘の平和境がある。一九二八年頃の創設であつた。

熊本移住地の隣接坤に林田鎮雄のプリマベイヤ耕地百域が拓けた。珈琲七万株、花さきそめた頃耕主は都会の花に移つて去つた。

アリアンサ植民地の入植者等は、海岸植民地レヂストロ植民者等と同じく、主に日本より直接自然林の中に這入つた人々で伯国の耕地生活の経験なき群れであつた。農労働を日本でやっていた人々もあつたが、彼等の多くは母国でも中産階級に属する人々であつた。

ノロエステの所謂野武士共や股旅者等は彼等を指して「銀ブラ植民」と綽名していた。

それから拾年後、植民地に馴染めない人々は鋤と鉞を棄て、聖市の都会生活へと又あこがれを轉向した。去るものが去つた後の植民地には土に親しまねば生きえぬ人々の群が第二世の成育を見護っている。

アリアンサ植民地の創設約拾年後の調査によれば、左の如き数字が表われていた。(一九三四年聖州新報社発行 在伯日本移民廿五週年紀念鑑)

信濃移住地(第一区より第七区迄總計数)

家族数二三九 人員一、〇五二 男五七四 女四七八 珈琲樹数六五〇、〇〇五株 初七、九六五俵 開拓土地面積四九八域 地主五六 伯生二六三 伯死因一 就学児一四五

力行農園

家族数三 人員二九 珈琲樹数一万株

鳥取（第二アリアンサ）移住地

家族数一一三 人員五七七 男三三三 女二四四 珈琲樹数
四一二、七〇〇株 地主八二 粍一一、二六八俵 伯生九
五 伯死三二 就学児五七

富山第三（アリアンサ）移住地

家族一〇五 人員五四〇 男二七五 女二六五 開拓面積三
四三域 珈琲樹数二五四、五〇〇株 粍八、四六〇俵 伯生
八六 伯死二六 就学児六八

渡邊農場

家族四四 人員一三二 男八三 女四八 開拓面積百域 珈
琲樹数拾万株 粍一、四〇五俵 伯生一九 伯死一 就学児
九

熊本移住地

家族一一三 人員五八六 男三二五 女二六一 地主五九
珈琲樹数 六〇二、七〇〇株 粍四、七九七俵 伯生九二
伯死 一六 就学児 二五二

薄荷草栽培の先達者

アリアンサ植民地のビーラ・ノーバ植民区に薄荷草栽培を
やり、結晶精製の工場を建て専心斯業に精進した人がある。
埼玉植民の矢澤晶鑿であった。一九四〇年の頃彼の生産品は
市場に出て生産費がとれぬ不況にあった。結晶薄荷一キロ七
ミルレースにもならなかった。彼は在伯日本移植民界の薄荷
草栽培精結晶生産者の第一パイオニアであろう。

海興植民地と ブラ植民地

海外興業移民株式会社の前身ブラジル拓植株式会社が創設経営する海岸植民地のレヂストロ、その植民中の不平組が同植民地を離退して、奥地に信濃移住地を開設した。

これは母国に於ける政治と資本関係の抗争的対外施設の現われの最初であつたとも見られる。

多年外務省は対外移民に関する事務を主管し、在外公館をして移民を保護監督指導した處から、移民会社は外務省に隷属的態度であつた。

母国内務省は国内に於ける移民保護法の運用をした、地方長官を通じて干渉したが、内務省社会局が移植民奨励金を持つて乗出す迄は、在外移植民問題は外務省と移民会社の独專業とも言ふ可きものであつたので、内務省の意向や企画は殆んど用いられなかつた。

茲に対外移植民問題に関して、相當長い期間内務省の切齒扼腕時代が続いた。

時代は移つて、日本の移植民問題を外務官吏や移民会社員の専横にまかせておけぬ期に達した。移植民奨励補助金をかざして内務省は移民会社に指令し始めたのが邦人医師を伯国に留学させる制度を設けたより始まつた。次で、内務省は大正十三年臨時議会の協賛を経て伯国行移植民に渡航費全額を補助した。

次で対外特植民問題で多年、外務省と内務省との抗争の接触面より生れ出たものが、拓務省であつた。昭和四年（一九二九年）の設置である。

拓務省は涉外事項に関するものを除く外、移植民に関する事務及海外拓植事業の指導奨励に関する事務を、拓務相管理する事となり、拓務相はこれ等の事務につき外務相を経由し領事官を指揮監督する事となつた。

聖市日本総領事館内にあった邦人移植民産業指導部が、改めて拓務省管理に移され勸業部となり江越信胤農学士が改めて主任となった。

昭和二年五月海外移住組合が制定され、同時に各府県に海外移住組合が設立された。これの前提か各縣海外協会であった。

聖州に於ける植民の流れが、海外興業移民会社直営のレヂストロ植民地対海外移住組合の直営アリアンサ植民地及チエテ植民地となり、外務省系が前者であり後者が拓務省の色彩を濃厚に表はした。



(写真―輪湖俊午郎)



(写真―北原地價造)

田中政友会内閣の際、議会の協賛を得て新設された拓務省が次の浜口憲政寛内閣の際、一時廃省の憂目にあつた。

日本の対外移民歴史の蔭には、政友会の流が常に積極的に仕事している。布哇官選移民の歴史は勿論茲に史實を掲げる迄もない、笠戸丸移民輸送の蔭に、政友会の代議士江藤新平が動き土井権太等が動いていた。

イグアツ。植民地を創設した東京シンーデケートの組織されたも桂内閣時代(後の政友会系)であつた。海外移住法案を議会に提出したのは、政友会派であつた。移住組合法を制定したのは政友会の床次内相時代であつた。

その反対党の流れは常に対外移民政策に消極的仕事をしていた。聖州に於ける海外興業移民会社支店(イグアツ。植

民地の擔當社」と拓植移住組合聯合会支店、財団法人伯国拓植組合との抗争は、日本より移植民輸送サントス港上陸の際にも、両社現場監督の間に税関に於て、荷物の件で、植民ものだ、移民ものだと争った。後には移住組合植民も輸送の件だけは一切海興に一任して摩擦をさけた。

総領事館内に於ても、領事館級の涉外移民事項と、勸業部故の移民事項に裁て権限争が絶えなかった。

海興移民会社と伯国拓植組合との、在留白木移植咤社会に及ぼす二つの流れが抗争していた。

世界第二次大戦勃発前、サンタ・クルーズ病院（日本病院）の制度組織が法的に行詰った際、前任ブラ拓系の役員を一掃して更った役員の顔振は、舊海興会社系の人々と、現海興会社系の人々で満たされていた。

海興の直営する海岸レヂストロ植民地に対して、アリアンサ植民地が開設されたが、母国拓務省の色彩を帯びて大きく現われたのは伯国拓植組合の直営するソロカバナ線バストス移住地であり、ノロエステ線のチエテ移住地であった。

ブラ拓のトレス・バーラス（現アサ牛植民地）に対して海興派のピリアニツト（現ウライ）植民地が脚色を帯びて現われたのも思えば偶然ではないかも知れぬ。

ブラジル拓植組合

経営のチエテ移住地

ルサンビーラ（現ペレイラ・バレット）駅よりチエテ河を越えてチエテ移住地が開設されたのは一九二九年（昭和四年）の頃で、ブラジル拓植組合が購入した四七、五三〇域の大移住地であった。

組合は、州政府より四百コントスの補助金をえてノーボ・オリエンテ橋（新東洋橋）をチエテ河にかけた。長さ一三〇メートル、巾六メートルの鉄製吊橋は一九三二年に起工決定

し、開通をみたのは一九三五年六月廿六日であつた。木村質一郎工学士が努力した。日本人側は架橋に総工費一千百コントス、橋は伯人により新東洋橋と命名されたが、後にペレイラ・バレット橋と改名された。



ノーボ オリエンテ橋

一九三四年度の調査（聖州新報社発行在伯日本移植民廿五週年紀念鑑）によれば、チエテ移住地は家族数二二八、栽培カフェー樹数三一五、六〇〇株、棉花二、〇一四俵、地主一九一、粉一三、〇一四俵となつていた。

最近の同植民地日伯両国人数は

	農耕地	市街地	計
日本人家族	六〇〇	一九一	七九一
伯人家族	一〇〇	三〇〇	四〇〇

人員にして日本人四千人、伯人三千二百人となっている（推定数）植民地の中心市街のペレイラ・バレットに於ける日本人数は二〇四五人中男五三二、女五一三、この中日本生 四九〇 に対し伯生 五五五 となっている。

この日本人の大移住地に対し、日本人に好感を持てる伯人は移住地の名も橋の名と同じくノーボ・オリエンテ市街と名つけ日本人の開拓に報いていたが、反日本人の伯人インテリーの一人、マリーオ・ヂ・サンパイオ・フェラスの思想（聖卅政治評論家並に著述家）によれば、日本人の植民事業を斯う認めていた。

外国移民中我国の人種問題に寄興する處最も少ない移民として、知識慾に富み、勇武にして進歩的な日本移民を挙げる事が出来る。余は日本移民の絶対的禁止を主張するものではないが、北米に於けるが如く、国民構成上不適當な要素でないということが確められるまでは、入国をウント制限し、時には一時停止することを提案するものである、殊に吾と系統を同じうするアリアン人種の中に、我国の人種問題解決に役立つ要素が幾らでも求められる時に於て、何を苦しんで長年かゝつて出来た古い樹幹を棄てゝまで假令優秀なるにせよ、其起源や感情や宗教を全く異にする日本移民を迎へる必要があるか、むしろ従来よりも一層大なる制限を加へ、より嚴重なる監視を為し、随時入国を停止することが刻下の伯国にとつて有利である。殊に注意を要する一事は日本人の植民事業なるものは個人的企業ではなくして、日本政府自ら会社 の假面を被つてやっている仕事である。それ故日本移民に関する限り、問題は人種が劣等でとか優等とか云うのではなくして其不適當性にある。

と論じていた。マリーオ・ヂ・サンパイオ・フェラスは日本移民を政治移民と観ているのである。成程満州日本移民は政治移民として移住させたが、ブラジルには政治移民を送らぬ日本であつた。

海興移民会社やブラ拓移住組合の植民のニツの流れの外

に、各が自々自由に土地を購めて開墾生活、伯国社会の生産に寄興している一般大衆日本移植民の本流がある。

一九四一年末日米開戦、翌年日伯外交断絶した、海外興業移民会社も、ブラ拓移住組合もその直営植民地を自治植民地と化した。

在伯日本移民と本国との交通は杜絶した。所謂空自時代が六七年間つゞいたが、この間に在聖日本植民の三つの流れは、一ツの流れとなつて混濁した、混濁しつゝ伯国社会に融け込みつゝある。

北伯のアマゾナス州の日本植民も、パラ州の日本植民もこの空白時期に自治植民となつて環境に順応しつゝある。

サン・パウロ州に植民地の設立されたは一八二八年頃からであるが、當時、サンタ・アンナには伊太利人とポルトガル人を入れた。サント・アマロ植民地には独逸人を入れた、ノーバ・オデッサには露西亞人を入れた、これ等各国の植民者等がその環境に叫び、怒り、嘲笑し、泣き、笑ひつゝ順応して伯人となつてしまつた様に、日本植民も泣き、笑ひ、黙しつゝ同じ歴史の道程を辿る。外交家や政治家が敢行しえないことを歴史は遠慮なく實現させるのである。

一九三二年から聖市に邦人女性の料理学校が出来た。佐藤初江が創めた。公認されたのは一九三六年で、一九四八年末迄に七百名の卒業生を出している。



(写真―佐藤初江)

後篇 産業文化史

第一章 日本移民と産業

一、カフ エー栽培史

ブラジルのカフエー

カフエーの原産地はエチオピアで、次でアラビアに移植されたと言われる。一六七一年オランダの総督がアラビアから、バダビアに移植し、一七一九年にはジャバからオランダにカフエーの輸出をしていた。ジャバに砂糖が生産されてそれに伴ってカフエーが発達したと見做される。欧州に飲料としてカフエーを広めたのはオランダ人であった。

ルイ十四世時代にカフエー樹をもの好きに巴里市の植物園に植えてみたが、南米に移植したのは一七二三年、佛人が佛領ギアナに、次いで一七二五年に始めてブラジル国パラ州に移植した。一七四八年にはパラ州に七千株のカフエー樹があったとの史實がある、それから二十二年後にマラーニオン州に移植され、そこからリオ首府に移植し、ミナス州やサン・パウロ州に繁植した。リオ州から今のセントラル線の通るパラIBA溪谷の峯々に移植された。

その頃カフエーに二種あった。アラビア種、リベリアン種である。

サン・パウロ州としてカフエー史實に微されるのは一八五〇年代、カフエー生産高八二、六〇八俵、一俵一八ミルレ―

スであつたと、當時のサン・パウロ予算案二九六コントス中に表われている。その頃、聖州の生産工業は砂糖とピンガ以外はカフェーで、勿論、鉄道も敷かれてなかつた。

一九〇六年度の聖州生産カフェー収穫高は前年度の二倍の豊作で、世界のカフェ・ストックと消費額とを狂わせた、それで一九〇八年聖州はタウバテ市に協商会議、ベロ・オリゾンテ市に会議を開いて、余剰カフェーの前後措置を議したが、實施が遷延したので、たまりかねて十ヶ年借款千五百万ポンドを独断で聖州政府は起し、カフェー買上調節策に乗出していた。公定價格一袋廿八ミル（七級型アロバ七ミル）同年十月のことで、その六月二日 日本移民はカフェー耕地に配地されていたのであるが、前年度のカフェー稀有の豊作のため、各耕地のカフェー樹は衰えていた。

一九〇七年七月米国向七級型価格はサントス港十疋二ミル五五〇レースの大惨落であつたが、漸次騰貴、一九一一年末迄に遂に八ミル〇六〇レースとなつていた、一九二二年末に又下落し三ミル三〇〇レース（二六ペンス換）となつた。一九一四年三月には四ミル四〇〇レースと上向いていたが、欧州戦はその年の八月三日ガーンと始まり、十五日よりモラトリウムを実施した。独、奥、白の四百万俵が輸出を杜絶した。一九一〇年の聖州カフェー樹数は

六九六、七〇一、四二五株

生産高は、

一二、一二四、〇五〇袋

當時サン・パウロ州カフェー三大耕地は左の如きものであつた。

第一 Fazenda Schmidt

三十三ヶ所の耕地、面積一万八千域、カフェー樹数七百五十万株、年 産一五万俵。

第二 Fazenda Dumont の権利を継承せる同人夫人の所有
ヅモント・カフェー会社（飛行家サントス・ヅモントは彼

の息) カフェー樹数五百万株、年産額十万俵。

第三 Fazenda Martinho Prado
アントニオ・プラド所有、年産額七万俵

それから十年後の一九二〇年度には、聖州はカフェ株増加した。

生産高は 八二六、六四四、七五五株
四、一五四、七〇〇袋

右の表の示す如く生産高の激減は一九一八年九月一日の全聖州大霜害に因るものであった。

日本移民の始めてのカフェー栽培新樹もノロエステ線中、リンス駅に、ペンナ駅に、プロミツソン駅に、ビリグイ駅に、この大霜に相當被害をうけた。



(写真―一九四〇年の旱魃でカフェー樹惨状(ノロエステ))

この霜で聖州カフェー収穫の全被害は産額の四割減と見られた。が、政府はストックをはたいて一俵二十九ミル四百里ースに買上げ、一俵八十ミルに売飛ばしたので大儲けし、一九〇八年度の第一借款千五百万ポンドと、第二回借款も大部分一億一千万ミル償却した。

その頃棉花栽培の熱が上っていたが、カフェー栽培も日本移民の間に決して衰えはしなかった。欧州大戦終熄後の一九二一年、百八十八万ポンド輸入超過で財界恐慌、銀行間の為替取引も一時中絶し、カフェー輸出も減退した。前年度千四百万俵のカフェー豊作（大霜害後三年目）北米輸入商の伯国財界、カフェー界攪乱で、カフェー値は大暴落、生産の前途が極めて不安がられた。茲にカフェー保護の叫びが起つていた。

聯邦政府は第三回カフェー買上げ四百五十三万俵をやった（一九二二年）市価は漸く上った。これで政府は又四百万ポンド儲けた、その売買差額で、カフェー永久保護策が起つていた。聯邦政府がこのカフェー保護政策をやっても、要は聖州カフェー産業保護に過ぎぬので、他州はこの保護政策を嫌った。茲に一九二四年の政治革命（イヂドーロ將軍の）が勃発した。

然し一九二六年十月二十六日、法律第二、一四四号によりカフェー保確政策は實施された。聖州のカフェー法（O Instituto de Cafe do Estado de Sao Paulo）の官制及機能は

- 一、カフェー輸送の制限
- 二、カフェー生産他州との協約
- 三、サントス市場及内地市場に於けるカフェー買入
- 四、耕主登録
- 五、カフェー積出割合
- 六、輸送税徴集

斯くて各地駅附近にカフェー倉庫を官設し、無料保管を實施した。サントス港輸出高と同量だけ奥地よりサントス倉庫へ輸送した。これは共和党、聖州の出身ワシントン・ルイス大統領時代であつた。

斯くてカフェー値は市場未曾有の高値を維持し、一九二五年サントス標準型十瓩の相場は最高地二、五〇〇レース、即ち一俵二六一ミル、最低二九、五〇〇レース、即ち一俵一七七ミルを現はした。

然しこれと反対に外貨取引相場は近来になき安値を現わし、買氣の増進は著しかったカフェー市場は殆んど釘附状態で平穩無事であつた。

聯邦政府のこの恒久保護カフェー調節確立は、その後聖州政府の手に移つた。対内的の平穩無事は外国に不平があつた。世界の消費各国と生産各国の圧迫が眼につき出した、即ち中米其の他カフェー栽培の競争国は対伯カフェーの画策をした。

この聖州カフェー好況時代に日本移民はカフェー栽培に便乗して新カフェー耕地、新栽培に熱狂していた。當時国内の物價は騰貴し、生活指数に一九一四年の一〇〇から一九二七年には二七六となつており、社会各方面に生活不安がたゞよつた。

一九二七年伯国カフェー二百年記念祭が挙げられた。聖州カフェー樹十億万株と發表されていた。

同年日本移民側はノロエステ線年鑑（聖州新報社調査發行）によれば、同線内の栽培カフェー樹数は二千二百万株、收穫量は四十七万袋であつた。

越えて一九二九年度同社發行三線年鑑（ソロカバナ、ノロエステ、パウリスタ延長線）によればカフェー樹数は四千五百万株に收穫量は百万袋に達していた。

一九二八年末には聖州政府のストックカフェー一三、〇三一、〇〇〇袋となつて海外カフェー經濟界から大いに不安がられていた。

このカフェー好況時代に、耕地の労働力不足で日本移民は順調に誘入されていたが、日本舊移民の開拓せる植民地の好況状態が、新移民を誘導して新移民は耕地労働契約を終了すると耕地には再契約せず、直ちに独立農の生産者へと轉向していたので耕地労働力は益々不足し出していた。これは日本移民ばかりでなく、各国移民とも耕地コロノ契約終了後は、未開地の自由開拓、独立小農と続々轉向した。

世界第一大戦後、世界の金融市場の中心はロンドン市より紐育市に移った、が、終戦十年後紐育市場は行詰り、崩壊大恐慌が来た。統制なき生産力の増大、それに対立せる購買力の縮小との間の矛盾が、大きく破裂した経済大恐慌、北米への全面的依存に過ぎして来た伯国の経済界にも押寄せて来た。

カフェー保護令による対内的輸送機関も、最初は滑かであつたが、後には大耕地のカフェーのみが何時も滑らかに輸送され、小耕地の生産者は自分のカフェーが奥地の倉庫よりサントス倉庫に轉送さるゝに八ヶ月も要した。長いのは一年もかゝつた。奥地のストックが多量になればなる程運出に時日を要した。

茲に小耕地者の苦悩が沸いた。現場で闇取引が流行し出した日本移民の生産者等もこの闇取引に便乗し金利をウンと叩かれていた。

カフェー値安定策があると、他面にカフェー売買投機業者はそれを悦ばない。聖州共和党から出たワシントン・ルイス伯国大統領が再選重任し、次の大統領にも聖州共和党の後継者ジュリオ・プレステスが聖州知事より公選せられたとなると、他州政治團は喜ばなかった。昨年来伯国経済界の不安動揺につれ、伯国共和党の連年政権掌握は、伯国自由連盟政党の不満勃発となり、一九三〇年の革命の烽火リオ・グランデ・ド・スール州にミナス・ジェラエス州に共同宣言して挙げられ、世はゼツリオ・バルガス政権となつた。

ゼツリオ政権は世界フアシオ時代に即して独裁執政を發揮

した。国家主義経済の統制であつた、カフエーの惨落と一千六百万俵ストックの溢れは下級カフエの焼棄の大調節策より外なく、政府で買上げては焼き棄てた。聖州に対して新カフエー樹の栽培を禁止した。カフエー耕地の利益を長い間擁護していた共和党政権の崩壊は伝統的カフエー耕主の大部分の積年の疲弊暴露となつた。

廿餘年日本移民と関係探きグアタパラ耕地の百八十万株古カフエ樹中六十万林が切り拂はれて棉花栽培畑と轉向した。斯うした大耕地の段落は続々現はれた。カナーン耕地がさうであり、サン・マルチニーオ耕地もそうであつた。モヂアナ線方面にも破産に瀕した耕地は続々と棄売されていた。一袋六十匁入りのカフエ二百五六十ミルの値が五十ミル台になつていた。

カフエ栽培制限政策は、カフエ偏重主義の農業を、一般的に多角農業面へと轉向させる機縁となつた。

日本移民も土地を購め、カフエ栽培へと盲進していたものが聖州中カフエ新栽培罷成らぬのお達は行く手を遮られた観があつた。聖州内の新開耕地は斯くて米作や棉花へと轉向した、禁止令は聖州だけに特に発令したもので、パラナ州には一千五百万株迄の新カフエ栽培を許した。カフエ栽培希望者は、パラナへ、パラナへと移つた。茲に今も北パラナ日本移民のカフエ樹数一千万株を算するに至つた。

一九三二年は日本移民入伯以来廿五周年であつた。この四分の一世紀間、在伯日本移民のカフエ栽培熱は五千四百万株のカフエ樹を育てゝいて、二百万袋近い収穫をしていた。その各線の栽培株数を現はすと、

○ノロエステ線

カフエ樹数

三六、〇八五、八五〇株

収穫量

一、一四四、二五二袋

所有土地面積

四六、三五七城

地主数

二、九〇八家族

土地購入價額

三三、二一八コントス

○ソロカバナ線

カフエ樹数	一一、〇七三、三五〇株
収穫量	二八三、一九九袋
所有土地面積	二三、〇五二域
地主数	一、四七〇家族
土地購入價額	一七、三三二コントス

○パウリスタバ本線

カフエ樹数	二六七、六〇〇株
収穫高	一〇、八九〇袋
所有土地面積（カンビーナス東山外）	三、一六三城
地主数	六五家族
土地購入價額	三七九コントス

○パウリスタバ延長線

カフエ樹数	三、二四六、三〇〇株
収穫高	一八四、六二三袋
地主数	三七三家族
所有土地面積	五、七一域
購入價額	一、八七六コントス

○サン・パウロ市近郊

カフエ樹	六、〇〇〇株
収穫	
地主	四六家族
所有土地面積	五六〇域
購入價額	一、六四一コントス

○サントス・ジユキア線

カフエ樹数	一、二〇二、九〇〇株
収穫	二四、二六八袋
地主数	六五二家族

所有土地面積
購入價額

一一、六二四域
六、〇八五五コントス

○ドラデンセ線

カフエ樹数
収穫
地主数
所有土地面積
購入價額

八八四、一〇〇株
一一、〇五〇袋
一〇五家族
一、三六六域
六六七コントス

○アララクアラ線

カフエ樹数
収穫
地主数
所有土地面積
購入價額

一、二七〇、〇〇〇株
九九、九三八袋
一一四家族
一、四四四域
一、一九六コントス

○セントラル線

カフエ樹数
収穫
地主数
所有土地面積
購入價額

九、一〇〇株
一五〇袋
二一六家族
一、三五五域
三、〇八五コントス

○モヂアナ線

四千家族の日本移民地帯なりしも、周囲が大耕地隣接小面積の土地購入不能の事情からして、借地及コロノ生活の邦人多き地帯であったため、カフエ栽培者も當時迄は発展の餘地がなかった。一九三五年後天耕地が經濟段落し、耕地を切売し出してから、昨日の日本移民はそれを購め、今日の地主カフエ耕主となっている。モヂアナ線日本移民が地主となり、資本的に進出したのは一九四〇年頃より空白時代にかけてで

あつた。

（本表の数字には海外興業会社やブラ拓の、又日本資本家の所有地の土地面積その他を含まず）

一九三二年度は在伯日本移民のカフェ生産高は二百万袋であつたが、一九三六年度聖州農界の発表によれば、日本移民のカフェ生産総高は聖州カフェ総高の百分の五・四となつていた。

一九三九年度に在バウル日本領事館管内丈けの産業調査が聯合日本人会によつて行はれた「バウル管内の邦人」に発表された處によると日本人栽培のカフェ樹数は上げてないが、カフェ栽培面積は、一五、七一二域となつてゐる、生産カフェ高は一六九〇、九六一袋とあり、その中ノロエステ線の生産高が一、四五四、九六四袋、パウリスタ線の生産高が二三六、〇一五袋となつてゐる。開拓面積は五五、七四四域で土地所有面積は八三、八七八域とあつた。

パウリスタ延長線方面日本移民の開拓進出は一九三〇年頃より本格的となりその後の十年間はカフェ栽培禁止で、一時土地購入熱がさめていた。棉花栽培の盛況を来すとマリリア駅より奥の原始林地帯にノロエステ線、ソロカバナ線、モヂアナ線方面の日本移民の流れが鉄道開通予定地帯へ、と開拓の鉞を振るつた。棉作へ、米作へ、雑穀へと進出した。

日伯国交断絶の空白時代ではあつたが、茶、米、棉、その他ハツカ、馬鈴薯栽培に、養蚕に相當な生産能力を發揮し、聖州のカフェ生産面に於ても、一九四七年度、伯国農村協会は、在伯日本移民のカフェ生産高は伯国生産総高の百分の二十となつてゐると発表してゐた。

ブロッカの天敵

ウ　　ガ　　ン　　ダ　　蜂

サン・パウロ州十億萬株のカフェ樹林に巢喰ふブロッカに

はカフェ耕主連も、州當局も非常な苦杯をなめてきた。ブロッカの被害の甚だしい處では、一俵六十キロのカフェ果を精選カフェにしたら、僅かに八キロしかカフェ實がなかったといふ被害振りであつた。一九二八年頃カンピナス郡方面のカフェ耕地が被害大であつた。

州のインスチチュート・ビオロジコ（生物学研究所）は「ヴエスパ・デ・ウガンダで、カフェのブロッカは撲滅出来る」と発表した。が、之に呼応してウガンダ蜂を飼養しようと、起ち上つたものの一人にカンピーナス東山農場の支配人山本喜譽司農学士があつた。彼は一九三一年よりウガンダ蜂の分譲を生物学研究所よりうけ實驗し始めた。

一九二八年より一九三一年度の東山農場のブロッカ被害甚だしかつたからであつた。ヴエスパ飼養後二年目頃から蜂の発生繁殖が相當目立つて来た。一方ブロッカの被害は又目立つて尠くなつたが、ブロッカが尠くなると、ウガンダ蜂の繁殖も亦減少し始めるといふ現象だつた。

ウガンダ蜂はブロッカといふ食料が多い處に繁殖し、食料のブロッカが尠くなればウガンダ蜂も生存繁殖されぬといふ生物闘争の生存理法をカフェ栽培耕地に應用し、カフェを多量収穫に到らしむる事であつた。

東山農場のカフェ・ブロッカ撲滅によつて、カンピーナス地方のカフェー耕地はブロッカの被害より救われた。

二、邦人と聖州棉

アマゾンの伝説には「サカイブ（Sacaihu）が人間の創めで、其の息のライル（Rairu）が棉をうえ、地の底から人間を釣りあげた」と言うのがある（市毛孝三氏のブラジル詩情より）アマゾンには棉があつた事を意味している。又アマゾン州のマラカス族土人の群居の廃址を見ると、野生の棉を小

屋の周囲に植えていたとアマゾナス州の郷土史に記録されている。

伯国には北伯にも南伯にも、自然生の棉を土人が利用していたと確認されている。

ポルトガル移民の移り来た頃は、自然生の棉の繊維を原料として、土人は簡単な釣床や縄や網や織物さえ製していたと (Hans staden の Viagem ao Brasil) にある。それによると、ブラジル発見の當初、サン・パウロ州海岸に難破した際、サン・ビセンテ海岸の土人と数年間に亘ってフランス人の刃物、斧、鉄、櫛等と、土産のパウ・ブラジル、棉、及び羽毛の装飾品や胡椒等と物々交換していたことを書いてある。

其後ポルトガル植民やスペイン植民は、パライヴァ・グアビラ・イタペセリ・カ・キタウナ其他に棉作と小麦栽培に従事していた。當時普通アローバ四百レースの棉相場場で、高値の時は九百レースにもなったとある。茲に資本主義の利潤生活面の経済が現はれた。サン・パウロ村にも土人を使役し、土人にも強制して耕主が雑穀と柿を栽培させていた史實もある。

降つて一、六〇〇〇年の (Dialogo das Grandezas do Brasil) の中に広大な肥沃地に綿花を栽培し、簡単なる棉繰器で精棉にし、一アローバ三ミルレースで棉の売られたことが記してある。

ブラジルでは棉は貧乏人の作物と呼ばれていた時代があった。

甘蔗の園砂糖製造が好景気な時は誰も棉作しなかったが、砂糖製造が不景気になると、そこからあふれた農人が棉作に轉じたそれで棉は貧乏人の作物と言ったものであった。

當時、伯国のポルトガル植民の衣服地には、欧州のラシヤが重に輸入されていた。

英国の紡績器械の發明以来、棉花栽培の利益は、伯国にも大きく響いた。

一七六四年頃から、英国紡績器械の能率は百倍加し、一七

七六年の北米独立戦争は、北米棉が英国其他欧州へ検出不足からして、伯棉の需要が多くなり、値を十五倍にもした。

一八六四年、米の南北戦争は、北米棉が欧州へ、輸出減となり、伯棉が急激に需要され輸出が増加した。

サン・パウロ州の至る處に棉花栽培が急激に勃興した。サントス港へ棉花を積出すので、クバトンの坂を下る棉花荷の駄馬隊（トロツパ）は、船腹の不足を感じしめた位であつたと (Relatorio de Provincia de S. Paulo) は語っている。

サンパウロ州の棉花栽培は當時、ソロカバ、イタペチニンガモヂ・ダス・クルーゼス、奥地のフランカと言う方面が旺盛であつた。

家内工業はその地方で粗末な織物を作っていた。その織物はパラナ州のクリチーバや、南大河州地方に現金売して輸出された。

一八六七年から一八七六年の十年間は、サン・パウロの棉花は、英国及欧州に向つて輸出旺盛時代の一劃期であつたが、其頃から棉作者等はクルケレの被害に苦しんでいた。

家内織物工業を圧して初期の綿工業は、一八五八年にイツーに起つていた。(Coronel Luiz Antonio Anhaia が Sao Luiz) と命名して工場を建設した。ソロカバにも綿工場が (Manoel Lopes de Oliveira) により建設された。南米に英国から輸入された最初の織物機をソロカバに据えた。その汽罐はサントス港に上げられ、トロツパや数十頭の牛に曳かせてソロカバに運搬されたが、四ヶ月かゝつた。

その道々を修繕補強するに百人からの奴隷が毎日使役されていた。北米の南北戦争がやみ北米棉が英国や欧州方面へ輸出され始めると、その影響で、伯棉の輸出がやみ、聖州の棉花栽培は一時に衰退した。その頃聖州は珈琲樹栽培の旺盛時代に入っていた。

日本移民の棉作史

日本移民が棉作を始めたのは、第一世界大戦の勃発後三年目の一九一六年、第一モンソン植民地の蔵力哲夫が創めた、其翌年から同植民地の邦人廿七家族、及び第二モンソン植民地の邦人三十餘家族が全部雜穀作より棉作に轉向した。アバレー方面に邦人借地棉作が起ったのは、一九一八年以後であつた。

第一第二モンソン植民地に棉花会社の棉買代理人 (Cia. Scarpa da Algodao Votorantin) をブーロに乗せて棉の畑売前契約をさせたのは第二回佐賀移民の第一モンソン植民者山口三之助であつた。会社は百アローバに対し二百ミルレースの売買契約金の前拂をした。一アローバ二十ミルレースに仕切り、他会社が同値アローバ二十ミル支拂う場合同会社はアローバに対し二百レース増で支拂ふ口契約もしてゐた。初年度は、第一モンソン植民地も第二植民地も、一族平均四域の棉を栽培していた。開拓後雜作五、六年の畑とて、棉花栽培には好適の地、一域に二百五十から三百アローバ生産した。第一モンソン植民地より第二モンソン植民地の方が棉作に適して、一域より四百アローバ産出した處もあつた。

非常な棉作好景気で、開植以来唯雜穀物栽培で恵まれなかつた植民者等は、この黄金の流れ込みに（當時未だ棉を指してオーロ・ブランコとは稱さなかつた）宇頂天になり、棉畑で、水の代りにピンガでなく、ヴィニヨをのみ、家族総和で唄いながら棉摘んだ。

一九一八年にはノロエステ線方面にも棉作が始まつてゐた。（ノロエステ線では重に珈琲栽培に熱を上げかけていたがその年九月は有名な大霜害の年で、珈琲樹は殆んど一時枯れてしまったので棉作に轉向した）が、クルケレーの被害を夢にも知らぬ棉作者であつたので、クルケレーが発生しても駆除薬も噴霧器もなく大狼狽した。邦人商人中クルケレー駆

除藥ベルデ・パリスと稱して、青き着色石灰を一キロ二十ミルにも売込み、大もうけしたのもあつた。

ノロエステ方面では一域の生産高、平均百五十アローバ位であつた。

テーラ・ロツシヤ地帯のモヂアナ線には棉花景気はなかつたノロエステ、パウリスタ、ソロカバナ、ドラデンセ、アララクアラ各線のテーラアレイア（砂上地帯）へとモヂアナ線の米作日本移民が棉作へ棉作へと轉向した。棉作好景気により日本移民は地主となつたものが相當あつた。

霜害の翌年の棉作収穫は、前年度の収穫より大収穫を毎度していた。

聖州棉花総收穫

一九一八年度（大霜害年）	一三、九一三、三三四	アローバ
一九一九年度	四九、六一六、九一〇	同
一九二三年度（霜害年）	一三、五九九、三二五	同
一九二四年度	二五、三七一、〇〇〇	同

霜害の年は珈琲栽培の労力を棉花栽培へ向け珈琲樹間に棉花栽培面積の増加と共に、霜害の翌年度はクルケレーによる被害も尠いから棉花の大収穫と見られている。

一九一八年度のノロエステ線方面の棉値はアローバ五ミルより七ミルレース位の仲買商人からつけ込まれていた。

一九二三年度のノロエステ線日本人棉花収穫量は約八万アローバで、一アローバ値十四ミル平均とみて、日本人の棉花収入は、一千百二十コントスとなる。

棉連作の結果収穫減で第一モンソン植民地の日本植民は、周囲の棉作好適地へと借地して轉任していた。

第二モンソン植民地の邦人家族は益々増加し五十三家族となつた。

同植民地の地質が棉作好適地であつたからであつた。セルケラ・セーザル及アヴァレー地方は其頃日本移民の借

地棉作中心地で、二百家族近く居た一域百五十アローバ乃至二百アローバの収穫といはれていた。

此界限の棉作好適地はサンタ・クルーズ・ド・リオ・パルド地方で、一城四百アローバ生産すると稱されていたが、マレツタ地帯であつた。ソロカバナ線奥のブレジョン及ヴアイベン植民地方の日本人も棉作に進出した。

一九二七年度ノロエステ線日本人棉花収穫高は六二、六三一アローバとなつていた。

一アローバの値十五ミルと見積り、一千コントス近くがノロ線棉作日本人の収入であつた。

一九二九年度各線左の如き収穫を上げていた。

ノロエステ線	三、九一〇アローバ
パウリスタ延長線	一一、三〇六 同
ソロカバナ線	一八一、九三七 同
線合計	一九七、一五三アローバ

以上の棉花収穫高よりみて、日本移民の棉花栽培の地域は、ノロエステ線（珈琲栽培地帯）よりパウリスタ延長線へ、ソロカバナ線へと大量に移動していた。

當時棉作者はおもに借地農で、借地料は日本人棉作者が段々せり上げ、一域百ミルから二百ミルレース位まで拂つていた。

一九二九年十月ニューヨーク取引所の崩壊が、伯国市場にも大きく響いて聖州珈琲値の大惨落を招致した。棉花値も亦、珈琲値と同じ運命を共にしたが、世界不況の恐慌は、伯国棉花の輸出数量を一時尠くした、この頃より聖州棉花の品質は、統一されて栽培され出していた。

一九二四年の伯国革命直前、マンチエスターの萬国紡績協会技師が、伯国に派遣され、北伯から聖州の棉花地帯を一巡したその際の視察談に、聖州の棉の品種が甚だ不揃であると評した。こゝに聖州農務局の反省と努力が始まり、當時七十

五種類もの棉雑種栽培状態を統一し、品質改良を計画した。以後種子の精選淘汰をなし、テキサス・ビックボール及エキスプレス系の二種と撰定し、カンピーナス農事試験場に於て、改良に改良をかさね、多量の種子を増収し、繊維の長さも二八ミリ乃至廿九ミリに固定したものを、一九三二年度よりの種付にし、聖州棉花栽培農家一般に、農務局指定以外の種子は播付を禁止した。

それから收穫棉は、サン・パウロ取引所内に於て鑑別を行い総て格付し、品質の改善を行つた結果、栽培面積も拡大し、聖州棉の收穫高、品質は俄然向上した。一九三四年度の收穫量一〇二、二九五、七八九キロに対する繊維の格付は、長さ一二十六ミリから二十八ミリ物が、全量の〇、二〇% 同 二十八ミリから三十ミリ 物が、全量の九九・七一%

同 三十ミリ以上の繊維は 〇、〇九%となつたと農務員は発表した。

聖州棉の繊維の長さが殆んど一定して、全世界の紡績工場の機械に適する棉となり、聖州棉は世界消費市場に登場した。

聖州の珈琲産業面と棉花産業面とは、常に反比例して好景気を現はしていたが、茲に聖州棉産業は、珈琲産業と独立した進展産業となつた。

一九三三年度、在伯日本移民廿五周年記念鑑に現はれている聖州日本移民の棉栽培收穫量は一、六四五、三三五アローバで聖州棉收穫の九・五%を占めていた。

當時借地農の借地料は一城當二〇〇ミルより三〇〇ミルレース支拂っていた。

日印会談決裂し、英国經濟ブロックは日本の生産綿布と原料棉買込拒絶同様にした、日本の棉花當業者等は印度産の代棉に苦慮していた。そうした母国の棉花苦悩に対し、一九三四年度聖市に於て “農業のブラジル”誌を発行編輯せる佐藤常蔵は、在伯邦人に斯く棉作奨励をしていた。

“日本のみで毎年三百万梱内外の原棉を消費するが、ブラジル棉の生産高は最近数ヶ年の平均では四・五十万梱そこそこである。これを悉く日本に輸出するも、全需要を充すには猶二百五十万梱不足である。

仮に四十万梱の原棉を日本に供給出来るとすれば、其全額は實に邦貨七千万円に上るのである。

聖州精棉が輸出綿として世界消費場に現はれると、日本の朝野の注目を惹いた。日本紡績の原料綿が、印度綿や北米綿に縫っていないともよいからである。斯くて日本の資本家が聖州棉に觸手を動かし始めた。

聖州棉供給資本家も、日本に向け觸手を振り出した。聖州側よりは、日本移民棉作関係資本家のドットル・オルランド・ブラドと、中西周甫と、神戸駐在の伯国領事ラウル・ボツプとがコンビして、日本側の岩井尊人、津田信吾等に當りをつけ、中西の持ち帰った聖州綿の標準見本五箱を関係紡績会社工場にて實地成績檢證の結果、日本紡績機に好適と確認された。

斯くて一九三三年七月十九日、第一船としてアリゾナ丸にて六十六梱が、アルメイダ・ブラド商会委托販売の形式を取り、神戸向け積出された。

第二船として同年八月二十三日ブエノス・アイレス丸積六〇梱、これは関西に於ける大日本紡績連合会の試験的使用に、聖州農務局がサン・パウロ総領事館へ、幹旋方申請したものであった。第三船はアラビア丸積三〇〇梱、三井物産の注文品で、クラデリオ・ノウアエス商会振ひであった。

問題は日伯両国間の資本利潤如何となり、運賃保険料が再検討され、大阪商船は暫定割引運賃を発表した。

“日本市場へ聖州棉の進出を容易ならしむるため、現行運賃に対し、六割四分の割引を決定した。即ち四十呎立方メートルに対する運賃は、米貨四弗六十仙を微する事となり、北米棉の穫取運賃との間に於ける値開きを縮めた。

一九三五年勿々、母国朝野に準備された訪伯經濟使節団

は、駐伯日本大使澤田節藏（日印棉花会商當時の日本総代表）の斡旋宜しきを得、五月十六日伯国首府に到着した。一行は日本棉業界の一流人物と、技術経験者であつた。

在聖州日本移民大衆は、母国へ輸出する棉ならばと、棉作へと熱と努力とを傾注した。

一九三五年度、日本人の棉生産高は、聖州生産総高の五〇%を收穫していた。この生産費アローバ當り八ミルレースから十ミルレースであつた。

一九三五年度の聖州棉種子の配布量は、一九三四年度の倍額になつていた。

一九三五年度の北米棉は減収と報ぜられた結果、聖州棉はアローバ十三ミルレースが相場値であつた。にもかゝらず、日本が聖州棉を大量に買つけると噂飛ぶや、十三ミルが遂も値上りし棉出盛りの三ヶ月間はアローバ二十ミルレースの相場を飛び越えていた。

この値は需用供給相場値でなく、聖州だけの番狂はせ値であつた。

東洋棉花社員島清二郎、日本棉花の東義雄等は經濟使節団到着前に來伯し、聖州棉の買付に、代理店の設置に奔走した。資本金二百万円の日伯棉花株式会社が創立した。神崎昌太郎が來聖し、専務取締役原田立之祐も來聖して、"ブラスコットリ"の設立をみた。同社はジュゼ・テオドロ駅、アルバレス・マツンヤード駅、マリリア駅、ビリグイ駅に、繰棉工場を新設し、一九三七年度より收穫棉の買付をした。

東洋棉花系の南部棉花は、各地主要地帯に繰棉工場の賃借や特種契約をした。伊藤忠はアンダースン・クレイトン商会と協定買付けをした。一方外国資本系棉業会社も、サン・パウロへ進出した。茲に伯國小資本棉花商は圧倒され出した。伯国の政治面の一部は國產資本擁護に乗出し、棉花國有案や、外国棉花商社のナシヨナリザシヨンが叫ばれはじめた。

當時伯國政治傾向は、國際資本協調主義より、バルガス政府の國家主義へと轉向しつつあつた。

聖州農村が棉栽培に浮かれ出すと、ソロカバナ線の鉄道局は「オーロ・ブランコ列車」と客車に命名したりした。農家は棉をうえれば、もうかりミリーヨやフェジョンや米をうえることが至って尠なかつた。これがため農産物の生活必需品が不足し出した。因つて米も豆もミリーヨも値が暴騰、一般社会は必需品の不足と高騰に不安を起し聖州農務局は憂慮して一般農家に左の如く警告した。

“今年早魃又は棉作増加に伴うて、食料品農作物の栽培が著しく減少し始めた。聖州の食料品自給の点から遺憾である。生活上由々しき社会経済問題を惹起する怖れがある。農家は珈琲、カンナ、マモナ、棉作をなすと共に、米やフェジョン、ミリーヨの穀作をも栽培收穫する事を期待する。聖州の地は穀作に適しているので、値段にも十分酬いられよう”

聖州内に勃興する産業上、労力の不足が起きた。斯くて労働賃銀が一斎に上り一般労働者の生活水準の向上はこの時代に著しかつた。ヴアルガス政権は労働者の保護政策を実施し最低賃銀を制定した。

在聖州日本移民の棉作收穫高が聖州棉作総收穫の半分以上にある成績に鑑み、在聖市日本総領事館は「棉作と金融」に關し邦人棉作者の懇談会を開催した。

一九三六年八月廿五日、廿六日の両日の事である。総領事館勸業部の江越技師は各線の棉花植付面積を、州農務局の種子配布量から計算し、全州棉花植付面積を三十九万八千三百七十七域としていた。

懇談会の結果、棉作金融に關する案が日本側棉花資本側と協調五人組制度の青田貸の提唱が實施された。これは相當の成績を上げ、一九三八年度九月第二回棉作懇談会に於て、青田貸も重疊式五人組制度への實行へと進んだ。州當局も参列し日本棉作者等は棉花連合会を結成した。

日本棉花資本の進出前は、棉作者の金融は地方のアルマゼン経営者の低利貸付、或は出資者の高利によつていたものであつた。

一九三七年一月、大阪商船会社は突如世界運送界の傭船料値上げに到らざりし一九三六年の棉花輸送で赤字十七万円の埋合のため、左の如き運賃値上げを発表していた。

欧州行 (四〇呎立方) 日本行

一九三六年 五弗五九仙 四弗五〇仙

一九三七年 七弗五〇仙 八弗五〇仙

これはOSKの暫定格安運賃をやめて独占的航路にも等しきを利用したものであつて、各棉花会社は一時抗議したにかゝわらず、効果はなかった。

一九三七年度聖州棉花收穫は二億萬アローバを突破していた

一九三八年度の総收穫棉は二億五千万キロ見當と発表されたが(同年三月聖州棉花格付所発表)対独通商に、伯国銀行為替課が限定額に達したとの理由で、マーク求償の対独棉輸出禁止を聲明し、一方対日輸出に日支事變の進展と共に日本が輸入統制の結果伯棉一ヶ年の日本市場購入高八十一万梱の予定、で在留邦人棉作者の生産高を百五十万梱と見積り、その半額を日本の棉業界で引受くる建前とされたが、その後池田蔵相の聲明で漸つと幾分聖市取引市場は活気づいたものとなり、二十万梱の許可買付で終り、その後対外投資は殆んど不可能となった。それでも一九三九年度上七月に於ける、日本への棉積出は三二、二三七噸價額一一七・一九八コントスであつた、独逸への積出棉は六一・六四七噸で独逸が一位を占めていた。

一九四一年末、日米開戦となった。在伯日本人コロニアの空白時代が始まった。一九四七年八月十三日、フォリヤ・ダ・マニアン紙によれば、(伯国農村協会発表)在聖日本移民の棉花生産高は、聖州総生産高の三十五ポルセントを占めていと発表されていた。(史料の或分は中西周甫のものによる)

三、蔬菜業の沿革

「北米では日本移民は蔬菜業に白人より特技をもっているのでえらく成功しているそうだな」とは今から四十年前兵庫縣よりの自由移民鞍谷伴三郎家族の父誠一（五十四才）が笠戸丸船中で、皆と話していた。上陸後彼は蔬菜業栽培の希望を實現すべく、移民収容所を出る際に移民の草分け鈴木貞次郎に依頼し、モウカ区イポドロモ街競馬場前に三段ばかりの小舎つき畑（黒土）を月廿ミルレースで借地した。それに参加したのは彼の家族でなく、長野自由移民の独身青年矢崎節夫であつた。矢崎は畑に大根種子を蒔いて鞍谷と別れた。折柄雨季であつたので蒔いたものは皆威勢よくはえ出た。大根、ホーレン草、蕪、白菜と鞍谷はそれをセスタに入れてブラスの街から街を毎朝売り廻つたが、その頃、伯人は大根も蕪、白菜もホーレン草も、蔬菜としておめにかゝるのは初々で「オケー・エ・イツソ」と珍らしがりはするが、買つて喰うものは尠かつた。葡語の話せぬ鞍谷老人は唯黙々として街から街を提げ廻つた。それから二年、彼は第二回移民の到着した頃、心身共に疲労し盡して、精神異状者となり、セスタには青物でなく、街上のガラスの破片や紙片を拾ひ集めて廻り、後にサンタ・カーザで亡くなつた。

その頃聖市は三十萬餘の都会であつた。周囲には彼方にも此方にも蔬菜畑は多かつた。葡人、伊人が蔬菜栽培者であつた。今のモーカ街の裏街一帯も野原であり、カンブシー寺院下も野原で蔬菜畑が處々あつた。今のお茶の水橋の下は市のゴミ棄場で、その上方には蔬菜畑があつた。

當時聖市民の蔬菜味覚はキヤボであり、コーベ・マンティガであり、ジローであり、シコーリヤであり、マンジヨカやバージェン、ボブリニヤ、セノーラ、ピメントン等であつた。その頃狭いサン・ジョン街の坂下中央に、小さな平建煉瓦屋のメルカードもあつた。

カフエ耕地流れの日本移民が聖市郊外に蔬菜畑を始めたのはサンタ・アンナ街道墓通り、ラッパ方面、モロンビー方面等であった。

第一回、二回、三回移民の都会集中労働者が六、七十家族も散在すると、日本人家庭向の大根、蕪、白菜、水菜、ゴボウ、茄子、胡瓜などが相當捌け出した。キヤボやピメントンは漬物にせぬ日本人であった。

青々した大根、水菜、ホウレン草、フグン草、蕪、白菜等日本移民が喰うにつれ、隣近邊の伯人、外人も一度試めし、二度試めす間に味を覚え、常用し始めた。大根、蕪、茄子、胡瓜、白菜、レポーリオ、ニンジンと清鮮な蔬菜が、聖市民の嗜好に投し出したのは一九二〇年頃からであつたろう。一九〇八年第一回移民の渡伯した頃の聖市にトマテはあつた。それはトマテミカドであつて、大型の美事なものであつた、主に南伯の生産輸入品で、一般聖市民の食用品ではなかつた。當時聖市民がトマテを消費するものは親指大の野性型のものであつた。聖市民五十萬に甘まいトマテの供給をし出したのは、イタケーラ駅に日本移民のトマテ生産が始まつて、それが各方面の日本ソサイ栽培者に生産され出した一九二四年頃からであつた。

聖市人口の膨張につれ、蔬菜の消費量は益々増大したが、街が拡張されるにつれ、安價に借り入れられた蔬菜畑も同業者間の値上げ競争も多くなり、借地料は高くなつた。

聖市街中の蔬菜畑の姿は消え、市外の蔬菜畑も段々と尠くなり、周囲の道路が改善され、鉄道列車の運轉回数も増し、カミニヨンの交通も発達すると、蔬菜畑は聖市近郊から段々遠方へと移つた。サンタ・アンナ蔬菜畑がカシヨエラ方面へ移り、フレゲチア方面へ、エメンボイ、サン・ミゲルへ、オザスコへ、サン・ロツケへ、イタケーラへ、スザノへ、モヂへと拡大した聖市から奥地だと思はれたソロカバや、モヂが今では聖市の近郊となつてしまつた。蔬菜の大量生産が始まつても聖市の需要は充分に消化し、供給不足で毎年蔬菜の

値は上る一方であつた。然し聖市附近の小規模蔬菜園は近郊の大量生産と競争出来なくなり、没落してしまつた。蔬菜栽培初期にサン・パウロ郡内に於て日本人蔬菜栽培者の地主は一人もなく、皆借地農であつた。尤も隣のコチア郡にはバタ栽培の日本人には、即に一千人近く四十域の地主となつていた。

邦人の蔬菜生産は欧州移民や地元の伯人に先達して常に施肥をした。蔬菜は非常な出来栄えで軟らかくなつた。

奥地のカフェー地帯、棉花地帯の不況から、聖市郊外に轉向した日本移民の蔬菜生産者が夥しく増加したので、さしもの膨張聖市人口八十万も、一九二十七年頃、フレゲジャ方面から邦人が出したレポーリオ、コーベ・フロール等は生産過剰の苦を嘗めたりした。

邦人蔬菜業者は生産物を聖市場に持ち出して、仲介商人に卸売した。一刻も早く帰宅して畑の仕事を急ぐため、毎度仲介商人に値を叩かれ通しであつた。これではいけないと一九二八年聖市の青物市場に乗込んで蔬菜の仲介卸売買を外人なみに始めたニッポン人があつた。イタケーラの山中から跳出した今村宇八であつた。日本人蔬菜生産者は多く彼に卸売したので、外人仲介商人から相當いぢめられた。

カンタレイラ街とイタプラ・ミランダ街に圍まれた三角地に設けられた（今の中央メルカードの出来上らぬ前）蔬菜市場に伯人、外人の市場人の気の荒い澁刺たる中に交つて雄々しくやり出したが、後、健康を害してしまつた。一九二九年この青物市場に日本人として蔬菜売板台を初占めたのは田場ウシであつた（笠戸丸組）彼女の後から日本男子もぽつぽつ板台に割込んだ。

その後邦人トマテ栽培は、ともすれば生産過剰に陥り、トマテ加工（マツサ・デ・トマテ）に向井捷次郎など熱を上げていた。

當時は聖市郊外欧州移民の蔬菜畑は邦人業者の大量生産に完全に圧倒されていた。日本人の蔬菜生産高はトマテばかり

でなく各種類に進展していた。バタタ勿論、ペピーノ（胡瓜）に莢豆、豌豆、茄子、ピメントン、白菜、レポーリオ等々、又果物界でも苺、桃、李（アメイシヤ）などが他欧州移民のそれに此し生産量でも、質でも、かけぬけて優良品を生産していた。

生産者は仲間商人に卸売するものと、一面消費者へ直接販するものとの二種があった。仲間商人への卸売は需給の原則を無視しての生産者への収入減もあるので、その頃から出荷組合が出来た。これは蔬菜業者にとつて一段の進歩で、出荷の統制も需要に応じてやれる事となった。一九三五年度、聖州農務局の調査によれば、聖州蔬菜総生産高の七〇％は日本移民の生産と発表した。その一部は左の如き価格を上げた。

トマト	七、八〇〇コントス
レポーオ	八〇〇コントス
ペピーノ	三五〇コントス
ボブリンエア	三〇〇コンナス
莢豆	九六〇コントス
エルビリア	一四〇コントス
菜	二五〇コントス
其他	一、〇〇〇コントス

自動車道路の完備と、列車運轉の回数増加とは、生産と出荷を容易ならしめ、聖市より二百キロの奥生産地より運搬して来た。

日本人の蔬菜は聖市市場に、リオ首府市場にと供給された。

一九三九年頃、カンポス・ジヨルドン高原地帯のセノウラ（人参）栽培は、低地帯の出荷期と違い、質も保存に優良とあつて、異状な栽培発展をみせて二、三城の生産量を百数十コントスに売上げていた。

一九四一年より邦人コロニアには、政治的な空白時代が

襲った、この間約五年、日本農民は唯黙々として土に親しんだ。

二百万市民の需要する蔬菜供給部面に於て一九四六年度聖州農務局は蔬菜全産額の百分の七十は、この黙々として働く日本蔬菜生産者の收穫物だと発表した。

一九四八年度聖市中央青物市場に於ける日本移民生産者の出荷量及價格は大略左の如く計記されていた。

一九四八年度聖市中央青物市場

コロニア日本蔬菜出荷数量と売上額（大畧）

品	市場出荷總量と 日本人との比較	出荷売り上 總量	最昂値	最低値	売上總額
鶏卵	七〇%	二〇〇、〇〇〇函	打三、七〇	六五〇	六〇、〇〇〇
リモン	五〇%	三九〇、〇〇〇袋	三五〇〇	一〇〇〇	七八〇
トマテ	八〇%	六〇〇、〇〇〇函	二五〇〇	六〇〇〇	六九〇
ペピーノ	九〇%	三三〇、〇〇〇函	一二五〇	二五〇〇	二二〇
アボブリニア	八〇%	三三〇、〇〇〇函	八〇〇〇	二〇〇〇	一、三五〇
バアジエン	八〇%	三五〇、〇〇〇袋	二五〇〇	三五〇〇	二八〇〇
エルビリア	八〇%	三三〇、〇〇〇函	七〇〇〇	三〇〇〇	一、五九〇
コーベフロール	六〇%	一〇〇、〇〇〇袋	三五〇〇	二二〇〇	二〇〇〇
ピメントン	五〇%	三三〇、〇〇〇函	三五〇〇	一五〇〇	七八〇
ベリンジエーラ	六〇%	三三〇、〇〇〇函	九〇〇〇	二〇〇〇	一、三八〇
レポオリオ	七〇%	九〇〇、〇〇〇袋	四五〇〇	一五〇〇	二、二五〇
カラ	七〇%	二〇〇、〇〇〇函	—	—	九〇〇
バタ・ドーセ	四〇%	二二〇、〇〇〇袋	八〇〇〇	二五〇〇	八〇〇
マンジオキーニャ	六〇%	二二〇、〇〇〇函	五〇〇〇	三〇〇〇	八〇〇
ペセゴ	一〇〇%	二二〇、〇〇〇函	六〇〇〇	二五〇〇	五、六〇〇
ウーバ	三〇%	七〇〇、〇〇〇函	一〇〇〇	三〇〇〇	二、一〇〇
アメイシア	九〇%	二二〇、〇〇〇函	五〇〇〇	三〇〇〇	六〇〇
アルファセ	七〇%	九〇〇、〇〇〇函	—	—	九〇〇〇
七ノウラ	七〇%	三三〇、〇〇〇函	—	—	一、五〇〇

（三〇打入）

コントス

ナアポ

九〇%三〇〇〇東

三〇

合計

一〇一、三七〇

聖市中央メルカードの蔬菜市場には、出荷台が全部で四百台あるが、その中に日本人蔬菜出荷者は二百八十台を占めている全数の七割である。

四、日本人と米作

日本の家族農業移民が、珈琲耕地の労力補充に渡伯し出したのは、奴隷解放後漸つと二十年経った頃であつた。この頃までは、各耕地には、尚封建制度の残骸を保つていたコロノの食料は共耕地の所属アルマゼンより買入れさせ、コロノの生産物の農作物も皆、そのアルマゼンに売渡す制度であつた。コロノ家族農の生産物も、漸つと半歳の一部食料をその家族で自給させる程度の土地しか耕作させなかつた。

日本移民は柳行李を一個もつて渡伯した。その行李の中には食物は殆んど入れてなかつた。それで耕地到着後、アメリカがその擬手を以て食物を捕らえる様に、日本移民も最初は単純な生活行動から始めた。

エンシヤーダの柄の上げる技を先づ男性は覚えた。フエジョンの煮方を女性は覚えた。これも生産面への活躍の基礎であつた。

最初日本移民が珈琲耕地に配耕された時、耕地のアルマゼンに日本移民の常主食品の米が不足し、購入分配に肴やかさされた耕地の周囲に眼を放てば、稱作に好適した土地の「あた」ら草茫々に放任されているに對して、先づ触手を動かし始めた。由来米作に深い伝統をもつ日本移民としては、一種の本能的な行動ではあつたが、米の生産がこの地では日本内地のそれより生産費が尠なく、しかも收穫が大であり、開拓地面にも何等制限のない處から、日本移民は、吾も吾もと大規模の米作に進出しはじめた。

日本移民が米作に進展し始めた一九一四年頃までは、伯国人の需用米は尚、輸入に仰いでいた。印度、ラングーン、ジヤバ方面から、珈琲サツコ製造の原料品ジュツタと共に、大量に輸入されていた。

モヂアナ線珈琲耕地の邦人コロノは、半独立、借地又は地主と收穫米歩合の栽培をミナス州三角デルタのコンキスタ方面に始めた。當時籾一俵（六十キロ入）値は七ミルレースで売れた其生産費は一俵一ミル五百から二ミル位であつた、との史實をのこしている。

一九一五年。パウリスタ線のリンコルン駅近きリベロン・グランデ河畔の湿地に稲作を始めた邦人農家二十五家族、籾蒔き付面積初年度は十二域で、四百俵收穫した。收穫期に家族人員大抵マレツタにかゝつた為めの收穫減であつた。

當時籾一俵九ミルレースで売れた。生産費が一俵三ミルレースと史實にのこつている。

一九二五年には籾値の最高一俵八〇ミルレースで、一家族二千俵收穫していた。その頃同植民地は東京植民地と稱し、三十四、五家族の集団地であつた。

一九一二年に開拓の鉞をおろしたイグアツペ植民地も、愈、米の大量生産地となつたのは一九一五年以後である。

ジュキア沿線でも沖縄移民により米作が盛んになった。

この頃、サンタ・エウドシア耕地に、安田良一が監督として日本移民インテリ独身青年組が米作に進出していた。

伯国の米の輸出はその頃から始まつている。一九二二年頃には、年々七、八万コントスの米の輸出国となつていた。輸出先はアルゼンチン国及ウルグアイ国方面であつた。

一九二三年度、半独立農の多いノロエステ鉄道線の籾の輸送高は、六七四、四六〇俵とされていて、その八割は日本移民生産高とみられていたが、越えて一九二七年度聖州新報社発行のノロエステ年鑑を見ると、一九二六年度邦人の籾生産高は、減少して二一四、九八〇俵となつている。その頃同線在住の日本移民はカフェ栽培の全盛期に入つたので、籾收穫

は珈琲畑の間作物としてやった。且つ、数年米の連作で地力も減退し、一方では棉花栽培が盛んな年でもあったので、米単作者が減じ収穫高が減じていた。それが一九二八年度の同社三線年鑑にはノロソロ、パ延長三線邦人籾総収穫高五三八、七〇八俵となつてゐるが、これは當時、棉値が下落して、米値が出て、棉作者が米作へと多々又轉作してゐたからである。

一九二七年度から、ジュキア線には日本総領事館の斡旋で、沖繩縣人会長赤嶺新之栄が種籾オンジュラス種を擔當蒔つけ、一九二八年度から、ジュキア全線米作邦人に種籾として配布した。

生産高は、植民者の食ぶちを差引、百九十三万瓩（約三万二千俵）で、邦貨にして二十九万五千円と計上されてゐた。

一九三〇年度、モヂアナ線コンキスタ方面の邦人籾生産高は二千萬瓩と計上され（三十五萬俵）、同方面の籾生産総高の百分の八十を、日本移民が生産してゐた。

一九三三年度、在伯日本移民廿五周年記念鑑によれば、聖州に於ける一九三二年度日本移民の籾収穫総高は、百三十萬俵強で、各線別に収穫高を指せば、左の如くであつた。

鉄道線名	家族数	籾収穫高（俵）
セントラル	六一四	萬五千
アララクアラ	八一七	三萬
ドラデンセ	一〇五	六千
パウリスト	六四二	二萬一千
ソロカバナ	三、三七二	一五萬
ノロエステ	八、九九八	五五萬四千
パウリスト延長	一、六六八	一七萬三千
モヂアナ	四、〇〇〇	一〇萬
サンパウロ		
サントス	二、八五五	一四萬一千
ジュキア		

これにパラナ州、北伯諸州等邦人粍生産高一萬俵と見積り、全調査遺漏温一割を加へて、

粍総合計 百三十萬俵強であり

家族総合計 二萬四千家族

セントラル線に日本移民が米作を展開し始めたのは、該サプカイア米作地を、聖市の邦商藤崎商會が、安田と共同で購入し水田米作に乗出してからであつた。

その後東山農事株式會社が同サプカイヤ米作耕地及其隣接耕地を購入合併、粍種子を日本より毎年輸入、移植式水田の耕作法で、米の増収を計つた。こゝに聖州に於ける水田米耕作の上に、一劃期時代を彩つた。東山米として聖州市場に供給された一九三八年度、バウル日本領事館管内の邦人粍生産総高はノロエステ線四十五萬俵、パウリスト延長線で二十二萬俵、合計六十七萬俵を上げていた。

伯国米の重なる生産州は、聖州と南大河州との両州である。聖州産米は重に伯国内地需用米に供給消費され、南大河州産米は重に輸出米に供給されている。南大河州米の種粍は日本から海興が斡旋した。一九三五年度、在聖州日本移民の生産米総高は、聖州總生産高の百分の八十と評價されていたが、その後日本移民の農作物の栽培傾向は、母国綿花資本の伯国進出に協調して、米作から棉花栽培へと大轉向してしまつた。

一九四〇年迄の聖州棉花産業界の賑やかさに比べて、米生産界は凋落していた。

一九四一年末以後の樞軸国對連合国世界大戰は、在伯日本移民を政治的に空白時代にしたが、この空白時代にも、日本移民の米生産面は、聖州總生産米量の二割を供給していると、伯国農界側に發表されている。

五、バタタ（馬鈴薯の栽培）

日本移民のバタタ作りの始めは別項述べた如く、一九一四年頃から、コチア村であり、ピーラ・ジユケリであり、タイパス山麓であった。開拓最初の一、二年の間は「作れども金になざらり」の恨多かつたが、今見様の生活に曳づられて、明日のバタタをうえていた。一俵七ミル位の値であつたと、鈴木季造（モイーニヨ・ベーリオの開拓者）は述懐している。作つたバタタが儲かり出したのは、堆肥を使用し出してからで、一九一七年、コチア村のバタタ栽培家族一般が、オザスコの屠殺物肥料をイモ畑に使い出してから、本格的なバタタ栽培が緒についた。

（肥料史参照）

バタタの生産史は、肥料の産業史と並行している。それが聖州日本移民のバタタ産業史である。

コチア、モルンビー、ピーラ・ジユケリ、タイパス方面のバタタが、（種薯は聖州産から、リオ・グランデ・ド・スール種となり、オランダ国種薯となった）聖市市場を賑はし始めた一九二〇年前後は、ノロエステ線方面の日本移民は半棉作と、カフエ栽培に熱中していたが、ソロカバナ線の奥日本移民はバタタ作にも進展していた。一九二三年度、北西年鑑によると、バイヴエン植民地、ブレジョン植民地から、日本移民の薯が一千俵三千俵と生産記録がある。

一九二六年頃には、コチア村百家族は卅台のカミニオンで、ピニエイロス町の協同薯置場へ、バタタを運搬していた。耕地面積は三百五十域位あつた。その頃地価は既に騰貴して普通三コントス、矢野升治は一域六コントスで購入したとなつている。バタタ栽培者の間に、肥料と病虫害の研究、種薯の撰擇が盛んになり出していた。當時種薯値は一俵（六〇キロ入）五十ミルから七十ミルの好値であり、コチア方面から十萬俵産出とあつた。五千コントスの売上げ高であるが、當時、肥料代も已に数百コントス消費していた。

コチア街道筋の丘に近見正規の煉瓦家屋が工費四十コントスで建てた。バタタ産業史の産む文化面の一つであつた。

コチア村のバタタ生産者等が約十年間、苦闘開拓の結果、バタタ生産を主産物として、コチア産業組合を組織したのは、一九二七年九月の事であつた。

同産組合が一九二九年度のバタタ生産総收穫高は、一四〇、二六一俵で、一俵平均値廿七セミル百レース、收穫金額三、八〇二コントス三三〇ミル五〇〇レースとなつていた。

その頃、ソロカバナ線プ・プルデンテ附近にバタタ栽培が盛んになりつゝあつたが、一九三一年五月発行の「農業のブラジル誌」は同地方の生産高を一五〇、四〇〇俵、但し薯値は聖市の一俵十八ミル台に対し、同地方は十五ミル台としていた。種子薯相場は、パラナ種が一俵廿四ミル、アルゼンチン種が一俵卅ミルと記していた。

一九三二年度日本移民の薯栽培は各線別に示すと、左の如きものが現はれていた。

ソロカバナ線	二〇四、〇〇〇俵
聖市近郊	一五〇、〇〇〇
サン・パウロ鉄道沿線	六五、〇〇〇
アララクアラ線	一〇、〇〇〇
セントラル線	一五、〇〇〇
モヂアナ線其他	二、〇〇〇
各線合計	四四六、〇〇〇俵

金額にして一一、〇一〇コントス餘となつていた。斯年コチア産組の総收穫高は九七、二六七俵で、收金額二、二三四コントス、三五五ミルと現はれていた。

一九三六年ブラジル移住組合の十周年記念号の記す處によると、日本移民のバタタ総生産高は、サン・パウロ州の総生産高の百分の三十二を上げていたと報じている。

斯年コチア産組の薯は收穫四十萬俵。價額十五萬七千コントスを突破していた。約二十年間コチア産組のバタタ最高收穫記録は、一九三七年度の五四一、一七四俵で、其年の値は前年の一俵三十八ミル七百レースに対し廿四ミル七百レースと下落していた。各地方のバタタ生産が過剰となつた為めの

値の下落と見做されていた。

一九二九年より一九四一年迄のバタタ一俵平均値の最高は、一九四〇年度の四四クルゼイロ九〇センチボであった。その頃よりバタタの値は、所謂ウナギ上りに上っていた。

一九四一年末より、日米開戦、在伯日本移民は伯国の対日国交断絶に因り、非常時生活に入った。が、邦人農家の生活は平常生活を許されたので、バタタ生産面にも、何等異状なかった。一九四七年五月十日、伯国農村協会は、聖州及其附近に於て日系農業者の農生産物量は聖州総農生産物量に对照して、バタタは、州の百分の六〇を生産していると公表していた。

六、バナナ、栽培の沿革

第一回日本移民がサントス港に上陸して、汽車であるサン・パウロの表玄関の重疊たる山岳を上つて行くとき、両側の湿地帯や谷地には、バナナが既に相當に栽培してあった。それを汽車の窓から挑めた九州移民の男女は「芭蕉が繁つたるばい」と語った。あれが、バナナ株であろうとは知らなかった。

「あれはバナナだよ」と移民の草分鈴木におしえられて、「芭蕉ではなく、あれはバナナだそうだ」と初めて覚えた。

バナナの種類は直接食用種と、料理用種とある。料理用種はサントメ、フィゴ等で、食用種はナニカ、マッサン、オウロ、プラタ等で、ナニカは南洋方面に栽培起源のものであると言われている。

聖州の輸出用バナナ品種は重にナニカ種で、次にプラタ種マッサン等美味と多産なものになっている。

一九一九年には伯国バナナ輸出は既に一、八七六、二九一房を出して、二八五八コントスの金額を産業面に印した。

日本移民がバナナを植えたのは、一九二二年度ジュキア線

の米作行詰りに轉向生産として同線のビッグア駅に今もバナナ栽培を盛に続けている翁長徳であった。

一九三二年度に於ける聖州のバナナ輸出高は、全伯バナナ輸出高の九十%を占めているとサントス港輸出高が示していた。當時はジユキア線（イグアツペを含め）日本移民栽培のバナナ株は二、〇七二、〇〇〇株で、二、一四一、〇〇〇房を輸出し斯價額四、二八二コントスを上げていたと、伯刺西爾時報社の伯刺西爾年鑑は報じていた。

一九三三年度の聖州農務局調査によれば、聖州内の重なるバナナ栽培状況は次の如く示していた。

聖州海岸地帯	七、七九三、六〇〇
イグアツペ	四、〇六〇、一〇〇
サンビセンチ	二、八三六、五〇〇
イタニアエン	二、六五六、五〇〇

その他合計一九、九四七、二〇〇株、栽培土地面積二三、一九二域で、耕地にして九六七耕地。五萬株未満耕地が九〇一、五萬より十萬林迄が四六耕地。十萬より二十萬株迄が十五耕地二十萬より五十萬株迄が五耕地となっていた。

ジユキア線方面の日本移民バナナ栽培者多数は、當時迄は五萬株未満級の耕地に入れられたものであった。その後、古谷重綱が、肝亜国日本公使のお役を清算してジユキア線にバナナ二十萬株耕地を開拓し、藤田克巳が七萬六千林を開拓し、花城清安が拾萬株バナナ栽培者と進出した。

當時バナナを稱してオウロ・ヴェルデと尊稱した。金になったからであろう。一九三八年頃であったが、その頃、五萬株のバナナ栽培へ精進していた日本移民はジユキア線に甘家族を計へていた。

一九三六年度、聖州農務局のバナナ生産統計表に現われる處によれば、日本移民のバナナ生産高は、聖州バナナ総生産高の百分の四・六となっていたが、一九四二年以後の世界第二次大戦の空白時代五、六年間に、日本人のバナナ栽培は、大きな異状あり、一九四六年度、伯国農村協会の発表によれ

ば、聖州バナナ栽培日系農業者の生産するバナナの量は、聖州総量の百分の五十、即ちその半数となっている。最近のジュキア線に於ける日本移民のバナナ、各駅の栽培数は大略左の如くである。

アンナ・デアス駅	約百萬株
ラ・タバレス	百萬株
イタリリ	二百萬株
ペドロ・トレド	卅萬株
マ・ノブレガ	卅萬株
ムサセア	百萬株
ペ・バーロス	五十萬株
ジャラカチア	六十萬株
ミラカツー	百萬株
ビグアー	三百萬株
セードロ	百五十萬株
ジュキア	卅萬株

合計一千二百五十萬株である。

バナナ栽培は、湿沃地と、高温気候と雨量の多い處に限られている。この諸條件に恵まれたのが、ジュキア沿線地帯である。一ケ年一株より二房の収穫あるものとみて、一房の値最近は十クルゼイロスである。デスペーザは其半額五クルゼイロス千二百苗株から一房半の収穫と見積つて、千八百萬房、その價額は十八萬コントスである。

戦前は良品のバナナは欧州へと輸出された。残りは重に亜国へであつた。

第二次世界大戦勃発と共に、伯国バナナの輸出は、欧州へは殆んど途絶えた。亜国へは輸出されたが、戦時中大消費なきため生産額は大減少していた。

終戦と共に反動が来た。一九四六年、七、八年度のバナナ市況は、一時欧州、北米、亜国への輸出に応じきれぬ位の活発さをみせていた。

日本移民中バナナ栽培数の最高峯は花城浦安、翁長徳及中

村京平の各五十萬株である。

七、雜 穀 類 と 邦 人

第一回移民の初期はフエジョンを、母国の小豆（アズキ）並に扱い、砂糖（當時耕地コロノ生活は白砂糖でなく、黒砂糖のみ用いた）を入れて煮、大抵毎日小豆飯の材料にした。

移民女性が外人家庭の料理に氣をつけたしてから、フエジョンの料理を外人式に覚え、豚の脂を交ぜて煮る様になったが、それでも最初は豚脂の料理を知らず、フエジョンの煮えた處へ一サジの豚脂を入れて、それで料理していたつもりだった。が外国婦人の煮たフエジョンとは味が違うので、フエジョンは好きになれなかった。雨期が来た。耕地の他国のコロノ連中が、豆播をやるので、又、耕地のアルマゼンから買えば高い値の豆だから、自給として一、二俵の收穫計画で蒔きつけた。

それから、百何十何かの日本移民は渡伯しても、今尚は日本移民の家庭はフエジョンの煮方を上手にする女性は、到つて尠い様に、日本移民とフエジョンの生産は、米の生産ほど緊密な自家需要のない處から、豆の相場がよければ或農家が多少乗氣に栽培する位の處で、一般的に増産は計られていない。

一九三二年渡伯日本移民廿五周年記念鑑發表に、日本移民の豆の総收穫高は、約二十七万俵（六十キロ入り）であった。それから十五年、日本移民のフエジョン生産は、伯人のフエジョン生産を脅かすような様相はない。

日本移民と大豆（ソージャ）生産も、一九一六年頃より始まっていた。一時マタラゾ資本が大豆の製油に乗り出し、大豆生産面に日本移民の積纏的活躍を要望したが第二次世界戦に禍されて了つた。

ミリーリオ

ミリーリオの生産、これは日本移民としてはフエジョン生産より自家用養豚の需給上、幾分収穫高は上げていたが、栽培面積拡大の割に収穫高も値も大した事ない生産物とて、日本移民の栽培物としては不向きであった。

移民廿五周年鑑に邦人のミリーヨ総生産高は六二七・六〇〇俵とあった。

一九四七年伯国農相協会の調査によれば、聖州のミリーヨ総生産量の一割を日本移民の生産量としてあった。たゞ最近ではミリーリオの対外輸出活発化と共に、邦人農家でも機械化農による大規模栽培をやる者が出てきた。

八、日本人の果樹栽培

イチゴ

日本移民の聖州に於ける柑橘果樹類栽培の沿革は、四十年を経ている。渡伯後廿数年頃よりの史實に適ぎないが、現在聖州の果樹界に珍品と優良品を改良供給して、相當の進出を示している。

日本移民の手にかけた果物を年代順からすれば、先づ苺が一番早い。第一回移民が渡伯した頃、聖市附近の湿地に栽培苺は僅かにあった。

聖州に於ける苺栽培の近代元組は、一九二一年にポルトガルマデイラ島より移民したペドロ・ヌーネスで、彼はモランゴ・プランコ・デ・ポルトガルの種子を大事に持ち渡り、聖市郊外アルト・ダ・ペルヂーゼスの畑に栽培した。最初は種子も環境になれず想わしく熟せず、惨めに生活と闘いつつ、遂にモランゴ・ド・ペードロと唱うる聖州の地に適応

する新種を作り出し、市場に送り出した。

それから十年後の事、セントラル線の各駅のそこ、こゝに苺が栽培され始めた。スザノ駅に萩原喜作がポア駅の外人の栽培していた苺を、一袋一ミルレースで十袋ばかり購ひ帰り、駅前のクワルテロンの一畑を月五（？解読不可）針で借地し栽培し始めた。次で西岡隆一、大島某、山本某も、苺栽培に進出した。彼等の好成績で、各駅の邦人農家の間に栽培が広まった。イタケイラ駅からモヂ駅から、聖市大市場向け出荷された。

一九四六年度、伯国農村協会の調査指数によれば、聖州の苺出荷高は、四十万籠で、生産者全部が日本人だとされている。

一九四八年度、スザノ駅の苺栽培日本人家族数は三百餘家族で、約二十万キロの苺を出していた。キロ最低値が五クルゼイロスであった。

桃

苺に次で日本移民の果物界進出は桃であった。平扁桃の栽培元組は、モヂ・ダス・クルゼス駅の揮旗探志農学士である。一九二七年に栽培を始め、一九二九年頃から市場へ出荷した。一両年位は一日二百五十函から、四、五百函を聖市中央市場へ出したが、當時はそれで直ぐに生産過剰という聖市市民の胃の腑であった。併し年毎に聖市民の胃の腑も平扁桃の味に嗜好を見せ、それから十五年、桃の生産は日本人独特の観を呈し、一九四六年伯国農事當局の数字は年拾万函生産者は全部日本人と発表した。

近年桃の季節にモヂ駅より搬出する桃函は一日、四、五千函から一万函、聖市とりオ首府の市民の胃の腑が消化している。

桃生産の大物は今イタケイラ駅の乾であり、吉岡である。毎年数百コントスの輸出高である。スザノ駅からも年一万餘

函を産出している。種類は各駅とも同じくシャット・ブランコ、デガンテ等各種である。

一九四七年度一函三十四クルゼイロスから四十クルゼイロスの値であった。

桃に次で日本移民の栽培に進出しつゝあるはブドウであった。

葡萄

これは赤、黒、白の優良種を作り出している。これはセントラル線のみならず、ソロカバナ線方面にも日本移民は栽培し出し、バルジエン・グランデには特に日本人の手により葡萄酒醸造場を最近創設して、聖州人の味覚に新嗜好味をねらっている。

スザノ方面のブドウの出荷量は年百噸から百二十三十噸で函（八キロ入）平均三十クルゼイロスといはれていた。將來も大量消費性をもつのはブドウである。

枇杷

枇杷の栽培は第一回日本移民の来た頃は、一盛りも過ぎたものが、聖市郊外到る處のシャーカーに、野生になるまゝ放つたらかされていた。一般市民は枇杷の味覚に嗜好をもたなかった近年、聖市民の嗜好をそゝり出したのは、矢張日本移民が手をかけ栽培し優良種へと改良し始めてからであった。

現在枇杷は重にモヂ駅奥に優良品を栽培し出している。同駅のパイオニア紺野一郎、西江八郎、長尾藤太郎、生田虎夫等の生産果物である。

他の果物の季節と違って初夏の市民の味覚と嗜好を在来種

と違う大型のあの黄色のビワが誘惑しつゝある。量に於ては尚ほ尠ない。

この他日本移民の栽培果樹に無花果（イチヂク）、李（ハザンキヨ及スモモ）梨、リンゴ、柿等が、市場を開拓する史料を提出しつゝある。

栗は約廿年前、聖市郊外オザスコ駅近き丘に、福島移民の大平彌内が約三百本の苗木を（ポルトガル種）植えた。それが現在では、十萬株の栗林となっている。日本移民独断の栗史である。年産額三百コントスと計上されていた。

西瓜とメロン

聖州の西瓜は在来種としてサンタ・バルバラと、アメリカナとが主であつたが、日本移民は今より十四年前母国から大和西瓜其他優良種を入れて栽培し始め、今日に於ては相當な生産品を市場に送っている。

メロンもこれ迄、欧州或は亜国輸入品に優良嗜好味をそゝられて、国内産としては殆んど顧りみられなかつたが、最近輸入品の味覚におとらぬものを、日本移民の手により生産し始めた。量に於ては未だ消費という問題にならぬも。

ノロエステ線のリンス駅に橋本佐喜尾、プロミツソン駅の一特農家はメロン改良優良品栽培研究に一家をなした。

一九三〇年頃、パウリスタ線リオ・クラロ駅に近く、五十域の果樹園を開拓、二十萬本のアバカチを栽培している和歌山移民の中筋九万一も、日本移民の果物栽培史上の一人である。

ラランヂヤ蜜柑は邦人に栽培者は甚だ尠ない。一九三三、四年頃、カンピーナス市郊外の東山農場は百域十萬本の柑橘類栽培に進出したが、ツリスターザ病菌に見舞われ、失敗に終つた。

日本移民果樹園史上に異彩を放つは、セントラル線モヂ駅

に神奈川移民本多慶三郎経営の本多果樹園である。耕作面積は伴か八域であるが、柿、李、ブドウ、桃、梨、リンゴ、櫻桃、イチヂク、柑橘類等、年産果樹苗木十三万から廿万本位を出荷している。精勵開拓既に廿余年の歴史は、州内各市近郊にある独逸人や伊太利人の同業経営者を凌いで、聖州二大果樹苗園の一つとまでに成長した。

奥地帯に於てはノロエステ線カイサラ駅に新田果樹園が苗木の栽培に進出し始めている。

九、特殊農業 薄荷と養蚕

薄荷栽培

日本移民の薄荷栽培は比較的に新しく一九三七年頃からである。ノロエステ線ミランドポリス駅ビラ・ノーヴァ植民地の埼玉縣移民矢澤清鑿が自己所有の湿地帯に半域ばかり栽培し、蒸溜結晶小工場を設けて生産していたが、當時は聖市総領事館勸業部に依頼しても、ブラジル拓植組合営業部に委託販売してもキロ十ミルにも捌けず吐息していた。

それが第二次欧州大戦勃発、北米方面の薄荷需要が伯国に着目して、日米開戦後の一九四三年頃より、聖州農界で栽培し始めた。日本人コロニアでこの薄荷栽培の氣勢が上ると、吉川順次は、応用化学の技師根来良太郎と謀って「北米の軍事工業に資用の薄荷栽培者は非国民なり」のパンフレットをコロニアに撒いた。（文庫注・ここは間違っていた）

如何に利益があつても、非国民的栽培物はいけないと、邦人コロニアの薄荷栽培の氣勢を一時削いたが「薄荷栽培はモウカル」とあつて栽培熱は旺んになった。一九四四年度のメントル値キロ（リキド）三百五十クルゼイロという暴騰値を出した。邦人コロニアの或る一部は米・棉の栽培を中止し薄荷栽培に轉向した。一九四五年度のメントル市場は生産過

剩で、値はキロ五、六十クルゼイロスに惨落していた。

當時ハツカ栽培の盛んであったのは、栽培適地の湿地帯に恵まれたソロカバナ線奥地帯であった。

一九四四、五の二年間に聖州総生産量は一千五百噸とされたその九割の一千三百五十噸の生産者が日本人コロニアであるとい九四六年度の伯国農村協会は発表していた。

第二次世界大戦終結と共に薄荷栽培も餘りモウカラぬ事となったが、邦人コロニアの極一部に今も栽培を続けている。

養 蚕

養蚕業が聖州で始まったのは、一九〇四年であつた。進展は遅々としていた。

笠戸丸移民の東京出身茨木友次郎家族が、笠戸丸に積んだ養蚕棚一打は、聖州移民収容所の倉庫で、税関吏の検査をうけた時、養蚕に必要な器具と説明しても、彼等税関吏の頭には何か不可解なものであつた。茨木のこの養蚕棚は當時厄介になつてしまつた。

聖州の養蚕業面に、寄興した最初の日本移民は第二回福島移民の小野豊三青年で、彼はガルサ植民地で仲間に奨め、一九一九年には繭生産に精進していた。これが日本移民養蚕業の創めであつた。彼は後、セントラル線モヂ・ダス・クルゼス駅の移民の草分の一人となり、そこでも養蚕に生活した。その當時、ミナス州の 農学校養蚕科に一時聘せられたこともあつた。

聖州で養蚕業の発展し始めたのは、イタリヤ資本がカンピーナス市に、内国絹織工業株式会社を、一九二三年に創設し、州政府の補助金をうけて活躍し始めてからである。

一九二五・六年頃、同社の養蚕部の宣伝係に日本人柄澤某が雇われ、邦人に養蚕を宣伝し、会社と養蚕家の連絡をとつていた。

この頃から「ブラジルでも繭が金になるぞ」と養蚕が日本移民の間に眼ざめた。

一九二七年度、ノロエステ年鑑にガルサ植民地方面で、繭一六一〇キロ生産と表われている。一九二八年度三線年鑑には、各鉄道線の各縣移民の桑樹栽培数及繭収穫量が表はれていた。

ノロエステ線
繭収穫単位キロ
縣
桑樹株数

熊本	四七、	〇	〇	〇	一、	〇	〇	〇
群馬	三五、	〇	〇	〇	五、	四	〇	〇
福岡	三〇、	〇	〇	〇	一、	五	〇	〇
岡山	二五、	〇	〇	〇	一、	五	〇	〇
長野	六、	三	〇	〇	四五	六		
山口	六、	〇	〇	〇	幼樹			
宮城	五、	〇	〇	〇	三	〇	〇	
高知	五、	〇	〇	〇	三	〇	〇	
福島	五、	〇	〇	〇	四	〇	〇	
鳥取、 新潟各	三、	五	〇	〇	幼樹			
静岡	三、	〇	〇	〇	五、			
鹿児島	二、	〇	〇	〇	二	〇	〇	
三重	一、	二	〇	〇	一五	〇		
和歌山	二、	〇	〇	〇	幼樹			
埼玉	一、	五	〇	〇	同			
北海道	一、	〇	〇	〇	同			
合計	一七八、	五〇〇	株	繭一一、	四〇六	キロ		

パウリス タ線	六六、	五	〇	〇	一九、	六	〇	〇
福岡	一九、	〇	〇	〇	一、	九	八	〇
福島								

長野 五、八〇〇 五、〇〇〇
兵庫 五、〇〇〇 五六〇

合計 九六、三〇〇株― 繭 二七、一四〇キロ

ソロカバナ線

熊本 七、〇〇〇 四〇
高知 三〇〇 五〇

合計 七、三〇〇 繭 九〇キロ

三線合計―桑株二八一、九〇〇 繭二一、一七七キロの生産
となっていた。

一九三二年度日本移民廿五周年記念鑑によれば、

ノロエステ線

桑株 一、二九七、二〇七―繭一八、二一二キロ

ソロカバナ線

桑株 九三、四六三―繭 一、五九六キロ

パウリスタ線

桑株 六七、九〇〇―繭 一、七六五キロ

パウリスタ延長線

桑株 四九六、九〇〇―繭 四、七六一キロ

サントス、ジェキア線

桑株 二三、七四五―繭 三二三キロ

ドラデンセ線

桑株 二〇〇、〇〇〇―繭 二、二一七キロ

セントラル線

桑株

二、五〇〇 繭

合計二、一八三、〇〇〇―繭 二八、八六四キロ

モヂアナ線は同年ブラジル時報年鑑によれば、繭三、一〇〇キロ産出していた。

在聖市日本総領事館勸業部では一九三二年頃までは在伯邦人の養蚕業は尚お試験時代とみていたが、この年、ブラジル拓植組合では、直轄各植民地に養蚕を奨励し、本格的な企業化に乗出した。バストス植民地に於て上田平吉が指導者となり、前年日本より取寄せた袖績機は繭四萬キロの製糸能力をもつものを据え、品質も相當なものを少量ながら生産していた。

その後上田平吉と村井利三郎のコンビで斯業はブラ拓と離れ独立生糸織物企業となった。

一九三五年度の聖州繭総生産高の百分の六十三・七は日本移民の生産高となっている。

邦人の生産高は、三五九、七四〇キロでその価額は一、四三八コントス、九六〇クルゼイロスとなっている。

その頃、ブラ拓組合の各植民地では、繭の生産高を左の如く発表していた。

バストス―繭 三七、八〇四キロ（上田村井絹織物工場より二、三八六キロの絹織物を生産していた）

アリアンサー―繭 一一、〇八六キロ
チエテ ー繭 二四、二八九キロ

チエテ植民地に於ては其年二、三八六キロの絹糸として送出した。

當時聖州各日本人植民地に於ても、養蚕業は隆盛であつ。聖州に配布さる蚕種は五十噸とされその七割はカンピーナスより供給し三割はバストスのブラ拓社より供給。

一九四一年以後、日本移民にとっては空白時代を出現した

が、産業方面に於ける進展振は異状あった。

邦人の一部愛国者と稱するものの間では「在伯邦人が養蚕し絹生産する事は絹が敵国北米に購はれて軍需品となる處から、不忠の行為をしている事となる。日本移民は養蚕業を中止すべし」と密かに宣傳され、或地方に於ては養蚕室棟を焼打ちされた事もあったが、邦人の養蚕熱はこの為め衰えはしなかった。

生繭の聖州全産量は、大畧各年左の如きものであった。

一九四一年度	六〇〇噸
同 四二年度	一、〇〇〇噸
一九四三年度	一、五〇〇噸
一九四四年度	二、五〇〇噸

この年の五月から約一ヶ月間、繭の市價は暴騰し、キロ五十七クルゼイロス五十センチターボスの最高記録値を出した。養蚕小屋焼打事件の當時であつたから、この繭値の釣上げによつて日本養蚕家の斯業廃止熱が阻止されたとも觀られる。翌一九四五年度の繭生産高は三千五百噸と増昇し、繭値はキロ二十五クルゼイロスに暴落した。

一九四六年度繭総生産高は五千噸に及び、生産過剰と觀られた處へ、終戦後の日本の生糸の大量世界再輸出説が流布され、茲に聖州養蚕界は大恐慌を起し、繭値キロ十クルゼイロスの大暴落により、斯業は没落の一路を辿つてしまつた。

一九四六年度、伯国農村協会の統計によれば、聖州生糸総生産高の百分の九十は、日本人養蚕家の生産と報じている。

茶

何時頃栽培したものか、聖市近効には茶畑の荒廃したものが第一回移民の来た頃はペニアの丘に、カンブシー寺院の下藪中にもあつた。日本人で茶の栽培を始めたのは、スザノ駅の萩原喜作の妻が、附近の叢にはえている茶の果をとつて帰

り、家の近くに栽培したのが始めといわれ、一九二〇年頃だとある。

これは大量生産的なものにならなかった。この茶の最初の栽培者は日本移民より早く渡伯した南方支那移民と、彼等が先達して聖市近郊各所に一頃栄えたものと観べきだ。又其以前に栽培されたともいう。

日本移民と茶、産業として今日の隆盛に至ったのは、レヂストロ日本植民地の岡本寅蔵が一九一九年に入植し、その後茶栽培に精根を打ち込んだに創まる。同植民地の松村栄治も茶の栽培先達の一人であった。

カフェーの国レヂストロ植民地の日本人は今でもカフェーより茶の常飲者で満たされている。茶栽培が斯植民地で盛んになったことは、集団者の消費需用がカフェーでなく茶であつた處に負ふ處が多い。

一九二七年、岡本は伯人社会の需要に應じ紅茶の栽培を開始した。

一九二九年頃レヂストロ植民者等は霜害にカフェー栽培を放棄した。それから紅茶の値上りに同植民地の茶栽培は熱を上げた。一九三四年度聖州内に百十萬株の茶の木が栽培されていたが、その九割三分の茶栽培は日本人であつたと調査されていた（聖市日本総領館）年産額三万キロ、價額四二〇セントス、その中三九〇セントスが日本人の収入で、二万六千キロ生産していた。

既に首府へも輸出していた當時伯国の茶輸入高は年三十万キロで斯價額四千五百セントスであつた。聖州は六万二千キロ餘千二百八十セントスを消費していた。戦前には同州の生産額は輸入額の四割四分に上っていた。

モヂ方面に阿部、乾、揮旗等が茶の栽培に進出したは一九三三年頃からであつた。現在では約四十八萬株の生産樹がある。

聖市郊外に岡本秀之助や吉井修とで、約十四萬株の株培をしている。

レヂストロ及セツテ・バラスの茶畑は現在六百万林で、岡本茶畑は四十域、その中二十域がアッサム種で、二十域が支那種である。

一九四一年空白時代に入る前の成産高は、レヂストロ方面で二百八十噸位のものであったが、今日斯地方一般茶の生産高は年五百六十噸と見積られている。價額六千七百コントス、昨年度の茶キロ當十二針（未精撰製品）で、輸出精撰品はキロ十八針であった。

コチア産組がレヂストロ方面に茶への触手を延ばし始め、同地の岡本茶組との間に対立的な状態にあるのが現状である。

レヂストロの茶畑

十、邦人と畜産業

豚

第一回移民が故国を立つ頃、日本の農村で豚を飼養しているそうした農村は全国に殆んどなかったであらう。耕地に配耕された第一回日本移民は、男も女も、子供も娘も青年も伯人又は外人コロノが。コロニアに飼養しているマンゲロンの豚をみて皆、珍らしがつて見とれていた。破れたマンゲロンの柵外に出て、コロニアに走り廻る小豚の群に会っては、日本移民の女も子供も怖はがつてにげ廻った。柵の中に肥やせる豚を見ては、「動けない程豚を肥やしてどうするつもりじやろ」と評し合っている邦人もあった。

コロニアの日曜日、外人コロノ連中が寄合つて、楽しそうに肥大した豚を刺す、この小さな悲劇をみては、日本移民は豚に「かわいそうに」と同情して青くなっていたものが多かった。

「あぶら飯」を喰いならつて、豚脂を消費し出した第一回日本移民共の中、コロノ生活中養豚を始めたのは、ソブラード耕地に於て福島移民の山田末吉が最初の人であった。これは第一回移民の間に「豚を飼った」と評判になっていた。

日本移民の養豚業は甚だ遅々たるもので、今日まで養豚専門の日本移民は一人も現われていない。

一九三三年移民廿五周年鑑には全邦人二萬二千家族の養豚総数十三萬五千匹であり、それから七年後のバウル日本領事館管内日本人聯合会の調査に邦人養豚総数は、約一万二千家族で五万二千匹にも達していなかった。聖市総領事館管内の養豚数はバウル管内の数より尠ないとみていゝ。日本移民は要するに豚を飼う移民でないのであった。

馬

コロノが耕地生活中、耕地経営のアルマゼンから、生活必需品を購入する事は、耕地の労働賃金支拂日まで、カデルネツタ通帳記入で貸してもらえるが、品物の値を何割か高く記入されて、搾られていると気づいた時、耕地のアルマゼンより何割か品物の値の安いその駅町のアルマゼンより、生活必需品を買入りたいと眞剣に考へた。が、耕地から駅町までは拾キロ、拾五キロも離れていて、休日曜日と祭日しかもたぬコロノにとっては、一日がけで歩いて品物まで擔いで帰れぬ道程であつた。茲にコロノは、馬を耕主の如く持つていれば、いゝんだとなつた。一耕地に拾年も継続しているコロノの家族は種々の工面して馬を飼ひ出した。馬をもてるコロノは、日曜、祭日には駅町へと買物に出かけた。そこで見聞が広まり、智慧がついた。日本移民も最初は耕地のアルマゼンから搾られた。コロノがそれを耕地の事務所に愁訴すると、耕地では、年に二度のパガメントまで、物品を前貸しする利子として聊か高く売るのだと辨明した。

白動車の発達しない時代の唯一の運搬交通機関は馬であつた。日本移民もコロノ生活中は餘り馬を持つたものはなかつたが、植民地に入つては、大抵各家族に一頭の馬は飼ひ始めた。駅より十八キロの第一モンソン植民地は、一九一五、六年頃廿五家族皆一頭づつの馬の飼主であつた。是等の馬は皆馬耕用でなく皆交通運搬用のものであつた。一頭百ミル位の値であつた。

聖州奥地帯に白動車道路が開通発達し出したのは一九二五、六年頃からで貨物自動車に更つてから、奥地植民地の生産は大量生産が可能となつた。馬に鞍おいて悠々と群れて行く馬上の人々も、自動車や貨物自動車が、背後から又前途から、ブブブーと騒音たてゝ行き交うようになっては、馬も驚ろき、人も愕ろいて、悠々たる威容の人馬でなくなつ

ていた。

棉花栽培が大量に行われ出し、棉花畑の馬耕もソロソロ日本移民間に流行し始めていた。一九一三三年度日本移民廿五呈年鑑に現わるゝ日本移民の家族総数一九、三〇人に対して馬匹数は九、二九四となっている。これは馬耕用ブーロが多くなったのである。

牛

日本移民で牛を飼ひ出したのは、所謂牧畜産業としては、ソロカバナ線、ボン・ジヤルジン駅奥に竹内豊治と、林清九郎等であつた。

一九二〇年頃竹内は牛百五十頭五十域の牧場にもつていた。林清九郎は四十五頭位であつた。

乳牛として一、二頭つゝ飼つた日本移民はその頃諸處の植民地にもあつた。移民組合の植民指導員渡邊孝は、地方を行脚巡講の都度、欧州移民は牛を飼つて其地に生活が落つくが、日本人は牛を飼はぬ移民だからいけないと、乳牛飼を日本移民によくすすめていたが、邦人農家の一般大衆は牛を飼ふ伝統的習性をもたぬ。日本移民には今でも牧畜業は、他欧州移民に比し、生産面にはものゝ数でない。

一九二九年度三線年鑑には一、八二二頭の牛が飼はれていた線別によるとノロエステ線に一、五〇六であり、パウリスタ延長線に六八であり、ソロカバナ線に二四八頭であつた。

一九三三年、渡伯二十五周年記念鑑に全伯日本移民の牧畜牛頭数は四、六四〇とあり、一九三九年バウル領事管内丈けの調査によれば、ノロエステ線に三、四五四と計上し、パウリスタ延長線に二四四頭合計三六九八頭と現はれていた。この牧畜の牧場面積が合計二、七四六域とあつた。

以上の外、マツト・グロツソ州クヤバ市近くに、一九二八年から一九三二年頃にペルー流れの鹿児島縣人平山定次は、

千五百域の牧場に八百頭の牛を放っていた。これは日本移民として出色であった。平山は最近、一萬域に一万頭の牛を放っていると言われている。

ゴヤス高原のイパメリ方面に、一九二七、八年頃より牧畜生活をしていた北海道移民の須貝治右衛門がいた。三、四百域に二三百頭の牛を放っていた。

アララクアラ線ジャブラ駅奥に糸山甚七が百五十域に三百頭餘の牧畜をやっていたのは、一九三九年頃であった。

東山農場のゼブーが、伯国一の賞評を得ると其後、南大河州に北海道の下田秀雄が牧畜をやり、一九三九年、同州首都ボルト・アレグレに南大河州オランダーズ協会主催のホルスタイン種牛乳量検査共進会に一等を得ていた。（一日卅リツトル）。

邦人の牛飼、必ずしも下手ではない。

ソロカバナ線奥にも小林弘平が二千域の牧場に八百頭の牛を放つても、日本移民としては出色である。空白時代後日本移民の或家族は、南伯方面に牧場を一千域、二千域と購入していた。カフェランジャ駅の、服部、藤澤、河村、今村、福原等である。

十一、邦人と肥料生産

邦人農家の肥料使用量

ブラジルの農界に施肥が始まってから十五年間は、ほとんど輸入肥料と国内生産肥料の全部を、邦人のみで消費して来たと言える。即ち、一九一七年から一九三二年迄は肥料の大部分は日本人のみで消費したと云つてよいのであった。

その後、肥料の使用が一般的となつてからも、年々四万噸の肥料を消費して来た。最大消費料の十三万噸から見ても、その三十％を消費した事になる。

消費地帯は、聖市近郊、中央線、アルタ・ソロカバナ地方、アラクワラ線、パウリスタ線、ノロエステ線の順序で、作物から見れば、蔬菜地帯、馬鈴薯地帯、棉、コーヒー地帯と云う順に拡がって行ったものである。

邦人の肥料配給

一九二七年迄は、肥料商は邦人中に見られなかった。一九二七年聖市ピネーロスの日伯物産会社が、雜貨商の副業として肥料取次販売を始めた。一九二九年にはコチア産組も取次販売を始め、その後中央市場附近にも豊吉商店、富田商店等肥料を取扱う店が出来た。一九三〇年にはカナカオ肥料会社が出来、高橋肥料店、小川肥料店と続いて出来た。この頃より邦人肥料店も取次販売から自家製造の肥料を売出すまでになった。即ち各自原料を輸入して混合肥料を製造し自家のマルカを入れて売り出すまでになった。

その後数年を出ずして、肥料配給店はどんく増加した。東山肥料部、ブラ拓肥料部、海興肥料部など出来たのもその頃であつた。残念なことにこれらの大資本家は準備をした位の所で世界第二次戦争のために中止して仕舞つた。それに代つて各地産組が国策にそつて進出し、邦人農家の大半の配給に當ることになった。

邦人商社、産組の肥料配給は、大体に前に述べた邦人農家消費料と同量であるが、これは邦人農家のみに邦人商社が販売して居るのを意味するものでなく、邦人農家の何十パーセントは外人商社より購入するも、邦人商社も外人農家に販売することに大いに努力して来たので、その何割かを外人農家に配給して居ることが解る。

邦人の肥料生産

一九三〇年、カナカオ肥料会社が骨粉、ニカワ製造を始めたのが邦人肥料生産の始めである。この種の工場は国内に他に六ヶの工場があるが、カナカオ工場は其中で最大の生産能力を有し、年産ニカワ五百トン、骨粉三千トンを生産して居る。

一九四〇年サントス街道に池田骨粉工場が創立され、年々普通骨粉一千トン餘を生産している。

伯国の肥料の沿革

四十年前、われわれ同胞がここブラジルに到着した時代は、今から考えると、すべての産業がまだ幼稚であった。しかし幼稚ながらも一通りは揃って居った。しかしわれわれが来てから始まった産業が少しもない訳ではない。こゝに云う肥料の生産と其の使用はわれくが来てから始まった一つである。

ブラジルで肥料を実際的に使用し始めたのは世界第一次戦争が始まって以後のことで、それ迄はほんに試験的使用の範圍を出て居ない。

一九一四年、伊太利人カルロス・ファキナがニカワ製造工場をサン・カルロス市に創立し、その副産物の脱膠骨粉を製造したが、その頃は餘り買手がなかった。

一九一五年、コンチネンタル・プロダクト会社も、聖市郊外オザスコに屠殺場を創立し、その屠殺残物肥料を売出した。

一九一六年、元移民收容所長のジョゼ・フラガが自分の支配下のコーヒー園に可成多量の肥料を試験的に施し、其成績は非常に良好であったが、一凡農業者は殿様の百姓としてあまり顧みなかった。

一九一七年、コチア、モロンビイ、エムボイ等の邦人薯作

者が前記のオザスコのコンチネンタル・プロダクト会社の屠殺残物肥料を購入して初めて肥料を使用した。コチアでは、一九一四年最初の二、三家族の入植があつて以来、肥料を使用する様になった一九一七年までは、割合に多数の入植者があつたが、瘦地に数回の植付をして見て、思うような収穫がないので、見切を付けて奥地の耕地に舞戻るものも多かった。ところが一九一六年岡本定光がオザスコから屠殺残物肥料を一俵買つて来て、コチアのモインニヨ・ヴェリヨの薯畑に使用して見た所が、非常に成績が良かったので、次の年一九一七年には一凡に使用する事となった。その時分コチアには十三家族しか居なかつた。

無肥料時代にコチアの薯作に見切を付けて他に轉耕した人で施肥するようになってから再入植し、今では大成功者と云われて居る人もある。

その頃の購買力は今から孝えると實に貧弱なもので、一トンも買う者は大きな農家の方であつた。それでも日本人会で一纏めに注文を取つてオザスコの会社に行けば初めの中に相當に優遇してくれて、工場内のレストランで朝食の餐応などされたこともあつた。その後、コチアを初め郊外の薯作は順調に行つて各地に父兄会や産業組合が出来るなど、大発展をしたのであるが、これは肥料使用に結果されたものであると思うのは筆者丈けであらうか。

第一次世界大戦が終ると共に、ドイツ人商社のテオドル・ゲイレ商会は智利硝石のブラジル一手經売権を、フエルナンド・ハタラト商会はドイツの加里シンデゲートと人造窒素の一手販売権を得てそれぞれ智利硝石、加里肥料、硫酸アンモンニヤ等を輸入し、エレケイロス商会はアフリカの磷礦石を輸入して自家の硫酸を利用し、過磷酸石灰を製造した（これは後で中止した）。それでわれわれ農家も初めて化学肥料を手に入れる事が出来た。これは一九一九年のことである。この間、郊外の邦人農業者は肥料を使用し始めて三年、經濟的にも大飛躍をなしたとは云え、一年の消費料はまだ一千噸に

達しなかった。

その後の十年間一九二九年迄は、サン・パウロ州奥地のコーヒー地帯に施肥をするようには未だならず、施肥区域は薯作地帯に限られて居った。それでもその頃の薯作地帯はジュンジアイ、カンピーナス、モンテモール、ソロカバ、モヂ・ダス・クルーゼスまで広まって居ったので、年使用量は一万噸に達して居った。

その後十年間、即ち一九三九年までは、施肥の大発展期とでも云う可き時期であつた。サン・パウロ奥地の舊コーヒー園地帯の棉作に施肥をし出したからである。輸入量四万トン、内国産を加えて使用量は六万トンに達した。しかるに一九三九年の後半期には、世界第二次戦争の勃発によつて輸入の道は絶れて仕舞つた。

その後の九年間、一九四八年迄は輸入肥料としては南米産の智利硝石と、少量の北米肥料の輸入しかなかったもので、その不足を内国産の肥料で補うより他に途はなかった。内国産と云つても急に生産出来る訳けでなく、又原料にも限りがあるので、そう思うように生産出来なかった。しかし、どうか農園に不足を来さすに過した。数量としても戦時中のことで、確實な調査は出来ないが、大体七万噸の生産をなして来た。大体の生産はアンダソン・クレートン株式会社、セラーナ株式会社、其他の製油会社の棉實粕。カナカオ肥料株式会社、フェルナンド商会、其他、ニカワ工場の脱膠骨粉。アルモール会社、ヴィルソン会社其他の屠殺場の屠殺残物肥料等である。

一九四五年よりアルゼンチン麥粕灰が輸入されたのを初めとして、北米よりも可成多量の輸入を見る事が出来、ここ三年間は平均、年三万噸の輸入をすることが出来て農家もやつと一安心した。現下の使用量は内国産七万噸、輸入品六万噸で都合十三万噸を使用することになった。（中尾熊喜）

十二、邦人と養鶏界

初期の人々

鶏が家のまわりに一寸とした小屋をもらい、或はとまり木だけを作ってもらった時代から、小屋が鶏舎になり、鶏飼が養鶏とよばれる様になったのは、いつ頃からであろうか。

それは今から約二十年前の一九二七年か一九二八年頃からであると思われる。

ブラジルの養鶏界に革世的な仕事を始めたダランヂャ・ド・マンヂーの創立が一九二六年だから、副業養鶏として巢立った邦人の養鶏も、この前後である。サン・パウロ近郊の蔬菜業の副業として取入れられたのが始めで、ジユケリ植民地、コチア植民地についてイタケーラ植民地の出来た頃からである。

一九二七年のイタケーラ植民地には入植者もいたってまばらトマテ作りはじめた頃で、業として鶏を飼っている人達はまだなかった。その後しばらくして、富田實が白色レグホンを飼いはじめた。イタケーラの養鶏の元祖である。

白色レグホンの卵がサン・パウロの中央に生産物として顔を現わしたのは一九二八年から一九二九年頃である。この頃、ベンセドールの石鹼の空箱に幾打かの卵を入れて青物市場のメーザのかたわらに並べられて居たのが、二十年前の養鶏であった。白色レグホンの純白な卵は、ブラジル人からは、オーポ、ラバードとして敬遠され、顧客は主にイギリス人やドイツ人であった。

その頃既に、イタケーラ、モヂ、ジユケリー地方の人達の中にも幾人か、こうした小副業養鶏家があつて、野菜と一緒にフェーラのメーザの隅の方に、少しの卵が並んでいたのではなかったか。オザスコ附近に住んで居た野間、増田等も同じ頃フェーラに卵を持って来た。

既にその頃は、蔬菜、バタタはかなりの量をサン・パウロ市場に占めて、ピニエイロスにはコチア産組の雄大な、（その頃としては）建物が建ち、トマテ成金、バタタ成金が出来始めていた。

蔬菜の自給肥料上しての鶏糞の利用を、目指しての養鶏を始めた人達も、既に幾人かあった。指導的な立場にあった人達は既に蔬菜専門の危険、化学肥料専用の弊害を識って居たから、副業としての養鶏を奨励し、自らも實地に開始した。イタケーラの松本圭一農学士、フレゲジア・ド・オに居た山崎芳蔵農学士等が、そうした点では先覚者である。一九三〇年頃である。

エメボイ實習場

一九三一年海興のエメボイ植民地並に實習場が創設されて、前記松本農学士が初代場長として赴任。當時チエテ移住地にいた遠藤農夫雄を招んで、養鶏部主任として、實習生に養鶏を学ばせるかたわら、植民地の養鶏の實地指導にあつたのが、養鶏を意識的に我々の農業にとり入れた最初であろう。ここで始めて、違藤によつて作られた気温式孵卵器で、所謂人工的な雛が生れ、売り出された。そして雛の雌雄鑑別も行われた。ブラジルに於ける最初の鑑別であつた。

かくしてエメボイの養鶏は急激に發展して、一時は一千羽を飼ひこなした深川をはじめ、幾多の熱心な養鶏家を出し、順調に發展しつゝあつたが、その後何等かの事情により、違藤の退場、中心人物淀川の死亡等あり、且又、地理的關係、病菌に対する研究の不足等が原因して、遂に清水外二三家族をのこすのみで、ほとんど全廃してしまつた。

特にこの国に多い病菌に対する研究の不足が主なる原因であつた。これはコクシジウム症が甚だしく、毎年この病氣のために倒れた雛が五千羽も、六千羽もあつた。實にその頃と

しては莫大な数で、コクシジウム症がエメボイの養鶏を倒したと云つてもよい程である。一九三五年頃の事である。

研究たけなわ

その頃、農学士揮旗深志は、モヂの農場からサン・パウロに出て「農業のブラジル」誌を主宰して盛んに農法の改革を叫んで居た。一方総領事館勸業部は農学士江越信胤を中心に、青木林蔵農学士の産業組合指導をその軸として、技術的方面では北村豊治、北村政吉等の熱情が時代の農業を指導しつつあった。日本人の新興農業者としての意気盛んになりつつあった時である。

ブラジル時報の玉木（玉木勇治の父）も新聞を通じて副業養鶏を唱導。たまたま農業のブラジル誌に古田土が養鶏の小記事を書いたのが縁となつて、モヂの奥から、フレゲジアの奥まで訪ねて来た男があつた。それが田邊重之である。彼らは、近郊邦人農業界の事に及び、「この邦人農業の浮動性を喰ひ止めるには、どうしても蔬菜ばかりではいけない。殊に、バタタ、トマテの単作はいけない。作物そのものが、一つのところには居られない様な性質を持つてゐる。果物と養鶏、これなら、永久にその土地に住めるだろう。

新地、新地と拓いて行く農法よりも、古い土地でもやつて行け、その古い土地でやつて行く方が、経済的に有利でなければ、如何に土地を愛せよ、永住せよと叫んでも、農業者は移動する」と

云うのがこの人々の結論であつた。

當時二十四才と二十五才の若者はこの有畜農業こそ、移民の進むべき道であるとの結論を一大発見の如く感激した。かくして實驗は開始された。移動する農法が有利か、移動しない農法が有利か、の二つである。

果樹と養鶏―田邊は主として、果物の研究、古田土は鶏―

点張りで進みはじめた。既にモヂ地方では揮旗農場が桃の作出に成功し、長尾―西江等は葡萄、本田は無花果を作り、苺もイタケイラ、スザノ地方の人達によつて實績をあげていた。

各地の養鶏場、ダランヂヤ・ド・マンヂーを皮切りにアグアブランカのサン・パウロ種畜場、カンピーナス附近のグランヂヤ、サン・パウロ、グランヂヤ・サクソニヤ、グランヂヤ・ガルリーロス。その頃の一流養鶏場は、皆それぞれ、特長を持って、華々しくトツプ切るべく競っていたが、掛聲ばかりの感があった。その規模から云つては、到底小農家の及びもつかないものであったが、内容は決して驚く程のもではなかった。

ひそかに、よしこれなら、日本移民の方に勝目がある。養鶏は将来、日本人の野菜、果樹の副業として、必ず成功する、と確信がもたれはじめた。時に古田土の飼養羽数六百内外、田邊は既に千羽近い羽数を持っていた。

副業としての養鶏がそろそろ板についてきて、鶏でも食つて行けると云われ始めた頃である。當時の近郊の主なる人達はイタケイラの松本、富田、永島、玉木、モヂ地方田邊、滋野、カーザ・ベルデ富田、宮田、ボンセツソ川名、フレゲジア・ド・オ古田土等である。この外にも百羽二百羽の副業家は増えて来ていた。前記の遠藤はカシンギーに外人と共同で孵卵器の製作販売をしていた。

まだ立体孵卵器がなかったので、みんな母鶏孵化や小型の平面孵卵器を使っていた。この平面孵卵器を使って、初生雛を大量に売出したのは、モヂの田邊、滋野兩人である。

この石油の平面孵卵器と云う代物はすこぶる原始的で、且又孵卵室も非衛生になり易い。

滋野種鶏場の技師格だった酒井によつて鑑別雛が売り出されたのも、その頃である。

他方種鶏の改良に目差す熱心家も出来て来て、一九三四年古田土がトラップネストによる産卵調査をはじめた頃は、モ

ヂの田邊、コチアの仲川は既に前年度に開始していたから、サン・パウロに於けるトラップネストによる産卵調査は一九三二年頃この人達に上つて始められたものである。

産業組合が

モヂ産業組合の創立者渡邊孝は熱心な養鶏奨励家であつた、彼自身、かなりの羽数を飼つて居た。

渡邊はその頃、日本から色々の養鶏器具を取つていた、鶏の虫下し、トーガラシの粉、ナツパ切器等々、その中ナツパ切は五台輸入してみたが、組合員には買う人がなく古田土等が引受け、田邊一台、仲川一臺、古田土一臺とかけた。

モヂ地方はこの渡邊を中心に、田邊、滋野等が熱心に養鶏農を唱導したので、養鶏は順調に発展して行つた。この間初期の技術的方面の指導者としての酒井の存在も亦、大きな力であつた。目をコチア地方に轉じて見ると、既にバタタの一本槍から、多角農への進展が徐々に研究されつつあつた。仲川はじめ高橋、植田、清水等であり、コチア産業組合内部にも、下元、常探、安達、内海等がバタタの前途をうれい、対策としての養鶏を研究していた。

近郊に於ける邦人の蔬菜業者の増加、隆盛と同時にその缺点をも自覚するものが出て来て、多角経営へと目差す人達も多くなり、加へて各産業組合の幹部は早くもその点に氣付き、援助をおしまなかつた。

モヂの渡邊、コチア下元、ジユケリー中澤、バンデランテ原田、カーザ・アサヒ（みづほ）、松本これ等の人達が既に十年以前より熱心な副業養鶏提唱者であり、又自ら養鶏家であつた。

勸業部と養鶏普及会

総領事館勸業都主催で、養鶏業者の第一回懇談会の開かれたのもその頃である。時の総領事は市毛孝三だったが、東山の山本も日伯農事協会の会長として出席していた、この会合を機会として、養鶏普及会が生れ、松本圭一を会長として、各地に養鶏講演会を開き農家の自覚をうながす事が多かった。

この会合の前後、時の勸業部主任江越が帰国するにあたり何を土産に持ちかへたらよいかと云う話から、日本の種鶏が輸入される事になった。

鶏をニッポンから

その頃コチア産組にも養鶏研究会が生れていた。毎月の会合は月、月熱を帯びて集まるもの下元、常探、安達、仲川、田邊、伊東、永島、古田土、夜を徹して未来の養鶏を語り計画した。

将来の養鶏は必ず多産鶏の作出が重要になる、と云う仲川の主張と量的には初生雛もつと大量に孵化する、大形孵卵器が必要である、と云う古田土の主張が採られて、日本から優良種鶏の移入と大形孵卵器の輸入が決定した。

このコチア産組の方で日本から種鶏を移入する話と勸業部の種鶏移入の話とが、一緒になった事も亦幸であった。一九三七年十一月待望の種鶏がサントスに到着した。コチアから下元と古田土、勸業部からは故野木が迎へに行つた。

潮風にハタハタと鳴る日の丸の下から、種鳥を受取った時の感激は深かった。

輸入種鶏は白色レグホン種十雄五雌、ブリモウスロック種十雄五雌、ロードアイランド・レッド種十雄五雌、合計四十五羽と云う大群であった。この中ブリモウスロックとロー

ドは新らたに設立された日伯農事協会のカシンギー試験場に飼育され、白色レグホンはコチア産組の方が末だ、種鶏場設立の運びに到っていなかった。それで一時フレゲジア・ド・オの古田土方で飼育する事にした。

時に古田土は飼育鶏一千羽内外、トラップ調査も全群やったので、切角輸入した鶏も多忙のために台なしにしてはと気が気でなく、一日も早く種鶏場の設立を望んで居たが、未だコチア産組はバタタの全盛時代で、仲々組合全体の空気は種鶏場の設立等は問題にされなかった。

古田土がコチア産組の種鶏場主任になったはこの時である。

カシンギーの通稱化物屋敷を借り込んで、鶏舎を建てはじめた。後にモヂから田邊、コチアから仲川が加わって、**ヰ・****ヱ**協会の名称の下に、同じくカシンギーに土地を借りうけ、コチア産組の別動隊として、種鶏―孵化―副業養鶏宣傳―指導を開始した。時に一九二六年三月であつた。

同年四月、待ちに待つた一万卵入立体孵卵器も到着、一同はり切つて仕事にかかった。

その頃の一般養鶏界は数こそ少なかったが、熱心な人達ばかりであつた、イタケーラの井口が三十米の堂々たる練瓦建の鶏舎を建てて、人々を驚ろかした。滋野種鶏場の酒井が独立してモヂ市に孵化場を開き、自家製の立体器を動かせば、滋野も亦日本から立体器を輸入して、これに対たえ、**ヰ・****ヱ**協会、滋野種鶏場、酒井孵化場と期せずして立体孵卵器を使い始めた。その頃一九三八―三九のリオの養鶏界は、ラランジャの好景気と相まつて、仲々盛んであつた。三千羽、四千羽の養鶏場が十指をかぞへ、養鶏組合主催に依る産卵検定も行なわれ、鶏卵のロンドン輸出冷凍等見るべきものがあつた。

この生産品處理の点ではサン・パウロの方が後れがちで、僅かに富田政吉の経営する、養鶏専門店が一軒ルア、イトビーにあつたきり、それも二、三年にして閉店の止むなきに

いたった。この富田はその後マイリンケからイビウナに移り、養鶏家として成功した。

十年間に

邦人養鶏史を十年づゝにわけて見ると、これまでに三十年かゝっている。始めの二十年はほとんど、養鶏らしい養鶏はなく、次の十年が研究時代、そしてこの立体孵卵器が出現して、はじめて研究時代を脱して、實用時代に入つたと云い得る。

では、この十年間にどの位の発展をして来たか、例をコチア産組にとつて見ると、一九三七年度鶏卵生産量は、三五、〇〇〇打、價額七〇、〇〇〇、〇〇、一九四七年度生産量は二、八〇〇、〇〇〇〇打、價額二一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇、即ち十年間に生産量に於て、約八十倍金額にして、約三百倍（養鶏生活誌第三号、谷垣に依る）の生産増加である。他の地方も同程度に増加して居る。

この研究時代の十年間は、養鶏のよい事はわかつて居たが、量的に不足した時代で、平面孵卵器という舊形のものでは労力その他の点で、雛一羽の生産費が分業としての孵化業は成り立たなかつた。

當時グランヂヤ・サン・パウロを始め、どの養鶏場でも、優良純血種であると云う前ぶれの下に、一羽（無鑑別）五ミルから十ミル位とつていた。従つて實利的ではなく、趣味の養鶏家が主なる顧客であつた。

だから實利として養鶏を、やろうとする人達は、種鶏から、孵化、育雛とみんな自分の手でやらねばならず、到底一ヶ年の間に何千もの雛を作る事は出来なかつた。まして近隣の人達にまでわけける事などは、出来る相談ではなかつた。それだけに孵化育雛等は特殊技術とされ、一般には非常にむづかしい様に考へられた。

こうした事情が研究時代を非常に長がびかせた。

しかし、高い見方からすれば、それはひとり、邦人コロニヤ養鶏界だけの問題ではなく、この立体孵卵器による雛の生産費の低下は、實に革命的なもので、それ以前の状態は世界各国何れも同じ様な経路をたどっている。唯邦人農業界、特に聖市近郊の蔬菜業者等が、その経営形態の変革にせまられつゝあつた時ただけに、好機会にめぐまれ、疏菜と養鶏の両者相助けて、副業としての形で、その出発点に入つた。この事はその後の養鶏界のために實に幸であつた。

前述の勸業部主任江越の斡旋による、輸入種鶏群は、白色レグホンをコチア産組の別動隊、 $\times$ ・ $\rightarrow$ ・ $\times$ 協会の仲川賢一の献身的な研究によつて、年々成果をあげれば一方日伯農事協会の方は時の試験場長服部農學士をはじめ、養鶏部主任勝浦等の努力によつてブリモウスロック種のブラジル多産新記録をつくり次年度には $\times$ ・ $\rightarrow$ ・ $\times$ 協会が第二回全伯産卵検定会で、十羽平均年産二七九卵と云う驚異的な成績を挙げて、群としての多産南米新記録を確立した。

この服部場長は、かつて、タウパテーに居つた頃、名古屋種を輸入し、熱心な養鶏研究家であつた。

その後戦時情態に入り、日伯農事協会は自発的に解散、優良種鶏の蕃殖も中止のやむなきにいたり、それぞれ地方の養鶏家にわけられたが、このブルモウスロック種並、ロードアイランド・レッド種の蕃殖研究が中絶された残念な事である。初期の多産蕃殖界に盡したのは日伯農事協会養鶏部であつた。

つづいて、ピндаモニヤンガーハの野田耕作も日本の中央家禽協会から、優良白色レグホンを移入、更にそれをモヂの滋野がゆづりうけて、蕃殖改良に入つたので、邦人養鶏界には、その初期に確實優秀な日本系白色レグホンの血液が入り、質的にその基礎をかためた。

この質と量との関係が、めぐまれた出発をした点に、邦人養鶏発展の主賓なる原因がある。

産青連と養鶏

産青連運動―産業組合青年連盟と鶏も亦鶏の歴史に忘れられないものがある。産組中央会が、毎年、中堅青年講習会をコチアの小学校の夏期休暇中を利用して、開催していた。この講習会の第三回目あたりから、地方農民道場の開設が叫ばれ、下元健吉を委員長として、左の顔ぶれで、全伯産青連なるものが生れた。

委員長下元健吉、委員石川文夫、同内海義男、同井上清一、委員弓場勇、同今本浄。

この道場は養鶏を主とする農場であつた所から、技術部、顧問として仲川賢一と古田土とが加わつた。

案は、先づサン・パウロ一つの中央道場を建設する。これは道場と云つても同時に学校であつて、かなり高度の科学的な研究設備も有するものの必要があるから、それを作るために地方にそれぞれ小農場を作つて、労働奉仕による資金獲得が立案され、方法として養鶏が採られた。

選定された地方は、

サン・パウロ	附近	コチア
ノロエステ		アリアンサ
パウリスタ		ポンペイヤ
同		マリリヤ
ソロカバナ		バストス
ソロカバナ		パラグアスー

コチアは主として、井上、内海が、アリアンサは弓場が、ポンペイヤは今本、マリリア志村、バストス時川、パラグアスー中須、これ等の人がそれぞれ地方にあつて、敷地を撰定した。

具体的な方法は道場は、先づ一千羽の鶏を飼う、場員は一

切労働奉仕の形に於て行う、直接鶏に關係して労働奉仕の出来難い情態にある連盟員は、それぞれの共同耕作地に於て、鶏の飼料たるミーリヨを作り、これを農場に提供する。これによつてあがつた利益は全部中央に送る。

不幸、戦争に入つたため、種々の事情から、産業組合中央会が、産青連と云う旗印をかかげる事が出来なくなり、講習会の開催も不能になつたので、これ等の計量は實施中ばにして中止するのやむなきに至つた。

しかし、その時既に仕事を始めて居た地方は直ちに鶏を売拂う事も出来ず、そのまゝ経続して今日に及び、弓場の養鶏場の如き南米第一を誇る大養鶏場にまでになり。ポンペイヤも亦今本中心とした、一大養鶏村が生れ。その他バストスーマリリア等養鶏の普及發達は著しきものがある。

戦後の養鶏界

第二世界大戦終結と同時に、副業として養鶏を取入れて居た地方はサン・パウロの附近であつた關係上、報導機関も多く、比較的この「勝つた、負けた」の論争に禍される事が少なかった。

そして石油ーガソリンの供給復活ーファレーロ、ファレリンニヨ入手案等で、飼料が比較的安く手に入り、反対に鶏卵の需要は多くなつて、高値を呼び、邦人養鶏難界も活気を呈して來た。養鶏業者は日に日に増加して行つた。

更にこうした情態に拍車をかけたものに、綿作の不況、養蚕界の不振による、これ等の人達のサン・パウロ近郊への移轉がある。

加えて終戦による思想的な変化によつての奥地農業者のサンパウロ轉住も亦見逃す事が出来ない。

この様な條伴の下に、一九四五年から四六年にかけての養鶏家の増加は一躍して、それまで邦人養鶏家の飼養羽数三十万羽と云われて居たものが三倍もの百万羽に達する程になつ

た。

しかしこれは決してよい意味での発展ではなかった。

各孵化場は雛の注文に応じ切れず、新しい孵化場はそれこそ雨後の筍の如く発生し、かなり思わしくない雛が売られ、全般として、鶏の質の低下をもたらした。加へて、新らしく近郊に移住して来た人達の農業方法がかなり山師的な人達が多く、所謂一獲千金を夢みて、大羽数を飼育する事業家を産み出す結果となり、眞實の副業としての養鶏はかへり見られなくなった。

そこにもここにも千羽二千羽の養鶏場が出現したが、技術と羽数との均合がとれず、徒に羽数のみを競う傾向が多くなり、かつて、肥料の自給から出発した副業としての養鶏からはおよそ縁の遠い養鶏への傾向が生れた。

数字的に、現在

サン・パウロ州の養鶏家の中から邦人だけを選んで計算する事はすこぶる難事である。正確な数字は判らぬが、各孵化場の初生雛販売数その他から見て、大約三千家族、三百羽平均と見て百万羽の鶏を飼つて居るわけである。五十%産卵として、一日五十万卵、即ち四万一千打、三十打人で、一千三百箱の卵が毎日生産されて居る事になる。

所謂オーポ・グランヂヤの七十%位は日本人と云うわけだ。

普及して居る地方は、モヂ、スザノ、イタケーラ、アルヂヤ等の中央線地帯をはじめとして、サンパウロ近郊は鶏の居ない部落はないまでに普及して居る。

奥地でまとまった所は、ポンペイヤ附近、バストス、リンス、プロミソン、ビリグイ、アリアンサ等である。種鶏は全伯で白色レグホン、新品種ニューハンプシャーは、まだ試験時代を経て居ない。

個人としての大羽数を飼って居る人は、南米第一をほこる弓場農場（アリアンサ） 五万羽、質の精鋭をほこる今本農場（ポンペイヤ） 三万羽等を初めとして、万以上のもの十指を数へる有様である。（古田土光）

十三、日系農業者の農産物生産量

樞軸人の財産凍結令解除提案のため、聖州の伯国農村協会（Sociedade Rural Brasileira） のオルランド・デ・アルメイダ・プラードは日系農業者の聖州及その近接州に於ける農生産物量を、聖州農産物量と比較対照して一九四七年五月十日に左の如く公表した。（フオリヤ・ダ・マニアン紙一九四八年八月十三日号所載）

一九〇八年、日本移民は笠戸丸に乗って七八一名渡伯した。今年迄に四十年の歴史を経た。

日本移民は其年より一九四一年迄の三三年間に約二十萬近く移り来たが、今日迄彼等はその日系伯人と共に総数の百分の九十は農業者として農生産に従事しているとし、左の如き生産物の収穫高比較指数を発表した。

聖州及隣接州に於ける日本移民、日系伯人の総生産物と州収穫高の比較（大略）

品種	州産総量	%	日本人及 日系生産量
価格総高			
（コントス）			

珈 琲	一二、〇〇〇、〇〇〇俵	二〇、〇	二、四〇〇、〇〇〇
	一、二〇〇、〇〇〇		
棉	一、〇〇〇、〇〇〇梱	三五、〇	三三五、〇〇〇
	七〇〇、〇〇〇		
米	一一、〇〇〇、〇〇〇俵	二〇、〇	二、二〇〇、〇〇〇

マモナ	苺	桃	茶	落花生	薄荷	ラミ	鶏卵	バナナ	蔬菜	トマト	馬鈴薯	玉葱	絹
一、	二、	三、	七、	一二、	二七、	三二、	四九、	六〇、	七〇、	九一、	一〇〇、	一二、	三四七、
九二〇	四〇〇、	四〇〇、	一〇〇、	五〇〇、	五〇〇、	四〇〇、	五〇〇、	〇〇〇、	〇〇〇、	二〇〇、	〇〇〇、	〇〇〇、	〇〇〇、
〇〇〇俵	〇〇〇籠	〇〇〇函	〇〇〇盥	〇〇〇俵	〇〇〇盥	〇〇〇盥	〇〇〇打	〇〇〇房		〇〇〇函	〇〇〇俵	〇〇〇俵	〇〇〇盥
二、	〇〇・	〇〇・	〇〇・	一〇・	九〇・	九〇・	九〇、	五〇、	七〇、	九五、	六〇、	一〇、	九〇、
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
八、	四〇〇、	一〇〇、	五〇〇、	一五〇、	一三五、	三六〇、	四五〇、	六〇〇、		一四〇、	八四〇、	一八七〇、	九〇〇、
〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇		〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇

尚、ジヨルヂ・マルチンス・ロドリゲスは開拓地所有の重なる各国人土地割合を左の如く報じている。

国 籍 別	五域所有者	五域乃至二五域
伯 人	八一、七九七	七五、六四五
伊太利人	九、〇〇五	一七、二九五
西班牙人	四、三四一	七、九八一
日本人	四、〇九七	八、九四一
葡萄牙人	四、四五〇	五、二七一

十四、日 伯 貿 易

伯国サン・パウロ市に藤崎商会が日本品雜貨店を開いたのは一九〇六年で（明治三十九年）日本移民の渡伯二年前であつた一九〇八年、日本から伯国への輸出総額は総計二百コントス餘であつた。翌年一九〇九年度には十コントス減の百九十コントスとなつていた。當時藤崎商店は日本から聖市へ何んなものを輸出していたか「羅典亞米利加の富源」なる書中に斯う掲げてある。

絹物は色物と捺染した衣服用反物、リボン類、絹製品はレンソ、肩掛等だが関税高く、密輸入多い。陶磁器は名古屋製、九谷擬品、紅茶用茶器、皿等で、日本品独特の意匠で売れた。紙製器は提灯、日傘、紙ナフキン、贈答用包紙、洋燈置等、扇子は絹製の象牙柄ものは税金高く、紙製の扇が売行よかつた。漆器は税金高いので需用少ないが、この二両年後リオ首府で山縣工場が漆器製造を始めていた。紅茶は支那方面より

輸入し、緑茶は日本から輸入した。紅茶はよく捌けたが、緑茶は市民の嗜好に投しなかった。竹細工は原料を日本からもつて来た。山縣工場で職工が組立てゝいた。麥稈眞田も輸入したが、これは英人の手で入れた。伊太利品も入った。齒磨粉（ライオン印）木製箱入、紙袋入一個一ミルで売っていた。玩具は板返し、紙風船三つ花等で（バネ仕掛けものは當時日本には発達していなかった）綿細工のニワトリやピンチニオ等は伯人の嗜好に投じていた。アンチモニーや七寶焼、箱根細工は餘り捌けなかった。刺繍物は聖市のファゼンデイロに嗜好された。日本向け伯国貨物は輸出されず、片貿易の態であつた。欧州第一次大戦前後迄の日伯貿易は、リオ首府に日本貿易会社が陶磁器を輸入したが重に日本品を輸入したのは、シリヤ人の手を通してやつていたものが多かった。シリヤ人の日本品は大阪物の疎悪品が多かった。欧州戦後の一九二〇年代には、日本、サントス港との貿易も聊か増えていた。縫糸（木綿、絹糸）染料、麥稈眞田、黄麻糸、藤柳材、雜織物、ゴム製玩具等で、日本の新聞種誌書籍等も日本移民関係からして、九六コントス五二七ミルレースの輸入をみていた。一番多いのは絹織物で九三三コントス餘で、次に陶磁器の三四七コントスであつた。日本紙も九三コントス餘輸入していた。

日本移民消費の食料品が一〇九コントス、缶詰食料品が二六〇コントスとなっていた。一九二〇年度総計輸出二、八五七コントスとなっていた。

この年、日本向け伯国カフェーが、二二二コントス三一〇ミルレース輸入されていた。

一九二六年度、対伯日本輸出高は日本金百五十九萬七十円で対日輸入品はその十分の一で十五萬二千元、片貿易であつた。

一九三〇年頃は珈琲値の大暴落で、伯国の大不況、日伯貿易は一頓挫したが、一九三二年に至り前年度の二倍となり、一九三五年度には五百九十二万五千元となり、対伯輸出は茲

十年間に約四倍となっていた。然し対日輸出は一九三四年度に、相変らず二十二万七千円の少額であつた。

一九三五年度の対日輸出品は棉花の二、五〇万疋、一万三千五百コントスが激増し、珈琲二、一六四、〇八〇疋の三、三八四コントスがあり、水晶原石一六七、五七五疋の六四四コントスがあり、カカオの七五、〇〇〇疋で三一四コントスがあつた。

この一九三五年度以降、日伯貿易は今迄の対伯片貿易が反対に日本に多く入超され、対日片貿易となつてしまつた。即ち一九三八年迄は日本はブラジルに対して二、三千万円の支拂勘定の状態をつづけた。これは一九三五年の日本の経済使節団の訪伯後、日本移民の栽培する聖州棉花の買付をやつたからで、以前百万円台の貿易関係が急に千萬円台に躍進したからであつた。日本よりの輸入も、関係商人の重商主義により、漸つと輸出の三分の一に達してゐた。その頃から日本は、東亜共栄圏建設の爲め、所謂貿易統制時代に入り、遂に空白時代に陥入つてしまつた。それから十年、日伯貿易関係は断絶したなり今日に到つてゐるが、第三国人を通じて両国の需要供給が多少満されつゝあるも、それは個人間に於ける宥和と友情との帯からでなく、売る爲めに買ふ人が、合法的の詐欺を許されてゐる迄のことである。

十五、産業組合の沿革

「経済現象とは、生活の必要を充たす物資を獲得する集团的行動の系統であつて、それは物資が生産され分散され消費される過程をいふのであると解されている」のであるが、今日の経済行動は、生活をみたす物資をうる行動でなく、生活を充たす物資をうる手段を獲る行動となつてゐる。茲に経済組織を司どる資本主義の缺陷に対抗して、産業組合が起つたのであるが、産業組合も資本主義経済機構に同化して仕舞

う時代相を呈している。

日本移民の社会に、産業組合の色彩を最初に帯びたのは、コチア村のバタタ栽培者間にであった。式部繁は現在モヂ駅奥にバタタ大耕主となつてゐるが、彼が當時コチア村のバタタ生産者を牛耳つていた頃、彼が中心となつてバタタ産組的色彩を提唱し出したが、當時、それが政治的色彩に轉移してオヂヤンになった。

一九一八年、矢野榊治が、コチアのバタタ生産物を市場に出した値を仲買商に叩かれぬ様ビニエロス町に第一倉庫建設を主唱したが、第二の問題は大量の生産物を搬出する道路の難関解決であつた。この二提案が生産者一同に實施を承認され計画實行に移りかけた歳、大霜でバタタは大被害、オヂヤンとなった。

その頃ミナス州コンキスタの邦人米作地帯でも仲買商に生産物の値を叩かれる處から、石橋恒四郎が幹部し、幼稚な産業組合を組織、實行に移つたが、幹部や組合員に産組知識も訓練もなく、缺損を残して間もなくオヂヤンとなった。一九二三年の頃で、後に福川薩然、八田一藤等が改組進行に努力したが蘇生せなかつた。その頃レジストロの植民者等にも産組が提唱されたが、これは対海興的な政治的色彩を發揮したまでオヂヤンとなった。

聖市日本領事館に勸業部が設けられ、江越信胤農学士が主任となった。勸業部が農事部となつたの一九二七年、江越がコチア村のバタタ生産組合邦人に倉庫建設案を強調し、農事部より補助金も幾分下附することゝなり、組合員も乗氣になり、當時州道路の完成も近づきつゝあつたので、愈々バタタ倉庫をピニエロスに建設することになった。それが一九二七年コチア産業組合の設立で組合員八十三名、二九〇コントスの出資で成立した。同年九月のことであつた。

「有限責任コチア・バタタ生産組合」である。

コチア産組設立、総領事館より補助金下附の報伝はるや、各地のバタタ生産集団地に産組の設立氣運が醗酵した。

ジユケリー産組設立、レジストロ産組も設立された。日本では拓務省新設され、総領事館農事部は外務省の管轄から勸業部と又改稱した。それから産業組合専任技手が拓務省から勸業部に派遣された。青木林蔵がそれである。一九三〇年の頃で、各地に産組が簇出した。勸業部の産組設立補助金が、青木の意向によってきまる處から、青木は一時「産組の神様」とあがめられた。

産組は伯国産組法に準據して設立された。伯国産組令の制定されたは日本移民最初渡航の前年一九〇七年（法律第一六三七号）であつたが、當時の社会は産組の發達を促進させない環境であつた。一九三二年ゼツリオが政權を掌握するや、産組法は廃止され、改めて大統領令第二二、二三九号（同年十二月十九日附發布）となり、その後又改正された。産業組合を農民組合としたりした。その時々改組に適応して邦人産組は存続して来た。一九三八年八月一日附第五八一号の發布により、漸く産業組合を農家が組織する事によって同業組合的機能を果し得る事となった。斯くて産組設立の機運は愈々旺盛となり、一九三八年に登録した組合一九、一九三九年には一〇九と激増していた。連邦産業組合監督局（Servico de economia rural）に登録されている一九四一年迄の邦人関係の産業組合は左の如くであつた。これは聖州政府の奨励宜しきを得た結果でもあつた。

一九三八年に「産業組合中央会」が結成された。邦人関係の組合の連合体となり、ブラジル側の奨励助成策と呼応し、組合運動の拡大強化を計つたが、第二次世界大戦が勃発してしまった。大戦中、敵性産組の疑ひから多小の圧迫もあった。克く艱難に堪えた。現在登録組合三十三。

* 印の組合は活動を休止中のものである。

- 1 Coop. Agricola de Cotia
- 2 Soc. Coop. Agricola Suburbana da Capital
- 3 Coop. dos Produtores de Banana de Juquia
- 4 * Coop. dos Plantadores de Mandioca de Alv. Machado

- 5 Coop. Agricola de Vera Cruz
- 6 Soc. Coop. Agricola de Bastos
- 7 Coop. Agricola de Avere
- 8 Coop. Agricola da Fazenda Alianca
- 9 * Soc. Coop. dos Produtores Agricolas de Igarapava
- 10 Coop. Agricola da Fazenda Tiete
- 11 *Coop. Agricola de Alvares Machado
- 12 Soc. Coop. de Cafelandia(antigo Hirano)
- 13 Coop. Agricola de Moji das Cruzes
- 14 Soc. Coop. Agricola de Promissao
- 15 Soc. Coop. dos Agricultores em Registro
- 16 Soc. Coop. do 2o Nucleo Colonial Uetsuka
- 17 Coop. dos Produtores Agricola em Juqueri
- 18 Coop. Agricola Bandeirante
- 19 *Coop. Agricola de Paraguassu
- 20 *Coop. Agricola de Aracatuba
- 21 *Coop. dos Plantadores de Mandioca de Bastos
- 22 Coop. Agricola de Suzano
- 23 *Coop. de Credito Agricola de Getulina
- 24 Coop. Agricola Mista de Pompeia
- 25 Coop. Agricola de Monte Alto
- 26 *Coop. Mista dos Agricultores de Presidente Prudente
- 27 Coop. Agricola Mista de Taquaritinga
- 28 *Coop. Agricola Mista de Mesquita
- 29 Coop. Agricola de Ourinhos
- 30 Coop. Agricola Mista de Tupa
- 31 Coop. Agricola Mista de Birigui
- 32 Coop. Central Nippo - Brasileira

邦人産業組合三十三組合中代表的のものは、コチア産組である。この産組の生産バタタ各年度價額はバタタ産業面の代

表的なものとして、産業面に大略した。

空白時代に衰退した邦人産業組合も多々あった。この原因の一つに敵性産業組合として、組合の上層幹部が追放され、竹に木をついだような伯人指導幹部がそこに坐った處に、組合員は熱を失った。

十六、工業界への進出

日本移民社会で工業の始めは、聖市に於て上塚皇国殖民会社代理人が、東京本社より月給の送金絶えた際、同志二三人と紙玩具製造を始めたのが最初で、一九〇九年の三月頃のことである。次は金子保三郎が紙玩具製造を始めた。一九一一年ごろであった。

奥地での移民工業の始めは、ノロエステ線のペンナ駅町に、古庄常喜が掘立板小屋で鍛冶屋を始めた。平野植民地の邦人植民相手であったが、當時ノロエステ線各駅にはない鍛冶屋であったため、近くの駅々から伯人外人の修繕品も可成あった。一九一五年ごろであった。

ノロエステ線に於てプランタ・マキナの製造人はエトール・レグルの尾形好松が最初で、一九二〇年から、次でリンス駅で中村仁太郎、一九二三年ごろから下矢治三郎も鍛冶屋の傍ら製造した。

一九二一年、ソロカバナ線アヴァレ駅で友岡岩吉が建築請負を始めていた。棉の名所で日本移民百家族を算へていた。

ソロカバナ線ポレビ駅奥の第二モンソン植民地に水田武一がマンデョカ製粉工場をやつたは、一九一八年であった。プ・ベルナルデス駅町に稲毛熊次郎が鉄工所を開き、プランタ・マキナの大々的製造を始めたは一九二七年からであった。プ・ヴェンセスラウ駅町には谷崎健一が精米工場を開設した。一九三〇年であった。

奥地管轄の日本領事館がバウル市に開設された翌年、同市

で古賀政治が家具製造販売を始めた。その頃、アラサツバ駅町に大原栄蔵は精米工場をたて、安瀬盛次は精珈琲工場を建てゝいた。

マツト・グロツソ州カンポ・グランデ駅町で中尾権四郎は一九二二年頃よりピングア醸造を始めていた。パラナ州の海岸、カカツ村で原甚五郎、安元茂吉、東光太郎、井藤時雄、佐々木政太等がピングア醸造に進出したのは一九二四年頃からであった。

レヂストロ植民地にブラジル拓植株式会社が當時聖州第一の精米工場を開設したのは一九二二年であつた。

一九三二年度移民渡伯廿五周年記念鑑によれば、聖市の家具製造工場は十二工場と発表している。この中最も古参の家具工場は杉本芳之助の経営で一九一六年頃より始まつていた。最初は椅子や花たて台等から始まり、伯人経営の家具店を譲りうけ一九二二年頃には聖市一流處の家具工場となつていた。屋号を「カーザ東京」とつけていたこれに次での工場が、菅平吉、譲治のミカド工場で、本田正之進も家具工場を開いていた。

一九三二年の聖市には土木技師が四人居た。原田政平、小林弘一郎、野村秀吉、中山等、橋詰時夫の精米工場もピニエイロスに開いていた。内畠石工場もコンデ街に営んでおり、大河内化学研究製薬工場、宮川彫刻師も開業していた。

當時サントス市には、海産物製造業が二軒あつた。製麺工場もあつた。精米業も一軒あつた。奥地帯をみると、アラサツバ駅町に鍛冶工業が七軒あり、グアララペスには荷車製造工場も鉄工場もあつた。

リンス市には製麺工場が一、製靴工場が二、パン焼工場も一軒あり、その他雑多小工業が廿一軒と増えていた。カフェランジャ駅町の丸石鉄工場はゼツリーナ町に移り、バウル市には金原電気療器製造所が営業していた。

ソロカバナ線プ・プルデンテ市には製麺工場が二ヶ處、パン工場が一、パウリスタ延長線のマリリア町には鉄工場が

四ヶ所製麺工場が一、精米工場が一に製油工場も一つ出来ていた。

以上大略述べたる如く、一九〇八年より一九三二年迄の二四年間は、移民工業の第一期で、言語不通、無資本の移民工業として遅々たる発展状態であった。一九三三年より一九四一年迄約七、八年間を移民工業の発達時代第二期とする。此間カーザ東山の資本が進出して珈琲生産地帯の三、四駅に珈琲精選機を据えた。東山絹工場、ブラ拓植民地チエテ及びバストスに絹糸繰工場、織物工場の進出があり、日本各棉花会社の資本進出で奥地棉作地帯に精綿工場が四、五ヶ所設置されたが、一九四一年には敵性工場として孰れも閉鎖されたり、凍結してしまった。

聖市ラツパ区に杉野敬次の鑄鉄工場も一九二九年頃より発展途上にあつたが、空白時代に敵性利要の衰勢に陥つていた。

一九四八年度、聖市の邦人工業界は多少活気づき、拡張されて、左の如き工場が興きていた。栗津の時計製造工場、一色鉄工場、赤星木工場、穂積玩具業会社、大河内薬化学製薬所、杉本チエテ家具工場、木田家具工場、東坊シネイラ工場、佐藤、河内・谷織物工場、管タワシ工場、ジャグアレ肥料工場、中央醤油醸造合資会社、ラ・ブロキミカ会社、池田、泉川石材製作所、加藤精密機械製作所、泉川金属製作所、西脇家具製作所、富士屋運動具工場、菅山眼鏡工場、中野フェルト草履製造所、原・漆間ラジオ製作所、清水ラジオ製作所等々であつた。

十七、日系人の漁業

日本移民が漁業を始めたのは一九一一年からであつた。サン・ビセンテ港で、當時末だ網をもたぬ移民連中が竿釣や投釣で獲た魚を市民に売って生活していた。

當時サントス港も未完成で、埋立工事中であつた。埠頭仲仕事にアブレた四、五の日本移民に副島恵祐が中心となつて、サントス漁業会社の破れランチを借用、修繕し、羅針盤一つでカナネア方面へ乗出日本人だけで出漁し、その一孤島に根拠を据えんと上陸したが、島守役員に外国人は滞在罷りならぬと迫拂はれたのでオヂヤンとなつた史實がある。

その年、リオ・デ・ジャネイロ州のグアナバラ湾イリヤ・ゴペルナドルに漁業始めた日本移民もあつた。最初五人通訳の一人大野基尚が笠戸丸組の愛媛縣人東野綱一、音市兄弟と橋本重左工門、池田栄太郎第二回移民田村某等を聖市から呼び寄せ、漁業を始めたが、日本で漁師であつた彼等も網がなくては仕事にならず解散した。それから十年、一九二三年頃まではサン・ビセンテ海岸やサン・セバスチオン海岸で島谷や、高越や清岡、今川等が僅かに鰯漁をやり、干鰯をやつていて、はかばかしい活躍には入らなかつた。日本移民の漁業の華やかさに入り始めたのは一九二三年以後であつた。

伯国聯邦法規により外国人は伯国海岸で漁業禁止されていたので、日本移民はコソコソと漁業をつづけていたが、それでも十年たち、多少資本も貯えた。その頃、サントス港に日本総領事館出張所が出来た。第一回五人通澤の一人嶺昌が書記生として主任となり赴任した。彼は伯国帰化を彼等漁業日本人にすすめた。當時嶺が帰化手続を了してやつた日本人が十五、六人あつた。

現在サントス漁業界の大立者菊池弘策、都々木幸徳、小野敏松、橋本重左工門、今川金蔵、名嘉文五郎、清岡等はその當時の帰化伯人である。

一九二三年頃は一隻の小舟にサオをたてゝ短い網で曳いていたが、資本が貯積されると油動力の船を購めた。本格的に漁業に乗出した。一九二八年、初めてポンタ・ダ・プライア漁業組合の名で相互扶助を目的とする団体を組織した。これとて、法規によつたものでなく、頼母子講式の小資本の運轉と、販路共同開拓であつた。

この期間、純伯人漁業仲間から競争圧迫を幾度も繰返しながら、因つて一九三二年七月一日、サントス漁業組合の設立をなし、対抗策に出た。當時組合員は六十三名であった。資本金百コントス、役員は組合長、副、会計二名で、理事が四名であった。サン・セバスチヨンに支部をおいた。この頃から網もトロール船を装備し、漁獲の統制活動を計ったが、伯人漁師側より、あんな網上仕掛けでは、サントス海岸の魚は獲盡してしまうと、當局に密告された。網の押収にあつたりした。然し帰化人等は団結し、製氷工場や冷蔵庫をも設備し、貨物自動車も一台購入した。組合長に島谷岩吉がなつた。その中に広島縣人が二十二家族もいた。

トロール網船を曳いたものは僅かで、小舟も僅か三十隻であつたが、一九三〇年度の漁獲高は九七五コントス、一人當組合員月一コントスとなつた。重なる漁獲種、量は

ロンカドール 二五〇箱（六〇キロ入） 六七、五〇〇針

クルビーナ （グチ）三四〇〇箱 八七、〇〇〇針

ガラエビ 二、九〇〇箱 一三〇、〇〇〇針

當時この量はサントス全漁獲高の四割といわれた。

一九三一年パラナ州パラナグア港にも日本移民の漁業者があつた。今給黎矢吉等が組織した（第一回移民） 日系漁業組合であつた。彼等は一九一九年頃まではサントス港外でやつていた人々であつた後にペルー移民の清水安次郎が牛耳っていた。戦前は拾噸の製氷工場を設け、トロロー式網船、漁獲物はクリチーバ、ポンタ・グロツソ、リオ・ネグロ及サン・パウロ市方面へ三、四千キロ送り出していた。

この組合も、一九四二年、帰化権が全く無視されてパラナグア港を追放されてしまつて一際漁業の根底を無くしてしまつた。サントス港の漁業組合も、戦前は帰化人二百八十七人となり愈本格的繁栄に人らんとして、突如、空白時代に入り、漁業者等は帰化権を無視され、サントス管轄外の奥地へ二十四時間内に立ち退きを命ぜられてしまつた。日系伯人二世世を持てる菊池等一部は二世伯人のみで屋守して頑張

り、トロール網も船も遊ばせたなり動力油不売で休業していた。一九四五年終戦と共に請願してサントス港に大部分漁業者等は帰ったが、全く足を海から洗ったものもあつた。現在の船持漁業家は 菊池弘策九隻（二十二噸二隻以下七隻）都築幸徳六隻（二十噸二隻）小野敏松四隻、大西静義四隻、沖田一美（兄）二隻、沖田貞美一隻、中井重太郎、谷口共同四隻、上杉政広、奥山政次郎共同二隻、橋本重左工門、佐藤四次郎共同二隻、城森篤一隻でトロール船は戦後三年目三十五隻と恢復したが、船價は戦前の六倍に上って、彼等の財産は膨れていた。

漁域は重に南方、パラナグアから、サンタ・カタリナ州の沖海に迄進出している。魚の種類はエビ、ペスカーダ、クルビーナ、ロンカドール等で、聖市中央市場に現われてる鯛や鰹はトロール曳網ものではない。ロンカドールの如きはキロ二針から三針で卸している。小舟の漁獲は毎日で、年五、六百コントス程度。トロール船の方は月百二十コントスから百五十コントス位の處、年にして一千五百コントス内外、これが、各トロール船の持主の年収額であつた。

販売組織は区々である。氷結にしてサン・パウロ市場に出しそこで直接消費者に販売するもの、仲買商に卸売するもの、都築は自己の船で獲物を氷結にし、首府リオ港迄海路送出し販売している。

サン・セバスチオン島に於ける邦人漁業の元組は鎌木鶴吉である。彼の死後未亡人は荒くれカイサラ漁人を使役して尚漁業をつづけている。現在同所には平田、今川、清岡、藤井、上原等の漁業家が十八噸のトロール船で活躍し、獲物は主に乾物として市場に送出している。

邦人漁業卅年、一番好景氣は第二次世界終戦後の三年間であつた。卅五隻のトロール船に乗組の沖行第一世は現在では六名しかない。他の第一世は既に老いて家庭に網の仕事をうけ持っている。沖働きの人々は重に若き澁刺たる伯人力イサーラ連中である。それに混つて日系第二世の数は伴かに十

五、六名である。

卅年の邦人漁業史中、海上水難の死亡者は僅かに四名であつた。

奥地のカフェ耕地に於ても、第一世の耕地バトンを第二世は継承を嫌うように、海岸地帯に於ても、親の漁業バトンを継承することを第二世は悦こばぬ傾向である。

聖州奥地のパラナ河淡水漁業のことは、本文ソロカバナ線に於て書いた。茲には重複をさける。

十八、商 業

日本移民は農業契約移民として大抵渡伯したが、農業者の面を被った商人も稀にはいた。彼等も農業契約期間を規定通り済ました後商売を始めた。

聖市で移民が最初商売を始めたものは、笠戸丸移民より二年前に渡伯した鹿児島縣人の松下正彦で、彼が聖市で「ドーセ・ジャポンネース」とふれてフェジョンで作った「シルコ」を売り歩いたことは既に記述した。松下は玩具行商で後にアマゾナス迄進展した。その頃、聖市に藤崎商会の日本雜貨店があり、リオ首府には山縣の花火屋があり、蜂谷吾輔、今村広は陶器の行商をやっていた。耕地通訳に嫌気さした移民の草分鈴木貞次郎は一九〇八年末聖市サン・ベント街で間口一メートル半の果物屋を開いた。一九一二年末、聖市ブラス区ランジェル・ペスターナ街の入口でボールを開いたのは第二回福岡移民の柳木悦太郎妻テイと養女ヒサであつた。その頃リオ首府と聖市をチョンキナくの掛聲で街上玩具行商したのは木戸磯右工門であつた。彼は南洋から流れて来た。

聖市コンデ街に椎野豊（後の同盟通信員）と篠原シゲが共同経営の小間物店を開き、森口宇吉、妻戸敏行が三商会の名で小間物屋と豆腐屋を始めたのは一九一六年で、上地旅館が出来た。その頃、聖市を本拠として中矢熊太郎、遠藤常八

郎、菅平吉（家具商菅議次の兄）等は小間物の奥地行商をやっていた。

奥地で商売を始めたのは一九一七年バウル市で柳木實太郎が小間物店を始め、澤尾磯七、北山吾一共営の日本旅館が始まったのはその前年であった。平野植民地のあるプ・ペンナ駅で河尾利市の妻みさよが理髪店を開いたのは一九一八年頃で、リンス駅で鈴木昌吉も理髪店を開き、彼の妻みよしが宿屋を開いた。太田久次郎が雑穀仲買倉庫業をやり、西金蔵は写真館を開いていた。その頃日本移民の大集団植民地駅のブリグイ町で中村長次郎、浦六平等が宿屋を開いたのは一九二二年で、土岐清松がボテコを始めた。これより二年早くアラサツ・バ町では安瀬盛次がアーリオやセボラを仲買してマツト・グロツソに送出していたが、後ガゾザ店を出したのが一九二〇年であった。それから大原栄蔵兄弟が雑穀仲買業を始めた。

ソロカバナ線では棉の名所のセ・セザー駅に岡島仁郎が雑貨店と雑穀仲買を始めたのは一九二二年で、プ・プルデンテ駅に片岡音市が雑穀店兼雑穀仲買業を始めたのは一九二二年であった。アヴァレ市に吉崎重蔵が宿屋を始め、長田茂八が雑貨店兼宿屋仲買を始めたのは一九二二年。

マツト・グロツソ州カンポ・グランデ市で邦人が薬店を開いた。一九二一年源川幸吉であった。その一年後宜保三郎は歯科医院を開いていた。

レヂストロ植民市街地に前地七郎がホテルを開業したのは一九一八年からであった。

日本移民の上陸するサントス港に日本宿屋を開いたのは古謝將義で、一九一九年からであった。前田の潮旅館の出来たのは一九二四年からで、ジュキア駅の土井万七旅館は一九二三年からであった。小淵はぎのの三笠旅館は一九三二年からであった。

日本移民渡伯二十五周年當時の一九三三年、重なる各都市

に於ける日本移民の商売進出振は左の如く現はれていた。
 (聖州新報社及伯刺西爾時報年鑑に因る)

聖市 (商業の部)

雜貨商	一二	家具商	二一
菓子商	一二	豆腐屋	二三
青物商	三	写真業	二
玩具商	四	旅館業	一〇
飲食店	一三	薬剤師	一九
齒科医	七	理髮業	一一
撞球店	二	書籍店	一
土地売業	五	穀物仲買	二
映画社	一	蔬菜業	一五
柔道指南	一	辯護士	一
伝導業	三	医業	三
教育業	五	雜誌社	一
新聞社	四	衛生業	一
自動車業	一六		

サントス市 (商業の部)

雜貨商	一〇	穀物仲買	六
旅館業	五	理髮店	七
菓子商	五	自動事業	一九
蔬菜店	二二	豆腐屋	一
肉屋	一	齒科医	五
薪炭商	三	家具商	二
写真館	三	教育業	一
飲食店	三	馬草屋	六

バウル市

理髮	雜貨商	齒科医	写真館	雜穀仲買	ブ・ブルデ ンテ市	豆腐屋	写真館	果物店	穀物仲買	パール	雜貨商	アラサツ ーバ市	齒科医	古道具店	飲食店	菓子屋	旅館	藥店	理髮店	蔬菜店	新聞社	理髮	医師	飲食店	雜貨店	
三	一〇	一	二	一		一	一	二	四	七	九		三	一	五	五		五	二	七	五	一	五	一	二	一
	自動車	菓子	医業	旅館		乗合自動車業	醬油屋	医業	運搬業	菓子屋	旅館		医業	果物店	自動車業						穀物仲買	自動車業	菓子店	パール	旅館	
二	一	一	一	三		一	一	一	二	五	五		二	二	六				四	二		二	一	二	二	三

雜貨商
一一

三

旅
館

二

写真

—

—

齒科医

—

藥店

理髮店

二

医業

藥店

雜穀仲買

自動車

三

齒科医

—

医業

旅館

理髮店

写真

在伯移民の商業は、最初は対邦人相手のものであった。今でも旅館、理髪店、菓子飲食店、洋服、裁縫、歯科医の如き

は専ら邦人相手の商売状態であるが、雑貨店、果物店、穀物仲買、洗濯店、蔬菜屋、写真館、ボテキン、ボール、薬剤店の如きは対外人一般にサービス宜しき南売と躍進している。一九三二年迄を日本移民の商業界進出第一期とすれば、第二期は一九四一年上半期迄で、此第二期間の邦商進出振は各都市町に雑貨雑穀果物店、洗濯屋の如きは勿論、聖市中央市場に於て蔬菜卸商が全数の三分の二を占め、アラサツバより聖市に本店を移した大原栄蔵が穀物仲買商として聖市の大物になり、田中義数も北パラナより聖市に穀物仲買商として進出した。聖市中心街に中矢商店が三階建を新築して進出した。羽瀬、国井、伊藤、小西リマ・カント、梅田、蜂谷、西谷等日本商品の貿易と卸商、小売商の華やかに出現していたも斯の期であった。

一九四一年末は、棉花邦商の東棉、ブラスコット、日本綿花社も閉店していた。

移民商売の海興が店仕舞し、在聖邦人お三家の他ニッ、ブラ拓も、東山も閉店した。その附属銀行三ツも敵性資本として管理されてしまった。蜂谷商会、伊藤商店、国井商店、違藤書籍店等々聖市の中央街から姿を消してしまった。

空白時代に日本残品を売盡し、国内産品で対邦人を華客として躍進したのは中央商店の新経営者となった太田、河野であった。ジョン・メンデス広場が改竄され、中矢商店の建物が華やかに広場を飾り、邦人集散の溜場になったからの商売繁昌であった。ビーラ・マリアナ区にカーザ・ウニベルソも室内装飾店として進出した。

空白時代に移民商業として致命的な損害を被ったのは、全部の邦人に退去を命ぜられたサントス市の邦人界とパラナ州のパラナグア市やアントニナ町、モレッツテ町等海岸都市の邦人商店工場であったが、その他の都市の邦人集団地方の邦人工には、著しい損害はなかった。

空白時代後に特異な邦人移民商業発展を遂げたのは、聖市であり、セントラル線にはモヂ市とスザノ町であり、ソロカ

バナ線ではプ・ブルデンテ市、パウリスタ延長線ではポンペイア町より奥地帯のツパン町、オズワルド・クルース町、ルツセリヤ町であり、ノロエステ線ではリンス市、アラサツ―バ市、グアララペス町、パライズ市等であつた。パラナ州に於てはロンドリーナ市であつた。

聖市に於ける邦人の洗濯業店は全市千五百軒の中三分の二は日本移民の洗濯店といわれ、同業界に恐慌を孕む。尚ほ聖市の街々の果物店が白衣の仕事服きた日系女性と日系男性で占められつゝあるも異観である。

空白時代閉店した邦人商家は一九四六年終戦後続々と開店した。日伯貿易開始後斯うした邦人商業の情態が何う変化するか、在伯日本移民の商業第三期に入る。

(写真―移民四十年記念祭
サン・フランシスコ寺院前の笠戸丸組とその家族)



(写真―移民四十年記念祭 運動場に於ける笠戸丸組)



第二章 伯国移民史の前夜

―日本移民入国に至るまでの伯国の社会・経済―

一、奴隷廃止から資本主義へ

奴隷制度と対英関係

移民といのは移住する者の側から言へば、新天地に行って新しい生活を開拓することである。ところが、移民を受入れる国から言へば、要するに労力を補充することであるに過ぎない。その場合将来の民放構成をおもんぱかつて人種だとか交化だとか移民選擇の標準にすることはあつても、主眼が労力補充である点に違いはないだろう。少くとも伯国に於ける外国移民の始めはそうであつた。

だから、移民史を語るには、それに先立つて奴隷制度を語らないと、移民の入国するに至つた事情や背景が詳らかとならない。ところが、伯国の場合は、そのまた奴隷制度の廃止を語るにはどうしても伯英関係に及ばねばならない。ことほど左様に英国と奴隷との腐れ縁があつたわけで、奴隷と移民と英国の態度とは一つの三角関係をつくつていたのである。

伯国に対する欧州白人移民の招致が始めて實現された前世紀の中葉（一八五〇―六〇）の頃と言へば、伯国は殆んど英国の保護国同様の地位にあつたといつてもよい。一八〇七年、當時昇天の勢いにあつたナポレオンが、蜿蜒ピネー山脈をこえてイベリア半島に進出し、その一隅にある小さな王国ポルトガルが、ナポレオンの猛將ジュノーの率いる精銳の前にあわや粉碎の悲運をなめようとしたとき、ポルトガル王室や政府首脳部の脱出をたすけて、これを伯国にまで護送したのは英国の艦隊であつた。この時以来、命の恩人英国に対して葡王室は全く頭が上らなくなり、義理と金縛りで腐れ縁

があつたわけで、奴隷と移民と英国の態度とは三角關係をつくっている。

1826年に協定された黒人売買にかんする英国との条約で、安全辨として一方的に伯国はこの協定を放棄出来るという條項はあつたが、それすら英国から金縛りにあつてその鼻息を窺うに汲々としていた伯国にとってみれば空念佛の白紙にもひとしいものであつた。一八三一年に起草され、ついで議会の協賛をまでも経た伯国の刑法が、その内容の可否を英国に問われてついに實施不能に陥つたのもこの頃の英伯關係を現わしている。とにかく、當時英政府を代表したパルマーストンのアバヂーン内閣は、そのあり余る武力を背景にして、伯国だけでなしに世界の弱小国に対してありとあらゆる圧迫と搾取を欲しまゝにしていた。

黒人売買禁止の協定（一八二六年）

この協定を成立させた主なる要因としては、當時獨立を勝ち得たばかりで、本国のポルトガルとは義絶され、とうてい未だ独り歩きが出来なかつたブラジル帝国が、心ならずも英国の庇護によつてその基礎を定めようというところにあつた。然し奴隷制度の存廃は伯国にとっては全くの死活問題であつた。過去三百年のあいだ、奴隷を唯一の勞力として發達をとげてきた伯国の産業は、農業も畜産業も鉱業も、これによつて潰域的な悲運をなめねばならない。今でこそ社会主義のお蔭で、働く者の幸いとか、勞働の神聖だという言葉が使われるが、當時にあつては、手足を働かす筋肉勞働は最も卑しむべきものと蔑視されこれこそ牛馬にひとしい奴隷に課された仕事であつて、白人が自ら筋肉勞働に従事するなんと到底思ひも及ばぬことであつた。

白人の農家は黒人奴隷を鞭をもつて酷使し、そのあがつた収益で生活すればよかつた。

だから、假りに奴隷制度そのものゝ廃止ではなく、一八二六年協定のように単に黒人輸送の禁止であつても、結局は漸次廃止同様の結果にゆくものであるから、これは伯国民にとつても到底堪えられぬ痛棒であつた。しかも黒人奴隷輸送弾圧の聲が英国に揚つて、保護国同然であつた伯国を圧迫したところに、痛し痒しの苦しい立場に伯国政府を追い込んだ原因があつた。

大体奴隷というのは農場でもどこでも、家畜と同じような取扱ひを受け、食物も衣服も不充分で、その生活も非衛生的なところへ労働が過酷であるを普通としたから、當然死亡率も甚だ高かつた。とくに乳児死亡率において甚しかつた。だから年々歳々アフリカから新らたな黒人群をもつて来て補充しなければ時ならずして労力の不足を来たすのは火を見るよりも瞭らかであつた。

それが一八二六年の協定では、實施後四ヶ年を経たら、つまり一八三〇年に至れば奴隷輸送を全く禁止するという約束であつたから、この状態を目前に控えて伯国の民衆とくに耕地主を中心とする農村関係の保守派が全く絶望的な状態に陥つたのも無理からぬことである。三世紀のあいだ奴隷のお蔭で生活して来た彼等には、奴隷労力なきあとの産業など想像も及ばなかつた。

當時の輿論はとみれば、これまた殆んど例外なしに奴隷廃止に反対である。これは対英協定が強国からの圧迫で、如何に民意を無視して行われたか、如何に政府首脳部と国民との間に深い溝があつたかの現われでもあろう。英国自身がその尤大な艦隊で巨利をおさめていた奴隷の輸送事業を廃した時すら、ヴィルパースオース運動といわれて、實に長い年月を要したのであつた。

しかも奴隷の輸送事業は、英国にとっては植民地経営上の一部門に過ぎなかつたのであるが、伯国にとつては死活にもかゝわる大問題であつた。この点をよく了解しなかつた英政府首脳部の迂闊さ加減こそそのちに諸種の難題を生んだのであ

る。だが、実際には奴隷廃止の協定を全く履行する意志のない国内輿論を、履行を強要してくる英政府とを向うに廻して板挟みになって窮地にあえいだのは伯国政府であつた。

奴隷廃止をめぐる暗闘

アフリカの奴隷狩出しの基地たるシエーラ・レオニアという所と、主な奴隷集散地であつたりオ市とに奴隷輸送裁判所というのが設けられた。これは、輸送禁止の法網をくぐつて奴隷の密輸入業者が跋扈したから、これを取締るために英海軍の監視艦が出動して奴隷船を拿捕し曳航してくるのを裁くところであつた。協定によると、裁判には必ず伯国側からも官憲一名が臨席する筈になつたが、実際には種々の理由でたゞの一度も伯国代表の裁判に参加したことはなかつた。だから英国ひとりの裁判も同じことで、結果は拿捕された奴隷船に対する賠償要求を協定どおり英政府に提出してもそれが可決されたことなく、奴隷輸送業者の方はいつも船を横取りされての泣き寝入りで、後にはあべこべに伯国政府の方から業者に賠償金を手交するという有様で、これは議会の大问题となつた。

これに対して伯国朝野の輿論が沸き立ったのはいうまでもない。言論機関に、議会に、街頭に英国に対する非難の聲は次第に昂められて行つた。とくに奴隷船の所有者や、それに關係ある筋では甚しかった。にも拘らず英国による奴隷船の監視制度は日増しに嚴重をきわめてゆき、遂には伯国の沖合やアフリカ航路を遊弋して奴隷船を見張るだけに止らないで、伯国の領海内に侵入してまでも英の監視艦は陸揚げ中の奴隷船を拿捕するようになった。ところが、監視が嚴重になつて奴隷の輸送が止まつたと思うのは大違いで、奴隷の密輸業者はいよいよ執拗にいく頑強に英艦の監視網をくぐつて輸送をつづけた。英国の態度に反感を抱いていた民衆や、

奴隷取引のよりよき顧客である農場主の勢力が背後から支援していたことは言うまでもなからう。

困ったのは伯国政府である。英国との協定は守らねばならぬかと言って協定の履行は事実上不可能にひとしかつた。そこで政府は伯英協定を施行するために一策を案じ、一八三〇年以後は密輸入で一たん伯国の国土に陸上げされた奴隷は全部釈放するように輸送業者に発令すると同時に、黒人のアフリカ返還をすら考慮に入れたのであった。だが奴隷商にしてみればたまったものではない。巨額の投資で買い、非常な危険を冒して輸送した黒人の群をむざむざ無償で手放してはたまらない。そこで黒人の輸送業者は一たん陸揚げした奴隷を税関に入れて法令どおりに自由を宣するが、その時すでに一味の者が税関裏に待機していて税関から出て来る黒人を又ぞろ捕獲するという対抗手段に出た。これに狼狽した政府は一八三一年、密輸入した奴隷は、すべてアフリカに還附する義務があるという法令を發布した。ところが法令通りに黒人をアフリカに返還してみたところで、奴隷出身地の首長の方では一たん売渡した黒人を引取って代金を拂戻す意志は全く無いから、この法令も亦反古同様にとゞまつて何の効果をも奏さなかつたのである。

この奴隷問題が議会でも街頭でも喧議され出し、世間の耳目がこれに集中されるに伴って、国民一般はこれほどまでに伯国の国内を騒がし対外関係を複雑にする奴隷という問題を非常に危険視するようになった。一方には、當時の若手の識者層が、歐洲仕こみの自由思想を鼓吹しはじめた故もあつたろう。またあたかも黒人が耕地主や農場の管理人を殺した事件が続発して世人の耳目をそば立たせた。そこで奴隷の身分にあつて殺傷を犯した者には極刑が設けられ、黒人には一切の武器の携帯を禁止した。世人がいかに神経過敏になつていたかゞ分らう。この頃から奴隷問題はその方向を変えて、一歩々々解放へと近づくのである。

進歩派と保守派の対立

この奴隷制度廃止の問題を別な角度から見ると、それは「進歩派」対「保守派」の闘争である。各国に起りつゝあつた資本主義化への嵐、いわゆる文明開化のおとずれは、伯国にも亦忍び寄りつゝあつたのだ。「進歩派」はもちろん奴隷制度廃止の急先鋒で、奴隷こそは伯国の進歩を害する障碍だとする商工階級であつた。これに対し、奴隷経済を基調とする地主階級―いわゆる「保守派」は頑として奴隷存続のために闘つた。

前世紀初葉から奴隷解放に至るまでの約五十年というものの、伯国の政界は、實にこの両派の対立と暗闘によつて貫かれてゐる。「進歩派」の勇將は、いま奴隷解放の恩人として崇められてゐる有名なジョアキン・ナブーコであつた。最初は勿論「保守派」である地主階級の勢力の方が比較にならぬほど強勢であつた。それが、種々な理由で保守派に分裂が生じると、その一部は絶え間なく「進歩派」へと移動して、勢力では遂に進歩派が勝利を占めるようになる。

輸送禁止の問題でさんざ手を焼いた伯国政府では、黒人の労力に代るものは何かという方面に視界を廣めて行つた。そして一般に言うファゼンダとは別に、コロニアという施設が話題に上るようになった。すなわち、筋肉労働を蔑視してゐた當時では「農場」というものは奴隷の手で維持されるものと考えていたが、これとは別に、白人労働者のみの集団をつくつて、そこで各自が農場を経営するといふ行き方―つまりコロニアなるものが注目され出した。ファゼンダとコロニアという両語は、その當初においてこの様な区別から生れたものである。

ちょうどその頃、バルバセーナ侯爵は歐洲を巡遊中であつたが、彼は、伯国に移住する希望をもつた白人移民を募集するように伯国政府から訓令を受けた。一八三六年のことであ

る。そこでバルバセーナ侯爵は、英国（！）やスイスを巡廻して移民を募つてはみたが、その試みは全く失敗に歸した。そのうちにも伯国では歐洲移民を歓迎するの聲が漸く昂まりつゝあつた。一八三五年には、新移民の保護を目的とする一植民会社が設立された。そして一八二五年から三九年までに、二一・五〇八名の白人移民がこの会社の保護をうけて入植した。移民を募つて判つたことは、奴隸制度が移民の應募を妨げるという事實で、奴隸同様の待遇を恐れる白人移民は容易に渡伯を肯んぜないことだった。そしてこの事實は奴隸解放論に拍車をかけ、欧州移民を欲するならば先ず奴隸を廃せよ、と叫ばれるようになった。

このころから奴隸反対の聲はいよいよ本格的となつて、一八五〇年、有名なエウゼビオ・デ・ケーローズ案の可決と共に、さしも数世紀の長きにわたつた黒人奴隸輸送は全くその影を歿するに至つたのである。しかし、未だ奴隸そのものが廃されたのではない。

奴隸輸入禁止の反響

奴隸輸入を禁止した結果はどういう形で現われたらうか。先ず直接的な影響としては、それまで奴隸となる黒人の狩出し、売買、そして輸送に投下されていた資本がだぶついたことである。勿論それが一体どの位の投資額であつたか知る由もないがその直後の伯国經濟界に及ぼした波紋を見ると、厖大な額に上つていたものと見られる。すなわち意外な資本の放出で、それまでの金利は一時にガタ落ちとなり、その余波はいろんな企業会社の株式高騰となつて現れた。ために、工業方面では次々と新たな企業が促進され、商業方面では動きがとみに活発となつてきた。

一八五〇年に約一千コントスに過ぎなかつた国内の通貨は、四年後の一八五四年ともなれば實に二万コントという増加ぶ

りであつた。更に三年後にはこの貨幣流通高は約二倍となつたのである。

一八五〇年を楔機として伯国の「文明開化」がはじまつた。一八五四年には伯国はじめての鉄道としたマウワーフラゴーズ間（現在のレオポルデナ・レールウエー）の汽車が開通した。その翌年にはペードロ二世鉄道（現在のセントラル線）の敷設も着手された。電信の架設されたのも一八五二年のことであり、これとほぼ時を同じくして定期航路の特許企業制度も實施された。いまゝで植民期時代からの舊い機構に縛られていた伯国の産業は、こゝに新しい時代の曙光をのぞんで膨脹に次ぐに膨脹を重ね、国民はあめつちの栄える世にあつたと許り、文明開化を謳歌したのであつた。

それまでの農村では、富裕な農場主が利益をあげても他の使途というものがなかつたから、利益はあげて耕地や奴隷の購入や、牧畜地帯では牧場や牧牛の買付けに投資するのが慣わしであつた。だから一度奴隷や家畜の間に伝染病が蔓延するとか、様な天候不順にぶつ喰わすと忽ち破産状態に瀕することが珍らしくなかつた。ところが、文明開化の波に乗つて地方の金融機関が発達し、また産物の販売市場がとゞのつてくると、農場主の経済的な考え方も變つてきた。農家の頭は「物」から次第に「金」に重点をおくようになり、生産を増やすこと、そして生産費を引下げること、すなわち、伯国は近代資本主義の嵐へと突進しつゝあつたわけである。

もちろん伯国の「文明開化」のご一新が、たゞ奴隷輸送の禁止だけでもたらされたと見るのは余りに近視眼であらう。英国に端を発した商工階級の擡頭と資本主義の急速な発達、世界の隅々までも波及しつゝあつたのだし、この客観的な状況の下に晚かれ早かれ伯国の文明開化も行わねばならなかつた。たゞ奴隷輸入の杜絶は、この傾向に大きな拍車をかけたものであると言へよう。

世人はようやく、奴隷廃止を叫んできた。いわゆる進歩派に先見の明あつたことを認め出した。奴隷こそは「文明開

化」への檣壁であるとすら考えるようになった。そして奴隷制度の擁護論者は次第に世論から置きざりにされて行つて、結局奴隷の必要性を認めるのは、たゞ奴隷の所有者である農場主だけという傾向になつて行つた。これを一八五〇年前に比べれば、僅々十年十五年の間にまことに目覚しい思想の变革、社会状勢の転換であつた。一方では黒人の輸入が杜絶した結果、奴隷の数は年を追うて減少する一方で、したがつて奴隷の相場もぐんぐん騰つていった。諸種の機械化で生産方法は改良される一方で、奴隷の相場が騰るのだから奴隷の労力を使って引合うのは非常に利潤の多い作物に限られるという實に奇妙な現象を呈してきた。以前は奴隷の手がないと何一つ事業が出来なかつたものが、こんどは高價な奴隷を食はせて維持することだけでも、困難だという場合も多くなつた。そこで一八六〇年ごろから不景氣な地方では奴隷が好景氣の地方へと移動流入をはじめた。とくに當時何の産業にも恵まれず、經濟不振の状態にあつた北伯地方に於てそれが甚しかった。だから、一八八八年に奴隷が全く解放される以前、すでにアマゾン州やセアラ州の如きは一八八四年に全奴隷の自由を卒先して宣したのも決して不思議でも何でもないことである。

黒人輸入の杜絶した一八五〇年から、解放令の發布を見た一八八八年へかけての約四十年間に、奴隷の人口が如何に激減したかは次の数字で示される。(カイオ・ブラードに據る)

(自由人)

(奴隷)

全人口に対する

奴隷の百分率

一八五〇	五、五二〇、〇〇〇	二、五〇〇、〇〇〇	三一%
一八七二	八、四二九、六七二	一、五一〇、八〇六	一五%
一八七七	一三、二七八、八一六	七二三、四一九	五%

すなわち解放當時、奴隷はすでに全人口の五%に過ぎな

かつたわけで、これでは事實上ほとんど奴隷がいなくなつてから、「解放」が宜せられたとも言える。では、奴隷の大部分はどこに集中されていたか、言い換えれば奴隷を使役してなお利潤をあげ得た作物は何であつたろうか、それはカフエーである。聖州の珈琲こそは次第に労力問題の中心となりつゝあつた。

二、カフエーと移民のたどつた跡

触媒としての鉄道

ブラジルの奴隷制度が崩壊したのは、英国の人道主義のお蔭でもなければ、ひとりイサベラ女王の大英断に負うものでもない。英国の人道主義は、世人をして資本主義に酔わしめるための、いわば美酒であつたとも言えようし、いまは奴隷解放の恩人として小学校の生徒からまで崇められるイサベラ女王が発令した解放令は、大英断に違いなかつたとしても、いわば奴隷制度消滅への挽歌でもあつた。事實上、奴隷制度はもはや存在しなくなつていたのだ。たゞ、男まさりのイサベラ女王には、他の政治家にくらべて世の進運に対する見透しができ、そしてそれに従つて国政を運用するだけの勇氣があつたのである。この潰滅に瀕した奴隷制度を最後まで支えていたのは、前記したように聖州のカフエーであつた。

カフエーの栽培が何とか目鼻がつきはじめたのは一八〇〇年ごろであつた。それが一八五〇年ごろに至ると俄かに膨脹をはじめ、それから世にいわゆるオーロ・ヴェルデの時代を現出した。すか半世紀の間に、サン・パウロのカフエーは押しも押されもせぬ経済中枢にまで伸展して行つた。

カフエー栽培の伸び拡がつた足取りを辿ると、それは鉄道の延長と歩調を合わせている。近代文明を運んで行くレールが百軒のびる毎に、珈琲の緑なす波も亦百キロひろがつて

行つた。はじめのうちは、カフエーの方が次第に鉄道をみちびいていたのだが、後にはそれがあべこべになって、肥沃の新開地を目指して敷設された軌道の方が、カフエー栽培を引振るようになった。はじめはパライバ溪谷に興つた珈琲園は、セントラル鉄道を通つてサンパウロ州へと進出した。中央線（セントラル）こそはカフエー栽培を聖州に誘入されるための触媒をなしたもので、いわば聖州今日の盛況をもたらす水先案内でもあつた。中央線を通じて聖州に入ったカフエーは一時タウバテー市を中心として発展した。いまでもタウバテーの古都を訪れる者は、中心の大通りに亭々とそびゆる世紀を古りた大椰子や、豪奢な農場主の曾ての生活を思はせる軒並の大邸宅を見れば當時の盛況を偲ぶに十分であるうし、少し横にそれてシチオに入れば廃園になつたカフエーのあとは緑なす丘陵の牧場と化し、僅かに点々と畝状に残る切株でそれと判る珈琲園の名残りは、一世紀の歳月を偲ばしめるに足りるであらう。

カフエーの中心がカンピーナスに移つたのは一八五〇年ごろのこと、それからはモヂアナ鉄道がテーラ・ローシヤの沃土に道をひらいて西進するに伴い、俄かに活況を呈しはじめたカフエー熱は、一八七〇年ごろに至つてリベロン・プレートに珈琲の都を築いた。カフエーがテーラ・ロシアを追いつつ三角ミナスに及んだのは勿論である。

ついでパウリスタ鉄道が、カフエーの波をリンコーンの僻陬やイチラビーラにみちびき、次にはアラクワラ方面やアルト・パウリスタにもその余波を運んで行つた。イタリア移民が大量に移住をはじめて黒人奴隷の労力に代つたのはちやうどこのころのことであつた。次にノロエステ鉄道の敷設は珈琲の波をついにマツト・グロツソ州にみちびいたが、このころから日本移民の移住がはじまつた。飽くところを知らぬカフエー熱は、轉じてソロカバナ鉄道に移ると、古くから牛馬取引の中心として繁栄を誇つていた古都ソロカバを置きざりにして、中部ソロカバナから一線にして北パラナへと伸び

て行つた。

ざつと以上が、カフェーがサンパウロ州へ入つてから辿つた発展の足取りである。

珈琲の文化

昔、天儉の地サンパウロから、白人土人の混成になる彼の勇壮なバンデイラ隊が、奴隷捕獲や金銀寶石の夢を追つて西へ西へと繰出したところは、バンデイランテのひらいたピカーダの溪谷にひろがる沃土や河川の交流する要衝などを選んで、隊員のうちわ落伍者や変り者などが草葺きの庵りを結んだのがはじまりで、広茫とした奥地の諸々方々にバンデイラの足跡をしるすように村落が出来て行き、それが後になつて鉄道を敷くときの目印になつたのであつた。文明の世の中になつてこれらの村落が鉄道で結ばれ、オウロ・ヴェルデの波が汽車に乗つて西方へ運ばれるころになると、こんどは沿線の沃土は忽ちにして見わたす限りの緑波なす珈琲園と化し、バンデイラがその種を蒔いたかつての村落は一夜にして都市となつて出現した。しかもバンデイラの時は後続部隊がなかつた。こんどは、農場主とコロノのあとにつゞいたのは、悪く言えば資本主義の手先、よく言えば文明開化の使徒としての任務を帯びた商売人の群、金貸し屋、更には工匠や役人や代書人や、その他もろくの後続部隊である。珈琲の都には商売が繁昌し、金融機関も完備し、のみならず、鼻息のあらいつアゼンデイロの享樂慾をみたすに足る娛樂の機関もとゝのつてくる。町はだんだんお化粧が上手になつて都市としての威容もでき、電燈がともり街路が舗装され、水道の鉄管工事がはじまるといった具合である。

こうして、古くは北東部（ノルデステ）の砂糖景氣のように、近くはミナスやゴヤスの黄金熱（ゴールドラッシュ）のように、同じくラツシュとして俄かに勃興したカフェー栽培

は、わずか半世紀のあいだに伯国経済中枢としての牢固たる基礎を築いてしまった。経済的地盤がかたまれば、自然に政治的勢力もできる。文化も栄える。奴隷解放の行われた十九世紀の末ごろには、雄州サンパウロの鼻息を窺ねば国政も運ばれないというところまでカフェー経済が確立されていた。

この珈琲景気の推移を数字で拾ってみると、ブラジルの珈琲がはじめて欧州に向けて輸出されたのは一八七九年のことで、量はたった四俵、価額にして百ミルと見積られている。このころはいまのウバツバからリオ州境の海岸にカフェーが試植された時分である。それから聖州北部がカフェーの中心生産地となりつゝあつた一八三六年には、生産高約六十万アローバに達し廿年後の一八五五年にはモヂアナ地方を含めて四倍の二百七十万アローバスへと飛躍している。人口から見るとパライバ流域の人口はこの十年間に四〇%の増加を示している。

一八九〇年には、聖州珈琲の対外輸出高は二百八十七万俵という空前の数字を示し、値段も一俵當り九ミル八百レースという高値で、いよいよファゼンデイロ全盛の時期がはじまった。

これからはカフェーは飛躍する一方、一八九二年には三百七十萬俵、一八九五年には四百万俵に達し、値段もそれぞれ十一ミル六百レースから十七ミル四百レースと続けて昂騰ぶりを示した。恐らく此ころがオウロ・ヴェルデの景気が最絶頂に入る前期たろうと思われ、いま国州で舊家名門といわれる「カフェー貴族」が、漸次州の経済や政界を牛耳る支配階級としての地歩を固め出したところである。

ファゼンデイロの生活水準は向上する。輸出珈琲で得られる外貨はこれら耕地主連の生活を潤す消費物資に向けられ、貿易は日増に活発となる。生活が豊かになり、その政治力をもつてファゼンデイロ連中が聖州の「貴族」みたような地位を固めてくると、文化方面にも飛躍が見えはじめた。いわば

カフェーの文化が成長をはじめたのだ。進歩的な頭脳を持ったフアゼンデイロには、将来に備えて子女の教育に熱をもつようになり、當国では高等教育ができなかったから、その子弟を欧州に留学させるようになった。間なくして欧州留学は一種の流行みたいになり、大きな地主は競って子女を歐洲に送った。もともとパウリスタ人は植民期のころから教育に無関心だといわれたのがサンパウロに今日の文運を開いたのはカフェー景気である。

技術習得のために欧州に留学する者もある。文化の都パリに行つて文学を志す者もある。政治家を志望して法律を修めに行く者もある。なかでも、エドワルド・プラードやサントス・ヂュモンなどは、富裕なフアゼンデイロの息子としてパリでは留学の傍らには社交界に出入りし巴里つ子羨望の的となった。

ヂュモンの画期的な飛行機の發明も、その背後にカフェー景気の實家があつてはじめて出来たことだ。實にカフェー經濟の繁榮こそは、文化的にも思想的にもサンパウロに大きな變革をもたらしたものであつた。

カフェーの景気はひとり特殊の階級を潤しただけではない。州全体の躍進を促した。それまで一プロヴィンシアの町に過ぎなかつたサンパウロ市は、首都リオに次ぐ近代都市としての威容をととのえる。都市計画で街路が区画され、伯国最初の「鉄の陸橋」が架けられ、何階もの高層建築が並ぶようになった。高台のジャルデン・パウリスタにはフアゼンデイロの連中が好み好みの大邸宅を築いてその豪華を競った。口の悪い史家に言わせると、アヴェエニータ・パウリスタにならぶ大邸宅は「オーロ・ヴェルデの醜い遺骸」だそうである。もし、カフェーの繁榮なかりせば、當時技術の粋をきわめたサンパウロ・レールウェイ出現も遅れたであらうし、更に、サンパウロ・レールウェイなくばサントス港の改築も手間取つたであらう。延いては聖市こんにちの工業化も進まなかつたにちがいない。實にカフェーこそは雄州サンパウロの

柱石であつた。

白人移民の端緒

一方ではますます黒人奴隷の労力を必要とするカフエーの栽培が日を遂つて活況を呈しながら、他方では英国の圧迫によつて黒人輸入の禁止、延いては奴隷廃止への氣運が動きつゝあつた。この二つの潮流は、ともに近代資本主義というものによつて促がされた現象でありながら、實際には絶体に相容れない相反撥する傾向であつた。奴隷によらねばカフエーの栽培は維持されない。が奴隷制度そのものは他方において資本主義化への障碍であつた。大きい目でみれば文明開化ということは大きな時代の流れで世界的な現象なのだが、奴隷制度はカフエーという局所的な必要からその廃止に反対していたわけで、奴隷は晚かれ早かれ「文明化」への障碍として取り除かれる運命にあつた。

一般には當時全国の農村―といつても地主連―が奴隷廃止に反対してた様に思いがちだが、決してそうではなかつた。前にも言つたように、北伯のように産業の衰微していた地方では高價な奴隷を維持することすら難しくなつて、貧乏な主人によつては、奴隷に街路の物売りをさせたり、日雇いのカマラーダをさせたりして、自分の食扶持を稼がせながら主人はその稼ぎ高の上前をハネるといったやり方を採つていた。つまり、奴隷を直接の生産具とする代りに、資本としてその利子を食べたわけである。ミナスやゴヤスの採金も同様であつた。だがら、聖州のカフエー景氣が伝えられると、此伯やミナスから続々とサンパウロに向けて奴隷の移動が始まつた。バイアやミナス地方からは、サンフランシスコ流域を伝つて毎日のように奴隷の大群を引きつれたトロツパ隊が聖州に入つては、モヂアナの各地で奴隷市を開く有様であつた。

だが、国内移住だけでは、聖州の労力不足は解決されな

い。奴隷の補充が必要である。しかし、奴隷制度の廃止の聲は日増しに昂まり、全国にその運動が展開されて、これに反対するものは聖州のファゼンデイロだけという立場に至った。一八五〇年には 黒人の入国禁止、一八七一年には例のレイ・アウレア（黒人出生者を自由人とする法）が発令されて、あと奴隷の全面的廃止は単に時日の問題であった。この状態を前にして、黒人以外による労力補充の方法の考えられたのは當然である。そこが政府の白人移民の入国を奨励したが、前述のように、一八三六年バルセーマ侯が欧州諸国移民プロパガンダに歩いた結果は全く失敗に帰した。

白人移民に先鞭をつけて見事に成功したのは、ペードロ二世皇帝の成人式のあった年（一八四一年）のことである。とこの上院議員ニコラウ・ヴェルゲイロは、この年、歩合作（パルセーラ）による白人労働者の制度を創始したのであった。すなわちヴェルゲイロは、イビカーダにあった彼の農場に歩合作の契約でポルトガル人数十家族を入植させた。その条件というのは

一、旅費、設備、生活費など第一農年の収穫までの諸費用は農場主の方で貸し興える。

二、コロノは第二農年からの儲けでこの借金を返済する。

ということになっていた。そして第二農年からの収穫物からこれらの費用を差引いたあとの純益を耕主とコロノで均等に分配する。この外にコロノは自家消費用として家畜の若干と雑作地を持つことを許された。自由労働者の契約としては、これが恐らく伯国最初のものであろう。

この歩合作の形式は、その後幾らかの改良は加えられたが、原則的にはずっとこの制度が維持された。ヴェルゲイロが歩合作を創始してから後の十年間に、サンパウロのみで實に六方の移民がこの契約で入植している。そして、この歩合作で成功した移民が独立して農場主になると、彼らは矢張り同

じ條件で自国の移住者を招致するという有様だったので、歩合作制度はますますその範囲をひろげて行つた。

自由移民とコロノ移民

こうして白人移民の流入は逐年数を増したが、奴隷廃止に代る白人移民という考え方は余りにも單純にすぎる。伯国の移民誘致にはむしろ當初から二つの流れがあつた。

一は奴隷廃止を前に、コーヒー園勞力補充を主眼とする耕主側の移民誘入と、今ひとつは、伯国の資本主義化に刺激された企業の見地からの国土開始、すなわち大きい意味での植民がそれである。これを時期から見ると、一八二〇年前後から一八七〇年頃までは、自由植民者が政府の手で奨励され、愈々奴隷廃止が事實となつてから、つまり一八七〇年からは未開地の開発などと悠長な話でなくなつて、勞力を失つた耕主連の必死のコロノ補充策であつた。

一八二〇年、ドン・ジョン六世はドイツ移民の誘致を図つてカトリック・ドイツ人には無料で土地を提供した。伯国の独立後、この政策はペードロ一世皇帝によつて持續され、政府の保護によつて多くの植民地が創設された。ドイツ人を主とした聖市近郊のサント・アマール及びイタベセリカ植民地（一八二九年）、パラナ州リオ・ネグロ（同年）、サンタ・カタリナ州、イタジャイ及びアルカンタラ（同年）などを始めとして一八五〇年頃約二十ヶ所の植民地ができた。何れも政府が無償で土地を提供した上、植民者には初め五年間はいろいろな援助を興えた。一八五五年にはこれら欧州植民者の数は約四万と算せられた。史家カロージエラスルによると、一八五五年―六二年に至る七年間にはこれら植民者が年平均一萬五千も入国している。そして當時伯国人は、カフエー耕地のことはファゼンダといい、これら政府補助の農場はコロニアと呼んで、同じ移民でもこの二つの流れに區別したので

あつた。一八六八年頃、このコロニアの数は約八十ヶ所といわれた。植民者の数も當然相當の数になつていたにちがいない。

ところが一八五〇年頃を境として、伯国の經濟界では資本主義化が着々として行われ、政界では奴隸廃止が必至の状態になつてくると、こんどは耕主側が移民問題に俄然関心を寄せ初めた。本格的なカフェザールのコロノ移民はこの時期から初まつて約一世紀もつゞき、日本移民もこのカテゴリーに入つて入国したのである。その最初の現れは支那人誘人であつた。今から考えれば余り名譽な話ではないが、アフリカ黒人奴隸に代る労働移民として先ず耕主連は支那の苦力（クリー）に着目した。一八五五年には苦力を積んだ船がリオに三隻も入港したが、成績が芳しくないでこの移民は断念し、次で政府經營の植民地移民をカフェザール労力に充てることが考えられた。

一八四五年、コロノ保護法案が發布され、一八六三年には農務省に附屬して移民取扱局が設けられた。そして一八八三年、奴隸全廃を前に、フローレス島の施設を移民宿泊所に當てねばならない程、移民問題は大きくなつていた。

それから奴隸制度の廃止、帝政の崩壊、共和政府の樹立、めまぐるしい激変の中にも伯国の資本主義的脱皮作用はよどみなくつゞけられ、移民政策は強化の一路を辿つた。

これは数字を見ると一番よく判る。一八八七年には外国移民の入国五四・九九〇人だつたが、一八八九年には一躍一六〇・〇〇〇人となつている。この時代の移民には殆んど自由植民はいなくて、南伯向けのドイツ人は別としても、サンパウロ向けてのイタリア移民、次いでイスパニア移民はそのほとんど全部がカフェー耕地のコロノ移民であつた。聖州では共和制が布かれると直ぐに聖州移民奨励協会という機関が耕主連の手で結成され、欧州移民の助成に乗り出した。一八八七年には聖州のカフェー耕地に就働するコロノの五分の二はイタリア人ですでに占められていた。

一八九一年の共和憲法では、各州政府に移植民に関する自由裁量を許したのでなおさら活発となり、ことに聖州は一九〇一年當時、全伯国の入移民のうちその八十四%を占めていたのである。

一九〇八年まで……………

奴隷解放と共に自由移民はなくなつて、伯国の移民政策は全くカフエー耕地のコロノ移民を目的として動き初めた。そして入移民は年を遂うて量的に膨張して行つた。十九世紀も末葉一八九〇年から一九〇〇年までの十年間に、聖州の人口はその三十三%の増加ぶりを見せ、これを外国人の在住数で見ると實に六〇五%の増加ぶりであつた。更に比率から言うと、聖州では伯国人一〇〇〇人に対して外国移民が二三百人もいたのである。一九〇〇年の統計によれば、伯国在住のイタリア人一四〇万、ポルトガル人一〇五万、イスパニア人五〇万となつてゐる。ということは、第一回日本移民が渡伯する十年前、すでに聖州には、現在の日本人の数倍に當るイタリア人がいたわけで、それから五十年、この半世紀の間に伯国人の中に混血して行つたイタリア人はけだし相當以上の数に上るだろう。聖州に於ける伊系人今日の盛況は、さてこそと思ひ當るわけである。

日本移民は二十世紀に入つて、ドイツ人、イタリア人、イスパニア人等の欧州移民がほとんど杜絶状態に入つてから漸次大量に入国し初めたのだから、時代的に大きな喰い違いがそこにある。従つて同化の状態とか、その他でこれら外国移民と同日に論じるわけには行かない。

さて、一八五〇年を一エポックとした伯国の資本主義化と共に欧州白人移民の端緒がつくられ、奴隷解放と共にこれら外国移民の誘致は全く斬道に乗り、こゝに約三世紀にわたる奴隷輸入と、外国移民誘致との交替が行われた。日本移民は大局的にはこんな状態の下に渡伯はじめたのである。

では、一九〇八年、第一笠戸丸移民がサントスに上陸した頃の伯国はどんな状勢に置かれていたであろうか。

この年の重要な出来事を拾ってみると、先ず奥地探険で有名なカンジド・マリアノ・ロンドン將軍が、マット・グロツソ州、とアマゾンの間、数千キロの蠻地をつらぬく画期的な電信線の架設に着手した事である。そしてシャガス病で有名なシャガス博士と、邦人間には医学者としてよりも排日家としてより知られるアルツール・ネーヴァ博士は、リオ郊外にショウケツしていた熱病退治に輝く功績をあげていた。ノロエステ鉄道の敷設事業もこの年着々と進んでいた。交通省には新たに植民局が設けられた。こうして伯国は文明開化の足を踏み出していた。

経済界は新しい時代にふさわしい活況を呈していた。社会民主主義などという思想はこの時まだ芽生えていないで、全く自由主義を標榜した政府は、生産業者の利益擁護のために自由結社を奨励し、組合制度を宣伝していた。一九〇七年には同業糾合（シンジカート）や産業組合に関する法律が公布された（この法律は一九三一年、ヴァルガスが革命政府を組織するまで持続されたのであった）。一九〇八年にはライファイゼン式の農村銀行も開設されていた。伯国の開港百年祭のあったのもこの年であった。

ただカフエーのみは大きな危機に當っていた。一九〇六年のタウパテー会議で、初めて政府がカフエー経済に干渉することになり、低級品の輸出禁止を発令して上質カフエーの相場引上げを計った。この時のカフエーの値段は四ミル四百レイスという底値で、業者は一つの恐慌に當面し、白人移民の入国がこの頃激減し、日本移民誘致の機運を促進したのもこの不況に負ってるところが多い。

そして連邦政府の保証付きで、カフエー業者への大巾融資が決定を見たのは、日本移民入国の年、一九〇八年のことであつた。

（斉藤広志）

第三章 邦人社会の言論・思潮史論

一、前 期 時 代

邦人社会の思想の変遷は、ひつきよう母国日本の思想の動きの反映であるとはいえ、移民史四十年すなわち一九〇八年から一九四八年の間において日本の思想界は、はなばなしい発展と激変とがあつたが、そのことごとくの影響が移民社会に與えられたとはいえない。したがって邦人社会の思想の変動を、日本のそれと同じように年代的に区切ることはできないが、大体において大ざっぱではあるが、二つに分けうる程度のものであろう。そして、この境界をハッキリつくつたものは、偶然にも、ほとんど時を同じくして日本とブラジルに起きた事件であつた、すなわち、一つは満洲事変（一九三二）であり、他はゼツリオ独裁政権の樹立（一九三〇）である。この二つの事件は、いづれもがフアシヨ的であり、国家主義的であることが邦人移民社会の思想に対して重大な影響を與えることになった。このことについては後述するが、とにかく満洲事変ほど四十年の移民史を通じて思想的に時代を切りはなしたものはない。したがってそれ以前における思想の移り変りは徐々とした変化で、しかも日本の影響が即座に敏感にうけ入れられなかったのだから、大勢においては画期的な年代をハッキリとらせることは困難である。それゆえ、満洲事変を以って移民社会思潮史を前期、後期に二分し、それぞれ性格をのぞいて見ることにしよう。

前期（一九〇八―一九三〇）は、明治四十一年第一回の笠戸丸移民が入国して以来の二十二年間で、日露戦争大勝とそれにつづく日韓併合による国土膨脹、更に第一次世界戦争の戦勝によつて興奮した気分が移民社会につよくみなぎってい

た時代である。この戦勝国気分、しかも初めは世界の強国ロシアを敗り次にはドイツを破って、堂々として東洋の覇権を握り世界列強の一つとなったという相つゞく戦勝国民の誇りは、外国にあるだけに移民社会を強く支配したし、又移民の教育程度がひくかったことによって、何事においても戦勝国民の誇りと、日本帝国萬歳の気分によって批判されていた時代であった。

それにブラジルへの移住は故国をすてゝの永住ではなく、できるだけ早く金をもうけて海外成功者として母国へ帰ることがほとんどすべてのものゝ目的であり理想であった。だから、かれらが口にした海外発展とは海外に出稼ぎをすることではしかなかった。こんな移民の社会に、深い社会的な思想など生れるはずはない。日本では大正時代の中頃からデモクラシイ、自由主義、社会主義の思想が勃興しはじめて、後には猛烈な共産主義運動にまで発展したが、かかる社会思想はごくまれに個人的に影響を興えた場合はあつたにせよ、言論界の指導者的な立場にあるものゝ思想にはほとんど反響はなかった。

この前期時代を通じて、言論界の指導者的な立場にあつたものは、これをほゞ年代順に列記すると、邦人社会における最初の謄写版新聞「南米週報一（一九一五年創立）」を起した星名謙一郎をはじめ、南米週報の編集陣に加つた鹿野久一郎、渡邊孝輪湖俊午郎、三浦鑿らがあつた。星名の思想は邦人社会に圧倒的な「テイコク バンザイ」主義で、最も無思想な一人であつたが、鹿野に渡邊は共に東京外国語学校出身、輪湖は北米からの轉来者、三浦は日本で中学校の英語教師をやったことがあるという、いずれも常時においては新進のインテリ青年で、このころはコスモポリタンの傾向が多分にあつた。輪湖は思想的にはその後轉々としたが、このころから反官的な野人氣分の強かつた三浦と共にずっと言論界の指導者として重きをなした。

金子保三郎と輪湖とが一九一六年、謄写版「日伯新聞」（週

刊）を創刊して、これに南米週報にいた鹿野が轉じ、更に早大文科出の鈴木貞次郎が参加した。鈴木もコスモポリタンであった。この當時のインナリ青年はコスモポリタンというても、セシルローズ的な開拓精神に人生の意義を感じるといった多分に英雄的なコスモポリタンであったといつていゝだろう。この「日伯新聞」はその後活字版になったが、一九一九年に三浦が買いとつて経営するようになってから彼の野人的な反官氣分が遺憾なく紙面にあふれ、當時、移民社会に王侯の如く君臨していた移民輸入業の海外興業会社や総領事館に対して常に辛辣な皮肉と攻撃を加えて移民の味方をもつて任じていた。三浦の思想はコスモポリタンのというよりは、はるかに自由主義的であった。必ずしも厳密な意味でのリベリストとはいえなかったが、當時の邦人社会では彼は進歩的な批判力をもっていた。

一九一七年、海外興業株式会社によつて週刊「伯刺西爾時報」がつくられ、北米の邦字新聞社にいた黒石清作がこれを編集したが、もともと、これは移民會社の機関紙的存在であったから紙面は官僚的で、くさいものにはふた主義であり、耕地における移民の不平をおさえるために、極力封建思想、殊に道徳的説教を好んで論説にして、移民社会を骨ぬきにすることに力を注いだ。黒石の思想は終始一貫封建道徳の鼓吹で、「日伯新聞」の三浦とは全然入らず、ことごとくに見解を異にしてはげしく論争し、邦人言論界に絶えず問題を提供した。

一九二四、五年頃までの邦人移民は総数六、七萬で、しかも日本での農村出の者が多く、穩健なる道徳主義の「ブラジル時報」が多くよまれ、移民の味方を以って任じている「日伯新聞」が却つて反道徳的な新聞と思われて気ざらいするものが多かったのは實に皮肉であつた。しかるに大正十三年（一九一四）から激増した日本移民は農村出が少く、思想的には初期移民よりもはるかに進歩的であり、教育の程度も全般的に高くなっていた。こうした移民の大量入国が移民入国

制限法が出るまで約十年間つゞいたが、これら新移民にとっては「ブラジル時報」は興味のない時代おくれの新聞であった。したがってハツラツたる「日伯新聞」の購読者は年毎に増加して、後には邦字紙中最大の日刊紙となった。

日本で社会主義思想が盛んになり出したのは一九二〇年前後からであるが、母国における革進思想が邦人社会に及ぼした影響はきわめて弱かった。前にも書いたように、一九二四、五年ごろ迄の邦人社会の大部分は日本の農村出身者であり、日本から移民がほとんど断絶状態にあったために、移民社会は文化的には母国とは殆んど隔絶された形であった。

しかるに日本の経済的不況、関東大震災は都会生活者の移民を激増させた。これらの中には日本ですでに革進思想にふれたものもまじつており、中学校、専門学校、大学校などを卒業したインテリ青年の渡来するものも多く、邦人社会の言論、思想は社会主義、共産主義などのようにハッキリしたイデオロギー的なものへの発展こそなかつたが、それでも革新的な気分は出版物、特に邦字紙を通じていろいろの形でうかぶうことができた。

日本大学出身の香山六郎が、サンパウロ州バウル市に週刊「聖州新報」を創設したのは一九二一年であつた。香山も思想的には初期インテリ青年の一団に属し、セシルローズの開拓精神を理想とするコスモポリタンであつた。この編集室の客分鈴木貞次郎と編集に榛葉彦平らと共に、新しい社会思想に対しては理解というよりも、むしろ興味をもつて好意的にこれを受け入れたものといった方が適當であろう。それに新しいものに魅力を感じる新聞人の気持から新思想に共鳴したともいえよう。榛葉彦平が、そのころ生れた自分の子供にレーニン、トロツキーの名をつけ、聖報フアンの大石智覚はその生女に「メザメタ」と名をつけた一派であつた。長谷川是如閑の雑誌「我等」からマルキシズムな論文を「聖州新報」に転載して大いに新しいところを誇示したりしたことはその現われであつたが、榛葉にしても香山にしても、その後

の社会思想的な活動にはこれというほどのことはなかった。このころ（一九二六、七、八年）「日伯新聞」では東京外語を出た安藤潔（一九二四年渡伯）が社会問題、社会主義、協同組合論などをあつかって、思想的に沈滞していたコロニヤに新鮮味を興えていたが、革新思想が邦人社会に興えた影響はなかったし、かれらを啓蒙するなど思いもよらぬことであつた。のんびりしたブラジルの生活中に、新しい社会思想が実践的にとり入れられることなど幻想以外の何ものでもなかった。また、観念的にこれに興味をいだくものにとつても、それは生活からひどく遊離した空想的な議論となつて、社会主義も共産主義もコロニヤの中ではとうとう芽をふかなかつた。正しい意味の自由主義さえこゝでは発展しえなかつた。

邦人社会に自由主義の思想さえ健全に育たなかつことは、たしかに大きな不幸であつた。そのために海外移住の意義をあやまり、永住論、同化問題、子弟の教育問題などでいたずらに混乱をまねき、日米戦争において母国が悲惨な敗北をなめたことによつて、これらの諸問題がやむをえざる自然の解決に追いつめられるに至るまで、コロニア自身の思想によつて自主的に解決することができなかつたという思想の貧困ぶりを暴露した。言論的な指導者といえども、身についた確固たる思想はなかつた。コスモポリタニズムにせよ、リベリズムにせよ、流行にかぶれた気分的なものにすぎなかつたのであるから、一つで思想で終始一貫したものは少く、轉々として猫の目のようにコスモポリタンがナシヨナリストになり、ソシヤリストがテイコクバンザイ主義者になるというような思想的な芸當が、いとも容易に行われ、又、永年に亘つて永住論を唱えたものが風の吹きまわしで再移住論に変わるなど、思想的放浪性は遺憾なく発揮されたが、これに対して本人も社会も、その無貞操ぶりに全然無頓着であつたほど、移民社会の思想は貧弱であつた。

国家主義、帝国主義

初期邦人社会の一般的な気分であった「テイコク バンザイ」は帝国主義的でもあり国家主義的でもあったが、それはあくまでも、たわいのない戦勝気分であらわれで、それを裏づける素朴な理論さえもなかった。然るに一九二八年、坂井田南舟が週刊「南米新報」を発行し、これによって東京帝大教授寛古彦博士の国粹的国家主義思想の宣伝につとめたことは、わがコロニアにおける国家主義思想が理論的にとりあつかわれた最初である。坂井田南舟は皇道精神を提唱して青年層によびかけたが、大きな反響はなかったようだ。しかし寛博士の思想は、その後博士の講義を帝国大学在学中にきいてその説に敬服したという宮腰千葉太によって積極的に効果的に宣伝された。しかし、帝国主義も国家主義も相通じる面が多いが、海外発展が個人の海外移住を意味せず、日本国威の海外進出であり、ブラジルに植民地を建設することは、あだかも日本領土の拡張であるかの如き錯覚をもつ点において、両者の思想は完全に一致していた。帝国主義思想の代表と見なされてきた者に力行曾々長永田稠がある。彼はブラジル移住者ではないがアリアンサ移住地の建設者であり、彼が指導した力行会々員が多数ブラジルに移住して力行会支部を作り、有力な存在となつて以上、永田稠の思想をブラジル在住者なみにあつかうのは不當ではないだろう。

力行会はキリスト教精神によつてつくられた海外移住奨励の団体であるが、永田の海外移住の理念には人類愛的世界主義ではなく、「国威の海外発展」ということが多分に織込まれてきた。力行会が満川亀太郎らの国家主義者を講師と迎えたことがあるのを見ても分るが、永田稠の帝国主義思想をもつとも露骨に現わしたものは、彼がアリアンサ移住地建設のため大正十三年訪伯して帰った後で出版した「両米再巡」(大正一四年発行)なる著書であろう。その中に、将来ブラ

ジルにも起るであろう排日問題をうれいて、その対策について彼の意見を発表しているのであるが、これだけで力行会の指導精神がどこにあったかがよくうかづえる。彼は同書の二四六頁で次のようにいつている。

「さて、私は排日対案の結論に行かねばならない。私は日本の官民が北米の排日に対して實行したことだけでは、伯国その外の排日を根絶することはできないと思う。

一、伯国の排日は「緩和」「延期」「握りつぶし」をさせる位のことではなくて、必ず根絶せしむる目的を立つること。

二、外交官の運動の外に、排日対班を組織すること。

三、此組織の中枢となるべき人物は、少くとも大臣級の豪膽なる者にして、四、五名の浪人的軍人的の、若しできれば支那浪人をキリスト教化したような人物を助手とすること
四、運動に要する費用は、手段方法の如何を問わず十分に供給すること。

五、対班の大眼目を伯国政治家、記者、その他の排日者、および伯国朝野の人士の「教育」におき、世界革命の大精神を鼓吹すること

七、「教育」「買収」の外に「〇〇」の非常手段も時によつて採用し、一種の「XX」を加うることに。要するに恩威並行すること。

この如きは単に伯国に対してのみならず、何れの邦土に対しても、少くとも排日運動の存在する所に対してはその威力を發揮せしむる準備を要するのである。

以上のような考え方を、彼が養成して海外に送り出す力行会員に達成させんとしたのであるが、ブラジルにおける力行会員中には、この「野蛮」きわまる考えを本気でうけつぐものはいなかった。永田の片腕といわれた輪湖俊午郎にしても海南島再移住の悪夢は見たが、もともとは個人的な意味でのブラジル永住を禮讃したコスモポリタンであつた。

永田式植民思想と相似たものに、アマゾン河流域に植民地

開発を企てた上塚司がある。當時政友会代議士で大蔵参興宮だった上塚司は、一九三〇年（昭和五年）アマゾナス州政府から百万町歩のコンセッションを獲得し、こゝにアマゾンヤ産業研究所という天植民地をつくった。上塚司は「アマゾン」を支配するものは世界を支配する」とドイツ人フンボルトがいつた言某を實現するものは天和民族であると信じ、植民地の獲得をもつてあたかも日本帝国の領土的進出のように考えていたようだ。彼はこの植民地経営上の指導者たるべき国土的青年を養生するため、日本に国士館高等拓殖学校を設立した。

アマゾン河流域にコンセッションを得て大植民地を建設しようという案は、すでに一九二五年ごろから日本の事業家によつてたてられていた。そして、最初にのりこんできたのが鐘淵紡績会社系の南米拓殖株式会社で、パラ州アカラ郡に百万町歩のコンセッションを一九二七年に獲得して植民地経営に着手した。このアマゾン河流域への移住地建設に対しては、日本人のブラジル移住は個人の生活を幸福にすることにあり、しかるにそれを無視して、単に国威発展的な幻想にのみとらわれて行ふべきではないという見地にもとづいて、邦人社会の一部に強硬な反対意見がおきた。「日伯新聞」はアマゾンがあらゆる点において日本人の移住地として不適なことを指摘し、猛烈にこれを攻撃した。あの茫漠たる地域に五萬や十萬の人間がはいっても、アマゾン河流域全体が開発されない限り農業経営発展性なく、移住者は文化的孤立におちいり子孫の文化的退化は想像以上となるであろう。サンパウロ州のようなブラジル中で最も開けた州の奥地に入植した邦人でさえ、そこに生れて育つかれらの子供は、はなはだしい文化的退化を示している。十九世紀時代の帝国主義的發展の夢で、移住地をつくることは個人の生活の幸福を無視した罪悪行為である……とまで「日伯新聞」は極論した。「日伯新聞」は約半年にわたつて社長三浦鑿、記者野村忠三郎、安藤潔らが筆をふるつてアマゾン移住の無暴を書きたて、一部の

知識的な青年層にも猛烈な反対意見があつたが、コロニアの大勢は、日本のアマゾン進出という国家的意義あることを妨害するものは国賊であるとする反動的な空気が強かつた。そして、當時大使館には後に海軍情報部長で有名になつた海軍武官関根郡平大佐がおり、大いにアマゾン発展論を主張し大使も亦これを支持した。ブラジル時報はアマゾン進出の賛成をとねえたが、日伯新聞は論調をゆるめることなく勇敢に反駁しつづけた。三浦はついに一九二七年九月、単身トカンチンス河を下つてベレンに出て、更にアマゾン河をペルー領イキトスまで上つて實地踏査し、翌年三月サンパウロへ歸つた。彼はこの旅行によつてアマゾン進出が無暴な夢であることとの確信をますます強めたので、この反対意見を、当時彼が通信員であつた「大阪朝日新聞」に連載して日本の世論に訴え、一部識者に認められたが、アマゾン熱は一向下らず「アマゾン興業」「アマゾンヤ産業」その他の小植民地があちこちに出現した。

しかるに、いずれも農業経営なりたらず、植民地開設後、早きは数年で植民者がサンパウロ州へ逃げ出し、つぎつぎに不成功に終つた。日伯新聞のアマゾン進出反対論は、三浦の識見の高さによるもので、その奮闘ぶりはコロニヤ言論史に特筆されるべきものあろう。

国粹主義の勃興

満州事変は日本のあらゆる進歩的な思想を阻止し圧迫して、反動と封建の思想をもりたてた。自由主義、社会主義、共産主義などはことごとく危険思想であり、反国家的であるという恐るべき考え方が政治的に権力をにぎりだした軍部によつて、事変以来一年々と国民の頭にうえつけられ、日支事変の勃発とその進展にともなつて国民は軍部のファシヨ的国粹的指導に精神に信仰的にひきづられていった。

日本におけるかゝる反動思想は、満州事変と日支事変とからうけた異常なる刺戟と興奮とのために、ブラジルの邦人社会においても歓喜して迎えられた。もともとデモクラシイやリベラリズムの思想の影響はほとんどうけず、日露戦争と日独戦争の勝利気分から生れた「ニッポン バンザイ」式なきわめて単純な思想ですべてを考えてきたコロニヤであったのだから、いままでの「ニッポン バンザイ」が観念内容の粗雑な「軍国精神」や「八紘一宇」に発展することはきわめて自然であつたといえる。

それに、一九三〇年にブラジルに樹立されたゼツリオ政権が独裁政治を布いて、日本、ドイツ、イタリアや同様ファシヨ的国粹政策をとりだしたことは、邦人社会にはげしい衝撃をあたえた。ゼツリオの国家主義政策は、あたかも日本が満州事変以後とりだした国家主義政策と歩調を一つにして進んだ観があり、わがコロニヤへの最初の圧迫は、従来全然自由であつた日系児童の日本語学校に対する政府の監督取締りが一九三二年以来法令化となり、これによつて日本語教育は非常にやりにくゝなつてきた。更に一九三五年には移民入国制限が實施され、日本移民の入国は極端な減少を見るにいたつた。このようにゼツリオ政府の国粹政策が強化されるにつれて、外国移民に対する圧迫はことごとく増加して、一九三八年には十四才以下の子供に外国語を教えることが禁じられ、一九三九年、外国語新聞雑誌の取締令の發布となるなど、わがコロニヤはゼツリオ政府以前があまりに自由であつたために陰惨な気分にとざされてきた。このブラジル国粹化によるコロニヤへの圧迫に対する反動は、日本における国粹連動からうける刺戟と、満州事変後の日本主義の洗禮をうけてきた新来移民は、一九四一年を最後として八万七千余の多数にのぼっているが、これら日本精神運動をしたしく体験してきた新移民との接触によつて、いやが上にも強化される結果を見るに至つた。かくして邦人社会は「日本精神」と「八紘一宇」のハンランとなつたが、この時にいたつて、いまだかつ

てはなばなしい動きを見せなかった自由主義的な批判精神が、コロニヤの一部に出現したことは注目しに値する。（これについての詳述は後にまわす）

日本文教普及会

日本人コロニヤにおける国粹運動の指導上、重要な役割を演じて邦人社会の思想を偏狭なる反動的なものにみちびいたものは日本文教普及会なるものであった。

日本文教普及会―以後は普及会と略稱する ― はサンパウロ州を中心に各地に散在する日本語小学校の統制連絡と教員の指導を目的に、一九二九年（昭和四年）に設立されたサンパウロ日本人小学校父兄会が改稱されたものであった。これが更に満州事変後の日本の海外膨張政策から、ブラジルにおける日本移民の子弟に対しても、日本語教育の徹底と日本精神の涵養とを目的として一九三七年（昭和十二年）外務省から派遣されてきた石井繁美によって改組拡大された。石井は佐賀縣出身であるところから葉がくれ武士の精神を理想とした。この石井の思想で改変された普及会は、時流に投じて全コロニヤを数年の間に徹底的に反動国粹色にぬりつぶしてしまった。

石井以前の普及会の方針は、邦人子弟に日本人の美点をつたえ、善良なブラジル人につくるといふ行き方であった。この観点から普及会は、日本の国定国語読本をブラジル生れの子弟に使用させるには種々の点において不適當であるとし、二世用の日本語読本の編集を昭和十年古野菊生に依頼した。古野はこの日本語読本編集に當つては軍国的色彩をとりのけ、国家主義的な思想をおさえ、しかも日本の情調を子供に知らせることに力をそゝいだ。かくして作成された日本語読本全八巻巻は、ブラジル育ちの子弟用としては、文部省の国語読本よりはるかにすぐれた内容であったが、内容に日本主

義的な色彩がうすいことが當時刻々として強まりつゝあつた日本国粹気分の上から、普及会内にすらこれを非難するものもあり、コロニヤ全般からあまり歓迎されなかつたことは時代色の反映の結果であるというばかりでなく、普及会の思想的豹変を物語るものである。

普及会には、教育上の指導者として日本の小学校教員が数名派遣されてきていた。かれらは、数ヶ所の邦人大集団地域の中心地に設けられた普及会地方支部主事となつて散在し、それぞれの地方にある日本語小学校、および日本人教師を監督指導する役目についた。これら主事たちは、ブラジルの事情はまるで知らず、邦人コロエヤの気風とか實情についても理解うすく、ひたすら日本的な気分で二世教育を指導しようとする傾向が強かつた。それ故にブラジル永住を理想としている一部のコロニヤ派のものからは、主事連の態度や方針は決して喜ばれなかつたが、満州事変以来コロニヤにおいていとひろがつてきたファシヨ的な国粹気分から、邦人社会の大部分は普及会の国家主義的な精神に共鳴するようになった。

又、普及会は日本語学校の教員の給料を補助することによつて、全部の日本語学校は普及会の組織内に統一され、教員の任命さえも地方支部主事に左右されるようになった。したがつて教員中に普及会の指導精神に反する言行あるものは次第にしりぞけられて行つた。また各地の邦人主要集団地に奨学舎という児童の寄宿舎を建て、グループおよび中学校への通学に不便なところに住む子供を収容したが、こうした組織をもつて学校と奨学舎を通じて日本国粹の思想と全体主義の理念が二世の児童につきこまれた。

かくして、数年間つゞいた普及会の活動が邦人社会に興えた思想的な影響は大きく、殊に終戦後起きた臣道連盟事件に、普及会時代小学校教員だつた者で直接間接にこれに関係したものが多く見られたことは、普及会がのこした大きな影響といえよう。普及会が行つた日本語学校教師指導のもつとも組織的なものは、毎年一回サンパウロ州各地の中心

的邦人集団地数ヶ所で開催された葡語講習会であつた。これは、一九三二年に發布された外国語学校取締令によつて、外国語学校教師は国法令の定むる葡語の検定試験の合格者でなければならぬことになった。そこで、葡語試験をうける日本人教師のため、毎年受験期前に二週間乃至一ヶ月の葡語講習会を開催した。この講習会はポルトガル語ばかりでなく、教育学、児童心理、日本歴史、思想問題、その他いろいろの問題を講習させた。この講習会は一九三三年の父兄会時代から始められたものであるが、一九三六年日支事変以来は国粹主義宣伝のために利用される一つの機会となつた。

一九三九年発令されたブラジルの教育法令は、ブラジルの国家主義政策が強化された結果改められたもので、これによつて外国語学校の存続はほとんど不可能になつた。普及会はこれに対応するため、従来の葡語講習会を指導員講習会と改めたがこの指導員講習会は日本主義色の濃厚なものであつた。

一九四〇年リンス市で開催された指導員講習会の有様を「パ延長線教育史」というパウリスタ鉄道延長線地方の日本語学校教育事情を調査した出版物から引用して見よう。

リンス講習会の記

新法令に伴う新事態に対処すべく、文教普及会は一月十八日より二十四日まで一週間にわたり、リンス市学園において開催された。

特に本講習会は会期中、学園寄宿舎を一種の修練道場として講習者全部こゝに共同宿泊をなし、指導者としての訓練と修養につとめた。時節柄とはいふながら、本講習会開催要項の発表を見るや各地より非常な熱意をもつて迎えられ、出席希望者は定員を超える盛況だった。各地よりの出席者は総計 五十七名に達した。

十八日の午前九時より講習会開会式が行われた。まづ祖国遥拝し、竹の園生の彌栄と皇軍將士の武運長久に心からの祈禱をさゝげ、一同あらたまつて厳肅な気分の中に国歌を合唱、教育者に賜つた勅語の聖旨を拝していよいよ教育報国の念を固めたのである。中略

一日の講習の模様をザツとしるすと、午前五時太鼓の音で起床、鉢巻をしめて運動場で駆足十分間、普及会主事の号令で国民体操、それから全員を二分して美化作業という舎の内外の清掃、それが終つて洗面、又、太鼓の音で講堂に集合し遥拝、静坐、朗詠、朗誦、つゞいて擔任講師の精神講話二十分、午前八時から午後六時まで学課講習、夜は八時から修養団歌踊りが始まり、それから朝のように講堂で夜の行事をやる。食事の時は食卓に着席して修養団式に合掌して祈つてからハシをとるといふ情景であつた。これを見ても普及会なるものゝ指導方針がどの程度のものであつたかどうかがわれよう。

しかるにブラジル政府の国粹主義政策も、ゼツリオ独裁政權の強化にしたがつてますます徹底的になり、普及会があくまでもその方針を続行すれば、將來うれうべき事態の發生によつて普及会そのものゝ存続さえあやぶまれるようになって。そこで普及会は方針のある程度の轉換を余儀なくされ、これまでの行きすぎを修正するため石井事務長の辞任帰国となり、その後任にブラジル朝日新聞編集長であつた野村忠三郎が、一九三八年十二月えらばれて就任した。

野村はブラジル朝日新聞の前身、日伯新聞時代からの古い新聞人で、ブラジルの事情に精通し、邦人社会の各方面に広い接触をもった人物で、いわゆるコロニヤ派に属し、思想はきわめて温健であつた。野村は就任早々十二月末に普及会の指導精神の改変を断行するため、各地方の有力者を任命してある理事、評議員、学校協議会々長、学校委員などの役員と地方支部主事それに総領事をはじめ、各領事ら数十名よりな

るその顔ぶれから見れば邦人コロニヤ代表者会議ともいえるような第一回学校協議会会長会議を開催した。この会議において今後の教育方針ならびに方法について種々論議された結果、次の申合せがつくられた。

一、子弟に日本人の正しき性格を維持啓培せしむるためには日本語教育は絶対に必要なるを以て、伯国々法に抵触せざる範圍に於て其徹底を期す。

二、伯語学校には通学せしめ、将来伯国社会に於て活躍貢獻し得る人物を養成することに努む。

野村はこの新方針（これは伯主日従主義とよばれていた）にもとずいて子弟教育方針を正道にみちびくつもりでいたが、間もな中西武官の養子説、和魂和才主義と葛岡主事の和魂伯才主義の内輪ゲンカでくだらぬケチをつけられたり、総領事館の頑迷な干渉は彼の理想を直ちに實現するには大きな障害となつていたし、次々に出る外国人圧迫の法令は日本語学校および普及会の活動を不能にならしたまふ、ブラジルの対日宣戦となつて万時終つた。かくして期待された野村の手腕はついに發揮される機会がえられなかった。

エメボーイ農事実習場

邦人子弟の特種な教育機関として設立されたものにエメボーイ農事実習場があつた。これは海外興業会社がサンパウロ市郊外エメボーイに、将来農村の指導者となるべき人材を養成する目的で開設した堂々たる施設であつた。場内には百数十名の實習生を収容する寄宿舎があり、實習生は日本で中等学校卒業から希望者をつのつて渡伯入場せしめ、又一部はブラジルの邦人コロニヤ中からも許した。

初代場長は農学士松本圭一であつた。彼はジュネーブの第二回国際労働會議に日本代表として出席した経歴の持主で、農村問題に深い関心を有した。この学校は農村指導養成を目的としたにもかゝらず、こゝに学ぶ實習生がブラジル農村の子弟でないこと、日本からの直来者が大部分で、しかも中学校以上の教育をうけておるため、ブラジル発展の夢をいだいてきたとはいつても、必ずしも農業に興味をもったものではなかつたことなどのために、数回の卒業生中農村に入りこんだものは少く、かえつて都市において活動するものが多かつた。

初期にこゝで東京外国語学校出身の妹尾正男がポルトガル語を教えていたが、彼の授業をうけた者の中にはポルトガル語に上達したものを出した。斎藤広志がコロニヤ社会学上の研究やその他のコロニヤ問題について、増田恒河が俳句紹介に、橋本梧郎がブラジル植物の研究について、それぞれ得意のポルトガル語で発表していることは、エメボイが生んだ大異色の存在であらう。この学校も外国語学校取締令のため閉鎖のやむなきに至つたが、もしこれが存続したら将来幾多の人材を邦人社会に送り出すことができただらう。

しかし、この實習場にも時代思潮と時局思想の風は吹きこんできた。一九三一年開校最初の實習生数十名中の大部分は日本直来のものであつたが、かれらの移住の理想はブラジルを第二の郷土とする平和的なものではなかつた。永住樂土の氣特とは相反する国威の海外発展であつた。そのため場長松本圭一や、コロニヤから入場したものと意見を異にし、不快な氣分が場内に流れたこともあつた。日本直来者が、實習場内に安置する目的で日本から持参した天照大神の御神体なるものを祭るために神社の建立せんとしたのに対して、松本場長が強硬に反対し、彼らが抱く移住精神のあやまれることを指摘して、ついにこの實現を阻止したが、こゝにも国威発展主義と永住樂土主義の対立が見られた。

再 移 住 論

以上のべたような風潮が更にホウハイたる怒濤となつて日本人の全コロニヤを圧倒してしまつたが、それには満洲国の建設日本人の満州大移住計画とその着々たる實現、および日支事變勃発とそのかゞやかしい進展ぶりがそれを大いに促進させた。特に日本軍によつて海南島が占領され、その開發が計画され、海南島の氣候が亜熱帶であつてサンパウロとにていることは、邦人コロニアの興味を喚起し、子弟の日本語教育が思うに不再なくなるにつれて、當初のブラジル永住論はかんたんにすてられて、日本民族はすべからく日の丸の旗の下で海外發展をやるべきであるという考えが現われてきた。これがいわゆる再移住論なるものをわきおこした原因であつた。満州および海南島への再移住論をめぐつて、ブラジルに永住すべしという意見が一部の識者中に叫ばれ出した。ブラジル永住論を主張するものは一九三八年十二月に創刊された雑誌「文化」の同人たる安藤全八、半田知雄、古野菊生らで、かれらは「文化」誌上で、トウトウたる国粹主義と全体主義のコロニアにおける汎濫に対抗して、世界主義、自由主義、日本移民のブラジルへの同化を主張した。

満州にせよ海南島にせよ、日本民族の發展上希望のないブラジルをすてゝ大東亜共栄圏に再移住せまとの呼びは、懷郷心をあふるには効果的であつた。聖州新報社長香山六郎が紙上で、堂々と海南島移住論をかきたて、これもまた永住主義を永年提唱しつゞけていた輪湖俊午郎が、一九四〇年の日本建国二千六百年祭にブラジルの日本移民代表として母国を訪れて帰るや、海南島再移住論者に轉向して世の中をおどろかしたが、これを見ても、かつて唱えられたブラジル永住論なるものが理論的にはそれを裏づける確固たるものが何もなく、かつたことをさらけだしたにすぎない。

雑誌「文化」の同人が力説した文化的發展論も、再移住論

の大勢を阻止する力はなかった。日支事変が日米戦争となり、南洋がことごとく日本軍の手に帰し、戦勝が相ついで報じられる毎に満州、海南島西移住論はスマトラ、ボルネオへ発展し、さらには名も知らなかった島々の開拓を夢みさせるに変わり、この熱病的な希望は日本の無條件降伏が果たえられてもなお大部分の者は大東亜共栄圏への再移住を期待していたほどであった。

ガ ッ ト 運 動

永住同化と似たもので、特に農村だけを対象としたものにガット運動があった。この運動は、肥料をやらずに地力が無くなるまで耕作するいわゆる略奪農をやっていたのでは一つの土地に定住できない。定住なくして生活の向上も経済的な繁栄もない。農業者は土地を愛せよという主旨のもとに始められたものである。それにはまず肥料を興えて、しかる後に収穫すべしということを、英語の GIVE AND TAKE にむすびつけ、それを略して GAT といったが、更にこれをポルトガル語で GOZAR A TERRA というふうにもじったものであった。ガット運動とは「定住愛土」を主張する農村に対する一種の社会運動であった。そもそもこの運動は、一九三四年からブラジル拓殖組合の主事だった加藤好之が、同組合が統轄するアリアンサ、チエテ、バストス、トレス・バラスの四大移住地に入植した農民をそこに定住させることを目的として考案したものであった。そしてこの運動を實際に宣伝し、指導し、発展させたものは古関徳彌であった。彼は北大農科の出身である。渡伯後、當時同人会にいた医師高岡専太郎にその才能をみとめられ、高岡専太郎と熱帯地農村衛生研究のため邦人集団地を広く視察研究したが、この時に得たいろいろの知識が、彼の指導したガット運動に有効に役立って特色あらしめた。

ガット運動が「定住愛土」から「愛土永住」へすゝみ、更

に発展して農村の文化運動となりえたのは、一に古関徳彌の力であつたといえよう。しかし彼はいわゆる理論家ではなかつた。實際家でもあつた。だから同じ永住論を唱えるにしても理窟ばい言い方はしない。それが植民者には受けた。

古関は雑誌「文化」にもしばしば書いたが、その一つ「ブラジル永住の意義を見出せ」の中でこういつている。

「永住しろしろと、いくらお題目をとなえても、その坊主が 肚の中で、ヘンこんな所はまっぴらじゃと思つてたのでは善男善女にありがたくひゞかん。たゞ、そういうもんかなと感心して話をきく程度にすぎない。「中略」 在伯邦人に希望と生きがいを興えてやるところに永住教の 眞諦がある。在伯邦人の大部分が帰りたいにも帰られない不満の心根をなぐさめてやる宗教が永住教なのだ」

古関はこんな調子でガット運動永住経をといた。ガット運動はブラ拓移住地ばかりでなく全邦人にもよびかけて、ようやく注目され初め、東亜再移住論がやかましくなるにつれ、この運動の重要性がました時、突如不慮の死によつて指導者古関をうしない、同時に戦争時代に入つて、せつかくの文化運動も中絶してしまつた。

同 化 論

永住論と密接な関係をもつたものに同化論がある。同化論は日本移民のブラジル同化を積極的に主張するもので、常識的な意見としては永住論と共に古くからいわれていたものであるがこれを理論的に問題としたものに雑誌「文化」がある。

ブラジル同化に反対するものゝの意見は、日本人の子孫はあくまでも日本人の血と文化とを保持してゆくべきであると

いうことにつきる。結句、日本主義精神を窮極まで守りぬこうという信念から来ているものであるが、この信念を極力コロニヤにうえつけることに努力したものは文教普及会であった。特に普及会主事中の一人葛岡唯雄は「国粹主義者」であつたが、彼は六名の主事中最も思想的に活躍して、普及会の指導方針を理論的に裏づけることゝ、これを邦人社会に宜伝することに努力した。葛岡唯雄が一九三九年、大使館付武官中西良介大佐と邦人子弟の教育方針についてブラジル朝日紙上で論戦したが、その時葛岡が中西武官の移民養子説と和魂和才説を反駁した一文の終りに、

「なるほど、これから日系伯人が多くなるが、その皆さんの子孫は日系伯人といふはしても、決して伯人ではありません。ブラジルで生まれたからブラジル人、これは法律の問題で、その法律は人間が勝手に作った約束にすぎません。その法律にしても神様のような人が作ったものではなく、我々同様の人間が勝手にきめつたことで、人間の力でどうすることもできない血、皆さんの子孫にはいつまでも日系人の血が通っている以上、立派な大和民族であります。人間おたがいの約束ではない切るにも切られない血のつながりがある以上は未来永劫、天皇陛下の赤子であります。私は皆様を神の光の遠端としてブラジルにきているものと解したい」。(ブラジル朝日一五九九号)といっている。人種的血液と民族的文化との関係とを混同し、血すなわち精神という信念から中西武官の移民養子説―一種の同化論を攻撃した。

中西武官の移民養子説なるものは、移民たるものはよろしく養子に行ったような気持でやるべきだといふのであるが、必ずしもゲンミツな意味の同化論と同じものでもない。葛岡唯雄から攻撃された武官の一文(ブラジル朝日掲載)中から一節を引用してみよう。

伯国はどこまでも伯国で日本ではない。他国である。そこに生活している在留同胞である。而して伯国民となり骨を

伯国に埋めんと決意の下に渡来してきた同胞であると思う。換言すれば第一世の皆が皆まで左様でないかも知れないが、第二世以下は純然たる伯国民となるであらう。果して然らば 在留邦人は日本という實家あり、伯国という他家に養子にきたようなものであるから、養子たるものは實家に対する態度と養家に対する態度を判然区別せねばならぬ。養子たる身は辛くもあろうが、その心がけ手腕によつてはまたどの様にでも日伯両家をもてなすことができると思う。「和魂洋才」なる言葉をまねて、和魂伯才をもつて教育のモットーとなし、完全なる日本人を作りたいとのことであるが、この点私には 合点がいかない。

私が説くまでもなく、和魂洋才なる言葉は我国の鎖国時代に、ある漢学者の頭脳から割り出された言葉であるが、この言喪は明治大帝の五ヶ條の御誓文によつて具現化された観があり、その結果、我国民が人類史上かつて見ざる進化国民となつたのである。しかしながら、右の和魂洋才なる言葉は、舊時の日本にあてはまつたとしても、日本が現在の如き国際的地位を獲得し、眞に名實共に世界一の大国民となつた今日においては全く陳腐極る言葉となつた。現在の日本人はあくまでも和魂和才でゆかねばならぬのである。従つて完全なる日本人を作ることモットーとするならば大いに物たらぬはすである。といつて決して第二世が和魂和才でゆかねばならぬというわけではない。たゞ、かゝる不合理極る言葉の使用咎めたいのである。

中西歳官は移民養子説を力説して養子への同化をすゝめているかと思ふと、第一世は和魂和才に徹せよといつて養家への同化を拒否するようないゝまわしをしている。そして自家である日本の和魂和才こそ世界一で、今日の日本人は他国から学ぶべきものは何ものもないというのである。しかるに「……といつて、決して第二世が和魂和才でゆかねばならぬというわけではない」と再度論旨を飛躍させるといふ曲芸を行つてコロニヤを煙にまいた。

この両人の論戦は、批判力に乏しいわがコロニヤ人をひどく混乱させた。一世の生活態度、及び子弟の教育方針で左往右往し、その帰するところを知らなかった邦人社会は、日本の外務省と陸軍省の移民政策上の意見を代表するかのようになってしまうものが、かゝる重大な喰いちがいをしていることによって、ますます迷うばかりであった。

これらの同化否定論や、ぬえ的同化論に対して雑誌「文化」は徹底的に同化論を提唱した。安藤全八は「文化」（一九三八年十二月号）誌上に「同化の根本的な問題」という一文を発表した。これは、文化的な同化だけでは人種が異なる場合は将来不幸をまねくことがある。三百年前からブラジルに入った黒人は文化的には完全に同化しているが、混血しなかったものは特殊部落的存在となっている。数的にきわめて少い日本人は同化も混血も出来なかったが、われらの子孫の運命はのろわれるべきものとなるかも知れない、という論旨から次のように結論している。

「一体、なんのためにブラジルに來たのかということ、われわれは冷静に考えなおす必要がある。われわれはもちろん日本人であることを嫌って母国を逃げてきたのではない。又満洲移民のように国策の第一線にたつためにはるばるとやってきたのでもない。たゞ行きつまつた日本での生活を海外に出て打開しようという個人的な理由から移住してきたのではないか。だから金を儲けたら五年か十年で帰るというのなら問題は起らないのだが、ブラジルに永住しようという場合には子孫の問題などもこの移住の動機をよく考えて決定されるべきである。

ブラジルに永住の場合、日本語教育とか日本精神の注入とかいうことは日本人の愛国的な感情だけで、遠い将来の子孫のことなど全然考えずにその方針をたてたりすることは、果して賢明なやり方だろうか。ブラジルに永住する以上は子孫が立派なブラジル人になること（もちろん人種的にも混血して同化することはいうまでもない）が望ましいことであ

る。

そして新国家ブラジルの構成のために協力できるよき分子となることこそ大切なことである」。

私はあえていう。在伯の日本移民はそれがブラジル永住を望むならば、ブラジルに完全に同化することを眞面目に考えかつ、そのために努力しなければウソだ。

国家主義的な思想を超越したものは必ずしも非国的な考え方ではない。超国家的な考え方が非愛国的であるとは限らない。こんな考え方こそ世界全人類の幸福のためにどんな時代においても必要とされるものである」

同じく「文化」誌上（一九三九年四日号）で半田知雄が発表した「永住と混血の問題」も、永住即同化の理論である。その要点を所々拾ろつてみよう。

「もし永住というものゝ根本が同化であり、同化の最後の要点が混血であるさすれば、われわれ民族の永住は混血の可能性のあることによつて本来の目的が實現されるのではないかと思う。

私は日本国内における、或はアジアにおける大和民族の血の純潔ということゝ、ブラジルにおける大和民族の血の問題はかなりちがったものではなからうかと考える。しかし、移住者の本能は混血を排撃する。日本人はどこまでも日本人で通さねばならぬという。そして、自己保存の本能は感情的に愛国心と一致する。しかも現實には、子孫は益々ブラジルの精神的になつゝあるのである。たゞ顔だけが日本人であつて、精神的にはブラジル人でも日本人でもないという民族が残つたとしても、それは決してわれわれの望むところではない。われわれはブラジルにおける日本人の子孫が、いかに血において純潔であつてもジプシーのようなルンペンになり下ることは好まない。だからといって、身心共に日本人であることが不可能だとすれば、彼らは遠い将来にあつては純粹のブラジル人とならなければならない。しかも、そこにわれわれ移住者が海外発展の究極の目的を實現させるためには、彼ら

が純粹のブラジル人となった暁にも、やはり日本民族の血をひいたことの誇りを失わさないようにせねばならぬ。そしてそれが今日われわれのなしうる最善の道であり、責任であり希望でなければならぬ。そこが今日のわれわれの教育事業および文化運動の重大なるゆえんである」。

二世の反日本主義

雑誌「文化」に論説を発表した少数の一人が、邦人社会を風靡した国粹主義と全体主義に反抗して、ブラジル永住と同化を主張したが、その一方、日本文化を批判的な態度によって研究し、これを二世に紹介することに努力したことは特筆すべきであろう。

「文化」が発刊された一九三八年には、これと同じような動機と目的とをもつて、二世の大学生間に葡文雑誌 Transicao（過渡期）が現われた。これは二世大学生を中心に組織されていた日伯学生連盟の機関誌として生まれたものであるが、日伯学年連盟は初め、日本で小学校あるいは中学校で教育を受けてから渡伯し、更にブラジルの大学に入学していたものたちの発起によつて一九三三年に結ばれたもので、かれらの思想はすでに多分に国家主義的な影響をうけていた。このころはまだ、ブラジル生まれの邦人子弟で、大学にあるものは数も少く、学生連盟における指導権は日本生まれのものに握られていた。しかるにその後ブラジル出生のいわゆる二世学生の数が次第に増加するにつれて、かれら民主主義的な思想をもつものは学生聯盟幹部の思想をあきたらず思うようになつた。それと同時に一世の二世に対する国粹主義的思想の鼓吹に対し反感をいだくようになった。一世は、二世が成長するにつれ、特に中学校や大学校に入る者がふえてくるにしたがつて、彼らの気持や態度や考え方が、一世のそれとひどくはなれたものになることに気がついた。すなわち

ブラジルの育つ二世に対して、一世はこれを日本的な眼で見批判しようとする傾向が強くなってきた。そして日本的でないものを日本人でありながら持つということは悪であると考えた。二世から見れば、一世の考え方は日本でこそ通用しても、このブラジルでは日本人の社会だけしか通用しない。

ブラジル人として将来ブラジル人の社会に入りこんで活動しなければならぬ二世にとって、ブラジル人の社会で通用しないような精神や考え方は意味をなさぬ。だから一世は口を開けば日本精神といってこれを二世に強いるが、まことに迷惑至極であると彼らは思っていた。

法科大学生だった下元健郎が、こうした気持ちから一世に対する抗議のようなものを一九三四年目伯新聞のポルトガル欄に発表した。この文の中に「われわれは菊花の国を愛することはできないが、親の国として、敬意を拂うことはできる」という意味のことを書いた。

これはポルトガル文であつたので、一世でこの一文を読んだものは殆んどなかった、これが学生聯盟の日本派の幹部にとりあげられ、日本文に翻訳されて聯盟の機関誌「学友」に発表された。

これはコロニアに大きな波紋をなげた。主として、何よりも「菊花の国を愛することはできない」とは日本の皇室に対して不敬である。また、かゝる文を掲載した日伯新聞の不見識をせめて、数名の者が新聞社を威嚇的に訪れて、野村編集長を詰問した。彼らは、又、市毛総領事を訪れ、総領事の意見とこの事件に対する態度如何によつては、総領事を殺害すると殺氣立った。

下元に見れば、菊花の国といったのは日本ということこそポルトガル式の修飾語を使ったまぐ他意あるものではなかつた。「日本に対して愛国心はもてないが、両親の組国として敬うことはできる」といつたまでのこととある。それを天下の大問題としてさわぎ立てた一世のやり方に対して、

二世はついに反感をもつようになったのである。

かくして、わがコロニアに於ける思想対立は、一世の社会に於てのみでなく、一世と二世大学生の間にも闘争的になりだした。医科大学生氏原政明は、このころ普及会の育英生として毎月学資の補助をうけていたが、一世の頑固な態度に憤慨して、育英生をやめて学資補助を断った。

そして、ブラジル生れの二世大学生の数がふえて、学生聯盟がかれらの支配下におかれるようになるや、二世学生の本反日的国粹運動と、自分らは何よりもまづブラジル人であるとの意識の主張を機関紙トランジソンによって二世の中学生、大学生に対して積極的に行った。かれらは、偏狭な日本精神に勇敢に反抗した。そして、何よりもブラジルを愛するものであることをのべたが、父母の国、日本を軽蔑してはいなかった。むしろ、そのすぐれた日本文化に対しては、これを吸収することにつとめ、ブラジル朝日葡欄や、「トランジソン」を通じて日本文化の紹介と研究に努めた。学生聯盟はブラジルの対日宣戦の結果解散の止むなきに至った。

互生会の文化運動

雑誌「文化」の邦人社会の文化運動にさきだつこと数年、農村の生活文化の改革を目ざした特異な社会運動が「互生会」によって行われた。

互生会は医学博士高岡専太郎が、日伯新聞をやめて、一時帰国していた安藤全八が再渡伯したのを機会に、一九三三年六月に設立された。この会は消費組合組織の下に全コロニアを包含し衛生問題を中心に家庭文化の向上を目ざしたものである。

高岡専太郎は新しい社会思想に対して深い関心があり、社会運動や文化運動に熱意をもっていた。彼もまた永住を主張し、永住するためには、何よりも生活文化を向上すべしとの

意見をとなえていた。

互生会は形式的には全邦人を対象とする協同組合であった。しかし、協同組合の事業そのものよりも、組合組織を通じて文化運動を行うことが主な目的であった。こゝに互生会の特殊な性格があった。

互生会は機関誌「家庭と衛生」を一九三三年八月から発刊したが、その編集方針が斬新であったこと、互生会の事業が、各自の家庭と密接な関係をもっていることが人気に投じて、パンフレット式の小冊子であったにかゝらず、発刊後一年で六千の会員読者を獲得した。當時、邦人雑誌で六千という発行部数は驚嘆すべき記録であった。

「家庭と衛生」は永住と同化を根本理想としそのためには、家庭衛生、教育、趣味娯楽、住宅の建築様式などあらゆる点にわたっての生活改革と文化の向上を指導宣伝した。「家庭と衛生」には、後にブラジル画壇において名を知られるようになった高岡由也が、高岡博士に非凡の才能を見いだされ彼独特の挿画と漫画をかの雑誌にいかして特色を高いものとした。互生会の社会運動は着々と発展をつづけて、将来は邦人社会の社会運動、文化運動の中心機関になるだろうとさへ思われたが、創立後二年足らずでいろいろの障害が生じ間もなく消滅してしまった。

言論 圧迫

邦人社会にも言論の圧迫干渉があった。それはブラジル官憲によってされたものではなく、日本総領事館によって行われた。最初の干渉は、一九二八年七月、當時パウルーにあった聖州新報が、長谷川如是閑一派が出していた雑誌「我等」昭和三年三月号から森戸辰夫の「共産主義原理」なる一文を轉載したが、時の中島総領事は、この記事の掲載中止を威嚇的に強要して、これを禁じた事件であった。「我等」は日本

で堂々と出版されているもので秘密出版でも何でもない。日本ですでに発行許可になつてゐるものゝ轉載を威嚇的に禁止させたことは官僚主義であり、かつ職権の濫用であつた。一九三九年、安藤全八がブラジル朝日新聞に「のぼせ上つた日本精神」なる一文をかいて、當時熱病的に流行し出した、偏狭な日本精神を批判した。「今流行の日本精神は、日本の古いものを懷う懷古趣味で、日本精神などといえるものではない」と相當辛辣な攻撃したことが、総領事館を怒らせた。この時の総領事は市毛孝三で、彼は決して反動ではなかつたが、玄洋社系の淀川領事が反動の巨頭として、文教普及会を指導し、邦人の思想問題にことごとくに干渉していた。「ブラジル朝日」は、かつては反官僚主義を看板にしていた「日伯新聞」の改名したものであつたが、このころは、その点においては昔のおもかげはなく、社長三浦は新聞から離れた超然たる存在として納まつていたし、この頃の「ブラジル朝日」は発行部数一万五千、邦字紙中の最大新聞と誇つてはいたが、それだけに営業本位となり淀川領事の恐喝に問題の記事は一回だけで尻切りトンボにしたという事件があつた。

もう一つの事件は、文教普及会初代会長古谷重綱の迫払出しである。古谷重綱はアルゼンチン公使を最後に外交官生活をやめてブラジルに移住し、大きなバナナ農園を経営していた。同志社大学、北米ミシガン大学に学び、つとに自由主義の洗禮をうけていた。したがつて、外務省時代はいわゆる幣原派に属した人であつた。市毛総領事は彼をあつく迎えて、邦人子弟教育の指導本部たる文教普及会の初代会長としたが、當時普及会は己に外務省から派遣されてきていたフアシヨ的国粹主義者石井繁美が事務長の椅子におり反同化主義と国粹精神を第二世に鼓吹することを主眼として会を改組した後だったので、古谷の会長就任は普及会にとってはむしろ毛ざらいされた傾向だった。そして、古谷重綱が永住同化を主張し、ブラジルを故郷としてブラジルのために努力する思想をもつて邦人子弟教育の根本方針としたに對して正面衝突の

形であつた。

一九三八年、某月サンパウロ市郊外の邦人の大集団地たるコチアに日本人小学校が建設され、その開校式には、州政府教育局長以下多数の教育関係のブラジル人も列席した。この時、古谷文教普及会々長は、日本移民の教育方針はあくまでも永住同化主義あるとの持論をポルトガル語で演説したが、淀川領事は古谷の後、日本語をもつて古谷の論旨とは相反した国粹論をやり日本人列席者の喝采を博した。

この日の古谷重綱の演説は領事館および普及会を中心に、更に又邦人社会に於ても極めて不評であつた。各邦字紙も一様に軟弱外交とけなし、極めて穏健な翁長助成の「日本新聞」さへ「ヘツピリ腰外交」であると攻撃した。これをもつても、言論界を代表するこのころの邦字紙が母国の時局に追隨的であつたかが充分にうかがわれる。

かくて、古谷は、かねてから、普及会や領事館の空気を不快に思っていたが、コチア小学校における演説の意外な反響ですつかりいや気がさし、普及会長のイスを投げ出した。

龍 土 会

龍土会は主として二世大学生を思想的に指導する目的で、市毛総領事の発案でつくられたものである。市毛総領事は文化問題についても理解があり、考古学研究に興味をもつ邦人らと、「考古学研究会」を組織して、発掘などもしばらく行い熱心にこれを後援したりして、歴代総領事中稀に見る文化の理解者であつた。一九三八年、市毛は日本考古学界の権威鳥居龍三博士をブラジルに呼び、サン・パウロおよびリオ・デ・ジヤネイロその他の大学で日本考古学に関する講演をさせたことがある。市毛は同じ日本宣伝をやるにしても、日本文化の科学的の紹介に力をそゝいだ。彼はこの鳥居博士の来伯を記念し、且つ二世学生に日本文化を理解させる目的で、

月一回、土曜日に会合する集りをつくった。これに博士の名前から龍の一字をとり龍土会と命名したのである。市毛総領事は、はじめこの会の指導者として、古谷重綱をえらんだが古谷がこれを引きうけなかったため、海外興業支店長であった宮腰千葉太を指導者として招いた。

宮腰は、古谷と同じく外務省にいたものでアルゼンチンの日本大使館参事官で官をやめ海外興業支店長としてブラジルへ来た。

宮腰の思想は彼が昭和十三年六月から、龍土会でした連続講演を集めた「日本精神講話」と題する本の中にハッキリ出ている。彼の思想は古神道を根底とした日本精神で、東京帝大在学中寛博士の古神道学の講義をきいて、これに敬服している。ことにもその一端が窺われる。いうまでもなく寛博士は古神道や大乘佛教の教理を憲法々理の基礎にとり入れて、天皇を天照大神の延長とし、現人神でありとする汎神論的多神教的テオクラシイの憲法論をとねえ、上杉慎吉博士と共に美濃部博士の天皇機関説と対立的立場にあつた学者である。こうした概念から生れてくるあらゆる思想が、ブラジルで教育された学生によるこぼれる筈はなかった。

宮腰はこの連続講話のはじめに古事記の解説を行っているがそれについて「私は古事記を、著者大安麿がそれ序文にいわゆる「作らず飾らず違へじ」と力めて書いた一篇の歴史物語と見る。神話、伝説、比喻もできうるかぎり史的事実が存在するものとして解釈して行きたい」といつている。従つて宮腰の思想は多く二世にとつて頗る難解なものであつた。

法学士渋谷信吾も龍土会の講師として指導の一役を引きうけていたが、彼の思想は徹底した国粹主義で、龍土会はかくして思想的には反動的な傾向を濃厚にした。

日本人文化の紹介

東亜における日本の異常なる存在は、いろいろな意味でブラジル人の注目をひいた。満州事変、日支事変に対しては、ブラジルの言論界も、日本の意図を帝国主義であるとして批判攻撃するものが多かった。

二世を含めて三十萬の同胞が存在するブラジルにおいて日本に対する見方が反感的になることを防止し、更に日本に封する理解を興えて親善的な空気をつくろうという目的で一九三五年？ リオ・デ・ジャネイロ市に日伯文化協会が設立された。サンパウロ市には一九三九年に日伯文化研究会が起きたが、両者の間には、日本文化紹介の態度において相異があった。前者は、はなばなしく宣伝的、外交的であったが、後者は、日本文化優秀論など、問題にせず、ブラジル人が日本文化を批判的に研究することによって眞の日本の姿を認めさせようというところに目標をおいていた。

サンパウロの日本文化研究会は、リオ市の日伯文化協会にくらべて規模は小さかったが、この発生が、サンパウロ法科大学生の自発的な要求から起ったものであるところに大きな特色があり、最後まで、ブラジル人によって動かされていたことに、単なる宣伝機関でない誇りがあった。

この研究会は一九三八年三月、當時法科大学生であったマリオ・ミランダ、ドルバル・カストロ、マリオ・モラエスらが市毛総領事の世話で古谷重綱を講師として、法科大学内に日本語および日本文化の研究講座を設けたことに始まる。講師には安藤全八が後から加わり、更に日本語講座の聴講生を一般にひろくつるため翌一九三九年五月から、新しく日伯文化研究会と改組して、法科大学からマルチネリー館十九階に移ったが、数十名の会員の大半は法科、文理科、医科の学生および卒業生で占めていた。

言論空白時代

日米戦開始以来、東京ラジオを通じて報道されるかゞやかしい戦果は、ブラジル永住と同化論をふきとばし、大東亜共栄圏への再移住こそ、日本民族の理想である。アジア人はアジアに帰るべきだという観念にコロエアをしやにむに引きづっていった。それに、連合国側にたったブラジルが在留日本人に対して敵国人として種々な圧迫を加えるようになってからは、これに対する反抗的な気分も加わって、反ブラジル熱はコロニアに広く高まってきた。しかし、興味あることは、土地を所有している農業者には、ブラジル政府の態度に不快を感じながらも、反ブラジルの感情をもつものは、割に少なかったことである。しかし、ブラジル引揚、帰国、再移住は戦後たゞちに行わるべき現實の問題となつて、氣の早いものは、子弟の教育さえもその目的のために変更し、ブラジル小学校への通学をやめさせて禁止されている日本語教授に力をそぐぐという有様であつた。

しかし、外国語の新聞雑誌の発行はもとより、敵国人の集会は禁じられていたから、言論の発表の機関がなく、暗黒な空白時代にはいった。そして、根拠のない噂が言論機関にかわつて邦人コロニアのすみずみまでまきちらされるようになった。この頃、まだ永住や同化を主張するものは国賊とされ、ブラシルを罵倒するものは愛国者であり、日本精神の所有者であるとされた。

サイパン島が米軍に占領される頃から、日本軍の戦果に対して疑いをもつものが現われてきたが、フィリッピン喪失、沖縄守備軍全滅の報がつたえられるころには、日本軍の終局的戦利をうたがうものもあつたし、ごく少数のものや二世中の知識層のあるものは、ファシズムとミリタリズムの敗北を、ひそかに望んでいたほどであるから、日本に対しても批判的な態度をとっていた。しかし、こんな考えをもっていたものは数にすれば例外ともあつかえるほどで問題にならず、全コロニアは東京ラジオの放送に百パーセントの信頼をおいた。

突如として、八月十五日終戦の詔勅がラジオから伝えられるや、コロニアは悲壮きわまる絶望の底にたゞきこまれたが、何か覚悟のできない半信半疑の有様であった。そこへ、翌日からふりまかれた日本軍大勝利のデマは、きつねにつまゝれたような心理状態のまゝで意気消沈し半病人のようになつていた社会への強力なカンフル注射となつた。日本は大勝だ。敗北を信じる者は国賊だ、大東亜共栄圏は確立した。いよいよブラジル引揚げた。アジアへの再移住だ、日本大勝利のデマ報道は、コロニアを決定的にさせた。かくして、臣遺聯盟の積極的な活動となり、暗殺事件がひきつゞいておき、言論は空白のまゝ、あらゆるデマが濁流のように、冷静な意見と批判とそおし流していった。

戦前から文教普及會およびその一派の国粹思想によつて指導教育されてきた邦人社会がかゝるコントンたる状休に陥つたことは少しも不思議ではない。邦人社会はかく進むべく教育されてきたのだ。神国不敗の信念こそ普及會によつて強くうえつけられていたのである。普及會は、バクダイな費用と大きな組織によつて、日本人社会から批判力をうばい、科学的な知識で二世をみちびくかわりに宗教的な信念力だけで日本精神なるものをうのみにさせることに成功したのである。それ故臣道連盟の指導的立場にあつたもの、また連盟には加わらなかつたが、連盟に対して好意的体度をとつたものゝ中に日本人小学校教員であつたものが割に目立つことは、これを裏がきするものといつていい。

したがつて、臣道連盟に参加したもの、特に、その年少者に対しては、かれらの行為を非難し、罪をにくむ前に、かれらそしてかくならしめた思想的温床は誰によつて作られたかを考えて見るべきである。かくの如く国粹主義の極端な鼓吹は、戦後の邦人社会をいたづらに混乱にみちびいたことにおわつただけであつた。

戦後の言論界

終戦後、邦字新聞の復活を見るまでには一年半もかゝったがこの間に謄写版刷の戦勝デマニュースが横行をきわめた。そして、これらの虚報に対抗して、日本の實状を報告するいわゆる認識運動派の種々のパンフレットものが出たが、その中で、コチア産業組合から出たコチア週報という邦人タイプの謄写刷パンフレットは、馬淵知世、河合武雄、江見清鷹、木村義臣、新藤広志らが何年ぶりに張りきって筆をとり、単に「認識運動」のみならず、コロニアの社会問題、をとらえて簡単ではあったが、世間が勝敗の騒ぎに夢中になっている時、早くも、冷静なる体度をもつて、邦人社会に思想的な問題を提起したことは、永年の言論空白時代をまず最初に破つたものとして記録されてよい。

土曜会と時代

戦後の日本には民主々義思想が澎湃として言論界に現われてきたが、邦人社会の言論界には、自由主義も民主々義も、これを思想的にハッキリとつかんでいる者が極めて少なかったために、従来の言論界の指導者たちは、邦字新聞が出るようになってからも、少数のものを除いては思想的には指導力を失って自然、言論界から退かざるを得なくなった。そして、彼ら舊言論界にかわつて新しく擡頭してきたものに土曜会同人がある。

土曜会は終戦後の混乱、それは単に社会的な混乱ばかりでなく、知識人中にあった思想上の不安と混乱の原因について反省し、又数年間の知識的空白からきた思想の停滞に刺戟を興えると共に、更に邦人社会における新文化運動を起さんとの意図のもとに一九四六年六月、四十才前後の知識人を中心

に組織された団体である。この会には思想的には色々のものが雑然として集った。したがって土曜会それ自身にはイデオロギイ的のものはない。

土曜会は会員の研究発表を目的として、機関誌「時代」（菊版六十頁、季刊）を発行し、今日までに（一九四八年六月）すでに第六号を出し、各号に、それぞれ注目すべき論文が発表されてコロナ言論界に異彩をはなっている。従来 of 言論なるものには、たゞ個人的な意見や感想といったものが多かったが、「時代」は、それから一歩進んで、文化問題にせよ、二世問題にせよ、あくまでも批判的な態度をもつて、これを検討するを主眼とした。したがって「時代」には通俗性がなく、一般社会に興える影響は少いが、邦人言論界にこうした性格の出版物が現われるようになったことは、まさにコロナにとって画期的な出来事であるといえる。

「時代」誌上に活躍しているものには、江見清鷹、アンドウ・ゼンパチ、古野菊生、半田知雄、河井武夫ら戦前から文筆をとっていたものゝ外に本山善徳（数学）吉岡重一（化学）斎藤広志（社会学）久保裕（医学）鈴木悌一（文化人類学）など特色ある新人がある。

（安藤潔）

第四章コロニア文学・美術

一、初期文学史概略

移民史四十年の中で、我々がたよって来た文化生活のあとをふりかえってみると、一番先きに頭にうかぶことは「新聞」のことである。何はさておき、新聞だけは発行されて来た。そうして「官」や「民」の間に立って新聞は田舎芝居の人気役者であつたし、無味乾燥な移民社会に話題を提供するのも新聞であつた。

一九三〇頃（三二年に舊満州国生る）までの我々の新聞はおゝむね報道機関であるよりも、言論機関として特殊な社会的役割を果して来た。そうした新聞が、自ら社会の木鐸なりと宣言して来たことも事實であつた。

私は新聞を中心とする言論機関の中で、わずかにいきづいて来た文芸のことについて書こうとするのであるが、材料と云えば皆無とも云える中で、何がかけるか實にあぶなつかしいものである。まして、系統的な発展史として叙述出来るかどうか、筆者はほとんど見當がつかない。しかもこゝに書くこととするのは、一九〇八年の笠戸丸から一九三〇、三二年頃までのことで大正六年（一九一七年）伯刺西爾時報が活字新聞の最初のものとして現れてからは十四、五年間のことにすぎない。

その間に當時週刊紙であつた伯刺西爾時報、日伯新聞、聖州新報等に発表された文芸ものをどんな立場から叙述するか、だれでも考えつくことはたゞの茶話にするより仕方がないと云うことであろう。満州事変以後になつて聖州新報がトップを切り続いて時報、日伯が日刊新聞となり、新聞の文

芸欄などが文芸家諸子に物足りなく感じられだし、三八年「地平線」その他続々と文芸雑誌が現れるようになってからは、文学史もまた可能であるかも知れない。私のは文学以前の話、いわば神話時代の昔語りである。昔話しと云つても、文学が我々の生活史から独立しているわけのものでないから、少くも生活史の一部となり伴奏となることは可能である。

一九二二年にはブラジル独立百年祭があり、伯刺西爾時報が特別号を出し、又「新進の伯刺西爾」など記念出版物が出たのは画期的事件であつたろう。

當時手摺りの活字新聞を出していた「日伯」が、このんで駐伯官憲の批判をしたり、移民指導者達に喰つてかゝつたりしていたのに反して、「時報」は移民の生活指導を標榜していた。社説に道德的題目をかゝげて「説教家」「モラリスト」などの異名をとつていたのは社長黒石清作であつた。文芸欄を設け、毎週必ず文芸ものを発表したのも伯刺西爾時報であり、時報が常時同胞社会の文化的活動の中心機関である如き観を呈していたことはいかなる史家もみとめざるを得ないことであらう。

その伯刺西爾時報に筆をとつた人で、オペラの通人鹿野久市郎がいた。もし今なお存命ならば六十餘才、イタリー語の先生を日本のどこかの語学校でやって居るかも知れない。同胞社会で最初のジャーナリストらしい文人であつたと噂されている。オペラの通人だなど云うと、いかにも繊細な文化人のような印象を興えられるが實は荒げずりな野人だつたとも云う。

或る時はシダーデの真中で、ジャカレー星名に喧嘩をふっかけられ、辯論もどかしく、エイツとばかり見事なジウドウの腕前で相手を舗道にたゞきつけて置き、そのまゝふりかえりもせずに、さつさと立ち去る鹿野であり、また或る時はネクタイなしでジレイタ街一流のコンフエイタリアで門前拂いをくらつてから「いくら金を持っていると云つても入れてく

れないんだよ」と頭をかきながら報告する彼であった、と一舊友が話してくれるのであるが、武骨であつても情味のあつた人間だったようだ。文章はかきなくつてスイコウなしに印刷にまわしたので有名だ。

當時からの文筆家であり、今なお健筆をふるつている人に輪湖俊午郎がある。のちの著書「流轉の跡」は書名の示すごとくロマンチックな匂いと宗教的情操とがごっちゃになったような感を興えるが、彼の北米時代からの長い記者生活によつてきたえられた軽妙な文体は、複雑な流轉のあとを淡々と興味深くのべている。「流轉の跡」は日本で印刷したものであるが、鈴木南樹のものと共に文学的な著書としては我々の社会では珍重さるべきものである。

後の日本新聞社長翁長助成は明星派の歌人であり、一九一八年頃からトウシヤ摺り南米週報に白水郎と号して短歌を発表し、一九一八年以後はブラジル時報に発表して四、五年間続けたらしい。今も話題にのぼるのは独身時代マツト・グロツソ州の広野で牛を追いながら作つた歌であるが、たゞの一節も例として上げられないのは残念である。白水郎は後自ら新聞を経営し、その主筆をかね評論や旅行記、隨筆などを書いているが、落着きのある名文だと評されている。

特別文芸愛好家であつたかどうかわからないが、「ミナス州の金鉱移民」の一人として思ひだされる故渡邊孝は、旅行記を発表するので筆まめな人だと評されていた。テニスをやり、フグスマ的ユーモアを連発する人気男。日本から呼んだ奥さんに「エンコメンダ」と名づけたのは、彼だったかどうか明瞭でないが、エンコメンダの言葉と共に若き日の彼が頭に浮んでくる親切だが、無器用な男だった。文章もまたそうだったと思う。

新聞に講談ものを連載するのは邦字新聞の伝統らしいが、時報が百年祭前後数十回にわたつてベルナルド・ギマランエスの「エスクラーバ・イザウラ」を「奴隸の娘」として訳載したのはブラジルではめずらしい試みであつたろう。記者は

杉山帆影（英雄）だ。原文に忠實な訳し方が、半分位までやって中止になった。通俗なものであったが、ブラジルの文学を日本語に訳して発表したものゝ最初かも知れない。杉山と云えば、彼は可成りな文学青年で、或る時病を得てサントス海岸に静養に出かけ、金髪の少女をみそめ、「海のような青い眼の女」とかいう短篇をものしている。よく記憶していないが、毎日散歩途上に行きあう初々しい少女をロマンチックに空想するリリックなものだつたと思う。彼は瀟灑な雑報記事をかくのでも評判だった。杉山は時報の編輯をやりながら文芸欄の選もしていたと思うが、数ある投書の中で、當時リオ市に在った堀口大学の訳詩を二、三度発表したのは異色であつた。その中で今に筆者の記憶にあるのはポール・フォールの「空の色さえ陽気であり、時は楽しい五月です」と云うのだった。杉山と同時代に時報には、肩のこらない文章をかくので有名な馳山田中馳誠がいた。元来は佛門の人らしいが、ブラジル生活のスケッチを「新青年」あたりへも発表していた。旅行記や随筆が得意、飲みながらの雑談は特別味があつた。

以上私は一九二〇年代の文藝愛好家やジャーナリストについて思い出すまゝに書いたのであるが、それ等の人たちは必ずしも文学を志し、文学を芸術的活動としてあこがれた所謂文学青年として後代に記憶される人達ではない。

主として伯刺西爾時報に、広くは一般の邦字新聞に文芸作品を投書して、ひそかに芸術的活動をたのしんだのは、今ではほとんどその名さえわすれられてしまつた文学青年達であつたように思う。そうして大正の後半期頃、一時的に青年男女の間に文学熱がもえ上つたのは、前大戦後日本にさかえた初期デモクラシーの思想と、厨川白村あたりの恋愛観や文学論などに刺戟された点が多かつたように思う。彼等は自分達の境遇が移民であるとか、ブラジルに働きに來たものであるとか、これからどうなっていく身であるのかなど、そのようなことを反省して、自分たちの生活を表現したいなどと云

う意識は皆無だとは云えないまでも、まず表側には現れていなかった。彼等は移民の生活が、金儲け一天張りで無味乾燥であることに對しては大きな不満をいだいていた。そして金儲け主義に對立して人間の幸福について思索していたようであるから、思想的には確かに家長移民達より進んでいたろう。また故国の文芸作品をとおして新しい自由な空気を感じていたため、祖国への関心は大きく、彼等の作品が、むしろ観念的な世界にあこがれるロマンチックなものであったことはたやすく想像されよう。そして、自分たちの生活がせまく閉ざされていただけに、暗くしめつぽく感じられたのも當然だと云える。作品には小説あり、詩あり、短歌ありであったが、ほとんど芸術的修業をつんでいないものが、いわゆる若気の至りで書きなぐるものに芸術的作品としての形をなしているものがなかったこともやむを得なかったろう。詩などは、後日或る詩人が評して云ったように「おゝ」と「あゝ」との感歎詞で出来ているだけだったかも知れない。しかし、こうした文学青年の活動は、それ白身としては何ものも残さなかったが、この索莫とした移民社会に文化の燈火をほそそながらともし続けて来たことはやはり尊いことである。彼等の大部分は、今日最早文学青年としての過去を、若き日の氣まぐれとして追憶するにすぎないものとなっているであろうが、しかも在伯同胞の文化運動をがっしりと支持している人達である。

多くの文学青年達の名の中で、今でもはつきり憶えているのは、當時セルケーラ・セーザルに在った松本高信、リオ市の丘の人（椎野豊）、サンパウロ市の坂井田人間（南舟）等である。松本高信の作品では、鈴木三重吉を思わせるようなしっとりとなつかしい感が追想されるが、當時評判になり、その後長く記憶にある点を考えると、少い芸術的作品中の数篇であつたような氣がする。

丘の人ののは、どんな感のものだったかおぼえていないが、椎野は今日も健在で、パウリスタ新聞に戦後の日本通信をの

せている。

坂井田は、その出発点があまりに文学青年であり、しかも時報に発表した作品「狂伯爵」が社会主義的思想を盛っていたので、後日の彼とはちぐはぐな感を興えるかも知れないが、當時としては異色のあつたものである。文芸作品中にイデオロギーらしいものを持ちこんで世人をおどろかした最初の人であろうか。後々^{（一）}の安藤潔が詩や短評に、社会諷刺の態度を見せた頃は、我々の社会の一角にも無思想の時代から思想家を求める聲がおこり出した時である。

これは文芸とは一寸と縁遠い話であるが、小林美登利が時報に宗教論壇をもうけ、宗教の原論から始まって、バイブルの講義などをやった時は、ブラジルにも思想家現わる！と青年達によるこぼれたものである。関東大震災前後のことで、世界を挙げて華々しい思想戦が展開された時代であつた。

伯刺西爾時報社の工場内に働いていた文学青年中に、小説家を志した黒坂露山があり、詩歌人の山下清次郎があつたが、二人とも若くして歿した。

日伯新聞には、その後日本へ帰えつて歌集を数巻出した園部英文が居た。福田美實の「女を臭ぐ」が日伯紙上に発表されたのは一九二九年であり、同年の日本人同志会による日伯社長三浦鑿の国外追放運動のために一理由を提供することにもなつた作品であるが、これは文学が社会問題となつた唯一の事件であつた。しかし、表面的には文学の世界の出来事のようにであるが實は政治的に利用されたと云つた方がよく、この事件はむしろ他の部門であつかうべきものであらう。

福田美實の作は、なるほど一応文体をなし、或る形をそなえてはいたが、自然主義的な肉体の文学などではなく、全く別な或るものであつたと云える。だがこんなものが前後十数回にわたつて発表されたと云うことは、同胞社会の一方に無趣味な生活にたえられなかつた青年達が、いかなる方面に向つてうさ晴しをしたかを示すもので、風俗史の一頁として見

るとき、移民の生活の中で見のがすことの出来ないものである。

日伯新聞は、輪轉機がすえつけられ、活字が新ポイントにあつたまり、日刊に近づくにしたがつて面目があらためられて行つた。しかし、それと共に文芸ものは極くわずかに随筆や俳句短歌などに限られるようになり、文学青年の作品など低級だとして斥けてしまったような印象を興えた。わずかな作品発表の中で記憶に残っているのは、今井白鷗の詩と、舟人の短歌である。白鷗の詩は新体詩のような型態をそなえ、ロマンチックな空想をうたつたものが多かったが、表現に生などころがあり、型にはまりきれないもどかしさがあつた。無難であつたと云ふことのために、新聞は安心して発表したのではないかと云う印象を興えていた。舟人の短歌は、後の聖報歌人金子英雄に感が似ているが、自由律に近く、口語体で階級の感情をさらけ出した点特色があつたように思う。白鷗と同様、カンボス・ド・ジヨルドンで肺患療養中に倒れたように記憶している。白鷗と云えば日伯を思い出すのであるが、白鷗は各紙に詩を発表していた。民話作家堀田野情もあらゆる邦字紙に作品を発表していた人で、終始一貫民謡体の詩をつくっていたので記憶にある。

聖州新報紙上では、富岡耕村が創作、随筆、短歌等、数年にわたつて発表しつづけたのは特筆すべきであらう。淡々としたたくまなない文章である。耕村の歌は、彼とは全く対蹠的な坂根が感心していたから面白い。

聖報のバウル時代には、浅見哲之助が若き情熱をかたむけて、なまなましい小説を発表していた。

社長香山六郎は公孫樹と号して、社説以外旅行記や随筆をかいた。カミシモをぬいだ気安さで人情家香山六郎に接することが出来た。彼は自由主義はなやかな時代から戦後の思想的大轉換時代まで、各時代の思潮を一身に体験して来たような男で、ブラジルではめずらしい存在である。彼が果して新聞記者であるかどうかと云う議論は、論敵の好んでなした批

評であつたが少くも無思想なジャーナリストの中にあつて、思想家たるべく努力して来た人であつたと云える。聖報はずつと後になつて、同紙歌壇を中心に活動した歌人の選集「移り来て」を発行してこの種の事業の先鞭をつけ文化運動に貢献した。

新聞以外では農業雑誌「農業のブラジル」があり、社長揮旗探志が文芸に興味のある人だったので、作品を募集しては発表していたが、どんなものがあつたかほとんどおぼえていない。ただ一つ斎藤政一の「金髪の妻と別れて」とかいうのは連載されたのでおぼえている。シベリアに於ける日本青年と、ロシア女との恋ものがたりではなかつたらうか？ 或者は白伝であらうと想像し、或る者は半ば創作だと云う。後日フィルムを日本から輸入して日伯シネマ社を興した。彼は全く別な方面で移民をなぐさめながらお金を儲けた人である。

揮旗が鈴木南樹の歌を推賞して、いつも特別あつかいで発表したことは面白い。南樹はずつとあとで小説にも筆をそめ初恋物語りを書いているが、可成り冗漫であつたため世評はかんばしくなかつたが、著書「ブラジル移民の草分け」は多くのものに歓迎されたし、第二の著書「埋れ行く拓人の足跡」は共に興味をもつて大衆によまれた。しかし、筆者は彼の短歌に共鳴した。開拓者の気概を感じさせられる名歌が二著書の各所に挿入されている。

農ブには文芸作品と銘打ったものではないが、四百字くらいの小品で、農村生活の色々なシーンを生き生きと描き出したものがまるで埋め草の如く挿入されていたのを思いだす。たとえば、田舎へ旅行して夕方ある農家の門口にたどりついたとする。おかみさんが米をといでいる傍で子供がぐすつている。おやちさんがミリーヨをジャツカにいっぱい入れて豚小屋へいそぐ。豚のなき声が断然あたりを圧する。夕陽が落ちていくコーヒー園の背景―まあそんなものが目のあたり躍動する如くうつされていた。當時社員であつた佐藤常蔵の作だつたことを後に知ることが出来た。佐藤がシネマの名鑑賞

家であり、手がたい批評家であることは知っている人も多からう。

活字印刷の刊行物以外に、多くの石版や謄写版の新聞、雑誌がずっと後になってからも存在した。その中で一九二七年の商樹が出した石版ずりのサンパウロ時事は、たしか三号迄の短命だった。

小林美登利の「市民」は文学史とは関係がうすいが、當時の青年の指導機関として有力なものであったから、こゝにその名を記して置く。これにはブラジル語の講義録をのせていた以外青年層の指導をめざした論文や、揮旗富美のブラジル文学の紹介的翻訳がのつた。インノセンシャの書き出しのところや、オス・セルトンエスの一断篇などが訳載されたのは有意義なことであった。

小林の愛弟子であった木下政夫が、学校の作文ではあったが葡文で発表したカルタス・ヴェーリヤス（古い手続）は、十年間の永い異境の生活の中へ、いつもなつかしい祖国のたよりももたらした手紙、やがて母の死を知らせて来た手紙に向つての独語であつたと思うが、シルヴェラ・ヴェノ師が「満点！ 貴方はきつと立派な作家になるだろう」と云う最大級の賛辞を贈つたように、ブラジル語を勉強していた當時の一世及び二世の青年達には大きな感動を與えたものであつた。

これもこの頃の出来事であつたが、野村秀吉測量技師の部下に運天政行と云う青年がいた。森林中で測量の仕事をしていた時、あやまって自分のかついでいた鉄砲で生命を失つた人であるが、死後遺稿集が出版されたような噂をきいた。活字でなされたものかどうか不明であり、どんな文章であつたかもわからない。死んだのは二十八、九才、今生きていれば五十才近いと想像される。

短歌や俳句のことは、その道の大家連がかいてくれることゝ思うし、一九三五・六年以後のこととはもう私の手から離れて、専門家の研究の対象となつてよいと思う。一九三七年

(?) には雑誌「文化」が出ていたし、三八年には「地平線」が出て、文学の世界は一時に春が訪れたような時であった。短歌の「椰子樹」が出たのもあの頃であったように思う。ブラジルの邦人文壇での始めての理論的な提唱であった移民文学論が盛んになったのもやはりその頃ではなからうか。

時は、あたかもナショナリズムの全盛で、移民が大きな生活の矛盾を感じた時代であるが、また無反省な出稼ぎ者が自分の将来を自ら思索して決定しようと考えだした時代でもあった。我々の歴史でもまた大きな轉換期となったのである。

(以上半田知雄)

移民の草分鈴木貞次郎は、明治俳壇の根岸時代、子規、碧梧桐、虚子等と句坐にあつた一人で、當時彼は虹原と号していた最初の彼の俳句は、

そこ行くな今鈴虫のなかんとす

明治三十八年暮、彼は日本を去つて以来、俳句とは遠ざかつてグアナバラ湾に彼が初めて入港した時より短歌の人となつた。

以来彼は南樹と号して、幾千の短歌に移民四十年の生活感懷を述べていた。

一九〇八年春、上塚瓢骨の渡伯を祝すとして、ホトトギス派の虚子は扇子に自筆し、上塚周平に左の句を贈っていた。

王霸何ものぞと蛇の穴を出づ

伯国日本移民と俳句による虚子のつながりは、この時代からのことであつた。

笠戸丸航海中、上塚瓢骨を中心にして四、五の天狗連中は

俳句会をやった。サントス港に移民船が着いた時、瓢骨の句は

涸瀧を見上げて着きぬ移民船

であつた。六月十九日夜、移民は聖市移民収容所に初夜を過ぎた。

ブラジルの初夜なる焚火祭かな

が瓢骨の、伯国日本移民の初俳句であろう。

南米週報紙に俳句壇があつた。明穂曙梅が選者であつた。曙梅は明穂梅吉で、在伯日本人俳壇初めての選者であつた。それから大正二年頃、鈴木南樹は聖市に於ける短歌会を主催していた。伯国二十一州集と稱して、毎月一州集、リオ・デ・ジヤネイロ州集を出したりミナス州集を出したりしていた。

移民歌人は高桑秋の人、中園佐坊、香山公孫樹、佐伯某が鈴木南樹の同人であつた。約一年ばかり続いてバイア州集で休刊した。謄写版でなく自筆帳を作つて廻していた。彼の短歌に

山羊の乳搾る娘をぬすみ見つ

イペの花みつ吾れ唯ならず (南樹)

眼じるしの椰子の木までは鋤き終つ

後見すれば遠き吾が家 (南樹)

二、後期文学史概略

(写真―佐藤念腹)

鋤取って

俳諧村を拓くべし



一九二七年、佐藤念腹がブラジル移住にのぞんで、高浜虚子から贈られた一句である。その俳諧村を拓くべき最初の鋤はこれも同じくホトトギス派の俳人木村圭石によりノロエステ線アリアンサ移住地においておろされていた。この国での句会はおそらくこの移住地で開かれたものを嚆矢となすのであろう。一九二七年五月のことである。

邦人ジャーナリズムで、いわゆる「俳壇」として登場したのは雑誌「農業のブラジル」の農ブ俳壇で、一九三二奉九月であつた。「第一回募集句を選了して」の選者念腹の句に

短日や発句の同行四十人

とある。

翌年、新聞では、當時ノロエステ線バウルにあつた「聖州新報」の「聖報俳壇」が創設され、その第七回を見ると入選者数七名で、落選者は二名計、九名の投句者を数えている。

右両俳壇でもつとも活躍したのは故上塚瓢骨で、今日にまで斯道に精進しつづけて来ているのは斗南と号していた現在の吉川耕花ひとりにすぎない。斗南と並んで活躍した南魚は行方正治郎として短歌に轉じた。當時、

柵の山羊皆鳴いてゐる雷雨かな
草取りの暁すでに汗ばめる

斗南
南魚

の心境にあつた両人が十数年後の今日、

マルチネリ低しと思ふビール抜く

（耕花「ブラジル俳句集」）

思想戦かくまで熾き世に在りて

敗れ去る者は世の常の如し

（行方正治郎「椰子樹」第十一号）

の境地にそれぞれの歩みを運んで来ている事を見る時、単に
両人の気質（テンペラメント）の相違のみとは思えないもの
を感じさせられよう。

「農ブ俳壇」は、同誌が「農友」と改稱されてもお継続さ
れたが、一九三五年初頭に至って姿を没した。

一九三五年九月に「伯刺西爾時報」が「時報俳壇」を設け
たその第一回募集には約四十名が投句し、その半数の者の句
は選に入らなかつた。が、その後数年、一九四〇年の二千六
百年記念懸賞募集には応ずる者約二百名の多きを算するに
至つた。

一九三七年九月、俳誌「南十字星」が創刊された。もとも
とこの誌は「雑詠」の選を念腹が、「南十字星集」を圭石が
選ぶことにして出発したものであつたが、「ホトトギスの中
心」としてひろく作句者を網羅して行こう」とする圭石と、
「ホトトギスの外に俳諧なし」とする念腹との方針の相違か
ら、両者の結合は創刊に先立って破れてしまった。同誌創刊
の翌年六月、圭石はサン・パウロで長逝した。三水会、落穂
会などの句会の創始者であつた。「圭石句集」（一九三九年
刊）は、

萬歳の御輿へ響く鼓かな

にはじまり、

虫干や父の遺せし祖父の遺書

におわる、ホトトギス初入選から、最期の日に至るまで二十二年間の労作二百九十一句を編んだものである。圭石逝去の翌月「南十字星」も第三号を以って廃刊した。

「時報俳壇」の皇紀二千六百年記念俳句募集の挙を最後の焰光として、俳句は他の文学と共に満五ヶ年に亘る空白時代を迎えねばならなかった。花鳥風月の写生を第一義とする俳句は、発表を全然念頭におかず、ひたすら自然の觀照と写生とに精進して句作に終始することはあり得ようが、祖国がその運命を賭けた肇国以来の戦争は、違く隔ったこの地にあるわれわれをも決して句作三昧裡には置かなかつたはすである。発表機関を失った空白の時代は、やはり作句の空白時代であつたと断じてても大過ないであろう。

一九四七年二月一日号を第一回として「パウリスタ新聞」は「パウリスタ俳壇」を設けて念腹を撰者とし、その選による三十二名の作を載せた。附託によれば投句者は六、七十名。ついで翌年一月の懸賞募集は選者の記すところによれば新投句家を加えて四百名に近かつたという。爾来念腹はパウリスタ新聞主催の俳句大会を主宰すると共に各地に行脚をこころみ、大いに斯道の啓発に力めている。

輪湖俊午郎編著に成る「バウルー管内の邦人」（一九三九年刊）には「過去十数年に亘れる在伯邦人の句」の中から念腹によつて厳選された俳句四百が集録されており、句作者六十四名に及んでいるが、同六十四名のうち現在作句を発表しているのは二十八名に過ぎない。

右の集録後十年、すなわち一九四八年八月一日付で「ブラジル俳句集」の発行を見た。採録されたものは二百名の句二千三十に及んでいる。この二百名の中、半数は戦前に、半数は戦後に作句を始めたものであるといわれる。右句集の内容について瑩石、信出の説によれば、季題数は春一〇二、夏

二〇九、秋一三二、冬一二三で、合計六〇五、最も多いのは夏の二〇九で、約三〇パーセントを占めている。ブラジル特有の新赛季について見るに、春六、夏七、秋六、冬一五になっており、冬の二五は全体の約五〇パーセントになっている。四季の別の分明しがいブラジルでは季題の設定に困難があり、例えば春部の「慰霊祭」は夏「十一月」、夏部の「火焰樹（スナイン）」は冬（六、七月）、秋部「カルナヴァル」は晩夏（二月）、冬部の「インコ（ペリキット）」は夏（十二月）などのように、なお研究に俟つべきものがある。

とにかく「ブラジル俳句集」一巻の刊行は、過去二十餘年のわれわれの俳句史の大きな画期的事業であった。同集の扉に、

梅椿咲かせ得たりといふばかり

の一句を寄せた虚子の感懷もさこそ「俳諧村」は今こそ花咲き匂ったのである。北米の俳句の歴史は、われわれより十年の長をもち、北米俳句集刊行の計画もあつた由であるが、今日まで實現した模様はない。

〔編者註〕 伯国季題の研究は一九三七年末、暁雪、陽水、素骨、芭川によりて始められた。その一部を示せば、

季題分類

一月	二月	三月	四月	五月	六月	
獸類					タツ、コチヤ、猪、山豚 クツツナ(山猫(六、七))	
魚虫類	マンチュール	タライーラ	蟹	鰯	ビラーニヤ バク ドラー ド(六、七)	
人事	カンナバル(二、三) 珈琲熟る(二、三)	山視、視察(三、四)	獵始(十五日)、天長節(廿九日)、山立て 棉摘(四、五)、豚追ひ 豚追ひ出す(四、五)	入植、移民、移民列車(五、六)	サン・ジョアン、サン・ペードロ(廿九日)、山伐り(六、七) カンナ刈る、マンジヨカ掘る(六、七)	

七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	
ア・ン・タ				仔牛、仔馬、仔羊、仔山羊 タマンツ!ア 怠者(ブレギツサ)	鰐の子	
	鯨(八、九)		ランバリー (十、十一) 蛇、蜥蜴	螢、蛙	仔蛇	
飄骨忌(六日) 珈琲採集(六、七、八) 終獵(十五日)、山焼(八、九)、牛渡し、牛追ひ 珈琲植え(九、十) 山崩し ムダンサ(轉耕(九、十) 配餅(九、十) 棉蒔(十、十一) 茶摘(十、十一) 慰靈祭(一日) 簾女忌(二十一日) クリスマス(廿五日) 除草(十一、十二、一)						

戦後、各邦字新聞にはたいい俳句欄が設けられたが、「伯刺西爾時報」の「時報俳壇」は中熊一雄の選で毎回四十名余の句を示している。「南米時事新聞」の俳壇は吉川耕花の選で初心者の指導につとめている。

現在、ホトトギス派及びこの派の傾向にある句会は四十以上に及んでいるとのことで、その主なものを挙げると次の如くである。三水会（サンパウロ、機関誌「花筏」発行）、仙人掌社（バストス 「仙人掌」発行）、丸木舟吟社（トレス・バラス「丸木舟」発行）、仔猫句会（チエテ、「仔猫」発行）、馬鈴薯句会（ブレジデンテ・ブルデンテ「馬鈴薯」発行）、啓蟄句会（ボン・ペイア）、ピリツバ俳句会（ビリツバ発行）、リンス句会（リンス）、ともだち句会（トレス・バラス）等々。右のうち、ともだち句会は木村逝子らが、日本語の未熟な二世青少年男女を中心に形づくった特異な、また極めて興味ある集りである。

なお雑誌「よみもの」は、一九四九年一月号から俳句欄を設けることになり、その選者として中村草田男を捉し来つた。

乳ばなれの牛百といふ花マンガ

念腹

孔雀水平に尾を支ふ五月の海如何に

草田男



（写真―木村桂石句碑）

短歌の勃興期を一九三八年前後にあてることがには何人も異議はないはずである。一九三六年にサン・パウロ総領事として着任した坂根準三は、四つのペン・ネームを用いて邦字新聞紙上に旺盛な作歌力を示した。

加うるに従来ノロエステ線アリアンサ植民地にあつて、圭石と共に「おかぼ」を発行し、一方「日伯新聞」（後にブラジル朝日新聞と改稱）の短歌欄の選者をしていたアララギ派の歌人岩波菊治や、マリリア地方から短歌、歌論など発表していた牧水門下の阿部青杜らがサン・パウロ市、あるいはその近郊に轉任し来る活及んで、各新聞短歌欄はすくなくからす活況を呈しはじめた。また作品、研究発表の機関設置への要望も漸くさかんとなった。

當時正金銀行リオ支店長として在勤の椎本文也（山下陸奥主宰「一路」の同人）と、出府中の坂根準三との間に短歌誌発行の計画が萌し、同好者たちの間に雑誌「椰子樹」発刊の決定を見た。かくてその創刊号は一九三八年十月に本文三十頁を以って現われた。年四回の発行で武本重夫が編集にあたり、同人三十四名、誌友約百名であつた。同誌は翌三十九年に二、三、四号を発行し、増ページ、増刷、四十年第六号にはアルゼンチン在住の石井衣子（佐々木信綱門下）を同人に迎えるなど、きわめて好調を持続した。

こゝに一言さしはさみたいことがある。前述「椰子樹」創刊に先立つこと一年前の一九三七年九月、俳誌「南十字星」が創刊されたが、これは歌誌における坂根総領事のように、暁雪なる俳号をもつ市毛総領事のきもいりによつて発行の運びに到つたものである。「南十字星」の選者念腹、圭石両者の選句方針の相違は、同誌創刊に先立って念腹の脱離を見、圭石の逝去によつて第三号で終止符をうつた。一方、歌誌「椰子樹」は「新詩社」「二路」「アララギ」「創作」など各系統の後援者、選者を擁しながらも、柳さくらをこきまぜて短歌の黄金時代を誇りつゝ一九四〇年に及んだ。この現象についての批判はさしひかえよう。

一九四〇年四月の第七号を名残として、同人誌友の作歌熱が冷めはじめたということの主因が坂根、阿部両人の退伯にあつた点を見ても、単に短歌にとどまらず、俳句においても俳人関圭草が経済使節の一員として来伯するに及んで斯界が勃然として活気づいた点と同断、コロニアにおける短歌、俳句のジャンルの文学の領域が、いかに狭少、敏感なものであるかがうかがわれる。さもあらばあれ、この作歌熱の退潮は、大戦による印刷費等の暴鳴の影響もあつて、同人、誌友の負担の過重化をも伴い、ついに発行困難におちいり、四〇年には八月に第八号、四一年に入つては十月に第十一号まで辛うじて発行を続けた。すでに、この国の法令にもとづく外字刊行物は発禁となり、他の一切の外字刊行物が消失した中に、石井衣子は、

地球の裏側に今祖国との道絶えて冷たき憤を力に生くる
と隣邦アルゼンチンから、また椎本文也はリオから、

あかときをひぐらしの聲透れども異国人われ早安からす
と、それぞれ「」にすでに暗澹たる情勢の接迫を詠んだ作をこの号に寄せた。これらに對し、

今日も来てトマテ撰別り居る納屋先の
木は明るくも芽をふきにけり
（瀬崎濤聲）

バストスに二日居し間を蕎麥食ひて
尚飽かずけり蕎麥好き吾は
（岩波菊治）

地の者であるこの二人のすぐれたる歌人は、かゝる境地の歌一聯をこの号のトップにおくつた。同発誌行の翌々月、太平洋戦は開かれた。

以上のように、短歌の勃興期から全盛期、ついで退潮期の記録はそのまゝ「椰子樹」の盛衰史であるかの感を抱かしめるが事實、同誌の出るに及んでそれまでの作歌者の温床であつた新聞の短歌欄の存在價值はきわめて僅少となるに至つたのである。「日伯新聞」は、もともと文芸欄を薄遇する同紙の傾向から、短歌欄は月一回くらいの割當で、選者も岩波菊治に終始したが、後日短歌界の中堅的存在となつた人々がこの欄によつて培われたものであることは特記しなければならぬ。「伯刺西爾時報」は歴史的に文芸尊重の流れがあり、短歌欄は三六年ごろは徳尾溪舟が担当して初心者誘掖にため、田中正實これに代り、更に三九年武本由夫が擔當するに及んで外字刊行物發禁に近いころは正に設賑の極頂にあつた。「聖州新報」は社長香山六郎（俳号素骨）が文芸欄を厚遇するところから、週一回の同欄には各種作品の發表を見えた。なかんずく、三六年に項貝さだめの同欄を擔當するに及び力を主に短歌に注ぎ、秀作には聖報特選歌の稱があたえられた。三八年、この特選歌は一卷にまとめられ「移り来て」と題して出版せられた。當時、短歌の主流は岩波菊治を中軸とするアララギ系のものであつたが、ひとり「聖州新報」短歌欄のみは「新詩社」風の詠風で進み、これに盛るに濃厚なる地方色を以つてした。エンシヤダ、フエイジョンなどの單語がひんばんにあらわれ一種の飽滿感をすらあたえた。とあれ「移り来て」一章は、よかれあしかれそれら特異な傾向を以つて、われわれコロニアが今日までに有ち得た、唯一の歌集として相半する褒貶のうちに迎えられた。三八年末同紙短歌欄は木村茅里がさだめのあとを承け、翌年住吉光雄が継いだがすでに「椰子樹」のあるあつて、四〇年の外字刊行物發禁近くには「日伯新聞」のそれと共に一路凋落の途にあつた。

當時における地方短歌誌の主なるものは、ソロカバナ線パラグワスー在住の俳句、短歌同好者による「白日」（渡部重主宰三七年頃から不定期發行、謄写版印刷、三十頁内外）、モ

ジアナ線クラヴィニヨスを中心とする詩歌愛好者による「斧」（瀧谷儀助主宰、三九年創刊、謄写版印刷、年四回発行、本文二十頁内外）太平洋戦直前まで継続）、及びノロエステ線バウルの「山茶」（小田切劍主宰、一種の歌集のよきな体装、活写版印刷で三九年から四〇年の間に二回だけ発行）。

また短歌会の主なものを挙げれば次のようである。「サンパウロ短歌会」（三七年徳尾溪舟、武本由夫の発議により成立し四一年七月まで継続）、「トレス・バラス短歌会」（三八年、當時アサヒ町在住中の武本田夫の発議で成立し、中止したり復活したりしながらも太平洋戦直前まで継続）「バストス短歌会」（バストス移住地の松本高信が植民地文化向上の一助として計画したものであったが、一回だけで太平洋戦勃発のため消滅した）「白日短歌会」（前出「白日」の会員による）。

大戦による発表機関の絶滅と、同好者間の連絡を絶たれたことは短歌界もその例に洩れなかった。四二年、中央線モジ・ダス・クルーゼスに在住中の武本由夫、筆者らによってモジ短歌会が起され、その詠草を集録した「林泉」の第一集（謄写版印刷）が四四年一月に発行された。その年、パウリスタ線に在った岩波菊治が中央線スザノに轉任し来り「モジ短歌会」に参加するに及んで、サン・パウロ市の同好者たちと共に「林泉短歌会」とあらためられた。右の会はサン・パウロ市近郊に歌会を催しつつ、四六年第三集を出し、おもむろに「椰子樹」復活の準備的役割を果たした。

なお四四年ごろ、パラナ州トレス・バラス移住地同好者たち（晶出充、眞木研一その他）によって「ユーカリ」が同人間に配布されながら、短歌の灯が嵐の中に護られていたことを書き記しておきたい。

四七年一月「林泉」第二十八回の例会で「椰子樹」後列が決定されその復刊第一号は同年五月に発行された翌年二月からは従来の謄写版から活版印刷にあらためた。八月現在にお

ける同人は四十二名、誌友百五十余名を数えた。清谷益次の歌

天地に独りの我を頼り来るこれのを

みなぞいたわらずやも

の第五句いたわらずやもの妥當如何について、徳庵溪舟と作者との論議は同好者間にかなりの反響を呼んだが、この稿をまとめるまでに解決は見なかった。

「パウリスタ新聞」(日伯新聞―ブラジル朝日新聞の後身)創刊されるや、「パウリスタ歌壇」が岩波菊治を選者として設置され、四八年新年号における懸賞短歌募集には八十六名が応募、浅田今日志、武本由夫が一、二位を占めた。

「南米時事」新聞は、仲麿の雅号をもつて作歌する仲眞美登利の所有にかゝるものだけに、同好者の同紙への期待はかなりのものがあつたようである。が、創刊当初に振わず、小田切剣が入社して短歌欄の設けられるに及んではじめて活況を呈した。「サンパウロ新聞」は短歌を優遇すること他紙を凌ぐものがあるが、その割に同欄は振わない。四七年ごろ行われた選評者の遊芸気分には禍されたためであると見る向きもある。

「伯刺西蘭時報」は、再刊當初惜しみなくスペースを学芸に供し、ことに短歌など半頁を超えたりするほどであつたが、見るべき作品は更になく、四八年に入つて急角度に寥々たるものとなつた。

なお現在、地方短歌誌、及び短歌会には次のどときものがある。「和滴」(ソロカバナ線プレジデnte・ブルデンチ地方の同名の短歌会の機関誌)。同地「曙」(俳句会々員中の短歌愛好者が分立、創始した。別府二郎選歌、長島可山編集で四七年六月創刊。同人十餘名、四八年十月に第八号発行。「青桐」(ノロエステ線ビリグイ地方の同好者が開沼貴代を中心とする「サントポリス椰子樹短歌会」の機関誌、佐藤貞一編

集、四八年四月創刊、十月に第四号発行、同人十余名)。「サン・パウロ椰子樹短歌会」(前出「モジ短歌会」の後身であつて「林泉短歌会」の延長と見るべきもの)。「カフェランディア椰子樹短歌会」(ノロエステ線カフェランディア地方在住者による「カフェランディア短歌会」の改稱されたもの、四六年に創始され、四八年九月のカフェランディア合同短歌会では出泳者二十餘名に及んだ。中山稠子、天津夢城、武田公平らが主なる会員)。「リンス椰子樹短歌会」(ノロエステ線リンス在住の井本惇、浅田今日志らにより四八年三月創始)。サントポリス椰子樹短歌会(前出「青桐」参照)。「プ・ブルデント椰子樹短歌会」(前出「和滴」参照)。「アリアンサ短歌会」(ノロエステ線ミランドポリス駅アリアンサ移住地の行方正治郎、協坂一らにより四八年二月創始、九月に第四回)。

なお、この稿の記されつゝある四八年十二月に「日伯毎日新聞」の創刊される予定であるが、同紙に設けられる短歌欄には武本由夫が新鋭の氣を負うて選にあたるはずであり、また一方「椰子樹」と並んで、小田切剣により歌謡発行の企てが進められてあるときくが、短歌界の推進の一として順調な成長を祈りたい。

椰子樹同人
前列中央 岩波菊治



一九三三年のはじめ（渡伯の翌年）筆者は若干の小説の原稿を投じるため、リオからサン・パウロに來り、「伯刺西爾時報を訪ね、はからずもそこでペンをにぎることになった。三五年日本語読本編纂を助けるために帰国するまでの約三年間、同紙の「文芸欄」には筆者の熱情が注がれた。それより先三二年、同紙では第一回の懸賞短篇小説募集が行われ、一席は「賭博農時代」の題名で、聖市近郊蔬菜栽培業者の生活に取材した、新感覺主義的な筆致のスマートな作品であったと記憶している。作者は同年帰国してしまったとのことである。三三、三四年とひきつづいて懸賞募集が行われ、ことに三四年度分には短歌、詩が含まれた。後年「地平線」を形成した同人群のうちの多くは、この第二、第三回の懸賞募集に応じ入賞した人々であった。移民文学あるいは植民文学という呼稱が成立つとして、その定義にはいくばくかの條件の備っていることを必要とされるであろうけれども、われわれのコロニアの場合のそれはブラジルにおける日本移民の生活感情の表現が第一義的に要求されなければならぬ。この第三回の応募作品あたりから、おぼろげにも移民文学、植民文学なるものが形すげられて來はじめたように思う。

當時、詩でもつとも活躍したのは丁未子のペン・ネームによる鳥井稔夫（現在サン・パウロ・ゴヤス線オンダ・ベルデ駅）であつたろう。「伯刺西爾時報」第三回懸賞募集に応じて一席に人選した詩「流れ」もすぐれていたが、三四年七月に発表した「冬の聲」などは佳作であつた。こゝろみに再録してみよう。

枯れた草の上に

冷い光が堕ちて

寂しい語ひをしてゐる

中空を

泣きながら、顫へながら

風の子が走つてゐる。

その山かげで
金剛砂砥をあてがひ
斧を磨ぎすましてゐる
私。

今に大地にたほれる

巨木の地響に

彼等の聲は潜み

蒼々とした静寂が訪れ

冬の禪場が生れることだらう。

また、この頃「伯刺西爾時報」に詩を表表しているのは佐藤花情、不二多哀子、不二山南歩、深山田すなを、平川白夢、岡崎独行旅、志村新吉その他多くがあつたが、民話に不断の精進を示し、今日にまで及んで佳作を発表しつづけている者に堀田野情がある。散文には天望生（故西住正義）の「鍵」や、鈴木南樹の「母」、筆者の「リオ・デ・ジャネイロの毛脛」、「配耕」、杉武夫の「遠足」、及び櫻田武夫（當時、雑誌「農業のブラジル」から「伯刺西爾時報」の編集部に轉じ来り、後、病を得て故郷山口へ帰る）のレジストロにおける自伝的小説「入植から」その他があつた。櫻田はまた詩に批評にも活動した。徳尾溪舟がルイス・ギマランエスの文章を訳して紹介した外、塩見壘次（尾関輿之助のペン・ネーム、最近井関讓治の名で映画、近代ブラジル文学に関するものを発表している）は、さかんに大陸物を訳して妙筆をふるつた。

バストスの南條ナタリア、マリリアの斎藤八重子らは少女らしい純な文章を見せて一掬の清新味を感じさせた。

當時、雑誌「農業のブラジル」には編集同人に小菅剛夫（太平洋戦前帰国、本間姓を名乗り「パウリスタ新聞」に寄稿している）があつて文学のために多くの頁を割き、自らも作

品、批評の多くを發表した。三四年五月号に短篇「荒む」を書き、間もなくミナス州に去ったが、その後、同誌の文学調は急速に低下した。そのころの同誌の詩に小草生の名で「町にて」というのが掲載されたが、木下耕作の「鶏頭」などと共に本格的な作品であった。

こゝで少し附記しておきたいのは當時の読書の傾向である。三〇年代の中期、中央公論、改造等のいわゆる高級雑誌の講読者の数は増加どころか、むしろ減少化しつゝあった。これは當時日本の大学、高等専門学校学生生徒の読む雑誌の量と質が非常に低下し、かろうじて読まれているものとしては講談倶楽部かキングなどで、中央公論、改造などはごく少かったという現象と一致していた。ただし、日本のこの現象は満州事変を轉機としてファシズムの擡頭と、ほとんど崩壊の觀あるマルキシズムとの中間におき去られ、いわゆる時代の不安にさらされた若い世代の知識層の半ば虚無的な状態に生じたものであったのであろう。が、われわれのコロニアのは、そうした「時代の不安」などの影響にあるものではなく、環境から來た教養の低下、向上しようとする意欲の消耗、あるいは喪失などによるものであったと思う。強いて、われわれに直接陰翳を投じた「時代」的なものといつては、移民二分制限法案の實施位のものに過ぎなかつたと思う。

一九三七年二月に「地平線」は次のような創刊言をかゝげて登場して來た。

週間新聞、農、商業雑誌の一隅にささやかな食客的命脈を辛くもつなぎ來れるものゝそれはブラジレに於る我々の文学界の過去三十年の姿であつた。永劫の隧道を辿るに似たかぎりもなく佗しい姿であつた。「地平線」の誕生によって、我々史学を愛するものゝ一つの拠城が成つたわけである。しかし、三十二年間重圧をつゞけて來た植民地功利思潮の氷河は依然として邦人社会の全部に漲り流れてゐる。「文学」なる一穗の寒燈を護りつづける「地平線」の逆航は依然難渋を極めよう。(下略)

うすい小型新聞型四頁にすぎないものであつたが、綜合文学誌の形式のものとして、われわれコロニアがもち得た最初のいわゆる文芸雑誌であつた。同誌は創刊の翌年二月、遠藤書店発行、安藤全八編集の雑誌「文化」に合併の形で第九号を最終刊とした。右九冊のうちで多少とも注目された創作は次の如きものであつた。「死灰」(武本由夫)、「道」(村井幸子)、「ノミ芝居」(筆者)。「深淵」(秋野愁)。また詩では塩見壘次、丁未子古里哲郎(古田土光良)らが主として活動を示した。同人古田土光は「聖州新報」に白傳的創作「移民」を連載発表した直後であつた。荒削りながら逞しい筆致で、一群の農村青年のはげしい生活の息吹きを強烈に読者に感銘させた。「死衣」は植民地における家放構成の陰鬱な崩壊の一断層を描き、「深淵」はこの作者得意のいわゆる「コンデ街もの」で、戦前サン・パウロ市における日本人街、そこでの二世姉妹と母親との生活を極めて老巧な手法で物語つた。

このように「伯刺西爾時報」文芸欄の活発な動き、「聖州新報」文芸欄の活躍――「地平線」の前進――などによつて、僅かの年月の間に、たとえば「地平線」の諸創作に見るごとく、作品制作の基調は自らブラジルにおける移住生活の上に置かれしかも、かなりの深度に生活探求の掘下げが行われるに及んで来た。いわばわれわれのコロニアにおける文学の新しい地平で「地平線」出現前後はあつたといえようと思う。

「聖州新報」に安藤全八の訳になる「肉慾」(ジュリオ・リベイロ著)が、前半半田知雄、後半富岡緋村の挿絵をもつて連載されたことは同紙の最初のよき企画で、今日までかゝる例を他に見ることは出来ない。

遠藤書店発行の「文化」は一九三八年十二月に創刊され、一九三九年十月、第十一号を重ねてついに廃刊したが、これは青年層の文化的向上のための啓蒙的なものであつたので文学的にはさして見るべきものもあらわれず、永田龍三の詩及び詩論若干にとどまつた。四〇年七月「日伯情報社」から創

刊の雑誌「新ブラジル」に筆者は創作「轉蓬」をおくり、同年「ブラジル朝日新聞」日伯新の後身」の葡語欄（筆者邦訳）にオカバヤシ・シヨウメイのペン・ネームで氏原正明が創作「二世」を連載発表した。これは恐らく、當国出生者の作品として、最初に発表された創作であろうと思われる。サン・パウロ市における二世男女学生の生活を描いたものであるが、生活の雰囲気、散文詩的な描写の奥にあるものを適確に把握しかねた読者（一世）が多かったと思うが、同作品が未完成のまゝ中断した故ばかりでなく一世と二世との生活意識や気質の食いちがいにも依ったことゝ思われる。

この頃の「伯刺西爾時報」の文芸欄の詩には、良一郎、生駒悠子、瀧譲二、毛利なか、農文士（則近正義）、池宮城積功、横地季子、長尾猛、米澤幹夫、狭山葉琴、その他が旺盛な制作ぶりを見せた。なかんずく軽快な田園調を朝の微風に托した感じのする米澤、散文化しがちなきらいはあるが詩の確かな焦点をしっかりと見定めてあやまりない池宮城の作などが注目された。

やがて戦争の、あの暗く永いトンネル。

四七年一日「土曜会」同人によつて、雑誌「時代」が発刊された。もともと同誌は「文化的発展を心から希求し實行することに熱意ある人」たちの集りである「土曜会」の機関であつて必ずしも文学を主とするものではないので、同誌創刊号から七号に至る間、純文学的作品としては僅々左記のようなものに過ぎない。詩――古田土光良、半田知雄、筆者。創作――筆者。文学評論、随筆――武本由夫、増田秀一、筆者。なお右のうち創作「オロシヤの見える午後」は「パウリスタ新聞」にも転載され、若干の注目を惹いたかに見える。

戦後の刊行物中「パウリスタ新聞」の学芸欄に見る純文学作品は、短歌、俳句をのぞいては丁未子、古野の詩、堀田野情の民謡、則近正義の童謡、念腹の俳文などであるが、最近に至り半田サツ工、香山秋子などの名がはじめて随筆にあらわれた。同紙の方針は、多くの投稿作品に容易に門を開かな

いらしいが安易な営業策上、無評價に紙上に投稿作品を羅列することは結局読者にも、また投稿者にも決して親切な處置とは考えられない。「伯刺西爾時報」には復刊當時、創作「たそがれ」が連載された。初めごろはかなり老練な文章で幾分の期待を抱かされたが、構成の未熟さはついにおおうべくもない不成功に終らしめたのはいかんであった。「南米時事新聞」には創作「峠」(谷信一郎)が掲載された以外、とり立てゝ記すほどの作品は現れていないようである。永田龍三は詩論を発表した。「サン・パウロ新聞」は詩壇を作詩者に提供しつづけている唯一のものであり、投稿者も熱心であるが、その顔ぶれも大して変化なく、その作品にもこれといって特異なものゝないのは残念である。里見曾根雄、諏訪保、高橋広らはそれら投稿者中の主なる人々である。

四八年三月創刊の雑誌「よみもの」は、母国の作家(主として大衆作家)の作品を主流としているが、同年十二月号までにコロニアのものとして、純文学に「雨」「牌」(柳千枝子)、「背中」(北見磯子)の短篇と、「誰かうつるをとゝむべき」(筆者)の詩の外、大衆小説には北島文子の一連の探偵實話と、高円寺荻夫のブラジル帝政の裏面をのぞいた「情炎走馬燈」などまた高岡由也、半田知雄、進藤健、本山善徳、石川芳園らの随筆が掲載された。なお、同誌では第一回の懸賞短篇小説募集を行ったが、久しく、かゝる機会にめぐまれることのなかった文学愛好者たちに大きな反響をよんだらしく、意想外に多くの応募者があった。次の三者が人選した。一席「つゝじ」(山路冬彦)、二席「樽」(水野浩志)、三席「辞表」(摩耶晃)。

以上で大体、俳句、短歌、詩、創作などのきわめて粗雑なる一瞥を終えた。資料はほとんど皆無にひとしく、おぼろげな記憶でおぎなつたため、小尾を追うて大鱗を失つたことも少くないと思う。

この項はおよそ十五年の期間に亘っているが、外字刊行物発行禁止、戦争などのため、その三分の一は全く表面的には

空白時代に属し、正味十年間の文学活動の記述となった。この十年より以前のコロニアの文学は、いうまでもなく次代に継承させるような何らの伝統をも生むに至っておらず、客観的に自らを圍繞する社会を、自らがその上に在る生活を描き出そうと、おぼろげにも意識しはじめてようやく今日までに十年の文学史を有つに過ぎない。

一九四〇―四一年の一年の一年に発表されたアララギ系の短歌による武本由夫の研究によれば、天地自然を背景としたものはかなりの数に上っておりながら、純粹にそれらを対象として詠んずものは案外すくなく、一般に手触りが粗く、小味なこくに缺け、艶に乏しいとしており、またその因由をこの国の自然が変化に乏しいためか、歌人が移住民である故に、この国の天地に愛情を覚えることが稀薄なためかと言っている。このことは、ただに短歌にとゞまらず、最近までの文学作品全般にあてはめることが出来る。しかし、この国の自然が変化に乏しいためということは確に原因の一つとはなり得るが、われくはシベリアの草土帯のすぐれた文学作品を知り、サハラ砂漠の美しい描写に満ちた文学作品をも有っている。それよりも、むしろ後者の移住民であるが故にこの国の自然に愛情を稀薄にしか覚え得ないためであろうとの考に同意したい。火田民の生活、果しない流浪民の生活からは、どのような芸術もその芽生のための豊かな土壌を見出し得まい。肉体だけはブラジルの地上にあつたが、思念は絶えず一万数千マイルの故国との間に大きな振幅をもつて振子の如く揺れつづけた。そこには愛情を生むための理解、理解をこゝろみようとする意欲すら湧かなかつた。文学も従つてあわただしい旅路の走り書か、メモにすぎないものでしかあり得なかつたわけである。

この項に取扱つた時期の初めごろの、全世界的なナショナリズムの業火に、祖国日本もこの国もひとしく紅蓮の焰を浴び、やがて太平洋戦争の勃発以来は在伯日本人はいよいよ二つの国旗の下に生きることになまざまの懊悩を味つた。そう

して終戦後の母国の一大変革と、それにとまなう探淵に吞まれるような虚脱感―それはやはりわれわれにも様相、感受の程度の差違こそあれ、多少なりとも波及し来った。邦人社会の諸対立は俄然表面化し拾収不能と思えるまでの混乱におちいり、文化の水準もまた零にまで下降したかの觀を呈した。しかしながら最近の文学（他の芸術諸部門も同様）を見るのに、戦時中及び戦後の不安動揺の裡にあつても、われわれのコロニアの文化的示向は決してゆがめられ、弱められず、暗い地下をまつすぐ貫き進められていたのだということが感じられる。いな、かえつて今こそ、わずらわしい莢雜物を排した眞に自由な健康美をさえ感じられる。「よみもの」の懸賞募集への応募作品の多くに見える一世と二世「あるいは新しい世代と古い世代」との抗争対立なども、戦前にはあまり見られなかったテーマであることや、文学（他の部門も同じく）をなす人の多くが二世あるいは準二世である点などを見ても、戦時中の空白時代は、半面彼等若い世代の尊い準備期であつたともいへはすまいか。

彼等の多くは、日本文学の伝統を相続することきわめて僅少である。しかも彼等の多くは、彼等の出生地、成育地たるこの国の文学の伝統を享けることもまた稀薄である。が、なお彼等は自らの文学の歩みを歩もうとするであろう。そこにとどのような形態の文学が生れ、かつ成長して行くであろうかは、大いなる興味であらねばならぬ。萬葉の素樸、純情美とこの国の文学の伝統たるインディアニズモとの揮然として融合した作品を仮想してみることは、あまりに樂觀的すぎるであろうか。

将来、この国への同胞の移住が行われるか否かは、われわれコロニアの運命を左右する重大な問題である。もし不幸にしてそれが實現しない場合の文学を思つてみるのに、先ず文学の生命たる日本語の急速な廃退消滅を覚悟しなければならぬ。このことは遠い鎖国時代における南洋各地の日本人町の事態にまで遡る必要はなく、われわれ身邊をかえりみれば

事足りよう。したがって現在のまゝの推移に委ねていて三世以後の世代に望めることは、ブラジル語においていくらか存続されるかも知れない日本文学の伝統の面影であって、日本文学そのものでは決してあり得ないであろう。

（以上で古野菊生の文学史的執筆が終った以下は編者の移民史的追加である）

一九三一年頃、ノロエステ線で上塚瓢骨が木村圭石に師事した作句を、聖州新報紙上に発表した。後一年、瓢骨は佐藤念腹に選してもらった句を同紙上に掲載し、移植民者一般の俳句に対する興趣をそゝっていた。圭石、念腹のホトトギス派が聖州俳句界に華々しい裡に、是と別にブラジル俳句に猛進していた一派があった。

同年頃、ソロカバナ線の文化植民地に「石斧吟社」が創まって俳句に精進していた。塩見汀浪、伊藤十字星、高橋玉水、湯浅愛橘、横山梧桐、鈴木葦夫、渡部南仙子等であって、この派はホトトギス派でなく曲水派、まはぎ派等であった。毎月句誌を謄写版で発行し、一九三六年より同植民地短歌会の「白日」誌と合併し、同誌を出し二百部餘配布していた。ハラグアスー駅町に一九三三年「自由学園」が創設され、渡部南仙子が園主に坐り、児童に俳句を手ほどきし「タマンコ吟社」を創めていた。タマンコ集第一号に――ジャボチカーバ小鳥の様に食べる子等――尋四丸石龍王がある。

一九四三年戦時中の日本移民空白時代にもかゝらず、ブルデンテ駅には俳誌「青空」を創めて山田空外、三浦網人、牧野十字星、深見ろ上等が作句に精進したものゝ発表で、この同人はホトトギス派ばかりでなかった。一九四六年正月から、渡部南仙子が北パラナより同地に移り青空同人となり、山田空外はパウリスタ線マリリア方面の俳句界に精進した。青空の同人に故牧野十字星、鳥川朱象、高橋玉水、櫻井半歩、渡部南仙子、橋爪蟻母子、岸田石松子等を地元として、塩見

員太郎、佐藤文六、竹井蘭譜、鈴木南櫻子、櫻井紫山等がノロエステ線ソロカバナ他駅、其他より投句し、山中童山子、石川芳園、富岡静司及耕村、小笠原夕虹、梅水朔郎、三浦亜聲、香山素骨等は聖市より、水谷卜城もリオ首府より青空誌の共鳴投句者となっている。青空誌一派の俳句は、眞萩、大富士、曲水、ホトトギス新詩脈等の自由研究発表の合作俳句機関誌で、伝来の聞き殻を破って日本移民の伯国生活のしみ出た「ブラジル俳句」を生み出そうとする精進者等である。

一九四五年終戦直後、聖市に三水会俳句会が復活した。斯会を中心の投句者として多田野歩が俳誌叢をコンニャク版で出した。青空一部同人も投句した。叢は二十号を以て廃し、三水会俳誌として花筏を斎藤信山が編集したが、この頃から青空へと一部三水会員は投句し、「木蔭」がブラ拓関係の幾別春や信山や瑩石斎藤、その他の同好者により念腹主選で活字出版さるゝや、三水会一分員は木蔭に投句せず青空へと投句し、三水会員の俳句趣張は二分された。青空への投句者等は佐藤念腹主選する處の「木蔭」誌が主張する「世界到るところ俳句はあれども花鳥諷詠、客観写生の二大標識の外には本當の俳句の道はないのだ」の穀の中に安住する俳人の句ではなかった。

在伯日本移民の俳句界にも抗争する二つの流れが現れているこの両派中に女性俳人五十人を越えて現はれている。石川芳園、斎藤みよ子、傳田みつ子、目黒はるえ、山本よし枝、岡本久江、間崎黎、恵、玉木梅女、飯田霧江、西尾敏子、吉川喜美子、林伊勢、榎木寿江、渡邊しげ、三浦鳶、羽瀨記代、名澤康子、渡邊ちえ、西方美代子、溝口好美、前田珠千、川邊道子、相場しげお、田中章子等々仲々に賑やかである。石川芳園の句に

春風や門を出れば下婢ならず

はデモクラシー俳句の一ツといえよう。邦人俳句界が斯く賑

やかなのは専門的俳人の多いのと、職業俳人が指導しているので其間争闘もあり、宣伝よろしきを得て隆盛なのである。

一方短歌の方は岩波菊治、その他二、三の専門歌人はいゐるが俳壇に於けるが如き職業歌人がいないので、宣伝よろしきを得ないのと、アララギ派の菊治黨に対比して別派の短歌人の群が結束せず、抗争のない處に淋しさがきざすのである。

聖市の俳句三水会より芽ばえ出た伯人俳句愛好の作句者が成育しつゝある。ドットル・ギレルメ・デ・アルメイダは愛句家であり、ドットル・ジオルヂ・フォンセツカ・ジュニオールやドットル・ペドロ・シスト、及ルキス・アントニオ・ピメンテルは句作者である。

ジオルヂ・フォンセツカは日本へ行き、ホトトギス本社で俳句を研究勉強した。虚子より外国人中句作者の最高峯の折紙を得ていた。彼は一九三九年に自吟作「白合果」と、一九四〇年に「俳諧とその禮讃」を出版した。工芸美術の研究に渡日留学したルキス・アントニオ・ピメンテルは滞日五年、俳味を満喫して日本を去り、作句に俳味を泌出させている。彼はカリオカである。

尚ほ一九三六年一月末、聖市の互生会内に互生句会が創まつていた、選者は木村圭石で、同人に静司、三日月、静雄、野五重、案子、芳園、野歩等が俳句の初歩をふみ出し、これは後に落穂会と改名し、翌年七月頃三水会へ合流した。當時落穂会を下町俳句会三水会を上町俳句会などと呼んだが、同一選者の圭石は同じ市内で二つの句会に階級的意識をもたせるは面白くない。合流してデモクラシー俳句会にしようとの意見が通つたのであった。

一九三二年頃、聖州新報紙上に俚謡正調が募集され、植民地の沙蔓たる生活にうるほいを興えた。秀逸の二、三は

一寸ネヂケたレンソの結び働らき振のいゝモツサ（絹江）
無理にはしゃいで笑った後の心もとない破れ靴（溪舟）

パスト通ればサイヤがぬれるピコンつくなよ恥かしい（孫
公）
イペの花片コレゴに落ちてやる瀬ないよな流れ振り（汀打
浪）



木村桂石句碑除幕式

短歌界に一九二九年七月、第一回全伯短歌競詠会が聖市に
催ほされた。撰者は鈴木南樹（移民の草分）で、集まった歌

百四十四、一番多かったのはノロエステ線の四十四、次がソロカバーナ線の二十五であった。

その後移民短歌界に女流歌人として現はれたのは神志那絹江であり、志津野花絵、中山稠子、西田季子、坪内広代、開沼貴代、葛西妙子、樋田美沙子、北島文子等であった。植民地の殺伐生活に潤ほいを興えた。植民地に川柳が盛んになったは移民四十年末からである。

三、移住者の美術運動（絵画史）

(一)

在留同胞四十年の歴史の中で、美術史なるものを書かうとするのであるが、こゝでは単なる絵画史をつづるにすぎない。しかも他の文化面に比してずっとおくれで芽生え、そして最近になってから急足に発展し開花したのが我々の絵画であり、主として洋画なのである。

我々には昔から新聞があり、文筆の活動があつた。したがって文学の面では無理をすれば何か書けるのであるが、美術の方面では最初に二十年間と云うものは皆無と云つてもよく、一九二〇年頃から時たま美術愛好者間で画家の存在が話題にのぼりだした位である。一九三一年一月、當時リベルダーデ街にあつた日本倶楽部で日本人最初の公募美術展覧会が開催されるに至つて、我々移民の間にも十数名の画家、画家志望者、アマチュアが存在することがわかるようになった。そして、この展覧会が華々しく邦字新聞紙上に報道され批評までのつたゝめに、出品者中の二、三の青年たちの主唱に和して、新しく名のりを上げて集つて来た若い連中が結束し、これから本式に研究しようではないかと云うことになった。だからこの展覧会の意義は、それまでばらばらに存在し

ていた美術家たちを連絡させたことゝ一般的には美術の専門的理解が浅く、何を理想としていゝかそれさえわからすにいた連中に、造型美術を研究し各自が好むところにしたがつて探究し創造して行こうと云う機運をかもし出したことにある。だから我々の美術運動が、社会的のものとして表面に現れたのもこの時であり、こゝに我々の美術史は本當の出発点を見出すわけである。この展覧会は日本倶楽部の主催であったが、出品者の顔ぶれから判断してみると、クラブの会員であつた明穂實や野村陸雄などが発起者ではなかつたらうかと思う。

(2)

漠然とではあるが、筆者はこゝで一九三一年までの初期の状態を記してみよう。

一九二〇年頃から、すでにサンパウロ市には洋画をやっている少数の青年があつた。

それは一九二二年のブラジル独立百年祭にドン・ペードロ一世公園の工業会館で品評会が催された時その美術部に二三の邦人が絵を出品したと云う話をきいたことで想像がつく。

一九二六年頃、佐藤豊松と云う青年がリオ市のサロン・ナシヨナール（官展）へパステルの人物画（八号大）を出品して名譽賞状をもらったと云うことは、當時新聞紙上に報道された。そしてその後長く語り伝えられた。

一九三〇年頃だと思ふが、リンス市で岩本巖が個展を開いたのは、ブラジルではこの種の催しの最初ではなかつたかと思う。

一九三〇年頃、在伯二、三年で帰国した後、悲劇的最期をとげた青年画宮下久吉があるが、半田知雄あたりと個人的交りがあつた外、画界には影響をのこさなかつたと思う。その他にも日本から来て絵を売って行つた者の話、何々美術学校出

であるとかふれあるいた人間もいく人かあったらしいが、社会的な足跡はのこさなかった。

なにしろ金儲けに忙殺されていた歴史の浅い移民の社会で、まだこの国に定住し将来美術家たろうと志しながら本式の研究を続けているものが無かったことは止むを得ない。しかも當サンパウロ市にはまだ美術学校も、名のある研究所もなかった時代だ。ずっと以前園部秀文が美術学校の夜学に通ってデッサンをやっていたという話は筆者も知っているが、あすこは工芸徒弟学校の類であった。たゞ當時サンパウロ市で美術を研究するところが、あのリセウ・デ・アルテス・エ・オフィシオ以外になかったためと、美術館と隣り合っていたゝめ研究には便利だったと云うまでである。

こうした不便な社会でたゞ一人、富岡清治（耕村）がサンパウロの州立職業学校の絵画科を終えて水彩、油彩をかき出していた。この人は日本にいる時から水彩をやっていたので、絵に対する自分なりの趣味をもって楽しんでいる人として、當時はまれな存在であった。

こゝであの頃絵をならつたり、作品を展覧会へもちこんだりした人達が、どんな生活をし、どんな考えをもっていたか、ふりかえってみよう。大概はいくらかづつ画に関係のある仕事をしていた。茶碗の模様をかいいたり、人形の顔をかいいたり、屋内装飾画の仕事をしたり、看板かきなどをやっていたものもあつたろう。云うまでもなく移民の連れ家族の青年や子弟であり、学問、教養などある筈もなく、まして美術の鑑賞眼などあつたわけではなく、美術史のわずかな知識すらなかったろう。だから彼等のやることは、世界の美術史などゝは先ず関係がなく、見よう見まねでカレンダーの三色刷のよな複製品からもヒントをえられていたし、その頃イタリーからならつて来たブラジル人がよくかいていた印象派のギラギラした光線のあつかい方や平筆のあらいタッチなどに先端的な絵画の行き方を感じ、どうかしてあのような線をかいてみたいと考えられていた程度であつた。理論などはなかつ

た。あると云うことさえ考え及ばなかった連中もいたろう。自然のように美しく……と考えたのはまだいゝ。まるで写真のようだと絵かき自ら感心していたような状態であつた。

(3)

一九三一年一月、日本俱樂部でもよほされた美術展覧会は、油彩、水彩、パステル、日本画、写真、刺繍等をモウラするいかにも植民地的なもの我々の生活の象徴するものであつた。彫刻がなかつたのもその感が深い。こゝでは洋画のことのみを記すことにするが、大小百点に近い盛況だつた。四号位の小品から二十号位が最大で、平均十号大だつたようである。

主だつた出品者の姓名と、その大体の傾向及び批評を左にかゝげることになしよう。

佐藤豊松 パステルおよび油彩の風景と静物、筆致がこまかく 派手ではないが落着きはある。印象派以前の行方を多分にもつたアカデミズム、でブラジル人中にも昔はたくさんあつた傾向である。我々の歴史をかざる最初の画として興味がある。誰にもわかる写真だつたので一般のものに受けがよかつた。

富岡清治 水彩および油彩、すべて風景画だつたと思う。平面的でデコラチープな感もあつた。印象派風のもので楽しくながめられる画であつたが、少し乾いた感が欠点ではなかつたろうか。「健實」だと云う評と「弱い」と云う評が相半した。しかし完成されていた。

林重次 油彩、この人のものが会場中での大作に属していた。二十号の樹木のある牧場を描いたものが、観衆一同の投票によつて、この展覧会で一等賞を獲待した。種々雑多な色をまぜ合せて使用していたゝめ、色の好みが渋いという評があつたが、それはむしろ偶然なものであつたようだ。デッサ

ンが不足していると云う評はあたっていたが、デッサンの不足は 林一人のものでなく、この会の出品者はたいがいそうであつたろう。たまたま動物（牛）が点景にあつたゝめ目立つたに すぎない。

野村睦雄 水彩および油彩風景、色彩が主で、赤や緑の対比が 強烈な感を興えた。他の一般の出品作と比べてあまり感がとび離れていたゝめ、可成りな出来ばえであつたが、観衆からは敬遠されたらしい。たゞ評家は統一の欠けていることを指摘した。領事館の書記生で、帰国後は二科へ出品していたようだ。

半田知雄 油彩風景、静物、自画像。たんねんに追求した画が多く、色彩が落着いていたので一般の評は悪くなかつたが、評家は説明的なために全体の調和を欠くといった。自画像は 四号位の小品だつたと思うが、会場唯一のものだつたであろう。

岩本巖 油彩風景、大胆なタッチで楽しくかいてあつたが、いかにも素人くさい画であつた。陰を一樣に紫色でぬつたところなどまだ写實になれないことを示していたが、のびのびとした感が好評であつた。評家は将来の大成を囑望した。

その他にも根本市五郎、菅谷霞舟、松岡建太、岡本二三、明穂實など云う人々が出品していたが、最初のもよほしであり、無審査であつたゝめ出品したにすぎない程度のものであつた。また主催者側も素人のもよほしだから唯でも出そうではないか位の軽い気持ではちめたものであつたろう。それがかくも反響がありしかも在伯同胞の美術運動のさきがけとなつたことは、意外な収穫であつたと云える。この展覧会では二、三の批評が邦字紙上に現われたが、美術批評として最初のものであつたろう。が、作品と批評の理想とが可成りかけ離れていたことは止むを得ない。作者がブラジル仕込みの未完成のものばかりであつたに反し、評家は一応趣味を自覚した人たちであつたからである。

一九三一年二月より一九三五年三月サンパウロ市に日本人美術研究会が創立される丸四ヶ年と云うものは、我々の間では特筆すべき事件が起つていないが、一九三三年の暮から三四年の一月にかけてサンパウロ州の官展、サロン・パウリス・タ・デ・ベール・ス・アルテスの第一回展が開催されたのは興味深いことである。我々の美術運動の立ちおくれは、我々自身の文化程度の低さにもよつたのであるが、この国の一般的レベルもまた我々を強く刺戟するだけの上昇を示していなかったのである。この第一回展は無審査であつたため、玉石混淆といへるほど雑多な作品が陳列され、さながら日本倶楽部の展覧会を大規模なものとなしたような感があつた。この創立展には佐藤、富岡、半田等も出品したが、特に目立つたものはなく、公平に見て中以下ではなかつたろうか。たゞ富岡の水彩がこの方面ですぐれていたように思う。これら三者はその後も永くサロンの出品者であつた。

一九三五年三月卅日には、サンパウロ美術研究会が創立された。略して聖美会と呼ぶようになった。この創立懇談会はコンセイロ・フルタード街十六(当時)番の互生会のサロンを借りて催されたのであつたが、集つたものは富岡清治、半田知雄、田中重人、根本市五郎、西田春一等の他は、伯刺画爾時報から古野菊生、日伯新聞から木村義臣の二記者が傍聴に出席したが相談役にもなつた。懇談の後決議された事項を次に掲げると、

- 一、会員相互の親和
- 二、作品の批判、鑑賞、意見交換等のための月次的集会
- 三、地方会員との連絡
- 四、会室集会用兼アトリエの設置
- 五、外人美術家、研究所との連絡
- 六、年少者の指導

七、展覧会の開催―等であつた。

その後この懇談会へ出席出来なかつた仲間のものや、新聞の報道で集つて来たものに玉木勇治、細川茂豊（歿）、永富政教（歿）、高橋奇智坊、平野貞夫等の洋画家、及び佐伯敬璋、東春政などの日本画家もあつた。

別に役員というわけではなかつたが、会の発起者であり中心になつていた半田、槍垣、田中、玉木の四人が会務をつとめたり、会の代表者になつたりした。この会の創立発起者の一人であり、當然中心人物の一人たるべき高岡由也が居なかつたのは残念だつたが、不在にもかゝらず一同で会員に推してグループの一人にかぞえることにした。高岡は創立前玉木と共にリオへ行つたのであるが、玉木は一年以内で一度サンパウロへ戻り再びリオへ行つた。

会の目的のなかで、資本のいる仕事はほとんど手がつけられなかつたが、日毎の集會に作品を持ちよつて批評し合つたり、写生旅行に出かけたりした。ことに批評は議論を生んで活発な雰囲氣をかもし出した。自己の作品はまだまだ幼稚なものであつても、理想は可成りはつきりしていて進歩的な議論をする連中であつた。だから自然新しい流れとなり、新しい時代のグループとなつたのである。

この時代の一般的傾向は印象派であるが、ゴッポ、セザンヌからピカソ、マチスに至るまで論じられた。たゞし自分達のデッサンや人体習作などは出来るだけ写實主義で行くことが基礎をかためる本道であるとの主張が主流をなしていた。

こゝに集つた青年画家達は田中、半田等サンパウロの官立美校に通つて正式に勉強しているものもあつて、世界の絵画史にも注目し、芸術の本質の探究にまで心を向ける若々しさを持つていたことは、初期の無自覚な人達にくらべると一大進歩だといわねばならない。この聖美会の成立は在伯同胞の美術史上特筆すべきことである。

一九三六年四月、聖美会主催で会員半田知雄の油画及びデッサンの展覧会が日本倶楽部で開かれ、一般の好評を得たのも美術研究熱を刺激した事件であつた。出品作品は五十号が一点あつたが、他は十号以下、六号、八号のスケッチが主となつていた。一伯人批評家は「半田は九十パーセントまで日本人的である」と書いた。青年の意気をもつて自然に感激した印象的な作品であつた。

くだつて一九三八年十二月には、会員ほとんど全部が集つて国防献金展を、當時リアシユニール街へうつていた日本倶楽部で催した。この展覧会では一般在留同胞の作品か募集したが、会員が集つて應募作品の審査を行った位、会員の鑑賞眼も進歩していたのである。この展費会には聖市郊外やサントス市からも出品者があつた。

聖美会の活動は一九四〇年頃まで続けられ、戦争と共に会員の個人的精進の鳴かすとはすの雌伏時代を迎えることになつたのである。

(6)

こゝで我々の運動には直接関係はないが、我々の個人的な発展や、同胞一般の美術心の向上のよき刺激となつた外来の邦人美術家のことも記して置かなければならない。

年代ははっきりしない。たしか一九二八年頃だと思ふが、藤田嗣治の個展があつて、當時ブラジル人等にも東洋的な線をとり入れた近代画がめずらしがられたとは記憶しているものもあるだろう。この人は我々同胞よりもブラジル人に興えた刺激や影響は大きかつたように思う。

一九三〇年にパステル画家として有名な矢崎千代二が来伯して、サンパウロでも日本倶楽部で個展を開いた。小品が多く値段も大衆的であつたので多くの同胞が購入した。この人は奥地を写生旅行に廻つたため、各地の同胞に影響を興え

た。しかしこの頃はまだ移住者中に画家が少なかったもので、どれだけ専門家に刺激を興えたか不明である。

一九三七年に帝展出品画家の松尾敬一が来て個展を開いたがこれには聖美会の連中が額縁のことや、その他雑用を手伝い、その時、絵の話や東西の画人論などもしたので我々の興味をひいた。この人はボンナールのようなやわらかみのあるロマンチックな色彩の画をかいていた。アルゼンチン、ペルー等を廻りたしかフランスへ行つてから日本へ帰ったと思う。健在かどうか。

一九三八年東京の画商福中又次が日本画展を催した。玉石混淆の商品展であつたが、日本画を日伯人等に紹介し、文化運動に貢献したことはみとむべきであらう。

一九四〇年には、文化方面で日伯親善の使命を帯びて来伯した大橋了介、及びエレナ・ペレイラ・ダ・シルヴァ夫人の展覧会が開かれた。大橋はブラジル人画家ヴァルデマル・ダ・コスタのパリ時代と同僚であり、エレナ夫人はブラジル・アカデミズムの元老オスカル・ペレイラ・ダ・シルヴァの令嬢である。大橋は有名な天才画家佐伯祐の同僚でもあつたとか、パリ風景や、日本城廓、古寺院などの風景をもたらして、その力強い作風はブラジル人の間にも親まれた。聖美会員も世話役として働き、又親睦会も催し、エレナ夫人とともに画家檜垣の経営する旅館でスキヤキの鍋をかこんで歓談した。玉木の案内でノロエステ線方面を旅行し、各所で個展を催した。おいしいことに戦後の困難な日本で病没した。

一九四一年九月には在佛十五年、画業に精進していた上永井正の個展が開かれた。本場でできたえた人だけあって、油絵具の駆使の自在な点、在伯画家たちにもよき参考となるものがあつた。

組立のたしかさ、色彩のあざやかさなど専門家を刺戟したばかりでなく、一般人にも理解され親しまれたものである。だが一九四一年の末にはすでに太平洋戦の勃発となり、その後

の在留同胞の社会が暗黒時代に入ったため、日本人としてヨーロッパへ帰ることも出来ず、ブラジルに於ける彼の画業も一時苦難の時代を迎えたが、終戦直後再び聖市で個展を開いた。しかしまだ邦字新聞も発刊をゆるされて居らず、同胞間に興味をよび起すには至らなかった。現在はりオ市にあつて精進して居り一九四八年の六月には文部省の推薦で個展を開き、ブラジル人に上永井の名をひびかせた。

(7)

第二次世界大戦の終結と共に、當然もり上るべく予想されていた我々の美術運動も、日本の敗北、デモクラシーの再興にともなう當国の政治的、社会的運動の混乱、邦人間の認識運動の国難などのために、のびのびになつていた画家の集团的活動も四七年の三月三十日に至つて始めて集合結束する機会を得たような次第であつた。これは戦争中（一九四四年一月）リオの生活を切り上げて、すでにサンパウロに居をかまえることになった高岡由也の奔走によつて、時機尚早なりとの一部の反対をおしきつてまとめ上げられたものであり、サンパウロ造型美術研究会と新しく名のり上げたのであるが、畧稱としては依然聖美会なるものもちいることとなつた。その中堅は前記聖美会と変りがなかつた。

高岡は後に記する通り、半田、田中、玉木などの同僚であり實は初期聖美会創立の時からそのリーダーの一人たるべき人物であつたが、創立の時はすでに玉木と共にリオに移つていたので、我々の初期の運動からは表面的には遠ざかつていたが、實はたえず氣脈を通じて、お互の向上を計つていたのである。

四七年三月の懇談会はコンセレイロ・フルタード街一〇九五番の田中正實方でもよほされ、集会者は七七名であり、次のようなことがとりきめられた。即ち、

一、サンパウロ造型美術研究会（畧稱聖美会）と呼ぶこと

二、会費は月拾ミルか、二拾ミルかは次回の決定打まつこと

三、会場は當分垣檜方と田中方とを交互に使用すること
四、彫塑を含ましむべきや否やについては田中、玉木等は可とし、半田は否として決しなかったが、高岡は将来は建築部迄包含せしめたいとの希望をのべたので、彫塑も許容せられる形となったこと

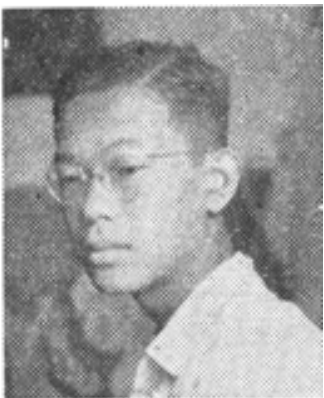
なお会の将来については、こゝを足場として伯人等に進出し各会員は自分の好むところにしたがつて、どんなグループに参加することも自由にしようではないかと語り合った。会員の顔ぶれは富岡、半田、高岡、檜垣、田中、玉木等をはじめとして田中正實、田中シ郎、西村繁雄、安芸正人、増田健次郎、戸田三男、沖中正男、渡邊實、津守一雄、これに彫刻の山本岩吉が這入った。その後も迫々会員がふえて会則を定めたり、役員を互選したりするまでに話が進んで来たが、半年余にして月次集会は中止の状態におちいった。これは高岡、半田等が個展作品の準備にとりかゝつたことにもよるが、最大原因としては会員の中堅が生計のために忙殺されるような苦境にあつたことを上げることが出来る。

こゝで時日的には少しさかのぼるが、我々は大きなショックを受け憤起させられた事件の起つたことを記さなければならぬ。

それは第二期聖美会を興す丸一年前の一九四七年二月、二世の森ジョージがイタリー画廊で個展を開き空前の好評を勝ち得たことである。しかもジョージはわずか十五才の少年であつた。師匠高岡の義弟であり、わずか二ヶ年足らずの修業であつたが、専門画家さへ驚きの眼を見はつたほど進境を示した。これには葡字紙といわず邦字紙といわず一齋に讃辞を呈した。無論、高岡の影響下に成つたものであつたが故に、師匠の偽作ではないかなどの噂も立つたが、その反證としてリオの個展では公衆監視の前で堂々自画像をかき上げたなどニュース・バリューを高めたことは多大なものであつた。

ジョージとならんで、一部の美術家間に田中シ郎のあることも知られるようになった。二世ではないがそれに等しい後進でしかも若年十七、八才、その芸術的素質はジョージにまさるともおとらないと評されるに至った。四七年四月、米伯文化協会主催のブラジル新進美術家十九人展にはジョージと共に出品して四等賞をもらった。田中はまだスカデミックな手法にかたまらず、フォーブから抽象に至るまで気のむくまゝ潤歩できる自由さがある。どこへ落ちつくとも未だ決定されてはいないが、太い線、大胆な色彩など将来を囑望されている。

二世だという点、西村繁雄もこゝに記して置こう。病弱であるため精進はとだえがちであつたが、四六年にはサロン・パウリスタで青銅メダルを授けられたほどである。これはたしか五等か六等にあたる。まだアカデミズムの型からぬけ出してはいないが、今後の期待はかけられると思う。



(写真―森ジョージ)

(9)

一九四八年は恰度移住四十年に當る年であるが、この年に二十年一日の如く画業に精進して来た高岡、半田が前後して個展を開き、専門家、愛好家間にひろく賞賛されたことは詩人古野の評言をかりれば「偶然の啓示」の如く意義深いことに思われる。

四八年には六月末迄に三人の邦人画家が個展を開いたが、そのトップを切ったのが建築技師として内外人間に知られたマツケンヂー工大出の鈴木威であった。始め、田中重人についてならつていたが、それは一時で、二、三年の画業だというのに伯人一流の批評家からもそのめざましい進歩ぶりを賞讃された。今は後記十五人グループの立役者となつて、非常なコリ方をしている。彼は四十七年にリオの官展で名譽賞状を興えられている。

高岡由也の個展は、同じ画廊で四月二日から開かれた。五十点に近い出品作は、時日の不足から彼の本領を充分うかゞえる傑作ぞろいであつたとはいへないが、その技倆がいかなるものであるかを知ることが出来るものであつた。彼のたくましい構成力は日本人の欠点とする弱々しさを克服して、堂々たる丈夫の芸術を世に示した。あらゆる新聞はその批評家によつて彼の芸術を紹介した。ゴシップの多い奇人としての彼が、コレイオ・パウリスターノ紙の日曜版の読もの欄を写真入りでかざつたことは、彼にふさわしいヂヤナリズムの贈物であつたろう。

半田知雄の画展は、六月一日より前二者と同じ場折で催された。サン・パウロ近郊風景スケッチと邦人農夫の生活を主題とした作品とが相半した感があつた。伯人批評家の或る者は風景画の方をすぐれているとなし、或る者は農民の生活を表現したものに土地の芸術家らしい魂の動きを認めて好感をよせた。また移民の子の芸術として、身近なものを感じた同胞間の美術愛好者たちは彼のために多くの賛辞を送つた。

三人の個展を通じて日伯人の等しく驚嘆したことは、連日觀衆のたえなかつたこと、また売上点数の多かつたことである。売れる画、即ち俗悪な画という定評をくつがえしたような感があつたことである。

半田の個展開催中から、半田、高岡、鈴木、及び玉木のもとの弟子や知人である伯人青年たちがよりあつて共同アトリエ開設を議し合い、直ちに中心街の一角にアトリエ・デ・グ

ルーポ・キンゼを設けることになったのは、邦人画家たちの新しい出発であつた。これについては葡字紙も意義ある門出として宣伝の労をとつてくれた。そしてグループの三分の一は未来を囑望される新進のブラジル人であつた。

(10)

ブラジルに於ける日本移民の文化の一部である美術史、しかもその中の絵画史を書き上げて見て、もつと移民の一般歴史にぢかに結びついた姿にならなかつたものだろうかと物足りなく思う。可成り年代的にははつきりしていることだし、個々の作家の技倆や傾向も、ほど見當がつくことゝ思うから、わずかの思索の労を、もし読者がとつてくれるならば、経済的活動や、教育運動や、スポーツなどとの関連に於いて示唆多い結論が引き出されることゝ思う。教育事業やスポーツなどが時機を得ては有志家の後援が興えられて来たにもかゝわらず、美術運動はたゞわずかな同情者の協力によつて続けられて来たにすぎないしかも文芸運動者などよりいくらか有利であつたのは、言葉という非国際的な媒介物なくして、誰にも一応したしまれるという絵画の特長によつたことは認めねばならない。また音楽運動よりも早くから起り、一応華々しい進出を見たのは一般の美術趣味が音楽よりもたやすく伝統につながる事が出来たからであらう。

邦人社会の美術的完成はこれからの仕事である。移民白身の手によつてなす役割は一段落を示したと見てもよい。我々は二十年の暗中摸索を了えてやつと明るみへ出た。しかしこれからは二世諸君の舞台とならなければならない。我々はその捨石となつた。移住者第一世の仕事は、次ぎの世代の進路を出来るだけ平坦なものにすると同時に、古典として残るべき作品をいくらかでも製作出来たら使命は終るのである。

(11)

一般の歴史であるから、社会的な出来事を中心として記述して来た。ゆえ、個人的な記述はなおざりにされがちであった。附録のような形で、現に画業に精進しているもの個人および主だったアマチュアを紹介してこの一篇を終ることにしたい。

富岡清治 文筆上では耕村と号し、我々の中では最年長者で五十餘才である。画家として立つ野心はもともなかったのかも知れないが、二十年ならず三十餘年画筆を捨てない。すでに紹介してあるから、こまごまと書く必要はないが、邪心のない清らかな画をかく。この人の短歌や俳句をよむと、画の心もわかるかも知れない。

半田知堆 富岡より二年おくれて高岡と同年に聖市の職業学校を卒業し、後、美術学校に学ぶ。サロン・パウリスタで名譽賞状を得たこともあるが、一九四八年の個展までは特筆すべき活動がなかった。この道では古株の一人、四十三才である。

槍垣肇 旭旅館の主人、朝から晩まで人の世話をやく商売をしながら、家の片隅にいつもアトリエまがいの一室を設けることをわすれず、こつこつと画筆をとっている。聖美会創立當時からの人。大作はしないが、気軽で味のある印象派的な風景、静物をかいている。四十二才。

高岡由也 昔フランススコと呼び、シッコの名で通っていたが、近頃はヨシヤ・タカオカと署名する。写實の大家。リオのサロン・ナシヨナルで外国人としては最高である銀メダル賞をもらっている。磊落ユーモアに富み話上手で多芸、人をあかさす、邦人画家中で最も能動的な男だ。四十才。

田中重人 古株の一人で最も多才な男。かつてはサン・パウロ美校に学び、サロン出品者でもある。装飾美術でも一家をなして一時田中のデザインでパウリスターナの衣裳をきらびやかに飾ったこともある。四十才前後だろう。一九四七年にはリオ市のある美術展で入賞している。

玉木勇治 高岡と二人でリオ首府へテクつた男、いつも理想が先にたつて自己批判になやむ。頭のいゝ点で高岡の助言者でもあつた。高岡と前後してリオの官展で自像を出品して青銅メダル賞を授興されたことがある。いつも未完成な点、古株ながら未来の大成を囑望されている。三十三才、独身である。

鈴木威 かきはじめて二ヶ年餘、すでに専門家の列に入る。ブラジル最初の邦人飛行家としても記憶され、建築技師が本職で、謡の名人でもある。行くとして可ならざるなき才人。ねつちりした重量感をもつ作品がブラジル人間によるこぼれている。その他、増田健次郎、林弘、安芸正人、沖中正男等があり、熱心に研究し公募展覧会にも出品しているが、今後の進境成果を待つことにしよう。リオ市にも数人の画家があり、サロンで入賞したりしているが、サン・パウロの運動に縁がないし、調査する便もないので止むを得ず割愛する。

ノロエステ線アラサツパには古株の一人岩本巖が、最近日伯人をモローラする絵画研究のグループを結成して活動していることは見のがすことの出来ない事件であろう。その他最近になって我々とは関係なしに市内や郊外からアソシアソン・パウリスタ展やサロン・パウリスタ等に出品しはじめた数名の画家もあるが、この人たちの仕事は今後の変化上達によつて次の時代をかざり得る人となり得るかも知れない。この四十年史から除外することをゆるしてもらいたい。

(半田知雄)

四、音楽と舞踊

第一回移民で三味線を抱てサントス港に上陸したものはない。沖縄県移民だけは蛇味線を抱いて上陸した。月の赤い夜などサントス市郊外波の音きくカンポ・グラシデに掘立小家の佗住居にも、蛇味線弾いて祖国情緒に想をやった。福島青年独身移民の一人は竹の横笛をもっていた。尺八をもつた移民はなかった。第三回移民船では三味線抱いた女房も上陸し、尺八もつた男も来た。七、八回移民にはビワ抱いて来た人もあった。浄瑠璃本や見台も移民収容所の税関を無税で通った。

筑前ビワ師の新開がノロエステ線の邦人コロニアを巡行し、浄瑠璃の会が始まったのは一九二〇年頃からであった。一九二三年には三浦環、が聖市劇場で「お蛛夫人」を演じたが、奥地のコロニア大衆とは緑違いものであった。

一九三〇年頃、海軍音楽隊出身の小林源五郎がマリリア市を根拠としてコロニアに童謡児童劇団を起し、巡廻演奏し、コロニアのすさんだ感覚に音楽的なリズムの快感を與えた。

浪界に南米吞舟が、南米孤舟が、月子が、伯州、雲春等がコロニアを語り巡った。その頃、聖市コンデ街に筑前ビワの春藤旭行がいて、時折弾奏会をしていた。一九三五年外人ピアニスト伴奏で斉藤勇蔵が聖市で荒城の月を独奏し、一九三六年には吉澤義政が「鉾をおさめて」を独唱した。

一九三七年には日本音楽史 (Suzy Piedade) を半田知雄が葡訳で書いた。文化協会の募集論文に應じたものであった。一九二八年には日本クラブ (當時リベルダーデ街) で池邊春磨、木村圭石、高岡専太郎、杉本芳之助、後藤武夫等が長唄の会を開催し、其後三回か演奏した。三味線は成富屋楚、内畠安野、高岡せい、鈴木菊枝等であった。

その頃、一方には浄瑠璃会も起っていた。師匠は富岡喜太郎で大隅太夫の「静」の一字を許された静司であった。彼

は一九三一年頃より聖市に浄瑠璃の帥匠を、三味線は彼の妻が弾き、中山忠太郎、石川芳園、菅譲二、中山伴一郎等の弟子を仕立てた。賓生流の謡曲は吉川準次が師匠して謡曲の会もあつた。

一九三九年、南聖のセツテ・バーラスの童夢音楽団の組織者松村俊明が一団を率いて来聖し、独逸人クラブ・リラを会場として演奏した。同年母国からテナーの藤原義江が来伯し、聖市劇場で夕焼小焼等をうたつた。奥地コロニアを巡つた。一九四〇年藤原は再渡伯した。この頃長谷川敏子、川上某女等の舞踊楽の詣嬢も来伯し、コロニアの楽踊界を賑わした。斯くて第二次世界大戦に入り、空白時代が終つた一九四七年頃にはコロニアにはコロニア独特の協山一郎のコンチネンタル楽団、丸山昌彦のクリスタル楽団が組織された。二世の聲楽家中川俊彦、田村敏子を出し、ピアニスタに伊藤正子、福島めぐみ等を出し、舞踊界に浅倉洋子、鈴木クララ、薬師神オルガ等を進出させていた。一世の舞踊家には若松慶子、杉本フジ子、辻あさ子、田中勘輝、藤間国枝等がいる。

五、コロニアの母国映画

コロニアで母国映画の創まったのは、一九二八年バウルー市に於て斉藤政一が日伯シネマ創立、十六ミリ映写機をコロニア各地に持ち廻り、コロニアの小学校舎内で、又は野天の草原で月のない宵に映写興行し出してからであつた。コロニアには珍しがられた。一九三二年日伯シネマ社はバウル市の田舎町では聖州全体の邦人コロニア興行に不便を感じ聖市に移轉し、大毎製作の「新聞時代」や、松竹の「狼火」を上映した。

コロニア映画社は一九三四年頃迄は、この日伯シネマ社一

式独占であったが、一九三三年聖市の「カナ・ブラジル」社が日本風景映画の十六ミリを上映し、教育映画式時代の感覚をそゝり、これに呼応し菅山鷺造が「日本観兵式」や「国際水泳大会」「藤太郎の母」などのフィルムを取寄せた。サンパウロ父兄会が十六ミリの教育映画部を設けた。

その頃、日伯シネマ社のヒットは「瀧の白糸」「人柱」「爆弾三勇士」等であった。一十五年の移民生活が幾分ユトリをもち出した現われであった。

その年、倉方勇が聖市に日本シネマ社を起した。二年つゞいた。一九三五年に石川直継が関西シネマ社を興したが、半歳でやめた。一九三六年日伯シネマ従業員中より独立分派が二つ起った。ブラジル邦画興行社を平田公泰が、日伯キネマ社を松井春波（本名橋本悌三）が創立した。

一九三七年、母国の東寶社の外国部長重役坂上敏雄はペルー国より廻つて来伯した。斯くて邦人資本家杉本芳之助、国井五郎、神戸の瀧波文平聖市支店が協同して南米興行合資会社を興し、興行主任に澤井天城を据え、開幕にパラモン映画館で「忠臣蔵」をやった。次で「白蘭の歌」をやり、ロザリオ映画館で「五人の斥候兵」をやった。母国軍国主義の反映であつた。

第二次世界大戦前、邦人コロニアには伯国シネマ聯盟が設けられ、左の四シネマ社があつた。

「○」商会映画部（千田勝男）

日伯シネマ社（斎藤政二）

日本キネマ興行社（平田・松井）

松竹興行合資会社（澤井天城）

日伯シネマ社の興行した「夢見る頃」は、コロニアのインテリ・ファンに忘れられぬ涙のフキタであつた。

終戦後、コロニア映画界で逸早く開幕したのは舊日伯シネマ社と、日本キネマ興行社と合同した日伯興行社であつた。松竹社撮影の「流轉」をやった。空白時代の母国情緒に飢えていた邦人は、あの三味線芸の音にコロニアの流轉情緒を交え

てむさぼった。

一九四七年コロニアには新映画社が二つ興った。山田登幸の支配するブラジアン商事会社映画部であり、佐藤清義の支配する亜細亜映画合資会社である。ブラジアン映画部の開幕封切は東實撮影の「東京五人男」であつた。その後「金色夜叉」をやつた。亜細亜映画社の開幕封切は大映映畫株式会社撮影の「国定忠治」であつた。

以上の邦人映画興行が孰れも伯人系外人系の映画劇場で映写されている。邦人コロニア資本により建設された映画館は未だ一つもなく、移民四十年を終つた。

第五章 コロニア・

スポーツ史

概況

在伯邦人移民史も四十年を数えるに至つたが、コロニヤのスポーツ史は第一回移民船で渡伯した矢崎節夫らのつくつた野球団が孤々の聲をあげたのがその発端で、三十有余年である。爾来コロニアのスポーツは在伯邦人社会の発展とは密接な関連を持ち、今日の絢爛たるスポーツ時代を現出したのである。

その間幾多の消長はあつたが、スポーツがコロニヤ全般に普及し大きな役割を果し始めたのは近々十数年前からである。即ちコロニア・スポーツ史を大別すれば次のような時代に分類することが出来る。

- 一、揺盪期
- 二、過渡期
- 三、全盛期

四、戦争空白期

五、復活期

六、現在

即ち揺盪期は大正初期及び中期で、過渡期は大正末期から昭和當初、全盛期は昭和十年前後で、戦争空白期は読んで字の通り第二次大戦中と終戦直後、復活期は茲二、三年間ということになる。

スポーツのなかった邦人社会の時代は、数的にも事業的にもまた組織的にも伯国社会にとって微々たる存在であった。それが大正末期より昭和初期にかけて日本移民の渡伯が最頂点に達し、数、事業、組織においても伯国社会に一つの存在を示すに至った。正に邦人スポーツ界も全盛期であった。即ち陸上競技界は現在ベテランとなつている連中が最好調期で、紀元二千六百年の母国の祭典には勇躍日本に遠征した。野球界は技術的に最も強力なチームが輩出した時代であった。柔剣道また然り、柔道使節の来伯でブラジルにジュージツなるものが認識された。相撲は元小結眞砂石の渡伯で大隆盛を見た。それが第二次大戦となり、ブラジルが対日宣戦を布告するに及んで日本人のあらゆる組織は解散を命ぜられ集合が禁じられた。その為コロニヤスポーツ行事の開催は不可能となり、事實個人としてスポーツを行うことも困難となった。正に邦人コロニヤは蟄居時代となつて、スポーツ界も戦争空白期を硯出したのである。この戦争空白期は折角隆盛に向い、漸く伯国スポーツ界に進出せんとしていたコロニヤ・スポーツの芽を断ち切った如き感を興えていたが、終戦後漸く常体化した邦人社会の復活の息吹きと共に、再びスポーツ界も戦時中の憂鬱さを吹き飛ばす勢いで復興し、現在では戦前の全盛期を凌ぐ活況を示すに至った。

全伯的スポーツ行事たる全伯陸上競技大会、全聖州野球選手権大会、全伯地方対抗野球大会、全伯少年野球大会、全伯相撲大会、全伯庭球大会、全伯柔道大会など既に二回三回と回を重ね、水泳方面でも日系伯人が堂々ブラジル水上界に気

を吐いている。

一、コロニアの野球史

邦人最初のスポーツ団体をつくったのは、矢崎節夫らがサンパウロに野球同好者と語らい、野球同好者クラブというようなものを組織したのが嚆矢である。一九一六年（大正五年）の頃で随分古いことであり、當時の関係者も現在しているものは少く、記録的に多少鮮明をかいているが、當時ライオン会社関係の事業が盛んな時で米人が相當入り込みかれらの国技野球を日曜などアンタルチカの運動場で盛んにやったらしい。それを聞き伝えた好球家連が、是非おれ達も仲間に入れてもらおうというので、大挙して出かけ、いきなり日米人に分れて試合をやったという。勿論勝敗など分り切っているが、これがキツカケとなつて、われわれで野球クラブを作ろうではないか、との氣運が生れ、南米新聞社長政星名謙一郎と矢崎とが、當時の初代総領事松村にかけあい、その頃としては大枚の五百ミルなにがしの寄進にありついて、野球道具一式をととのえる投取がととのつたわけである。

當時、この野球クラブを創立した人達の顔ぶれは、藤崎商会（邦人最古の在伯商社）の赤尾、小此木、長谷川（庄）、栗山松隈をはじめ好球家の連中だった。ところが松村総領事は、同じつくるなら一そうのこと青年会というような組織をつくつたらどうか、との提唱をしたので、こゝにブラジル邦人最初の青年会が野球同好者の集りから誕生することになった。當時の幹事は多羅間鉄輔、熊坂清四郎、弘中強介、伊藤庄吉、矢崎節夫で、矢崎が幹事長に推薦された。

最初の野球試合

この青年会がはじめて一九一六年九月二十四日、交渉の結果借り受けたスタン球場で野球試合をやった。野球を知るもの、知らぬもの誰彼を三つに分けて試合が行れた。青柳郁太郎が始球式をやったというから、仲々野球の体裁だけは一カドそなえていたに違いない。とにかく集った人達がこのブラジルで初めての野球試合に感激したことは目に浮ぶようである。これが現在かゞやさしい発展をとげたコロニア野球、否スポーツ界の首途であつたのだ

ミカド倶楽部とアリアンサ

やがてこの青年会の野球部は、いろいろなイキサツで独立することとなつたが、その独立したのが有名なミカド倶楽部である。ミカド倶楽部の最初のリーダー格は渡邊孝。笠原音二、松隈秀義で、渡邊、笠原は既に故人となっている。

このミカド倶楽部と、その数年後出来たラツパ倶楽部、矢崎が赴任して作ったアンニューマス農場チームが、一九二五年頃聖市でリーグ戦をやり、アンニューマスが優勝したが、これが野球対抗試合の嚆矢であると思われる。ブラジルの野球史はここから出発する。その後かゞやさしい発足をしたのがアリアンサ野球団である。衆知の如くアリアンサ野球団は日本の海外協会が設立したアリアンサ移住地に孤々の聲をあげたが、その主体となつたのは弓場勇であつた。この野球団は他の球団と異なり特異な存在として今尚弓場農場野球団として現存している。

「野球を實生活に」をモットーとし、強固な同志的結束で作りあげた球団である。創立早々二回聖市に遠征、ミカド倶楽部を屠つて當時全伯にその知名をられた。その後、日伯新聞主催の全伯野球開催までは聖市に遠征せず、専ら地方にあつて、所謂「農村野球」の基礎を作つた。現在なお弓場を中心に望月、大山、宮崎、箕輪などの四十前後の老勇士がその息

子などと一所に第一線に立っているのは偉観である。

ノロ、ソロ野球

ついで名乗りをあげたのはバストス、ビリグイ、チエテなどであるが、共に昭和五年前後で、現在でも伯国球界の名門としてその強剛振りを誇り、また幾多の球界中堅人物を輩出して球界の発展に大きな原動力となっている。これらのチームは毎年対抗試合を行っていたが、その後野球が各地に普及され、熱が高まるにつれノロエステ、ソロカバナ地方に多くの球団が誕生し、その気運に醸生されて汎ノロソロ野球大会が毎年行われることとなり、野球の中心は聖市をはなれて地方に移っていった。

これよりさき聖市のミカド倶楽部全盛時代、聖市で全伯野球大会がミカド主催で行われた。昭和五年のことで、アリアンサにつき、バストス野球団が創立された年であった。この大会は當時あった五球団の内、アリアンサが不参加であったため、名實とも全伯大会とはならなかったが、全伯野球大会の第一回ともいふべきものであろう。参加した球団はミカド、バストス、アニニューマス、レヂストロの四つでミカドは安善寺、高野、鈴木威、原、杉野、瀬戸、アマデウなどの顔ぶれで、バストス斎藤、園田、山下、有村、小金澤、清谷、千田、山中など、アニニューマスには渡邊万次郎、赤尾、鳥賀陽などがいた。レヂストロには記録がなく名前がハッキリしない。結局優勝試合はミカドとバストスとなって、三十二対十八とかいう物凄いスコアでミカドが優勝した。その後ミカドも解消し、この全伯大会は一回だけで消滅してしまい、前記のように伯国の野球の中心はノロエステ、ソロカバナへ移っていった。

ノロ、ソロ野球時代はやはりアリアンサ球団が君臨していた。かくするうちにサンパウロ方面でも迫々と野球熱があが

り、地方から聖市に出た連中とか、ミカド倶楽部のあとを受けついだ連中でサンパウロ野球クラブが誕生して、再び聖市での全伯大会が復活することとなったのである。

全 伯 野 球 大 会

第一回全伯野球大会は一九三六年（昭和十一年）聖市のモツ力街にあるアンタルチカ蹴球場で行われた。どこが主催とといったものでなく、強いていえばサンパウロ野球倶楽部とでもいえるであろうか。この第一回にはアリアンサは不参加で、サンパウロ、チエテ、バストスなどが出場、結局サンパウロとチエテの優勝戦となって、十三対十二でチエテが優勝した。第二回はカマ・パテンテのカンポで、優勝戦はサンパウロ対アリアンサ、七対三でサンパウロの優勝となった。次の第三回からは日伯新聞社の主催となって、なじみ深いスダンの広場に白いパンノを張りめぐらし、球場らしい雰囲気をつくって行われたが、参加チームも数を増し、眞の全伯野球らしい大会となった。この大会には地元軍敗退し、アリアンサとバストスの優勝戦となって、往時のノロ、ソロ野球の観を呈し、結局三対一でアリアンサが優勝した。第四回はカナカオ球場、チエテとサンパウロが優勝戦で大接戦を演じ、結局チエテが八対七で勝ち、第五回もおなじくカナカオ球場で行われ、前年度とは反対にサンパウロが十七対八の大スコアでチエテを降し復讐を遂げた。つぎの第六回は東山がサント・アマール線に堂々たる大球場をつくり、その球場開きを兼ねたような全伯野球大会が行われた。この大会の準決勝でチエテとバストスが白熱の大接戦を演じ、四対四の十四回延長戦を記録した。翌日の再試合でバストスが簡単に勝ったが、現在も目に浮ぶ程の眞剣な試合であった。優勝戦は結局サンパウロ対バストス戦となって、六対三でサンパウロが優勝した。

この第六回大会が戦前最後の全伯野球となったわけであるが當時の東山球場は敵性財産整理でリキダされ、現在では工場が建てられ往時を偲ぶよすがもない。「戦争がなかったら」の感深いものがある。

空白時代と復活

これからが所謂「戦時空白時代」となるわけであるが、相當な圧迫や困難を忍んで、聖市や地方では大ピラでなく野球が行われ、クラブ的な組織による球団が幾多生れた。これが現在の聖州野球連盟の基礎的な存在となったわけである。

球連の発足

戦後主に聖市の野球人間に野球の合法的組織化という問題が擡頭して来た。その第一着手手段として、野球をブラジルの公式スポーツ種目とする運動が行われ、パジョリヤ体育局長などの諒解でこれが實現した。これに伴う合法的スポーツ団体としての「聖州野球連盟」の組織が計画されたが、これが具体化したのは一九四六年で、その年末遂に創立創会の開催というところまで進行した。各地方クラブ代表が参集し理事会の選挙を行った結果、会長には現在も会長として活躍しているオリンピオ氏、副会長にモンテイロ氏、事務長に田村幸重氏などが選出され聖州野球連盟が正式に発足した。その翌年の一九四七年聖州野球連盟の主催になる全聖州野球選手権大会がクルベ・バンデイラのカンポで行われた。それに先立って行われた各地方予選区で優勝した地方代表は、聖市Ⅱサンパウロ野球クラブ、ノロエステⅡチエテ野球クラブ、パウリスタⅡマリリア野球クラブ、ソロカバナーⅠサント・アナスタシオ野球クラブ、南聖Ⅱスザノ野球クラブ、東北代

表（ビック・アップ）の六球団であつた。戦後復活した邦人コロニヤ最初の野球大会ではあり、また球連組織の第一回（一九四七年）大会でもあるので各球団とも大いに張り切り、熱のこもった幾多の好試合を展開した。結局上井投手を擁するパ線代表マリリヤと、眞にダーク・ホース的存在であつた南聖代表スザノとの優勝戦となつたが、マリリア五対三でスザノを破り。栄ある第一回選手権を獲得した。

第二回（一九四八年）は同じくバンデiras球場で行われ、聖市代表ウニベルソと、ソロ線代表アルバレス・マツシヤードの優勝戦となり、聖市代表ウニベルソが七対五でア・マツシヤードを降して優勝した。

この年、パウリスタ新聞社の主催で全伯少年野球大会も復活し、その第一回大会が開かれたが、これは少年野球として項を改めて記述する。

再び 全盛期へ

越えて本年一九四九年には、多年の懸案であつた連盟専属球場が球連幹部、その他球界関係者の努力で完成された。それは野球人にとつての大収穫であり、従来悩みの種となつていた球場問題も遂に解決されたわけである。目下あらゆる球場施設の完備を目指して着手諸設備を増加しているが、近く名實兼ね備えた球場となるであろう。その球場開き野球大会が開催され、聖州体育局長の名を起して「パジーリヤ球場」と命名された。

更に四月には日伯毎日新聞社の主催で全伯地方対抗野球大会が開催された。この大会は球連予選区、並びに隣州パラナの選手をビック・アップして代表球団を組織し、地方代表として出場、選手権を争うものである。出場球団は市代表、ノロ線代表、パ線代表、南聖代表、ソロ線代表、パラナ代表の六球団であつたが、結局優勝戦は聖市代表対ノロ線代表とな

り、十回延長戦の後二対一でノロ線に凱歌があがった。
また球連主催の第二回全州野球選手権大会は、例年通り九月挙行され、ウニベルソの再制覇するところとなった。
かくてコロニヤ野球界は戦前以上の活況を示しているが、伯国現在の野球チームと名のつく球団は恐らく千を越えるものと見られている。

少年野球に就て

コロニヤ野球発展の過程には、少年野球の果した大きな役割を看過することは出来ない。現在各球団の中堅となつて活躍している選手は殆んど総てが少年野球の洗禮を受けた人たちである。コロニヤの野球は勿論日本でも多少とも野球をや、また球を握つた人達で始められた。そのために最初は青年のみの野球であつたのだが、これらの人達が後進を指導するという意味と、次代の野球人を育成するという意味から少年野球の重要性を認識して、少年に野球を指導することゝなつたのが始まりである。

なお當時は日本語学校が各邦人集団地にあり、日本人教師がそれぞれの学校で児童の教導に當つていたことも、少年野球の普及發達に容易であり、また貢獻するところが多かつた。後に全伯少年野球大会が日本人学校の元締めであつた文教普及会の主催で行われることゝなつたのも、その間の消息を物語るものである。

とまれ少年野球は前述の如き理由から、邦人の大集団地であつたバストスで創成され、ついでリンス、チエテ、ビリグイなどに組織されて、その後全聖州、北パに普及した。その後少年野球は異常な發展振りを示し、殆んど青年野球を凌駕するまでになつたが、戦前伯国のナシヨナリズム化がゼツリ才政権下で極度に尖鋭化し、日本語教授の禁止などから日本語学校の閉鎖となつて漸次下火となり、戦争時に至つては、

遂に影をひそめた。それが戦後コロニヤ野球界の復活でまたもや擡頭、各地に少年球団も再組織され、一九四八年パウリスタ新聞主催の全伯少年野球大会の開催となり、本年度二回を重ねることゝなつた。勿論、戦前とは少年球団の組織に相違点はあるが、今後の発展は期して待つべきものと確信される。

二、コロニア陸上競技史

コロニヤ陸競界の歴史も相当に古いが、これが組織化してスポーツとしての陸上競技に行われ出したのは割合に新しく、一九三〇年（昭和五年）で、第一回ノロエステ陸上競技大会がプロミツソンで行われたのが邦人陸上競技大会の最初のものである。即ち二十年の歴史ということになる。

勿論それ以前にも愛好者たちの間で行われてはいたが、所謂各地の植民地で正月とか、天長節とかの祝賀運動会に走り跳び投げるといったもので、正規にタイムをとり、距離を計り記録するというようなこともなく、また練習なども不正規で、トラックなども測定した距離など計ってなかった。それが迫々新来渡伯者中に日本の中学校乃至それ以上の学校で正規な練習をつみ、また日本の競技会に選手として出場活躍したものなどが渡伯して来たので、運動会の余興的な競技が追々と正規なスポーツとしての競技に発展して来たのであった。

その指導者の主なるものに、聖市に安養寺、吉田、平野、鈴木、河合があり、ノロ線の千田、八重垣、島田、ソロ線にバストスを中心とする一団があつた。それに邦人社会に日本人会、青年会という組織が発達して集团的に連絡をとり得る機会が多くなつたことも、陸上競技のみならずコロニアスポーツ界の発展に興つて大きな力となつた。

こゝで面白い現象は、全部ではないが植民地または邦人集

団地で野球団が発展的解消を遂げて青年団になったものが多く、青年団が組織されてからその事業部門の一つとして陸上競技部が出来たということである。勿論これは初期の時代ではあるがその例は頗る多い。

最初の陸上競技大会

邦人最初の陸上競技大会は第一回汎ノロエステ陸上競技大会と銘打ってプロミツソンで開かれた、前記の如く千田、八重樫らの奔走と聖市から安養寺が審判長として出向きいろいろと世話をした。勿論その際の記録は現在から見ても実に低調極まるものであったが、その果たした役割は實に大きい。記録も低調なはず、その當時の挿話をここに紹介しておこう。

この大会で、どこかのチームの選手が日本から持参した「スパイク」をはいて出場したが、これが他のチームの俄然苦情の的となった。その言い草は「飛び道具とは卑怯なり」というのであった。「スパイク」を飛び道具と見たところに一ガイに笑えぬものがあるではないか。しかも競技場が作りたてのバサバサであったので、事実スパイクは何のようにも足たず、かえってぬかり込んで、ハダシがかえって飛び道具となったというナンセンスな話も伝えられている。

全伯大会の起原

この大会に刺戟されて俄然各地に陸上競技熱が勃興し、これと相前後して聖西に陸上競技部が設立され、また聖市に安養寺、吉田、鈴木、河合らを主体とするブルーグレ倶楽部が設立され、聖西と対抗試合を行って互いに技をみがいた。かくて第一回全伯陸上競技大会開催の気運が生れて来たのである。この全伯陸上競技大会の開催は、各地の競技熱が一時に

勃興したので、意外に早かった。早くも汎ノロエステ大会の翌年の一九三一年（昭和六年）にはこれが實現を見たのである。

全 伯 大 会 の 経 緯

第一回全伯競技大会は一九三一年四月二十九日天長の佳節を卜して行われた。しかも万難を排してパウリスターノ倶楽部の競技場を借り受けたのである。これも安養寺の努力であり、蔭の人として働いた東後一美の盡力であった。蜂谷専一が初代会長として経済的援助を惜しまなかったのも大会開催にあづかつて力があつた。参加したのは聖市、ノロエステ、コチア、レジストロであつたが、前三者の實力均等し、最後の千六百里レーで勝敗が決りコチアが優勝した。

その後二回、三回と回を重ねるにつれ、優秀な選手も続出し大会の準備や組織も整然とし、参加チームも増え、一九三八、三九、四〇、四一年の全盛期を迎えたのである。中にも短距離の峯、ハードルの島田、長距離の小田、跳躍陣の松原、藤澤、宮田、越智、投擲陣の玉置、牧野、森本の如きブラジル一流選手をも輩出したのである。以下各種目による年度別のレコードを列記すれば、その技術的進歩状態が一目瞭然であろう。

更に戦時中及び戦後の五年間の空白時代を経て、一九四七年再び復活されたが、この空自時代中の陸上競技に志すものが各自練習を怠らず、先輩またよく後輩を指導して往年に逆戻りするかと思われた陸競界も完全な杞憂に終り、新進の躍進とベテラーノの健在を實證したことは、コロニヤ・スポーツ界の大きな喜びであつた。

陸 競 界 発 展 の 跡

以上のような経緯を示してコロナ陸競界は戦後復活後も順調な発展を示しつつある。しかしこの蔭には幾多の功労者があることは勿論であるが。初期における安養寺ら数名、過渡期から全盛期へかけての藤平、法華、復活期における原源造をはじめベテラーノ、また十年一日の如く審判に従事した人々に対しては感謝しなければならぬ。また昭和九年来伯した福井、大島、朝隈、吉住、藤枝、大江の日本選手一行は、伯国の一流選手を網羅した伯国チームと日伯對抗競技を行い、大いに日本の陸競界のために気を吐き、技術の粋を見せてくれたが、これがわがコロナ陸競界に與えた刺激と、技術的向上への寄與は大きい。更にブラジル陸競そのものうけた影響も大きいものがあり、日伯親善関係促進にも役立った。

この日本選手団一行の渡伯がキツカケになって、伯国ノビシモ級と邦人コロナ陸競との日伯對抗競技が、昭和九年及び十年の二回にわたって行われた。二回ともコロナ軍の敗北には終ったが、陸競界の自信と技術的推進には貢献するところが多かった。不幸二回で中止されているが、最近復活の可能性がある模様で、これまたコロナ陸競界にとって朗報というべきである。

ついで一九三九年には日本のみならず、世界における陸上競技の至寶的存在南部息平がコーチのため来伯した。南部は聖市のみならずコロナ各地を歴訪して親しく指導にあたり、技術的のみならず精神的にもわがコロナの陸上競技界の向上に盡力した。コロナ陸競界が技術的にも精神的にも今日の隆盛を来たしたのは彼の指導によるところが大きい。またコロナの陸上競技の水準が他の競技に比して格段にすぐれているのも、南部のコーチが基礎となっていることは見逃せない事実である。

昭和十四年、あたかも母国の二千六百年記念祭にあたつ

て、日本にコロニー代表選手団一行をおくつた。団長には井上清一が推薦され、コロニヤ陸競界からは島田、玉置、越智、松原、小田、峯の六選手が選ばれて渡日した。これらの代表選手団は神宮競技大会をはじめ各地の競技会で戦績をのこした。この事實はコロニヤ陸上競技史にかぐやく一頁をのこしたものである。またこの時代の優秀選手は、主にエスペリヤ倶楽部（現在のフロレスタ倶楽部）に入り、第一線選手として常に伯国陸上競技界に活躍し、堂々一流選手に伍して遜色なくすばらしい記録をあげて、エスペリヤ倶楽部をして伯国陸上界の最高峯的存在とした。

一九四二年より陸競界も空白時代に入つたが、前述の如く一九四七年より復活期に入り、再び往年の隆盛時よりも更に躍進せんとしている。短距離の三井、中距離の中司、長距離の妻沼、佐藤、走高跳の中島、藤井など往年に勝る有望選手が続出しており、また後続新人群も輩出して前途に大きな希望を興えている。走高跳の中島は既に伯国競技界でもホープとして迎えられており、伯国記録を破るものとして期待される。いまだ年若く未完成の彼れは既に軽く一米九〇を跳ぶ能力を持ち、今後の練習でいかにのびるかはコロニヤ陸競界の大きな希望である。

パジリヤ杯争奪戦

少年陸上競技も野球と同様文教普及会華かなりし頃その主催で全伯少年陸上競技大会が行われていたがこれまた少年野球と同じ運命を辿って戦前から解消されていた。それが一九四八年から復帰、全伯的に行われることゝなつて、それと同時に三十五才以上の壮年、更に女子まで加わり、戦前以上の内容を誇ることゝなり、既に本年も第二回大会が開催された。パジリヤ聖州体育局長の優勝杯が優勝チームに受與されるので、「パジリヤ杯争奪戦」と名付けられている。回

を追うにつれ記録も著しく向上し、次の邦人コロニヤ陸競界を擔う新人群が輩出していることは力強い限りである。

三、コロニア 庭球 史

邦人コロニアのテニス界の歴史は野球、陸上競技に比しては大部新しい。殆んど昭和年間に入ってからであろう。勿論古くからやっていたところもあるが、微々たるものであった。これは日本ではテニスが硬球でなく日本独特の軟球が主であつたためである。日本でも硬球が普及して来たのは大正の末期であつたので、渡伯して来た人達に硬球を日本で實際やつて来たものが、ほんの数えるほどこなかつたからである。

日本のテニスマンで、ブラジルで一番古くから活躍したのは東山の水上不二夫である。水上は東京帝大で鳴らした軟球界の第一人者であつたが、北米に渡り、ダラースで鍛え上げ、熊谷清水に比肩する有名なテニスマンとなつた。デ杯戦にも熊谷、清水両選手共に日本代表選手となつたことがある。サントスに来た時は相當の年配ではあつたが、一九三〇年から一九三五年頃まではブラジル選手権試合にも出場、當時やはりブラジル庭球順位の第五位前後にランクされていた。また現在のサントス庭球クラブをやはり東山だ君塚と共に創設した功績も大きい。常時ブラ拓に東京外語の主將をしていた縄田なども邦人テニスマンとして相当やつていたが、現在の等級では實力四級といったところであつたと思う。和田は後日コンデ街ボールの親娘殺し事件の悲劇の主人公となり、自殺した。その頃現在も邦人コロニヤのテニス界で活躍している村田、早川などは既に外人のクラブでテニスを始めていた。ノロエステではプロミツソンあたりでも、邦人が相當テニスをやつていたが、技術的には問題でなかつたようである。

藤倉の渡伯

邦人コロニヤのテニスが盛んになり出したのは、やはり藤倉次郎の渡伯後であろう。藤倉は人も知る有名なデ杯選手で、現在は現役から引退しているが、後進の指導には依然盡力している。藤倉が渡伯したのは一九三六年で、同年直ちに全聖州選手権試合に出場して優勝、邦人のために気を吐いた。その後二年連続優勝、庭球界のナンバー・ワンの地位を確保した。技術的に他のブラジル選手より一頭地をぬきん出ていたことは事実で、現在のブラジルテニス界の技術的向上も、藤倉の技術に負うところが大きい。なお當時女子テニス界では日伯新聞社長三浦鑿夫人三浦朝江でアルモニヤ倶楽部でひとり気を吐いていた。現在の邦人コロニヤ女流テニスの元祖ともいふべきであろう。

全伯大会の開催

その後邦人コロニヤでも各地にテニスマンが輩出、大きな集団地には邦人のみのクラブも設立された。それで藤倉の指導で第一回の全伯庭球大会が聖市で開かれたのである。それは一九四〇年であったが、當時サント・アマールに邦人のみの庭球クラブが出来ており、テニス・コートも三つあって、日曜毎に相當のテニスマンが集り、實に盛んであった。第一回全伯庭球大会はそのクラブで行われたが、前記早川、村田を擁するパウリスタが優勝した。この全伯大会は第二回のみで、戦争のため中絶されサント・アマールの邦人テニス倶楽部も自然解消されて仕舞い芽を断れたのは現在から考え、頗る惜しまれてならない。

しかし戦時中、テニス愛好者は各地のブラジル人テニス倶楽部に入会して技を練った。団体的なスポーツが不可能で

あつたため、かえつてテニスのような個人的スポーツが邦人間に普及したともいえる。戦後の全伯庭球大会が、戦前よりも数においても、質においても充實したものとなつたのはこの事實を如實に物語るものというべきであらう。結局邦人コロニヤのテニスには戦争空白時代が存在しなかつたことになる。

戦後第一回の全伯庭球大会は一九四七年、カシンギーのコペルコチア庭球コートで行われた。参加チームはサンパウロ、コチア、サントス、パウリスタ、ノロエステの五チームで、A級、B級、女子、少年など参加人員殆んど百名に達する偉観であつた。どこにこれだけのテニスマンが居たかと疑われるほどであつた。藤倉、呉屋の一流選手を筆頭に老將村田、斎藤等なども出場、絢爛たるものがあつた。続いて現在まで第二、第三回と続けられているが、粒揃いのパウリスタが第一回以来、三連覇している。女子はやはり藤倉夫人を主將とする聖市軍が三連覇をつづけている。

テニスの世界の将来

現在邦人テニスマンの数は相當なものであるが、技術的にはやはり藤倉、呉屋の両選手が抜ん出ており、これに追隨するものは見當らない。藤倉は前逃の如く現役から引退して、ひとりサントスの呉屋仁選手が現役として聖市庭球界のランキングでA級第八位を占め活躍している。も少し上背があればと惜しまれるが、藤倉のテニスに見るすどい頭腦的なテニス技術で、なお将来が囑望される。それに続くものに級に田中、小田などがあるが、少年にも村上兄弟などがあります。『第二の藤倉』を目指している。奥地方面でもテニスはますます普及發達しているので将来如何なる新人が出現するかも知れない。

四、コロニア水泳史

世界水上界へ君臨し、ロスアンゼルス、ベルリンのオリンピック大会でかゞやかしい戦績を残して「水上日本」の名を轟かした日本人が、こゝブラジル四十年の在伯同胞移民史で誰一人 伯国水上界にその名をとゞめなかったのは不可思議ともいえることである。しかしブラジル水上界を今日あらしめたのは日本人であることはわれわれの誇るべきことであろう。それは斎藤ギ洋と現在もなお伯国水上界の名コーチとして有名な佐藤貫一あるがためである。

斎藤ギ洋は日本水上界の草分けであり、日本水上界を世界的な存在として功労者であつたが、乞はれて伯国海軍チームのコーチとなつて来伯した。それは昭和の初期であつた。當時水準の頗る低くかつたブラジルの水上界も氏のコーチで著しく進歩し、南米水上界に君臨し、国際的にも進出することゝなつたのである。「ギヨー・サイトー」の名は今日でもブラジル水上の歴史の一頁を飾っている。そのキツカケを作つた遊佐、葉屋の選手の来伯も大きい功績をのこした。伯国各地のプールで示した「日本水泳の真随」はわれわれの眼底にまだのこされている。佐藤貫一はコーチとして、黙々と十年一日の如く、ブラジル水上界のために盡して来た。最近の伯字紙は今更佐藤の撓ざる伯国水上界への貢献を賞揚している。彼がコーチした伯国水上界の第一選手の数は数えることが出来ない程多い。彼の功績こそ不朽のものであろう。

ひるがえつて、わがコロニヤの水上界を見ると、過去においては殆んど見るべきものはない。水泳のクラブのような組織も ホンノ名ばかりのものはあつたが、対抗試合または大会を開く ほどにはどれも発展しなかつた。最近ようやくマリリヤのヤラ倶楽部の如く、中堅選手が殆んど日系伯人の水上倶楽部が出現した。ヤラ倶楽部所属の岡本選手、澤尾選手などブラジル水上界の第一線に躍り出て来た。特に岡本選手

は本年南米水上大会に伯国選手として出場、四百米自由型に三位となり、大いに二世として邦人コロニアのために気を吐いた。その他日系伯人の水上界の進出はすざましいものがある（以上スポーツ史園田新）

五、コロニアの剣道

第一回移民笠戸丸が印度洋航海中、上甲板に天幕を張った。日光直射とスコールをさける為めであつた。その天幕下の甲板で、移民群の中から腕に覚えの剣士が現はれ、船所属の剣術道具をかり出し、撃剣を始めた。

最初は素人同士の竹刀の叩き合いであつたが、段々と玄人が現われ総勢八組からの勝敗が演ぜられた。最優強者は愛媛移民の芳我徳太郎であつた。彼は愛媛警察署の剣道師範で武徳会二段の猛者であり、笠戸丸中唯一の竹刀持渡伯者は芳我徳太郎であつた。日本移民が生活に迫はれている間は、武芸は表面化して演ぜられなかつたが、生活に迫はれているながらも相撲や手拭で頬被りの踊や、三味線の爪弾き、浄瑠璃等の演芸は武芸よりも早く各地移民間の生活上に演ぜられていた。笠戸丸農業移民中に、武士崩れが尠なかつた証左でもあらう。

剣道は柔道より幾多の道具を要する複雑性をもつ。それを直ちに満し得ぬ環境の在伯日本移住地では、剣道は柔道より餘程おくれた。

剣術道具が日本から伯国日本人社会に輸入されたのは、伯国柔剣道連盟設立以前の僅かに数ヶ所で同好の士が互に野外稽古し合っている程度にすぎなかつた。

一通り幾組かの道具もとのい、道場も出来て、常時稽古の可能となつたのは聖市に於て聖州義塾が創めて、一九二八年頃からであつた。小林美登利が師範した。

次いで海興農事實習場のエメボイに於て稽古が始まつた。一

九三一年であつた。

連盟の設立に前後した頃、菊地英二（五段）櫻田松磨（三段）両剣士は、在聖邦人学園に剣道科を設けて、青少年に剣道の訓練を開始していた。道場は父兄会、聖州義塾、サン・フランシスコ学園等であつた。

これ等道場の数年間に切磋練磨の技芸精進は、剣道有段者を数名出す進境に到っていた。

伯国柔剣道連盟は一九三三年六月、日本移民渡伯廿五周年記念祭を期し創立された。當時在勤の聖市総領事館副領事海本徹雄が会長に薦された。第一回役員に矢崎節夫、明穂梅吉、村上龍助、大河内辰夫、河合武夫等がなつた。駐伯大使林久次郎、聖市総領事内山岩太郎を名譽會員に薦した。

伯国柔剣道連盟結成の趣旨は「我々が本連盟を組織した真の目的は、我が在伯同胞に対し、所謂国民的精神を作興し、日本民放のもつ資實剛健の精神と強靱不撓の体力を養成し、智徳を涵養振作して所謂我が民族の有する特典性を發揮し、我々先人開拓の地盤を確保し、協力一致、我が民族の隆昌と伯国の繁栄に資し、共存共栄の實を挙げることを切望する為め、之が目的を達成するには我々伝統的武道を練磨し、我々第一世並に第二世の精神的並に肉体的弛緩を防止するが最も徑捷であると確信する結果に外ならないのであります」……と柔剣道連盟の発刊せる誌「武徳」に述べてある。

一九三三年六月十八日、連盟発会式を終るや、聖市カルモ街の労働会館に於て第一回全伯武道大会を開催した。大会出場者は約三十名。この中有段者は五名であつた。団体の対抗試合でなく、参加選手を二分して紅白試合を行った。偶人試合も行つた。個人優勝試合も行つた。

當時の段外者の部は、一級組大塚、川原、平久井、岡部、山口、二級組中村、田草川、大西、藤田、堀口、大河原、三級組楮畑、国武、河田、溝口、四級組牧野、安藤、武田であつた。無敵猛者に平野、堀込、照沼が居た。

有段者の部は、初段組、源、渡邊、佐藤、勅使河原、加藤、

小掠、二段橋本、三段楼田、村上、四段坂田、五段菊地英二。第一回武道大会試合の審査により、連盟公認段級昇進者は次の如くであった。

二段―渡邊至剛、佐藤武雄。初段―平久井準。一級―田草川兵馬。二級―楮畑正義、照沼朝男。三級―村田逸穂。

以来、毎年聖市に於て或は奥地に於て武道大会は催された。世界二次大戦前最終大会には出場猛者百数十名に達していた。各地団体数も十数組に到っていたが、大戦勃発と共に一切は中止されてしまった。

一九四二年一月卅日夜八時、聖市治安維持警察の命により、聖市常磐ホテル広間に於て伯国柔剣道連盟は解散式をあげた。

當時剣道の三段者以上は左の如く居た。

五段―菊地英二、三段―櫻田松磨、高泉直人、大久保正明、青木祐夫、佐々木茂夫、橋本俊次。

連盟は解散しても柔道は伯人社会の闘技界に突進して柔術の奥技を発揚しつゝあるも、剣道は伯人社会の闘技界に突進していない處に剣道の時代的色彩が国際的闘技となり得ぬ憾をのこしている。

六、伯国柔道史

舊日伯新聞社長三浦鑿が一九〇九年、伯国の海軍練習艦ベシジャン・コンスタンチノ号に便乗してリオ首府に来た。彼は艦の航海中の將兵に柔道の手ほどきした處から、リオ首府着後海兵団の柔道教師に傭はれ生活した。

リオ首府の或る競技場で黒人と闘技した際、三浦は黒人のカポエラ技（蹴撃）に顔面を叩かれ、それ以来三浦は海兵団の柔道教師をやめ二度と斯道を語らなかつた。

一九〇二年北米に渡つた前田光世六段は、其の地にあつた伊藤徳五郎七段、佐竹信四郎五段、大野秋太郎五段等と提携

して欧州へ渡り、各国の巨人と闘技した。後中米に巡業し、一時キューバに本拠をおいて柔道宜伝をやった。

メキシコでは三千弗の賭勝敗をやり、茲で前田はコンデ・コマの闘技爵名を受けた。時維れ一九〇八年、伯国に日本家族移時第一回が移り来た頃であつた。

彼等は南米西岸を巡り、亜留然丁国より伯国に入り、サントス港に上陸したのは、一九一六年、世界第一次戦最中であつた。聖市に於て彼等は仕合した。カンビナス市、アララクアラ市、ウベラーバ市等の興行仕合をやった。拳闘に自信をもつ佐々木三段が一行に加はっていた。

當時、聖市で前田六段の「手解」をうけたのは家具商の末吉熊太郎であつた。

彼等一行はアマゾナス州へ行き、北米へ戻り、日本へ帰つた前田光世が、再渡伯してアマゾナス州へ居を構えたのは一九二〇年である。一九二五年伯国運動競技仕合に出演後前田は頽齡を自覺して競技界を去り、パラ州のペレン市に餘生を送り、日本移民の北伯開拓に參與していたが、一九三九年同市で歿した。前田は早相田大学柔道部出身であつた。

前田六段が北伯へ再渡伯した年の一九二〇年、南伯には移民船に乗つて西郷隆治六段がサンパウロ市に来ていた。

聖市ではコンデ街又はブリガデイロ・ルキス・アントニオ街の日本人会館で指南していた。當時八重野松男初段、笹田正数初段、瀧澤仁三郎一級が六段を取巻いていた。

欧州終戦の頃とて日本移民の数も尠なく経済的にも苦難の折から西郷は華々しき存在にも到らず伯国を去った。彼は大西郷隆盛の孫であつた。体軀からも面影からも祖父に酷似せるものがあり「柔道は奇麗にやれ」これが西郷六段のモットーであつた。

中央線モヂ市郊外に於ける坂田輝夫五段が聖州日本人柔道界にクローズ・アップし来たのは一九二七年頃であつた。

彼は剣道も四段であつた。水泳も初段であつた。柔道は「寝業」が卓越していた。

その頃柔道界に芳田善作四段、内藤克俊三段（武道使節来伯の際五段に昇級した）石尾貞雄、多田広司両二段、市毛兵五郎、澤田清両初段、迫田三代治其他少壮血気の多士濟々であつたが坂田五段には皆揉みたくられていた。

斯の坂田五段、内藤三段を中心に稽古された柔道部が、数年後結成されて伯国柔道連盟を組織するに至った。一九三二年、母国は満州事変で、民族自決の精神文明を昂揚し出していた。



（写真―後列左から佐竹信四郎五段・前田光世六段・伊藤徳五郎七段・前列左 佐々木三段）

在伯日本移民の柔剣道界も活気づいて、聯盟組織のためわ趣意書を印刷し大衆に配った。その趣意書の一節に「惟うに民族の繁栄は主として国民精神の作興に俟つ所多く、我々在外の日本人の民放的使命は一に懸つて資實剛健の精神と強韌

不撓の体力を養成すると共に、智徳を涵養振作して我が民放の特異性を發揮し之を永遠に持続せしむるにあり。而して之が契機をなすもの只我が伝統的武道を修練するにあるのみ。比の精神に基き下記名等茲に柔剣道聯盟を組織し、普く斯道愛好の士と共に一致協力、我が民族の隆昌に資し因て以て共存共栄の實を揚げんと欲す。奮って御賛同あらんことを乞ふ。

昭和七年九月の事で、發起者の名は「河合武夫、小林美登利、村上寵助、内藤克俊、大河内辰夫、坂田輝夫、海本徹雄、芳田善作」以上八名であつた。

斯くて翌年一九三三年六月十八日、聖市カルモ街の労働会館に於て聯盟組織の発会式並に第一回武道大会を開催した。海本副領事が会長であつた。仕合では甲乙両軍に分けて行はれた。

當時の大会出席仕合有級段者は左の人々であつた。

四級組―福家、三級組―青柳、アンゼロ、道本、山口、井浦、岩本、岩根、商畠、藤井、岡川、梶谷、西谷、オリベイラ、御前、二級組―蟻坂、乙石、一級組―宮田、林、初段―小野田、山口、長澤、館野、神山、二段 石尾、澤田、谷、深谷、参段―内藤、石原、四段―芳田善作、五段―大河内辰夫。

同年七月十六日伯国柔剣道聯盟中央線モヂ・ダス・クルゼス支部が設立され、同月廿七日発会式と武道大会をモヂ市で挙行した。これが柔剣道聯盟支部の設けられた創めであつた。その後各地方へ支部が設けられた。

マリリア、ガルサ、バストス、グアイサラ、ビリグイ、サント・カタリナ、オ ندا・ベルデ、オリンピア、パラグアスー、アニマス、バウル―、第二文尊、カフェーランジャ、アリアンサ、リンス等々であつた。

聯盟事務は福川薩然がとり、会計は坂元靖が選ばれた。

聖市日本総領事たりし内山岩太郎が後年佛蘭西大使館参事官より駐亜留然丁国日本公使へ転任した。内山公使は亜国に

武道使節を日本から招請した。講道館の小谷澄之七段、佐藤忠吾六段の両人が亜国訪問帰途、日本移民地の伯国聖市にも来訪した一九三九年八月のことである。

サン・パウロ市に於てはチエテのアトレチカ倶楽部競技場で鮮かな技能をみせた。奥地はバストにマリリア市に、リンス市に、バウル市に、モヂ・ダス・クルーゼス、サントス等を巡りデモンストレーションをやった。

聖市では特に警察本部での請に應じて宣伝能技を觀せた。

首府リオを訪うた柔道使節は伯国海軍省では君が代奏楽裡に海軍大臣の出迎をうけた。海軍練習場でデモンストレーションをやった。伯国陸軍省でも同じく歓迎された。

首府一般大衆にも中央メルカードの競技場にて一回宣伝演技をやった。フルミネンセ会員丈けの宣伝演技もあつた。

武道使節の小谷が満鉄の柔道師範であつたので、満鉄総裁は小谷に托して海軍大臣に日本刀を贈つたもこの時であつた。

伯国柔道聯盟は伯国に五百コントスの工費を予算して武徳殿建設を劃した。一九三九年頃のこと、リマ・フイゲレード中佐を建設伯人側委員とし、宮坂国人を建設委員長に挙げていたが画餅に帰した。

一九三三年聯盟結成以来一九四〇年迄、武道大会を催すこと九回、この間、時には薙刀も鎖鎌も銃剣術も演せられていた。

一九四二年一月卅日夜八時、聖直治宜碓蹄警察の命により聖市常盤ホテル広間に於て伯国柔剣道聯盟は解散式をあげた。日米戦勃発、米伯親善外交が日伯国交を断絶させたからであつた。武道聯盟の有段者等は講道館の掟訓を厳守し、柔道を興行化して演ずることは禁じた。職業化も恐れていたが、武道聯盟に加入しない有段者で闘技丹能で柔道を職行化した人々もある。

聖市に於て大森某は講道館の初段者であつたが彼は柔道を興行化して、伯人の拳闘団や、自由闘技士等と組んで各地を

巡業した。彼はミナス州に於て一九三七年頃病歿した。矢野は、講道館出身の有段者ではなかったが、三段級の技量を持ち、体格大と闘技の丹能は職業選手として立派なものを備えていたので茲七、八年間伯国闘技に華々しい存在である。

彼は最初リオ首府に於て伯国海兵団の教師に傭はれていたがそれ丈けでは満足出来ず興行界に投じた。彼は熊本出身者で、柔道は封建時代より肥後に傳はる矢野流の有段者である。

矢野の外に伯国柔道の職業選士で華々しい存在は小野兄弟である。彼も講道館出身ではなく、日本で金光道場の闘士であつた。渡伯の當時は一級組で、一時武道聯盟の一員であつたが、それでは満足も得ない闘技と闘志の所有者で、聯盟を辞し、職業化し町道場を開設した。

数年前に技量は四段を金光道場より授かっているが逆の闘技と闘志の点に於て伯人闘士に恐れられている。聖市中央目抜の建物マルチネリー館内に道場を開き伯人男女に柔道を指南している。

矢野、小野兄弟の如き職業選士の存在によつて伯人一般大衆に、柔道が如何なるものかを宣伝した。

聖市ピネーロ区に道場を持つ富川富興三段の柔道指南も、柔道界の一つの存在である。彼は講道館出身で、聯盟武道の一員であつた。去る年リオ首府に於て伯人とのコンビ闘技界に入ったが、興行化するに足らずビネイロの道場を守つて、青年へ指南している。

マリリヤ市へ一時道場を開いたは芳田善作四段であつたが、武道聯盟の一員として終始、一九三九年帰国した。

聖市トマス・リマ街に柔道指南をしている小川龍造師範も聖市日本人柔道界の道場の一つである。

武道聯盟華やかなりし時代、伯人青年の猛者が三人出来た。

マリーオ・ミランダ、ズルバール、カストロ・シルヴァーでアルテノ・マルチンスである。

ズルバール及マルチンスは一九四一年初段であつたが、現在には二段に昇段した猛者である。

リオ首府に講道館初段（一九三九年頃）のエリオ・グラシ兄弟が居て、道場を開いていた。

一九三一年アラスツバ市に於て鯖松四段が坂田四段と闘技仕合をした一挿話があつた。東洋棉花株式会社伯国代理人たりし島清二郎も講道館柔道三段であつた。

江越辨一三段はパラナ州に去り、佐藤新二段はセントラル線に樋口庄次郎二段とモヂ駅奥に道場を開いている。

聖市には伯国柔剣道聯盟の幹部の一人であつた大河内辰夫五段がいる。彼は二十歳にして講道館四段に昇段した江戸子であつた。札幌農大の出身で、北米に渡り高峰讓治の薬化学研究所に入り、薬化学者となり伯国に移り来た。伯国柔道界の大御所的存在である。

吉間重一三段、三浦貞二段、松本幸志二段、赤尾龍三二段等々が聖市に、終戦後の聯盟再組織に待機している。

柔道職業選手側の幸やかさに比し、聯盟解散後、そのメンバーたりし人々には寂寞たる姿だが、終戦後深谷清節三段は聖市のインスチチュート・ジャグアリーベの柔道師範として、聯盟解散後の柔道界を代表した存在である。

斯くして、武道は日本民族の精神修養の伝統的特技だとの啓蒙時代が過ぎて、国際的闘技となっている。特に深谷道場の師範代を勤めているマルチンス三段は近々日本の講道館に留学する見込みで、これによつて日伯間の柔道の交流は促進するものと見られている。

七、相撲について

恐らく相撲はスポーツとして最も古いかも知れない。日本の国技であるし、道具も入らず、日本人が少し寄れば裸一貫でいくらでも出来るからだ。しかしこれが組織的な相撲大会

という形式をそなえたのは在伯邦人間にそう古いことではない。平野植民地の創設十年祭に同植民地小学校運動場で石井、新開攝津灘などの大関格が相撲をやり大関力士は最後にとらず仕舞いになった。コロニヤの相撲は勤進元があり日本の職業相撲の様な形式で発達し所謂源氏名を持つ職業的力士が観客本位の技を闘わす傾向があつた。ビリグ牛日本人コロニヤに、昇嶽関力士があらわれ、一九二八年プロミツソン植民地の創設十年祭にノロエステ全線の力士が相撲つた後、愈全伯相撲大会と各乗をあげたのは一九三五年で、聖市アクリマソン公園に土俵を築いてやった。勤進元が矢張り花を頂威し、後にゴタゴタが起きて以後舊勸進元排斥となり、其後相撲は一部地方で熱を上げていた。

終戦後相撲界の復活がマリリアにあつた。その後各地でも氣勢を上げた。聖市アクリマソンに於て州知事アデマールの名を政治化して相撲大会を催したのは一九四七年であつた。

その後相撲指導者間に相撲を眞のスポーツ化すべく企てられ各線に相撲連盟なるものが出来、これが全伯相撲連盟を形成して、その主催で行つた本年のマリリアに於ける相撲大会、これがスポーツとしてのコロニヤの相撲大会の創始である。

日本の国技としての相撲は将来発展性を有するが如く、コロニヤの相撲も将来発展のコースにのつてゐる。（園田新）

第六章 在伯邦人の 宗教史

一、邦人カトリック教史会

布教のはじまり

ドイツ人ロレンソ・フワバウエル神父は一九一九年中央線ピンダ駅の主任司祭の要求でサプカイアにあつた東山農場監督の安田の許で、邦人の宗教方面の世話をし始めた。一九二一年にコルプツーラの小聖堂で邦人の一団に最初の洗禮を授けた。又日本より公教要理其の他の宗教書を取寄せ邦人の教化に努めた。師は邦語を知らない誰もが経験する意志の疎通の困難さとそれから来る布教の難かしさを痛切に感じ、リオ駐在の教皇使節を通じて邦人司祭を日本から迎える運動を始めた。その希望が叶つて一九二三年中村神父が来伯した。ロレンソ師は一九二七年ゴヤスに轉任してからは直接邦人の布教にたづさわらなかつたが、一九四四年帰天する迄常に邦人に対する宣教の志を忘れなかつた。

ロレンソ師の肝いりで来伯した中村神父は一八九七年長崎で司祭に叙品され、二十五年間大島に在つて布教し、當時既に六十才に垂んとする老体であつたが、着伯後も十六年間に亘り聖州を始めパラナ、ゴヤス、マト・グロツソをミサ聖祭用具の入つた重いトランクを前と後にかつぎ年中休みなく巡回しをことこそ並々ならない努力であつた。一九四〇年三月十四日、ア・マツシヤドで帰天した時は七十六才、同師の手により洗禮を授つた邦人は千三百十人を数える。

イエズス会

日伯兩人間に最も知られている司祭は何といつてもギード・デル・トーロ師であろう。宜教師の大方がドイツ人であるに反して師は伊太利人である。同師の日本人布教はエルシリア・アントニーニという女の子が日本人の子供を十四人ジョン・メンドス広場にある聖ゴンサーロ教会え連れて行つたのに端緒を開いている。それは一九二六年の四月十八日であつた。その年の十一月十五日には聖市の名士を代父代母として招持し、四八名に封する洗禮式が挙行された。今聖市の市會議員として活躍している田村幸重弁護士も此所に受洗した。デル・トーロ師を助け、布教事業にたづさわつた伝道士に村山、前田、児玉、中島、川尻等が居る。かくして事業が愈々本格的になり、それを支持繼續して行くには、自分丈で充分でない事を悟つたデル・トーロ神父は、会の総長に願つて助力を仰いだ。総長はカロリン群島で布教に従事していた。日本語に通ずるスペイン人グアスケ神父を助手として派遣された。一九二八年六月着伯。グアスケ師の滞在は種々の事情で短期間であつたが、その間同師はサントス港に到着する移民や聖市の移民収容所で配排を待つて居る邦人や、聖市郊外モルビーの人々を相手に伝道に勵んだ。

その次に渡伯した宜教師は独乙人のエミリオ・キルヘル神父で、日本の広島や岡山に於ける七年間の経験をたずさえてやつて来た。一九二八年八月新しい希望に燃えてサントスに着いた彼は旺盛な活動家である事を直ちに見せ、聖市の近郊からカンピーナス、ノロ沿線やマトグロツソのカンポ・グラнде迄彼の感化が延びて行つた。中村長八師の根城であつたプロミツソンのゴンザガにも行き、そこがノロ線やパ延長線の中心地に近くカトリック信者の大きな集団地であるのを見て、他の神父方と相談し、中村神父はソロ線、モヂアナ線、キルヘル師はパ延長線とノロ線を受持つ様大体意見がまとま

り、前者はア・マツシャード、後者はゴンザガに移ったのが一九二九年の初めであつた。キルヘル師の次に来伯したのが彼と同国人で同年輩で修練も修学も日本えの宣教も殆んど同時期のアウグスチーノ・ウツチ神父であつた。同師は南天河州のドイツ人集団地を二回も訪れて基金を募集し手づから左官の仕事もしノロエステ沿線稀に見る壮盟にして優雅な聖堂をゴンザガに建てた。キルヘル師は北パラナのロンドリーナから余り遠くないアラポンガスから十五キロ米の地点に「信愛」と名の打った主としてカトリック信者の団体からなる豊饒な植民地を開いた。信者の家族は百ヶ族足らずで此の世の土地と信仰の畑を耕すに孜々としてうまない。

一九四八年キルヘル師はトーラ神父を伴い、柿森修学士を先達とし、戦後の荒んでいる人々の心を宣教するため日本に帰った。イエズス会の司祭が此處二十年間在伯邦人に授けた洗禮は四千前後である。



(写真―中村長八神父)

神 言 会

南聖海岸地帯の産業の中心地レヂストロは其昔邦人最初の植民地として知られている海興イグアツペ植民地の枢軸である。二十五年前當時の植民地経営者たる海外興業が主体となり、植民者及土地の有力者等が一体となりレヂストロ市街地にカトリック教会聖堂建立の議が起り遠く母国からも寄附を

仰ぎ一九二八年その竣工を見た。初代主任司祭として神言会のアロイジオ・ローゼン神父が赴任して来た。同師はデル・トーロが同会の管区長に懇請した結果少し前に着伯して居たのである。ローゼン師は一九一〇年独乙から日本に渡り、金澤、新潟、秋田等に十七年間を過し、漢語の知識は日本人を凌ぐものがある。着任早々ローゼン師の活動は目覚ましいもので、一九三二年末には既に六百余名の邦人受洗者があつた。此の伝道を助けた者に宇賀山、伊藤の兩人がある。同神父の活躍範囲はサントスーージュキア線一帯、イグアツペ郡、シリリカ郡に亘つての巡回であつた。

一九三五年には山口、岡山に八年を送つたギリエルメ神父を迎え邦人の布教運動は一段と活発になった。其後布教区域も拡張され、ギリエルメ師は目下聖市郊外のピエダーデの町に拠を構え同郡内及びソロカバ方面の巡回布教に従事し、ローゼン師は七十才に近い老躯を以てまだ矍鑠として南聖地方の伝道に余念がない。同神父の蒔いた種の一つは立派な収穫をとげて一九四八年日本に渡り大きな活躍の準備をしている大沼正雄神父その人である。

戦争直前に来伯したゲマインダ神父は戦争中邦人の為に殆んど何も出来なかつたが、稀に見る事業肌の人である。組織的な頭脳と迫力の強い人格と交際の巧みな活動家の彼は、日本で姉妹会などの大きな運動をやつていたので軍部関係の人々ににらまれ海外追放の憂目に会つた。戦後聖市タツアペにある教会に宣教中央会の本部を置き、大々的な布教運動を始めようと下準備して居た時、総長より日本へ帰る命令を受け、大沼神父と昨年帰国した。

フ ラ ン シ ス コ 会

聖市でデル・トーロ師、レヂストロでローゼン神父が邦人の布教に従つて居た頃、パラナ州クリチーバ市では、當時の

大司教の求めによりフランシスコ会のフロリアノ神父は郊外に居る約三〇家族の邦人のために布教を始めた。一九二九年フランシスコ会の管区長はデル・トーロ神父、キルヘル神父の勧めによって邦人に対する布教事業を始めることに定めた。クリチーバやペトロポリスの若い神学生達は日本語を勉強しつゝ教理を教えて居た。

一九三六年末にマルチニョ神父が日本から来伯、翌年二月から聖市の邦人に対する伝道事業を始めてから同会の布教は格に入って来た。翌年には独乙から風来坊のような、それについて社会事業家のポニファシオ神父が到着、一九三九年には石橋を叩いて渡るような凡帳面で又剽軽な明るさを持つ日本語の達者なヴィジリオ神父が日本から、一九四一年にグラシアーノ、ジウスチエアーノの両神父がやはり日本から渡伯、かくして布教事業は一段と積極的に探められた。聖市のフランスコ修道院に中心を置いて、市の内外の布教運動、病人や貧窮者の世話、リベロン・ブレット司教区、北パラナ一帯、ソロ線、パウリスタ線、中央線等広範圍に亘つての伝道事業が着々とすゝめられ、現在迄三千を超える受洗者を出して居る。キルヘル師が創立した信愛植民地も彼等に委任されその指導を受ける様になり、ヴィルジリオ神父の奔走によって公教要理、祈祷書、其の他のカトリック書が出版され伝道を非常に助けた。マルチニョ師が十年の苦闘で完成させた伝道婦会も布教事業に偉大な効果を挙げている。

教 育 事 業

イ エ ズ ス 会

聖市イピランガ博物館の近くに白亜の三階建の校舎が見られる。これがデル・トーロ師の二十有余年の汗の結晶たる聖フランシスコ学園である。師は宣教師としての反面又教育事業家として優れた才腕を持っている。一九二八年リベルダー

デ街で十四人の生徒ではじめ、戦争中日本人関係の此種の学校が全部閉鎖されたにも拘らず此の学園丈暴風雨に耐えて存続して来た。

ヴィセンチ・アゼヴエド博士の特志でイピランガに敷地を求めてから新校舎の建築にかゝり、一九三〇年末そこへ移轉した初代校長は青木新刀で、氏が一九三二年増築資金調達のため日本へ遣わされた時その後直つたのが天内俊隆である。一方女子部の設置に奔走し一九三四年ガルヴォン・ブエノ街で開校の運びとなり一九四二年タマンダレ街の大きな校舎に移つて現在に至つて居る。男子部は多い時に二百五十名、女子部は中心地に近い関係から四百名を超える生徒を収容したもので、両方合せて今までに二千人以上の卒業生を出している。

一九四三年から中央に近いトマス・デ・リーマ街に不二裁縫女学校を開き、百五十名の卒業生を社会に送り出している。

教育事業の一つとして見逃せないものは宣教せんとする人々の言葉と風俗習慣を完全に会得した多くの司祭や修道士の養成である。デル・トーロ珈はつとに比の方面の努力を怠らなかつた。現在イエズス会で伯国に於て司祭の位に挙げられた者が三名ある。札幌出身で同市のフランシスコ会の神父から受洗し、一九三三年渡伯した武内重雄神父、東京から一九二六年に来伯した佐々木馨神父、本年聖師フランシスコ・シヤビエイル日本渡来四百年記念祭の地として振っている山口の出、川崎桃太神父。聖フ学園に学んだ事のある近藤政神父は一九四五年司祭に叙品され、現在リンスの神学校で教職をとっている。尚イエズス会には神学生、哲学生、文科生、修練生として勉学と修道にいそしんでいる者が十九名、予備中学校に学んでいる者が二四名、小神学生が九名。

修道女は種々の会を合せて五〇名を超えている。イピランガに本院を有する「汚なき御胎の小さき姉妹会」のみで二二名の邦人を数え、トレメソベに大きな機械農場を経営し而か

もその農場内に小聖堂迄建立した篤信家鐘ヶ江久之助の娘マリエッタも比の会に属している。福川薩然の娘ローザがモヂのカルメル会で終期誓願を立てたのは一九四八年である。こうした修道女の過半数はデル・トーロ師の手塩にかゝつてゐる。

神言会

神言会は主として宣教に盡力している。一九三四年レヂストロに聖フランシスコ・シヤビエルの名で学校を開き、聖霊会の修道女に委任し、現在は家政学校も合せ百人余りの生徒を収容している。

フランシスコ会

マルチニヨ神父は着伯早々伯国の広大さとその中に散らばっている邦人の布教は司祭の手では不充分極まるもので此の時こそ歴史の教皇と唱えられるカトリック運動を實地に行つて見ようと考へついたのが伝道婦学校の創設である。サン・パウロ市の郊外で風光の明美なタイパスで大きな伝道学校と修道院を建築した。一九三六年に伝道婦会を設け、活動本意の新しい精神を取入れた会であるため、一時は四面楚歌の聲を聞く反対に会い苦闘に苦闘を続けて漸くその基礎を堅めこれから躍進という時期になつてゐる。現在九名の伝道婦、八人の志願者を数える。会長は飯海イザベル、顧問は相川アグネス、同地にある家政学校長は米山ジャシクタ、修練長は牛出セラフィナ。

修道士は四人、その中二人は伝道士として働き、フレイ・ミゲール田子森は邦人信者の顔なじみである。神学生は十名以上 家政学校は既に百五〇人の卒業生を出して居り、生徒は年々増加して行く。

フランシスコ会は日本人間唯一の中学校を一九四四年からバストスにはじめ、既に二四人の第一回卒業生が出て居る。生徒は百五〇人内外、その中九〇パーセントは邦人の子弟である。此の学校創立に奮闘した神父は、今ヴィルジリオ神父と日本え行く準備しているフレイ・シスト。初代校長がフレイ・カビストラノ、現校長はフレイ・アポロニオ。本年度から日本語料を設けて一般から大きな歓迎を受けている。

同地の家政学校は一九四二年に開設され、初代校長は相川アグネス、鳥羽ミケリーナがそのあとを引受け、多数の邦人子女を養成している。

慈 善 事 業

第二の大戦が始まって聖市の前移民収容所の建物に日本人がスパイなどの嫌疑を受けて未決囚として収容される数が多くなって来た。

一九四二年五月、宮腰千葉太が他の多くの人々の希望を代表して困った人々を助ける会をつくる様に渡邊マルガリダと相談をまとめ、彼が顧問となった。専務の役を引受けたのが渡邊マルガリダ、外交役が石原、会計が高橋勝。時のサン・パウロ大司教に願って、官憲から許可を出して貰い、大司教直属の慈善事業として発足する事になった。これが救済会である。

活動開始後はボンファシオ神父が世話役をやり、収監されている者への差入れから、貧窮に喘ぐ者、病人や年老いて頼る者のない人々の世話や孤児の保護、一時はサントスやコンデ街から立退きを強要されて経済的にそれができない人々迄手助けしたり並大抵の仕事ではなかった。

第二の慈善事業として今邦人間に同情を集めているものに、デル・トーロ神父が一九四三年に始めた聖市タマンダレ街の邦人子女に対する孤児院がある。現在二〇名の六才から

十六才迄の父のない子、母のない子、両親のない子が収容されて居る。管理はデル・トーロ師であるが實際の世話をしているのは「汚なき御胎の小さき姉妹会」の童貞方で吉田、木場田の二人の邦人修道女もその中に働いて居る。

(以上武内重雄神父)



(写真―山田千鶴)

一九四七年正月、聖市在住の第二世嬢山田千鶴(二十八才、聖市女子師範卒)は妹の結婚問題が起り、母は封建婦徳からして姉の千鶴に結婚先決を強要した。千鶴は人知れぬ失恋のやさき、世をはかなみ、處女の生涯を神に捧げんと決意し、聖市の修道院 *Apostolos de Sao Paulo* に馳せ込んだ。それから一年精進業認められ、彼女は翌年四月十五日抜んでられてカトリコ本山ローマに送られ、本山直属の聖パウロ使徒修道院に修業する。日系伯處女としてのローマ修道院人は彼女が初代であつた。修道後の彼女は祖国日本へと約束されている。

二、聖公会沿革略史

伯国に於ける聖公会は三主體より伝道されて今日に及んでいる。(一) 英国聖公会 (二) 米国聖公会 (三) 日本聖公会であつて、前二者は精神的交通はあつても教会維持及経済干

係に於ては全く独自である。第三者―日本聖公会よりの伝道事業は米国聖公会の伝道事業に合流して、茲にブラジル聖公会の一股體日本人伝道区となっている。

（一）英国聖公会派

同派々遺の一宣教師は一八一九年八月十日リオ港内の砂濱に自然岩を積んで聖壇となし、当時駐在の英国人中の少数聖公会信徒の爲に聖餐式を執行した。由来教会の聖典は継続一世紀を経過した。由緒深い同聖壇の基督教会白亜の聖堂は同市目抜の伯国議事堂と相對峙している。礼拝堂の尖塔は行路の人心に人生の歸趨を指すかの如く永遠なる天の一角を示し、南米新教各派中の最古の歴史を物語っている。同派のサン・パウロ市の教会堂はサン・パウロ鐵道敷設前に建設され主に英国民間の司牧伝道に任じた。一九二三年十一月廿五日同礼拝堂に於て日本人伝道区結成礼拝式は同数会牧師マレー・ジョンス長老司式、伊藤八十二宣教師補式の許に執行された教会である。

（二）米国聖公会派

同派の伯国伝道は英派より約半世紀遅れて、一八八九年初春米国ヴァヂエア紳学校卒發生ジェームス・モリス博士、ルシエン・リー・キンソルビング（第一代主教）二宣教師の派遣に發端している。二宣教師の渡伯された年は伯国帝政は崩潰して共和政体への大革変があり、宗教上の一切の束縛は撤去され奉教自由令が宣布された機会ごあった。二宣教師は英紙堂公会既設宣教地なるリオ市、サン・パウロ市への開始を礼儀上遠慮して南リオ・グランデ州リオ・グランデ港に宣教を開始した。海外からの宣教目標は其他の国民的教会設立である。この主張に基いて土着人聖職の養成と相まつて伝道目的は達せられる。星霜後の半世紀間の宣教は結実發展して、南三州より堂州、リオ市に迄伝道は拡大された。現在三主教中の一名は伯人であり日下四五聖職、信徒総数一万六千余名、礼拝堂七五、協会財産約一万余コントス。近く南北中の三教区分割案が実施せらるゝ迄に發展した。初代二宣教師の

理想とした国民的教会設立の主張は此処に到つて達成せられる。

(三二) 日本聖公会派 日本聖公会の伯国伝道進出は日本人移住者間を通して第二世日系伯人と土着伯人間に実施した。一九一九年三月、日本聖公会神学院卒業生の伊藤八十二は伯国日本移植地伝道の命を蒙り単身北米に渡航足掛け五ヶ年間に亘つて在米同胞間に實際生活を共にし将来の南米伝道法策を體待した。一九二三年三月北米より渡伯、同年三月十二日聖市ルア・ボニータ街十一番上地旅館の一室に投宿の夜七時来合せた力行会員七名と宣教開始の祈禱会を催した。この礼拝式をもつて聖公会日本人伝道区の発端第一頁となす。海外伝道の第一人者聖徒パウロは「我は努めて他人の置いたる基礎のうへに建てじと、末だ基督の御名の稱へられぬ処にのみ福音を宣伝へたり(ロマ書十五—二〇)」との開拓精神に燃上された。伊藤宣教師の伝道事業は全く彼独自の働であり、年間四方余キロメートルの行脚伝道にて在伯同胞間の全植民地に足跡を印した。其後英米日伯四聖公会は其働らきの効果を認め普公教会に抱擁せられる事と成り、米国派ブラジル聖公会日本人伝道区として健全發達を見せ今日に及んだ彼の渡伯宣教は在伯同胞社会の缺けたるを補つた。

昨年度日本人伝道区一般統計表Ⅱ(一)聖職数—七名(二)礼拝堂—九(三)伝道地—三十七(四)洗礼者信徒総数—一千六百五十余名(五)信徒按手音数—八百五十余名(六)一ヶ年献金高—二百六十余コントス也(七)教会財産—約一千余コントスとなつていた。(以上伊藤八十二牧師)伊藤牧師は左の六長老の成長に努力した。

長老島貫武男

一九二六年献身し、ブラジル聖公会神学校(南大河川ポルトアレグレ市在)に入学した。(彼も移り来た一青年、日本力行会創立者島貫兵太夫の一子)卒業後、ノロエステ線ビツグ中駅奥ビラック町に聖マタイ教会堂建設に、コレヂオ、聖マタイ創設に努力した。教会堂は十五メートルの二十七メー

トルの殿堂であつた。彼は又駅の反対側奥、ブレジオ・アレグレに、カペラ聖ルカを建てた（7×15）サントポリスにカペラ、聖ヤコブ（10×10）を建てた。

長老磯清

渡伯青年機清は一九二五年、献身して日本に帰り、一九二七年迄日本堂公会神学院別科に勉学し、卒業後一九二九年再渡伯した。レヂストロ植民地の諸聖徒教会牧師に任命され、一九四一年迄奉職した。その後一九四六年迄、パウリスタ線マリ、アミツリンに勤務し、一九四七年より現在は一ブリグキ駅のビラツキ町聖マタイ教会に奉職している。

長老小野謙蔵

移り来た青年の一人であつたが、一九二九年献身し日本に帰り、日本聖公会九州福岡神学校に入学、卒業後再渡伯、リンス駅奥ゴヤンベ町の昇天教会を建設して今日に及んでいる。

長老弓場繁

渡伯した青年弓場繁も一九二七年より献身、ブラジル聖公会神学校（南天河州の）に入学、卒業後、チエテ植民地ペレイラバレット町に聖アンドレ教会を建設した。彼は又、アリアンサ植民地第一区に聖マルコ教会を建設し、伝道している。

長老金子勇治

一九三七年献身して南天河州の聖公会神学校に入学、卒業後北パラナのロンドリーナ市の聖ルカ教会勤務して伝道している。

長老貝沼詔平

一九四〇年献身した。南天河州ポルト・アレグレの伯国聖公会神学校に入学、卒業後神学校所在州のバゼ市聖公会の伯人数命に勤務伝道している。

若かき長老連の努力建設した各地の寺院も、長老連と共に古色蒼然となりつゝある。

三、ブラジル・ホーリネス教会

南米東岸の開拓に従事する日本移民の精神的生活に寄与したいと、日本ホーリネス教会牧師物部赴夫が来伯サントス港に上陸したのは一九二五年七月十五日であつた。

物部は上陸後数日にして宣教の旗に発つた。モヂアナ線を経て、ミナス州、アラ、クアラ、ドラデンセ、パウリスタ、ノロエステ、ソロカバナ、パラナ及南聖の各地方へと伝道の足を運んだ。

その後田村耕二牧師来伯し、物部牧師と協力し宣伝した。一九二九年五月、日本より中田重治ホーリネス教会監督が伯国巡教に渡り来た。

同監督に従つて来たのが湯浅十郎牧師であつた。茲にホーリネス、サン・パウロ部が機構された。一九二九年六月一日であつた。

開拓伝道の途上、物部牧師は腎を病み一九三〇年七月五日聖市に歿した。

日本ホーリネス教会「サン・パウロ部」は機構上日本の同本部監督下にあつたが、一九三四年七月七日、日本母教会より独立した。

一九三五年一月、聖市にサン・パウロ日本人ホーリネス教会第一回総会を開き、合則を制定した。以後「ブラジル・ホーリネス教会」と称する事となつた。

委員制を採用し（委員会を設けて監督職を行ふ）毎年年会を催はし、満三年毎に総会を開くことにした。初代委員長は川村 新二牧師、二代委員長は湯浅十郎牧師であつた。

一九三九年五月の臨時総会より委員会を廃し、監督局を設置した。田名網七五三吉牧師が初代監督に選出された。以後再選され、今日に至っている。

一九三四年の教会独立に到る迄は、日本母教会婦人会が後援献金伝道していたが、独立後は在伯信徒有志の献金にて凡

てを聯じている。一九四八年度全国総献金額は二三八、七八九\$三五仙であつた。

本教会は一九三七年十二月二十二日附内国宗教団体法団法人の登録認可をうけ、独立宗教団体である。

本教団の現中心活動は田名網七五三吉牧師、同加代子、湯浅十郎牧師、同静子、田村秀郷牧師、同てるよ、山崎長文、同栄 吉長彌久治、同芳子、南保義勝、同文子、作間一雄、同紀久子菊地孟夫、同文子、山本博康、同ひろ、光井定治郎、ジ・カンタリン、ジ・エヴァンセリスク、梶原千枝子、他に男女献身修養生が数名。

伝道地は全州及隣州に及び、要地に教会並びに宣教ポイントを設け伝道している。

正会員約四百名、他に会友、志道者、婦人会、青年会、少女年少女一千名、日曜学校を設け伝道している。出版部も設けている。

物部赴夫の来伯前年、田名網、中川両家族は来伯していた。

ホーリネス教会員の最初の人々であつた。彼等はコロノ生活の裸に宣教の尖兵を自任し献身した。物部牧師の死に直面した田名網七五三吉青年は発心し、日本へ帰り、牧師学を卒へて再渡伯、ブラジル、ホーリネス教会の独立と伝道に邁進している。

(田名網七五三吉)

四、自由メソジスト教会

日本の自由メソジスト教会より、在伯日本移民への伝道に西住正義が来伯したのは一九二八年六月八日であつた。

彼は最初ノロエステ線カフエランディア駅の渡邊一捷写真館にいて伝道を創めていた。

数年後翌市郊外モロンビーに伝道の居を移し、傍ら子弟教育に邁進した。

一九三六年十一月一日、聖市コンデ・デ・サルゼーダス街の村上眞市郎邸にて、伯国自由メソヂスト教会を設立し、西住牧師を主任として、藤田好太郎、林博之、山田忠松、小野田守外信者と共に記念礼拝を行った。

一九三八年十二月二十四日、日本より清水誠一牧師が来伯しサン・パウロ教会に着任した。

一九三九年八月二十一日、日本より小野助一牧師が来伯し、サント・アマールに入植して、伝道をやり、傍ら子弟教育に従事した。

同派の北米宣教師H・バーラ・L・デーモ女史が来伯して、自由メソヂストの伝道宣教に熱を加えた。

一九四六年六月十二日であつたが、その同月二十六日、西任牧師は右肩胛骨に神経痛を超していたので、自宅よりビーラ・マリアナの一日本人按摩師に治療へ通う途中、交通輪禍の爲め急歿した。彼は常時教会はサン・ジョアキン街一八二番にあり傍ら子弟教養に従事していたが、この指導者の後任に清水誠一郎牧師が就任した。

自由メソヂスト教会の伯人部教会主任にジョゼ・エメレシアーノ牧師が一九四六年八月よりビーラ・マリアンナ区に伝道を開始した。

一九四八年一月四日には内田金造牧師（メソヂスト神学校卒業）がジャンヂーラ教会に赴任した。彼は重に聖市郊外の伝道に邁進している。

同年八月二十八日には、ジャンカー宣教師夫妻が来伯、宣教し始めた。

斯くて自由メソヂスト教派も、伝道の本格的域に進展して来たので、一九四八年九月五日、聖市ダス・ローザ街四四九番地に、伯人部教会堂の竣立を劃し、献堂式を奉行した。

作間泰典牧師（メソヂスト神学校卒業）は聖州奥地の伝道を劃し、一九四年末より、パウリスタ線マリ、ア市に宣教を始めた。

この外、林博之副牧師は聖市アベニーダ七月十一日、五百九番の日本人部で清水牧師と協同宣教している。

モヂアナ線クラブ・ニヨ駅サンタ・ルジア耕地の教会に主任として伝道の熱を上げているのが瀧谷末一牧師である。

五、救世軍日本人部

救世軍はメソジスト教会より分裂して組織し、階級は英国軍隊の制度を用いた。田中三次は熊本に生れ日本救世軍士官学校に学び、二ヶ年救霊事業に邁進し、一九三二年農業移民として渡伯モヂアナ線にコロノ生活をした。一九三六年一家を挙げて出聖、リオ市で三ヶ月間伯人伝道に従事した。リオ市には若井淳二中尉（現中校）小松みつ中尉（現在小兒科醫）の二士官が伯人伝道に邁進していた。同年九月日本人部開戦の任命を受け田中大尉一家は聖市に転任し暁星学園講堂にて第一回の集会を営み井上里子（秋山夫人）秋山宏清、津汲武久、藤萃喜美（可兒夫人）が入信した。

ピネイロス区エジソン・ジイアス街一番地に会館を借り日本人部を創立しピネイロス小隊と名称した。ガルボン・ブエノ街の鹽谷印刷所に分隊を開き、中島政子（ジャボチカバルにて裁縫学校総営）廣岡、内山、其の他数名の入信者があつた。婦人達は家庭団を組織し料理、生花、衛生、マッサージの講習会を開いた。邦文にて機関紙（ときのことゝ）を五百部（月一回）発行し訪問伝道に用いた。年二回の基金運動は政府より許可され信者一同が参加した。日本人部の社会事業の一部は病人（貧困者の入院手続）貧困者の救済、就職斡旋、身の上相談、奥地より職を求めて出聖せし家族には会館を開放し宿泊せしめた。

一九三九年五月、可兒八郎を小隊助手に迎へ、田中大尉は十二月司令官、聯隊長の通訳官としてマリリヤ、ポンペイヤに旅行、帰聖後病勢悪化、若井大尉を後任に迎へて、一九四十年一月サン・ジョーゼ・ドス・カンポス市のサマリター

ナ療養所に入所したが再起能はず六月一日療養所にて病歿した。八月、田中婦美以大尉（故的中大尉夫人）は小隊長に任命され、藤萃喜美中尉と共に日本人部で活躍、田中婦美以大尉は奥地旗行後健康勝れず、藤萃善美大尉を後任に、望月妙子を小隊助手に迎へて日本人部は前進をつづけた。日本人部創立以来の信者は百九十五名、他教食より転籍せし信者七名、日本より渡伯せし信者十四五家族、独身者十四五名、北米よりの信者五家族であつた。伯国救世軍士官学校に入校せる者、津汲武久、藤平喜美、可兒八郎、若井公平の四名、日本救世軍士官学校に入校せし者望月みち（現大阪にて救世軍政会事業部の婦人救済に活躍）一名であつた。日米戦争勃発するや、日本人部ピネイロス小隊には集会禁止命令下り、一九四二年二月三日閉鎖するに至つた。

（田中婦美以）

六、仏 教 の 部

法華宗 伯国に日本家族移民を送つた祖人水野龍は本門法華宗徒の一会あつた。彼は毎暁、南無妙法蓮華經を唱え。故人となつた彼の親縁知友の俗名を、死亡年月順に読上げ念仏するのが彼の日課法悦境であつた。在伯二十年余、移民に封しては日蓮法華宗の宣伝は一切せなかつた。唯我法悦境の人であつた。

一九二四年、彼はパラナ州首府クリチーバ郊外に隠棲していたが、一九三六年八月ポンタ・グロツソ市近くに土佐村を創設した植民地に物的援助を母国拓務省に請願すべしと一九四一年帰国した。八十三歳であつた。九十歳の今日尚ほ郷里土佐に南無妙法蓮華經を毎暁唱えている。

仏立講 第一回笠戸丸東京移民に佛立講信徒茨木友次郎一家族がいた。彼は日本から養蚕の蚕棚枠十重と、その敷藁まで添えて船に持ち込んだ移民であつた。彼は一度日本に

帰ったが、再渡伯後、法華宗の宣伝を在伯日本移民に開始した。彼の宗派は仏立講であつた。信仰簡単で、布教力は強烈、鼓を叩いて異体同心の実行を重んずる宗派である。これに動かされ仏立講伯国元寺を建立したのが、ノロエステ線リンス市郊外ウニオン植民地入口の珈琲耕主香川移民の松原米次であつた。(一九二六年) 以来茨木は布教に熱烈、各級に布教分講寺四ツを建てた。

ソロカバナ線プ・プルデンテ市に、クアタ町に、セントラル線はモヂ市に、タウバテ市に。

仏立講の役員に松原を始め原伊八、佐々木廓吉、向井捷次郎、溝口益太郎、黒石清作、堀越正春、佐々木嵩、瀧本進、山田豊一、松田巖、大槻正幸、西山豊等が居て布教に活躍している。

宗誌「法華」を発行することになっていた。
茨木は薙髪して「現樹」と称していた。

真宗

本派本願寺の布教使生駒真澄は一九二八年四十才の時来伯した。イグアツペ植民地に移り住み、そこに「慈光会」を起して真宗の布教を始めた。約十五年間、リペイラ河畔に信徒一千近くをえた。一九四三年出聖して聖市方面を布教した。一九四八年七月、翌市郊外ジャバクアラの谷に本願寺説教所を建立し、寺としての資格を、京都の本山に申請中である。

茲に布教員佐々木岩五郎、織田圭爾、八十山凡水がいる。法悦会を設けて「法悦」誌を会員に配っている。

二十人の会員が一地方にまとまればそこに支部を設けた。現在九カ所、モヂ市、スザノ駅町、フレゲヂャ・ド・オー町に、ジユケリ町に、イタペチニンガにタピライに、ア・マツシャードに、ポンペアに、北巴のアサイ町に支部がある。又眞宗派布教としてノロエステ線カフェーランジャ駅平野植民地に寺を建てた。此界限宗徒は「寺」と称しているが、布教

所の一つで最初伊藤助一が毎月一回法話を附近に巡行してより（一九二七年頃）後、仏大出身の福波英貞が寺式に発展した。福波辞退後伊藤助一が又布教に勤めていたが、現在は井上白道（仏大川身）が布教し、在伯日本移民界に布教躍進を始めている。

真言宗（高野山大師教会伯国支部）

榛葉平九郎は移民として来伯、一九三九年「仏教ビスポ」の認許をリオ首府宗教局よりうけ、高野山大師教会伯国支部を聖市郊外ジャヴァクアラ街道に設け、御堂建設に精進布教している。仏壇に十字架も加へ、仏教基督合同宣伝しているものと認められ「仏教ビスポ」の位を許されたものである。法名を榛葉隆昶（リウ・ショウ）と唱える。

生長の家の宣伝

在伯日本移民の思想界に谷口雅春の「生長の家」の教義が相当読まれ宣伝されている。これは宗教と観べきでないとの観点からして相当読まれていると言ふ事にとゞめる。

七、天理教会布教

一九二九年、チエテ移住地に入植した和歌山移民大竹忠次郎及妻千代は日本からの天理教徒であつた。一九三二年、チエテ移住地を去つてバウル市に出た。

一九三六年日本から経済使節団が来伯した。その使節の一人に天理教信徒岩井尊人が居た。大竹と岩井とは日本に於ける信徒関係からして、岩井の布教憑憑により大竹は本格的に布教使となり活躍し始めた。

一時バウル附近に於ても二千人からの信徒を得た。そこに伯国本部の社建設をした。用材はパラナ州よりパラナ松材を直送して本殿を建てた。

教食はプロミツソンに、ペンナポリス、アバニアンダーバ、チエテ、ベラクルーズ、ツパン、マリリヤ、トレス・バール等日本天理教本部より公認されている。ロンドリーナやアサイ等の会員に青年会、女子青年会へも呼びかけ布教している。

サンパウロ教会の創立

一九二四年九月七日の伯国独立記念日に、小林美登利外十名の青年がサンタ・アンナの丘上に祈り、サン・パウロ教会設立を宣言した。小林美登利は北米東岸の其督教会より来伯したのが一九二二年であつた。彼が創立した聖州義塾は聖市ガルボンブエノ街にあつた。そこに一時教会本部を置いていたが、一九三一年、日本より専任の青木牧師夫妻を迎えたので、小林塾主の兼任を解き、一九三二年六月、教会を義塾より分離した。

一九三四年サン・パウロ教会を南米教会と改称した。青木牧師を中心に伝道を進展したが、同牧師の病没と共に無牧師となり、今日に及んでいる。

第七章 日本移民の衛生

一、航海中及上陸迄の衛生

明治四十一年笠戸丸より大正六年迄は移民船の輸送衛生状態は至極無事であつたが、大正七年四月廿五日千八百名余を積んで神戸出帆の若狭丸は、船上脊髄脳膜炎患者続発した。門司とシンガポール間で消毒予防に盡したが、六十名の死者を出した。シンガポール発航以後は新患者なく、衛生成績よく、サントス入港の際は何等問題なく上陸した。

翌大正八年一月廿一日神戸発博多丸は、航海中四名の脳脊髄膜炎患者発生した。それと三月十七日サントス港到着の時、小児に麻疹患者が多かつた。これでブラジル海港検査官は厳密な検疫を執行し、同船をイリヤ・グランデ検疫所に廻航させた。

患者及其家族百余名を検疫所に收容し八日間抑留し、他は上陸させた。患者抑留二ヶ月で皆耕地入したが、これが日本移民船の検疫にかゝつた始めであつた。

聯邦政府は以後亜細亞諸港より入港する船舶は、其航海中伝染病患者の有無にかゝわらず、一應必ずイリヤ・グランデ検疫所に廻航しると、移民会社代表者と船会社代表者へ通牒した。

それで次の移民船讃岐丸は指令に基き、該検疫所に三日間抑留された。患者があつた爲これも百名約二ヶ月検疫所入りして療養した。患者三十五名中、重に麻疹で他は肋膜炎、神経痛、尿道症併発各一名であつた。

時の在伯移民会社代表は狩谷三市であつたが、患者が船に

あれば致方ないが、亜細亞諸港經由の船は皆検疫所廻舵との指令は穩やかでないとし、堀口公使に圖り撤廃方交渉し、同年七月取消された。

其後移民船の航海衛生は四、五年間は至極良好であつた。その頃から伯国入移民の一般取締を衛生的にも嚴重にし出した。

一九二四年九月十三日、ブラジル農業聯盟定期週会で、會員 ジョゼ・プロコピオ・フェラスは左の提案をし賛成を得ている

日本に腦脊髓膜炎が流行してるので、ブラジル国に該病の危険を考慮し、今度日本移民の入国無期禁止に關し、ブラジル農業聯盟は中央政府に建言することを要請する。

当時日本に腦脊髓膜炎が事実流行していたので、伯国殊に聖州言論界は日本移民入伯に対して警告を發した。右の提議は九月に大統領に送られた。

その年の十二月紳戸発、翌年二月サントスに入つたマニラ丸に一名の腦脊賠膜炎患者が出たとして、サントス市避病院に收容されたが、四月退院した。同船醫は日射病と診断したものであつた。

同航移民七百四十名はサンパウロ收容所で全然隔離收容、予防注射及糞便唾液検査をうけたが、健康なものは順次配耕された。比の糞便検査で、移民に寄生虫保持者が非常に多いことが知れ、以後数船移民に州衛生局員は糞便検査をやつた。そして日本移民には寄生虫保持者が多いと確定した。當時の州衛生局長パウラ・ソーザより聖市日本総領事代理春日廓明宛書信で、某船移民の如きは寄生虫保持者実に八十五ポルセント以上に達し、其種類は十二指腸虫、回虫、條虫、東洋毛線虫、其他数種はブラジルに存在せぬ寄生虫であるとした。それはパラゴミアーズ・デイストマスの如きとされ、日本当局の注意を喚起してほしい旨を附訂した。因て日本では出移民に対し、出港滞在間、又は航海中寄生虫駆除、チプスの予防注射、コレラの予防注射（流行時は）など実施

し始めた。

一九二五年七月二十三日神戸発のマニラ丸移民は、九月十五日サントス港に着いたが、州衛生局長パウラ・ソーザは五名の醫師を伴ひ、マニラ丸移民の採糞を検鏡の結果、保菌者十名、疑はしきにより再検査した。一時移民は上陸禁止されたが十八日上陸を許された。

共年十月十日、及十二日の東京電は、東京及横浜附近にコレラ病流行を伝えていた。然るに其前九月一六日サンパウロ州農務長官ガブリエル・ドス・サントスは在聖州梅興支店長山田揚之助宛、日本にコレラ病流行原因により、別命ある迄日本移民の渡伯を禁止する旨を通告した。

山田支店長は春日総領事と協り、リオの田付大使と協議し是が対策に海興の顧問弁護士フオンテス・ジュニオールと共に解決をはかった結果、渡伯日本移民中止は州政府の補助移民に対してのみ適用となった。自費渡伯移民には関係なしで呆気なく解決する。一九二五年（大正十四年）移民衛生問題と日本移民いやがり問題とがこんがらかつて、日本移民船一回発送中止されていた。

一九二六年四月廿五日リオ港着の鎌倉丸五百八十余名の移民は、イリヤ・グランデ検度所で糞便検査をうけた。州のサントス港検疫所には大がかりの検疫費用がなかったから、リオ連邦政府の費用でやったといわれた。鎌倉移民は五日間の後無事セントラル線より聖州に送られた。この検査は他国入移民一般船にも行われ、一九二七年リオ検疫は廃せられた。

トラホーム患者が日本人移民で問題になったのは一九二五年十二月一日サントス港着のハワイ丸の一少女からであった。船醫と検疫醫の見診の相違から、検疫所長モラエス・デ・イアスの検診を請うた結果、少女の左眼にトラホームの症状顯著で上陸禁止されたが、移民会社が治療の保證して少女は上陸を許された。

その後鎌倉丸、備後丸の二船に多数のトラホーム患者が発見され、鎌倉丸患者十三人、附帯家族二十五人、計三十八人、

備後丸患者二人、附帯家族四人、計六名が上陸禁止となり送還された。鎌倉丸は一九二八年十二月神戸港発で、備後丸は一九二九年一月神戸港発の移民であった。

これは日本移民ばかりでなく、当時独逸、伊太利、シリヤ各国移民もトラホーム患者の移民は入国拒絶されていた。

一九二八年三月十七日神戸を出た移民船ハワイ丸が、シンガポールよりコロンボに向う海上でコレラ病患者が発生した。船長は船をシンガポールに引返し、同地英国官憲の防疫を受けた約一ヶ月同病やんだを確かめ出発したが、患者五十二名、死亡するもの十七名であった。サントスでもリオ港でも何等再検査なく移民は上陸した。

一九二九年以後大阪商船会社は、伯国日本移民輸送に新造船デーゼル船一萬噸級の「ぶえのす・あいれす丸」と「りお・で・じゃねいろ丸」を以てした。航海及移民衛生の上に劃期的時代を来したのである。一九三九年よりは豪華船「あるぜんちな」丸を新造し就航せしめ、姉妹豪華船「ぶらじる丸」を新造就航せしめた。続いて報国丸の豪華船が就航し移民輸送上、衛生検疫問題で因難事は海上港湾ともに起らなかった。

一九三七年（昭和十二年）りお・で・じゃねいろ丸香港碇泊中、小蒸汽船堂島丸爆破乗客中四十名の遭難者を出した。死亡者二十八名中、二十四名はブラジル行移民であった。負傷者十二名中五名も移民であった。

二、初期移民の保健と衛生

第一回移民百六十八家族がサン・パウロ州立移民収容所を出発して、六耕地に配耕された。この六耕地中の大耕地ゾウモント、サン・マルチニオ耕地、グアタパラ耕地、カナアン耕地には各完備したファルマシア（薬剤店）も、耕地お抱えの醫師も居たが、ソブラード耕地とフロレス耕地には薬剤店と薬剤師のみであった。第一回移民が耕地に於ける衛生状態は、ゾウモント耕地以外はコロノの流行病にかゝつたもの

は甚だ尠く良好であつた。ヅウモント耕地の日本移民は其年カフエ不作のため採取能率甚だあがらず、労働にやけを起し乱暴生活に一時墮したので、疫痢にかゝつたものも十数人出た。

第二回旅順丸移民二四七家族が配耕された十四耕地中、醫師と薬剤店のあつた耕地は前記第一回移民の居残つた大耕地以外他の耕地には一つもなかつた。各耕地とも幸ひコロノの衛生状態はよく、契約期間を先ず健康で過ぎた。

珈琲耕地は既開拓の地域である処から、最初の開拓者の犠牲により流行性疾病の広まらぬ限り、衛生的の環境は至極良好となつていた。移民が耕地コロノ生活を清算して新珈琲栽培請負業に従事し、或は借地自然林地開拓、植民地自然林開拓に入るに到つて、又は湿地開拓に當つて開拓衛生の知識の皆無からマレッタ菌に感染し、十二指腸虫に冒された。

マレッタ菌に冒され最も惨めな目にあつた例として、よくノロエステ線の平野植民地が挙げられるが、斯うした例は初期の開拓各地にあつた。後に東京植民地と称したパウリスタ線のリンコルン駅、モツカ駅の米作地、ノロ線のリンス奥のボア・ビスタ植民地、ソロカバナ線の第一モンリン植民地のリオ・パルト沿岸、サンタ・クルーズ・ド・リオ・ペルド沿岸棉作地帯等々マレッタ流行の惨状がある。

斯うした植民地又は開拓地の不衛生状態を導くためには醫師がほしかつた。当時伯人醫師の数も極く少く、それに自動車道は勿論、馬車道も発達してない時代の市街、耕地、植民地へ患者があり、遠方より醫師を招くにしても馬車の通はぬ処は醫師は案内人をつれて馬で十キロ、二十キロの山径を往かねばならぬ。病家に着くには半日、或は一日を要した。一往診五百ミル当時の金で支払はされる。植民、コロノの當時の恵まれぬ経済状態では醫師を招くことは耐えられぬ負担であつた。醫師も遠方へは仲々應じなかつた。日本移民来伯初期、醫師らしい者はほとんど来伯しなかつた。第一回福島移民青年高野留七は故里実家が醫家のため、見慣聞慣で素人醫

学者であり、彼はイグアツペ植民地創拓当時より入植した。日本醫師北島研三の入植後彼の下に研学代診をやる迄に到っている。

第四回移民船来伯頃より醫學、衛生に多少経験のあるインテリ級の移民が一船毎に二、三人づつ来た。聖市コンデ街に齒科醫者を内々やつていた戸田善雄は、一九一六年平野植民地のマレッタ患者の夥しき惨害後、招かれて同植民地の衛生方面に盡力した。彼は今アマゾナス州のバレンチンスで衛生方面に腕を冴えさせている。

一九一七年ビサグ牛植民地の日本人は、当時入植した佐賀移民の野口藥劑師を衛生保健の擔任者に契約して当らせていた。

一九一九年彼は植民者に洗行中のチブスにかゝり歿した。彼の後に日本人間に傭ったのが、当時ペルー国流れの小川渉醫であつた。一家族月三ミルの契約診察代であつた。

第一モンソン植民地は、聯邦政府直轄植民地だけに醫師も常任していたが、第二モンリン植民地には醫師の設備常任はなかつた。病患者が起きたら必要に應じ、第一植民地の醫師は二十数軒のカンプの砂道を馬車で駆けて第二モンリン植民地に現はれていた。二日がけであつた。

第二モンソン植民地へ二、三十家族の日本移民が入植したのは一九一六年頃からであつた。その入植者の中に長髯をたくわえた川原政右衛門は陸軍の看護長上りの人であつた。彼は同植民地に於て内外人の病患者に差別なく診察し、藥劑をフアルマシヤから買はせて應急治療の仁術を施した。周囲に醫師もない所なので、植民地当局よりも黙許されていた。「モンソン聖人」の名があつた。

ソロカバナ線の棉の名所と唄われたアヴァレー地帯には、日本移民の棉作者が夥しかつた。ペルー流れの大庵某が、アヴァレー市で日本人相手の醫院を開業した。一九二二年頃であつたが、後に当局から閉められた。

エトル・レグルー駅イタコロミ―植民地（今のプロミツソ

ン）に衛生保健の爲め上塚、鈴木両。パイオニアが呼んだのが聖市の伊藤庄吉、北米流れの按摩免許師であった。植民一家族月契約五ミルの診察料であった。一九二〇年の頃であった。その後、当駅町伯人醫との間に経緯があつて伊藤は植民地を去った。両三年後ア・マッシュヤード植民地内に診察所を開いていた。

伊藤の後に入植、保健衛生係をやったのが松谷正治である。

彼は海軍の看護班勤務の腕があつた。一九二四年頃のことだ。

一九二四年、内務省の補助金三萬六千円をえて同仁会が聖市日本総領事館の肝入で聖市日本人間に組織された。

都会には醫師、衛生保健の文化施設は揃っている。奥地の植民地こそ醫師も衛生保健の施設は急務だ。日本政府の植民者に対する下附金を聖市に死蔵するとは怪しからぬ——といきり立ち、トンガラがり出したのは、ノロエステ日本人植民のパイオニア連中であつた。上塚周平はノロエステ全線日本人に檄文を飛ばして日本病院建設の案を叫び出した。左の手紙は病院建設のため、上塚のノロエステ在留諸君御中の聖州新報に掲載した檄文である。

今度保健衛生上、どうしてもノロエステ地方に病院（日伯合辨にても）を建設仕度、就ては如何なる方法に由るべきか、各部落に於てそれぞれ御研究を願ひ置き度候。追て各部落委員御一同と一堂に会して御協議仕度存念に御座候。その期日及場所は更に広告可仕候

一九二六年五月十日

ノロエステ日本人会々長

上 塚 周 平

当時ノロエステ日本人会常任幹事香山六郎宛、上塚は左の如き書信を送っていた。

愈々笹田氏（邦醫として最初の開業醫免許者）も当地方に志あり、別紙の通りの廣告を願ひ候。そのうえにて一般委員の御出席を願ひ、萬機公論に決し、依て以て基礎的病院（小さくとも）を造り是に於て三分の一内務省下附金を総領事に御下附を願う事とし、能はずんば蹶起相対抗し、大使に談ずるとも外務省乃至内務省に小言を建言するとも此れが順序と存じ候貴意如何。宜敷御援助のうゑ右別紙広告願上候。

ノロエステ病院建設の件は、翌年の大旱魃の不況に会ひ、遂に沙汰止みとなつたが、当時聖市に同仁会の設立に封し、ノロエステ線の植民パイオニア連は反抗抗争していた。それから聖市に日本病院建設が進捗した。

聖市共済会の創立

一九三五年、聖市に日本移民の衛生補助機関として相互扶助を目的とする会員制度の共済会が創立されていた。総領事館の菱川副領事の斡旋で熊谷、梅田、羽瀬、木村、其他有志の奔走で成立したものであった。翌年より事業開始、当時加入者は二九七家族で、会費積立九コントス近くあり、母国政府補助金が年三百円内外あった。会員が病気にかゝれば診察代や薬代の実費の何割かを補助し、死んだ時は相当な葬式費を出すというのであった。同仁会治療所の補助機能的のものであったが、日本病院建設と共に解消した。

三、日本人、同仁会略史

同仁会の創立　在ブラジル日本人同仁会が、残留邦人の医療衛生機関として孤々の声をあげたのは笠戸丸移民の渡伯から十六年を経過した一九二四年（大正十三年）二月の事で、今から約廿四年の昔であつた。邦人移民四十年史後年に相当大きな役割を演じた。

一九二一年（大正十年）五月、時のサン・パウロ総領事藤

田敏郎が管内視察を遂げた際に、先づ第一に気付いたことは、邦人農業者の衛生状態が甚だ憂うべき環境の下に置かれて居る事でそれで速時これが救済の急務なるを母国政府に建言した。その建言の中には、リオ市及び聖市に医学留学生の派遣方をも含んでいた。これは葡語にて開業試験を受けなければ醫師免状を得られない関係から、留学生を当国の大学に入学せしむるのが捷径と考えた結果で、この建議は翌々廿三年十二月先ず四名の醫學士（天野幸蔵、渡邊勤、齋藤等、同和歌子の四名）留学生のリオ派遣となつて実現した。

一九二四年（大正十三年）二月に至り、本邦移民の醫療衛生の爲に年額三萬六千円の補助金が母国内務省から下附される事に決定した。これは常時の外務省にそうした予算費目がなく衛生局は内務省に属していた為め應急策である。

藤田総領事の後任齋藤和は監督官廳としての立場もあり、この補助金の使途につき、海外興業移民会社伯国支店長青柳郁太郎、外在聖市の主なる邦人の参集を求め、醫療衛生機關の設置に関し協議懇談を重ね、出席者廿九名全部を維持会員とし、茲に在ブラジル日本人同仁会なるものが設立された。二月廿七日の事であつた。社団法人として正式に伯国政府の認可を受けたのは一九二八年（昭和三年）の十月で、本格的の事業施設はこの年あたりから着手したと云つて良い。一九二五年には州中央衛生局と連絡をとつて、痘苗及びチプス予防注射薬の無償下附方をやり翌年にはブタンタン研究所と接触を保ち（当時の所長はヴィタル・ブラジル博士）日本移民が捕え送る毒蛇と蛇毒血清交換の交渉を進めた。

他方囑託醫の活動によりトラホーム検診、その他マレータフエリダー・プラヴァ等の調査研究に乗り出した。当時邦人醫師講習会なども開催した。醫師の日常が問題となつた。（醫師の日常が一人五〇〇ミル、宿泊料同仁会負担、ホテル・カールトンに投宿せる菊地円平の止宿費問題となる）。同仁会の事業たりし聖市日本病院建設の基礎となつたヴィラ・マリアーナ区の病院敷地一四、一〇〇平方米突も邦貨約七萬円

(伯貨二〇〇コントス)を投じて同廿六年十月十六日購入していた。



日本病院（別名オスビタル・サンタ・クルーズ）

初期の役員
員の顔振れは、

創立当初の同人会の初代より三代までの役

第一期役員（一九二四年）

理事長	青柳 郁太郎
専務理事	山田 揚之助
会計理事	竹本 武雄
理事	高岡 専太郎
同 事	黒石 清作

に移した。その後一九三〇年十二月事務所をガルボン・ブエーノ街七三番に移して茲に初めて独立の体裁を整ふるに至った。

今同仁会に三つの時期を劃するとせば、この新事務所を構うる迄が初期即ち第一期で、それより日本病院建設着手に至る頃迄（一九三六年四月）が中期即ち第二期に相当し、その後病院の完成を経て愈々聯邦政府の管理下に置かれる迄の約六ヶ年間ぐらいが後期即ち第三期に入るものと見て良い。而してその中期の終り頃から後期に入ってカンポス・ド・ジョルドンの肺療所設定の問題あり、更に同仁会の事業聖市日本病院建設問題が愈々具体化して来た。同仁会が年々母国政府の補助金に伐て経営されて居ると云う事が役員運動の原因を爲した。中には単なる名譽慾から、或は同仁会を内容改善等の意圖から役員就任に苦心した者もあった。かの總會委任状問題で法学士牧義朝の同仁会第七回定期總會決議無効の訴訟提起事件（一九三一年）の如きも同仁会役員制込みの意図から起ったのであった。

同仁会の財源

会の財源は母国政府の補助金と、会費収入とにまつた。当初より母国政府の補助金に依頼し過ぎたため、晩年までその習癖が抜け切れず、自治衛生機関が最後まで独立独行が出来ず、補助団体として終始した。之は尚在伯邦人の歴史が新しく、コロニアの経済実力が充実しなかったのと、この種の公共機関に封する一般移民の理解の程度が、自治的に訓練されて居ないで、兎角官辺に依頼心がすぎた。「政府からの補助金はくれるものなら貰はねば損だ」と云ふ根性を当局者も示した。補助金の上に依存しない会の経営方法に就ては、歴代の同仁会幹部が少からす苦心焦慮し、その結果、会員の増力による会費の増収が主唱され、一時会員一千名を突破した事もあったが、会費収入は滞納者が多くて大した増収は期し得なかった。又同仁会の組織を細胞化すること、既ち同仁会網

の組織化に依りて会の發展維持を企圖した案もあつたが實現を見るに至らなかつた。

創立当初三萬六千円の内務省補助金は前述の如くであるが、その当時の在伯邦人は僅かに四萬人内外に過ぎなかつた。その後政府の補助金は年により多少の増減はあつたが、一般經常費並に地方事業費（地方醫局費その他特別事業費を除いたもの）としては殆んど大した変化はなく、寧ろそれが三萬二千円となり、三萬円となり二萬九千円となり、二萬五千円となつて次第に漸減の傾向を見せて居た。在伯邦人が二十萬に達した一九三六、七年頃に於ても經常費は依然として右の程度で、決して五倍には増加しなかつた。それ所か一般經常費並に地方事業費以外の特別事業費、および地方醫局費等を加算した補助金全額でさへも五萬二千円乃至五萬八千円程度で、六萬円に達した年は稀であつた。

一方会費収入は、賛助會員寄附金（正金、商船、海興、ブラ拓、東山各年額一コント宛五コント）および一般会費約五コントスを加算しても年額十コントス内外に過ぎない。従つてその範圍に於て事業施設を余儀なくされたのだから、予算編成には苦心が伴つた。施設事業の決定に就ても會員中に異論があつて毎年の定期總會席上の空氣は異常の緊張を見せたものであつた或る時の如きは、公益団体たる同仁会の貴重な予算を役員が横暴勝手に処理するのは怪しからぬと言ふので、丁度日本俱樂部に於て役員会開催の折、憂士数名が会場に乗り込んで大いに氣勢を揚げた様な実例さへあつた。赤松総領事時代だつた。この時代は同仁会が一般邦人から可成白眼視せられた。

聖市日本病院の建設問題は同仁会創立当初既にその実規を将来に期したもので、青柳初代理事長などの意見がそうだつた。

当時大施設中央設置説と、小施設の地方分散説とが対立したのであるが、前者の意見が勝を制し、先づ中央に立派なものを建て、然る後必要に應じて徐々に地方に小規模のものを建

設してゆこうと云ふ事になった。

カン・ポス・ド・ジヨルドンの肺結核療養所は、聖市日本病院の附属と云ふ事になって居たが、この療養所の設置経営は後年の情勢に善処計画実施を見せたもので、創立当初より同仁会の事業目標となっていたもうではなかった。つまり当年に於ては邦人の肺結核患者は左程目だった存在ではなかった。その後一九三二年に於て中央線モヂ・ダス・クルーゼス附近に姉結核療養所敷地を購入はしたが、建設に至らずに終った。

開拓者の最も多く悩まされたのはマレータで、同仁会創立前後に於てはこの病気が各地方に猛威を逞うし、その犠牲となった邦人の数は確たる統計こそないが、それは相当あった。

一九二五年から翌二六年にかけて、同仁会囑託醫高岡がソロカバナ線オウリンニヨス附近、シャバンテス附近、サンタ・クルース・ド・リオ・パルド地方、北パラナ、カンバラ町附近等十数所に亘って調査した結果を見ると、訪問家族数百六十四戸の中（バルボーザ耕地および其附近約三十戸を除く）百四十四戸はマラリヤ患者を有し、僅に二十戸だけがその病害から免れていた。右百四十四戸の罹病人員は五百五十二人で、その罹病率は実に六一％余に上り、死亡数は四十四名で死亡率は七・二％を示した。尚同年五月ドラデンセ線、およびパウリスタ線を調査した結果を総合すると、調査人員一、三一九人中マラリヤ罹病者は七六〇人の多きに上り、その百分率は六六・二％を示した。如何にその流行の激烈だったかが察知された。

マラリヤに次いで開拓者を悩ましたものはライシマニオーゼアメリカナ、即ち俗称フエザーダ・ブラーヴァアで、罹病数に於てマラリヤの様に甚だしくはないが一種特色のある病気でその症状たるや外形頗ぶる醜悪な所から長い間黴毒性伝染と見做されて居た。邦人は之を森林黴毒と呼んで居た。

本病はノロエステ鐵道線の基地バウルに於て特にその罹病

率を増し、ウルセーラ・バウルの名さえもあつた。その後年と共に激減した。原始林開拓に従事する農業者がたまに悩まされた

十二指腸虫病は一般に罹病者の血色を著しく悪化する所から俗にアマレロン、又は熱帯性貧血などと呼ばれ、全国的に広く蔓延して国民の健康を破壊してゐる。邦人農業者の罹病率也非常に高い。十二指腸虫病の原因はアメリカ・ネカトールの腸粘膜寄生に伐ると言われ、之は人間が野外に用便する際、人間より土に、そして又土より人間へと循環するもので、従つてこの病疫の伝播を根本的に防止するには、伯国の田舎のように便所の一般に缺如した所では実行が甚だ困難とされて居る。

一九三一年東京帝大教授醫博高木逸磨が来伯し、邦人集団地の衛生状態を視察した際、邦人農業者に十二指腸虫病患者の非常に多い事に驚き、同仁会を通じて警告を与へた。同年八月同仁会が刊行、会員其他一般希望者に廣く配布した小冊子「健康第一」は即ちそれである。後年同仁会が計画実施した十二指腸良病撲滅這動の実績に依るも、糞便検査の結果は概して邦人農業者の六五%内外がこの病に冒されて居た。原因はつまり便所のない事と裸足の野外労働とによる伝染であつた。

ブラジルにトラホーム患者の多い事は夙に識者の間に憂慮されて居たが、邦人農業者間に於ける罹病率は特に甚だしいのであつた。渡伯移民として罹病患者は入国資格がない。後年移民輸送船の船醫や輸送監督が上陸直前の苦心対策は側の見る眼も気の毒な位であつた。本人の不安は言ふも更なりで、茲にも文化移民としての資格が云々され勝ちであつた。而して渡伯当初二%内外程度に過ぎなかつたものが、到着後数年ならずして六〇%内外に或はそれ以上に増大すると見ても、その伝染の速かなることが判る。無論それらの中には再発と見るべきもの相当あるが、概して植民地や農村部落に於て用水の不足せること、赤土の砂塵を浴びることなどが、患

者やその家族に予防知識の缺如せること、日常生活が非衛生的なことなど相俟つて益々この病気の伝播に拍車を掛ける結果となつたものと見た。

一九二六年四月、高岡、笹田両嘱託醫がノロエステ線巡廻に於て、ビリグ牛地方、ベンナ駅附近の小学児童および耕地児童等を十ヶ所に亘つて検診した結果は、平均八〇・八%と云ふ眞に恐怖すべき数字を示して居るし、更に同級グラランタン駅附近の数植民地小学児童の検診に於ては、児童総数一二八名中、一二四名の眼病者を発見して居る。罹病率正に九八%と云う驚くべき数字である。斯くの如く邦人の發展上眞に憂うべき状態が遂に同仁会のトラホーム撲滅運動の動因となつたものである内奥に居住する邦人農業者にとつて恐怖の的となつたものに腸チブスがある。伯国の様な廣大な地域では衛生当局の手が遠隔の地に偏住する農業者に造到底ゆき届かないので兎に角その當時は農村罹病者の約三〇%が死亡する割合になつていた。同仁会の衛生陣も自然これらの現実を対象として施設計画されねばならなかつた。予防衛生方面に主力を注ぐ事になつた。

四、同仁会の施設事業

パンフレット類 同仁会は、先づ予防衛生に重点を置き、衛生叢書及びパンフレットを続々と印刷発行し、衛生思想の涵養と予防普及宣伝に努めた。

育 児 法 重なる小児病の考へ方と取扱方

ドクトル 渡邊 勲著

一九二五年三月第一版

同三一年二月 増補版

同三二年六月第三版

毒蛇に関する素人向智識 ドクトル 高岡専太郎著
一九二六年四月 初版

農村に於けるチブス流行時の予防と注意
ドクトル 高岡専太郎述

一九二六年七月 初版

同三〇年一月 二版

同 十一月 三版

同三一年九月 四版

ブラジルに於ける病氣と衛生の注意

ドクトル 高岡専太郎著

一九二七年三月 初版

マレータをどうするか

ドクトル 高岡専太郎述

一九二七年七月 一版

同二九年七月 二版

同三一年七月 三版

ブラジルに於ける病氣と衛生の注意続編

醫學博士 高岡専太郎著

一九三四年六月 一版

トラホーム

醫學士・齊藤 等講述

一九二八年六月 一版

同三〇年九月 二版

同三二年五月 三版

種痘の仕方と注意

醫學博士 高岡専太郎述

一九二九年二月 一版
同三二年三月 二版
同三五年月 三版

十二指腸虫に就て

醫學士 今田 求述
一九三二年六月 一版
同三三年五月 二版

健康 第一

醫學博士 高木 逸磨述
一九三一年八月 一版

新来同胞の爲に 同 仁 会 編
一九三〇年 月 一版

衛生講話集

ドクトル高岡専太郎 ドクトル渡邊 勣 共編
一九二七年 初版

やけの辰五郎

「十二指腸虫駆除について」
醫學士 細江 静男著
一九三六年 初版

黄熱病の話 同

十二指腸虫の話 同

風邪とリユーマチス 同

赤眼の松助（トラホーム） 同

肺病征服 同

衛生醫學入門 同

痘苗及びチブス赤痢予防

創立後間もなく同仁会が着手して最後まで継続実施した事業の中に痘苗及びチブス、赤痢予防注射薬の無料配布がある。之は予防衛生の立場から公の機関である州中央衛生局とブタントン研究所とを利用したものであり同時にまた社会衛生に対する協力でもあった。(チブス予防注射薬は一九二九年以後ブタントン研究所より直接貰う様になったもので、それ以前は痘苗と同じく中央衛生局から下附を受けたものである。)

毒蛇と蛇毒血清

相互扶助の意味で同仁会が爲した事業の一つに毒蛇供給の仲介斡旋がある。之は最初ブタントン研究所の創始者で且つ蛇毒血清の発明者ヴィタル・ブラジル博士の次に同研究所々長アフラニオ・デ・アマラル博士のこの二人の学者の厚意に依る。同仁会は、同研究所と奥地邦人との仲間に立ち、邦人側よりは毒蛇その他一般蛇類並に毒蜘蛛、サソリ、蛙等を同研究所に供給せしめ、同所の研究を助け交換条件として同所より蛇毒血清、蜘蛛毒血清、その他注射器、体温計等の給付を受けたもので、之に依り毒蛇、毒蜘蛛、サソリ等の咬傷より受くる危険率を軽減経済的にも夫々應分の利益を齎らしたものであった。

ブタントン研究所で製造する蛇毒血清は三種に区別され、第一號血清はクロタリコ(Solito Anti-Crotalio)と称し、カスカベールの咬傷に、第二號血清はボトロピコ(Solito Anti-buthoropico)と称し、ジャララカ等の咬傷に、第三號血清はオフィヂコ(Solito Anti-Ophidico)と称し、上記孰れの蛇か不明の咬傷に対して有効なもので、その意味で多價血清とも称している。

この日本移民とブタントン研究所の相互補助は奥地の日本移民が蛇を喰ふ流行により研究所へ蛇や蛙を送らずなつたが

又開拓地帯には蛇の棲息数も激減したに因りうすらいだ。

巡回慰問

新たに渡伯の新来同胞が多く就働する地方は主としてモヂアナ、パウリスタ両鐵道沿線方面であるが、氣候、風土の異なる關係から一般に不安な気持で生活する者が大部分で、同仁会はそれら新来同胞を慰問し、会発行にかゝる衛生叢書類を配布して衛生知識の向上に資し、時に衛生講話を試み適切な諸薬品の給与をなし、会の趣旨をよく徹底させて廣く利用の機会を与へ、併せて一般邦人の衛生状態や耕地の衛生施設等を視察して事業の施設上の参考に供する等の爲に、一九三〇年以後毎年数回に亘つて慰問使を送つて巡回慰問に努めた。

この巡回慰問は多くの場合、リベロン・プレット海興出張所長坂元靖から銀行日程の作成その他の指導を受けたものであった。一九三一年度から一九三七年度の間に数回に亘つて試みたモヂアナ、パウリスタ、アララクワラ、ドラデンセ、サンパウロ、ゴヤス等各鐵道沿線方面の巡回慰問では、耕地生活者にトラホーム、アメーバ、赤痢、フェリーダ等の患者の非常に多い事実を終始一貫して体験せられていた。

薬品の実費取次

一九三〇年以来実施して来た薬品の実費取次は、優良確實な薬品をなるべく安価、迅速に需要者の希望に應じようとする趣旨から出発した。当国の如き醫薬品の高価な面もその需要者の大部が内奥僻陬の地に住む農業者であり、日常言い知れぬ不便を忍び、幾多の危険を冒しつゝ生活する事実に顧みて、この種の施設をした薬品其他附属醫療器具材料等七十種目に亘っていた。

家庭常備薬箱の無料又は割引配布は鐵道駅又は醫師所在地より二十キロ以上の遠隔の地に在任する邦人農家と云う建前を條件としたもので、最初の試みは一九三六年度だった。こ

の年、四百三十有余の家庭常備薬箱の無料配布を爲した。其後補助金の関係上継続実施が出来ず中絶を余儀なくされたが、一九二四年度に於て特に家庭常備薬箱配布費として邦貨三千円の外務省指定補助があつた爲、之を最も有効に活用すべく原価七十ミルの研同仁会より三十ミルを補助する事とし、四十ミルにて購入の便を与へた爲、申込條件として種々の拘束ありしに拘らず、配布開始後僅々四ヶ月にして予定数の四百箱の全部を売切り、越えて一九三五年度、一九三六年度の兩年亦それぞれ四百九十五箱、四百九十二箱の割引配附を爲し、更に一九三七年度には補助金の下附貳千円に減額されたる爲配布数の減退を余儀なくされたが、猶二百八十八箱の割引配布をなすを得、各方両で頗ぶる好評を博した。而して右の四ヶ年継続実施の配布数量は一、六百七十五箱に及び、往年無料配布をなせる四百三十箱を加算すると邦人間に行き亘れる薬箱は合計二千百五に達していた。

この家庭薬箱は大河内薬化学研究所の特製によるもので、家庭常備薬として必要な種々の薬品材料が取揃へられた。

トラホーム撲滅

同仁会トラホーム撲滅部が設置されたのは一九二九年からで、母国政府より邦貨壹萬二千円の指定補助金が下附され、本部の会計とは別個に事業を開始した。

一九二六年（大正十五年）一月下旬、田付大使一行が八五低資の要務を帯びてノロエステ線を巡視した際、全線に亘り邦人中にトラホーム患者の非常に多い事実を見、帰朝の上は之が撲滅に対する補助金下附を母国政府に献言すべきを約した。そこでノロエステ線トラホーム撲滅運動の氣運が醸成され、当時プロミツリン在任の鈴木季造が斡旋の勞を取り、一行中の赤松総領事其他同仁会高岡ドクター等の賛同を得た上、初めて第一回ノロエステ線トラホーム講習会がプロミツリンに開催され授講人員が六十余名に上り好成績を収めた。同仁会トラホーム撲滅事業は茲に端を発していると云つて良

い。

本事業はバウル地方醫局主任齊藤等ドクトルを主任とし、毎年交付さるゝ補助金の範圍に於てトラホーム撲滅講習会の開催を計画実施して来たもので、毎年主要鉄道線中講習の参集に使なる地を選び二ヶ所乃至四ヶ所に於て開催、一九三二年まで継続、トラホームの實際治療に當るべき実行生の養成に主力を注いだ。(受講生は主として小学校教師中より採用)従来齊藤主任によりてのみ爲し来れるトラホーム講習会を、他の三地方醫局主任、その他適當と認むる邦人醫師にも委嘱する事とした。一九三五年度に於てはマリリヤ、プ・プルデンテ、サントス、リンス、チエテ移住地、レデストロ植民地、アラサツバ、サンパウロの八ヶ所に於て。一九三六年度に於てはロンドリーナ、バストス移住地、アラサツバ、リンス、レヂストロ植民地、サンパウロ市及びその附近の六ヶ所に於て開催し夫々各地方共出席希望者定員を超過し、自費聴講を余儀なくせしめた程であつた。

右の中、サンパウロ市及附近の講習のみは他所と異なり、邦人醫師のみを講師とせず、伯人専門家をも加へた処に特色があり、従来の慣例を破つたものである。之は同仁会細江衛生醫師の着想並に斡旋に依つたもので、要はなるべく講習内容を充実して構習生に満足を興うると共に、他面在伯邦人がトラホーム撲滅運動に協力しつゝある事を伯国当局者に示さんが爲で、その關係から特に州衛生局並にサンパウロ醫科大學当局の援助を仰ぐに至つたもので、前者よりはヴァレンチノ・デ・ネーロ、トラコーマ檢察官が、後者よりは解剖学教授オドリコ・マッシャード博士が夫々講師として協力された。

この講習会に於ては従来僅々四日に過ぎざりし講習期間を一躍二ヶ月に延長し、更に講師として州衛生局より前記ヴァレンチノ檢察官の外トラコーマ局長ウンベルト・バスカレ及びトラコーマ技師アデ・パウロの二人を、又醫科大学側よりは、オドリコ教授の外、更に病理学教授ミニョーネの協力を

仰ぎ、同仁会側よりは細江技師の外、小野誠衛生技師も参加した。聖市より三名、バストス、リンス、マリリア、レヂストロ、ルツサンビーラより各一名都合八名の講習生に対し授講した。

十二指腸虫病撲滅

この撲滅運動に着手したのは一九三三年の後半期で、バウル地方醫局主任斎藤を主任とし、湊谷定之助を検査員として、運動を続ける事になった。この事業は検便、投薬、衛生講話、この三本建で、一九三三年度には、バウル附近及びパウリスタ延長線方面に於ける主なる邦人集団地の検便を爲し、検査人員二、八八九名の中卵保有者一、四八八名、その保有率平均六四%四を示し、一九三四年度にはソロカバナ線に於ける五十有余の邦人植民地並に主なる駅所在地に於て五、九〇九名の検査を爲し、卵保有者三、八三八名、その保有率五六%を示し、更に一九三五年度には、北パラナ線方面、ソロカバナ線、アヴァレー及びアグードス地方、ジュキア線イタリリ方面、中央線モデダス・クルーズス附近、ドラデンセ線ノーヴァ・エウローパ駅附近並にノロエステ線プロミツリン駅附近に於ける邦人植民地耕地、集団部落等約七十ヶ所に在住する邦人農業者総計五、八八三名に就き検便せる結果、十二指腸虫卵保有者三、七八三名その平均保有率実に六四%四を示し、昨年、一昨年のそれと殆ど同率で、これら三ヶ年の検査生成績より見ても如何にこの病がその猛威を逞しうしつゝあるかゞ知られた。

この一九三五年度に於ける十二指腸虫病検査は、その範圍比較的多方面に亘り、一見この病気の蔓延状態を知るに便なるを以って左にその検査結果を表示する。

十二指腸虫病検査一覽表（一九三五年度施行）

検査施行地方	同上集団地数	検査人員	卵保有者	保有率
北。バラナ地方	一二	九七五	五三四	五五%八
ソロカバナ線アヴァレー附近	一五一	〇八九	七七七	七一%三
同アグードス及バウルー附近	七	七〇七	五〇一	七〇%八
ジュキア線イタリリー附近	七	九一四	六五八	七二%〇
中央線モヂ・ダス・クルーゼス附近	七	五四七	三〇八	五六%四
ドラデンセ線ノヴァ・エウローパ附近	八	七〇四	四二一	六二%〇
ノロエステ線プロミツリン附近	一三九	七五	五八四	五九%八
總計	六九	五、八八三	三、七八三	六四%四

更に一九三七年度に於て、同仁会が教育普及会と協力、聖市及びその附近、バウルー、マリリア、カンバラ、ロンドリーナの五地方に於て、直接同仁会衛生技師、技手及看護婦を派遣し、邦人小学児童の検便を施行した結果に依ると、總計八十七校、その児童数三、八四二名の中、腸内寄生虫卵保有者二、三二九名にしてその保有率六三%二、而もその大多数は十二指腸卵であつて、聖市大正小学校の二五%九を最低とし、全平均率に於て五七%而も百%の保有率を示せるもの五校に上つて居た。

地方醫局 同仁会直属の地方医局が開設されたのは一九三〇年の八月で、最初バウルー、リンスの二ヶ所であり、前者には第一回留学醫醫學士斉藤等が、後者には第三回留学醫醫學士今田求が夫々醫局主任として就任した。一九三二年七月に至り更にサントス及びプレシデンテ・プルデンテの二ヶ所に新設を見た。サントスには同留学醫醫學士武田義信か、プ・プルデンテには同じく留学醫内田利藤次が就任した。

各醫局には年々醫局費（維持費）並に巡回診療に対する外務省の補助があり、之は年と共に次第に減額され、又醫局に依つてその額に相違があつた。

カンポス・ド・ジヨルドンに予算外事業として臨時肺患者

収容所を設置経営することになったので、地方巡回班費の一部と地方醫局の巡回診療費の一部と地方巡回診療費の一部を節約之に充当した。

而して一九三七年度（昭和十二年）に於ては、醫局維持費補助はサントス醫局分一、二〇〇円のみとなった。

夜間診療所

夜間診療所は一九三一年三月初めて開設を見た健康相談所（無料診察、疾病及衛生上の相談、サンタ・カーザ入院の手續及び斡旋、糞便無料検査等）に代り、一九三五年四月十五日より本会事務所内に開設を見たもので、月、水、金の三日を内科、小児科、精神科とし、火、木、土の三日を外科、産科、婦人科とし、前者はサンタ・カーザ病院勤務ドートル・ジョゼー・ペードロ・デ・アレトが、後者はサンパウロ医科大学外科手術学研究室主任にして同じくサンタ・カーザ病院に勤務せるドートル・ジョゼ・マリア・デ・フレーツタスが担任し、之に邦人助手並に看護婦を配し、細江衛生技師が之を司べ且つ相談役とし、日曜、祭日を除き、毎日午後七時より九時迄開所診察に従事した。従前の健康相談所と異なり、夜間診察なるが爲に、市内居住者は勿論、地方より出聖せし人々の爲に便益を与へた。年度末迄の取扱ひ患者数七三七名（内、男性間七九、女性二五八）に達していた

翌年八月中旬、同仁会事務所をガルボン・ブエノ街よりシルヴェーラ・マルチンス街二七六番に移すに及んで、夜間診療所は愈々繁盛を極むるに至り、一九三六年度の患者取扱ひ数は一〇六二名（内、男子六九九、女手三六三）に上り昨年度に比し四四%の増加である。

一九三八年十二月、同仁会は事務所を新装の日本病院内に移し夜間診療所を十一月末限り閉鎖した。全部無料の奉仕治療を受け来った患者に取って夜間治療所は惜しまれた存在であつた

肺結核療養所

一九三四年頃より、著るしく同仁会の苦悩を増したのは肺結核患者の出聖 激増であつた。従来と雖も邦人中肺患者は相当に多く、療養所の設備を欠く同仁会は常に之が処置に悩まされ、姑息乍らも当りサンタ・カーザの如き慈善病院、その他の施療院等に入院せしめ、辛じて当面を糊塗した。

その後肺患者の出聖は激増する一方で、それ等の患者が直接に救済方を同仁会に嘆願し、或は総領事館に出頭して救護を哀願する等の始末で、正に在伯邦人の衛生戦線異状あるを思はしむるものがあつた。そこで同仁会は、一九三五年度予算外事業として地方巡回群及地方醫局費の一部を之に当て、カンポス・ド・ジヨルドンの地に極めて小規模な臨時肺患者收容所を設置七月より之が経営を開いたものである。

偶々一九三五年十二月五日、同仁会理事石黒清作、福川薩然の二名、市毛総領事に随行、衛生技師細江静男の案内でカンポス・ド・ジヨルドン肺療養所建設地視察の途に就いた。之は曩に臨時同仁会理事長の職に在つた菱川副領事が大河内専務及び細江衛生技師と共に同地を視察した際、肺療養所建設に好過せるハアルケールス余の室地を発見し、それが図らずも聯邦外務大臣ドートル・マセド・ソアーレスの所有地であり、而も無償下附を受くる望みが多分にある事を確めたので、速時市毛総領事は在リオ大使館内山参事官を煩はし、マセド・ソアーレスに対し無償下附方の交渉を依頼しその快諾を得たことに源を発している。

同仁会では古谷重綱理事長が急遽リオに出府、マセド・リアーレスとの間に無償交付を受くる正式手続きを了し、帰聖直後の十二月十二日、聖市第一公證人役場に於て福川理事、杉山翻訳人、山崎主事の三名立会の上、右土地の贈与證書に同仁会代表として署名、同仁会の所有に帰する事になった。

同地には多数の公私設サナトリオの設置さるゝ外、デイスペンサリオと称する施療診察所もあり、療養所建設地区と市

街地及び別荘地とは截然区別され、前記臨時師患者収容所の外、一九二初年度後年期以来家賃の半額補助を爲し来つた療友会と称する邦人自治団体も比の地に在り、その当時、四十名内外の肺患者が共同療養を爲しつゝあつたものである。

そこで、同仁会は翌年早々、前記の土地に聖市日本病院附属と云う名目で愈々肺結核療養所を建設する事に決し、直営の下に工事を進むる事とし、之を建築技師鈴木威に依嘱した。

療養所は技師報酬を除き建築工事費として総計約二百三十一コントスを要した。

患者は、有料と施療との二種に分ち、予算の関係上年度内は有料患者三十名、施療患者は僅か二名に止め、次年度より有料施療共に収容人員を増加した。一九三八年度末即ち三月卅一日現在の患者数は、男子四十一名、女子十八名、計五十九名で全部有料患者のみであつた。

(山崎芳蔵)

五、日本病院の建設と経営

我等の日本病院をサン・パウロ市に建設する事は、同仁会創立当初から既に事業目標の第一に数えられて居たが、一九二六年十月病院敷地を購入したという以外に特に建設運動を具体化する程の機運には達しなかった。それは敷地購入の直前、即ち一九二六年六月、時の同仁会専務理事高岡専太郎が総領事赤松祐之に提出した日本病院建設並に経営案の如き(その建設費邦貨六十万円、伯貨換算一千八百コントス)又その後京都帝大教授で嘗て当地に来遊したことのある戸田正三博士が、同仁会の依頼に應じて作製せる建築費総額三十万円の設計案の如き、つまり幾多の建設計画や運動はあつたが、之を實現せしむる機運に至つて居なかつた。

期成同盟会準備委員会定礎式 一九三一年七月内山岩太

郎が総領事として着任を見るに及び、從來兎角沈滞に傾いていた日本病院建設運動が俄かに活発となった。内山は徒らに他に頼らず先ず自分自身よりと云う考えで、在伯全同胞をして病院建設に不断の関心を持たせる事の緊切なるを感じた。その結果内山総領事を發起人とする「聖市日本病院建設期成同盟会」なるものを組織した。期成同盟会の特色は一種の貯蓄箱とも見るべき期成箱の設置配布である。内山総領事は先ず私財を以て期成箱百個（後に更に六十個追加作成）を作成し、之を各地よりの申込希望者に應じ廣く配布して建設資金の集蒐を計り、他日適當の時機に於て之を同仁会に交付する事にした。この期成箱設定の計画は假令一枚の瓦でも持ち寄つてと云う極く低い所に目標を置いた爲に各地に反響を呼び意外に効を奏した。

同仁会亦一九三二年五月の定期總會に於て、永久施設費百四十六コントスを日本病院建設資金に充當積立ての決議を爲し、更に三三年一月内山総領事主催にかゝる第一回邦人醫師協議会の決議に基づき「日本病院建設準備委員会」の設置を見た。斯く内外呼応して病院建設の機運高まり來つたので、一九三三年六月十八日邦人渡伯二十五周年祝典奉行の当日を期し、曩きに購入せる病院敷地に於て愈々定礎式を奉げた。

趣旨書と御下賜金　定礎式の直後同仁会は、曩きに設置を見た建設準備委員会の名に於て聖市日本病院建設趣意書五千部を印刷に附し、母国外務省に送り、その應援斡旋の下に廣く母国に呼びかけ建設費金作成に努むる事となつた。翌一九三四年四月天長の佳節に當り、特に日本病院建設の爲と云う御思召から、同仁会に対し金五万円の御下賜金が下りた。

設計案の作成　之より先き同仁会は、囑託醫河田明博士に依頼して病院設計案の作成を急いで居た。それは昨年趣意書と共に母国外務省へ送付した設計案に封し、外務省としての希望並に修正案が出て居たので、当地の事情をも充分考慮

し、更に外務省の修正意見をも努めて取入れると云う建前から、新たに河田博士に設計案の作成を依頼する事になった。河川博士は、一九三三年三月限り同仁会を勇退した。嘱託醫高岡博士の後任として、当時リオ市に在住せる博士に対し特に懇請就任した。河田博士は当地に於ける醫學の専門大家とも篤と相談の上、更めて病床二百の設計案を作る事になった。河田博士は病の爲卒然他界してしまった。

斯の河田設計案は中止の止むなきに至ったので、新たな設計案の作成を急ぐ事となり、種々の関係から当時リオ市に於て試験準備中の醫學士細江静男の帰聖となり新設計案の作成に掛つた。しかし種々な困難があるので、大体の原案をもつて一九三五年一月中旬サン・パウロ醫大副校長整形外科学校教授ルイスデ・レゼンデ・プエーシエ博士に全面的依頼した。同博士がサン・パウロ醫科大学建築委員会的主席であり、同醫大並に附属病院の設計図案に与り、且つ又サンタ・カーザ病院建築委員の一人で、それらの目的の爲に既に歐洲に二ケ年も留学研究を積んで、病院建築には特別造詣が深いと云う処からであつた。

四月に入り同仁会幹部鈴木技師同道、プエーシエ博士宅に会合、本館の位置、形状、その他日照、通風などの關係に就き懇談を遂げ、病院敷地の形状、高低、隣接街路等の關係より本館を敷地内の上位に建つる方が經濟的にも衛生的にも至当と云う事に決定、博士はこの決定案に従ひ、当国の衛生法規に抵触せざる範圍に於て日本趣味を加味した近代的日本病院設計案を仕上ぐる事になった。

建設委員会の設置 一方同仁会では、日本病院建設資金募集の方法に就き前後数回に亘り協議を重ねた。しかし、事寄附金に関する事であり、在留邦人の經濟力と云う点を充分考慮する必要があるので、容易に決定を見なかつたが、内山の後任市毛総領事の努力に依り三月八日（一九三五年）日本俱樂部に於て聖市日本病院建設委員会設置に就き相談会を催

うし、総領事館、海興、ブラ拓、四邦字新聞社長、蜂谷、互生会々長、並に同仁会幹部等二十名を以て聖市日本病院建設委員会發起人と見做し各位の承諾を求め、茲に漸く同委員会は正式に設置成立を見るに至った。

發起人会では病院建設に対する趣意書、会則、寄附金募集方法等に就き巨細の吟味検討を爲し、更に役員顔振れ等に就ても充分なる協議を遂げ、前記發起人は中央委員会役員たる事に決し、猶総裁に沢田駐伯大使を、内山参事官を顧問に、市毛総領事を会長に、同仁会理事長を以て中央委員長とする事及び各地方所在領事館々長を地方委員長に推薦する事、寄附金は壹千コントスを基準とする事等の決定を見た。

中央委員会役員は（×印は已に故人）

×市毛 孝三（総領事）

梅本 徹雄（副領事）

菱川 敬三（副領事）

古関 富彌（副領事）

中 野 巖（海興支店長代理）

宮坂 国人（ブラ拓専務）

翁長 助成（日本新聞社長）

香山 六郎（聖州新報社長）

黒石 清作（時報社長）

×野村忠三郎（日伯編集長）

蜂谷 専一（蜂谷商会主）

高岡専太郎（互生会々長）

大河内辰夫（同仁会専務）

加藤 好之（同第一会計）

杉本芳之助（同第二会計）

福川 薩然（同 理 事）

金城 山戸（同 監査役）

×山根 寛一（同 監査役）

細江 静男（同衛生技師）

山崎 芳蔵（同 主 事）

斯くして建設委員会設置後第一回の中央委員会を同三月十五日開催、この会合に於て曩きに作成を見た会則の再吟味を爲し更に運用規定並に会務に就き原案に従い審議を爲し、修正改正し、中央委員会に庶務會計部、企劃部、宣伝部及び會計監督部の四部を設くる事とし、委員の互選に依り夫々各部委員の決定を見、更に庶務會計部長に加藤好之、企劃部長に高岡専太郎、會計監督部長に蜂谷専一が夫々選任された。

母国政府に於ても既に同仁会の請願を容れ、日本病院建設指定補助金として金参拾万円を一九三五年（昭和十年）度以降三ヶ年間に下附する事に決定して居り、民間に於ても「聖市日本病際建設後援会」なるものゝ組織を見、外務省アメリカ局第二課内に本部を置き、会長に前首相斉藤実子爵を、副会長に徳川頼貞侯を、以下夫々委員の決定を見、大々的に寄附金募集運動に乗り出す事となった。

地方委員会 同年五月四日、サン・パウロ地方委員会の発会式が挙げられ、市内委員は四名の顔振れ決定を見（委員長菱川敬三、副委員長福川薩然）、その他の地方に於ても相前後して夫々地方委員会の設置を見るに至り、斯くして在伯全同胞に向つて日本病院建設資金募集の大運動が起さるゝ事となった。この建設資金募集運動は向後三ヶ年の継続事業とし、合計一千コントスの醵金を目標としたもので、その成果は一つに地方委員会の活動に期待された。

病院起工式 一九三六年四月五日、同仁会はヴィラ・マリアーナ所在の病院敷地に於て総裁澤田大使、内外多数名士の臨席を得て日本病院起工の式典を挙げた。

式は古谷理事長の式辞に初まり、澤田大使の祝辞、市毛総領事の葡語祝辞の外、来賓代表州衛生局長ボウジ・ヴィエーラの祝辞等あり、盛会裡に式を経った。

翌五月早々、母国外務省は工事監督として坂本信太郎技手を派遣し、建築工事は日と共に進捗し、工事の實際的方面の担当者としては鈴木威技師が既に選任され工事推進の任に

当った。

一九三七年度に入って同仁会の人事には頻々として移動があった。不幸と言へば正に不幸であつたと言へる。即ち二月十三日には過去九年有半庶務を分担して精勤を励んだ尾関興之助書記が職を退いて土肥馥が之に代って居る。七月十五日には一九三三年一月以来翁長書記長に代り事務を主宰して来た山崎主事が引退、新任の嘱託鎌田竹次郎博士に事務引継ぎを行って居る。鎌田博士は日本病院々長就任の爲遙々母国より来伯、六月五日既に着聖して居たものである。越えて一九三八年一月十四日、日本病院事務長で同仁会事務取扱嘱託の原口七郎来着し、その廿一日嘱託鎌田博士は同仁会事務を新任の原口嘱託に引継いで居る。その間僅かに六ヶ月に過ぎない。斯くの如く事務の責任者が頻々として更迭移動した事が、即かす離れず後々迄も良からぬ影響を与へた。同仁会事務陣営異状ありとの世評を耳にする様になったのもこの頃からの事で、之は又当然中央委員会の事務にも悪影響を及ぼして居る。

外務省無計画の暴露 病院建設予算は本館建設費二・二七五コントス、附帯工事七七四コントス、予備費四〇コントス、事務費一八五コントス、合計三・二七四コントス（邦貨約八十万円）であつたが、實際は四千コントスを遙かに突破してしまつて居る。之は母国から直輸の鉄材及びセメントに対する関税仕払いと（大体に無税通関は出来なかつた）建築諸材料その後の値上りの外、附帯工事費の増大等が主なる原因を爲して居る。又日本直輸の鉄材の通関手続きに意外の時間を喰ひ工事の進行に支障を来したので止むを得ず当地で購入使用した鉄材もあり、最後にその購入分丈け余分を生じたので、それを又入念にも母国へ送還した等の爲に二重の船賃及諸雑費を余儀なくされた事なども、建築予算の超過に拍車を掛けた形になつて居る。恰も無税通関を許すかの如き素振りを見せて置き乍ら、荷揚げ後の最後の瀬戸際に於て巧み

に課税決定の手を打つなど聯邦政府にも存外喰へない所があるが、併しその根本は伯国を与し易しと見て漫然と持ち込んだ外務省の手落と見る外はない。茲に外務省の独善と無計画とが暴露されて居る。

大体この鉄材及びセメントを母国から輸入する事になったのは、病院建築に使用さるゝ諸材料は当伯国に生産せられざる物若くは假令国内生産があつてもそれと品質を異にする物である以上、無税であると言ふ輸入規定から出発したもので、殊に建築用鉄材（主として鉄筋）及びセメントは母国産品が品質優良であり且つ価格も安価だと云う事、更に病院建設に対する母国政府の特別指定補助金参拾萬円の殘部と、民間の寄附金（四拾余万円）とは早晚同仁会に對して送金の必要があるので、その一部を病院建築に缺く可からざる鉄材及びセメントの購入輸送に依つて差引しようと企図したものである。併し乍ら實際サントスに陸揚された母国からの鉄材及びセメントは、伯国産品との比較査定に於て問題となり、到底無税通關覺束なき状態に立ち至つたので同仁会は今更乍ら狼狽し、古谷理事長リオに急行週日滞在、大使館側の應援助力を得て聯邦大藏省關係方面を限なく訪問、無税通關につき運動を試み目的達成に万全を期したのであつたが達に奏功を見ず、結局失敗に終つた。

之は独り建築材料だけの問題に止まらない。醫者や看護婦の場合に於ても同様の結果に陥つた。即ち遙々渡伯した鎌田博士以下竹内、木村等の醫師連が悉く正式の診察も治療も出来なかつた。看護婦までが無免状の故に正式の従業は不可能に終つた。鎌田博士は日本病院々長就任の爲三七年六月五日、既に着聖して居たが、当国の実状は無資格者の院長就任を許さなかつたので、止むを得ず副院長に転落しても渡伯の意義附けをしようとしたものであつたが、法規は如何とも爲し難く、渡伯後僅かに二年六ヶ月にして空しく帰国するに至つた。この見込違ひの局面を收拾する爲め同仁会は、当地外科醫の第一人者サンパウロ醫大教授ベネヂット・モンテ・

ネグロ博士の院長就任を乞ひ、その下に副院長として当時リンスに在住せる元サントス地方醫局主任の武田義信醫學士を配して陣容を整うるに至った。

一方在留邦人側から言へば、派遣醫師連に対する期待が大きかった丈け失望も亦大きかった。鎌田博士初め竹内、木村博士等夫々その道の専門家が何等実力を發揮する余地がなかった。

若しも外務省が事前に於て外交工作を施し、着伯後充分善所し得るよう活躍の余地を確保して置いたならば、斯うした結果にならなかつたと思う。打つべき手も充分に打たず、虫の良い結果のみを望んだ所に無理があり破綻を生んだ。

病院開院式 一九三八年の十二月、同仁会はシルヴェーラ・マルチンス街の事務所を新装の日本病院内に移し、翌年四月廿九日天長の佳節を選び日本病院落成式を挙げ、越えて四〇年九月廿四日盛大なる開院式の挙行を見た風邪の爲列席出来なかつたアデマール・デ・バーロス州執政官も特に代理を流して祝意を表した。

式はモンテネグロ院長の開会の辞に始まり、同院長の病院建設経緯報告並に病院の組織説明あり、次いで病院監督局長ドトール・クロービス氏の祝辞、松岡外相の祝電披露、桑島大使の視辞代読あり、後院長の閉会の辞に依つて開院の式を終った。

風紀問題

この開院式に先立つ事年余、即ち落成式の挙行後間なく、既に病院は一部ではあつたがその運営を見、或る程度の機能を發揮して居たのである。併し病院としての機能を充二分に發揮する爲には、醫務も事務も共に優れたる機構の下に統制ある運営を必要とする。所がそこには経営者の業務に対する不慣れと云う点以外に幾多の缺陷が伏在して居て充分なる統制を缺き、予期の能率は挙がらなかつた許りでなく、前年即ち一九三八年初頭頃から兆した業務員の風紀問題に就ては、

彼の一九三九年八月四日に於ける事務員片山国夫の経費消費自殺事件などはその一つの現はれであった。

翌年一月初旬鎌田博士は帰国の途に就いた。原口七郎は事務長の椅子を福川薩然に譲ってその二月下旬退聖帰国した。

白衣の天使事件 その後病院は日を追うて次第に円滑な運営を見る様になつたが、内部には尚未だ種々の問題が起伏して居て、経営当事者を焦慮せしめた。その外部に暴はれた問題の中、最も世人の注意を惹いたのは、例の白衣の天使騒動事件として知られて居る病院看護婦総数十八名の怠業事件であった。この事件は鎌田博士帰国後間もなく起つた。その要点は正式のディプロマの取得問題にあった。つまり日本病院に於て養成された看護婦は、病院内に於てこそ何等支障なく勤まるが、他の一般病院に迄正式に進出する資格のない中途半端のものでつたので、そこに彼女達の不平が潜んで居り、それが図らずも婦長の資格問題と絡み合つて表面化したものであった。この二つの事件は実に表裏を爲す問題で日本より遙々渡伯せる加藤、山本両看護婦長は、当国にては無資格者である。渡伯以来指導的地位に居た加藤女史が婦長としてこの方面を牛耳っていたのであるが、醫師の場合と同様、看護婦の場合に於ても資格の有無が問題となり、結局同仁会の正式養成看護婦たる上條女史が婦長の地位に据わり、他に川辺、藤村等の有資格者と共に、加藤、山本両女史の地位を奪つた形となつた。加藤、山本両女史としては泣くに泣かれぬ立場に突き落された。所が日本病院に於て採用養成せる看護婦は殆ど一世女子のみで、二世女子は僅か数名に過ぎなかつた。之は主として邦語け関係からであつたが、それが又加藤、上條両陣営への去就を明らかにして問題を益々尖鋭複雑化して行つた。

併しこの騒動も遂に収まる所へ収まつて、加藤、山本両女史は正式に退陣し、怠業看護婦の大部は両女史と運命を共にし病院を去つた。僅かに二世看護婦四名のみが踏み止まつた。

戦争の飛沫

斯くして日本病院は兎角の世評を浴びつつも次第に好調を見せつつ一九四一年を迎へて、その十二月八日突如日米戦争の勃発、翌くる四二年日伯国交断絶、その三月病院は敵性国財産として聯邦政府の管理下に置かれ、インテルヴエントールとしてドートル・ヂョゼー・マリア・デ・フレータスが任命され、茲に在伯全同胞の「我等の日本病院」は実質上邦人の経営から放れ、同仁会の全事業には一應休止符が打たれたのである。

病院内の邦人職員が、部長その他主なる役に就く事は罷り成らぬと云う意味の公式の布達を受けたのは、それから約六ヶ月後のことであつた。

著しも同仁会が当然盡すべき手段を尽し、踏むべき道を踏んで居たならば斯うした結果に至らなかつたのだが、そこに役員会の手落があり非難の的となつた。内国人団体であり乍ら三分の二法も守らず、また一朝宣戦の布告を見た場合、当然敵産として処分さるべき可能性濃厚なるに拘らずその対策を講じなかつた。彼の公證翻訳人で晩年の同仁会理事の一人杉山英雄は、来るべき日に備うべく幾度か厚意ある注意を受けて居た。勿論全然袖手傍観の態度を採つた訳ではない。戦争勃発勿々急據役員会を開催して善後策を協議したのであるが、甲論乙駁の形で何等決定案を得るに至らなかつた。その翌年日伯国交の断絶を見るに及んで役員一同は一層狼狽し、再度役員会を開催して全病院の貸付案に依つて急場の好転を策したのであつたが、遺憾乍ら問題は相手方の承引を得るに至らず、当局の手は我等の病院に延びてしまった。

同仁会は一九三九年十二月の臨時総会に於て定疑の改正を爲し、従来の“Sociedade Japonesa de Beneficência Brasileira”なる名称を“Sociedade Beneficência Santa Cruz”と改め、合法的の内国人団体に改組した。

政府の管理より脱却

然るに新たにインテルヴェントールとしてドトール・フレータスを迎へたこの病院に対し、聖市々役所は市経営の病院火災の前後策として、突如六千コントスを以て病院全部の買収にかゝった。茲に於てか彼ドットル・フレイタスは市役所の計劃に對抗し、同仁会の内容を改組整備して病院を聯邦政府の管理下から脱却する事にした。同仁会の役員及び会員の大部を凡て伯国人名義に改め、会の組織を正式に適法のものとして急遽リオに出府、聯邦政府当局と会談数次、充分なる了解を得て帰聖、茲に初めて病院は聯邦政府の管理から脱却、正式に元の同仁会の経営に移った。一九四四年六月の事であつた。

時の州執政官故フェルナンド・コスタは、聖市々長プレス・テス・マイヤに対して、日本病院は種々複雑なる関係下にある故一切之に触れぬ意味の警告を發して居たと伝へる。

日本病院に対する市役所の攻勢は斯くして遂に不成功に終つた。この日本病院改組の直後、モンテネグロ博士去り、代つてサンタ・クルース病院々長の地位に就いたのはドットル・マリ・ア・デ・フレイタスであつた。病院はその後の施設内容には各所に目覚ましく改善の跡が見えている。フレータスの努力が現われている。

今日同病院の邦人醫師としては元副院長武田義信と、氏原正明、鮫島正明、樋口元昭の都合四人だけで、外にレントゲン技師山根某、江刺家勝、斉藤等二、三人の邦人が関係し看護婦としては一人勤務（他に修業中の者二名）するのみで、又現に役員会に名を連ねて居る邦人としては前記武田、氏原の両醫學士と鮫島直哉の三名丈けである。既に伯国の法律に従い純然たる伯国人団体として正式に改組を見ている。

同仁会衛生史の記述を終るに当り、

前聖市サンタ・カーザ院長

シネジオ・ランヂエル・ペスターナ博士
元ブタントン研究所々長 アフラニオ・デ・アマラール

博士

元サンパウロ醫大整形外科教授

故ルイス・デ・レゼンテ・プエーシエ博士
サンパウロ醫大 細菌学教授

エルネスト・デ・ソーザ・カンポス博士

元聯邦外務大臣 ドトール・マセド・ソアーレス氏

州中央衛生局長フランシスコ・ボーウジ・ヴィエーラ氏

元聖市日本病院々長 ベネジツト・モンテネグロ博士

弁護士 ドトール・カルロス・モライス・アンドラーデ氏

元カンポス・ド・ジヨルドン市長 ガビオン・ゴンザーガ氏

右の人々は夫々違った立場に於て、同仁会の爲に陰に陽に協力援助した人々であつた。

（同仁会略史以下山崎芳蔵）

第八章 コロニア出版史

一、新聞及び雑誌

伯国日本移民地の新聞発刊に先手をつけたのは、生えぬきの移民でなく、北米崩れ（布哇流れともいう）の星名謙一郎であった。彼は一九一四年渡伯、リオ首府より一九一五年聖市に移り、サンタ・アンナ区に住み、そこより謄写版で「南米週報」を創刊した。菊版八切の十二頁もので、彼が売出したソロカバナ線の奥ブレジョン植民地及梅辨植民地の宣伝用のパンフレット式であったが、紙面には世界状況、母国の近況、聖州物価表 聖市日本移民の動静を三面記事に扱ひ、植民地文学欄もあつた

移民現地の読物に飢えていた移民社会には大きな需用で、奥地の日本移民も争つて注文し、購読申込み、送金は日本総領事館宛に殺到していた。星名の下に鹿野久次郎、木村孝太郎がいた後に三浦鑿、渡邊孝、鈴木季造、明穂実もいた。

輪湖俊午郎も第一モンソン植民地より出馬した。発行一年たらずで廃刊した南米週報と前後して新聞発行企画をすゝめていたのは、聖市に玩具製造をやっていた金子保三郎であった。彼と輪湖俊午郎とは斯企劃の協同同志であつた。輪湖も北米新聞社崩れであつた。南米週報に一時模様をみたがそこを飛出し、兼ねての約束通り金子と聖市ブラス区で石版刷りの日伯新聞を創めた。一九一六年の初めであつた。

移民組合の代理人神谷忠雄が聖州政府と移民契約成り、帰途北米に立寄り企劃したのが実現し伯刺西爾時報となつた。

その社長の黒石清作は北米新聞記者出身で、移民組合からは移民教育部長の名目で、活字と機械と職工とを日本から携え

来伯した。一九一七年の中頃であつた。伯刺西爾時報の創刊號はその年の八月卅一日、天長節を卜して始まつた。伯国に於ける最初の日本活字新聞である。この新活字は移民初期の文物出版物に相当華やかな又朗らかな存在であつた。

日伯新開が活字を日本から取寄せ石版刷を廢したのは一九一八年からである。その翌年金子社長は日伯新聞を三浦鑿に買却する。然し活字はその後漸つと新聞に間に合ふ程度であつた爲め、伯刺西爾時報の如く活字印刷物の副業なく、新聞経営は甚だ困難であつたが、新聞一式の爲め新聞記事には熱をもち、鋭どさを現はし、伯刺西爾時報が海興移民会社及領事館方面の「御用紙的存在」に反し、日伯新聞は移民大衆の味方としての存在を華やかにしていた。二つとも週一回發行である。

奥地植民地、殊にノロエステ日本人植民地が發展の一路を辿るに到つて、距離の上から交通不便、聖市の二活字新聞週一回發行が植民地へ配布さるるには十日間以上かゝつた。それにこの二つの新聞は都会記事のみ多く、植民地のローカル・ニュースには手が及ばなかつた。総領事館が聖市に於てのみ在聖州全日本移民の統制を焦慮しても及ばず、リベロ・プレト市に分館を置き、後にパウルー市に領事館を設けたる如く、新聞界に於ても遠距離と交通不便の上から聖市の週間二新聞では、勃興する移植民界に間に合はなくなつた情勢から、ノロエステ植民より芽ばえたのがノロエステ線の入口パウルー市に創めた聖州新報であつた。一九二一年九月七日、伯国独立紀念祭を卜して創刊號を出した。發行人は第一回移民香山六郎であつた。最初は「ジンコ版刷」週一回四頁であつた。同社が活字を日本から取寄せたのは一九二五年五月よりであつた。それから五年後の一九三〇年九月より聖州新報は週二回發行した。聖市の二新聞社は尚週一回を續けていた。

二九年頃、聖市に「南米新報」が阪井田南舟により創刊されていたが、一九三二年二月より在聖市の翁長助成、城間善

吉等により買収され、「日本新聞」と改名、後、翁長助成経営となった。一九三三年六頁週間新聞となった。

ノロエステ線のアラサツバ市はバウル市より二月八十軒の奥地にある。同市の周囲に日本移民の植民地が各所に開拓さるゝにつれ、茲にも同地方新聞の需要を感じ出し、創刊されたのがアリアンサ時報であった。アリアンサ植民地力行会アリアンサ支部の人々が發起人となり、一九三〇年四月廿九日天長節をトしてはじめた。三十コントスの株式会社で宮尾厚社長となり十川計一常務取締役、中川權三郎主筆であった。これも最初輪転謄写版から始め、活字になった。発行部数は全盛期千五百部を出した。

以上の五新聞の外に、ノロエステ線リンス市にノロエステ民報が週版で梶本明により創められたのは一九三五年であった。

一九三三年、日伯新聞の発行部数高は七千余を算し、葡語欄を設けていた。

同年伯刺西爾時報の発行部数高は八千二百と記されている。

(一九三二年十月より週二回発行となった)。聖州新報の発行部数は五千三百部と記されている。

一九三四年南米新報は阪井田南舟により再興発刊されているが、週一回刊であった。

一九三五年八月より外国語新聞発行人は伯人たるを要すの発令により、各新聞社はその法令に従ひ発行人を伯人名義に書換えた。日系伯人が成年になっていた。

一九三五年十二月、聖州新報はバウル市より聖市に本社を移転させた。その翌年九月より週三回発行となった。一九三八年五月より日刊となし、伯刺西爾時報に一日早く、日本コロニア最初の日刊新聞となった。当時発行部数は一万五千二百であった日伯新聞が、日刊となったのは同年七月よりであった。

斯くて一九四一年七月末迄三社日刊新聞がつゞき、日本新聞南米新報は週刊に終始し居たるも、一九四一年七月末伯国法規により外国語新聞発行禁止、聖州新報先づ廃刊し、日本新聞、南米新報廃刊し、日伯、時報両紙は葡語欄により同年十月迄発行を続け廃刊した。茲に一九四一年末より日本コロニアは出版物空白時代に入った。

日本移民四十年出版界も歴史の一頁に「農業のブラジル」誌がある。一九二三年十一月石橋恒四郎獣醫が聖市に於て「農業の友」社を創立し、翌年四月謄寫版刷の月刊誌「農業の友」を出した。一九二五年五月同社を農学士揮旗深志に譲渡した。一九二六年四月より誌名を「農業のブラジル」と改名、活字印刷にした。同誌は一九二九年一月有馬鉄之輔社主となり、翌年一月又揮旗経営となり、一九三二年八月主筆佐藤常蔵経営となった。常時発行部数五千部。その後一九三五年一ノ瀬が社主となり、折井が支配人となったが三七年に至つて廃刊した。

カナ文字新聞が阪井田南舟によつて企てられ、横カナ新聞が有馬鉄之輔に発行されたは一九三二年、両新聞とも發展せず、兩三年にして廃刊した。

一九四六年伯国ゼツリオ政府壊れ、新憲法制定により外国語新聞発行自由となる。

同年十月先づサン・パウロ新聞が水本光章により企業され、発行人は日系伯人古波津幸助名儀にて週二回版を出した。(エスタード二分一型)。次に同年十一月伯聖新聞が石版刷にて相馬勇により企業発行されたが半歳たらず廃刊。元日伯新聞の系統の人々がパウリスタ新聞を株式組織の元に一般化し企劃創刊した。一九四七年一月よりであつた。週二回ゼルマニア型である。

一九四七年十二月末南米時事の名称にて伸眞美登利により創刊發行された。週二回版同じくゼルマニア型である。

空白時代前の日本字刊行紙は孰れも購読料金は年三十ミル

から六十クルゼイロスであつたが、空白時代後の各邦字新聞週刊紙の年定購読料は一五〇クルゼイロスより二〇〇クルゼイロス台となつている。日伯毎日新聞が竹内秀一によりエスタード二分一型で日刊紙として本年末迄に創刊となつてゐた。

二、邦人関係出版物

ブラジルに関する日本語の著書

ブラジルに関し日本語で書いたものは、環海異聞に書かれた若宮丸の船頭六名が伯国サンタ・カタリーナ上陸談が今の処一番早いものとされる。前田十郎左衛門のノスタルヂア（望郷愁）の自殺記事は、当時のバイア新聞記事を翻訳したもので、何う日本でこの事件を扱ったか、ブラジルでは史料不足で知るに由ないが、野田良治著「ブラジル人国記」中に出ていたもので間に合せた。

明治二十八年（一八九五）根本正代議士が渡伯、帰朝後「伯国の探險報告書が次の古いものゝ一つであつた。次に駐伯珍田初代公使の報告書、二代目大越公使の伯国報告書等がある。三代目杉村公使のサン・パウロ州カフェー耕地視察報告書によつて伯国は日本大衆とのつながりを始めた。水野龍は南米渡航案内を明治三十九年（一九〇六年）に京華社より出版した。明治四十年には中島鉄哉の「今日のブラジル」が出た。東洋汽船会社が「南米事情」を出版したのは明治四十一年二月、これは主に南米西海岸諸国のことであつた。

駐伯日本官憲のブラジル報告書、外務省出版ブラジルもの、拓務省出版のブラジルもの、ブラジル関係諸会社や日本民間出版社関係のブラジルに関する出版物、ブラジル案内、研究もの雑誌社の個人出版のブラジル旅行記、真相、事情等々の書籍四十年間には五百種以上になつてゐる。

茲には在伯多年日本人移植民生活を體得した人々の出版物、著書を挙げておく。この他尚こゝに漏れたものもあるう。

在伯邦人の著書

日本で印刷した官憲、移民会社関係のものを除く

南 米 へ (一九一四年) 鈴木眞静著

南北両米踏破三万哩

(一九一九年) 崎山比佐衛著

独立百年紀念新進の伯刺西爾

(一九二二年) 伯刺西爾時報社發行

最近のブラジル

(一九二二年) 黒石清作著

北西年鑑

(一九二四年) 輪湖俊午郎著

ブラジル

(一九二五年) 山崎芳蔵著

ブラジル移住指針農場生活の実相

(一九二五年) 矢崎節夫著

ノロエステ日本人年鑑

(一九二八年) 聖州新報社發行

今日のブラジル

(一九二八年) 八重野松男著

ウガンダ蜂物語 (葡語一九二九年)

(珈琲害虫ブロッカ駆除指針)

山本喜誉司 著

ノロエステ・ソロカバナ・パウリスタ 三線年鑑

(一九三〇年) 聖州新報發行

ブラジルの産業と経済

(昭和五年) 市毛孝三著

産業より觀たるブラジル

江越信胤 著

市 民

小林美登利 著

ブラジルの実生活

(一九三二年) 神戸久一 著

ブラジル移民としての五年間

(一九三三年) 古澤清介著

伯国日本移民の草分

(一九三三年) 鈴木貞次郎著

イグアツペ殖民写真帳

(一九三三年)

在伯日本移民廿五周年鑑

(一九三四年) 聖州新報社發行

アルベルトトーレスの思想とトーレス

同志会に就て (一九三四年)

新憲法審議會に於ける日本移民

排斥問題の経過 (一九三四年)

ブラジルの同胞を訪ねて

在伯日本人文化協会

(一九三五年) 辻小太郎著

教育禮讃 (一九三五年) 木村末喜著

ブラジル公民読本 (一九三五年)

在サン・パウロ総領事館發行

創設十年 (一九三六年)

アリアンサ移住地十年史刊行会

在伯邦人の棉作とその金融 (一九三六年)

在サン・パウロ総領事館出版

肉慾 (ジユリオ・リベイロ著)

(一九三六年) 安藤全八 訳

移り来て (移民短歌集)

(一九三七年) 聖州新報社發行

埋れ行く拓人の足跡

(一九三七年) 鈴木貞次郎著

土地の購入と遺産相続 (木下正夫著)

(一九三八年) 日伯社發行

南十字星 (三水会俳句誌)

(一九三八年) 南十字社

月版伯国経済 (一九三八年) 日伯新聞社發行

ブラジル民法全（一九三八年） 鈴木英蔵著
産業のブラジル誌

椰子樹（一九三八年度） 日伯社発行
椰子樹（短歌誌）

椰子樹社発行（一九三八年）
黎明（一九三八年） 教育普及会誌
ブラジルの家庭医書
医学博士 高岡専太郎著

第一線に活躍する人々

（一九三八年） 小野真禪著

チエテ年史（一九三八年） チエテ自治会
聖州棉と日本市場進出の経緯

（一九三九年度在サン・パウロ総領事館印刷物）

中西周甫著

在ブラジル日本人名録

（一九三九年） 豊吉真水路著

バウル管内の邦人

（一九三九年） 輪湖俊午郎著

日本精神（一九三九年） 宮腰千葉太著

在伯日本人職員録 日伯情報社著

ブラジル情景大写真帳

（一九三九年） 中山夢浪著

パ延長線教育史（一九四〇年）

パウリスタ延長線教育史刊行会

福島県人写真帳（一九四〇年）

在伯福島県人会発行

自然（Natural）一九四〇年

発行所 栗原自然科学研究所

鹿児島県人ブラジル移植民史

（一九四一年） 池田重二著

ブラジルに於ける日本人発展史

（上・下巻——一九四一年）

発行者 青柳郁太郎著

アルベルト・トールレスの思想とトールレス同志会に就て

文化協会刊行物 杉山・安藤共著

ブラジルに於けるナショナリズムの研究

(一九四〇年) 文学博士佐藤清太郎

平野廿五周年誌 (一九四一年)

平野植民地日本人会発行

空白時代後

農業と園藝 (一九四六年) 鹽 月 脩

時代 (E R A) 年四回発行誌

(一九四七年) 時代同人誌

子供の友 (一九四七年)

サン・パウロ新聞社発行

光輝 (雑誌) (一九四七年) 発行人豊富

断 (雑誌) (一九四七年) 岸本次男発行

新世紀 (雑誌) 一九四七年

コチア産業組合の過去を語る

(一九四七年)

サン・パウロ・マガジン

宮崎逸郎・千葉武男発行

汎米主義と伯国 (一九四八年)

斎藤廣志・中西周甫共訳

よみもの (雑誌) (一九四八年) よみもの社発行

増補改訂実用的なブラジル式

日本料理と製菓の友

(一九四八年) 佐藤初枝著

俳句の道しるべ

(一九四八年) 岡崎独行旅著

ブラジル俳句集

(一九四八年) 佐藤念腹編

グラフヰカ・ブラジレイラ発行

日伯語関係著書

在伯日本移民により出版発行された日伯両国語に関する著書は、年代順にして左の如きものがあつた。

- 一、ブラジル語講義録 加藤順之助著
一九一五年（謄写版第三號で中止）
 - 二、日伯会話書 日伯新聞社
一九一六年（金子保三郎社長時代）
 - 三、実地應用葡語手紙の書方
一九二二年八月 中尾熊喜著
（伯刺西爾時報社發行）
 - 四、会話必携和葡小辞典 杉山英雄著
一九二四年十一月 伯刺西爾時報社發行
 - 五、ブラジル語講習録 嶺 昌著
一九二五年再版 伯刺西爾時報社發行
 - 六、ポルトガル語講義録 聖州新報社發行
 - 七、ポルトガル語講義録
（一九三四年） 妹尾正男
- 日本に於て発行された日伯語会話書の最も古きものは、吉佐移民会社發行（明治二十七年頃）の日英仏葡四カ国語対照会講書であつたが、その後左の如きものが発行されていた。
- 一、ぼるとがる（ぶらじる語）会話
明治四十年代 金澤一郎著
 - 二、葡和郎典 大武和三郎著
一九一八年八月 伯語研究会
 - 三、初等葡萄牙語独修 菊池恵次郎著
一九一九年七月 博文館
 - 四、葡萄牙語独修 仁平 高著

一九一九年九月 岡崎屋書店
五、独習葡萄牙南米語研究 永島藤三著

一九二二年十一月 日進堂

六、渡航者必携ブラジル用語手ほどき附会話単語 海外興業株式会社

(一九二四年十一月再版)

七、葡語初法解説 大武和三郎著

一九二四年 海外興業株式会社

八、和葡辞典 (海外興業株式会社)

一九二六年十二月 大武和三郎著

九、独習ブラジル語全解

東京外語講師奥村外次郎著

日本殖民通信社編

十、初等ブラジル語講座第一卷

国立移民収容所講師 中島文重

十一、ブラジル語講義録

ブラジル父兄会発行

十二、実用ブラジル語会話

海外興業会社編

十三、ブラジル語の手びき 日伯協会編

十四、ブラジル語の研究 竹本武雄著

十五、ブラジル語の培本的智識と文法

梅本徹雄著

十六、葡文典接読法解説

(一九三七年) 安藤 全八著

▶ 伯國と最も關係深き外交官野田良治の著書に

Livros publicados pelo Consul Ryoji Noda

- 1 — “América do Sul, Grande Tezouro de Riqueza do Mundo” — 1912
- 2 — “Brasil, a Gente e a Terra” — 1926
- 3 — “Nova América do Sul” — 1927
- 4 — “A Grande Amazonia” — 1929
- 5 — “Uma visita aos meus patricios que labutam no coração do continente Sul-Americano”

相田慶佐の著に «Reminiscencia do Japão»

山城ジョエ譯本 «Diario de Soldado» (大野素平の士と兵隊)

Lista de Livros Referentes aos Japoneses, Publicados por Autores Brasileiros

- 1 — “No Japão” — Oliveira Lima — 1903
- 2 — “Evolução do Povo Brasileiro” — Oliveira Vianna — 1922
- 3 — “Samurais e Mandarins” — Luiz Guimarães filho — 1925

- 4 — "O Estrangeiro"—Plínio Salgado — 1926
- 5 — "Imigração" — Inquérito Promovido pela Sociedade Nacional de Agricultura — 1926
- 6 — "Renascença Nacional"—Mario Pinto Serva — 1930
- 7 — "De Japonês a Brasileiro" — Professor Bruno Lobo — 1932
- 8 — "O Japonês no Brasil" — W. Niemeyer — Rio, 1932
- 9 — "A Verdade sobre o Conflito Sino-Japonês e seus Fundamentos Históricos" — Organizado e publicado pela "Sociedade Extremo-Oriente" — 1932
- 10 — "O Grande Japão" — Henrique Paula Baiano — 1932
- 11 — "Imperialismo ou Legítima Defesa ? — Alexandre Konder — 1933
- 12 — "O Roteiro do Oriente : Impressões de Viagem"—Nelson Tabajara de Oliveira—1933
- 13 — "Ensaio de Atropologia Brasileira" — Roquette Pinto — 1933
- 14 — "Shangai : Reportagens do Oriente"—Nelson Tabajara de Oliveira — 1934
- 15 — "O Japão : Reportagens do Oriente"—Nelson Tabajara de Oliveira — 1934
- 16 — "Cruzamento da Etnia Japonesa" — Artigo publicado pelo "Diário de S. Paulo" — 1934
- 17 — "Brasil e Japão — Duas Civilizações que se Completam" — Publicado pelo "Diário de S. Paulo" — 1934
- 18 — "Esquecendo os Antepassados, Combatendo os Estrangeiros" — Professor Bruno Lobo — 1934
- 19 — "O Japão Que Eu Vi" — Henrique Paula Baiano — 1934
- 20 — "Japão" Nelson Tabajara de Oliveira — 1934
- 21 — "Imigração" — Julio de Revoredo — 1934
- 22 — "O Japonês no Brasil — Nestor Ascoli — 1934
- 23 — "Fatos e Opiniões sobre a Imigração Japonesa" — Organizado por Alexandre Konder — 1934
- 24 — "O Japão visto através de uma viagem ao Extremo-Oriente, realizada por universitários da Faculdade de Medicina de S. Paulo. Organização do Ensino no Japão, América do Norte e África do Sul" — Professor Ernesto de Souza Campos — 1935
- 25 — "Impressões de uma Viagem ao Japão em 1928" — Julio Moreira — 1935
- 26 — "Guerra Russo-Japonesa, Segundo os Históricos Oficiais Japonês e Russo" — Almirante Raul Tavares — 1935
- 27 — "No Extremo-Oriente: Japão" Moreira Guimarães — 1936
- 28 — "Japoneses no Japão e no Brasil" — Professor Bruno Lobo — 1936
- 29 — "Os Japoneses no Brasil" — Aguinaldo Costa — Rio, 1938
- 30 — "Raça e Assimilação" — Oliveira Viana — 1938
- 31 — "Elementos da Gramática Japonesa" — José Santana do Carmo — 1938
- 32 — "Cruzar e nacionalizar"—Mario Sampaio Ferraz—1938
- 33 — "O Divino Império" — A. M. de Abreu — 1939
- 34 — "Historia do Japão" — (Resumo) — Alexandre Kon-

- der — 1939
- 35 — “Roteiro Lírico” — Jorge Fonseca Junior — 1939
- 36 — “Idealismo da Constituição”—Oliveira Vianna — 1939
- 37 — “Do Outro Lado da Terra” — Alexandre Konder — 1939
- 38 — “Namida no Kitoo” — Luiz Antonio Pimenta — 1940
- 39 — “Do Haikai e em seu Louvor” — Jorge Fonseca Junior — 1940
- 40 — “Impresões do Japão” — Claudio de Souza — 1940
- 41 — “Historias e Lendas do Velho Japão” — Luiz Antonio Pimentel — 1941
- 42 — “O Perigo Japonês” — Vivaldo Coaracy — Edição do Jornal do Comércio, Rio — 1942
- 43 — “A Ofensiva Japonesa no Brasil — Carlos de Souza Morais — Porto Alegre — 1942
- 44 — “O Perigo Amarelo no Amazonia” — Antovila R. M. Vieira — Manaus — 1942
- 45 — “O Problema Imigratório na América Latina” — Antonio Xavier de Oliveira — Rio — 1942
- 46 — “Historia do Japão” — Volume N.º 2 — Alexandre Konder — 1942
- 47 — “A 5.ª Coluna no Brasil” — Coleção de Documentos Secretos — 1943
- 48 — “O Japão por Dentro” — Coronel José de Lima Figueiredo — 1944
- 49 — “Emoção” — Osorio Dutra — Edição Pongetti — 1945
- 50 — “O cerco flutuante: uma rede de pesca japonesa que teve a Ilha de S. Sebastião como centro de difusão no Brasil”—Separata de “Sociologia” volume VIII N.º 3 — Gioconda Mussolini — 1946
- 51 — “Shindo-Renmei, Um Problema de Aculturação”—Separata da “Sociologia” volume IX, n.º 2 — Emilio Willems e Hiroshi Saito — 1947
- 52 — “Aspectos da Aculturação dos Japoneses no Estado de S. Paulo”—Boletim LXXXII da “Antropologia” N.º 3 publicado pela Faculdade de Filosofia, Ciências e Letras de S. Paulo — Emilio Willems — 1948
- 53 — “Um Brasileiro no Japão em Guerra” — Mario Botelho de Miranda — 1944
- 54 — “Shindo-Renmei: Terrorismo e Extorsão” — Mario Botelho de Miranda — 1948
- N. A. — No periodo de 1938 a 1939, o Consulado Brasileiro em Yokohama, sob a responsabilidade dos senhores consules Raul Bopp, José Jobim e Nelson Tabajara de Oliveira, foi publicado o jornal em lingua portuguesa: “Correio da Asia” dedicado aos poucos brasileiros residente no Japão. Raul Bopp e José Jobim, publicaram a Coleção «Correio da Assia» da qual fazem parte os livros: «Sól & Banana» e «Geografia Mineral» ambos de 1938.

補 遺

日本移民の国際結婚

伯国の国民生活組織は、あらゆる人種を容れて混淆しつゝある。ブラジルには、葡萄牙人渡り来た時には先住民族が居た。

ツピー族（ツピ語で祖父の意味）又はグアラニー族（戦闘族）であつた。葡人はブラジル遠征の途に同族の女性を件はなかつたので、最初の葡人は先住民族の女性と混淆した。征服混淆であつた。次で葡人はブラジルに阿弗利加黒人を奴隷として輸入した。黒人女性と混淆した。これも征服混淆であつた。

黒人女性奴隷と白人男性との共産的過程からムラタ、ムラトが発生した。黒人男性奴隷と白人女性間には、伯国が共和政体になる迄の社会には共産せなかつた。共産したにしても極少なかつたといはれる。奴隷解放後、性交の階級的拘束は社会的に緩み、恋愛自由が尊重され出して以後、白人女性と黒人男性との仲にも人間共産が始まつた。

伯園社会の人種型はラテン民族を主系として、各国人種の混淆に混淆を普及していたが、国民型の育成は歴史浅くして未だ成らず、育成の途上にあるとされている。

当国に於て民族又は人種混淆の過程に於て、日本移民は漸く四十年、伯国移民中最も新入民族である。四十年間に農業文化の上に、経済的に日本移民の躍進は伯国社会に相当大きな役割をしたにかゝはらず、日本民族の伯国社会人組織への混淆振は甚だ微々たる態である。

日本民族が伯国伝統の人種及民族型を異にしている処、言語、風俗、習慣、食物、感情の表現の作異が、日本移民及伯国社会人との混淆をさまたげているのである。

日本民族は不同化民族と思惟されていたが、年月を経るにつれ、日本移民が伯国の自然と社会の環境に同化する如く、伯国民との混雑も漸やく増加の一徑を辿り出している。

今次の世界大戦中、亜細亜大陸及南洋諸島に日本民族が他民族との混雑発展は、性の闘争過程を相当熾烈にしたと謂はれ、民族本能の保存の利害からでもあったが、それは重に征服、被征服の闘争を伴ったものであった。

伯国に於ける日本移民の混雑過程は闘争に始まったそれではなく、平和の性質の混雑であり、種族の成長である。

昨年、聖市、ノロエステ線、パウリスタ延長線、及ソロカバナ線の重なる駅町に於ける日本移民と伯国社会人との混雑を調査した処、甚だ杜撰なものであったが、左（次ページ）の如きものが現われた。（或る地方は一割位の混雑調査漏はあると見做す）

日本移民と伯人との最初の混雑結婚は。リオ・デ・ジャネイロ州イグアス郡イグアス町に居た祖父を日本人とする黒婦人の混雑であるとさるゝも確実なる史実は判明せぬ。

笠戸丸沖縄移民神山徳助は聖市に於て伯女と結婚したのが一九一〇年頃であった。是れが最初の混雑結婚者と見做された。

日系伯人二世の出生



一九〇八年七月笠戸丸移民の始めて伯国で生んだ母國女性宮平ウツト（金城幸盛妻）

伯国で始めて生れた日系伯人は、一九〇八年七月、フロレス耕地の沖繩移民に女子を上げた。宮平牛助、カメの長女で、ウトと名づけた。金城幸世の妻となつて三男三女の母となった

次で九月一日熊本移民の中川仁蔵妻トキが、ゾーモント耕地引上げ収容所病院で出産し男子であつた移民会社社長水野が「坤」と命名した。

拾歳の時、母に連れられ帰国幼死した。

次いで熊本移民の橋口重正妻タニの産んだ「芳子」であつた。四十一年十月十四日ノロエステ線サン・ジョアキン駅。同名耕地カンパメントで生れた。彼女は英人と結婚し一男二女の母となった。



(最初の二世女性（橋口芳子）と英國人ウヰリアム・ジョネスの混淆家族)

日本移民の彌生式農耕

サンパウロ大都市周囲に展開農耕されている田園の容相ばかりでなく、奥地の何の鉄道沿線にも、汽車の窓外に展開する田畑の中一眼で「アツあれば日本人の耕やす畑だ」と判明する位に、伯人や外国人の眼に日本人の耕やす田畑の容相美は鮮やかに映る。日本人の農耕は彌生（やよい）式だ。畝と畝との線、作物の列が單純に素直で公平に肥料が分配され、整然と栽培物が不平を愁えず柔和に自然に解け込み、成長しつつある。伯人外人の農耕は一般に縄紋式だ。栽培物の複雑な配列曲線と、肥料の分配が不公平で、作物が意志的な表現をし、変化には富んでいるが、自然の脅威に反抗克服しよう、負けまいとするものが力み合っている。

移り来て四十年、日本農民は一千年伝統の彌生式農耕性を末だ失なっていない。

然しこれら二つの耕作様相も農耕が機械化によって混淆され新耕の美を現わすであろう。

ブラジルの国家主義と日本移民制限

奴隷解放後、勞力不足のため歐洲移民を伯国は招いた。この間二十年、歐洲移民の来伯もはかばかしくなく支那移民も入れてみたが独身移民として結果よからず、次に日本移民を招いた。全くカフェ耕地の勞働力補給のためである。

この亞細亞の二国人は、当時他外国の勢力、政治的牽制をうけぬ移民国であった。が、聖州支配階級間の一部には、日本移民可、否可論が芽ばえていた。

一九〇一年頃（明治卅四年）駐日代理公使としていた Oliveira Lima は帰国後、日本人を斯く観ていると発表した。

「日本人は支那人と同人種だが、支那人ほど大陸的でない。

自負心の強い事相当なものだ。自負心が少しでも傷つけられると憤慨反抗する。日本移民を入れる珈琲排主が、歐洲移民と同等に取扱はなかったら日本人は不平で怒るだろう。仲々いゝ美点をもつ日本人だが、ブラジルの入移民として、異つたブラジル環境に幸福を感じるか疑問だ」

日本人の容貌や姿や、その性質、教養を伯人耕地は需用したのでなく、その労働力を供給させたかった。聖州政府は日本移民をうけ入れた。共和政体になつて漸つと十八年目であつた。

伯国民が複雑な寄合国民であるだけ、そこに新らしい国民性を成育させたいとの希望は識者先覚者の間にウン醸しつゝあつた。即ちアルベルト・トールレスの国家主義の思想がそれであつた。この新ナショナリズムの思想を解さなければ、伯国の移民問題は理解出来難いことになる。特に日本移民に対する伯国歴代政府の態度も、ともすれば排日と誤解したり、錯覚を起したりすることがある。

アルベルト・トールレスの新ナショナリズム政治思想を概説すれば、舊式な国家の国粹思想に似たものでなく。眩大な未開国土を尚ほ有するので、所有慾を満足さする帝国主義的な愛国主義でもない。伯国の愛国心は戦争を希望する思想に対して人類愛を理想とする思想でなくてはならぬ。生命を尊び、互に相協力しブラジルを開拓する開發的な産業的精神でブラジル人の愛国心を育成しようというのであつた。

白色人が優れているとか、黄色人が白色人より劣っている、黒人は劣等とか言うのでなく、人種に優劣はないとの見解である人間は體質的にも、社会的にはその適應性は強いものである。

環境に従つて色々に変化するものだ。人種というものを進化的に観ている。適應性によつて文明人の子供でも山の中に放つておけば猿のようになるし、蛮人でも文明社会に住わせて教育すれば文化人になるという観方である。

それで伯国の移民問題も、帝国主義的な意義をもつ国家的

問題でなく、これは社会問題だ。移民とは人間がその貧困を個人的に解決するために決行するところのものだとして、現代の人類移住の社会道徳性を認めている。伯国は産業開発が北米よりもズトおくれているので、それを発達させるには外国移民の移住にまたなければならぬのは勿論である、と謂っている。

然しトールレスは、移民を出稼移民（*Immigracao*）と、移住移民（*Colonizacao*）とに分けて出稼は歓迎しないが、移住はいゝ。出稼移民でも産業開発の効能はある。が、新開国を強力にする国民要素にはならない。伯国は今日まで出稼移民はあったが、移住移民は少なかったといっている。

又現代に於ける国家の構成には、同一人種とか、同一宗教とかは全然問題にしてる彼ではない。ブラジル国家の構成上種々な人種の入ることは差支えないが、同一人種が一個所に集団してはその一地方を外国語及外国風俗習慣が支配するようになる外国政府の政治干渉が起きるかも知れぬで、一地方一人種集団移民は不可といっている。

国家の構成は、一時に多数の雑種人間がドツとなだれ込んできたからとて出来るものでない。人間の頭数だけでは大国家は出来ない。産業開発、経済力の発展に伴って人口の増加すること国家のためよろこばしいことだ。この点から日本人や印度人其他繁殖率の極端に旺盛な人種を思慮なく入国させる事は考えねばならぬが、絶対に入国禁止するが如きことはしていけない人口過剰の国から人口稀薄な国へ移住することは、社会道徳性からみて当然のことで、原則としてこれを拒否することは出来ない。斯かる人種は入国数を制限して少数づゝ入れることだ。

トールレスの日本人観は斯うであつた。

この国家主義の思想が伯国新国家への政治指針となつてい

る
これが実現は未だしてないが、この思想に沿って伯国の国民

性が統一されつゝあることである。

サンパウロ州政府は日本移民をうけ入れた。日本移民が契約通り珈琲耕地の需用に労働力を供給した処の傭主は日本移民に大満足した。労働供給者に対し生活の安定を与えなかった珈琲耕地には、日本移民は不平を鳴らし契約期間後退排した。

一九一五年、アルベルト・トールレスの死の二、三年前より伯国は国際主義の外貨資本輸入が行詰つて、国家主義の萌芽時代に入りつゝあつた。

国家主義の勃興は孰れの国でも、ともすれば排外的思想の錯覚が起きる。尊王攘夷とまでは伯国は行かなかったが、尊欧攘夷がきざしていた。これに煩はされたのが日本移民であつた。

国家主義が一応組織立つと、排他が錯覚であつたと認識される。

伯国に於ける排日言論、親日言論、是は要するに利害が往々感覚の錯覚を誘起する処からで、痘も笑窪という諺通りの心理的事実である。

一九〇九年の聯邦歳出予算法中に「アジア移民は之を除く」との辞句あるを、内田公使は伯国外相リオ・ブランコに指摘した。リオ・ブランコ外相は、日本移民は伯国に有利の心理からして、その字句を法文中より除去した。

一九一七年六月十一日、聯邦議會に初めて現はれた聯邦選出の下院少壮議員マウリシオ・パイヴァ・ラセルダの日本移民に関する演説問題は、新ナショナリズムの見地から、イグアツペ日本人移住地設置契約内容に関する質問であつた。同年十一月同議員が、同じくイグアツペ移住地小学校へ勤務の日本教員数名着伯の件で、日本人学校開設に関する質問書を提出し、その理由説明演説を行ったのも、やがて勃興する新ナショナリズムの発駆的見地から一應関心事されたものであつた。

イグアツペ日本人移住地に関係あるブラジル移民組合が、

マウリシオの新ナシヨナリズム演説に末梢神経を尖がらした。

マウリシオはアルベルト・トーレスの高弟の一人であった。

一九二三年十月二十二日、聯邦下院に提出されたミナス・ジエラエス州選出議員フキデリス・レイスの日本移民入国制限法案があった。彼レイスもアルベルト・トーレス派の一人であった。法案の第五條に、

「黒人種移住者のブラジル入国を禁ず。黄色人に対しては国内に在る同起原者の百分の五に相当する數に於て毎年入国を許可す」

との規定にしようと言うのであった。

これは前年、北米合衆国より「黒人を伯国マト・グロツソ州に移住させたら」との新聞宣伝に脅えた伯国は、これを拒絶するに法文として、シンシナート・ブラガ、及アンドラーデ・ベゼーラの兩代議士が提出した「黒人移住禁止法案」に、フキデリス・レイスが日本移民入国五分制限案を改めて末尾に添附したものであった。

この法案提出が新聞に現はるゝや、第一に反対意見を表示したのは、日本移民を有利として誘入しつゝある聖州上院であつた。イグアツペ日本人移住地設置契約を成立した前州農務長官バドア・サーレス上院議員は親日演説をした。概要旨は、

「日本移民と利害密接せる聖州は日本移民制限に反対する。若し吾国が豊富な労力を有するならば、或は某国の如く制限法を設くるもよからうが、我国は国土に対して著しく人口の不足を感じている処だ。吾人の経験からすれば日本移民の入国を増加はしても、入閣を妨げんとする如何なる方策にも同意することは出来ぬ。規定せられた入移民諸條件を満足させてる日本移民だからだ。吾人は進んで労働者及其傭主の利益保護を考慮せねばならぬ」として「一九二三年請願第一號」として、左の件を聯邦議會に建白せんと州議會に提出した。

「我国に好ましからざるもの以外の移民の入国に対する一切の制娘に反対する」

同上院親日議員フオンテス・ジュニオール、及ジュアン・マルチンス等日本移民に有利な演説をした後、州上院は右建議案を可決した。

これが聯邦議會に反映して、聯邦府第二区選出ドットル・ヴィセンテ・ソエレイラ・コスタ・ピラジペ議員は、議會で、該五條法案は「ブラジルの伝統を忘却し、吾人が採用せる宗教の至上教訓に違背するものである。提案者は戦等の影響により苦しめる歐洲人を多産多幸のブラジルに誘致するは人道上の義務なりと称へながらその人道なるものを有色人に及ぼさざるは甚しき不條理である」との趣旨を述べた。又「苟も性質善良にし て、吾人と共にブラジルの經濟的發展に努力せんとする者である限り、ブラジルの門戸は有ゆる膚色、有ゆる人種の人間に向つて之を開放して置かねばならぬ」と人種忌避的レイス移民法案に反対した。

該レイス法案は農工委員会附託となつた。

聖州第三区選出ジュアン・デ・フアリア議員は、聯邦農工委員会附託の報告委員となつたので、聖州農業協会の意見を徴して、日本移民に有利に結束した。

法案提出者レイスに反対し、院外のオリヴェイラ・ヴィアンナ等数名、代案第八條を提出した。その第五條に「黒人種移民ブラジル入国は之を禁止す。又黄色人種に関しては、各州に就耕し且つ既認的に農業者たる同人種に属するもの百分の五に相当する数の入国を毎年許可すべし。

（補款）若し孰れかの州政府と黄色人種諸国との間に、既に締結せる契約ある場合は、諸契約は本法に左右せらるゝことなきものとす」

との補款箇條を入れた。これは其翌年十二月末でおわつたが、其年の五月聯邦議會開会前、ブラジル醫学士院はレイス移民法案に称讃、二十八名の連署で決議文を公開した。この決議文は同院長ミゲル・コート博士が自作し、学士院に携帯

し、別段該院会員等の討議にもかけず、提示して即坐到署名を乞うたもので、会員中、カルロス・ヴェルネット、ジュリアン・モレイラエンリツケ・ロシオ、ジュリオ・デ・ノバエスの四博士はこの決議に反対し署名しなかった。署名者中にも日本移民賛成者あり、文句中日本移民の文字なきに氣附き御坐到に署名した会員もあつたと探索された。該決議文は「ブラジル醫學士院は、人は一國の伝襲財産で、ブラジルは此伝襲財産に留意し、その人種的構成を改良し、且、その社会的淘汰を主宰する最先義務を有すること。アジアの人民は其価値の如何に拘らず宗教、言語、性格、慣習の根本的相異のため、西洋に於ては絶対に同化せざるものなること。優生學上、及經濟上の法則は、該起原の分子ブラジル領土に入來するに反対なることを考量したる上、院則第二條に従ひ左の通り決議す。

一九二三年法律案第二九一號を修正し、毎年のアジア移民の数を既に各州に定着せる明かに農業者たる者の百分の五に減じたる農工委員会の修正案に対し、本醫學士院の讃辭を下院に呈す。

レイスの日本移民入國制限許可法案は、政治階級内部の意見分裂し、輿論化して可否二ツに別れた。日本移民に利益を穫っている州の輿論と、日本移民に利益のない州の輿論とである。

併して他の第三州の人々は、意見の把持者の地位と、各自の利益によつて各輿論に賛するのであった。

日本移民入國制限法案は、その意見の賛辭者ミゲル・コート博士の學說と、人格を本尊として輿論となつた。日本移民制限不可論は、聖州特定の集團意志の具體的の生活事實が、妥当とする政治階級者の輿論であつた。

聖市の國權主義者の団体「リガ・ナシヨナル」と、リオ首府新聞の「リオ・ジオルナル」は醫學士院讃辭の決議に共感

した

「コレオ・ダ・マニヤン」紙上に発表したリオ首府醫料大学教授ブルーノ・ローボの意見、「オ・ジオルナル」の社説、パウロ・タヴァレス、オット・ブラザーレス、フェリシオ・トレスの寄書等は、日本移民に制限反対氣勢をマチマチに挙げた。

斯うした情勢裡に、同年七月五日聖市にイヂドーロ將軍一派の革命動乱が起きた。この政界混乱裡にもレイス一派の日本移民入国制限運動は躍進して、パラナ州選出議員プリニオ・マルケス代議士の日本移民排斥演説、ミナス・ジエラエス州選出議員バザリオ・デ・マガリヤンエスも、インデオ保護演説中に日本移民をクサした。

聯都財政委員会はフランシスコ・シャールヴエス・デ・オリヴェイラ・ボッテリオを本法案の審査に当らすことゝした。

彼は日本移民誘入奨励意志を抱き、その目的の論據をうる爲め急遽聖州の日本移民現状を实地視察報告することにした。オサベイラは、当時リオ日本大使館囑託栗津金六を伴うた。一行の案内役は常時の海外興業移民会社聖州代理人山田揚之助であつた。モヂアナ線リベロン・プレットを振出にイガラパーバ駅に八田一藤の農業振と、その博愛的人格に感激させた。

「路傍の短銃騒ぎに一人の伯人カマラーダが弾に当つて倒れ、鮮血裡に呻いていた。醫師ははせつけたが治療費二コントスを要するとして手をつけない。是をみていた八田は路傍の人だが、二コントス支払を保証して醫師に治療させた。市民は八田の博愛俠氣に感激した」

アニニューマス耕地は海興の直営耕地だ。耕地支配人は矢崎節夫の伯夫人に、オリヴェイラの気分は至極和やんだ。日伯小学児童に国歌を合唱させ、バイレをやらせた。ノロエステ線の日本移民の植民生産振は数的に表が出来ていた。レヂストロ植民地の精米工場は南米一を誇ったものであつた。移民

会社は聖州珈琲耕地日本移民配耕四十四ヶ所耕主の日本コロノへの感想と感謝状を要意していた。これも好個の報告材料の一つであった

オリヴェイラの日本移民実情報告書は、財政委員会に提出された。調査書は十二名委員中三名を除き、九名の賛成を得て日本移民入国有利に可決された。

レイス泣案は当分握潰の態であったが、この二力年間に亘り六百余に上った対日本移民誘入制限論議に、吾が駐伯日本官憲は何んな態度をとったか。「入移民に関する立法行動は内政問題である。他国が干渉すべきでない」とノホホン主義をとったか。

当時の在伯日本大使は初代特命全權大使田付七太であった。

当時の日本は一等国と自他承認していた。日本は日清、日露、歐洲大戦も勝組と国威を誇った時代であった。その国の移民がブラジルで白人並に待遇されぬとあつては体面問題だ――と表面から一等国威を厳に示してみた処で移民を入れて呉れねば何うにもならぬ。

田付の苦衷は伯国政府当局の注意を喚起した。平素交際せる親日家の協力を要望した。聯邦及聖州議員の縁故をたどつて聯邦院内の有力議員に囑望した。院外の親日派フオンテス・ジュニオール、ジョン・サンパイオ、ジョン・マルチンス等へ依頼した。

聖州選出議員では、下院でアルチノ・アランテス、エドアルド・カント、カンデイド・モツタ、オリヴェイラ・ボツテリオ議員へ、パラ州選出のリラ・カストロ議員、リオ首府のネストール・アスコリ議員を動かした。

院外には土地植民局長ドウルフエー・ピニエイロ・マツシヤード、弁護士シモンエス・ローペス、中央農會書記長エイトール・ペルトラン等があつた。

人類学者ロケット・ピント教授も、同じくアルフレッド・

エリス・ジュニオールも起つた。モレイラ・ギマランセス少将も動いた。醫科大学教授ブルーノ・ローボ博士が日本人の爲め活躍し始めたもこの時以来であつた。斯うした人々の外に幾多の親日家が陰に陽に日本移民の制限法案に反対した。

レイスの制限派にも相当な人々があつた。黒人移民禁止の法案を前年提出していたシンシナート・ブラーガ、及アンドラデ・ベゼーラ両代議士は勿論レイス案賛成者であつたし、オリベイラ・ビアンナ（アルベルト・トーレスの高弟の一人であつた）レイス報告書委員たりしフアリア議員、パラナ州選出プリニオ・マルケス、ミナス州選出バジリオ・デ・マガリアンセス議員カミロ・グラテマ議員等々で、この日本移民制限派の中心的輿論着はレイス其人でなく、醫學士院長ミゲール・コート博士となつていた。ミゲール・コート博士はアルベルト・トーレスの思想保持者の友人であつた。

リラ・カストロ議員は中央農会を動かして十一カ條より成る移民諮問書を作り、六千通を印刷し各方面の有志に発送し、意見の回答を求めた。一九二五年一月のことであつた。

一、伯国への外国移民誘人は必要且有益なりとするか。その理由

二、伯国への外国移民誘入賛成なら、その移民は本人自發的渡来に待つべきか、或は進んで之を奨励するため伯国政府はこれに補助を與うべきか。補助するとせば如何なる程度にするか

三、其移民は白人種に限ると思考するか。白人種は此広大な伯国全土の何れの地方の風土にも慣れ得るものとするか。

して白人移民中特に可とする国民あるか。

四、黄色人移民に対する意見如何。

五、主義として黄色移民に賛成ならば無制限に其入国を許すか、或は何等かの制限を必要とするか、或は伯国の諸地方に分布すべしとするか。

六、黒人移民に対する意見如何。

七、主義として黒人移民賛成ならば無制限に其入国を許す

か或は何等が制限を必要とするか、或は伯国の諸地方へ分布すべしとするか。

八、特に貴下の活動せらるゝ地帯に於て、前記各種の移民は如何に善用すべきか。

九、伯国の農業に対する移民即ち外国人労働者に関し、以上の外、氣附きたる諸点。

十、内国人労働者は土地に愛着を感じ、之に定住して農牧を営むの能力あるものと思考するか。

十一、我国の生産を更に多量にし改良し、更に廉価にし以て我が農工業を發達せしむる爲に努力の供給以外、何等か労働率増進上の成案あるか。

六千通發送、回答來たもの百六十六通、農会は此等の回答を公表した。整理の結果、

日本人を可とするもの 七五

日本人を不可とするもの 七九

意見なきもの 七

伯国は全然外国移民の必要を認めず 五

計 一六六通

日本人を可とするものゝ中に制限主張者フイデレス・レイスの一票があつた。

右の七十五票の中、聖州よりの回答は四十一票で、日本移民可とするもの二十票、無條件日本移民入国賛成者はその中三票であつた。他は制限條件附日本移民賛成者であつた。(茲にアルベルト・トーレスの対日本移民觀が現実化したものであつた)

日本移民入国不可の七十九票は、日本移民を誘入してない北部諸州よりのものであつた。何故の不可か論拠を確かめ得ず、北部諸州は黒人が多く、黒人移民入国禁止、黄色人も亦と混同した位の不可でなかつたか。これを北米合衆国の排日論に感はされたものと感ずるは、北部人士の対北米思想を見誤っていた。

因に聯邦農会は、諮問回答書を大体に於て、日本移民は制

限の上誘入可と結論した。それでこのレイス法案は提案後四年余も尚ほ財政委員会に於て握り潰された態であつた。その頃田付初代大使は帰朝した。

一九二六年、ミナス州出身のアルツール・ダ・シルヴァ・ベルナルデス大統領が任期満ち退位した。その十一月、聖州出身のワシントン・ルイス・ペレイラ・デ・ソウザが大統領に選出就任した。彼の内閣の農相にリラ・カストロが、蔵相にオリヴェイラ・ボッテローが任命された。茲に於て政權を握れる輿論が、レイス日本移民制限法案を握り潰しの憂目に合せたは容易であつた。

ワシントン・ルイス大統領の日本移民觀は斯うしたものであつた。

「日本農民が珈琲耕地を出るということは、農民は既に土地を判別することを知つた。その土地を耕すことを楽しまんとして耕地を去るのだ。即ち珈琲耕地は日本移民にとって地主になる前の練習所で一時的な足溜りとしているまでだ」

ワシントン大統領時代、伯国は国際、特に北米資本が華やかに躍進した。駐伯日本大使は有吉時代であつた。

一九三〇年、任期満ちて次期大統領は選挙の結果再び翌州共和黨ワシントン大統領の後継者ジュリオ・プレステスと決定した。就任前の同年十月政敵リオ・グランデ・ド・スール州のデモクラシー黨は、聯邦政府に対して革命戦を起した。革命軍はサンパウロ市を占領した。ミナス・ジエラエス州の意嚮は居中革命軍に共鳴していた。伯国中央軍部又反旗を翻しワシントン大統領をコパカバナ要塞に監禁して退位をせまつた革命は上就した。

新憲法制定議會成立し、ゼツリオ・ヴァルガス執政官となつた。伯国政治はデモクラシー國家主義の擡頭時代相を現わした

アルベルト・トーレスの思想的政治色彩が雑音雑色を加味されて盛んに表はれた。この新ナショナリズムの思想圈内に

あるのが伯国医学士院長ミゲル・コート博士一派である。レイス日本移民制限法案が又復活した。

ゼツリオ・ヴアルガスが臨時大統領となった。

新内閣の農相にリンドルフ・コロールを据えた。彼は臨時政府令第一九・四八三號で、外国人三等船客の入国を制限した。内国労働階級の就職、保護及階級組織を完成せんとした令であつた。

移民制限は一時的のものであつた。移民の従事する職業種によつて制限した。外国農業者にして制規の資格を備えたものは制限外においた。日本移民は農業者として制限外におかれた。

毎年の誘人数を予め許可うればよかつた。リンドルフ・コロール農相の日本移民寛容にまかせて、一時歐洲移民の孰れよりも多く日本移民の数はうけ入れられた。全歐洲移民総数よりも日本移民の数が多きこともあつた。一九三四年に日本移民入国数は二一・九三〇名に上り、伊、葡、西、独の四国入移民数より五・六三三名多かつた。

この日本移民の誘入黄金時代にミゲル・コート博士一派は黙していなかった。新憲法制定起草委員会により一九三〇年革命後、揉みにもんで憲法草案が出来上つたのは一九三三年十二月 六日であつた。以後一九三四年七月十六日迄約七ヶ月間ミゲル・コート博士一派の輿論は、新憲法章案内の移民制限條項をリードした。

此間、駐伯日本大使は有吉帰朝して林久次郎大使時代であつた。彼は大乘的観点からか、移民問題に関し親日伯人方面に前任者等の如き工策をやらなかつた。

新憲法中に左の如く掲げられていた。

第二百二十一條

補項第六―領土内への移民の入国は、移民の人種的集結、竝に體質的、及市民的資格を保障するため、必要なる制限を受く。但し各国の移民潮流は、最近五十年間に伯国に定着したる当該国人の総数に対し毎年其百分の二の限度を超ゆる事

を得ず。

補項第七―移民の集中は聯邦領土の何れの地点に於ても之を禁す。外来分子の就地及同化に関する事項は、法律を以てこれを規定することを要す。

斯法通過後、旬日を出ですミゲル・コート博士は突如リオ市の自宅で歿した。

この二分制限法のため、伊太利移民は割当年二万七千余、葡萄牙移民は二万三千余、西班牙移民は一万七千余となり、日本移民は二千八百四十九名の移民制限数となった。独逸移民も日本のそれと各同数の入国数となった。

政治に於ては「嘘から出た真」と云うことは、常態だそうな政治的理論が抽象化された支配意慾の錯誤意識で、排日が行はれたかと想はれるが。伯国の国民統一的新国家主義組織の政治創設時代に、斯様なことは排日と観べきでない。

バルガス政府は一九三四年七月十六日新憲法發布した。翌日臨時政府主席から大統領にゼツリオは選挙された。一九三七年十一月十日、バルガス政府は自らクーデターをやり、この新憲法を廃し、聯邦上・下両院、議院、各州議會を解散してしまつた。一九三七年に新憲法をバルガス政府は發布したが、その中にも前憲法同様の移民二分制限規定條項は保存されていた。

生産国家が勞力不足する場合、他よりその需用量を満たす爲めの供給には、特別法を設ける処の憲法を改正しうる法があるであろう。

日本移民の伯国に於ける労働階級的地位の發展のために、歴史の事實は日系第二世の進出となり、第三世の躍進となつたのである。

バルガス執政の初めに當つて、司法当局は全国市民の「武器狩り」をやつた。それ迄は伯国内の人間は誰れでも自由勝手に短銃を買ひ、山刀を腰間に携帯しえたが、武器狩以後警察の許可なければ、兇器の販売と携帯を禁ずる法令を發布し

た。

伯国の未開自然は尚眩大だが、人間が勝手に武器を携帯していることは猛獣毒蛇に対する闘争ばかりでなく、人間同士間にも容易にあやまちが起っていた。武器を携帯せざる外国移民には、特に日本移民には言語不慣以上に武器携帯せる人間に対しては不安と脅威を感じた。武器狩後都市人の、田舎人の武器携帯者も少なくなつて、人間同士の激情から起る突発的流血の不安が非常に減少され、市民が皆丸腰になつた気安さが起つた。

一九四六年伯国新憲法の移民法案中に「日本移民禁止法案」が議会上程され、九十九対九十九の賛否同数となつた時、ミナス州選出の社民党代議士呂Meilo Viannaは議長として該法案採否の一票に否を投じて否決となつた。これは日本移民のための清き一票でなく、伯国新憲法のための清き一票であつたと観るべきであらう。該法案を新憲法に採択したら、伯国憲法の無恥をさらすもので、汚辱されたは日本移民と観るべきでない。

終戦後の邦人内訌

時局認識運動と臣聯、及在郷軍人会、特攻隊

母国多年の軍事教育思想養成に困り、終戦前は在伯日本移民も母国民同様「一億一心、日本不敗、東亜共栄圏建設」に同化していたのであつた。八月十四日の終戦の詔書が前もつて何等の予告なく突如として放送された。

二兵と雖も皇軍の兵は降伏を恕されぬ。笑つて皆斃れて行くのに、その大元帥陛下が御降伏の詔書を下し賜ふなんて什麼」

というのであつた。斯くてその日より在伯日本移民間に笑が失われていた。

次で東郷外相の在外同胞に送ったメッセリジがラジオで放送されたが信ぜない者が多く、在伯日本人社会は戦勝組と敗戦組とに分裂し始めた。

「二億一心、東亜共栄圏の建設の夢は今更軍部のみが叫んだ聲でない。日本人の特に海外に居る日本人が皆合唱した聲であつたのだ。何で敗けよう、敗けられよか」これが戦勝組日本人の信仰となつた。

九月末日、舊常盤ホテル廣間に於て、宮腰千葉太（東海興伯国支店長）、宮坂国人（元ブラ拓専務理事）、資本商蜂谷専一、下元健吉（コチア産細前専務理事）、野村忠三郎（舊文教普及会長）等々主催の終戦認識座談会を開いた。（古谷、脇山、山本等の發起人等は不出席であつた）。集会する者奥地都市邦人百余名、宮腰の弁も宮坂の弁も効なく、下元の弁は勝戦者へ弾壓的言辞となり「俺の首をかける」「腹を切る」態の異情脅威的感情へとすみ、熱弁は聴衆者中の戦勝者一派に反感を惹起し、敗戦者に対し抗争的感を一層芽ばえさせてしまった。

結果は直ちに現はれた。宮腰、野村、横溝、中西等、敗戦認識宣伝隊がソロカバナ線の族から空しく帰つた。そこには敗戦を語るものゝ生命を脅やかす戦勝認識党の行爲が現はれていたのであつた。

敗戦認識宣伝運動をつゞける当時の支配階級は、次の如きパンフレットを謄写版もて三千枚聖州日本人社会へと撒いていた

在伯同胞諸君

下名等ハ茲ニ聖市警察当局ノ了解ヲ得テ、祖国ノ直面セル難局ニ関スル帝国外務省公報ヲ諸君ニ御伝達申上マス。

此ノ公報ハ別添訳文ノ通り、八月十四日喚発ノ御詔勅ト、在外同胞宛ノ東郷外務大臣ノ「メッセーヂ」トヨリ成ツテ居リマス。公報接受ノ経路ヲ申上マスト、八月十四日大詔喚発直後帝国外持省ヨリ在瑞西ヂエネバ萬国赤十字本社ニ打電

シ、赤十字本社ハ九月二日在ブエノス・アイレス「アルゼンチン」赤十字支部へ向ケ電報シ、アルゼンチン支部ヨリ「ブラジル」へ郵送九月二十九日ブラジル赤十字支部長「エー・ヘーグレル」氏ヨリ在聖市サン・フランシスコ学院長ギード・デルトール神父（目下日本の權益代表国瑞典ハ權益事務ヲ停止シ居リ「ギード」神父ハ加特カ日本人部ノ「ヴィガリーオ」ナルニ因ル）宛ニ郵送シテ参リ、十月三日私共ノ手ニ入ツタ次第デアリマス。

公報ノ全文ハ仏文、御詔勅及「メッセーヂ」ハ英文デアリマスノデ、御詔勅及「メッセーヂ」ワ日本語ニ翻訳シマシタ。訳文ハ出来得ル限り遂字訳ニ致シマシタガ、何分翻訳デアリマスノデ、字句ニ於テ後日原文ト多少ノ相違アルヲ免レマセン。只内容ハ些カモ誤無キヲ期シマシタカラ左様御諒承ヲ願ヒマス。公報ノ前文ニ「敵国又ハ外交関係断絶国ニ在任スル帝国臣民ニ於テ、或ハ重大ナル行爲ニ出ヅル惧ナシトセザルヲ以テ此ノ公信伝達望マシキ」旨ヲ記シテアリマス。

今ヤ祖国日本ハ建国以来未曾有ノ国難ニ直面シテ居ルノデアリマス。此ノ国難ヲ切り抜ケルタメニハ、畏クモ御詔勅ノ中ニ拝シマス様ニ、忍ブベカラザルヲ忍ビ、堪エ得ザル苦難ニ堪エ、如何ナル感情ノ激発ヲモ押ヘテ、一致団結、一意専心新日本ノ再建ニ邁進スル外ハアリマセン。何卒御自重御自愛アランコトヲ切ニ祈リマス

昭和二十年十月四日

脇山甚作 古谷重綱 宮坂国人 蜂谷専一

山下亀一 山本喜誉司 宮腰千葉太 （順序不同）

當時在伯日本移民の大体は左の型に入っていた。

一、敗戦の現実を認識している者

二、母国が戦争には敗けても「敗けた」と言動に現はさないことが日本国民の道義だと道義にこだわり苦悩する一派の人々

三、日本は常勝戦国だ、敗けたなんて嘘だ、と単純に敗戦

宣伝に反抗している人々。

四、「敗けたより勝ったがいゝ」を標語に、自己の商売に「勝った勝った」を利用し始めた人々。

五、戦争にはほんとうは日本が敗けたそうだが、勝ったと威張る組が多くて強いて、捲かれていよう。

斯うした人々の思想傾向を、組織の力によつて臣道実践の名目で勝戦派大衆をリードしたのが在伯日本移民の「臣道聯盟」であつた。

日米開戦勃発直後、山内清雄元陸軍大尉は在伯の予後備軍人同志間に会を組織せんとし、是を脇山甚作（元陸軍大佐）に謀つたが、当時脇山は州の社会保安警察に召喚、一時保釈の身柄故に会の組織の發起人を断はつた。山内は吉川順治（元陸軍中佐）に謀り同意を得たので、趣意書を執筆し、興道社を組織した。後これが改名されて臣道聯盟となつた。

（斯名は尾崎信義が発議改名された）

聯盟の組織強化広大者は根来良太郎、渡眞利成一等であつた。終戦直後、奥地の臣道聯盟各支部より祝賀費を五コントス本部は徴集したが、日本から使節も来す、軍艦も来航せないで、該祝賀費は本部より支部へ返金すべしという派と、返金不用派と分れた。そこえ幹部役員は月給制度を渡眞利一清が主張した。茲に臣道聯盟の精神運動に争闘が起き、聯盟内の一部に芽ばえていた在郷軍人会は聯盟と袂別して独立の会となつた。

一九四五年末であつた。

この袂別前、吉川理事長は病氣の故を以て理事長の権限一切を根来良太郎に譲つていた。

臣聯幹部の山内が脱退して、在郷軍人会を組織した。山内の後任に招かれたのが木村貞治であつた。在郷軍人会は創立発展間もなき一九四六年二月五日、治安維持警察に召喚収監、一月廿九日当局の命により協議解散したが、会は終戦直後、趣意書を謄写版にして撒布した。その要点は、

「日本精神を昂揚、能く和衷共同、以て在伯同胞をして一人も余すことなきよう報国精神総動員を行い、天業扶翼、大東亜の新秩序建設運動に邁進すべきなり。茲に在伯在郷軍人会を組放し一致団結、難境突破に邁進すべきと共に、互に輕挙妄動を戒め、流言蜚語に迷はす、大皇国民の態度を以て本旨の貫徹に邁進せんことを希ふ云々」であつた。彼等在郷軍人会も終戦後尚ほ東亜の新秩序建設運動に邁進せん的主旨が明らかであつた。

特攻隊の活躍始まる

一九四六年三月七日夜、ソロカバナ線のブラジル柘植組合開設の植民地バストス中央市街地に於てバストス産組理事長溝部幾太は屋外便所に出た処を拳銃もて暗殺された。犯人も暗殺原因も当分不明であつた。或は世間に噂される臣道聯盟、又は在郷軍人会と関係、謎の特攻隊なるものゝ仕業でないかとあつたが州当局の調査によれば、後に特攻隊員山本悟（廿九才）を容疑者とした。

次で同年四月一日払曉五時半、元亜国日本公使古谷重綱（七一才）は其自宅（聖市）に於て同じく特攻隊なるものにより屋外よりピストル襲撃されたが、何等殺傷者はなかつた。現場夜警により犯人二人は逮捕された。渡邊達夫（卅三才）、池田満郎（卅一才）であつた。この朝同時刻に聖市郊外自宅に於て元文教普及会事務長野村忠三郎も特攻隊員に襲撃され、蒸野太郎の拳銃下に絶命した。

四月四日、日本人権益代表のスエデン公使館は、ブラジル外務省認可の元に告示を日本人コロニアへ撒いた。同公使館用紙に公館カリンボについて、ポツタム宣言の條項日本の受諾、その後の詔勅、外相の在外同胞へのメッセーヂ、東京灣頭ミゾリー號上の降伏條約、日本帝国の再建等を並べ、終りに「上述の事柄を完全に履行する爲には、在伯日本人は明らかにブラジル国及日本社会全般の利益に反する行爲を有す

る非合法的結社、或は団体とは断然関係を結ばざる様されたし」とあった。奥地にこの布告が撒かれたのは四月中旬であつた。

四月十七日パウリスタ線マリリア市に於て、時局認識敗戦派の渋谷兼三、林久光、三浦勇の三名は短銃襲撃された。犯人は特攻隊員福間忠、中村秋水で現場でつかまつた。

時局不認識をなげき、不認識者へ挑戦約言辞をもて認識宣伝の檄を飛ばした認識極右が聖市にあつた。河合武夫、今本淨、谷垣皓巳、菊池英二等であつた。戦勝、戦敗両派の感情を益尖鋭化した。

同四月卅日ソロカバナ線バストス植民地にて池田正雄は、一少年がおきさる爆弾に軽傷した。翌月一日、本田正雄、草原義松も同様爆弾を送られしも被害なく、林ジョン、大場八郎、山中権吉、阿部八郎等は箱仕掛の爆弾を送られ孰れも軽傷した。

犯人は挙らなかつた。

根来良太郎が臣道聯盟理事長となつて以来強化された聯盟会員数は十三萬と號した。会費集積の資金額も相当額になつた。

母国終戦の大局面転向に会員十三萬の支配的地位を維持してゆくには、支配者一般が必須とする政治的技巧を弄せねばならぬ然らずんば支配的地位を潔よく放投するより外ない。支配権を維持するか、放投するか。茲に臣道聯盟幹部の現実の苦悩があつた。錯誤魔術と知りながら、母国防戦の虚報がうち上げられた。日本不敗、勝戦の観念は被支配多数の日本移民の感情に快感をいやが上にもそゝつた。敗戦派はその觀念戦勝の快感を敗戦現実苦悩へと導き、母国終戦後の惨禍認識を企図した。それが在伯日本移民の舊支配階級の宮腰一派であつたが、時代は移つていた。彼等舊支配階級の構威は地に落ちていた。

「資金と政治権力のない支配階級は段落する」彼等舊支配階級の資金は敵性国家の資金として凍結されていて、認識運

動の役に立たなかった。彼等が持てるものゝ如く信じ錯覚した政治権力は、駐伯日本官憲の当地撤退と共に消滅していた。それでも彼等は伝統の余栄をかりて当国官憲に縋り、政治資金を聯さか消費し得たで、臣道聯盟支配階級と抗争して「敗けた」「勝った」の民族的内訌を起していた。

一九四六年五月一日、聖市郊外ジャバクアラ街道にあつた臣道聯盟本部は、州当局保安警察の手が入り家宅搜索され、幹部員其他召喚抑留されてしまった。其後訊問の結果、同年七月十三日政治犯としてアンシエタ島に一団は幽閉された。最初は百廿余名も抑留された。

臣道聯盟本部員等の収監と同日、岸本次男は翌市郊外ペニア区の自宅より保安警察の召喚をうけ、翌日伯国首府リオヘ護送された。岸本は帰化伯人で、臣道聯盟と暗々裡に何等かの連絡あるものと一般日本人社会より噂されていた。

臣道聯盟本部員等の収監潰滅されるも、特攻隊の活躍は其後益々テロリズムを發揮した。

同年六月二月夜、聖市郊外ボスケ・ダ・サウデの自宅に於て退役陸軍大佐、元在伯日系産業組合中央会理事長脇山甚作は特攻隊に訪問され対談、「軍人として日本の敗戦を認識宣傳は不忠であろう」と短刀を差出され自決を迫られたが、肯んぜざるを以て、特攻隊員は起立礼を正しくし拳銃を以て射殺した。犯人三名は其夜直ちに中央警察へ自首し出た。北村新平（卅二才）日高德一（卅一才）、山下博美（廿二才）であつた。斯の特攻隊員の措爲行動振は、特攻隊中の華型であつた。

この事あつて以来、特攻隊事件は約一ヶ月絶えていたが、七月十日夕刻ノロエステ線プラウナ町に雑穀仲買商八木勝男が三人の日本人に襲はれ、その二人は彼の知人であつた。同日同刻同所に於て森吾一、森丸伊の二人も日本人に短銃射殺されていた。その翌々日の夕刻、同線コロアド駅奥のミルアルケレスに於て富永一衛及其妻カネ子、富永弟、松山秀夫、豊田重男の五名は二人の特攻隊員の短銃及短刀の襲撃をうけ

孰れも負傷、豊田は翌日ビリグキ、サンタ・カーザで死亡した。この犯人は、藤本明（廿四才）、名和昇（廿五才）であった。

同月十六日夕、同線ビラキ郡ピアカツウにて佐幕内勇は、二人の特攻隊員に短銃射殺された。以上の犯人共の指揮者は、伯名をジョアキンと称する卅一才の加藤仁三郎であるとされていた。

七月十六日夕、ソロカバナ線のバストス植民地に、前南米銀行同市支店長山中弘が、二人特の攻隊員のモゼル短銃に狙撃され軽傷を負うていた。その翌朝はノロエステ線カラエラシジャ町に於て、穀物仲買の楠木正年が射殺され、齒科醫の今井某は短刀もて重傷を負うた。犯人は後藤圭司であった。その翌々朝同町の竹内豊次も五人の特攻隊員に襲撃されたが負傷せなかつた。同日朝リンス駅奥ゼツリーナ町に於て、第二上塚産業組合理事長堀内藤次は短銃射殺された。犯人は櫻井次郎（廿九才）であつた。

七月十八日、ドウラデンセ線ボルボレマ町に於て岩田徳三も殺害された。彼等犯人は岩田の妻に置手紙して「神風迅雷特攻隊」と告げた。

テロ行爲はパウサスタ延長線へ移つた。七月十八日初夜ルツセリア区イヌビア町に於て、浅野利実は反臣道聯盟者として、特攻隊員に短銃襲撃され重傷を負うた。犯人は逃亡中である。

同日廿三日真夜中、オズワルド・クルーズ町の鈴木出世宅に放火したものがあつた。現場に石油空ビン数本を当局は押収していた。同日同刻同町の阿部豊宅床下にボンバを仕掛けたものが爆発して同町人の眠をさました。同日夜バストス植民地カスカッタ区の草原某は屋外にて八発の短銃狙撃をうけたが無事、彼は直ちに当町警察へ報告した。

七月卅日夕、ノロエステ線グリセリオ駅奥のペロバール区街道に於て稗田鶴吉（六十才）、及福島某は臣道聯盟員によつて獵銃狙撃され、稗田は後日死去した。

八月九日初夜、パウサスタ線ツパン市郊外に於て渡部某、短銃狙撃され犯人は逃亡した。八月十日朝マリリア市サン・ルイス街居住平田義雄は短銃弾に斃れた。犯人は伊藤憲一（廿八才）ノロエステ線カフエランジャ係の特攻隊員であつた。

八月十一日ペンナポリス駅に於て藤原悦次郎は、襲撃され軽傷を負うた。八月十六日午後四時ツパン市に於て岡崎司三はピストル狙撃をうけ殺害された。犯人はノロエステ地方特攻隊の組総督加藤恵三の次男加藤幸平（廿六才）ピリグ牛在住者であつた。同日同時同町の新田実も拳銃射殺された。犯人は平間俊雄（廿七才）であつた。同時刻に同町の大原守郎も狙撃された犯人は宮原昇（卅三才）町の群衆により「リンチ」されかけたが警察員の手に生命は安全であつた。

斯くて一九四六年も暮れた。翌年一月六日午前九時、聖市アクリマツソン区オニブス停留所に於て、幼児を抱ける鈴木正二は特攻隊員に射殺された。犯人はキンターナ特攻隊員と称す押岩高雄（卅八才）、蒸野三蔵（廿六才）、三岳久松（卅二才）、向井勝利（廿八才）であつた。斯の特攻隊総指揮者は坂根英一（卅六才）で、向井勝利と共に逃亡中である。鈴木正二は彼の妹婿森田芳一（スエーデン国領事館内日本人權益部主任）との人違いの犠牲になつたものであつた。

以上特攻隊員と称するものゝ活躍は、ソロカバナ線に於て八件（バストス七件、死亡一、軽傷四）ノロエステ線に於て十件（死亡六、重傷四、軽傷二）聖市四件（死亡三）パウリスタ線九件（死亡三、重傷四、軽傷二）ドラデンセ線一件（死亡一）合計三十二件。

対照被害者は日本人であつたが、茲に一つ伯人に危害を及ぼした事件があつた。一九四六年七月廿九日夜十時過ぎ、ノロエステ線コロアド駅奥ミルアルケレスのクアルテロン監査役オデオンドレイラが、臣道聯盟員と称する一日本人に短刀もて襲われ重傷を負つた。被害者伯人も日本敗戦の宣伝者であつたものであろうか。日本人被害者全部も敗戦日本の宣伝

者であつた爲め、被害者となつたと見做すべきであらうか。生活の本質と関促なく「生活の手段に戦勝を語り敗戦を談じたりした」在伯日本移民であつた。これは戦時非常生活の上から許されない筈の在伯日本移民の生活が、平常の社会生活を許されていた（在北米日本移民は社会生活を許されなかつた）処から内部闘争が新たな興味をもつたのであつた。結果は邦人社会の秩序を益々混乱に導く兆候を現わした。舊支配階級は資金も続かず、臣聯と不即不離の特攻隊と称する直接加害行動隊に脅かされ、神経衰朽に陥り、隠退するが自己保全の道であるとし、御座なりの啓蒙運動を停め沈黙し、茲に特攻隊も臣道聯盟員もその取巻連も、伯国当局の政治警察権下に一掃された。

新くの如き民族的内訌は、今度の終戦に於て始めて現われたものでなく、日本歴史上にも度々起つていたが、在外日本移民間の事件としては今度が色彩を鮮明にした。

民族の歴史が転向に際し、後退しては躍進する様に、在伯日本移民の社会も日米戦争中の空白時代を終り、臣道聯盟事件、勝戦派、敗戦派と対抗的混騒に陥り、日本移民の生産文化面を一時荒廃させ、退却させたが、これはやがて大飛躍の前の反動である。反動のない処には大飛躍は出来ない。譬へば野球に於ても、バッターがヒットをカツ飛ばす時は、構えたバットを体の後方にひき、その反動でボールを打つ如く反動あつて大飛躍するそれが歴史の径である。

コロニアの料亭物語

日本移民が全サンパウロ州に散在して、移民の懷があたゝまらない幾年かは、移民の集る聖市にも料亭は生れなかつたが、闇に咲く花は聖市のそれ者街のオウロオラ、イピランガ、チンピラス等々街に、アザミの如く咲いていた。ブラジル日本移民が家族移民の効あつて、闇に咲く花の物語は四拾

年史に少ない

コンセレイロ・フルタード街に「鶴の家」が出来て、おつるの爪弾く三味の手に一杯つがせ、鰯のオサシミたべて移民のオツサン達がトウゼンとなり出したのは一九一九年頃からで、コチア村にはイモの花さき、モンソン植民地には棉の花さき、モヂアナ線には稲の花さく時代となっていた。

おつるが秘かに独占した情人がいなくなつて、おつるはアルゼンチナに移り去つた。その後に富田家」が現われた。女給のシャンが三、四人。その頃コンデ街に青柳の料理一式がエビのテンプラやテンドンにオシンコそえて一杯のませていた。一九二一年からであつた。そこにはフクスマ訛のアツパツパ着た二人のムスメが、お盆にのせたおあつらえを、狭い部屋々々にはこんでいた。

柔道とりの大森が料亭をやり、三人の女給をおいてたのもつかの間だつた。青柳がコンデ街からフルタード街に移り、シャンの十人に給仕させて、オーリヨクコン節の蓄音機かけてた頃 斜向いの富田家は全盛時代で十五、六人のシャンが居て、日本間の二室も構えていた。一九三〇年頃で、コンデ街には月子の日本亭が桃中軒擬いを唸っていた。

エスツダンテ街に青柳が移り、その女給のお梅が別れてコンデ・ピニアル街に「梅の家」の女将となつた。シャン処が四五人居た。七、八人となつた。青柳がタバチンゲラに移つた頃はシャンの数も三十三人の大世帯で、これより先に老シャンのお文が同じ街の軒に「文の家」の紅燈をかゝげていた。その家に三味の艶音が漏れていた。

日本亭の月子が都落して、マリリアに「二力亭」を始め、日本亭には綾子が女将した。パツと咲いた椿の花のような花子がいた。一九三三年頃であつた。コンデ街に鉄の門内に青い灯の一方亭が出来たはその後であつた。

タバチンゲラに「エミチヨウ」が軒燈した。その頃エストランジエロ、情緒たゞようサントス港に「波のや」が出来て、日の九マドロス共をよろこばせていた。

シヤン達がタバコをのむに、移民のサムライ共はその煙にまかれてた。青柳に日本間が二つ構作して、金魚池も松の盆栽もそえた。絹の座布団に「おシボリ」をはこぶシヤンの腋から、金ツル香水の微風もそよいだ。何とか大佐のハツコウイチウの額も誤字でかゝった。アヅマキリンがサムライ共をトウゼンとさせる。都には生活があり、農村には唯生存があるばかりと移民のサムライ共も悟り出した。

邦人界に日本の資本が進出した。プラスチック棉屋や、東棉が、日本棉花が、船会社が、東山が、日拓が、貿易商が等々、ソロ盤もつサムライと共に、クワ持ちサムライとが混宴して、料亭は百花ランマンの夜毎が続いた。

戦前華やかなりし頃でも、料亭のシヤンと愛慾の憾をのみ合つて天国行きたり、血なまぐさき紅燈哀史を彩どつたものは一つもなかった。唯一つ、お領事様の前額に、コップをハツシと投げつけた船会社の支店長のユーカン・サムライがあった。

富田屋でのエピソードがそれであった。

移民紅燈史は至極平和裡に日米開戦の開幕と共に、一発終止符を打つたと想つたが……。青柳料亭に二十六人のシヤンシヤンをおンパレードさせて、ルイス・ゴエス街に舞台をかえて紅燈かゝげた。日本間も繁昌した。伯人のケーイージのサムライ方も毎夜アズマ・キリンに東洋情緒を満喫した。青柳亭主は福の神の如く、伯人サムライ方からパイ、パイとなつかしまれた。

戦時中聖市グロリア街にも紅い軒燈がかゝった。モーカ街にもクロネコ亭が軒燈をかゝげた。奥地プ・プルデンテに双葉亭があり、ロンドリーナにはカフェーザル中に「シヤカラ亭」があつて、活達自由の別天地の春景を演じた。アラサツーバの東雲もシヤンハイ女将に賑つてた。ツパンにも紅い燈が一軒あつた。

終戦と共に三階建新築一千コントスで、ジャバクワラ奥へ青柳が引越したは一九四七年であつた。日本間が八、西洋間

が二所謂日本趣味の庭園に、おさだまりの五重の塔や石燈籠もたてた。松の植込、金魚の池も造った。美女給（トテシヤシ）の数も三十有七、春樓に満ちたが、新舊女給のアツレキと亭主の采配の振方が何うお氣にふれたか、若き花形女給十人レボルトゾして、同じジャバクワラ街道に「花月」の紅燈が軒にゆらいだ。一九四八年の五月の秋晴であつた。

サントス港に聖市グロリア亭の文亭が出来て軒の紅い燈が汐風にゆられている。

頬紅の起りは支部で、頬紅をつけた女性は何のさわり中のシンボルだった。花柳界のソレ者で、頬紅つけたものは税金がかゝつたそうだが、時代はかわつた。都市は頬紅つけた女性のオンパレードだ。料亭では頬紅つけないとチップが上らない。

万葉時代に「酒のまぬ人をよくみると猿にも似る」と喝破して、小道徳にこだわる人間を嗤つたが、今やアズマ・キリンのかわりにコツカ・コーラが料亭にも流行り出している。三味線や喉のかわりにレコードが流行り出した。昔も今も変わらないのは春心であり懷具合である。日本移民社会の料亭物語りである

移民の挿話（エピソード）

日本移民の流れは南米大陸より北米大陸へののが早やかつた。

北米日本移民の小話焼直しがブラジル移民社会に相当輸入されている。例へばG o h o m e ばかり喰っているて金がたまらぬ：と家庭労働生活者の北米一口話を、ブラジルの日本移民社会につたえたのは、一九〇九年北米崩れの井上新平法学士であつた。

それを真似て在伯日本移民間にも、故里へ V a e E m b o r a ばかり喰つてるので金がたまらぬ、と書いてやるこ

とが流行った実相はあつても、思想は北米日本移民ものである。斯うした北米擬ひの移民小話は茲にはぶいた。

南米ブラジル日本移民独自の小話として、歴史の挿話に左のものをのこすことにした。

鈴木南樹著「ブラジル日本移民の草分」中に、斯うした実詠が史実としてある。当時移民四十年史の著者も移民の一人として居たので、是が実話であるので茲に掲載することにした。

移民収容所での第一回

移民女性の伯国語勉強

第一回移民が着くと其服装の珍妙なのが眼についたが、ブラジル語を習得しようとするインテリ女性の熱意も際立って居た特に若い娘さん達が、実物を指して「コモ・セ・シヤマ」の一語に、何も彼も片っ端から聞きただしては帳面にかきつけた。

到着後三日目の朝であつた。当時の所長はフラガ氏であつたが、少し早目に出勤すると、収容所玄関の石段を上つた所で、日本娘に包囲されてしまった。

「ボン・デイアー」 「ボン・デイアー」

茲までは無難で、所長の機嫌もな々めならずであつたが、一人の娘がつと進み出て、自分の眼を指さして「オ・クー」と発音した。もう一人の娘が自分の鼻を不して「カラリヨ」、他の娘が口を、見せて「ブセッタ」と発音した。日本の娘さん達は、伯人に在伯三日にして既に是丈けのブラジル語を覚えてたという様に、さも誇らしげに微笑した。

所長フラガ氏が、娘さんの一語が発せられる毎に満面朱をそゞぎ、最後のブセッタと云う言葉を聞いた時にはブルブルと身慄ひして居た。それでも所長は僅かに「エスタ・ボン」と云つたが、すぐ身を転じて掃除人夫の係であるエルクラノ氏を呼び全人夫を食堂に召集した。

「君達は日本人に向つて何というバカバカしい事をして
いる。

日本人は恰も小児の如く無垢である。以後彼等に、間違つ
た卑しむべき言葉を教えたるものある時は、断然解雇するこ
とを断つておく」

所長フラガ氏は、荒々しく斯う云つてから、私に向い、

「ススキ、お前もいかんじゃないか」

然し私は八百人の日本移民を、ほとんど一人で処理して居
たので、移民收容所の隅々まで眼を光らすことは、人間業で
出来る芸ではなかった。

インテリ日本娘の得意になつて所長に喋つた「オ・クー」
等の言葉は、收容所内の掃除人の一黒人が教へたものである
ことが後で明らかになった。

坊主が出そで

葡語がわからないのは移民ばかりでなかった。この移民統
率者の皇国植民会社長水野龍もその一人であつた。

一日、藤崎商会の後藤武夫の案内でボスケ・ダ・サウデに
鉄道馬車でピクニックした。事前に掲げた「行先案内符」の
— Bosque da Saudé を見て、水野はこれを発
音し「ポーズ ガ デソデ」と讀んだ後、「後藤さん、坊主
が出そで——とは何んという意味ですか」と訊ねた。

水野龍社長の秘書——帝大法学士上塚周平移民会社伯国代理
人も葡語のわからぬ一人であつた。後藤武夫の案内で一夜活
動写真をキンゼ街に觀に行つた。活動写真（当時映画とは未
だ言わなかつた）館前の立看板 Cinematografico
を、上塚は「セト モノガラス」と発音した。

日本移民はサラメが嫌い

移民收容所を出発して耕地行の移民には、途中汽車の中で

の昼飯かはりに、收容所ではポンとサラメを渡した。ポンはいゝとして日本移民にとつてはサラメは奇怪なものであつた。或移民はサラメをいやがつて、汽車の窓から捨てゝいた。「馬の珍寶のごたるもんな、胸んわるか」というのだ。

アングーと茶碗の交換

耕地に着いての或日、日本移民の一人の妊婦は、外人の宅をのぞいたら食卓の上に、湯気の立つ卵焼の大きなものが大皿に盛られてあるのを見て垂涎をのんだ。彼女は急いで家に帰り、日本から持つて来た飯茶碗を一つもつて出かけ、その卵焼と交換を手真似でやり、もつて帰り喰つた。始めて「アングー」なるものを知つた。日本移民間にアングーが一時、卵焼とあだなされて流行つた。或者は「アングーでなくあれはポレンタだ」と覚え、或者はアングだと口角泡を飛ばして主張し合つた。アングは伯語であり、ポレンタは伊太利語だ。それはトーキビ団子である。

オケーとは桶だ

移民が「コモ・セ・シャアマ」を振りかざしてきく時、伯人の應對は毎度 O que である。或る移民の女房は耕地のアルマゼンに買物に行き、伯人番頭が頻りとオケー・オケーを繰返すのに業を煮やし、近くの我家から日本伝来の桶を持ち行き、桶の底を叩いて「ジャポンはこれがオケーたい」と逆襲した。出齒の女房であつた。

汽車の只乗り

日本移民耕地遁亡の先がけ者ではないが、サンマノエル駅のリブレード耕地へ配耕された山口移民の船中監督着実来虎之助の構成家族者藤本秀男（十八才？）は、同耕地最初の遁亡移民であつた。彼は切符も買わずと汽車に乗つた。汽車の中で一度車掌にビレイテと聞かれたが、「ノー・ノー・ノー・

サン・パウロ」といつたら只乗せてくれました、と聖市で上塚代理人に語っていた。ソロカバナ駅からカレガドルに伴れられてサンベント街の藤崎商店人事務所に来た。そこから移民代理店のロドリゴ・シルパ街に送りつけられた。カレガドル賃に二ミル払った。一回移民当時は斯うした暢気なる社会であつた。

日本語覚えた伯人

フローレス耕地に入耕した第一回沖縄移民から覚えたものがイツー町に居たジヤイメ某は独系伯人であつた(非常に日本人好きで、彼は後聖市に移り、市の日本人病人をサンタ・カーザに世話し、又は家庭奉公口を周旋して呉れた。

その時、日本語の通謀振りは「主人私云う、貴方月給十円(ミル) 年寄被服皆主人」年寄被服皆主人は「古着は主人が呉れる」の意味であつた。彼と市街を歩く際、大きな綺麗な建物の前を通ると「これは大学校です」で、すました。お寺の前を通ると「帽子をぬぎなさい。これは鎌倉です」とおしえた。

始ての棄児の話

第二回移民でジヤタイ耕地の被迫放者(名は秘す) S 家族には生後四、五ヶ月の赤児がいた。耕地を追放されてこの家族は兎に角聖市へと行く積りで汽車に来つたが、汽車をサン・シモン駅で乗換へねばならぬ際、父親は母親にせまつてその乳児をひったくり、駅より小半町の売店の横手に棄て、汽車に乗ってしまった。聖市に着いて、父親は職をさがし働きはしたが、ラツパ区方で母親は乳のみ児を想ふて日夜泣き暮した。母親の慈涙は悪魔な父親を遂にうごかして、幾日かの後、棄てた乳児さがしにサン・シモン駅へと父親は出かけた。乳児は伯人の家庭にそだてられていることをつきとめたが言葉の不通な処からその日は交渉せず空しく父親は帰聖

した。

数日後移民会社代理店の仁平通訳を件ふて、又サン・シモンに出かけ、棄児を伴ふて帰り母に渡した。

荒木又右衛門と鍋蓋取太之助

第二回移民の青年二人が聖市で職にあふれ、アララクワラ線の鉄道工夫へと應募して出発した。その当時、サントス市で初めての邦人刑事問題が起き、犯人を警察で搜索していると伯字新聞にも書かれ、邦人社会の話題になっていた。

この二青年が汽車でリオ・クラロ駅に着いた時、客車内に大入道の黒人巡査がやって来て青年に近づき「オ・ジャボン・コモ・セ・シヤーマ・ボッセス？」と訊ねた。二人の青年は早速日本語で偽名しようよと密語した。查公が、コモ・セ・シヤーマを繰返して彼の手帳の文字を見た時、青年の一人は「荒木又右衛門」と答えた。他の一人は「鍋蓋取太之介」と答へた。

巡公は手帳の犯人名綴りと比較して、「エントン・デフエレンテ」と独語して二青年から遠ざかって行った。二青年は顔見合せてホツとした。その青年の一人鍋蓋取太之介が俳人鈴木抱春である。

二人で一人前の通訳

一九一二年、東洋移民会社の輸送する第一回移民船がサントス港に着く前に移民会社代理店では各耕地へ日本移民葡語通訳を舊移民中より撰択した。当時は通訳になり得るインテリ青年が少なかった。それで二人で一人前となる通訳が現はれた。当時リオ市で伯人家庭にコッペーロしていた第一回の神俣爲蔵と第二回移民の河野某がそれであった。

神俣は伯語は喋べるが文字は読めも書けもせなかった。河野は伯語は喋れぬが字が読めて書けた。二人で一人前の通

訳として耕地に日本移民をつれて行った。

日本人は人喰人種

モヂアナ線バク、エス駅のフローレスタ耕主ドットル・オノリオ・マッシャードが移民会社代理人明穂梅吉への話であつた

当時同耕地には南欧移民のコロノが多かつた。そのコロノの女房達が七、八名結束して耕地の事務所へ押し寄せ、「今度本耕地に日本移民が二十家族来る相だが、若し事実なら直ぐに妾達を退耕させて貰いたい。大体日本人は子供を喰ふ人種だといふ事だから、私共が連れている四、五人宛の子供を喰はれては大変だから、日本人の来ない内に耕地を出してくれ」と悶着を起した事件があつた。耕主の説明で女房達は安堵した。

お米の出来る処へ行かうヨ

米作地帯のモヂアナ線から、棉作地帯のソロカバナ線に移つた移民の家族が棉作に失敗し、喰ふにも米もない境遇におちた。

子供はマレツタにかゝつたが、薬も買つてのませられぬ。死に直面した子供は父に向つて斯う云つた。

「お父ちゃん、今度はお米の出来る処へ行かうヨ」

日本生れの移民の子であつた。

親の恩は牡鶏（ガール）

ソロカバナ線第二モンソン植民地日本人小学校で、斎藤甚七が植民児童の教鞭をとつていた時であつた。

「皆さん、今日は「親のおん」に就てお話しますが、親の恩を知つてゐる人手をあげて……」

日系伯人の一男生が高々と手をあげた。

「親の恩とは何か、云つてみなさい」

「先生、親の恩とはガールでありませう」

先生は、この親の恩の説明が判らなかつた。

「何に、ガール、何うして」と考えたが判らない。何んでガール？ か、生徒の顔をみつめてたゞした。生徒は斯う説明した。

「親のオンはガール（牡鶏）で、親のメンはガリンエヤ（牝鶏）であります」

ハツと気づいた先生は、息気が喉につまる様に感じた。次の瞬間爆笑して満面腐れトマテの如き笑いがとまらず、先生は教壇からおりて窓側に立ち、猪首を窓の外につき出していた。

日本人が働かねば伯人は飢える

或る州の町のはづれに、日曜もコツコツ働いていた日本人の職人がいた。日本人に好感をもたぬ附近の伯人の一人がそれを見て「オージ・エ・ドミンゴ・ジャポン・ノー・トラヴァリエ」と戒告した。その日本人は、その戒告に対し斯う答えた。

「ジャポン・ノー・トラヴァリエ・ブラジレイロ・モレ・コンフォメ」。ムツとした伯人は「ポルケ・ブラジレイロ・モレ・コンフォメ？」とつめ寄つた。日本人は又そう繰返して答えた「ジャポン・ノン・トラヴァリエ・ブラジレイロ・モレ・コンフォメ!!!」。

伯人は憤慨に燃えた。その足で伯人は近くの警察署長宅に行き、あの日本人は怪しからぬ奴だ。伯人を侮辱していると憤慨した。翌日警察署長は、伯人と日本人を署に呼出して峻厳に咎問した。

「セ・ジャポネース・ノーン・トラヴァリエ・オス・ブラジレイロス・モレ・コンフォメと貴様は昨日あの伯人に云つたか」

「シン・フアレイ、日本人が働らかなけりや伯人は飢え死にます」

「貴様、何うしてそんなことを云ふんだ、怪しからん。何の理由でそんなことを謂ふんだ」と署長もムツとした。

日本人はその理由を斯う説明した。

「エウ・テン・フキリオス・シンコ・ブラジレイロ・セ・エウ・ノン・トラヴァリア・シンコ・ブラジレイロ・モレ・コン・フォメ（五人の伯人子供をもつ私が働らかなきや伯人は飢えます）」

警察署長は「アツ」と呆けた。次の瞬間「セニオル・テン・ラゾン・ポーデ・バキン・ボーラ（御尤です帰つてよろしい）」

草じゃない、あれはヒゲヨ

或日曜の午後、或家庭でお風呂の後、五才の姉と四才の弟と仲よく遊んでいた。弟は姉に斯う話かけた。

「姉チャン、お父チャンのこゝ（股をさして）にはクサが生えてるよ」。

姉は一寸と考えていたが「あれはクサじゃない、ヒゲよ」

感慨無量の母の死

第一回移民家族の仲に生れた日系伯人青年の一人が、結婚期に達した。青年は、伯人乙女に恋をし始めた。両親は、出来れば日系乙女にと希望は空しかった。

結婚式へと発つ息子へ、母は「これがお前の躰を洗つてやるおしまいだヨ」と言つて、風呂に入つた息子の背を洗つてやった。息子はその夕、お寺で伯人乙女と、とどこうりなく結婚した。父親はのんだくれてゐた。

母はその夕、息子を結婚式へと送り出したあとで、感慨無量の心臓麻痺で、息子のいない寝室にたほれていた。母の名

は、おとめであつた。

電車の中で日傘と肱鉄

女子師範出身の日系伯人娘が処女時代の事、緑色の日傘もつて、ボルサはなやかに、スオート短かく軽ろやかに電車に乗った。車内は雑踏していた。押すな押すなとみだれていた。

それに便乗した伯人男の色魔が、日系伯人乙女に背後からモーションかける。一、二回はそれとなくそらしたが、男はひつこい。乙女はクアツとなつた。後ろに振りかえるや否や日傘振り上げ、男の頭を二ツ三ツガンガンとやつて「セン・ベルゴニーヤ」と睨みつけた。附近の乗客はその物音の方へと視線を向け、キョトンとしていた。日傘で叩かれた男は眞青になって、次の停留場でコソコソ降りて去つた。

一人は日本生れの人妻であつた。ボルサ抱えて電車の中のバンコの真中に坐つた。右隣の中齡紳士は右手に雑誌をかゝえてよみながら、左手は今坐つた日本女性の膝の上に伸びて知らぬ振り、無意識での如くよそおい、ゆび先で一種の音律的モーションをかけ出した。女性はボルサを膝の上におきかえて防禦したが、色魔のゆびは無防備のお臀の方へと廻つてきた。あまりひつこいのでたまりかねた女は、男の方へ背を向ける振りしたはづみに男の脇肚ヘゲンと一突き強力な肱鉄を喰はした。男は「ウーン」と小唸りした。女の左隣に坐つていた眼鏡の伯人婦人は先刻からの経緯を知っていたので、日本女性と顔見合せてニツコリ「フオイ・ベーン」と小聲で。肱鉄喰つた男は次の停留場でヨロヨロと車をおりた。

(終り)

1949年11月10日印刷
1949年11月30日発行

定価 300クルゼイロス

移民40年史

編集人
発行人

香山六郎

サンパウロ市ニロ街145番地

印刷所 グラフィカ・ブラジレイラ社

伯国 サンパウロ市 タグア街202番地